

虹の袂

M—SYA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

表紙

将来、音楽の道へ進むために虹ヶ咲学園に入学した巴 輝弥（ともえ かぐや）。

そこで彼はスクールアイドルとして人々を応援する少女達に出会う。

見聞きしてくれる人の支えになりたいと夢見るスクールアイドルの信念に自分の想いと近いものを感じた輝弥が選択する道とは――。

目次

本編『虹ヶ咲学園入学』

道の始まり	1
初日の放課後	4
生徒会長との出逢い	7
演劇少女との邂逅	11
運命は突然に	15
スクールアイドルに興味はないですかあ〜？	19
スクールアイドルの意味	24
部活動見学	27
約束	32
ライブ鑑賞	38
初めてのトキメキ	43
生まれたトキメキ	46
本編『同好会再始動』	
同好会の現状	53
こころのざわめき	58
真実を求めて	64
すれ違い	70
追憶にふける	76
同好会の崩壊	83
斯くして同好会は	90
仄かな光明	96
再結集	103
想いの葛藤	111

遠のく真実	118
果林の冒険譚	126
偶像を見つげに	134
望まぬ再会	142
想いは刃に	151
本編『最強のスクールアイドル加入』	
切つても切れぬもの	159
似た者同士の共振	166
星屑の結集	175
他人を超えた他人	183
同好会の根幹	191
優木せつ菜	198
大好きを叫ぶ	207
歯車は動き出す	219
本編『理想のアイドル像』	
巡り逢い	227
新たな出会い	234
和気藹々	248
キズナアイ	256
スクールアイドル像	265
大好きはもう隠さない	272
同好会の方向性	284
誰かのヒーロー	293
見つかる愛、見つからぬ相	301
未知なる道への挑戦	310

他愛ない日常

322

本編『私だけの個性』

自分を魅せる

328

可能性の芽

335

PV撮影

341

手掛かり

349

個性を見つけろ

356

お疲れの方はいませんか？

362

二人の関係

370

勇気をくれた人

376

I'm just me.

384

癒してあげたい

392

貴女のやりたい事は？

402

今だからこそ出来ること

413

オンリーワン

426

ありのままの自分を

438

本編『想いの伝播』

一緒に遊ぼう

447

あの頃の自分から

458

変わるために

466

更なる課題

473

今の彼女なら

484

青天の霹靂

492

今までの弱い自分とは

500

過去から繋がる未来

509

奇怪な家族

新しい私

本編『君だから出来ることを』

新しい挑戦

練習終わりのひとときを

慎の秘密

それが君の……？

それがあんたの？

相棒の意味

限りない灰色の空の下で

冷えた心に暖かい珠を

心の殻を破って

慎の過去

絶望に打ちひしがれながら

慎の決意

TMS当日

奇妙な宿敵

絆という僕らの証

変わらぬもの、変わるもの

本編『自慢のお姉ちゃん』

生まれた衝動

外伝

〔特別編〕中須かすみ生誕祭

〔特別編〕エマ・ヴェルデ生誕祭

〔特別編〕上原歩夢生誕祭

520

528

539

545

552

561

567

576

584

592

602

608

620

630

641

652

664

679

692

700

707

712

〔特別編〕 桜坂しずく生誕祭

719

〔特別編〕 宮下愛生誕祭

729

〔特別編〕 朝香果林生誕祭

740

〔特別編〕 優木せつ菜生誕祭

750

〔特別編〕 天王寺璃奈生誕祭

767

〔特別編〕 近江彼方生誕祭

779

本編『虹ヶ咲学園入学』

道の始まり

学校の校庭に咲き誇る桜、それは学生にとっては始まりと終わりのいずれかを連想させるものだと思う。

今の俺にとっては前者にあたる。

今日から新しい学校の制服を着て生徒としてこれからの3年間を全うしていくのだ。

「おはよう、輝弥」

朝、目が覚めリビングへ向かうと姉が声を掛けてきた。

「おはよう、姉さん」

珠緒姉さんはいつも朝早くに起き朝ご飯の準備をしてくれている。親元を離れた姉との共同生活。その中で料理は姉に任せっきりになっている。

姉さんは俺の一個上で今年から高校2年生となるけど、その料理の腕前は同年代の中ではかなりのレベルだと思う。

「今日から晴れて高校生ね。新しい友達が出来ること、楽しみにしてるわね」

「出来るかな……まあ程々にやっていくよ」

姉からの質問にご飯を食べながら答える。

新しい学校での友人関係についてはできるかが自信がない。

それは俺の控えめな性格もあるのだが、一番はこの学校の入学者による影響が多いと思う。

何せその高校は毎年女子の入学が9割、男子が1割という半分女子校に近い所なのだから。

でも、俺としてはその条件は承知の上でここを選んだ。

いつか見ていた音楽関係への夢、それを叶える為に芸能関係の勉強についてはトップクラスであるこの学校を調べ自分で受験したのだから。

家を出てから学校に着くまでの間、そんな事を考えながら歩いていたらふと桜が目に入り、いつの間にか正門まで到着していた。

「ついに俺も虹学の生徒になるんだな……」

柄にない事を呟きながら周囲に目を向ける。

同じように緊張な面持ちで入学する一年生らしき人、新入生が入ってくるという事で辺りに可愛い子がいないか目を光らせてる人、正門前で元気に朝の挨拶をする生徒会のメンバーらしき人、それに合わせ覇気なく挨拶する人、ここまで見たところで思った事が一つ。

(……本当に男子いないなあ……)

通学路で1人も男子を見なかったし、学校に着けば誰か1人くらいはいるだろうと樂觀視していたが、現実是非情だった。

「まあ、考えていても仕方ないし、クラスを確認してさっさと教室に行こう」

正門前で挨拶している人に軽く挨拶を済ませ、正門を潜る。

そして、1年生らしき集団がいる所へ行くと、そこに各クラス番号と生徒の名前が記載された名簿が掲示されていた。

この学校は普通科、国際交流学科、ライフデザイン学科、情報処理科、音楽科の5つの専攻があり、俺は音楽科を選択している。

音楽科の名簿を確認し、自分の名前を探す。

「巴 輝弥……巴 輝弥と……」

音楽科1―1の名簿に自分の名前を見つけ、該当の教室を移動する。

教室に入っても生徒は過半数いる程度だったが、それでも男子は見つからない。

周囲の女子は珍しいものを見るかのように俺を一瞥する。

俺はそれを気にも留めず自分の席へと歩いていく。

女子らも特に小言を言う事もなく自分たちの会話に戻る。

席に着いてずっと何もしないわけにも行かないので、改めて事前に

学校から配布されたタブレットを開き、パンフレットの中身に目を通す。

「にしてもこの学校、本当に広いなあ。ここに着くまでも結構歩いたけど移動教室とかだと絶対に迷うよな……」

そう、この学校は全国から優秀な生徒が集まるマンモス校であり、だいたい1学年当たり1000人近くいるのである。

それだけ教室数が多い事、専攻数が豊富ということもあり様々な施設が揃っている為、初見の人は地図が無いとまず迷う。4月中は移動教室の際、目的の教室に着けず遅刻する生徒も少なくないだろう。

「あの……」

校内図を見て、ある程度レイアウトについて確認していると1人の男子が声を掛けてきた。

ミディアムの黒髪、赤い目が特徴的な温和な印象を受ける少年だ。

「はい。何ですか?」

「君もこの教室の生徒だよな?」

「そうですけど、もしかして君も?」

「そうなんです! やつと男子が見つかって安心したよ」

「そっか! 僕もここまで男子の姿を見なかったから凄く不安だったんですよ……」

正直、俺以外に男子生徒はいないんじゃないかと錯覚するほどに見かけなかったので内心不安に駆られていたが、お互いに念願の同性の姿を目にするとすぐに打ち解けた。

「俺、鈴川慎っていうんだ。よろしく。えつと……」

「僕……いや、俺は巴輝弥。気軽に輝弥って呼んで、それに堅くならなくともいいから」

「輝弥か! 分かった。俺も慎って呼んでくれたら嬉しいな!」

「分かった、よろしくね、慎」

新学期初日から仲良くなれそうな生徒を見つけられて俺は少し運がいいのかもしれない。

初日の放課後

入学初日、孤独な学生生活を送ることになるかと思った矢先、慎と出会えたため俺の生活に早速彩りが出てきたようだ。

入学式とオリエンテーションが午前中で一通り終了したためタブレットを鞆へしまい、とある場所へ向かおうとしたが、

「輝弥、もう帰るのか?」

慎が俺の席に来て声を掛けてきた。

「いや、ちよつと寄り道して行こうかなと思ってね」

「そうなのか? もし良ければ付いて行ってもいいか? 帰ってもやる事ないし邪魔じゃないなら折角だからちよつと話したいなと思って」

慎は俺の用事に水を差してしまわないか気にしているが、これは俺としても良い機会だと思った。

「ああ、そういう事なら良いよ。寄るのは音楽室なんだ」

「音楽室? また何で?」

帰らないのか? と言わんばかりにキョトンとしながら言う慎。

「音楽室が空いてたら、楽器を弾きたいんだ」

「輝弥って楽器が弾けるのか!?!」

キョトンとしたと思ったら今度は目を見開いて驚いている。

一つ一つの反応が少し面白くて思わず顔が綻んでしまう。

「うん、と言ってもピアノだけなんだけどね。学校のピアノがどんな感じか気になって……。そういう慎は何か楽器は弾けるのか?」

「いや、俺は楽器を全然触った事も無いよ」

「えっ、じゃあ何で音楽科へ入ったのさ?」

「将来、アーティストとして歌を歌いたいから。まあ、それ程度の理由しかないさ」

俺の勝手な想像として音楽科を専攻した人は皆楽器を一つ弾けるものだと思っていたが、そうでもないのかもしれない。

「そうか、それも立派な理由の一つだ。じゃあ、折角だし俺が何か一曲

弾くからそれを歌えば良いんじゃないか？」

そういうと今度は目を光らせる慎。

「ほ、本当か!? ピアノの邪魔にならないか？」

「全然だよ。むしろ一緒に乗ってくれた方が弾き手としては嬉しいし」

「じゃあ、是非やらせてくれよ!」

「オツケー。なら善は急げだ。早速向かおう」

荷物をまとめ、こうして慎と音楽室へ向かうこととした。

「ふう、やっと着いたな……」

「意外と探すのに一苦労だな……」

俺と慎はまだ完全に覚えたとは言えない校内を回り、音楽室へと辿り着いた。

今度ここに来る時のためにちゃんと頭の中の地図を更新させておかないといけない。

「鍵はかかっているのか？」

音楽室の扉に手を掛けるとすんなり引く事が出来た。

「いや、空いているみたいだ」

音楽室内に入ると中学校までの様に歴史上の偉人の絵が壁に立て掛けられている訳でもなく、様々な楽器が埃一つなく輝きを放っている。

常日頃、念入りに手入れされていることがわかる証拠だ。

「流石、名門校の音楽室とあって設備は充実してるなあ」

「ここまでとは思わなかったなあ……! 流石に音楽室だけで広さを取りすぎているかい？」

慎はそう言い、周囲を見渡す。少なくとも一般教室の2倍はあるのではないだろうか。

「音楽関係に出る人も多いということは吹奏楽部等もそれなりに成果を出してここまで良くしてもらったってことなんだろうな」

音楽室への賛辞を述べ、目的のピアノを見つけ席に着く。

「最初にまず感触を確かめたいから、簡単に弾かせてもらっても良い

？」

「いいぜ。好きに弾いて聴かせてくれよ」

慎もそう言いながら近くの椅子を持ってきてピアノの近くに腰掛ける。

「じゃあ……ねえ、慎はゲームとかは結構やる方？」

「人並みにはやるけど、詳しくはないな」

「そっか。じゃあ聴く分で楽しんでよ」

そう言うとゲームのBGM等、自分の好きな曲を披露していった。

こうして、簡易的なピアノ鑑賞会は幕を開けた。

音楽室の扉前で密かに聞き耳を立てている人物がいる中で……。

生徒会長との出逢い

一通り曲を弾き終えた時、慎は目を輝かせながら拍手を盛大にしていた。

「すげえ、めっちゃ感動したよ！ 特に最後に披露したやつ、あれがゲームのBGMにあるのかよ！ 哀愁漂うというか切なくなってるというか鳥肌が立ちまくりだったよ!!」

慎は目を輝かせ拍手をしながら称賛の声を上げた。

そこまで褒めてもらえることもなかったから少しむずかしい気持ちだ。

「ありがとう、そう言ってもらえて嬉しいね。是非ともこの曲と共にゲームも布教していききたいなと思ってるんだけど、中々興味を持ってくれる人がいないからすごく寂しいんだよ……」

今まで自分の好きなゲームのことを少し喋ってもあんまり伝わらなかつたり、気が向いたらやるというやらないの隠語も使って回避されるので、俺は今までの苦悩を思い出した。

「なんだか苦勞してるんだな。ちょっと気になっているから今度見せてくれよ!」

慎はそんな俺の様子を同情してかはわからないが興味を示してくれている。

是非ともこのままの勢いで知ってもらいたい。

「ああ、是非とも一度招待するから見に来て欲しいよ」

「……? 貴方たちは……?」

2人でゲームの話をし始めようとした時、女性の声が聞こえてきた。

虹学の制服を来ているその人は長髪黒髪であり左右それぞれで三つ編み、また眼鏡を掛けている事もあり博識な印象を受ける。

そして、右腕に何やら腕章を付けているという事は……

「あつ、生徒会長さん」

「あつ、朝に正門前で挨拶していた人か」

「……あと入学式の中で在校生代表で祝辞を述べていた人だよ……」

「えっ……!? んん……言われてみれば……?」

挨拶の他に見かけた場面を話したが慎としてはパツとしなかったのかかなり顔を顰めていた。

「何故疑問形なんだ……。慎……。もしかして寝てたのか……?」

「いや、そういうわけじゃないけど……。ただ遠くてちゃんと顔が見えなかったっていうか……」

この会話を本人の前でしているから正直何か怒られそうで怖いな……。

「そのネクタイの色……貴方たちは新入生さんですね」

突然話しかけられ、少し驚くが一呼吸おいて答えていく。

「はい、そうです。音楽科1年生の巴輝弥と言います」

「自分も同じく音楽科1年生の鈴川慎と言います」

「巴さんと鈴川さんですね。私は虹ヶ咲学園生徒会長 普通科2年中川菜々と言います」

中川さんは先ほどの慎の失言を気にする様子もなく落ち着いて自己紹介をする。

「中川さんですか。それとも生徒会長とお呼びした方が良いでしょうか?」

「いえ、どちらでも構いません。お二人の好きにお呼びして頂ければ」
「では、中川さんとお呼びします。中川さんはどうしてここへ? いきなりここでピアノを弾いて何か不味いことでもあったのでしょうか……?」

生徒会長がここにやってきたということは悪いことをしてしまったのかと不安が頭によぎる。

俺の額に冷や汗が出てくるような感覚を覚えた。

「いえ特別悪いということではないですが、ここを利用する上で使用許可を事前取って頂かないといけない規則になっています。ただ、今回は1年生であるお二人であったのでここでの内容は目を瞑っておきます。次から利用する際には使用許可を取ってくださいね。私以外の生徒会メンバーに言って頂いても許可書は発行しますので気をつけて下さいね」

中川さんは特に厳しい顔で説教を始めるわけでもなく俺たちに警戒心を与えない様に微笑みながら詳細を話してくれた。

「そういう事ですか。すみません、ちゃんと規則について把握してなくて……。今日はもう帰るだけなんですけど折角だからこのピアノで少し弾きたいなと思ひまして、勝手ながら鈴川君を連れてここに来たわけです」

「そうなんです。にしてもかなりピアノがお上手なのです。盗み聞く様な形になってしまいましたが、素敵な旋律だと思ひて聴き入ってしまいました」

そう答えた中川さんだったが、俺はちよつとした違和感を感じた。

(……ん？ この人、心なしかさつきより目が輝いてないか……?)

初めて聴いたであろう曲を聴いてそこまでトキメキを覚えるというのは中々にいないと思う。

過去にその曲を聞いた覚えがあつてそれを思わぬ場所で聴けてしまった感動で笑みが溢れてしまう感じだと思ひていたが……。

そんな事を考えていると共感できる人を見つけた慎は中川さんに食い入る様に話しかけた。

「中川さんも分かりますか！ 輝弥のピアノつて凄く上手で俺も感動したんですよ！ 今日はその鑑賞会という事で、輝弥にピアノを弾いてもらつてたんですよ！」

「ふふつ、そうなんです。良い事ですね。是非私も聴かせて頂けたらと思ひていたんですが生憎生徒会の仕事があるのでそちらをやらなくてはいけないので申し訳ないですが、鑑賞会には参加できません」

中川さんは笑顔を見せながら慎に答えていく。彼女も何だか嬉しそうだが……。

「そうだったんですか。午後からも生徒会の仕事とはお疲れ様です。もし中川さんが宜しければお声を掛けて頂ければいつでも弾きますので是非今後考へて頂ければと思ひます」

「はいっ、ありがとうございます。是非前向きに検討させて下さい。それでは私はこれで失礼します」

そう言つて中川さんは軽く頭を下げると笑顔のまま音楽室を後にした。

「生徒会長つてもっと石みたいに堅い人かと思つてたけど、あの人はそういう訳じゃなさそうだな」

「そうだね。こつちの話にも興味を持つて聴いてくれたから俺も嬉しいよ」

「今度はあの人も入れた鑑賞会を開きたいな、輝弥！」

「うん、そうだね。是非聴いて欲しいよ」

生徒会長中川菜々さん……凄く綺麗で優しい人と知り合えて虹学生活を幸先良いスタートが切れたと思えた。

演劇少女との邂逅

「いやあ、今日はありがとうな！ ピアノ演奏聴けたり歌えたりで本当に楽しかったよ！」

「ごつちこそ楽しかったよ、ありがとう。慎って結構歌上手いんだな。弾いててテンションが上がってきちゃったよ」

「にしても輝弥も結構歌上手いじゃんか。ピアノ良し歌良しって反則じゃないか？」

鑑賞会を終え、お互いへの賛辞を述べながら靴箱へ向かう。

その道中、階段の踊り場にてとある光景が広がっていた。

「……ああ……もはや誰も私のこの気持ちに気づいてくれない！ 何が足りない？ 何が必要？ 私が持っていないものは一体何!?!」

まるで今まで愛していた男に見捨てられた女性を演じる様に動作しながら辺りに軽く響くくらしいの音量で呟く少女。

俺と慎はそれを見て固まっていた。

「……これは……一体何なんだ……?」

「……見てはいけないものを見てしまっている気がするよ……」

俺と慎は固まっていたがずっと見ているわけにはいかず、別の道からと踵を返そうとした時、

「……っ!?! 誰かいるんですか!?!」

演技をしていた少女に見つかってしまった。

ずっと黙ってはいけないと思ひ俺は顔を出して声をかける。

「ご、ごめんなさい……。偶然目に入ってしまって……故意ではないんです」

「お、男の方ですか……この学校で珍しいですね」

茶髪の長髪をハーフアップでまとめていて、大きく赤いリボンを後ろから覗かせる落ち着いて清楚な印象を受ける女の子だ。

「つていうか踊り場でそれなりの音量で演技してたら絶対誰かの目には止まるだろ！」

「むっ、確かにそう言われればそうですね。私こそすみませんでした。

人気が無かったのでつい演技の練習をしたくなってしまいました」

慎が喧嘩を売りそうな発言をしていたので少し寒気がしたが、少女は自分にも非があると感じたのか頭を下げながら謝罪の言葉を述べた。

演技をしていた時は雰囲気が変わってかつこいい印象を受けていたが今は礼儀正しく話してくれる辺り、話していて気持ちが良い。

「いえ、お構いなく。それとその黄色リボン……という事は貴女も一年生ですか？」

「貴女も、ということはお二人もですか？ 確かに言われてみれば黄色ネクタイですし同じ1年生ですね」

俺たちはそれぞれ、胸元にある黄色のリボンとネクタイを見て同級生であることを確認した。

「でも、俺たちのクラスにはいなかったよな？ どの科にいるんだ……いるんですか？」

「同級生ですし無理されなくて良いですよ。私は国際交流学科を専攻しています」

慎は初対面であった事を思い出したのか、敬語で話そうとする。

しかし、少女の方は気を遣われてると感じたのか、そのままできいと論じた。

同級生と偶然巡り会えたこともあり、お互いに自己紹介を行う。

「そうだったんですね。僕たちは音楽科にいます。僕は巴輝弥、彼は鈴川慎といいます」

「鈴川慎だ。よろしくお願いします」

「巴さんと鈴川さんですね。私は桜坂しずくと言います。先程までやっていたように演劇が好きでして、将来女優を目指したくてこの学校に入学しました」

「桜坂さんは女優志望なんですね。素敵な夢をお持ちだ」

確かに芸能関係の道を進む人も多いから女優志望の生徒がいても何もおかしくはない。

むしろ時間があればこうして練習している姿を見ると本気で目指しているんだなという気持ちが伝わってくる。

「ふふっ。ありがとうございます。あと私のことはしずくと呼んでくださって構いませんよ。こうして同級生の男の方らと知り合える機会もないですし」

「じゃあ、お言葉に甘えてそうさせてもらおうよ、しずく」
「よろしくね、しずく……さん」

しずくさんは名前で呼んでいいと言ったので、堅苦しくなくて済んだのか慎は呼び捨てで話すが、俺は緊張からかさん付けで留まってしまった。

「え、輝弥……さん付けするのか……」

「知り合って間もない人を早々呼び捨てできる慎が羨ましいよ……」

俺としては女性と話すのは緊張してしまうのでしばらくはこうなるんだろうな……

「俺の時はすぐに呼び捨てにして話してたのにな。しずくも俺たちのことは好きに呼んでいいからな」

「はい、輝弥くん、慎くん、よろしくお願いしますね。でもいつか輝弥くんとも対等にお話したいです」

しずくさんは俺に向かってからかう様に言う。

目も少し薄めながら言ってきたから、彼女も意外と策士なのかもしれない。

「……言われてんぞ……?」

「う、うるさい……」

慎が明らかにニヤけながらこっちを見てくる。ちよつとムカついたから軽く肘打ちをお見舞いしておく。

なんだか恥ずかしくなってきた……

「と、とにかく、まだ会って間もないけどこれから何か助け合えたら嬉しいな。改めてよろしくね、しずくさん」

「ふふっ、なんだか輝弥くんって可愛らしい方ですね」

「ぶふっ……! 可愛らしいか……!」

「慎……流石に俺も怒るぞ」

慎の奴……さつきまであんなに褒めてくれてたのに今度は一気にからかってくる。

まあ、そこまで打ち解けられたと考えると考えれば上出来なのだろうか
……。

運命は突然に

入学初日の学校を終え帰宅してきた。

家に着くと既に姉さんの靴が置いてあった。

「ただいま、姉さん」

「おかえり輝弥。入学式だけの筈なのに随分遅かったわね？」

姉さんは少し困ったように笑い、俺に話しかけてきた。

「うん、早速同じクラスの男子と仲良くなってるね。ちよつと一緒に話してたんだ」

「あらっ、そうだったの？ なら安心したわ」

荷物を自席に置きネクタイを緩めながらその日あった出来事を話した。

「入学初日から色々イベントが目白押しだったのね」

俺の思いつき出話を聞きながら、姉さんは自分のことのように嬉しそうに微笑んだ。

「にしても演劇好きな子もいっぱいいるのね。少し気になるわ」

姉さんは俺とは別の高校で演劇同好会に所属している。

演劇好きな子もいるという事で、やっぱり気になるようだ。

「うん、学科が違うからあんまり話せる機会も多くはないと思うけどまた会ったときに色々話を聞いてみるよ」

「ええ、お願いね」

話を聞きながら、姉さんはコップにお茶を入れ俺に渡してくる。

その後、自分用のコップにお茶を入れ席に着く。

「そういえば、部活はどこに入るか決めてるの？」

姉さんからの問いにコップを置き、俺は少し考え込む。

「うーん、特にここについていうのは決めてないんだよね」

「中学校でやってたテニスは続けないの？」

「続けようとは思ってないし、まずは部活見学をしてから決めていこうかなって思ってる」

中学ではあまり大した成績を上げてないし、今やりたいっていう気

持ちもないから他の運動部でも探そうと思う。

とは言え、チーム種目も得意ではないんだけど……。

(そういうえば、慎はどこに入るとか決めてるのかな……?)

ふと、慎のことが頭によぎった。今度どの部活に入るつもりか聞いてみようかな。

「でも無理に運動部に入る必要もないんじゃない？ 私みたいに演劇部とかやってみてもいいでしょうし」

姉さんは普段は大和撫子の様に落ち着いて優しい雰囲気醸し出しているが、舞台に立つと人が変わるように目つきが変わり声もすぐく通るので、弟である俺も姉さんのその変わり様には脱帽している。

「俺は人前に立って演劇するなんて向いてないよ。恥ずかしくなってくるし……」

「別に恥ずかしきなんてすぐに慣れるわ。それに舞台上ではなくても音響に携わるっていうのも面白そうだと思うし」

演者ではないやり方も姉さんは勧めてくるが少なからず姉さんと比べられるだろうし、演劇に関してはあんまりやろうとは思わない。

「まあ、やるやらないは輝弥の自由だし私は口出ししないわ。ただ、一緒にこの道へ進むのもお姉ちゃんとしては楽しそうかなって思っただけ」

「姉さん……」

姉さんはそう言い、俺が飲んだコップを片付けてくれた。

姉さんはいつもこうして、俺の話を聞いてくれて道を示してくれる。

(俺も……自分のやりたいことをちゃんと考えてみるか……)

次の日、午前中の授業が終わり、昼休憩に入ったので食堂へ向かうとすると、

「輝弥！一緒に食べないか？」

挨拶が終わったと同時に慎が俺の元へやってきて、誘って来てくれた。

俺も声をかけようと思っていたが、彼の行動が早くて少し驚いた。

「ああ、いいよ。一緒に行こう」

「ありがとう。やっぱりまだ一人で校内を歩くのは勇気が無くてな……」

確かに俺もまだその勇気が出ない。

今日も登校時に慎以外の男子の姿を全然見なかったのだ。

杞憂に終わる筈だが、それでも慣れるのには時間がかかりそうだ。

「俺も。慎がいてくれて心強いよ」

「食堂では他の男子はいるのかな……?」

「……いるとは思うけど……どうだろうね……」

2人の間で重い空気が流れてきた。

「……やっぱり……女子生徒が多いね……」

「……ああ……。こうも多いと気疲れが激しそうだなあ……」

食堂であるカフェインボーに着き、それぞれ食べたものをとって隅の席に座る。

「そういえば、慎って部活はどこに入るか決めてるの?」

「えっ? そうだなく。特にこれってのは決めてないけど……どうしてだ?」

慎はいきなり質問されうーんと唸りながら答えた。

「いや、特にこれといった意図はないんだけど、ちよつと気になって」

「俺はまだ決めてない。色々部活を見てから決めようと思ってる」

先ほどまで唸って答えを考えていたと思ったら、いきなり真面目に答えてきた。

「慎は結構運動は得意なタイプ?」

「まあ、それなりに得意な方だよ。と言っても表彰をもらうまではいかないけどな」

俺はあまり運動神経がいいとは言えないので慎が羨ましい。

「そういう輝弥はどうなんだよ?」

「俺も同じ。どうしようか考えてるところ」

「ふうーん、まっ、考えても仕方ないだろ。一緒に見つけていこうぜ」
「……そうだね」

俺はここに来て本当に良き友人に巡り会えたのかもしれない。

「あのう〜?」

2人で話していると1人の女子生徒が話しかけて来た。

ベージュ髪の子のセミショートに赤色の目がくりっつとして活発そうな印象だけれども小動物みたいな可愛さがある子だった。

いきなり可愛らしい子が話しかけてきて少し緊張してしまう。

「どうかしました?」

その子は右手の人差し指を口元に持ってきて意味ありげな視線を送りながら話続ける。

「いきなりであれなんですけどお〜……スクールアイドルに興味ありません?」

……俺と慎は目を点にしながら固まっていた。

「ええ————!!」

いきなり波乱の予感がする……。

スクールアイドルに興味はないですかあ〜？

食堂でいきなり見知らぬ少女に声を掛けられ2人揃って思わず大きな声を出してしまい、周囲からの目が痛くなり場所を移すこととした。

「……はあ……ここなら大丈夫かな……」

「別にかすみんとしてはあそこでもよかつたんですけどお……？」

かすみんと自称する少女は場所を変える必要があるの？　と言わんばかりに呆れた様子を見せた。

いや……君は気にしなくても俺たちが気にするんだよ……。

「……して、俺たちに何の用なんだ？」

慎は落ち着かない様子でかすみんに本題を話すように促す。

「改めまして、かすみんこと普通科1年中須かすみですう♪」

かすみんこと中須さんは気を取り直して両手の人差し指を両頬に当てながら自己紹介をする。

(うーん……俺はこういうタイプはイマイチ好きになれないんだよな……)

俺はこういった猫被りキャラは媚を売っている感じがしてどうにも好きになれない。

「かすみん、スクールアイドル同好会を立ち上げようとしているんです。今は先輩方も集めて5人になったんですけど、かすみんとしてはもう少しメンバーを増やしたいんです」

中須さんは新しく立ち上げる予定の同好会について説明を始めたが、俺には一つ腑に落ちないことがあった。

「どその前に……スクールアイドルって……何？」

俺の発言を聞いて、中須さんと慎が目を見開いて、

「ええ———!!？」

絶叫を上げた。

っていうか、中須さんはともかくなんで慎まで驚いてるんだ？

「お前、知らないのかよ!!　今、全国の高校の間でめちゃくちゃ話題になってるんだぞ!!」

「えっ……そうなの？　ってというか慎知ってるのか？」

俺が頭にハテナを浮かべているが慎は気にすることなく続ける。

「知ってるも何もスクールアイドルは俺の……!!」

慎は勢いのまま言葉を紡ごうとしたが、突然固まってしまった。

「慎……？」

突如慎の様子が変わり、俺にも少し戸惑いが生じる。

「いや……なんでもない……。まあ、前に色々あつてスクールアイドルのことは知ってるってだけだ」

慎は少し顔を伏せながらはぐらかしてしまった。

あいつの顔色になんだか翳りを感じる。

「そうなのか……？」

俺にはその先を聞くことが出来ずそこで話を止めてしまった。

「……ごっほん！　知らないという事でしたら代わりにかすみんが説明しますね♪」

話に置いてけぼりにされていた中須さんが大きく咳払いをして、スクールアイドルについて解説してくれた。

「スクールアイドルというのはその名の通り高校生がやるアイドル活動です！　応援してくれるみんなの為にライブをやったり、イベントを開催したりするんです♪」

「高校生のアイドル活動……。ということは中須さんもアイドルなの？」

「まだ同好会も完全に立ち上がった訳ではないので厳密にはスクールアイドルではないです。これからスクールアイドルとしてかすみんの名を全国に知らしめるのです！」

なるほど、つまり今は正確には入部前の状態だから今後なる予定ってイメージか。

「でも、何故俺たちを誘うんですか？　俺たちは男子だし、他に女子生徒を探すのでもよかったんじゃない？……？」

俺は至極真つ当な質問をぶつけてみる。

アイドルと聞くと女の子達がグループで活動しているのを想像する。

確かに男性アイドルグループも存在するが、それでも女性アイドルの方がイメージは強いしこの学校ならそのアイドルになれる人財がいる気がするが。

「……」つだけ補足させて貰いますね。お二人に声を掛けたと思っっている様ですけど、正確にはかすみんとしては貴方のことを誘っているつもりだったんですよ?」

「そう言い、俺に視線を送ってきた。」

「……………えっ?」

状況が理解できず、思わず問い返してしまった。

「もう一度言いましょうか?」

かすみんはあなたのことをさそつたんです!」

中須さんは呆れながら一字一句ハッキリと俺に噛み締めさせるように言ってきた。

「いやいや、何で俺が? こんなスクールアイドルのことも知らないのに?」

俺は信じられないと言うように両手を前で横に振りながら中須さんに反論する。

スクールアイドルのスの字も知らなかったんだぞ?」

「かすみんも他の子を探していたんですよ? でも、かすみんの目に留まる子が見つからなくてえ〜普通科にも男子はいるんですけどお〜そつちはアイドル向きな人がいなかったんですう」

中須さんは右手の人差し指を口元に当てながらこれまでのメンバー探しを語る。

「つていうか普通科には男子いたんだ……。普通科なら多少はいるのか。」

「そこにかすみんは閃いた訳です! 音楽科であれば、作曲もできてスクールアイドルにぴったりの人があるんじゃないかと!」

閃いたと言ったタイミングで指を鳴らして中須さんは目を輝かせながら喋りを続ける。

「そこで、かすみんは見ました……。入学式初日にも関わらず音楽室に

入ろうとする男子の姿を……!」

拳をぐつと握りながら熱弁は続く。

この子、さつきから感情表現が豊かだな。

……ん？ 音楽室に入る男子の姿……？

「そ、それって俺たちのことだよな!」

俺が口を開く前に慎が口を挟んできた。

とりあえず気は戻ったようだ。

そして、その慎の反応に合わせるように慎に指を刺しながら中須さんは続ける。

人に指を刺すのはやめておいた方がいいぞ……。

「その通りです! いきなり音楽室に行く生徒が……しかもそれが同級生ですよ? そんなの気になるに決まってるじゃないですかあゝ」

中須さんは両手を手元でぐつと握りながら俺たちに顔を近づけ足踏みしている。

この子にとってはよほどの出逢いだっただね……。

「声を掛けようと思ったんですけど、話が盛り上がっていたようですし、鑑賞会がどうのって話が聞こえたので陰で聴こうとしたんですが……」

かすみは思い出すように話していたが途中でぐぬぬと悔しむような表情を浮かべた。

「……? どうかしたの?」

そんな中須さんの様子に俺は疑問を抱いた。

が、その返答を聞く前に慎が反応した。

「つていうかお前シンプルに盗み聞きしようとしてたのかよ!」

「かすみんはちよつとしたアクシデントがあつて聞いてないですう!」

「それでも聞こうとしてた事実は変わらないだろう!」

「かすみんは聞いてないから事実も何もありません!」

盗み聞き云々について慎が憤慨しては中須さんがぶんぶん言いながら反論してと水掛け論状態だった。

「はいはい、言い合いはそこまでにして……中須さん、さっきのお誘いの件だけど……」

「はい！ 興味を持って下さいましたか？」

時間が惜しかったので返答をしようとした。

中須さんが目を輝かせながら俺の回答を待った。

「……その誘い……お断りします」

俺は首を縦に振ることはなかった。

「……ええ——!!!」

中須さんは誘いを受けた時の俺たちと同じくらいの音量で驚きの声を上げた。

スクールアイドルの意味

「そのお誘い……お断りします」

「ええ———!!」

俺は中須さんからの勧誘を断り、中須さんは驚きの声を上げた。

「ど、どうしてですか!？」

「……スクールアイドルをやるに当たって……俺には出来ないことが多すぎる。作曲……ダンス……表情……トーク力……。基礎も何も知らない俺が真剣にやろうとしている中須さん達と同じようにできると思えないんだ」

「そ、それは皆さん同じことです！ 何も巴くんだけがそういう訳じゃないですよ！」

「……俺には……取り柄なんて何もない。いつも人の顔色を伺って過ごしている俺には……誰かを心から応援することなんて出来ない。それは上っ面の言葉でしかない。そんな人からの応援は……ファンの人達の心には……絶対に届かない」

「……………」

「……………」

俺は断った理由を述べた。

自分の中からスクールアイドル同好会に入らないための理由が沢山出てくる。

俺にはそれだけ……スクールアイドルとして誰かを応援することは出来ないという気持ちがあった。

その俺の意思を汲み取ったのか中須さんは反対の言葉を紡げず、慎はそんな俺の様子を静かに見守っていた。

「折角の誘いは嬉しいけど……俺はその話……引かせてもらおうね」

「ま、待って下さ……!!」

「あっ……かすみさん。ここにいたんだね！」

中須さんの静止する声を振り切り、俺はその場を立ち去ろうと歩こうとした瞬間、別の女の子が中須さんへ声を掛けながら姿を現した。

その声と姿には覚えがあった。

「あれっ……しずくさん?」

「えっ、輝弥くん? それに慎くんも……?」

茶髪に赤いリボンが特徴的な桜坂しずくさん。

どうして彼女がここに……それにかすみさんと言っていた……。

「あつ、しずくちゃん。どうしたの? それにこの2人を知ってるの?」

「昨日、偶然会ってね。ってそれよりかすみさん、お昼にミーティングをするってせつ菜さんが言ってたでしょ? 全然来ないし、電話もしたに出ないから探してたんだよ?」

「えっ……? ああ〜! 本当だ〜! ごめんなさい〜!」

中須さんは携帯の着信履歴を確認して10件ほどの履歴が残っている事に気づき、左手を頬に当て目を見開いた。

「ミーティングって……しずくも同好会に入ってるのか? 昨日の話だと演劇部に行くかと思ってたけど」

慎がしずくさんに問いかける。

確かに、昨日の感じだと女優を目指したいからと演技の練習をしていたし、てつきりそっち方面の部活に行くと思っていたけど……。

「演劇部の方は掛け持ちしてるんです。演劇もやりたかった事ですよ」

「そうなんだ、ならどうしてスクールアイドル同好会へ?」

「演劇をやるにあたって、表現力を身に付けたいなと思ってね。演劇部でも確かに鍛えることはできるけど、自然な表現とか手足の細やかな表現ってスクールアイドルも似ているけど全く異なるから挑戦してみたいなって思ったの」

しずくさんは自分の胸に手を当てながら答えていく。

この子は自分の夢を叶えるために真剣に考えてスクールアイドルをやろうと決めたんだ。

「なるほど、真面目なんだね。良い事だと思う」

「ありがとうございます。それよりどうして2人がかすみさんと一緒にいるの?」

今度は自分の番としずくさんが俺たちに質問する。

「中須さんにスクールアイドルにならないかって誘われたんだよ」

「だって、巴くんは音楽室でピアノを弾いてたんだよ!? そんなの活かさないなんてもったいないじゃん!」

「へえー、輝弥くんはピアノが弾けるんだね。さすが音楽科にいるだけはあるね。でもその感じだと誘いはお断りって感じ?」

「まあね。俺はスクールアイドルとして誰かを応援することは出来ないから。人前で何かをやるのも恥ずかしいし」

「そっか。輝弥くんと慎くんは顔も良い方だと思うから似合ってると思うんだけどね……?」

「べ、別にそんなことはないよ……」

「しずくさんが俺たちのことをアイドル向きと言ってくれたがそれはお世辞が過ぎる。」

「慎は確かにスポーツも出来て爽やかイケメンって感じでモテるだろうが、対して俺はあまり運動神経が良いわけでもないし、人付き合いが得意なわけでもない。」

「と、とにかく俺は同好会には入らないから……。それじゃあそっちはミーティングもあるって言ってたし俺はこれで失礼するね」

「お、おいつー! 輝弥っ!」

「俺は話の続きをしたくなかったので話を終わらせるために教室へ向かおうと校内へ戻った。」

「慎は俺の後に続き、校内へ戻る。」

部活動見学

昼に中須さんからの勧誘があつてから午後の授業も終了し、放課後になった。

俺は慎と部活動見学をする事にした。

「どこから見に行く？」

「俺たちが中学までで参加してたところは見に行こうぜ」

「なら俺はテニスだけど……慎は？」

「俺はバスケだ。じゃあテニスから見に行こうぜ」

端正な二枚目でバスケが得意……人気にならない筈がないな。

「にしても輝弥はテニスだったのか。かつこよさそうじゃないか！
一度見てみたいぜ」

「そんな大層なものじゃないよ。それなら俺は慎のバスケをやる姿を見てみたいよ。絶対かつこいいだろうし」

慎とどつちがスポーツ姿が様になっていくかでプチ論争になった。

これからの体育の授業で見えることも出来るのかな。

「……この話はやめようぜ。なんか気恥ずかしくなってきた」

「うん……俺も……」

慎が少しそっぽ向いて話を切ったので、俺もこの話を終了する事にした。

俺たちは場所を移動し、テニスコートにやってきた。

そこにはテニスコートでラリー練習をしている人、試合形式で練習している人、サーブ練習をしている人、各々練習を行っていた。

「サー……」

コートでダブルスの試合をやっているが後衛をやっている金髪の女性の声が非常に響いてすごく楽しそうにプレイをしている。

「あの人、上手いな……。あんな球も届くのか……」

その人の立ち位置から反対の位置に打たれたにも関わらず、全速力で走って力一杯のショットをお返ししていた。

「あの人、すごいな！ あんなに動いても全然息が切れてない！」

「きつと努力の賜物なんだろうな。今の俺には到底出来ないな」

「ありがとう、愛ちゃん……！ 助かったよ〜！」

「良いってことよ！ あれくらいのボールなら愛さんに任せなさい
！」

愛さんと呼ばれた人の元に相方がやってきて手を合わせながら頭
を下げていた。

一方愛さんの方は気にする様子もなく、ピースをしながら返事して
いた。

あんな相方……一緒にやってて楽しいだろうな。

テニス部の見学が終わり、次はバスケット部の見学をしに体育館へやっ
てきた。

試合形式でやっていて、激しいボールの取り合いが繰り広げられて
いた。

「あれっ、あそこにも金髪が目立つ人がいる。珍しいな」

そこには先ほどテニスコートで見たような金髪の人がいた。

その人はボールを所持していたが、周りが包囲されている。

パスを出そうにもマークされているので、攻めあぐねているよう
だ。

「あの状態、突破するのは中々難しいぞ……」

慎も唸っている。

経験者がそう言うのだからきつと難しいんだろう。

「……ふっ……！」

その選手は真剣な表情から口元が緩んだと思ったら、前を阻むプレ
イヤーヘフエイントを掛け包囲網を突破し一気にシュート圏内まで
駆け抜けボールがゴールへ吸い込まれた。

「まじか……!! あの状態から自分で攻めていくなんて……!!」

「突破してからゴールまでが一瞬だった……」

俺と慎はその姿に目を奪われた。

「さすが愛ちゃん!! ナイス突破！ そしてナイスシュート！」

「へっへーん、ありがとう！ さっきのは愛さんもちよつと焦っ

「ちゃったけど何とか行けたよ！」

「愛さんと呼ばれた人の周りに人が集まって称賛の声上がる。」

「あの愛さんってさつきテニス部にいなかったか？」

「俺も思ったけど、兼部してるのかな？」

「あのルックスといい性格といい、さつきテニス部で見た愛さんと全く同じ感じがするから同姓同名の人物というわけではなさそう。」

「でも、テニスもバスケもあんなに上手いってどれだけ運動神経が良
いんだ。」

「バスケットの見学を終えて、次は演劇部の練習場に来てきた。」

「輝弥、どうして演劇部に？」

「俺、姉さんがいるんだけど、演劇部に所属してるからここに居るの人はどんな感じなのか気になって」

「へえー、輝弥は姉さんがいるのか〜！ 輝弥がこれだからすごく美人そうだなあ」

「慎は俺の姉さんのことを初めて聞いたからか、演劇の練習はそつちのけで姉さん絡みの話で盛り上がっていく。」

「姉さんはこの学校なのか？」

「いや、別の学校でやってるよ。確か演劇同好会で部長を務めてるって聞いたけど……」

「へえ〜、それは気になるね？」

「姉さんの事を話していたら、後ろから女生徒が話しかけてきた。」

「紺色の髪をセミショートで整えており、胸元のリボンは緑色であることからその人は3年生であることが窺える。」

「うわあ、びつくりしたー！」

「ふふっ、驚かせちゃったかな？」

「慎は急に声を掛けられ驚きの声を上げながら後退りした。」

「その様子を見て、女生徒は顎に手を当て微笑みながら答える。」

「あの……貴女は……？」

「あつ、その様子だと君たちは部活見学者か。自己紹介が遅れたね。私は演劇部の部長。よろしくね」

俺たちが自分のことを知らないと察知して部長さんは自己紹介を始めた。

この人、気さくに話して掛けてくれたが、時折試すような目を向けられている感じがして、少し気が張ってしまう。

「部長さんですか。すみません、見学に来たのに練習と関係ないことを話していて……」

「いや、別に気にしなくていいよ。それよりも私としては君のお姉さんの事に興味が湧いたから」

そう言うのと部長さんは俺に目を向けてくる。

「えっ、僕の姉さん……ですか？」

「うん。なんだか君、どこかで見た覚えがあるような顔をしているから姉さんが演劇同好会にいるって話もあったし、もし良ければ教えて欲しいな」

「はい、僕の姉さんは巴 珠緒と言います」

姉さんの名前を言ったら部長さんの目が少しピクツとした。

「巴……珠緒……。ふうーん、じゃあ……あの学校の……」

「あの……部長さん……？」

部長さんは姉さんの名前を呟いて黙り込んでしまったが、突如口元が緩み笑みを浮かべた。

「ああ、ごめんね。こっちの話。して、君は演劇部に来る気はないの？」

俺が心配するように部長さんに声をかけたため部長さんは優しい目をしながら返事をして、演劇部への入部の手応えを探る。

「僕は……姉さんとは違います。演劇部の練習がどのようなものかを見に来ただけでしたので、入部に関しては……」

「そっか。別に姉さんが部長だからとか身内の実績なんて気にしないで、君は君のやりたいことをやれば良いと思うけど、そう簡単に割り切れないこともあるって事だね。話してくれてありがとう。練習、ゆっくり見て行ってね」

部長さんは俺の言葉を聞いたなら満足したのか部長さんなりのアドバイスの後、練習に戻っていった。

ただ、部長さんの言葉だけが楔となって俺の心に深く突き刺さって
いた。

「……俺の……やりたいこと……」

この楔を抜くには長く時間がかかりそうだ。

約束

「ふう〜、中々有意義な見学になったな」

「そうだね、慎はどこに行くか決めた？」

「まだ、他のやつも見てみたいかな〜」

部活動見学を終了し、気になる部活について話し合った。

お互いにまだここと決めた部活は無いようだ。

「じゃあ、俺は帰るけど輝弥はどうするんだ？」

「うーん、俺はもうちよつと残るかな。先に帰っていいよ」

俺はある場所へ行きたかったので、もう少し滞在していようと思う。

「そつか。わかった。じゃあここでさよならだな！ また明日な、輝弥！」

「うん、また明日ね」

慎は気にすることもなく俺に手を振り帰路に着いた。

「……さて、生徒会室へと……」

俺は慎の姿が見えなくなった後、とある申請を出すために生徒会室へ向かった。

生徒会室へ着き、扉を3回ノックする。

「……はい」

中から女生徒の返事が帰ってきたため自己紹介をする。

「失礼します。音楽科1年 巴 輝弥です」

「どうぞ」

入室許可が降りたため中に入る。

生徒会室は普通の教室よりも広く、生徒会長専用のデスクや生徒会メンバーが会議を行うための机とソファが置いてある。

また、壁側に書類を保管する為の棚が置いてあり、中には生徒名簿や活動記録をまとめたファイルが羅列されている。

生徒会室の中には副会長だけがいた。

濃緑色の髪を長く伸ばしたメガネの似合う知的な印象を受ける方

だ。

「どうかしましたか？」

「はい、音楽室の使用許可を頂きたくて」

「分かりました。ではこちらの申請書に必要な事項を書いて下さい」

副会長は訪問理由を聞いた後、音楽室使用許可書を用意し手渡してくれる。

「……これでよろしいですかね？」

必要事項を記載し確認をしてもらう。

「……はい、問題無しです。捺印しておくので、こちらを音楽室の見える場所に掲示しておいて下さい。使用が終わったら申請書は生徒会室前のラックへ置いておいて下さい」

「分かりました、ありがとうございます」

捺印済みの申請書を受け取り、生徒会室を後にした。

音楽室へたどり着き、申請書は黒板へマグネットで固定しピアノの前に移動する。

「ふう……。……俺のやりたいことか……」

俺は席に着きながら演劇部部长さんの言葉を思い出していた。

（姉さんが部長だからとか身内の実績なんて気にしないで、きみのやりたいことをやれば良いと思うけど）

俺のやりたいこと、それはまだ定まったものはない。

この学校で夢を見つけないことが出来ると思ったけど、まだ不明瞭となっている。

「……」

考えても仕方ないと思い、俺は自分の好きな曲を弾くことにした。

「〜♪」

慎との鑑賞会で一番最後に弾いた俺の好きなゲームに出てくるBGM。

悲しげで切ないメロデーだけでも不思議と惹かれてしまう。

初めて聞いた時の衝撃は忘れられず動画サイトで様々なアレンジを探したり自分で頑張つて弾けるように練習したのは良い思い出だ。

そしてゲームBGMだからこそ曲の終わりが無いのが俺としては
すごく好都合でもある。

考え事をしているときや気持ちを落ち着けたいときにこれを満足
するまでループして弾くことで気持ちをリセットできる。

そんな時、ピアノを弾きながら昔のことを思い出していた。

「姉さん！ 見て見て！ こんなに弾けるようになったよ！」

「本当ね。すごく上手よ」

小学生の時、好きな曲を弾いてみたいという事で両親が元々所持し
ていた電子ピアノを使用し、何の脈絡もない音を紡いでばかりいた
が、少しずつ音階や旋律など基礎について勉強をして、スローテンポ
ながらに弾けるようになったとき、一つの音楽として聴かせられるレ
ベルまで上がった嬉しさは何物にも代えがたい感動だった。

「ずっと練習していたものね。音楽教室に通わずただ自分の音感だけ
を頼りにここまで弾けるようになって……すごい努力だわ」

「えへへ、いつか俺がピアノを弾いて姉ちゃんが歌う。そんなことを
やってみたいんだ！」

「そうね、輝弥なら絶対できるわ。お姉ちゃんも応援する」

「うん！」

俺の屈託のない笑顔を見て、姉さんもまっすぐな笑顔で俺に返して
くれた。

それが俺に活力を与えてくれたのだ。

「……っ！」

今は姉さんと違う学校に行ったのもあって、その夢を叶えるのはも
う少し先になりそう。

でもここで腕を磨くことで、姉さんに自信を持った俺を見せること
ができる。

「もう少し……考えてみるか……」

そう、今考えているのは姉さんとの約束だから、将来やりたいこと
とは相反している。

音楽を用いた内容という方面で考えてみるの一考かと思う。

「……素敵な旋律ですね」

自分の中でやりたいことについてキリを付けたタイミングでピアノを称賛する声が聞こえてきた。

そこには中川さんが立っていた。

「……中川さん」

「またピアノが聴こえてきたので気になって来てみれば……。今回は申請書はちゃんと出しているようですね」

中川さんは黒板に貼付している申請書を一瞥し、俺へ近づいてきた。

「中川さんに怒られたくないですからね。それにしてもどうしたんですか？」

「……巴さんが奏でるメロディーに夢中になっていました」

訪問理由を聞いたなら、中川さんは少し目を背けながら答えた。

「えっ……」

「最初はただ聴こえてきただけだったので誰が弾いてるのかを見てから立ち去ろうと思っていましたが、今の貴方はすごく楽しそうに曲を奏でていました。それで……音楽だけでなく素敵な顔をされている貴方を見て夢中になってしまったんです」

中川さんは最初は気恥ずかしそうだったが、途中から俺の顔をまっすぐに見据えて聴いてくれた理由を述べてくれた。

俺としてはそこまでまっすぐに、しかも姉さん以外の女性からそこまで褒められたことがなかったので恥ずかしくなり目を背けてしまった。

「そ、それは……ありがとう……ございます……」

「ふふっ、あまり褒められるのは得意ではないんですね？」

「今までそう言った経験もなかったのです……」

「巴さんの貴重な一面を見られてよかったです。でも、どうして同じ曲をずっと繰り返しで弾いていたんですか？」

中川さんは俺をからかうように言ってから、弾いていた曲についての疑問をぶつけてきた。

それもそうだ。以前の鑑賞会では他にも曲を披露していたが今日は1曲をループで弾いていたのだから。

「……考え事をしていたんです。今日、部活動見学をしていたんですけど、あまりこれといった所が見つからなくて……何がやりたいかも決まっていなかったものでどうしようかと悩んでいたから、これを弾いていたんです。これを弾いていけば自然と頭がリラックスされて気持ちが悪くなるので」

「やりたいこと……ですか……。私としてはもう決まっていると思っ
ていましたが……？」

「えっ？」

途中からピアノの鍵盤を見つめながら話していたが、中川さんの言葉に俺は思わず中川さんを見つめ返してしまった。

「貴方が昨日、鈴木さんと一緒に鑑賞会をやっていたこと。何か思いつめたとき、悩んだときの気持ちの整理の仕方、先ほどの演奏。もう答えは出てるんじゃないんですか？ 大好きなことはいつだって貴方の味方なんです。その気持ちに嘘を付いていたら、その気持ちに向き合う事が辛くなりますよ」

「中川さん……」

中川さんの言葉は演劇部長さんの言葉と違って暖かく俺の中に溶け込んでいく感覚があった。

そして、中川さんは俺に一枚のチラシを差し出した。

そこにはスクールアイドル同好会のライブ開催のお知らせと書かれていた。

「……これは？」

「見ての通りスクールアイドル同好会のライブです。来週ダイバーシティでやるそうですよ。同好会の部長から頂きましたが、私は行くことができないのも少し良ければ鈴木さんと一緒にでも行ってみてはどうですか？ いい息抜きになると思いますよ」

そのチラシには中須さんとしずくさんが写っていた。

（この二人がいるのか……。どんなライブをするんだろう……）

「中川さん、ありがとうございます」

「気にしないでください。それでは私はこれで」

中川さんは仕事を戻るのが音楽室から去っていった。

このきっかけにより俺の運命の歯車が大きく回りだすことはまだ知る由もなかった。

ライブ鑑賞

部活動見学の次の日、俺は慎に相談を持ち寄った。

「慎、ちよつといい?」

「おう、どうかしたか?」

疑問を浮かべる慎に俺は一枚のチラシを見せた。

「中川さんから貰ったんだけど、来週、スクールアイドル同好会がお披露目ライブをやるんだってさ」

「ああ、しずくが所属してるやつだな。あと中須さんって言ったっけ」

「そうそう、見に行ってみようと思うんだけど、慎も一緒に行かない?」

ほら、慎、スクールアイドル知ってるって言ってたし」

突然の俺からの誘いに慎は嬉しさ半分不思議半分といった感じの表情を浮かべた。

「まあ、予定は空いてるし行けるけどどういう心境の変化なんだ?」

昨日は中須さんからの誘いを断ったばかりなのに」

「今まで入学してすぐに色んなことを難しく考えすぎてた気がしてたさ。ちよつとした息抜きも込めて見てみたいなって思ってた。あと、しずくさんと中須さんがどんなパフォーマンスをするのかも気になるし」

俺のまつすぐな表情を見て、慎はすぐに笑顔になった。

それを見ると俺も元気が湧いてくる。

「ふつ、そうか。まだ始まったばかりだしゆっくりと考えていこうぜ。

何かあれば俺も相談に乗るからさ」

「うん、ありがとう」

「いいぜ! 来週のお披露目ライブ、一緒に行くよ!」

慎は俺の誘いを嫌な顔せずを受けてくれた。

本当に良い人と巡り会えたんだなと嬉しさが心に染み入った。

一方、慎も、

(輝弥が答えを出したんなら……俺も……真結……)

笑顔の裏で密かにとある決意を固めようとしていた。

慎とスクールアイドルのライブを見る約束をしてから一週間が経った。

ライブの前日、授業が終わり帰路に着こうとしたとき、校外でしずくさんの姿を見かけた。

「あつ、しずくさん」

「……あつ……輝弥くん」

しずくさんは元気のない顔をしていたが、俺の顔を見るやすぐに微笑み返してくれた。

「聞いたよ、明日ダイバーシティでお披露目ライブをやるって！」

「あつ……そうなんだ……」

返事をしたしずくさんはまた悲しげな顔になった。

明日が初ライブだから緊張しているのかな。

「しずくさん、どうかしたの？」

「……実はね……」

しずくさんは目線を落とす、今にも泣きそうな表情に変わる。

だが、顔を上げた時にはすぐに笑顔になった。

「……明日のライブが怖くてね。私の気持ちが……みんなにちゃんと伝わるのかなって……不安になっちゃったの」

「確かに初めてのライブで全くの未経験の世界だもんね。でも、大丈夫。しずくさんの想いは絶対届くよ。不安になっちゃうのは仕方ないから、それ以上に楽しむ気持ちを忘れずにしずくさんのやりたいことを見せてよ！」

「輝弥くん……ありがとう。おかげで元気が出てきたよ。明日のライブ、頑張るね。それじゃあ」

しずくさんは俺の言葉を聞いて嬉しそうに笑い、場を後にした。

だが、俺にはしずくさんの笑顔が心の底からの笑顔には見えなかった。

「……しずくさん……？」

俺の姿が見えなくなったあと、しずくは校舎の陰に座り込み顔を伏せながら静かに泣いていた。

「はあ……ごめんね。輝弥くん……」

しずくの謝罪の声は、辺りで練習する生徒たちの喧騒で虚しくかき消されていった。

次の日、午後の授業も終わり、俺たちは一目散にダイバーシティの方へ出発した。

「相変わらずすごいなあ……アニメで見たロボットがこんな目の前にあるなんて……」

「にしてもここでライブをやるんだな。結構人が集まりやすいいいライブ場所だな」

ライブ会場はアニメに登場した等身大ロボットが立像しているフェスティバル広場。

そこには俺たちの他にライブを見に来たであろうお客さんが疎らに集まっていた。

「お客さんはそこそこにいる感じだね」

「だな、学園の生徒が多い印象だけど、それでも一般の人もそこそこにいるな」

それなりに人が多いので、この中でライブをするのはシンプルにすごいと思う。

俺では震えが止まらずにライブが上手くいかない未来しか見えない。

「ライブの出演者はしずくと中須さんの他に誰がいるんだ？」

慎が聞いてきたので、持参していたチラシを元に答えていく。

「ちよつと待ってね。しずくさんと中須さん。それと2年生の優木せつ菜さん、そして3年生のエマ・ヴェルデさんと近江彼方さんの5人だね」

「中川さんが部長さんから話を聞いたって言ってたけど、部長は年功序列ってことで3年生のエマ・ヴェルデさんか近江彼方さんのどっちかなのかな？」

「でもチラシを見る感じだと、優木せつ菜さんがセンターで写ってるから優木せつ菜さんが部長なんじゃない？」

俺たちはライブ開始まで雑談で時間を潰していった。

「そろそろライブが始まるんじゃないか？」

時間を確認し、開演時間があと5分までに迫っていた。

「そうだね、人もさつきよりまた増えてきた感じだ」

全体をさらっと見回して、人の喧騒が増えたのがわかる。

まもなくライブが始まるという実感が湧いて、益々緊張してきた。

「にしてもしずくたち大丈夫なのかな。これだけの人数の前で……」

慎は周囲を見渡してしずくさん達の心配をしたが、俺は昨日のしずくさんの様子を思い出していた。

「しずくさん……やっぱり何かあったのかな……？」

「キャ——！！」

周囲の女生徒達の声が響き、フェスティバル広場先の階段からライブ衣装を着た人が姿を現した。

チラシと見比べ、登壇者は優木せつ菜さんであることが伺えた。

白いシャツの上に内側が黒、外側が赤で配色されたジャケットを羽織りネクタイと帽子がせつ菜さんをつよく彩っていた。

スカートは左右非対称のデザインとなっており、かつこ良さの裏に女の子らしい可愛らしさも兼ね備えている。

優木せつ菜さんが目の前に現れ、俺と慎はくぎ付けになっていた。ただ一つだけ疑問点が残った。それは他のお客さんも同様に感じ

ていたことだと思う。

（あれっ……せつ菜さん一人だけ……？ しずくさん達は出てこないの……？）

ステージに出てきたのはせつ菜さん一人のみだったのだ。

ライブ開始前という事で挨拶も兼ねて全員で登壇するものかと思っていたが、他のメンバーが出てくる様子もない。

「みんなー！ こんにちは！ 優木せつ菜です！ 今日は虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会のお披露目ライブに来ていただき、ありがとうございます！ 今日諸事情により、私のパフォーマンスのみと

なっております！ 短い時間ではありますが、楽しんでいって下さいね!!」

せつ菜さんがMCを始めると歓声が更に大きくなった。

これだけでせつ菜さんの前評判はかなり良かったのだということ
がわかる。

ただ、どうしてせつ菜さんのみのパフォーマンスとなっているのだ
ろう。

その疑問だけが俺の中に残った。

「それでは聞いてください！ CHASSE！」

せつ菜さんによる曲名の宣言と共にライブは始まった。

初めてのトキメキ

せつ菜さんの掛け声と共に始まったライブは俺にとって大きな衝撃をもたらした。

イントロが始まると床から炎が上がり、開始早々から観客のボルテージが最高潮に達した。

せつ菜さんは観客を煽り、観客がそれに乗る。

ライブハウスにいるような熱さがこの広場には集まっていた。

「うお———!! せつ菜さ———ん!!」

慎はこの環境に飲まれたのかせつ菜さんを全力でコールしている。

「すごい……これがせつ菜さんのライブ……!! なんて……楽しいんだ……!」

俺はあまりの楽しさに語彙力が欠如していた。

これを凄いという言葉以外で表現できるのだろうか。

そして、もう一つ特徴的な事がある。

それはせつ菜さんが歌う言葉が心に直接響いてくること。

せつ菜さんのCHASEは自分の夢をただの夢で終わらせないように挑戦することを忘れてはいけないという事を歌っている。

今まではこうなりたいたいという願望があっても何か理由を付けて俺にはできない、向いていないと自分に言い聞かせていた。

人はやりたい事があっても周囲の目、自分の力量・器量を過小に評価して、やりたい事と思っても自分には……と卑下してしまう。

でも、せつ菜さんの歌は自分に遠慮するな、大好きを大好きなままにやっていいんだと背中を押してくれる。

俺は自分の胸に手を当て、心が熱くなっているのを感じる。

自分の夢を……叶えたい……。

そして、ダンスパフォーマンスをしているせつ菜さんに釘付けになっっているとせつ菜さんと目が合った。

「……♪」

せつ菜さんが俺に満面の笑みでウインクをしてくれた。

その姿に俺は純粹に惹かれた。

そして、ライブが佳境に突入し、曲のラストサビに突入した時、俺の見ていた世界が一変した。

ライブ会場が一種の戦場が変わっており地面から炎が噴き上がる中、せつ菜さんがただ一人、想いを爆発させている。

そして、せつ菜さんがシャウトした時、地面から無数の火柱が突き出てくる。

せつ菜さんの熱量が全身にぶつかってくる。

俺はこの人との勝負で完膚無きまでに叩きのめされたのだ。

もう今の俺はこの人しか見えない。

「せつ菜さん……すごい……!!」

そして、ライブは大盛況のまま終了した。

ライブが終わり、観客は拍手喝采だった。

せつ菜さんの名前を叫んだり、せつ菜さんに向かって手を振ったりと各々自分の大好きを思いのままにせつ菜さんにぶつけていた。

せつ菜さんは息を切らしながら一礼し、ステージを去っていった。

「輝弥!! 凄いなせつ菜さんのライブ!! すっげえ楽しかった!!」

「俺もすっごく楽しかった! こんなに心がワクワクする事ってあるんだな!!」

慎と俺は興奮冷めやらぬといった様だった。

それだけあの人のライブは勇気と元気を与えてくれた。

「スクールアイドル……やっぱりすごい……!」

慎は先ほどのライブの余韻がまだ残っているのかうっとりしている様子だ。

と言ってる俺もまだ心臓がバクバク鳴っているのがわかる。

「スクールアイドルって、こんなに人の心を惹きつけるんだ……!」

俺は先ほどのライブを思い出していた。

優木せつ菜さんが、スクールアイドルが見せてくれたこの光景は俺がやりたいことと似ているんじゃないか。

スクールアイドルとは別のやり方で誰かの心の支えになれる方法。

「そうか……このやり方なら……!!」

俺は自分の中で納得がいった回答が出たことを自覚できた。今までぼんやりと考えていた未来像が明確に現実味を帯びたもの変わったと感じた。

「……かった!! 感動した!! こんな初めて見た!!」

遠くから聞こえた声を聴いて俺は我に返った。

二人の女の子も感想を言い合っている。

あの人達もせつ菜さんのライブで心を動かされた人なんだな。

「どこの高校なんだろう……!!」

ツインテールの黒髪で毛先が緑色なのが特徴的な女の子。

もう一方は赤色の髪で右側にお団子を結わえた女の子。

よく見たら虹ヶ咲の制服を着ていたがリボンがピンク色なので2年生であることが伺える。

ツインテールの子がお団子の子を引っ張りポスターの前に行ってしまった。

「俺たちみたいに虜になったってところか」

「そうだね」

俺は意を決するように慎に顔を向ける。

「慎。俺……決めた」

「ん? 何がだ?」

「俺、スクールアイドル同好会に入部する!!」

その時の俺の顔は、今までの中で一番輝いていた。

生まれたトキメキ

私は友達と遊びに来ていただけのはず。

でもここで出逢えたのって奇跡じゃなくて……運命なんじゃ……。
「生まれたトキメキ……この日から世界は……変わり始めたんだ……
!!」

【輝弥が同好会への入部を決意した時から少し遡る】

私の名前は高咲侑。

私は友達とダイバーシティの中にある雑貨屋に来ていた。

いつも通り友達と学校に登校して、いつも通り授業をこなして、いつも通りお台場にきて買い物や買い食いをする平凡な日常を送っていた。

今日もいつもと変わらない学校終わりを絶賛堪能中だ。

「侑ちゃん、これは？」

「イマイチときめきが足りないな〜」

「うーん、じゃあどうしよっか」

この子は上原歩夢。

右側にお団子を結わえた綺麗な赤髪を持つ女の子で私の幼馴染。

この子は料理と裁縫が得意で女子力がとてつもなく高い。

ちなみに私の女子力は期待してはいけない。

歩夢に吸収されてしまったとでも言っておこう。

歩夢と二人で新しいパスケースを見に来ていたが私のお眼鏡に合うものは見当たらなかった。

別のお店に寄ってみるかな。

「ほかのお店、寄ってみる？」

「そうだね」

その後、他のお店に行っても結果は変わらなかった。

「はあく、なんか今日見たやつはどれもイマイチだったなく」

私は他にも何か無いかと周囲を散策したがこれといったものはなかった。帰って歩夢と一緒に最近始めたアプリゲームでもやろうかな。

「あれ、歩夢？ どこ行つたんだろう……？」

歩夢に声を掛けて帰ろうと思つたが、歩夢の姿が見えない。

お店の外に行くと歩夢はすぐに見つかった。

「あつ、いたいた」

「侑ちゃん」

歩夢はお店のウィンドウガラスに展示されていた服を見ていたようだ。

その服はピンク色のワンピースで首裾が白いフリルになっている。胸元には大きなピンク色のリボンとピンクが好きな歩夢にはぴったりの服だった。

「あつ、歩夢。これいいんじゃない？」

「えっ……？」

「似合うと思うよ」

「い、いいよ、そういうのは。ピンクとか好きだけどちよつと子供っぽいし……」

歩夢は両手を前に出し、か細く手を振って否定する。

そういう仕草も女の子らしくてすごくかわいい。

「別に着たい服を着ればいいじゃん。歩夢は何を着ても可愛いんだしや〜」

「もう。またそんな調子いいこと言つて……」

歩夢が少し拗ねちゃつた。

そんなに卑下することでも無いのになと私は思う。

「……ん？」

ふと、ワンピースの下に目を向けるとそこにはうさ耳のフードが付いた子供用の服があつた。

「あつ、これ懐かしいね。子供の時に歩夢がよく着てたやつに似てる」
私はその服と同じ目線になるように屈むと歩夢も同じように屈ん

だ。

「ああ、確かにそうだね」

この服を見てたら子供の時の歩夢を思い出す。

無邪気な笑顔でうさ耳付きのフードを被り、

「あゆぴよんだぴよん♪」

と、手をうさ耳に見立てながらキャツキャ言ってたのが懐かしい。うさ耳付きのフードを被っているのにも関わらず手でもうさ耳を立てるといふ天然を兼ね備えているのが本当に可愛くて末恐ろしい子。

「いやあ、可愛かったな……」

今の歩夢にあれを振ったらやってくれるのかな。

私の好奇心が顔を覗かせてくる。

「ねえ？ 一回やってよ」

「ん？ 何を？」

分からないか。仕方ない、私もやってしんぜよう。

「あゆぴよん」

私は頭に手をつけ、うさ耳に見立てながら振る。

(さあ、どうする、歩夢！)

私がやったのだ。

これで歩夢も同じように乗ってくれるはず。

と期待したのも束の間、私に待っていたのは歩夢の冷ややかな目だった。

「……はあ？」

待て待て歩夢。女の子がそんな風に言っではいけない。

冷たい目でそんなこと言ったら一部の人がご褒美と思われちゃうよ。

いや、ありがとうございます。

「やるわけないでしょー！ もうー」

歩夢が立ち上がってそっぽ向いて怒っちゃった。

からかいすぎちゃったかな。

「え〜」

でも私はちよつと諦めきれなかった。我ながらしぶといな。

「なんか、お腹すいてきちゃった。下降りない？」

歩夢は話題を変えてきた。

これ以上あゆぴよんに触れるのは本気で怒りそうだからやめておこう。

「賛成だぴよーん」

思わずあゆぴよんを維持したまま返事していた。

しかし、歩夢は気に留める様子もなかった。

「ゆうぴよんの方が可愛いんじゃない？」

逆にゆうぴよんを弄ってくる。

私にはこんなの似合わないから否定しておく。

「それはないぴよーん」

「あはは、じゃあいつも通りコッペパンを食べに行こっか」

「だよねー、行こっか」

そうして、建物外にあるコッペパン屋さんに出発した。

コッペパン屋さんで各々注文を済ませ近くのベンチに座りながら今日の授業の事について喋っていた。

「今日の2限でちよつとぼーつとしてたらさあ、そのまま先生に「高咲さん！」って見つかったちゃってそのまま指名されて焦っちゃったよ〜」

「侑ちゃん、ちゃんと授業は聞かないとだよ？」

授業が退屈になると別のことを考えちゃうのは人間の性だと思うんだけどなあ。

まあ、歩夢は真面目だからそう考えてもちゃんと集中し直してるんだけど、そこは純粹に偉いし尊敬できる。

「あはは、まあ気を付けるよ。あつ、っていうかそれ何味？」

ふと歩夢が頼んだメニューが気になった。

コッペパンの中にカスタードクリームがたっぷり入っており甘くて美味しそう。

「これ？ 限定のレモン塩カスタードだよ。食べる？」

「うん、一口ちようだい」

「あつ、じゃあさ」

歩夢はふと携帯を出して写真を撮ろうとしていた。

「おつ、いいね。いえーい」

私も食べるふりをしてカメラに映る。

ちなみに写真をとった後、一口貰ったが甘さの中に塩のしょっぱさがアクセントになってすごく美味しかった。レモンの酸味も絶妙にマッチしていた。

「この後、どうしよっか」

コッペパンも食べ終わり、各々やりたいことは終わったので暇を持て余していた。

「うーん、映画でも見る？」

「でも、魅力的なやつないんだよね」

やることが無くなり、帰ることも視野に入れていた時、大きな歓声が聴こえてきた。

「ん？ なんだろう？」

「イベントでもやってるのかな？ ちょっと見に行ってみようよ！」

方角からするとフェスティバル広場の方だった。

誰か有名人でも来てると思い、急いで歩夢と向かうことにした。

「なに？ これ？」

来てみるとそこでは衣装を着た女の子がライブイベントを行っていた。

年齢は私と同じくらいの子だけど、衣装をまとっているからなかなか年上に見える。

周囲を見渡すとみんながステージに見惚れていた。

いや、正確にはこのステージを築きあげているあの子に見惚れている。

同じ学校の生徒もいるし、よく見ると男の子もいる。

ネクタイを見ると黄色だから1年生かな。
そういえば今年の1年生は男の子はいるんだね。

「……………っ!!」

私も思わずステージの子を見ていたが、あの子の言葉が私の胸に直接響いてくる。

この数十秒間でこの子のライブを見ただけで自分の中の世界が変わり始めているのが分かった。

私は……………あの子に……………惹かれている。

「かつこいい……………!!」

気づけばライブは終わっていた。

私はただステージを見つめるだけだった。

「す……………すこい……………」

「うん……………」

ステージに目が行ってしまったって幼馴染の方を見ていなかったがどうやら同じ気持ちを抱いてたようだ。

「だよね!! すこかったね!!」

「んっ……………うん……………」

思わず歩夢の手を握ってしまったので歩夢は戸惑ってしまったが、そんなことはお構いなしに私の想いはとめどなく溢れてくる。

「すこかった!! 感動した!! こんな初めて見た!!」

「あはは……………」

歩夢はテンションが高い私を見て、少し笑っていた。

そんなに可笑しかったかな?

「どこの学校なんだろう? あっ、ポスターだ!」

今の子がどこの学校の生徒か気になったので近くにあったポスターを見つけ歩夢の手を引き、近寄っていく。

そのポスターには先ほどライブをしていた子を含め5人の女の子が写っており、下には虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会と書いてあった。

「虹ヶ咲学園……………スクールアイドル同好会……………」

ん？ 虹ヶ咲学園？？

思わず歩夢と顔を合わせる。

「に、虹ヶ咲って……!!」

「うちの高校だあ———!!」

うちの学校にこんなにときめく同好会があつたなんて……!!

この出会いが私の人生を大きく変えるとは誰にも予想できないとだった。

本編 『同好会再始動』 同好会の現状

優木せつ菜さんのライブを観た次の日、俺はスクールアイドル同好会に入部しようと入部申請書を取りに生徒会室に行こうとしていた。

授業が終わり出発しようとした時、慎が声を掛けてきた。

「輝弥、どっか行くのか？」

「うん、早速スクールアイドル同好会に入部したくて、生徒会室に書類を貰いに行こうと思ってね」

慎は俺の答えを聞くと、優しく微笑んだ。

「そうか、やっぱりスクールアイドル同好会に入るんだな。暇だし、俺も付いていっていいか？」

「別にいいよ。にしてもどうしてやっ？」

わざわざ俺の入部手続きについてくるなんて、大して面白いこともないけどな。

「いやー、このまま帰るのもあれだし、一緒にスクールアイドルを見た仲として友人の門出は見ていきたいなと思ってな」

慎は少し視線を外し、気恥ずかしそうに答える。

確かにあのライブで俺は心から熱くなっていた。

普通の高校生があんなにも見ている人を虜にできるんだと思って震えが止まらなかったのだ。

高校生になって新しい出会いを見つけることができたので、慎はそれを近くで応援したいという事だろう。

でも慎の性格上、それを素直に言うのは恥ずかしいといった所だと思おう。

「そういう事ならいいよ。あんまり面白いものじゃないと思うけど……」

「別にそんなことはないさ。俺がついていきただけだからな」

「好きにしていいいよ。じゃあ行こっか」

慎からの回答に満足し、俺たちは生徒会室の方へと向かった。

「そういえばどうして輝弥はスクールアイドル同好会に入ろうと思っただんだ？」

生徒会室へ向かう途中、慎は質問してきた。

確かにライブを見終わってからいきなり俺がそんなことを言ってきたもんだから慎も驚いたんだろうな。

「うーん、そうだな。俺、今までピアノを弾いてた理由が好きな曲を自分で弾けるようになりたいって思ったからなんだ」

俺は顎に手を当て、思考を巡らせながら答えを整理していく。

「でも、その曲を弾けるようになった時、姉さんが自分のことのようにすごく喜んでくれたんだ。それを見てこんな自分でも誰かを笑顔にすることができるとなってるって思ったんだ」

俺はきつかけとなった時を思い出す。

あの時の姉さんの顔は今でも忘れられない。

「先週、慎と別れた後、何をやりたかったか考えてた時にピアノを弾いてたらそれを思い出して、そっちの道に進むのも有りかなって思ったんだ」

俺は慎と別れてからの事を話した後で少し焦ってしまった。

一人でピアノを弾いていたので慎が羨んで何か言ってくるかと勘ぐってしまう。

「へえー、俺と別れてからそんな事があったんだな」

と思ったが、慎は特に気にする様子もなく両手を後頭部に置く。

慎って意外と気にしないのかな。

「まあ、俺としては輝弥にやりたい事が見つかってよかったよ」

慎はそう言いながら天井を見上げ真剣な顔になり何か感傷に浸っているようだった。

「……身内からのそういう言葉って……すごく勇気と力を貰えるよな……」

「慎……？」

突然喋るトーンが下がったため、俺は戸惑ってしまう。

と思った矢先に慎の声色が高くなり、歩くスピードを上げていく。

「……なんてな！ 姉さんからの言葉と想い、しっかり貫いていけよ。それにお前のことを一番近くで応援してやるしさ」

慎はそう言い、俺の前を数歩先に行った所で俺の方へ振り向き、笑顔で拳を突き出した。

「……ああ。ありがとう」

慎が突き出した拳に合わせるように俺も拳を突き返した。

二人の拳は実際に突き合っているわけではないが、二人には合わせつつている感触が確かに残っていた。

(慎……お前に一体何があったんだ……?)

慎と拳を合わせた中で、俺にはただ一つだけの疑問が胸の中に残るのだった。

それから少し時間が経ち、俺たちは生徒会室に到着した。

だが、俺はすぐに入ろうとせず扉の前で固まっていた。

「……」

中々生徒会室に入ろうとしない俺に慎は痺れを切らした。

「どうした、輝弥？ 入らないのか？」

「ごめん。一回ここには入ってるのになんだか緊張しちゃって」

俺はこういう時にも無性に緊張してしまう。

ただ生徒会室で入部申請書を貰うだけなのに、こんなことにも緊張してしまう自分が少し恨めしい。

「こういう時は勢いで行った方がいいだろ」

慎は俺と扉の間に入り、3回ノックをした。

慎のこういう時でもアクティブにいける所が羨ましい。

「はい」

中から女性の声が聞こえる。

これは中川さんの声だろうか。

「音楽科1年、鈴木慎と巴輝弥です」

「どうぞ」

入室の合図が入り、慎と一緒に生徒会室へ入る。

生徒会室の中には生徒会長である中川さん一人だけだった。

「あつ、中川さんお疲れ様です！」

「鈴木さんに巴さん、お疲れ様です。今日はどうしたんですか？」

生徒会長のネームプレートが置かれたデスクでパソコンと睨めっこをしていた中川さんはパソコンを閉じ、俺たちに向き合う。

「入部申請書を受け取りに来ました」

俺はここに来た目的を言う。

中川さんは特に疑問を持つこともなく笑顔で対応する。

「分かりました。少しお待ちください」

中川さんはデスクの引き出しから二枚の入部申請書類を取り出す。

「ああ、俺は違うんです」

慎は自分も入部手続きをしようと思われたので真っ先に否定する。

「あらつ、そうなんですか？ では鈴木さんはどうして？」

「まあ、輝弥の付き添いで……」

「今日は僕が入部手続きをしたくて来たんです。慎は折角だから一緒に来たいと言ってたので」

俺は中川さんに事情を説明した。

中川さんは少し戸惑いながらも気を取り直して書類を渡してくれた。

「そうですか。では巴さん、こちらの書類に必要な事項を書いてください」

中川さんから書類とペンを受け取り、必要事項を記載していく。

俺はその書類に自分の学科学年名前を書き、入部する部活動欄にスクールアイドル同好会と記入して中川さんに提出する。

中川さんは俺が書いた申請書を見て、目がピクツと動いた。

「……………」

心なしか書類を持っている手が震えてるように見えた。

「中川さん？ どうかされましたか？」

中川さんがだんまりとしてしまったので、思わず声を掛ける。

「……いえ。なんでもありません。この書類ですが……」

「スクールアイドル同好会への入部です。昨日もライブやってましたし、今も活動しているんですね？」

俺は目を輝かせながら中川さんに問いかけた。

だが、そんな俺に返ってきたのは非情な言葉だった。

「残念ですが……受理できません」

「……えっ……？」

中川さんの言ってる事が理解できず、聞き返してしまおう。

「……ですからこの申請書類を認めることはできません」

俺と慎は目が点になり、ただ茫然としていた。

「ど、どうしてですか!?! 輝弥は男だからスクールアイドル同好会に入れないってことですか!?!」

慎は生徒会長用デスクを叩き、中川さんに向かってつくように問いかけた。

「慎、一回ストップ」

あまり熱くなっても仕方ないので、一旦慎を制止する。

「中川さん、どうしてスクールアイドル同好会への入部が認められないんですか? 何か特別な理由があるんですか?」

中川さんは眼鏡のブリッジを押して、眼鏡の位置を直し空気を変えようとする。

「すみません、言葉が足りていませんでした。正確にはもう入れない、とでも言いましょうか」

益々俺と慎は頭の中がハテナで一杯になった。

「スクールアイドル同好会は……本日を以って廃部になりました」
中川さんの一言が無情にも俺の心に深く突き刺さったのだった。

こころのざわめき

「スクールアイドル同好会は本日を以って、廃部になりました」

中川さんの冷たい一言が生徒会室の中に残っていた。

「ど、どうして廃部なんですか!? 昨日、優木せつ菜さんがあんなに……人の心を動かすライブをしたんですよ!」

俺は中川さんの発言に納得がいかなかった。

あの優木せつ菜さんのライブを見て、俺はこの部活で自分の音楽を奏でてみたいと思ったんだ。

それを目の前で握りつぶされても素直に引き下がることはできない。

「一体誰がそんなことを言ったんですか!」

どうやら慎も同じ気持ちなようだ。

折角の友人の門出が、こんな無残に終わってしまうのは呆気なさすぎるといった様子だ。

俺たちの言葉を受けてなのか中川さんは目線を横にそらす。

「……廃部にすると言ったのはその優木せつ菜さんですよ」

「はっ……?」

俺たちは理解が追い付かなくなっていた。

二人には中川さんがふぎけた冗談を言っているとしか思えなかった。

「せ、せつ菜さんがそんな事言うはずがないじゃないですか!」

「そ、そうですね! あ、あの優木せつ菜さんがあんなライブを披露してくれた次の日に廃部にするなんてとても……!!」

「信じられませんか?」

「えっ……」

「貴方達は優木せつ菜さんの何を知って、そんな事を言い切れるんですか? 貴方達はそのライブを見ていたただのファンじゃないですか。何も知らないのに簡単なことを言わないでほしいですね」

せつ菜さんの事を信じたくて中川さんの言葉を否定したけど、中川さんから正論で返される。

でも、その言葉をただ受けるだけで引き下がりがりたくはない。

「確かに僕は優木せつ菜さんの事を何も知りません。昨日初めてその存在を知ったから生粋のにわかです。ですが、そんなになわかでもせつ菜さんのライブを見て心を動かされたんです。それってスクールアイドルが本来あるべき姿なんじゃないですか？」

「あるべき姿……ですか？」

「はい、僕はスクールアイドルの事は詳しく知りません。でも、一般的なアイドルはテレビで見たことがあります。アイドルの歌う姿や楽しんでる姿を見て、たまにかっこいいなって……辛いことがあっても……もう少し頑張ってみようかなって、勇気を貰えることがありました」

俺はテレビで見たことのあるアイドルを思い出す。

アイドルを追っかけるという事はしたことないし、そこまで興味を持っていたわけでもない。

それでも、何気ないアイドルの行動が印象に残ることはある。

パフォーマンス、歌、トーク、それは人それぞれだと思う。

そこから自分もあんな風に、なれはしなくても同じように輝くことはできるのではないかと思わせてくれるのだ。

「スクールアイドルも趣旨は同じことですよね？ 優木せつ菜さんは自分のやりたい事をありのままに僕たちに見せてくれた。それが僕に勇気をくれたんですよ」

俺のまっすぐな訴えに中川さんは少し眉間にしわを寄せたが、すぐにそれを隠した。

「存分に想いを語っていただいて構いませんが、その優木せつ菜さんはファンを動かしても、もっと近くにいる人の心を動かすことはできませんでした。いや、気づいてあげられなかったと言っていいでしょう」

中川さんは少し声を小さくして目線を落としながら自分に訴えるように答える。

その様子に俺は少し違和感を覚えた。

「それは一体……？」

「……貴方達には関係のないことです。先ほども言ったように同好会

が廃部になったという事実は覆りません。巴さんは今一度入部する部活動を選び直してください」

中川さんは俺にそう宣告すると、その場から逃げるように足早に生徒会室を去っていった。

俺はデスクに置いてある申請書を持ち、スクールアイドル同好会の文字をただただ凝視していた。

「輝弥……」

憤もまだ納得がいつてないといった表情をしている。

思うことは同じなようだ。

「スクールアイドル同好会が廃部になるなんて絶対おかしい。そうなると分かっていたならどうしてあんなライブが出来たんだよ……」

俺は昨日のせつ菜さんのライブと表情を思い出す。

心の底からライブに対する熱い思いをぶつけてきて、俺の顔を見て満面の笑顔を向けてくれたあの表情の裏にこんな事情を背負っているとは到底思えなかった。

「こんなの俺は絶対認めねえ……！ 何か事情があるに違いない……！」

「輝弥、俺も同じ気持ちだ。こんな理不尽なこと言われて、はいそうですかと引き下がれるか」

憤も俺の意見に賛同してくれる。

その瞳は熱く燃えているように見えた。

「スクールアイドル同好会についての情報を集めよう。何かわかるかもしれない」

「よし、なら善は急げだな」

俺たちは頷き、生徒会室を去った。

生徒会室を出て、俺たちは部室棟に来ていた。

部室棟は何十もの部活動を一つの建物中に部室として設けている。

それに加え、どの部室も相応の広さを有しているため初見の人はその規模の大きさに腰を抜かすことだろう。

「まずはスクールアイドル同好会の部室を探そう。何か情報があるか

もしれないし」

「とは言うものの……この広さだもんなあ……。どこから探せばいいんだよ……」

慎は部室棟の地図を見て呆然としていた。

確かにこれだけの部活数からスクールアイドル同好会を探すのは至難の業だ。

「手当たり次第に探すのもなあ……」

片っ端から探しても時間がかかるだけだから何か効率のいいやり方はないだろうか。

俺たちは2人で腕を組み、じつくりと考えていた。

「うーん……」

しかし、その場で考えているだけでは何もいい案は浮かばなかった。

すると一人の少女が話しかけてきた。

「どうかしたんですか？」

その子はピンク色の髪をボブにしており、パツチリとした目と頭の上でピンとはねている髪が可愛い。

背が小さいのも相まって以前に会った中須さんとは違う小動物感がある。

中須さんは犬に対してこの子は猫みたいという表現が良いだろうか。

「貴女は……?」

「あつ、突然ごめんなさい。何か困ってるように見えたから」

学校指定の制服にパーカーを羽織った少女は驚かせてしまったことを淡々と謝った。

どうやら俺たちの様子を見かねて声を掛けてくれたようだ。

「はい、とある同好会を探そうとしてるんですけど見つからなくて……」

「その同好会って?」

「スクールアイドル同好会だよ」

「……」

俺たちが探している部活について教えだが途端に少女は黙ってしまった。

じっと見つめてくるので少し怖さを感じる。

「あ……あの……？」

「あつ、ごめんなさい。私、気持ちを顔に出すのが苦手で、本当はびつくりしてたの」

俺が少女への対応で困っていると少女は自分から苦手な事について話してくれた。

表情がさつきから何も変わらなかった事について腑に落ちた。

「そうなんだ。こつちをずっと見てきたから何か癪に障ることを言ったのかと思っちゃって……」

「そんなことない。ただ偶然が重なったと思って驚いてたの」

「確かに同好会の事を探してるって言ったときにびつくりしたって言うってたな。何かあったのか？」

慎の問いに少女は慎の方を向きながら答えてくれる。

「うん、貴方達と同じようにスクールアイドル同好会の事を探してる人がいたから」

「えっ、そうなの？」

それはすごい偶然だな。

各々がどこかの部活動を探しているだけなら何もおかしくはないけど、探している部活は全く同じでしかもその時間帯も似ている事から確かに少女としてはびつくりするだろう。

加えてどちらもこの少女にスクールアイドル同好会の場所を聞いているのだから。

「うん、スクールアイドル同好会はここにある」

少女は地図の方へ向き、スクールアイドル同好会の部室がある場所を指差して教えてくれた。

「そうなんだね。だいぶ端にあるから手当たり次第に探してたら時間がいくらあっても足りなかったから助かったよ。ありがとう」

「お礼なんていいよ。力になれたなら嬉しい」

少女に向かって笑顔でお礼を言うが、少女は変わらず無表情だっ

た。

でも嬉しいと言った彼女から暖かな気持ちが伝わってきた気がする。

「そういえば君も一年生なんだね。どこの学科なの？」

「私は情報処理学科。名前は天王寺璃奈。貴方達は？ 同じ学科にはいなかったけど」

少女は少し首を傾げながら質問する。

「うん、俺たちは音楽科にいるんだ。俺は巴 輝弥」

「俺は鈴川 慎。気軽に慎って呼んでよ」

「分かった。輝弥くんは慎くんよろしくね。私の事も好きに呼んでいいよ」

「じゃあ、璃奈って呼ばせてもらおうよ」

「俺は……璃奈さんで呼ばせてもらうね」

俺はやっぱりまださん付けで呼ぶことにする。

慎みために気兼ねなく接するというのはまだ時間がかかりそうだ。

そんな俺を見て、慎はため息をつく。

「はあ、相変わらずだな輝弥は」

「……うん」

璃奈さんは話についてこれず頭にハテナを浮かべている。

「璃奈さんは気にしないでいいよ。じゃあ、俺達行くね。改めてどうもありがとう。璃奈さん」

「あ……うん」

璃奈さんは何か言おうとしたけど、俺たちが早々に出発したのを見てやめてしまう。

「……初めて……同級生の子とちゃんとおしゃべりできた……。もう少し話してみたかったけど……」

璃奈は俺たちが向かった方角を数秒間見つめた後、友人を探しに部屋棟から出るのだった。

真実を求めて

俺と慎は偶然の出会いを果たした同級生の天王寺璃奈さんと別れた後、璃奈さんに教えてもらった同好会の部室へと向かった。

その道中で二人の女生徒とすれ違ったけどなにやら落ち込んでる様子だったが、俺はそこまでにしか気に留めずスクールアイドル同好会の事へと気持ちを切り替えた。

璃奈さんに教えてもらった場所へたどり着いたが、俺たちを待ち構えていたのはネームプレートが付けられていない無機質な扉だった。

「……なんだこれ？ 璃奈から教えてもらった場所ってここだよな？」

俺たちは悠然とそびえ立つ扉を前に疑問を抱いた。

確かに璃奈さんから教えてもらった場所は間違っていないはず。

俺は扉を開けようとノブを捻るが鍵が掛かっているのか、その扉の奥にある部屋の中を見ることはできなかった。

「……鍵が掛かってる。もう部室として使っていないってことかな」
廃部となった部に与える物は無い。

そう言わんばかりに生徒会の手際が良い。

「どうする。これじゃあ何も情報が得られないじゃないか」

「うーん……そうだな……」

俺は別の方法を考える。

その時、一人の少女の顔が頭の中に浮かんだ。

「……演劇部の部室へ行くこう」

「演劇部？ しずくのところか！」

「うん、今のスクールアイドル同好会の実情を知っていて、俺たちが情報を聞ける方法とすればしずくさんしかいない」

中須さんの事も頭には過ったが、スクールアイドル同好会以外の彼女の姿を知らないのが中須さんを探して情報を聞くというのは骨が折れることだろう。

しかし、しずくさんであれば同好会に入っていて演劇部にも所属しているため、どこに行けば会えるのか見当がつきやすい。

「今なら演劇部の練習に参加していると思うし、探してみようよ」
こうして演劇部の練習場所を探しに演劇部部室へと向かった。

【演劇部部长視点】

やっぱりどこかおかしい。

今日は今までと変わらない普段通りの練習をしているが、この子はどこか上の空になっているように感じる。

桜坂しずく、スクールアイドル同好会という今年立ち上がったばかりの同好会にも入って活動していたけど、メンバー間のトラブルによって同好会は無くなったってクラスの子が話してたけどこの子の現状を見る限り、どうやらそれは真実なようだ。

入学当日、階段の踊り場で演劇の練習をしていた彼女を見つけ、この子からはどんな事をしてでも夢を掴み取ろうとする執念を感じたから演劇部に誘ったけど、今のしずくはあの時のような覇気を全く感じられない。

いつもは台本を持たずに手足の表現を入れながら練習をしているのに今日は台詞が覚えられてないからと台本を持ちながら練習をしていたり、台本に書かれている台詞に注力してしまうが為に感情表現が甘くなっていたりと普段の彼女とは打って変わっていた。

「明日もまた……同じ日が来るのだろうか……!!」

しずくが台本無しで練習を始める。

動作を入れながら演じているが今のしずくからは自分の蟠りを隠しているように演じているようにしか見えない。

つまり彼女は演者ではなく一人の桜坂しずくのまま舞台での練習をしている。

「幸福は一生来ないのだ……けれども……!!」

「はい、そこまでー」

私は見ていられなくなり急遽ストップを入れた。

「今日の舞台練習はここまで！　じゃあ最後にグラウンド10周！」

周囲に目を向け、練習メニューの変更を告げる。

部員たちは悲鳴を上げていたがそんな事はお構いなしだ。

「文句言わずにさっさと行く!」

そして、しずくの元に近づく。

しずくは急に練習を止められたからか地面に目線を落とす。

「……しずく、聞いたよ。同好会の件」

「……部長……」

「掛け持ちじゃなくなったんだから、これからは演劇部の方にちゃんと顔を出していつてよ?」

「……はい」

そう返事するしずくだったが、やはり心ここにあらずといった様子だ。

どうしようか考えていると、扉の近くに何やら見覚えのある男の二人の姿が見えた。

「ん? あれは……」

【輝弥視点】

演劇部の部室で練習場所を聞いた俺たちは屋上へと向かった。

そこには虹ヶ咲指定のジャージに身を包んだ人達が集まっていた。

そこで発声練習をしている人に目を向け、俺たちの目的の人物がいた。

「あつ、あそこにいるよ」

「さすが、演劇部にいるだけあつてちゃんと声が通るなあ。ここからでもはつきり聞こえるよ」

そこで練習しているしずくさんを見て普段の出で立ちからは想像できない凜とした声を放っている彼女を見て慎は釘付けになっていたが俺は少し違和感を感じていた。

(前に見たときと何かが違う……?)

入学式の日には彼女と会った時、あの時のしずくさんはもつと演じる役の気持ちを込めてその人になりきっていたが今のしずくさんからはそのビジョンが見えなかった。

「慎、今のしずくさんって何の役を演じてるのかな?」

「えっ? そんなのいきなり言われてもわからないだろ?」

慎は呆れるように答えた。

確かに今の俺の質問はおかしい。

いきなり得体の知れない飲み物を差し出されて、まだ口につけていないのにも関わらず、これは何味だ？ と聞いているようなものだ。

「あつ、ごめん。確かにそうだよね。そうなんだけど……」

俺はと言えば伝わるか考えていると突然声を掛けられた。

「やあ、いつかの部活動見学以来かな？」

演劇部の部長さんだ。

この人はいつも飄々としていて考えていることが分からないので少し苦手なタイプだ。

「どうもこんにちは」

「こんにちは。今日は何か用かな？ もしかして演劇部に興味を持ってくれたとか？」

部長さんは期待するような目で俺を見つめるが、その視線を受け止めきれず思わず目を反らしてしまう。

「い、いえ。僕はそういうつもりじゃないです」

「えくそつか。君のお姉さんも演劇界隈では名の知れた人物だから、もしかしてその身内である君も同じようにやれるんじゃないかなって密かに期待していたんだけど……？」

すると、俺の脳裏に昔言われた言葉がよみがえる。

（お前のお姉さんはあんなに凄いのにな、お前って全然大したことないんだな）

（お姉さんが実力者だからもしかしたらって思ったけど期待外れだな）

俺は悪寒が走り思わず声を荒げる。

「……俺は姉さんと違うんだ!! そんな風に言わないでください!!」

「か、輝弥……？」

突然怒鳴ってしまったので慎は驚いていたが、部長さんは少し瞼をぴくっと動かしたのみで大きく動揺する様子はない。

「……姉さんは姉さん。僕は僕です」

「……そうだね、私の発言が軽率だった。ごめんね」

部長さんは以前に俺に対して言った言葉を思い出したのか謝罪してくる。

「いえ、お気になさらず」

「して、部活動見学じゃないなら要件は何かかな？」

「あつ、あの桜坂しずくさんはいらつしやいますか？　俺達、彼女に用があつて……」

俺の代わりに慎が答える。

「しずくに？　分かった。ちよつと待つてて」

そう言う部長さんはしずくさんの方へ向き、しずくさんを手招きする。

「……っ！　輝弥……くん……」

しずくさんはお化けを見るような目で俺を見る。

本人からすればライブを見に来ると言つてくれた人なのに自分が出なかつたのだから何を言われるかわからないのだろう。

「しずくさん、少し時間いいかな？　話したいことがあつて」

「……私は話したい事なんてありません……」

しずくさんは突き放すような口調で俺達との、俺との会話を拒もうとする。

しかし、部長さんはそれを許さなかつた。

「しずく、貴女も今日はもう帰りな」

「えっ……!？」

しずくさんは思わず部長さんに目を向ける。

「正直、今のしずくに演劇練習をさせても舞台は良いものにならない。何を隠しているのか分からないけど、少なくともこのまま無駄な時間を割くよりかはその胸の蟠りを取り除いた方が身のためだよ？」

「……っ……!？」

部長さんはしずくさんに容赦のない言葉をぶつける。

しずくさんは歯を食いしばり必死に怒りをこらえていた。

でもこれが部長さんなりの優しさなのだろう。

俺が抱いていた違和感をこの人はしずくさんに対してはつきりと言葉にして進むべき道を示している。

この人が演劇部の部長をやっているのは伊達ではないと改めて認識した。

「……分かりました。お先に失礼します……」

しずくさんは部長さんに一礼して足早に屋上を後にした。

「……さて、しずくは着替えに行っただろうから、部室の前で待つときな。早くしないと逃げられちゃうよ?」

「はい、ありがとうございます」

「気にしなくていいよ。あと、輝弥君って言ったっけ。知らぬ間に私は君の逆鱗に触れていたみたいだね。改めてごめんね」

部長さんは俺の先ほどの態度を気にしていたのか改めて頭を下げて謝ってきた。

「いいえ! そんな、頭を上げてください! 僕は……もう大丈夫ですから」

俺は部長さんに頭を下げさせてしまったので思わず焦ってしまっただが、一呼吸おいて気にしていない旨を伝える。

部長さんはそんな俺の様子を見て、笑みをこぼした。

「そう。でも、君はそう思っても私自身が私を許さなかったから。それだけ。しずくの事、お願いね」

部長さんはウインクしながらそう告げ、屋上を去ろうとする。

(この子なら……しずくを……)

部長さんは俺たちの横を通り過ぎた後、俺の方を見ながら期待するように静かに笑った。

すれ違い

先に着替えに戻ったしずくさんを追い、演劇部の部室へと向かう。部室に着いたが、流石に中へ入るのはまずいので俺たちは外で待つことにした。

待ってる最中、慎が声を掛けてきた。

「輝弥、さつきは大丈夫か？」

「部長さんに言われたこと？」

慎は静かに頷いた。

「……まあ言われ慣れてるからいいよ。実際姉さんがすごいのは分かっているんだし」

俺はため息を吐きながら諦めたように言う。

身内が優秀故の悩みというものだ。

「慎は兄弟はいないの？」

いつも俺の姉について話をしているので慎の身内についても興味が湧いた。

慎は少し顔をしかめ唇を噛んだがそれも一瞬の出来事だったので俺はそれを見ることが出来なかった。

「……一応妹がいる」

「そうなのか。俺は下にいないから羨ましいよ。今はいくつになるの？」

「……今頃は中2になってる……だろうな……」

慎は陰を落としながら答えていく。

最後の方が聞こえにくかったけど、大きくなった妹に兄心が強くなってしまったのだろうか。

(なんでそんなに悲しそうなんだ？ 兄妹喧嘩でもしたのかな……)

慎の事についてももう少し聞こうとしたが、

「お、お待たせしました……」

しずくさんが部室の扉の陰から顔を覗かせてきた。

だいぶ居心地が悪そうな表情をしているが逃す気はさらさら無い。

「しずくさん、お疲れ様。もう大丈夫？」

「はい。とりあえずはいいですよ」

「じゃあ、ここに居るのもあれだし場所を移動しようぜ」

慎のことを聞きそびれたがまた聞けるチャンスはあるだろうと思
い、慎への追求は一時ストップする事にした。

【??? 視点】

「はあ……………」

私は今、カフェインボーに來ています。

普通の人であればメニューを見ながらそこで何を食べようか期待
に胸を膨らませますが、今日の私はむしろ食べ物に喉を通らないん
じやないかと思えます。

原因はそう。私がここでやりたかった事が突拍子もなく終わりを
告げてしまったからです。

私はスクールアイドルになりたくてこの学校に転校してきました。
ここから遥か遠い異国の地で日本のスクールアイドルの動画を観
て、凄く元気と勇気を貰えました。

この場所で私も同じようにみんなの心をポカポカにしたいと思い、
新しく立ち上げる事になった同好会でスクールアイドル活動を始め
るつもりでした。

今年度から始まった同好会ですが、メンバー間の仲も良く練習につ
いても何不自由なくやれていたのですごく充実していました。

ですが、そんな楽しい時間の終わりはあまりにも突然の出来事でした。

同好会での練習が最初は楽しくてみんなのやりたいことを尊重し
てやれていてメンバー間の歯車は噛み合っているように思えました
が、気づかない内に異音を放ちながら狂い始めていったのです。

お互いのやりたい事に対する想いが溢れすぎるあまり、知らず知ら
ずの内にそれぞれの価値観を押し付けていました。

そして、メンバーの一人がそれに悲鳴を上げて、その声を聞いてか
らお互いのやりたい事を発言し辛くなりました。

また誰かを傷つけてしまうかもしれない。

であれば自分のやりたいことを我慢してみんなの意見に耳を傾ければ同好会の為になると思っていました。が、それでもスクールアイドルの神様は私たちに微笑んでくれる訳ではありませんでした。

今の私たちの関係性は、良く言えば譲り合いの精神、悪く言えば自主性が無いと言えたことでしょう。

強い絆が芽生えてるとは言えない私たちにライブでお客さんの心をとくめかせるというのは些か厳しいのではという事で、一旦各々を見つめ直す形として活動休止にしよう。と部長のせつ菜ちゃんから提案がありました。

一時休止ということメンバー全員で合意はしたけれど、今日学校に来てみたらスクールアイドル同好会は廃部になったって連絡が来て理解が追いつきませんでした。

せつ菜ちゃんに連絡を取ろうとしても電話は繋がらずどうしようか悩んでいる時、私はここで出会った友達に相談しようと思いました。

「元氣ないわね、エマ？」

カフェレインボアの一角で気を落としながら待っているとその子はやってきました。

「果林ちゃん……」

青いセミロングの髪でスタイルも良いその子は普段読者モデルをやっているも忙しいけど連絡したらすぐに駆けつけてくれるとても頼もしく優しい女の子。

朝香果林ちゃんは片手にコーヒ―を持ちながら私の向かいの席に座ります。

私は何から話そうか考えていると果林ちゃんから話しかけてくれました。

「……どうするの？ スクールアイドル」

その質問に対して私は途切れ途切れになりながら答えていく。

「……私にも分からないの……。部長のせつ菜ちゃんに連絡を取ろうとしても繋がらなくて……。一時的に活動を休止するだけって言うっ

てたのに……廃部だなんて……」

私は一時休止にすると行ってた情景を思い浮かべて胸の中の想いが込み上げてくる。

果林ちゃんはカフェの外を見ながら私の話を聞いていましたが、何か思う事でもあるのか真剣な顔をしていました。

ですが、私に話しかけるとときにはそれは崩し、いつもの優しい果林ちゃんです。居てくれます。

「そんな顔しないで。力に……なれるかしら？」

「……っ！ うん……!!」

その時の果林ちゃんの顔は凄くかつこよくてどんなことでも解決してくれるんじゃないかと思わせてくれるほどでした。

「部長さんに電話が通じないのなら直接会うしかないと思うの。話に聞く限り正体不明のスクールアイドルとして通っているようだけど、必ずどこかに尻尾は出てるはずよ」

コーヒーを飲みながら果林ちゃんは自分の考えを話してくれる。

こうして、私が中々切り出せない時とかにはいつも傍で助言してくれる。

「そっか……。いつも電話で話そうとしてたけど……そうだよ。絶対この学園にはいるんだもんね」

「ええ。探す方法は幾らでもあると思うの。ただ、一つだけ確認したいのだけけど……」

果林ちゃんはまた真剣な顔になり私の顔を見つめる。

「……他のメンバーも同じ気持ちなのかしら？」

「……それは……そう……だと思う……」

私は同好会メンバーの気持ちについて確信を持った答えを返すことが出来なかった。

それだけ私の中にあるあの子たちのイメージが私の知っているものだと確証が持てなかったということ。

果林ちゃんはそんな私の返答に何も気に掛ける様子もなく考える素振りを見せる。

「……なるほどね……。私たちだけで勝手に動くのもいいけど、どう

せなら味方は多くいてくれた方がいいわ。他のメンバーにも話を聞いてみましょ？ ……つてあらっ……？」

果林ちゃんは話の結論を一旦出した後、カフェの出入り口の方を見て少し奇妙な表情をするのでした。

【輝弥視点】

俺は慎としずくさんと一緒にカフェインボーに来ていた。

いつもの昼なら昼食に何を食べようかと友達同士で会話に花を咲かせていることだろうが、今日の俺たちは違う。

放課後のここであれば人は少ないし、お互いに落ち着いて話ができると踏んだからだ。

実際、ここにはごく少数の人しかいなかった。

窓側に二人の女生徒が座っているが、そこから遠い場所に別の生徒が勉強に利用していたりと使用用途は様々だった。

俺は周囲に人が少ない席を選びしずくさん達を座らせる。

「何か飲み物を買ってくるよ。二人は何がいい？」

「えっ!? いいよ、そんなことまでしなくても…!」

しずくさんは借りを作りにたくないのか俺へ対して咎める様子を見せるが、俺はやめる素振りを見せない。

「いいんですよ。俺たちが勝手に誘ったのもあるんですから飲み物一杯くらい気にしないでください」

「…じゃあ…紅茶をお願いします…」

しずくさんはまだ納得がいていないのか渋々承諾する形で飲み物をオーダーする。

「オツケー。慎は?」

「俺も紅茶でいいか?」

「いいよ、ちよつと待ってて」

そう言い、俺は飲み物を取りに行く。

二人分の飲み物を用意し、各々の前に置いていく。

ちなみに俺はコーヒード。

「じゃあ今日は改めて急に訪問してごめんね、しずくさん」

俺は、連絡もなく突然訪ねてしまったことを謝る。

彼女にも演劇の練習があったのだがそれを邪魔してしまったのが少し心が痛い。

「ううん。気にしなくていいよ輝弥君。むしろ私もあんまり練習に集中できてなかったから良いタイミングで来てくれたなって思ったし……」

「そういえば部長さんにも今日は帰れって言われてたよな？ それってやっぱり……」

「……うん。二人の想像通りだよ。スクールアイドル同好会のこと……」

しずくさんは紅茶を一口飲んだあと、顔を俯かせる。

「ここは俺も想像していたことだから何も疑問に思うことはなかった。」

「そっか。俺達、今日はそのスクールアイドル同好会の事についてしずくさんに聞きたいことがあったの」

「……そうなんじゃないかなって思ってたよ。だって輝弥君は……」

この瞬間、俺としずくさんの思っている事は同じだと悟った。

「……単刀直入に聞かせてもらおうよ。どうして昨日のライブにしずくさんと中須さんは出てこなかったの？ あと……他の近江さんとエマ・ヴェルデさんもだけど……」

「あれは……私たちが決めたことなの」

「しずくさん達が決めたこと……？」

そこから昨日のライブに至るまでのスクールアイドル同好会の実情を知ることになった。

追憶にふける

【しづく視点】

私はカフェインボーで輝弥君と慎君からスクールアイドルの事についてせがまれ、スクールアイドル同好会が発足した時について話すことにしました。

時は今から少し遡ります。

（入学式当日）

「私ってば……。なんであんな人目の付くところで練習をしていたんだろう……」

私は屋上のベンチで顔を赤く染めながら座り込んでいました。

原因は至極単純なことです。

私は入学式があつた日の放課後、大好きな演劇をやりたくて演劇部の練習を見学していました。

そして、そこでの練習を見て胸が熱くなっていくのを感じて、私は自分を抑えきれなくなっていました。

一年生の教室が並んでる階は足音一つ聞こえない程に静かで殺風景が広がっていました。その分私には好都合でした。

ここなら誰にも見られることなく私の好きなことをやれると思つたからです。

周囲に人がいないことを確認し、鞆を近くに置いて目を閉じ私は舞台の情景を思い描きました。

演劇の練習をしている時、私はすごく楽しかったんです。

周りの声があったの雑音としてかき消されるほどに私は夢中になっていました。

そう、周りの声が聞こえて来たので、私の楽しかった時間も束の間のことでした。

何やら踵を返す音が聞こえたので思わず声を出していました。

「……っ!? 誰かいるんですか!?!」

人の気配がしたので呼び止めたら二人の男の子が私の前に現れました。

ミディウムな紺色の髪が線のように整えられて薄紫の瞳が柔らかな印象を与える人。

同じミディウムだが黒色の髪と赤色の瞳が血気盛んな印象を与える人。

どちらも端正な顔立ちで普通の女の子ならば好きになるのは時間の問題でしょう。

ですが、今の私にはそんな悠長なことを考えている場合ではありませんでした。

二人が少し居心地が悪そうな表情をしています。

それはもつともなことでしよう。

帰ろうとしたら知らない女が踊り場で劇をしていたのですから。

それから二人とお話をして紺髪の方が輝弥君、黒髪の方が慎君と知り入学初日からお知り合いになることができました。

慎君はすごく気さくで、すぐに私の事を友人と接するかのよう扱ってくれました。

一方、輝弥君は恥ずかしがり屋さんなのかまだ距離があるように感じました。

でも、慎君にからかわれて顔を赤くする輝弥君はなんだか弟みたいにかわいかったです。

そんな私には弟はいませんがね。

「はう……恥ずかしい……」

演劇の練習に白熱していたがあまり輝弥君たちに醜態を晒してしまい、ベンチの上で横になりながら蹲る私。

もうあの二人と会うのは私の中で軽くトラウマレベルになっている。

良い人たちなのは分かったけれども、あんな出会い方をしたせいで暫く立ち直れそうにない。

「……でも、私の事を変な女と思わずにむしろ応援してくれてるよう
に見えたのは……私の気のせいなのかな……?」

あの時の輝弥君は異端児を見る目ではなく夢を語る人に向ける温
かい目だった。

そうやって見てくれる人もここにはいるんだ。

ここでの出会いをそう簡単に捨てていいものじゃないのではない
かと私は考え始める。

「……うん、いつまでもへこたれてちやいけないよね」

そう自分に言い聞かせながら身体を起き上がらせ、ベンチに腰を掛
ける。

「やっと見つけましたあ♪」

気を取り直そうとしていた時、一人の女の子が私に声を掛けてき
た。

ベージュ髪のセミショートなその子は手を合わせながら私に近づ
いてくる。

「あの……何か御用でしょうか……?」

「御用も何もありません! あなた、先ほど廊下の踊り場で演劇の練
習をしていましたよね?」

「ど、どうしてそれを……!?!」

いきなり目の前の少女に思い出したくないことを掘り返され一気
に顔が赤く染まる。

「あんな目立つところで大声で練習していたら誰でも気になります
!」

正論を言われてしまい私は思わず黙ってしまいました。

でもこの少女は口数が減ることはありません。

「でも、かすみんはそんな貴女の事を馬鹿にするつもりで来たわけ
はないことだけは先に言っておきます」

「えっ……?」

私は少女の言うことについていけず頭が混乱してきました。

そんな私を気に留めることなく少女は話しかけてきました。

「私、かすみんこと中須かすみと言います♪ 貴女は?」

「あつ、桜坂……しずくです」

「なら、桜坂しずくさん！ かすみんと一緒にスクールアイドル、始めてみませんか!？」

「え、ええええええ!？」

中須かすみさんはいきなり私をスクールアイドルとして勧誘してきたのです。

話を聞くとスクールアイドル同好会は今までこの学校になかったこともあり、かすみさんを始めとしたメンバーが集まり立ち上げる事となったんですが、同好会を新規に立ち上げるためには5人以上の参加が不可欠なため、メンバー探しをしていた時に私の事が目に留まり、誘ってくれたとのことでした。

将来女優を目指すために演劇部での活動を心に決めていましたが、スクールアイドルの事を語っているかすみさんを見て、私の知らない世界に対して興味が湧いたのです。

演劇は元々決まっている役を忠実に再現するのが基本ですが、スクールアイドルはその真逆と言っていいでしょう。

何の役柄もないままステージに立ち、思い思いのやり方でお客さんに見てもらおう。

演劇しか知らない私でしたがこの世界での経験はこれからの私にとって有益になるのではないか。

そう確信があったのです。

かすみさんの熱意と私の中の挑戦心が新しい世界の扉を開いたのです。

……もちろん演劇部も掛け持ちということに納得していただきましたがね。

「桜坂しずくです！ この度スクールアイドル同好会に入部させていただきます！ 次第となりました！ 演劇部との掛け持ちということにはなるんですが……決してそれを理由に半端なものを見せないようにしますので、どうぞよろしくお願いいたしますー！」

早速、次の日から同好会のメンバー全員と顔合わせをすることになりました。

私以外の皆さんはアイドルみたいにごく可愛らしくて、正直私にも同じようにできるのか不安ではありましたが自分で選んだ道なのだから負けたくない気持ちで自分を奮い立たせていました。

「こちらこそよろしくお願いしますね。しずくさん！ 演劇部との兼部ということですのでかなりしずくさんの負担は大きいものになると思いますが、私たちも全力で貴女の事を支えますので無理はなさらないで下さいね！」

メンバーの一人である優木せつ菜さんはそう言って、私に手を差し出した。

私はスクールアイドル初心者ですがこんな私を受け入れてくれる同好会に胸が熱くなるのを感じました。

「……はいっ！」

せつ菜さんが屈託のない笑顔で話してくれたので、私も負けじと笑顔で握手に応じる。

「じゃあ、これでメンバーは5人になったからスクールアイドル同好会としてちゃんと申請出来るんだね！」

「うんうん、入学初日からかすみちゃんグッジョブだよ！」

「えへへ〜もつと褒めてくれてもいいんですよ〜彼方せんぱい♪」

エマさんは同好会として正式に活動が出来る喜びを溢れさせ、皆さんは同好会への勧誘を成功させたかすみさんの頭を撫で、かすみさんはそれに対し満更でもない表情を浮かべながら彼方さんに頭を預けていた。

「そうですね！ これからはスクールアイドルとしてライブできるようになるまで沢山練習をやりますので、皆さん頑張って付いてきてくださいね！」

「『おお——！！』」

せつ菜さんの鼓舞により私たちの意欲はさらに高まるのでした。

スクールアイドルの練習は私にとって新鮮な内容ばかりでした。

歌、ダンスの練習、スクールアイドルについての勉強。

歌やダンスは演劇の練習でもやってたから自信はあったのですが、スクールアイドルのそれとは全然違うことを痛感しました。

演劇は主役や脇役を問わずその役を完璧に演じるために仕草や表情を追求しますが、スクールアイドルはステージに立つみんなが主役です。

主役としてお客さんに見てもらうために、私の強みが何か、どういった仕草が私として成り立つのか、それを考えることが演劇とは全く違います。

「しず子、それよりかはこっちの方がいいんじゃない？」

かすみさんは私をしず子とあだ名をつけて呼んでくれる程に仲良くしてくれています。

そして今日もかすみさんにステージの上で映えるポーズや動きを指導してもらっています。

「そっか……。確かにそのやり方もありだね。ありがとうかすみさん」

「それほどでもないよ〜！ かすみの方がスクールアイドルについては詳しいんだからしず子がかすみんに並べるように指導するのも先輩として当然だからね♪」

かすみさんは誇らしげに胸を張る。

実際かすみさんの方がスクールアイドルについては先輩だから教えてもらえることは素直にありがたい。

しかも同級生なのもあって相談しやすいのも私としては嬉しい。

彼方さんは指導中にふと寝ちやうし、エマさんは相談していると温かなオーラに飲まれ話が脱線して本来の目的を忘れてしまう。

せつ菜さんもかすみさんと同じように相談したら親身になって聞いてくれるが、かなり忙しそうにしているので声をかけづらいのです。

そんなこんなで私はスクールアイドルをやる上でかなり成長しているのではないかと思ってきました。

グループとして皆さんとの連携も上手くいっているように感じま

す。

「最近、しずくちゃんすごく伸びてるよね♪」

「エマちゃんも思う〜？ 彼方ちゃんも同じことを感じてるよ。周りを良く観てくれるからすごく動きやすいよ♪」

「ほ、本当ですか？ エマさん、彼方さん」

とある日、練習が一通り終わり休憩しているとエマさん達が私のことを称賛してくれました。

私としては皆さんに迷惑をかけまいと必死にやっているだけなのですが、他の人から見たらどうやら良く見えてるみたいです。

「まあかすみんにはまだ及ばないですけど、確かに魅せ方がわかってきてる感じがしますう」

かすみさんも自分の方が上と言いながらも褒めてくれます。

「そんな、私は皆さんに必死に食らい付いているだけなのでまだまだです。それに自分の強みというものを自分で掴めなくてはいけませんから」

「うくん、真面目だね。でもそれもしずくちゃんらしくて良いと思うよ」

四人で駄弁ついているとせつ菜さんが屋上に戻って来ました。

「なんだか目がキラキラと輝いています。」

「皆さん、ここにいたんですね！」

「せつ菜先輩どうしたんですか？ すごく嬉しそうですけど？」

「それはそうです！ 今日皆さんにビッグニュースを伝えるために探していたんですから！」

「ビッグニュース？」

エマさんは何のことやらといった表情で首をかしげる。

「ふっふっふ。聞いてください！ なんとこのスクールアイドル同好会で……ライブをやる事になりました!!」

「「「ええ———!?!」」」

突然の発表に私たちは驚きを隠せませんでした。

ここから同好会崩壊の一途を辿るとはつゆも知らず。

同好会の崩壊

【しづく視点】

せつ菜さんからライブ開催の知らせが届いてから、私たちの熱意はさらに飛躍するのでした。

ライブに向けて、皆さんのやりたいことがあふれ出てきて議論が止まりませんでした。

「ですから、ここは皆さんが一人ずつ順番にダンスをして曲を引き立てていくべきです！」

「いえー、ここは全員でダンスを披露するのが曲との一体感も相まってお客さんも盛り上がってくれるはずですよ！」

披露曲のパフォーマンスについてせつ菜さんとかすみさんが火花を散らしています。

二人ともスクールアイドルに対しての熱は人一倍強いので私は二人の意見に耳を傾けることしかできません。

「まあまあ、二人とも。熱くなりすぎててもいけないから一旦小休止しよ？ 彼方ちゃんがお菓子を作ってくるから……」

「そんなことをしている時間はありません！ 今の状況ではまだステージに立てるレベルとは如何せん言えません！ 彼方さんもいつも寝てばかりいますが、そうは言ってられない状況だと分かっていますか!？」

「せつ菜ちゃん、そこまでにしよ？ 確かに私たちはみんな、まだ見てくれる人たちの心を温かく出来るようなレベルにはついてないけど、それでも無理をしないように身体を休めることも重要だよ？」

せつ菜さんとかすみさんの論争に收拾がつかない状況を、見ていられなくなつた彼方さんが仲裁に入りますが、せつ菜さんは止まりません。それどころかまだ技量が足りていないと彼方さんにも牙をむきました。

エマさんも間に入ることでせつ菜さんもひとまず収まりましたがそれでもせつ菜さんの顔からは焦りや不安が拭われることはありませんでした。

「……分かりました。では少し休憩を挟みましょう。10分後、別のパートについての練習を行いますので準備だけしておいて下さい」

せつ菜さんはそれだけ言うとその場を立ち去って行きました。

「なんかせつ菜先輩、やけに熱くなりすぎてませんか？」

「まあ、それだけライブに向けて気持ちが高ぶってるってことじゃないかな？」

かすみさんは先ほどの論争を根に持っているのか少し嫌味を込めて私たちに話しかけます。

彼方さんがかすみさんの頭を撫でながら慰めています。私も同じような感覚がありました。

せつ菜さんは自分の大好きを広げたい、みんなの大好きを共有したいというスタンスの元、スクールアイドル活動を行っています。

そのために自分の大好きを曝け出してみんなに認めてもらおうとしているのです。

しかし、ここ最近のせつ菜さんは些か厳しすぎる気がします。

本番が近くなり気が急いでいるのもあるとは思いますが、それでも自分のやりたいことを押し付けてるのではないかと感じてしまいます。

でもせつ菜さんの言う通り、私たちの実力はまだまだステージで見せられるものではないということも理解しています。

練習を今よりも沢山こなして、より見て貰えるようにしないといけないことは私も分かっているつもりです。

「でも、せつ菜さんの言う通り今よりもっとレベルアップしないとスクールアイドルとしては未熟なままです。かすみさん、ここは踏ん張り時ですよ」

「しず子がそう言うなら……もう少し頑張るけどお……」

かすみさんは釈然としないながらも同意してくれる。

きつとせつ菜さんも焦りで少し周りが見えていなかっただけ。

一度頭を冷やせば、またいつも通りの明るいせつ菜さんに戻ってくるはず。

それは私だけの思い込みに過ぎませんでした。

「はあっ……はあっ……はあっ……！」

「かすみさん、足を止めないで下さい！　まだまだ練習は続いていますよ!!」

せつ菜さんが戻ってきたらすぐに練習が再開しました。

頭が整理されたのかと思ったのですが、休憩前と練習のペースが落ちることはありません。

それどころかより激しさを増しているような印象がありました。

私たちはせつ菜さんから飛んでくる喝を受けつつ、それに応えるように練習をこなしていました。

しかし、皆さんの疲労も溜まりつつあったのか少しずつ返事が出来るような状態ではなくなっていたように感じます。

そんな中で最初に目を付けられたのはかすみさんでした。

かすみさんは元々私たちの中でも体力があるとは言えませんでしたので、ペースの上がる練習を重ねる内に少しずつダンスの精度が落ちていきました。

「……っす……少し休憩……させて下さい……」

かすみさんは耐えられず手を膝に付け息を整えます。

肩で息をするかすみさんを私は横で水を差し出したり、背中を撫でていました。

「休憩は先ほど取りました……！　今は時間が惜しいと言ったじゃないですか！」

それでもせつ菜さんは止まることはありません。

本人としては十分に休憩を与えたと思っっているようでしたが、私としてはここまでの練習量をこなすための休憩量だとは思えません。

「せつ菜ちゃん、やっぱり練習量が多いよ。一旦はここまでにしよう？」

彼方さんも黙っていられないと口火を切りました。

少し語気が強くなっているように感じます。

「そんなことはありません！　スクールアイドルが大好きなんですよ？　やりたいんでしょう？　こんな事で根を上げるようでは大好

きを皆さんに届けることはできませんよ！」

せつ菜さんの発言に私たちは言い返すことが出来ません。

せつ菜さんの言いたいことも理に適っていますし、実際私たちが不足していることも自覚していたのでどう反論すればいいのか分かりませんでした。

「でもっ……!!」

そんな中、かすみさんが声を上げました。

「でもっ……こんなの全然可愛くないです!! 大好きを届けるとかかっこいいを見せるとかではなくて、かすみんはもつと可愛いのがやりたいんです!!」

かすみさんの発言にせつ菜さんははっとしていました。

私もかすみさんの発言に頭を金づちで叩かれたような衝撃が走りました。

かすみさんは自分のやりたいことがしつかり固まっています。

かすみさんは自分の可愛いをみんなに見せたいという事をコンセプトにしていますが、せつ菜さんのコンセプトと相反していることを自分の言葉で言い放ったのです。

私は自分のやりたいことが定まらず、皆さんの意見に付いていくのみでしたのでせつ菜さんの意見の正しさに判断が付かないまま反論が出来ませんでした。

そんな私をよそにせつ菜さんはかすみさんの発言に反論します。

「なっ……!」 それでは私が周りを見れていないみたいじゃないですか!! 私はかすみさんのやりたいことも尊重したうえで……!」

「あんなので尊重したなんて言わないで下さい! かすみんの今の気持ちも現に分かっていないじゃないですか! その発言が周りを見れていない証拠なんです!!」

かすみさんも目に涙を浮かべながら反発します。

二人の苛立ちはスクールアイドル愛と同じくらい風船のように大きく膨らんでおり、言葉という針で開けられた穴から空気と共に吐かれます。

一度空いた穴は塞ぐことが出来ないように二人の口論は留まるこ

とを知りません。

私とその空いた穴をどうふさごうか迷っていると、

「もうこんな喧嘩やめようよ!!」

普段の声からは想像もつかない程、エマさんが大きな声でその場の空気を止めた。

「お願いだから、仲間同士で争うのはやめようよ……」

「エマさん……」

「エマ先輩……」

空気が固まったことで風船から空気が漏れることも風船内に戻ることもありません。

「……私はっ……」

せつ菜さんはその場にいらなくなり屋上から立ち去ろうとします。

「せつ菜さん……!」

「今日の練習は……これで終わりにします……。皆さん、気を付けて帰って下さい……」

そう言い残し、足早に屋上からいなくなり扉の閉まる音だけが大きく響くのでした。

「……つうう……ひつく……」

かすみさんは自分の中の線が切れたのか目に溜まっていた涙がこぼれ、そのまま泣いてしまいます。

私は、そんな友人の横にただ立つことしかできませんでした。

「せつ菜ちゃんの所に行ってくるから、エマちゃんは二人のこと見てて?」

「うん……。ごめんね、いきなり声を荒げて……」

「気にしないの。むしろエマちゃんに感謝しなくちゃだよ。彼方ちゃんには止めることが出来なかったから……」

彼方さんはそう言い残し、せつ菜さんを追いかけに校内に戻るのでした。

「かすみちゃん……大丈夫?」

エマさんはかすみさんの前に跪き、指で涙を拭きます。

「ぐ……ぐめんなさい……こんな事で泣いちゃいけないのに……」
「気にしなくていいよ。かすみちゃんもいっぱい抱えてたんだもん。
こぼれちゃうのは仕方ないから……」

エマさんはまるで幼い妹をあやすようにかすみさんに優しく微笑みかけます。

私もこういう風に慰められたら逆に涙が止まらないかもしれないです。

「しずくちゃん、今日はもう帰ろっか。しつかり身体を休めて明日からまた頑張ろ？」

「……分かりました」

そうして、私たちは練習を終え、各々の帰路に着くのでした。

昨日までの同じ、楽しかったあの日々に戻ることを信じて。

次の日、いつも通り朝練を始めようと早めに学校に着きましたが、部室でかすみさんと会いました。

「あつ……しず子……。おはよう……」

「かすみさん、おはよう。もう大丈夫？」

「……全然だよ！ むしろ昨日で言いたいことは言えたから、今日から気持ちを切り替えた新しいかすみんが誕生するんだから！」

かすみさんは私を見て一瞬固まったがそんな姿を見せまいとすぐにいつもの調子に戻った。

かすみさんの笑顔は太陽みたいに眩しく輝いている。

こんな太陽がいてくれるからこそ、スポットライトを浴びないと輝けない私も同じように光ることが出来ます。

「おはよう、二人とも♪」

「おおく？ かすみちゃん、昨日と打って変わって随分とご機嫌だねく？」

かすみさんの声を聞き、エマさんたちが部室に顔を覗かせます。

お二人も顔色は良さそうで安心しました。

「エマさん、彼方さん、おはようございます」

「彼方先輩、今日からのかすみんは一味違うんですから！ もうせつ

菜先輩に負けたくないですからね！」

いつも通りの部活が始まるうとしていたが、一つだけいつもと異なる点がある。

「そういえばせつ菜先輩は……？」

「うん……昨日、あの後せつ菜ちゃんを追いかけたんだけど、どこにも見つからなくて……。鞆も無かったし闇雲に探してもだめだなんて思っ、メッセージだけは残したんだ。せつ菜ちゃんだけが悪いんじゃないからね？ って」

「……………」

「あれっ、せつ菜さん」

彼方さんから話を聞いているとせつ菜さんが部室に入ってきてきました。

せつ菜さんも気持ちを新たに來たんだと淡い期待を寄せていましたが、硬い面持ちを見る限りそういうった様子ではなさそうでした。

「皆さん、おはようございます」

「おはよう、せつ菜ちゃん♪ 今日はどうな練習から始める？」

エマさんはそんなせつ菜さんにお構いなしに話しかけます。

「その前に、皆さんに大切なお話があります」

「大切なお話？」

いきなりの発表に彼方さんは何のことやらと首を傾げます。

「スクールアイドル同好会についてですが……活動休止にしたいと思えます」

あまりにも唐突な宣言がせつ菜さんから下され、部室に咲いていた沢山の花が無残に散っていくのをただただ感じ取ることしかできませんでした。

斯くして同好会は

【しづく視点】

「スクールアイドル同好会についてですが……活動休止にしたいと思
います」

せつ菜さんは石造のように表情が変わることなく真剣な顔でそう
宣言しました。

唐突な出来事に私たちは目を丸くしていました。

「せ、せつ菜ちゃん……ど、どういうこと!？」

「た、確かに昨日は言い過ぎましたけど……それでも活動休止にする
意味はないんじゃないですか!？」

彼方さんがせつ菜さんの肩を握り、焦りながらもその目に訴えかけ
る。

かすみさんも自分の発言について弁解しながらせつ菜さんに訴え
かけます。

「お二人とも。逸る気持ちはわかりますがまずはせつ菜さんのお話を
聞きませんか?」

「そうだね、せつ菜ちゃんが理由もなくそんなことを言うとは思えな
いもんね」

私とエマさんで二人を諭し気を落ち着かせ、せつ菜さんへ向き合
います。

「ありがとうございます。いきなりこんな話をしてすみません」

せつ菜さんは私たちに目を合わせ軽く一礼すると話を再開します。

「今回、このような決断をしたのは他でもありません。今一度、自分を
見つめなおす必要があると判断したからです」

「自分を……見つめなおす……?」

エマさんは理解が追いつかないのか頭を悩ませます。

「私は……皆さんの大好きややりたいことについて何一つ理解できて
いませんでした。自分の大好きを見せられるんだと張り切ったはい
いものの……それしか私の目には入っていませんでした」

せつ菜さんは自分の過ちを思い出しながら想いを吐露します。

顔は先ほどから変化していませんが、そこから放たれる言葉は哀愁が漂っているように感じました。

「自分が楽しくやれていれば応援してくれる皆さんも同じように楽しくいてくれる。皆さんが心の底で何を考えているのかもすっかり理解しようとせず、自分の道を走り続けようとしていました」

せつ菜さんの表情が少しずつ苦痛に満ちていきます。

それだけ自分の中の正義感が憎らしく思えてしまうという事でしょうか。

「ですので、私は改めて自分のやりたい事は何かを考え直す時間が欲しいと思ひまして、そのために私自身の活動休止を……」

「せつ菜さん……」

私はせつ菜さんになんと言葉を掛ければいいかわからなくなりただ見つめることしかできなかった。

せつ菜さん自身の葛藤を聞くことが出来るのはこれが初めてだからこそ彼女の悩みに対して誠実な回答が出来る自信がないのだ。

「せつ菜ちゃん、話してくれてありがとう。せつ菜ちゃんがそうしたって言うなら私は止めないよ」

エマさんがせつ菜さんの手を握り、優しく目を向けながらせつ菜さんの想いを受け止めます。

こうして他人の心に優しく寄り添ってあげられるのはエマさんの凄いとこです。

「でもせつ菜ちゃんだけがそれを背負う必要はないんじゃないかな？」

「それはかすみんも同意見です！ かすみんもせつ菜先輩だけじゃなく皆さんのやりたい事をちゃんと分かってなかったですし……」

彼方さんとかすみさんもエマさんに続く形でせつ菜さんへフォローを掛けます。

二人も今回のトラブルについてはせつ菜さんのみの要因ではないと分かった上で連帯責任と感じているようです。

「皆さん……。いえ、それでもこれは私の采配の問題です。皆さんはしっかりと私の意見に付いてきて下さっていたんです。責任は私一

人で……」

「せつ菜先輩、そんなの全然かつこよくないです！　せつ菜先輩もかすみ達と同じ女子高校生です！　部活動の顧問とは違ってミスはあつて当然なんです！」

「そうだよ！　それでせつ菜ちゃんのみの責任にするなんて私は絶対に出来ないよ！」

せつ菜さんが自分の能力を卑下しているがそれをかすみさんとエマさんが真つ先に否定します。

「彼方ちゃんたちにも責任はあるから、一度考え直す時間を作つてまたみんなが集まる？」

「そうですね。今の状態ではしつかりとした方針も決めることが出来ないと思うので練習は一旦お預けにしてもいいと思います」

「そうすると今度のライブはどうしましょうか？」

かすみさんはライブの事も心配する。

それもそのはずです。

初ライブを来週に行う体で進んでいたのかすみさんとしてもこれを目標にここまで走ってきたからです。

「今の状態では満足のいくライブは見せられませんので私の方でライブ中止の連絡をしておきます」

「分かりました。せつ菜さん、お任せします。また時期を見てライブは再開しましょうか」

ライブの調整についてはせつ菜さんが詳しいのでお任せすることになりました。

ここでの悔しさを胸に、次でより良いものを作れると信じて。

同好会の活動を休止すると宣言してから一週間後、翌日を本来ならライブに備えていたのですが、中止にするという事で練習はありません。

今日は演劇の練習もありませんでしたので、そのまま帰ろうとしたときに後ろから声を掛けられました。

「あつ、しずくちゃんー！」

そこには入学初日にひよんなことからお知り合いになった輝弥くんの姿がありました。

いつもなら慎くんも一緒に居ましたが今日は不在のようです。

「……あつ……輝弥くん……」

正直、今日はそのまま帰りがかったのですがそうは問屋が卸してくれませんでした。

私は無理やり笑顔を作って輝弥くんに向き合います。

「聞いたよ、明日ダイバーシティでお披露目ライブやるって！」

「あつ……そうなんだ……」

輝弥くんの言葉に私は一瞬思考が停止しました。

(輝弥くんがライブの事を知っているのは良いとして……どうして中止って話を聞いてないの……?)

輝弥くんの事だからライブについての話を人伝で聞いていると思っただけですが、本人の目の輝き具合からしてどうやらそんなことは知らなそうです。

「しずくさん……どうかしたの？」

「実はね……」

私は輝弥くんにライブ中止の事を話そうとしたが一つの可能性が頭を過った。

(せつ菜さんは……この時間で何か考えているのでしょうか……)

輝弥くんがライブ中止の話を知らないようにまず誰にも伝えてないのかもしれないという考えが私の中に浮上しました。

実際、同好会の活動を休止する前はライブ開催のチラシを校内で見えていたが、活動を休止してから今日までの間でライブ中止の連絡を見た覚えがありません。

ライブ調整はせつ菜さんに全てをお任せしていましたが、現時点で彼がライブ中止を知らないという事はせつ菜さんは活動休止前に何かをやるうとしているのではないかという憶測が出てきました。

「……明日のライブが怖くてね……。私の気持ちがみんなにちゃんと伝わるのかなって……。不安になっちゃったの……」

私は真実を輝弥くんに話さず、ライブに対しての想いを吐露しまし

た。

こんなことをしても後悔するだけなのに、私は自分の心の弱さが恨めしく感じました。

「確かに初めてのライブで全くの未体験の世界だもんね。でも、大丈夫。しずくさんの想いは絶対届くよ。不安になっちゃうのは仕方ないから、それ以上に楽しむ気持ちを忘れずにしずくさんのやりたいことを見せてよ！」

私の心境にはお構いなしに輝弥くんは純粹な眼差しで私を見てきます。

輝弥くんにこんな顔をさせるのがこのタイミングという事が余計に私の心を痛ませてきます。

「輝弥くん……ありがとう。おかげで元気が出てきたよ。明日のライブ、頑張るね。それじゃあ」

このまま彼と話すと自分の中の想いがあふれ出てきそうになったので、一言ライブについての意気込みを語り足早に去ることにしました。

今の私が、彼にはライブ前の武者震いとして映ってほしいと切に願いました。

そして、私の姿が彼から見えなくなったことを確認して、密かに校舎の陰で泣いていました。

「はあ……ごめんね……輝弥くん……。私だって……楽しみたかったよ……」

彼がまつすぐな笑顔で私を励ましてくれたのに、それを溝に捨てた。

明日のライブを見に来ると言ってくれたのに、それを無残に切り捨てた。

暫く彼に会うのはやめておこう、そう私は心に誓ったのでした。

そして、ライブが明けた翌日、気持ちを新たにスクールアイドル同好会に顔を出そうとした時、一つの噂話を小耳にはさみました。

それは私が絶対に聞きたくなかった噂。

「スクールアイドル同好会……廃部になったって話だよ？」
それを聞き私の中に映し出されていた同好会の情景が霞んでいく
のを感じました。

仄かな光明

【輝弥視点】

しずくさんから同好会の廃部になるまでの経緯を話してもらい、話を聞く前は外では青空が広がっていたのに今では夕日がカフェ内を静かに照らしていた。

「なるほど……。スクールアイドル同好会はそうやって廃部になったんだね……」

しずくさんから事情を聞いて、点々と宙に浮いていた情報が一つの線で結ばれ納得がいった。

「うん……」

しずくさんは改めて廃部になった事実が脳裏を過つたのかまた一段と落ち込んでいるように見えた。

「……でもさ、今の話を聞いても俺はしずく達が活動をやめていい理由にはならないと思うんだが？」

慎は若干不貞腐れるように俺たちに問いかけた。

「そうだね、それは俺も同じ意見だよ。せつ菜さんはあんなすごいライブをしてこれからの活動をすごく楽しみにしてたのに……それがこうなるなんて……。こんな強引なやり方、しずくさん達に対して失礼だよ」

俺はそう言いながら机の上に置いてある拳の握る力が強まる。

確かに同好会のやり方が各々のやりたいこととかみ合わずに衝突してしまうのは仕方ないと思う。

でも、それは優木せつ菜さんによって作られたものでみんなの意思を尊重し切れてなかったせつ菜さんに原因があるのではないか。

せつ菜さんだけならともかく他の人も活動休止、あまつさえ同好会が廃部になるというのはおかしいと思う。

「輝弥くん……慎くん……」

「輝弥ならそう言ってくれると思ったぜ。でもどうして優木せつ菜さんは同好会にはライブを中止するって言いながら、あの時ライブをやったんだらうな？」

慎は至極当然な質問をする。

同好会には中止を連絡しながら自分一人でライブをそのまま実施する。

その行為に俺は優木せつ菜さんに対しての不信感を覚えてしまうくらいしずくさん達の事を冒瀆しているように思えた。

「……分からない。どんな回答が返ってくるのかも皆目見当がつかないね」

「まあ、それを実際に聞かないと分からないし、一度、その優木せつ菜さんを問いただす必要があるんじゃないか？」

「問いただす……って言うのと横暴に聞こえるけど、直接会って話を聞くって言うのは必要だと思うな」

「横から失礼。なんだか気になる話をしてるわね？」

慎と同好会廃部の真偽を確認するための計画を練ろうとしていた時、とある二人組の女生徒が声を掛けてきた。

一人は青色の髪をボブに整えて目鼻がくつきりとしており、背が高くモデルみたいにスタイルが良い人。

もう一人は赤茶色の髪をお下げの三つ編みで纏めている。

また青髪の方と同じくらいにスタイルは良く、顔にはそばかすがあ
るけれどもおっとりとした雰囲気があるのを強みに変えているように
感じる。

二人とも胸元のリボンが緑ということもあり三年生であることが
伺える。

「貴女方は一体？」

「……エマさん……」

「えっ？ エマさんってあの同好会に入ってたエマ・ヴェルデさん？」
俺は二人の正体が分からず聞こうとしたがその回答を待つまでも
なくしずくさんが答えを言ってくれた。

慎はその回答に一瞬眉が動いたがすぐに納得がいったのかそれ以
上の反応をすることはなかった。

確かに今は同好会の廃部について話を聞いてたのもあって、声をか
けてこなかった側をちゃんと見れていなかったが改めて見ると以前

にチラシで見た姿がそこには立っていた。

慎の問いにエマさんは無言でただ頷くだけだった。

「そう、この子はスクールアイドル同好会にいるエマ・ヴェルデ。そして私は朝香果林。この子の友達よ。貴方達の話に少し興味があつてね」

朝香さんは俺たちの顔を一通り見渡して静かに微笑む。

絵になるようなその微笑みに俺は少し心拍数が上がるのを感じる。

「話……というと？」

俺は平静を装っているが、内心緊張が走っている。

「ふふっ、そんなに堅くならなくてもいいのに。別に貴方達に食って掛かろうとしてるわけじゃないんだから」

俺の心を見透かすように目を細めながら語りかけてくる。

身体を弄られるような感覚を覚えてしまうのは気のせいだろう。

「果林ちゃん、からかうのはそこまでにしよ？」

「……そうね。その子の反応が可愛くて、ついからかいたくなっちゃったわ」

「……お前、異性からよくからかわれるな……？」

「……茶化さなくていいよ」

慎が俺に囁くがそれを一蹴する。

「しずくさんといい朝香さんといい、俺も好き好んでそんなことを言われたいわげじゃない。」

「それで……エマさん達は一体どうしたんですか？」

「……結論から話せばやりたい事は貴方達と同じことよ」

「埒が明かないと思い、しずくさんが話を切り出すと朝香さんはそれに真剣な眼差しで答える。」

一瞬でこの人の周囲に纏われた空気が変わり戸惑いが隠せない。

「……どういふことだ……？」

慎は理解が追い付かず混乱しているようだ。

「やりたい事……せつ菜さんの真意を探るといふ事ですか？」

「話が早くて助かるわ。君みたいに物分かりのいい子、お姉さんは好みよ？」

「果林ちゃん」

俺が必死にこの人の考えを汲み取った答えを出したのに朝香さんはそれでもからかうのをやめない。

またエマさんに制止されるが多分この人はこういった性分なんだろう。

「私もね、突然同好会が廃部になるって連絡が来てからこの状況を受け入れられずにいたの。それを果林ちゃんに相談してたんだ」

「エマさん……そうだったんですね。そう思っているのは私だけではないんですね……」

「私だってスクールアイドルが大好きでこの同好会に入ったんだもん。そう簡単には諦められないよ」

しずくさんは俺達と話していた時は不安な表情を隠しきれていなかったが、同じ同好会メンバーであるエマさんがその心情を吐露することではっと安心したように見える。

こう見るとエマさんはその印象に変わらず、その優しいオーラで周囲の人を包みこむ能力があるように感じた。

「エマさんと一緒にいるという事は朝香さんもスクールアイドルに関して詳しいんですか？」

「私はそれには興味ないわ。エマが困っているようだから友達として何か力になってあげたいと思っただけよ」

朝香さんは俺の問いに特段興味がなさそうに返事をした。

その素っ気ない様子を見るに本当に友人としての親切心からエマさんの事を助けてあげたいようだ。

「友達想い……なんですね」

「べ、別にそんなんじゃないわよ」

「ふふっ、意外とからかわれるのは苦手なんですね？」

「うっ、貴方も大概ね」

俺の発言にそっぽを向くのを見て俺と同じタイプの人間だと分かり、からかってみると本当に同じリアクションをする。

この人とは意外と馬が合うのかもしれない。

「輝弥もそこまでにしとけよ、話が進まないから」

ついには慎にも諭されてしまったので本当に冗談はそこまでにしておこう。

「ごめんごめん。それで、お二人は僕たちの味方……という認識で考えてよろしいんですか？」

「それはこの子に聞いて。味方かどうかはこの子の意見を聞いて判断してもらえばいいわ」

朝香さんはそう言うのとエマさんに顔を向け、回答するように促す。

「私は……やっぱりこのまま諦める事なんて出来ない。だからせつ菜ちゃんの所に行つてスクールアイドルをもう一度やりたい！」

「……なら僕たちと考えることは一緒ですね。ね、しずくさん？」

「うん、エマさんも一緒に来てくれるのでしたら心強いです」

これからせつ菜さんを訪ねようとしているのだ。

万が一の事態を備えて味方は一人でも多くいてくれた方が心強い。

朝香さんはエマさんの事を気に掛けているからか一緒に来てくれるようだ。

スクールアイドルに関しては知らずとも、頭の切れる印象を持ったこの人なら一緒にいて頼もしい事になりはしないだろう。

「にしてもどうして貴方達もそんなに張り切っているの？ 元々のスクールアイドル同好会にはいなかったんでしょう？」

朝香さんはエマさんからは5人のみの同好会の話しか聞いていないから俺たちの存在に疑問を抱いていた。

「確かに僕は元々スクールアイドルの事を何も知りませんでした。ですが、優木せつ菜さんのライブを見て音楽でここまで沢山の人を魅了出来るんだってことに感銘を受けたんです。僕も自分の音楽を使つて何かやってみたいなという願望がありました。ここならそれを叶えることが出来るんじゃないかって思ったんです」

「輝弥くん……」

朝香さんからの質問に俺は曇りっ気のない答えを放つ。

堂々と言い放つその姿は自分のこれからの道に何があるとも決して折れる事のない鋼の意思がそこにはあるのではないかと思わせるほどのものだった。

しずくさんも俺のその姿を見て、羨望の眼差しを向けていた。

「ふふっ、素敵な動機ね。僕はってことはそっちの黒髪の子はまた違うのかしら？」

果林さんはそう言いながら慎を一瞥する。

「俺は……輝弥の夢を手助けしたくて一緒に行動してるだけです……。スクールアイドル同好会には……入るつもりは……ありません……」

慎は先ほどの勢いがなくなり途端に元気がなくなる。

目も果林さんに合わせようとせず、それは果林さん以外の何かからも逃げているようだった。

（慎……。どうしてスクールアイドルの話をするといつもそんな悲しい顔をするんだ……）

「ふくん。つまりは私と同じ、と考えていいってことね。まあ仲間が多いに越したことはないわ」

慎に対しての疑問が頭の中を巡っているが果林さんの声がそれを遮断した。

「そうだね、改めてよろしくね。ええっと……」

エマさんは挨拶をするが突然考え込むような動作をする。

そういえば自己紹介をしていなかったことを完全に忘れていた。

「あつ、すみません。自己紹介が遅れました。僕は巴 輝弥。彼は

鈴川 慎と言います」

「鈴川 慎です……。自己紹介が遅れてすみませんでした」

「あらっ、別に気にしなくていいわよ。私たちも他の事に頭がいつぱいでそれに頭が回ってなかったんだから」

「うんうん。気にしなくていいよ♪ これからよろしくね、輝弥くん、慎くん♪」

先輩に対して名乗っていないことを自責の念に駆られていると果林さん達はそれを払ってくれる。

むしろエマさんはそこから温かな笑顔に向けてその淀んだ心を浄化してくれるようだった。

あまりにも曇りのない笑顔に俺は思わず頬を赤く染め目を背ける。

「うっ……よ、よろしくお願いします……」

「あら〜？ 輝弥君ってエマの笑顔には弱いよね〜？」

「ふふっ、輝弥くんは相変わらずかわいいね」

これ見よがしに果林さんは俺をからかってくる。

それに今まで暗い顔をしていたしずくさんも笑顔になって乗っかってくる。

「しずくさんまでそう言わないでよ……！ 余計に恥ずかしくなってくるし……」

俺はこの人たちといると調子を狂わされてばかりだが、それでも今までよりも雰囲気が段違いに良くなっていることだけははつきりと感じる事ができた。

この人たちとなら一緒に夢に向かって歩くことが出来るかもしれない、そう思っていた。

俺はこの良い雰囲気のまま同好会復活の狼煙を上げられると思っただが、俺がこういった弄り方をされたときに調子に乗る奴がここにいる事を完全に失念していた。

「さすが、輝弥はそこいらの女の子以上に赤くなりやすいな」

「……ふん……！」

俺はいきなり元氣と威勢を取り戻した慎に無性に腹が立ち、思わず肘打ちをかます。

それが打ちどころが悪く腹にクリーンヒットするのだった。

「うっ……!?!? ちよっ……腹は……まずいだろ……！」

「……自業自得だ……」

慎はあまりの激痛にその場で蹲る。

「ぷっ、ふふふ。貴方達って面白いわね」

「あはは、本当だね。より賑やかになって嬉しいな♪」

「ふふっ、私も同感です」

そんな俺たちのやり取りに他のお三方は漫才を見ているかのようにならずと笑っているのだった。

再結集

「ううう……まだ腹が痛む……」

慎は肘打ちされたお腹を優しくさすり、痛みを和らげようとする。

「全く……慎は少しは反省してくれ」

「ああ、悪かったよ……」

慎はこいつには叶わないやと言わんばかりに大きなため息をつく。

「ところで朝香さん、せつ菜さんに会いに行く方法は何か考えているんですか?」

「果林でいいわよしずくちゃん。輝弥君と慎君も私に構わず好きに呼んでいいからね?」

しずくさんの堅い呼び方にむず痒さを覚えたのか果林さんは呼び方を改めるように言う。

俺達にも同じように声を掛けてくれるので、この人の姉御気質な振る舞いに胸が温かくなる。

「分かりました、果林さん」

「正直、知り合って間もない上級生に対して名前で呼ぶのは忍びないですが……。お言葉に甘えさせていただきます。果林さん」

「もう、輝弥君はしずくちゃん以上に堅いわね? それじゃあ女の子は捕まえられないわよ?」

「……余計なお世話です」

俺は上級生に対しての向き合い方を正直に答えただけなのにどうしてこの人は俺に対してからかうという事以外が出来ないのだろうか。

「……やっぱり、輝弥って結構からかわれやすいんじゃないのか……?」

「……まだ足りないか?」

「いや、割と真面目な話だよ!」

また慎は性懲りもなく言ってくるので思わずもう一度拳を構えるが、慎は両手を大きく振り弁明する。

「でも、輝弥くんって慎くんと違っていい反応をするから少しからかいたくなるのは分かるかもしれないな」

「しずくさん……貴女までこっちの話に来なくていいのに……」

「……あれ？ 俺、さりげなく冷たい人間扱いされてる？」

弁明も束の間、しずくさんも俺の対応に関して物申してくる。

別に悪いことは何一つしてないのに、これが俺の性分なんだろうか。

そして、俺の視界の端でやんわりと言葉のナイフで刺された憤が少し元気をなくしている。

しずくさんも他意があって言ったわけではないが、地味に傷は深そうだ。

「……せつ菜ちゃんに会う方法は考えきれてるわけじゃないけど……あの子の元へ行く前に折角ならもう一人の子も今の気持ちを聞いてもいいんじゃないかしら？」

「もう一人……というところ……？」

「彼方ちゃんのことだね、果林ちゃん」

エマさんは果林さんの意図を読み取ったのかすぐに納得がいったように返事をする。

確かに、彼方さんもスクールアイドルをやっていたのだから今の彼女らと同じように思うところはあるのでは無いかと果林さんは考えた。

やはり、この人は同好会外の人間だから客観的に物事が見れるすごい人だなとつくづく思う。

「そう。彼方は私と同じライフデザイン学科だし、顔馴染みでもあるから少しは彼女のいる場所に当てはあるわ」

「そういえば彼方さんってどういう方なんですか？」

近江さんの事も仲間に引き入れようと考えてはいるようだが、俺と慎はその近江さんの事を何も知らない。

もし近江さんもまた同好会に戻ってくれるというのなら先に彼女の事を知っておきたいと思い、近江さんについての特徴を事前に仕入れようと試みる。

「彼方は……簡単に言えば眠り姫ね」

「……はい？」

果林さんの言っていることが理解できず、俺は思わず聞き返してしまふ。

「彼方はいつも寝てることが多いの。授業中は起きてるらしいけど、お昼休みや授業間の休憩の間は昼寝しているのが多いことで有名なのよ」

「確かに、スクールアイドルの練習をしている時も彼方ちゃんはいつも私のお膝で寝てたからね」

「そ、そうなんですか……」

果林さんとエマさんは井戸端会議のような雰囲気を出しているが、俺と慎はただただ戸惑いと苦笑いが出るのみだった。

「……輝弥くんと慎くんに誤解の無いように言っておくと、彼方さんはそれでもスクールアイドルの練習は真面目にこなすし、レベルは高いんだよ？」

「……それはそれでちよつと会うのが楽しみかも……」

チラシで見た感じはエマさんとはまた違ったおっとりとしたお姉さんというイメージだが、この偏見からどのようにイメージが変わるのが若干楽しみになっている自分がいる。

「その近江さんは、またどこかで寝てるってことですか？」

「保健室か校庭のどっちかの可能性が高いわね。多分電話しても出ないから折角だし歩きながら探すってことでいいんじゃないかしら？」

保健室なら場所は特定できるが校庭となるとこの広い学校内ではポイントを絞ることなど至難の業だが、果たして果林さんは何を根拠に歩きながら探すとしたのか、俺は頭を悩ませるのだった。

探し続け三十分経っただろうか。

まだ夕日はかろうじて校庭を淡く照らしてくれているが、俺たちの前に彼方さんの姿を照らしてくれることはなかった。

「……果林さん……見つかるでしょうか……？」

「うーん、今日はもう帰ってしまったのかしら……？」

「ここまで探してもう帰ったのだら……流石に勘弁ですよ……」

果林さんは軽い冗談のようにぼやいたが、俺と慎は疑いの種が芽生え始めている。

正直、次の日の授業終わりに近江さんの学級を訪ねれば早い話なのだが、ここまで来たら若干自棄になっている自分がいる。

「……うん？ あれは……彼方さん……!？」

「えっ……？ いたの!？」

しずくさんがふと校庭から目を外し校舎の陰に隠れるように置いてあるベンチに目を向けたらそこで近江さんが横向きで寝ていた。

夕日も影で近江さんの姿を見えなくする手伝いをしていたので、余計に視認しづらくしていたのだ。

「あつ、彼方ちゃんだ！ やつと見つかったね〜♪」

「やつと、つて片付くものでもないと思うんですけど……まあ何はともあれ見つかってよかったですね」

慎はため息をつきながら安堵の表情をする。

「この人が……近江……彼方さん……」

初めて近江彼方さんをこの目で見る事が出来て、少し不思議な気持ちになった。

チラシで見えていた通りのおっとりとお淑やかを兼ね備えた印象はそのままに、お眠りさんという可愛らしい要素が新しく追加されたことで、この人はどういったパフォーマンスをしてどのようにファンを虜にするのだろうかと興味が湧く。

「彼方さん〜、起きて下さいい〜」

「むにやむにやあ〜……」

しずくさんが優しく近江さんを揺するが、近江さんはそれでも起きる様子はない。

むしろ揺すられ方が揺り籠のようであるため、逆に睡眠を促進させているのではないだろうか。

「むう、彼方さん！ 起きて下さいいよー!」

しずくさんはぶくつと顔を膨らませると近江さんを強く揺する。

「むう……遙ちゃん……そんなことしちやいけないんだよ……そんな

な遙ちゃんはある……こうだあ……♪」

近江さんは目を開ける事の無いまま寝言を言っている。

そして突然遙ちゃんという知らない人物の名前を出したと思っただら、しずくさんの腕を引っ張り自分の顔をしずくさんのお腹付近に押し付けるのだった。

「ひゃああ……！ 彼方さん!! ちょっとやめてください！ 私は遙さんじゃないです!!」

しずくさんは赤面しながら近江さんの顔を引き剥がそうとするが、近江さんの底力なのか中々剥がれず悪戦苦闘していた。

「……っ」

普段とはまた一味違ったしずくさんを見て、俺は少し顔の温度が上がるのを感じる。

男の俺がどちらの立場になっても訴えられる未来しか見えないが、ここで見られた景色は後世、記憶の片隅に残しておこう。

「もう彼方ちゃん？ 起きて？ そろそろ帰らないとだよ？」

「ううう〜頭揺らさないでえ〜……」

エマさんが痺れを切らして近江さんの頭を揺するが、必死の抵抗が垣間見える。

「彼方ちゃん、いつも以上にお寝坊さんだね〜？ 果林ちゃんみたいだよ〜……」

「えっ?」

「エマっ!」

一瞬、エマさんから爆弾発言が聞こえた気がするのだが気のせいだろうか。

いや、慎も同じように目が点になっているところを見るとどうやら幻聴ではないようだ。

果林さんも自分に火が飛んでくると思わなかったのか気の抜けた声が出ていた。

「……果林さん……意外と朝が弱いんですか？」

「うえっ!?! そ、そうねえ……朝はあまり得意ではないのよ……」

俺は果林さんに少し言葉をためながら質問をする。

果林さんは突拍子もなく聞かれたため、大きく動揺しているがそれを必死に隠すように平静を装い微笑みながら答える。

「……の割にはめっちゃ目が泳いでるけどなあ……」

「うるさいわよ、慎くん……?」

「い、いたいたい! 頬をつねらないで下さいよ!!」

横でボソツと呟いた慎の声を果林さんは聞き逃さなかった。

先ほどよりも顔が赤くなっており、恥じらいをごまかすように慎に矛先を向けていた。

「むう……? なんか騒がしいけどどうかしたの?」

慎と果林さんが乳繰り合っているとその声に反応したのか近江さんが目を擦りながら起きた。

かなりの時間、眠っていたからかまだ意識は夢の世界から完全に帰還できていないようだ。

「おはよう、彼方ちゃん?」

「もう、こんな時間まで寝て大丈夫なんですか?」

「おおくエマちゃんにしくちゃん。二人ともどうしたの、こんなところ? っていうかどうして彼方ちゃんはしくちゃんに抱きついてるの?」

エマさんとしずくさんの声を聞き近江さんは一気に目をパチリと開く。

思いがけない仲間との再会からか声は嬉しそうだ。

「それはこちらの台詞です! 彼方さんってば、私を遥さんだと思っ込んでずつと離さなかつたんですからね!」

「おおくそれは申し訳ないことをしたね。彼方ちゃんの中で遥ちゃんが一番の天使だから近くにいますって、つい抱きしめちゃった」

「つい、でそんなことされたら、私も身が持ちませんよ……」

近江さんが悪びれる気のない声のトーンでしずくさんに謝るが、しずくさんも普段の近江さんの事を理解しているからなのか諦めるように肩を落とす。

「……して、後ろにいる男の子たちはどうしたのかな?」

憤たちとしくさん達のやり取りに目を配っていたら近江さんに声を掛けられた。

先ほどまで眠そうな目をしていたのに、興味を示しているのかはたまた品定めしているのか目を少し細めつつ見てくるため俺は思わず緊張してしまう。

「は、初めまして……音楽科一年の巴 輝弥と言います。スクールアイドル同好会の事で近江さんを探していました」

「ほうほう、彼方ちゃんを？ エマちゃんたちもいるってことは、もしかしてスクールアイドル同好会を再始動させようってことかな？」

「話が早いのは助かるけど、まずはあなたの意思を聞いてからよ、彼方」

彼方さんは自分の周囲に集まる人を見渡して一筋の予想を立てた。

流石、しくさんの話を聞いていた時は周囲の事をよく見ている人だと思ったけど、本当に察しが良くて話が早い。

密かに感心していた俺だが、果林さんはその前に近江さんの気持ちについて聞く。

そうだ、同好会を復帰させるための前準備として近江さんの意思を聞いてからだと思い出し、逸る気持ちを抑える。

「あつ、果林ちゃんじゃん。果林ちゃんまでいるってことはスクールアイドルに入るつもりなの〜？」

「話の腰を折らないの。今、質問をしているのは私よ。それに答えてちょうだい」

果林さんに答えをせがまれる近江さんは特に慌てる様子もなく平然としている。

「うーん、意思を聞くも何も彼方ちゃんはスクールアイドルの事を諦めてるつもりはさらさらないよ」

「えっ、ここで寝てたのにですか……？」

「むっ、輝弥くん……だっけ？ いきなり失礼な事言うね〜。彼方ちゃんにとって睡眠は遥ちゃんの次に大事な事なんだよ〜？ 眠ることで頭の中がすすきりするんだからね」

近江さんからの意外な回答に思わず毒を吐いてしまい、近江さんか

ら注意をもらう。

近江さんはどうやら嫌なことがあった時は睡眠を取ることですつきりさせるタイプのようだ。

確かに俺も考え事をしていたり嫌なことがあると一度寝る事で、頭の中の考え事や嫌の根源が、起きた時にはきれいさっぱり除去されて爽やかな気分になる。

「彼方さん、私たちスクールアイドル同好会をもう一度立ち上げようと動こうとしているんです。ですが、まずはせつ菜さんに昨日のライブについて話を聞こうと思っっているんです」

「おお、彼方ちゃんも聞いたよ。ダイバーシティでやって大盛り上がりしたってクラスの子が言ってたよ」

しずくさんが事情を説明すると近江さんも自分が聞いた話と照らし合わせるように合点がいったようだ。

「これからせつ菜ちゃんの所へ行こうと思うんだけど、今の感じなら彼方ちゃんも来てくれるよね？」

「うむむ、彼方ちゃんもスクールアイドルはやりたいからね。一緒に行くよ」

エマさんの提案に近江さんも賛同の声を上げる。

「これで三人……あとは中須さんの事も気になるけど、もう帰っちゃったのかな？」

「そうだね、かすみさんはこの時間帯だったらもう学校内にはいないと思うな」

「なら私たちだけでまずはせつ菜ちゃんにコンタクトを取ることだね！」

中須さんは明日以降で接触するとして、まずはこのメンバーでせつ菜さんにライブについて尋ねる事を最初の任務として合意する。

ここから新たなスクールアイドル同好会のページが始まるのだった。

想いの葛藤

「さて、近江さんも一緒に来ることになりましたし、まずはどこから探しましょうか、果林さん？」

校舎の陰で昼寝をしていた近江さんを新たに仲間に加え、いよいよせつ菜さんへ接触を図るため何か案があったのであろう果林さんに問いかける。

「輝弥くん、せっかく同好会の仲間として一緒にやっていこうとしてるんだから気兼ねなく彼方ちゃんでもいいんだよ？」

「……それは流石に僕が嫌なので彼方さんでお願いします」

「あらら、輝弥くんにいきなり嫌われてしまった」

彼方さんは先輩後輩関係なく仲良くしていきたいと思い、そう言ってくれたのだと思うがやはり先輩は先輩として扱わなければ俺自身のポリシーに反する。

だが言葉の選択が悪かったからか、嫌という言葉に彼方さんは少ししょんぼりさんになってしまった。

「あつ、別にそんな悪く言うつもりは……！」

「……なんてね？ 確かに君はだいたい真面目な性格に見えるから、このくらいの距離感の方が輝弥くん的にはちょうどいいのかな？」

しょんぼりとした彼方さんを見て自分の軽口に思わず弁解しようとするが、彼方さんは気にしてないかのように舌を軽く出して笑って見せた。

柔らかな印象を持つ彼方さんがこういった仕草をすると少し大人の魅力を感じる。

「もう、彼方さんもからかうのはやめてくださいよ……」

「それが君の性分なんだから仕方ないわね」

俺は思わず果林さんをカツと睨みつけてしまったが果林さんは何事もなかったかのように俺の前に移動する。

「とりあえず優木せつ菜ちゃんがどこの学科にいるのかも分からない現状は、それがはつきりする場所に行くしかないわね」

「はつきりする場所って言うても……そんな所ってどこにあるんです

か？」

「あつ、もしかして生徒会室ですか？」

慎は答えを勿体ぶられてもどかしい気持ちになっているとしずくさんが果林さんの意図を汲み取ったのか一筋の予想を立てた。

「ふふつ、流石しずくちゃんね。その通りよ。生徒会室なら生徒一人の情報が書いてある名簿があるはずよ」

「そっか！ それでせつ菜ちゃんの名前を探せば、自ずとどの学科にいるのかわかるもんね！」

「なるほど……生徒会室か……」

エマさんも納得がいったように声色が明るくなる。

確かに生徒会室へ行けばこの学園の生徒が一覧で閲覧できる名簿があるだろう。

果林さん達と出会うまではせつ菜さんに会うための方法を必死に考えていたが、思いもよらぬ助け舟により事態は急速に進展した。

この人にはよく手玉に取られるが、逆にその器用さが今では重宝していることを痛感して俺は果林さんをまた一つ見直すのだった。

「ならば善は急げと言いますし、早速出発しましょう」

俺の声に他のみんなは呼応するように頷くのだった。

輝弥たちが生徒会室へ向かうと決めた同時刻……別の場所では……。

【???

視点】

今日の生徒会業務を終わらせ、生徒会室の鍵を掛ける。

「ふう、今日も特に大きな問題はなく終了ですね……」

扉の施錠が完了したら鍵は職員室へ戻しに行くだけなので、いつもならばそのまま帰るのですが今日の私は少し寄り道したい気分になりました。

「……あそこに行ったら、誰かが待っている……なんてことはないですよね……」

仲間と切磋琢磨した思い出の場所に誰かがいることに淡い期待を寄せ、鍵を預けに職員室へ向かうのでした。

【輝弥視点】

生徒会室に着いた俺たちは扉の前で待機していた。

「……では、行きましようか……」

生徒会室に入る前に気持ちを落ち着け、いざ入ろうとする。

扉に手を掛け、ノブを捻ろうとするが思うように回らない。

「あれっ？ 開かないな……」

「どうした？ もう鍵掛かってんのか？」

「いつもこの時間帯まではお仕事をしていたはずだったけどもう帰っちゃったのかなー？」

せつ菜さんの居場所を突き止めようにもこれでは先に進めないの
でいきなり手詰まりとなってしまうた。

エマさんもこの時間帯はまだ生徒会室の電気がついていたので記
憶していたので今日と同じものだと思っていたようだ。

「私たちの事を嗅ぎつけたのでしょうか？ それともただの偶然なの
か……」

「この状況で考えても仕方ないわね。なら今日はこのまま解散にし
ましょう」

しずくさんは俺たちの会話がもうせつ菜さんの耳に入ってしまった
たことで先手を打たれたのかと推測する。

だが果林さんはこの場で考えても無駄と判断して、この状況を甘ん
じて受け止め素直に引き下がろうと提案した。

確かに、ここから別案を考えようとしても時間が無情に過ぎて成果
が得られそうにはない。

「そうですね。もう時間もだいぶ遅いですしまた明日来ましようか」

「そうだね。なら、明日も放課後にまた集まろうか」

俺と彼方さんも果林さんの意見に賛同し明日で計画を練り直すこ
ととして今日は引き上げることとした。

「輝弥？ どうしたんだ、まだ帰らないのか？」

生徒会室から離れ、校舎外に出たところで三年生組と分かれ慎とし

ずくさんも帰路に着こうとするが、俺が足を動かさそうとしない様子を見て慎が声を掛けてきた。

「最後にもう一回だけ……部室棟に寄ろうかなと思って……」

「輝弥くん……」

「今、あっちに行つたところで何か進展があるわけではないのは分かってるけど……。それでも何か起こらないかなって思わずにはいられなくて……」

俺もとことん往生際が悪い男だ。

だが、一度気になつてしまつてはもうそれが頭の中から無くなることはないので最後に部室棟へ行つてこの蟠りを晴らしたい。

「まあ、お前の気持ちも分かるぜ。俺は寮の門限もあるから先に帰らせてもらうけど、長居はしないようにな。今の時点でじたばたしても仕方ないんだから」

「分かつてるよ。ただ見に行くだけだから」

「あの……私も……付いていっていいかな……?」

慎からの忠告を受けた後、しずくさんが恐る恐る声を掛けてきた。

「えっ? 別にいいけど……ただあまり面白いこともないよ?」

「うん、分かつてる。けど……私も今日は部室の方に顔を出してなかったからやっぱり見ておきたいなって思つて……」

しずくさんはそう言つて静かに微笑む。

しずくさんがこう言うのであれば俺としては無下にするつもりはない。

「分かつた。なら一緒に行こうか」

こうして俺としずくさんは一緒に部室棟へ向かう事にした。

「そういえば、しずくさんとこうして二人で話すのはあのライブの前日以来だね」

部室棟へ向かう途中、何も話をせずに行くというわけにはいかないので何か話題になりそうなタネを引っ張り出す。

しずくさんについては演劇が好きという事以外は何も知らない。

そのため俺には演劇で話が出来そうにないので、それ以外で話を振

ろうとするが直近で出会ったことくらいしか話を出せない俺の引き出しの少なさが恨めしくなった。

「あはは……そうだね」

しずくさんは笑って返してくれるが、少し乾いてるように聞こえる。

それに俺がライブ前日の話を振ったことで両手で持っている鞆を握る力が強くなり鞆が少し震えてるようにも見える。

「しずくさん……あの時の事、まだ気にしてる？」

しずくさんの様子が今までと違うのが気になったため、その原因について聞いてみる。

原因は間違いなくあのライブについての事だろう。

同好会の活動を休止すると決まってから俺と会ったのだ。

ライブを楽しみにしていた俺の目を見てしずくさんはいたたまれない気持ちになったのだと思う。

だが、どのような弁論を述べようともライブへの意気込みとして俺に嘘をついたことには変わりはない。

きつとしずくさんの中で自分の良心と悪心が入り混じってどう弁解すればいいのか分からずにいたのだろう。

「……っ。……うん……。あの時はごめんなさい。私……輝弥くんに対して最低な事をしたね……」

しずくさんは俺に話題を振られ少し苦汁を飲むような表情をするが、決心がついたように俺に謝罪をする。

だが、しずくさんは俺の目を見るのが怖いのか中々目を合わせてくれない。

「……もう気にしなくていいよ。確かにあのライブの後、しずくさんに対して思う事はあったけど……でも話してくれたお陰でしずくさんも辛い思いをしていたんだなって理解できたから」

「……それでも私は輝弥くんに期待させておいてこの始末だったんだよ……？ もっと怒ってもいいはずなのに……」

歩きながら話しているとしずくさんは足を止めて顔を俯かせる。

前髪がしずくさんを守るように顔を覆うがその先にある表情は髪

越しにも伝わってくる。

俺は歩みを止め、しずくさんの元へと後戻りする。

そして、鞆を置きしずくさんの両手を握る。

しずくさんの手は小刻みに震えており、その震えを押さえつけるように自然と握る力も強まる。

「あつ……」

しずくさんは手を握られ、顔を赤くし俺の顔を見つめる。

「……やっと思ってくれた。俺は……しずくさんがもつと辛い思いをしているのにそれを考えずに自分の都合だけで怒るなんてこと……出来ないよ……」

俺はしずくさんが泣き出してしまわないように言葉を選び、優しく微笑みかける。

「それにね？ しずくさんから同好会の話聞いてた時、俺悔しかったんだ」

「えっ……？」

しずくさんは俺の口から出た言葉を予想していなかったのか呆然としていた。

「まだお互い知り合って間もないっていうのもあったけど、それでも……あの時のしずくさんの葛藤に気付いてあげられたんじゃないかって……そうしたらもう少し未来は変わったのかなって……」

「輝弥くん……いや、あれは輝弥くんを困らせたくないから私が勝手に意地を張ってただけだよ……」

しずくさんは握られた手を見つめたまま乾いた笑いを出す。

「……でも……ありがとう……。そう言ってくれて……。凄く……。嬉しいよ……」

まるで先ほどの乾いた笑いで内に溜めていた悲しみを吐き出し切ったように、しずくさんは清々しいほどの笑顔を俺に向けてくれた。

「そうやって笑ってくれる方がいいよ。俺は……もうしずくさんにあんな思いをしてほしくない。そのためならどんなことでもやってみせる」

「……っ！ うん、輝弥くんありがとうね……！」

しずくさんは顔を赤くしながらも幸せそうに笑う。

目尻に涙は残っているがそれでも堪え切ったようだ。

だがそんなしずくさんを尻目に、俺はしずくさんに告白紛いな事をしてしまったと自覚しだんだん顔の温度が上昇していくのを感じる。

「……って、こんな所で時間を食ってても仕方ないね。も、もう行こうか」

しずくさんの手を放し鞆を担ぎなおして同好会の部室へ向かう事とした。

「ふふっ、そうだね。……本当に彼は凄いな……」

しずくさんが呟いた一言は、顔が熱くなって正常な判断が出来ていない俺の耳には届くことはなかった。

遠のく真実

(うう……まだ恥ずかしさが抜けない……)

部室棟へ向かう途中、俺はしずくさんに対しての気持ちで頭がいっぱいだ。

理由は一つ。

しずくさんを悲しませまいと放った一言が今になって俺の頭の中でフラッシュバックしているからだ。

そのためならどんなことだってやってみせる。

正直好きでも何でもない男からそんなことを言われても、ただかっこつけようとしているようにしか見えないだろう。

ましてや知り合ってまだ日も浅いのだ。

こんなことを言えるのは随分と自分に酔いしれているキザな奴だと思う。

だが、奇しくも今の俺はそんなキザな奴になれ果てていたようだ。

しずくさんがどういう感情で今付いてきているのか分からないが、俺は彼女がどんな顔をしているのか見たくないので目を合わせることが出来ない。

「輝弥くん、急にだんまりしちゃったけど大丈夫？」

先ほどは俺がしずくさんに似た言葉を言ったが、今度はそっくりそのまま俺に返ってきた。

「えっ……!!? いや……別にそんな事ないよ……?」

「明らかに動揺してるように見えるけど……」

突然、しずくさんに声を掛けられたのもあつて俺は咄嗟に否定の言葉を出してしまったが、すぐにしずくさんにバレてしまった。

自分で言うのもあれだが、俺は随分と単純な男だな。

「……もしかして、さっきの事？」

しずくさんの一言にドキッという音がしずくさんに聞こえてしまふのではないかというくらいに俺の心臓は脈動していた。

しずくさんに俺の心理をあっさり見抜かれしまい少し冷や汗をかいてしまう。

「うっ……はいっ……かっこつけすぎたなって思っ……」

今更じたばたしても意味がないと思い、俺は素直に打ち明ける。
もうしずくさんに何を言われても耐えるだけの覚悟だけは持つておかなくてははいけない。

「ふふっ、別にそんなこと思っ……ないよ？　むしろ頼もしいなって思っ……たから」

「ふえっ？」

俺は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしながら、思わず男が出したら可愛くない言葉を出してしまった。

口は災いの元とはよく言うが、まさか幸運を運んでくれるとは思わなかった。

「私、こうやって親身になってくれる人が今までいなかったから……輝弥くんがいてくれて凄く嬉しいんだ」

しずくさんはそう言いながら満面の笑みを向けてくれる。

「そ、そっか……」

あまりにも純真な表情なので、思わず目をそらしてしまう。

(俺も……今までだったらこんなことできなかったのにな……)

俺は他人のお節介を焼くのが性分ではあったが、会って間もない、ましてや異性に対してここまで積極的に動くなんてことは今までなかった。

同性であればお互いに友人としての好意なりただの知り合いだからってだけで気兼ねなく手助けをするが、異性相手となると周囲がそれを見てわざと囁し立てようとするからあまり好んで動こうとしなかった。

どうしてしずくさんにはこう出来たのかは分からない。

周囲に人がいなかったただけかもしれないがこんな勇氣は早々湧いてこないだろう。

「だから、これからもたくさん頼らせて？」

「あっ……うん。こんな俺だけよろしくね」

しずくさんもこう言っ……てくれるのだ。

少しは信頼してもいいのかもしれない。

密かに俺としずくさんが絆を深めていると部室棟に到着し、お目当ての同好会の部室へ向かう事とした。

部室棟内はまだ天井用照明が付いており、部室棟内を照らしているがそれでも部活動の大半が終了しているからか小型照明は切られていた。

「やっぱりこの時間帯だと殆ど人はいなさそうだね」

「そうだね。もし人がいないんだったらここの照明も既に消されてるからまだ残ってる人のかな？」

「なら益々早くいかないと、だね。知らぬ間に照明が消されてたり部室棟が閉められちゃうかもしれないし」

このまま部室棟を閉められてしずくさんと二人きりでこの中で一夜を越すのは流石に勘弁だ。

刻々と部室棟が閉められるまでのタイムリミットが迫っているので、しずくさんと顔を見合わせ領くと同好会の部室へ足を運ぶ。

「ん？ 扉の前に誰かいらないか？」

あと少しで部室へ到着する所で俺達は扉の前で佇んでいる人を見つけた。

照明がちょうど当たってなく、誰かを視認できないが黒髪を長く伸ばした少女らしき人物が立っている。

「……あれはっ……!？」

「しずくさん!？」

しずくさんは目の前に見えた少女を認識するやいなや少女の元へ駆け出した。

一方、少女も俺の声としずくさんの足音を聞き一瞬こっちを見るがすぐさま反対の方向へ走り出した。

「待っててください!! せつ菜さん!!」

「えっ……!?! せつ菜さんって……あの優木せつ菜さん……!？」

俺はしずくさんの後を追いながら問い返した。

まさか運命の出会いをしたあの日からすぐにその顔を拝めるとは思わなかったからだ。

「あの後ろ姿は間違いなくせつ菜さんです……！ 制服を着ています
がああの髪型に見間違いはありません！」

しずくさんはどうやら彼女が本物の優木せつ菜であることに確信
を持っているようだ。

ならば逃がすわけにはいかないので全力で追いかけてようと足を速
める。

本来ならば校内なので走ることは厳禁だが、是非も言ってもらえない
し教師もいないからお咎めされることもないので今だけは悪いやつ
になってもバレないだろう。

だが、目の前を走る少女はそんなのお構いなしに駆け抜けていく。
俺達から逃げるために一心不乱といった様子だ。

少女が部室棟の外へ出てしまい、俺達も続けて外に出るが待ち構え
ていたのは殺風景な学校のみだった。

「あれ……誰も……いない……？」

「確かにここを通ったはずだけど……上手く撒かれたか……」

折角本人に直接聞けるまたとない機会だったのにそれをふいにし
てしまった。

「それにしてもどうしてせつ菜さんはあそこにいたのかな……？」

「うーん……誰かが来るのを待ってた……とか？」

「でも、それだと放課後この時間帯までずっとあそこで待ってたこと
になるんじゃないかな？」

「確かに、それだと現実味がないね」

しずくさんがふとせつ菜さんの動機について考えだしたので俺も
それに乗り、予想を立てるがしずくさんに矛盾を指摘される。

自分から解散しようと言い出した本人が戻ってきた。

それは何かせつ菜さんの中で気持ちの変化があった証拠なのだろ
うか。

「……こんな時間に一体何をしていますか？」

二人で考え事をしてるといきなり誰かに声を掛けられた。

その声には聞き覚えがあった。

「あつ……中川さん……！」

「生徒会長……」

「巴さんに桜坂さん。もうここにいるのは貴方達だけなんですから早く帰ってください。私がいなければ先生に気付かれぬまま正門を閉められたところですよ?」

中川さんはいつかの音楽室で感じた温かな雰囲気はなく、少し空気が凍るような感覚があった。

「す、すみません。中川さんはどうしてここに?」

「私も生徒会の仕事が終わったばかりなので帰る前に見回りをしていたんです。そうしたら貴方達がいたので声を掛けないとお二人は帰りそうになかったので……」

「め……面目ないです……」

中川さんは呆れた表情と声色で話すが、その瞬間周囲の空気が上がるのを感じた。

いつも話してた中川さんの雰囲気に戻りつつあった。

しずくさんが中川さんからの叱責にあたふたしながら頭を下げているが、俺は中川さんに対して違和感を覚えていた。

「中川さん、この場所を優木せつ菜さんが通りませんでしたか?」

「優木さんですか? いえ、私は見ていませんが……」

中川さんは特に表情を変えずとなく答える。

その様子を見る限りは嘘をついているようには見えない。

「そうですか……。折角せつ菜さんを見つけることが出来たのに見失ってしまったんですよ」

「それはお気の毒ですね。彼女をこの学校で見ることが出来る人はかなり貴重と噂ですし」

「そういえば生徒会長もせつ菜さんの事はご存知なんですね」

俺はついせつ菜さんを逃がしてしまったことをボヤいていたが中川さんは気に留めず受け止めてくれる。

そして、せつ菜さんの事を口にした様子を見てしずくさんも中川さんに話しかける。

生徒会長と呼んでいる様子を見て、彼女の事を苗字で呼んでる俺は少し優越感に浸れた。

「生徒会長として全校生徒の名前を憶えているのは当然のことですか
ら」

「ぜ、全員の……!? そ、そうなんですか……」

しずくさんは驚きの声を上げ、俺も言葉には出していないがこの人が生半可な気持ちで生徒会長をやっているのではないと思わせる片鱗を垣間見た。

中川さんは少しも顔色を変えずに答えるがそれはちよつとやそつとじゃ出来る事ではない。

「では、優木せつ菜さんがどこの学科にいるのかも分かりますか？」

「……何のためにそんなことを聞くんですか？」

俺の質問に対し中川さんはトーンを一つ下げながら聞き返す。

声色が少しだけ変わったただけなのに冷酷な印象を受けてしまうのがこの人の本性なのだろうか。

「詳細を貴女に話しても関係の無いことですよ」

「関係が無いとしても生徒の個人情報を話すつもりは毛頭ありません
が」

「これは個人情報に値する内容なんでしょうか……? 別にせつ菜さんの住所を問い質しているわけじゃないのですし」

何を言おうと突っぱねるような勢いの中川さんの対応を見て、少し苛立ちを覚えながら反論する。

中川さんも中々引き下がらない俺の様子に少し眉を顰めている。

しずくさんはいきなり険悪な雰囲気となったこの状況で俺と中川さんをただ眺める事しか出来ない。

「……貴方も強情な人ですね。もう少し聞き分けの良い方だと思っ
ていましたか……」

「それはこちらと同感です。何をそこまで意地を張られるのか理解に
苦しんでいますから……」

目には目を歯には歯をと言ったように、中川さんが煽れば俺も煽り
返す。

この泥沼のようなやり取りに先に折れたのは中川さんだった。

「はあ……時間の無駄です。話せばそれで解決するのですね」

「はい、それで僕たちは満足ですからね」

中川さんは堪忍したかのように大きなため息をつく。

俺もこのヒリついた空気で少し疲労感を覚えたのでやっと話す気になった中川さんに対して安堵の表情を浮かべる。

「……私は優木さんから自分の事は秘密にするように言われているんです。だから彼女がどの学科の生徒なのかを貴方達に教える義理はありません」

「……はっ……う？」

俺は想像からかけ離れた回答が返ってきて、年上に対してやってはいけない返事の仕方をしてしまう。

「ど、どういうことですか？ 話してくれるのではなかったんですか？」

しずくさんも中川さんの言動に理解が追い付いていないようだ。

「ですから、私が話したくなかった内容を話しただけです。私は優木さんの事を話すとは一言も言っていないですよ？」

(……この人……随分と質が悪いことを言うなあ……)

まさかこの期に及んでそんな頓智を利かせてくるとは思わなかった。

「秘密にするってスクールアイドルをやるから……ですか？ だとしてもそれは中川さんにだけ言っても解決しないでしょう？」

俺は真っ先に感じた疑問をぶつける。

中川さんだけに秘密にするよう話してもクラスメイトが全員口が堅いなんてことあり得るのだろうか。

誰にも喋らないでと言われて秘密を打ち明けられても、知人に対して同じように口外しないと約束させこっそりとその秘密を話すという人は少なからずいるだろう。

「……貴方達には関係のないことです。もう時間も遅いのでこの話はおしまいです。早く帰ってください。でないと学校内に取り残されまますよ？」

中川さんはそう言い放つと踵を返して学校内に戻ってしまった。

俺は無理矢理話を終わらせられてしまい不完全燃焼となっていた。

「……輝弥くん、今日はもう帰ろう？　また明日、みんなが集まって作戦を立てようよ」

「しずくさん……。……そうだね。ごめん、あの人に対してムキになっただ」

しずくさんは俺の肩にそつと手を乗せ、優しく微笑む。

彼女の顔を見ると自然と気持ちが落ち着いてくるのが分かる。

それと同時に先ほどまで険悪な雰囲気を作ってしまったのでそれについても自責の念に駆られる。

「気にしなくていいよ。あれは私も同じ気持ちだもん。少し生徒会長の事が分からなくなっちゃった……。それにせつ菜さんの事も……」

「……中川さん……。一体何を隠してるんだ……。？　それにせつ菜さんも……」

俺としずくさんはあの二人がそれぞれ何を考えているのか、複雑になる問題に思考回路がショートしていた。

果林の冒険譚

「……………」

「どうしたー？ 随分と不機嫌な顔をしてんじやねえか」

俺としくさんが中川さんと論争を繰り広げた翌日、俺は昨日の事で頭がいっぱいになっていた。

「慎……そんなに怖い顔してた？」

「してたしてた。こおーんな感じの顔をしてて、声を掛けたら今に食って掛かりそうな感じだったしな」

慎はそう言いながら俺の顔真似をしてくる。

眉間に深く皺を寄せてしかめっ面をしていたので正直信じがたいと思っていたが、少し眉間が熱を帯びている感じがするのであながち間違っではないのかと半ば諦め気味に認めるしかなかった。

「……で？ 昨日あの後に何かあったのかよ？ しずくとの間で何かいけない事でもあったのか？」

「べ、別にしずくさんとあったわけじゃないよ！ ……実はあの後にせつ菜さんと遭遇したんだ」

慎がしずくさんの事を話題に出しておちよくってきたので思わず語気を強めて否定する。

だが、そこに時間をかけるのも無駄なので慎に俺が悩んでいたことを話した。

「えっ、優木せつ菜さんに会えたのか!？」

やはりせつ菜さんと会えたことを話したら目を見開きながら驚いていた。

「うん……でもすぐに見失っちゃってね……。そのあと、中川さんにも会ったんだ」

俺は昨日起こった出来事を慎に話すことにした。

「なるほどなあ、中川さんも何か裏がありそうだな。っていうかなんでそんなに強情になつてんだらうな？」

慎は俺の話聞き終えた後、腕を組み唸りを上げながら浮かんだ疑

問を口にする。

「それは俺にも分からない。ただ色々とおかしいんだよね。せつ菜さんに対して扱いか彼女秘密についての隠し方とか……」

「うーん、中川さんとせつ菜さんが実は姉妹とか？　ほら、身内のやってることを邪魔したくないからとか可能性としてはありそうじゃないか？」

慎は自分が考えた推理と合わせて一つの説を俺に唱えてくる。

「なるほどね〜……。確かに家の事情とかで苗字が違う姉妹もいるし何もおかしいことはないな」

「それに同じ黒髪だろ？　俺はそれを推してもいいと思うんだけどなあー」

慎の着眼点の良さに俺はただただ驚嘆していた。

「……なんかいつもと違って随分と頭が切れてる気がする」

「おいおい、普段の俺がだらしないみたいない方すんなよ……！」

慎の事はまだまだ掴みきれてない点が多い。

普段の授業はしつかりと聞いているがそれでも時折そっぽを向いて考え事をしていることがある。

昨日のしずくさん達との会話でもあまり意見を出さずに聞いている印象が強かったから勝手に偏見を持っていたが、そういった事は簡単に決めつけてはいけないと反省する。

「ごめんごめん。でももし本当に姉妹だとしたら、なんで中川さんはせつ菜さんの事を秘密にする必要があるのかな？」

「えっ？　それは……せつ菜さんに変な気を起こす奴がいるかもしれないから………とか？」

慎は自信なさげに答える。

「慎の言うことも一理あると思う。でもさ、まだ始めたばかりでこれから頑張らなくちゃいけないって時にその活動を支援するのではなくて、彼女の事を隠そうとするって逆にせつ菜さんの活動に支障をきたしてる気がするんだよね……」

「な、なるほどな……。確かに輝弥の言ってる事も間違っちゃいねえな……」

俺たちの会話は机上の空論にも関わらず意外と盛り上がり過ぎてしまい、昼休憩が終わるまで談義は続くこととなった。

【果林視点】

一日の授業が終わり、いつもなら読者モデルの仕事に行くのだけれど今日の私は違う。

昨日約束したエマ達とのスクールアイドル同好会再始動に向けた話し合い。

私はスクールアイドルに興味はないけど親友がずっと楽しみにしていたことがこんなあつさりふいになるなんて納得がいなくて、つい協力することにしてしまった。

でも、大好きなエマのためだもの。

生半可な気持ちで挑んで、だめでしたってなるのはあまりにも格好がつかないから、話し合いに向けて私も準備を進めておきたい。

帰りのホームルームが終了し、私が真っ先に向かったのは昨日訪ねた場所。

あそこにはこれからの進め方に大きく影響を与える物があると私の直感が教えてくれる。

その道中、向かおうとしていた先から何やら叫び声が聞こえた。

「きやあ~~~~~！ 猫よ~~~~~！」

「あらっ、校内に猫が入るなんて珍しいわね？」

学校内はそれなりに警備が行き届いているのもあつて野生の動物が侵入するなんてことは早々ないと思つてたけど案外すんなり入られるものなのね。

私は目的の場所に着いた時、その部屋に入るための扉から人が出てくるのが見えた。

「あつ、こらー！ 待ちなさい！」

見るとそれは生徒会長の中川菜々だった。

普段は整えられている前髪が少し乱れている様子を見るに猫に顔を踏まれたのかしら。

そんな軽いことを考えていたら、あつという間に猫を追いかける中川さんの姿が見えなくなつた。

私は開いたままの扉の前に立ち部屋の中をさつと見回す。

中には中川さん以外の人はおらず、もぬけの殻だった。

「ふうくん？　これは……案外早く目的が達成しそうね……？」

苦勞すると思つていたミッションが予想よりもスムーズに事が運ぶ事となり、私は思わず口元を緩めてしまった。

私は目的を終え、エマ達と合流する約束をしていた場所へ向かうことにした。

もう彼女にはこれから向かう事を連絡してあるので、あとはただり着くのみなのだけれど一つだけ問題がある。

「……………ここは……今どのあたりなのかしら……？」

そう。この私、朝香果林は少し方向音痴なのである。

いや、本当に少しだけなんだけどね？

エマが言つてた場所の景色は覚えてるからそれを頼りにすれば今回は迷わずに到着すると思つていたんだけど、やっぱり思うようにはいかないみたい。

「日が暮れる前に到着すればいいけど……………あらっ？」

みんななどの話し合いに遅れないように少し急ごうかと思つた矢先、ふと女の子が喋る声が聞こえてきた。

校舎の裏から聞こえてくるので少し顔を覗かせたら、きれいな赤髪をお団子にしている子が校舎の窓に喋りかけていた。

「……………学園普通科2年の上原歩夢です。少し臆病な性格だから構つてくれないと寂しい……………びよん♪」

歩夢と言つた少女は手をうさ耳に見立て語尾にびよんを付けながら喋っていた。

その声の張り具合からして誰かに話しかけている様子ではないことはわかつた。

にしてもこんな人目の付かない所でやるつてことはこの子はおそ

らく。

「だから温かく……………」

可愛いところを遠くない距離から眺めていると急に固まってしまう。

これは私の存在が気付かれちゃったってことね。

「んんん……………」

歩夢ちゃんは一瞬で顔が真っ赤になって声にならない声を上げながら激しく動揺していた。

それにしてもこの子、なんて可愛い反応するのかしら。

口をアワアワさせて目の焦点が震えながら私の事を見ちやっ……………。

「……………これは……………その……………練習をして……………す、すす……………」

「スクールアイドル？」

私がそう言うところの子は凄まじい勢いで相槌を打つ。

(この子、エマ達とは違う形でスクールアイドルをやろうとしているのかしら)

もし、この歩夢ちゃんも本気ならば是非一緒に仲間に引き入れたいところだけど、今は出会ったタイミングが悪く近づこうものなら距離を離されるような気がした。

「ふふっ、そうなの？ ごめんなさいね、とびきり可愛いところを見ちゃって」

私は自分の人差し指を頬に当て少しからかい気味に言う。

だけど、おふざけはこれくらいにして一つこの子を見て気になったことをぶつけてみる。

「だけど、それは貴女が本当にやりたい事なの？」

「えっ？」

「真面目そうに見える貴女がそんなことをやるのはギャップがあつて可愛いと思うけど、それって疲れない？ 私には少し無理してるように見えるわ」

「そ、それは……………」

歩夢ちゃんは元気をなくした子犬のように縮こまってしまった。

少し言い方が厳しかったかしらね。

「だからこそ貴女なりの可愛らしさっていうのをちゃんと見つめ直してもいいんじゃないかしら？ 例えば……貴女にとつての一番大切な人ならどんな私をずっと応援してくれるんだろう……とかね？」

「私にとつての……一番大切な人……」

「貴女にはいるかしら？ そんな人は」

アイドルという偶像是猫を被っていてもすぐに化けの皮は剥がれる。

無理をして作ったキャラも一度崩壊してしまえば、自分が知ってる子はこんな子じゃないと見切りをつけて別の子を推すようになってしまう。

まして、この子はそういったキャラを取り繕うのはあまり得意ではないように見えるからこそそういった可愛さを求めてはいけな思った。

こんな真面目な子なら身近な人がどんな自分を好んで推すのか。

それを考えれば自ずと答えは見えてくるのではないかと、私は親友を思い浮かべながらアドバイスを送る。

そして、このアドバイスが利いたのか歩夢ちゃんは先ほどよりもしっかりと前を見据えて私に向き合ってくれた。

「……応援してくれる人なら……います……！」

「……そう。喋りすぎたわね。応援……してるわよ」

自分の歩き出す道が見え始めたこの子ならこれ以上何も言う必要はない。

私はエマ達との時間に遅れてしまうのでそろそろ向かうことにした。

「……ありがとうございます……！」

歩夢ちゃんは深く頭を下げながら感謝の言葉を言う。

本当になんて良い子なのかしらね。

(この子は……いずれエマ達と……)

こんな魅力的な子が同好会に入ってくれるなら、と淡い期待を抱きながら私は待ち合わせの場所へ向かうのだった。

【輝弥視点】

「……遅くないですか、エマさん」

放課後、果林さんを含めた同好会メンバーにて作戦会議をする予定なのだが、肝心の果林さんがまだ到着しない。

「うーん、もしかして迷子になっちゃったかな〜？」

「いやいやエマさん。果林さんは三年生ですよ？ 今になって迷子になることってあるんですかね？」

エマさんの返答に慎は手を横に振りながら反論する。

確かにこの学校に慣れていない一年生が迷う事は仕方ないと思うが、三年生が、ましてやあの果林さんが迷うなんてことがあり得るのだろうか。

「でも、私たちが集まってから、かれこれ一時間は経ってるよね〜？」
「き、きつと野暮用に時間がかかってるだけですよ……！」

彼方さんが軽く小言を言うがしずくさんは果林さんに対してフォローを送る。

そう、果林さんは用事があるのでそれを終わらせてから向かうと言っていた。

本人曰くすぐに終わるから、とだけメッセージを残していったそうだが、彼女のすぐに終わるは一時間を想定しているのだろうか。

「まあ……こればかりは待つしかないですかね。そういえばお電話は通じないんですか？」

「うーん、掛けたんだけど繋がらないんだ〜。果林ちゃんってば、おつちよこちよいさんだからスマホを鞆の奥底に置いてるのかも……！」

「エマさん、果林さんに対しての偏見がひどくないですか？」

エマさんは俺の質問に答えるが、少し果林さんの事をバカにしすぎではないかと思うくらいに彼女の口から放たれる言葉が容赦ない気がする。

「えっ？…これが普通だよ？」

「そ、そうなんですか……？」

エマさんはさも当たり前のように返事をするが、慎は疑いの眼差し

を向ける。

エマさんが親友に対して毒舌なのか果林さんが本当にだらしかなかったのかそれは本人たちのみぞ知るといふ事か。

「あらっ、待たせてごめんなさいね」

二人の関係性について頭を悩ませていると悩ませる要因となった果林さんがやつと姿を現した。

「果林ちゃん、遅いよ？ どこで迷子になってたの？」

「え、エマ！ 別に迷子になってたわけじゃないわよ！ 少し遠回りでごここに来ただけだから……！」

早速エマさんの毒舌が炸裂し、果林さんも少しムツとしながら反論する。

「遠回りでこんなに遅くなるもんなんですか……!?!」

「慎くん、貴方は何も気にしなくていいの。いい？」

「うううっねらないで下さいよー!!」

慎が余計なことを言った事で果林さんの矛先が慎に向き、頬をつねっている。

俺も同じことを思ったが口に出さなくてよかったと内心ほっとしている。

「果林ちゃん、そういえば用事って何をしてたの？」

彼方さんの質問に果林さんは待つてましたと言わんばかりに誇らしげな顔になった。

「それはね……優木せつ菜の正体を探っていたの！」

実際、果林さんの取った行動が俺たちの今後を大きく進展させることになるはこの時点では誰も予想できなかった。

偶像を見つげに

「優木せつ菜さんの正体を探るって……どういふことですか?」

「俺達ってこれからそのせつ菜さんを探すためにこうして集まってるんですよね?」

果林さんの発言に俺と慎は理解が遅れていた。

「だから、その為に必要な情報を先に集めていたのよ」

果林さんはそう言うと言ったと靴の中に入れて、一冊の本を取り出した。

本にしては表紙は何も書かれておらず、本と呼ぶには寂しいものだった。

「果林ちゃん、これは?」

「全校生徒の情報が載っている名簿よ。とは言っても学年、学科、名前しか書いてないけどね」

「えっ!? でもこういうのって生徒会室とか職員室にあるものですよね?」

「だから生徒会室に行つて、これを借りてきたの」

全校生徒の名簿なんて軽い気持ちで探す事なんて出来ないと思つていたが、一体これを探すのにどれだけ苦労したのだろうか。

「もしかして、果林さんが遅れたのって生徒会室や職員室を回つていたらなんですか?」

「えっ!? ま、まあそうね。意外と簡単に貸してくれなかったから先生の力を借りて事なきを得たって所よ?」

果林さんは俺の質問に驚きの声を上げるも何事もなかったかのようにならぬ時の苦労を語っている。

途中で目を合わせなくなつてしまつたが、本人としてはそれだけ険しかつたという事だろう。

「そうだったの……? 果林ちゃん、誤解してごめんね? 携帯に

連絡しても出なかつたから私でつきりまた迷子になつちやつたのかと思つて……」

「えっ? あらつそうなの?」

エマさんは果林さんに対して誤解していたことを詫げる。

この人から迷子という言葉がこの短時間で何回聞いたか分からないが、なぜそんなに迷子という言葉を使うのか。

俺がそんなことを考えている間、果林さんは鞆の中を漁りスマホを取り出した。

「あらっ、本当だわ。ごめんなさい、鞆の底に置いてたから気付いていなかったわ」

果林さんの言葉を聞いた時、俺は自分の耳を疑った。

(……えっ、エマさんの言ってたことって……本当なの……?)

スマホは鞆の中に入れるとしてもすぐに取り出せるようにポケットや荷物の上に置いてあるものかと思っていたが、果林さんはどうやら違うらしい。

「エマさんの言ってる事って……割と的を得てるのか……?’」

慎も果林さんの言葉を引き金にエマさんが言ってた内容を思い出していた。

エマさんがそう言うことは、この人は本当に……。

「二人とも急に固まっちゃってどうしたの?’」

このままでは果林さんのイメージに多大な傷を負わせるのではと悪寒が走った矢先、しずくさんに声を掛けられ我に返る。

「い、いや、なんでもないよ。少しぼーっとして……」

我ながら咄嗟のごまかしが下手である。

「と、とにかくこうして生徒名簿を手に入れられたんですから、それを早く読みましょう!」

俺は今の反応から気を反らすように無理矢理話題を今やるべきことへと向けさせる。

「そうだね。普段は私たちでも見ることが出来ない代物が手元にあるんだもん。せつ菜ちゃんの事について探してみようか」

彼方さんも先ほどの俺のリアクションを気にすることなくせつ菜さんの居場所を突き止めることに目が向いていた。

そこから俺達六人による優木せつ菜さんの名前探しが始まった。

虹ヶ咲学園の一学年あたりの生徒数は約千人いる。

俺達六人で千人いる中から特定の一人を探し出すことは、目の前に

広がっている草原から四葉のクローバーを探すのと同じくらい至難の業だ。

そこで、六人で一つの名簿を見るよりは名簿を小分けして各々で探す形を取った方が効率がいいので、生徒名簿を学科ごとに分け一人一人がその名簿から優木せつ菜さんの名前を探し出すこととした。

ちなみに俺は普通科の名簿を渡されていた。

そこの中に探している人物の名前が書かれていればと淡い期待を寄せながら名簿の内容を確認した。

「朝日 陽菜貴……安達 亜久里……井口 麻友……上原 歩夢……。あつ、つていうか”優木”せつ菜だからそこを探せばいいじゃん……」

俺は名簿を頭から血眼になって見ていたがそもそも名簿順になっているのだから”ゆ”から始まる所を見ればいいじゃないかと一人突っ込みをかましていた。

我ながら真面目な素振りを見せておきながらこういうところはポソコツだなど自分の頭の固さを痛感するのだった。

「山口 香織……八幡 未祐……夕島 夏海……優羽 朱里……。うーんこのクラスにはいないか……」

優木の苗字から始まる名前が見つからなかったため、次の名簿へと頁をめくる。

「槍元 知里……有李 真理亜……。ここも違う……」

二クラス目も探すが該当する名前は見つからない。

三クラス目へと頁をめくった時にとある箇所が目が向いた。

「中川 菜々……。中川さんは普通科なんだ……」

中川さんの名前を見つけ、普段は聞くことが出来なかった中川さんの知らない一面をここでまた知る事が出来た。

その後も優木の文字を探し名簿と睨めっこするがおいそれと顔を出してくれない。

そして、必死に探しているうちに気付けば最後のクラス名簿となっていたので、ここの学級に一縷の希望を託す。

「矢和田 知恵美……友利 裳絵華……。うーん……。という事は普

通科にはせつ菜さんはいないという事か……」

希望を託したもののその光は瞬く間に闇へと葬り去られるのであった。

「こちらの確認は終わりましたが他の皆さんはどうでしたか？」

自分の作業が終了したことの連絡と同時に各メンバーの手応えを確認する。

「音楽科の一覧も全部確認したけどせつ菜さんの名前は見つからなかったぜ」

「私も情報処理科の名簿を探していましたが、それっぽい名前は見つかりませんでした……」

慎としくさんが首を横に振りながらめぼしい成果を上げられなかったことを報告する。

「そつか……。俺も普通科の名簿を見たけど全くありそうな気配もなかったね」

「貴方達も芳しい結果は得られなかったって感じね？」

三人で意気消沈していると果林さんが声を掛けてきた。

既に名簿を見終えたであろう彼方さんとエマさんもその声に反応しこちらを見つめている。

「貴方達もっていう事は彼方さん達もですか？」

「ええ。ライフデザイン学科と国際交流学科も探したけど、優木せつ菜という名前は一切見つからなかったわ」

「えっ……？ それっておかしいじゃないですか？ それでは優木せつ菜さんはこの学校に入学すらしていないということになりますよ!？」

果林さんからの報告を聞いて俺は更に頭を悩ませるのだった。

この学校でスクールアイドルとして活動をしているのだから虹ヶ咲学園の生徒として勉強に励んでいると思っていたのだが、それを根本から覆された。

折角次のステップへ進めると思った矢先にこの事態なのだから俺は解決策を出すために頭を悩ませた。

だが間髪を入れずに果林さんが声を挟む。

「……もしかしたら、そのまさかが的中してしまうかもね……」

「……それは……どういことですか？」

「……まさか……優木せつ菜さんという存在は最初からなかったという事ですか？」

果林さんの含みのある言い方に苦慮していると、しずくさんが一つの予想を組み立てた。

「ああ、それなら可能性としては一理あるね。この生徒名簿は学校側が作ってる正式な書類なわけだし、ここに書かれていないという事はそもそも生徒として数えられてないってことになるね」

「つまり、優木せつ菜さんは誰かが作り出した偶像っていう事ですか……？」

彼方さんはしずくさんの予想に解説を付けながら、一つの説として唱えるに十分な理由を付けてくれる。

それを聞き、慎も優木せつ菜という存在に疑問を持ち始めた。

「じゃあ、せつ菜ちゃんは一休誰が生み出したの……？」

同好会で一緒に活動していた優木せつ菜が突然遠い存在となり、エマさんは実感が湧いていなく、ただただ是非を問うことしかできなかった。

周りの空気が重くなっていくのと同時に解決策が無いか思考を巡らす。

その時、俺の中で突然昨日の出来事が脳裏を過った。

(関係が無いとしても生徒の個人情報話すつもりは毛頭ありませんが)

(……私は優木さんから自分の事は秘密にするように言われているんです。だから彼女がどの学科の生徒なのかを貴方達に教える義理はありません)

(ですから、私が話したくなかった内容を話しただけです。私は優木さんの事を話すとは一言も言っていないですよ?)

「まさか……？」

俺は昨日の中川さんとの会話で感じた違和感を、地面にばら撒かれたパズルのピースを組み合わせるように一つ一つを丁寧に頭の中で状況整理しながら組み合わせていく。

「輝弥くん？　どうかしたの？」

しずくさんは突然声を出した俺を見て心配する声を上げる。

「何か思い当たることでもあるのかしら？」

「いえっ……まだ確信があるわけではないです。ですけど……可能性は否定できないなと思って」

「状況を整理しながらでも良いから聞かせてもらえるかしら？」

「はい。途中で話が逸れてしまうかもしれませんが……」

「構わないわ。今は先に進むための情報が不足してるし、可能性であろうと次につながるための情報があることは助かるから」

果林さんは笑みを浮かべながら答える。

その表情は人を威圧させるような笑みではなく、見ている人を穏やかにさせる効果があるようだ。

「まず、僕が現時点で怪しいと睨んでいるのは生徒会長です」

「どうして中川さんなんだ？」

慎からの質問に俺は昨日あった出来事を思い返しながら返事をする。

「昨日、皆さんと別れたあと、しずくさんと一緒に部室棟へ行ったんです。帰る前にもう一度だけ同好会の部室で何かないかなと思って」

「もしかして……せつ菜さんのこと？」

しずくさんからの問いに俺は頷いて説明を続ける。

「その時、同好会の扉の前で優木せつ菜さんを見たんです。僕は先日あったライブ衣装をまとった姿しか見ていないので確証はなかったんですけど、しずくさんが後ろ姿見て、間違いないと言っていたので恐らくそうだと思うってます」

「しずくちゃんはこのメンバーの中では周りを一番よく見てるから、それなら本当なんだろうね」

「せつ菜さんを見て追いかけたんですが部室棟を出た瞬間に姿を見失ってしまっただです。その後、すぐに中川さんと会ったんです」

「つまり、輝弥くんはせつ菜ちゃんが姿を隠したタイミングで中川菜々ちゃんに変わって、二人の前に姿を見せたからせつ菜ちゃんは菜々ちゃんじゃないかって思ってるってこと?」

エマさんの問いに俺は軽く首を横に振る。

「確かにそれもあります。僕が思ったのはそのあとのやり取りで、ですね。僕は中川さんにせつ菜さんがどこの学科にいるのか直接聞いたんです。でも、あの人はそれを答えてくれませんでした」

「それはどうしてかしら?」

「あの人はせつ菜さんから口止めされていると言っていました。だからせつ菜さんの事を話すつもりはないと」

「……なるほどねえ。分かってくたわ」

俺がそこまで話した時、果林さんは獲物を見つけた肉食動物のように目を細め軽く舌なめずりをする。

隣で彼方さんが顎に手を当ててしかめっ面をしながら腑に落ちたような表情をする。

「むむむ? 彼方ちゃんもだんだん分かってきたぞ?」

「……もしかして生徒会長がせつ菜さんだから入れ替わったタイミングも重なって……せつ菜さんの事を話すつもりがないっていうのも自分がせつ菜さん本人だから秘密にしている、という事ですか?」

しずくさんも少しづつ状況が掴めてきたようだ。

「そういう事ね。こうして名簿にも載っていないことは自分が生徒会長として名簿の管理を行っているから誰も優木せつ菜の存在を指摘することはない、生徒会長である自分がそう言えば納得すると思っているんでしょね」

「な、なるほど……。確かにその説は非常に可能性が高いですね……」

果林さんの憶測も聞いた上で慎は呆気にとられながらも中川さんが取っていたであろう行動に理解が追いついてきたようだ。

「輝弥くん、その情報は非常に役に立つわ。ありがとう」

果林さんは俺の功労にウインクしながらお礼を言う。

その動作に俺は少し心拍数上がるのを感じる。

「い、いえ……! むしろ、あの後に勝手に動いたから見つかっただけ

で……偶然の産物です」

「それでもだよ！　こうして輝弥くんとしずくちゃんが動いてなかったら次のステップに進むことが出来なかったから本当に感謝しかないよ！　ありがとうね！」

エマさんからも満面の笑みを向けられながらお礼を言われる。

この人からの褒め言葉は少しむず痒く感じる所もあるが、凄く力も貰える。

「なら、この名簿を返しに行くついでに生徒会長の所へ行きましょうか」

バラバラに分けていた名簿を元に戻して果林さんに渡すと、果林さんはその名簿をパタパタと揺らしながら声を上げる。

その声は進む道を閉ざされた俺達を活気づけるには十分で、その場に居合わせた全員が頷いて同意するのだった。

望まぬ再会

せつ菜さんの正体について真実を握っているであろう中川さんに会うため、俺たちは生徒会室前に来ていた。

「……なんだかいつにも増して緊張しちゃうな……」

「何も気にする必要はないだろ？ 俺達もいるんだしさ」

こういう重要な局面の時に毎回武者震いをしてしまう俺だが、慎は肩を叩きながら励ましてくれる。

本当にこんな時でも物事はなるようになる精神で挑める慎が羨ましい。

こんな風に樂觀視出来ればいいけど、これが俺の性分だから仕方ない。

「慎君の言う通りよ？ 何かあればその時。貴方が一人で考えても仕方ない事よ」

「皆さん、ここで喋っていても仕方ありません。行きましょう」

しずくさんが空気を変えるために発破をかける。

俺はその声を聞き、意を決し扉を力強くノックする。

「はい」

中から昨日も聞いた声が響いてくる。

「音楽科一年の巴 輝弥です」

「……どうぞ」

入室の許可を貰い、俺は口の中に残ったなげなしの唾を飲み込むとノブに手を置き、扉を開ける。

「……お疲れ様です。中川さん」

「お疲れ様です。今日はどうしたんですか？ また懲りずに優木さんの事を聞きに来たんですか？」

中川さんは昨日会った時と同じように氷のような冷たさが全身から滲み出ていた。

俺は足が竦みそうになったが男として情けない姿を見せていられないと思いい、覚悟を決める。

こうなれば当たって砕けろだ。……砕けたら意味はないが。

「そうだとしたら……どうしますか？」

「どうもこうもありません。昨日お話したことをもう一度話すつもりは私にはないのでお引き取り下さい」

「あらっ？ 貴女には無くても私たちにはその理由があるの」

中川さんの冷たくあしらう言葉に我慢ならなかったのか果林さんが俺の後ろから顔を覗かせてくる。

そして、生徒会長専用のデスクの前に立ち、中川さんと対峙する。俺を含め他のメンバーもその後ろで並ぶ。

「何の御用でしょうか。ライフデザイン学科三年、朝香果林さん」

「ふくん、全校生徒の名前を憶えてるって噂は本当なのね。じゃあ優木せつ菜という人物に会わせてもらえるかしら？」

果林さんは目を細めながら中川さんの威圧感に負けないオーラを放っている。

この人が味方に居てくれて、その頼もしさを肌で感じる。

「彼から聞いたのではないんですか？ 優木さんは皆さんに会うつもりはないと言ってるのです。生徒会長として生徒を守るのは義務です」

「なら、その義務とやらで自分の事をどうやって守るのかしら？」

「……何を言いたいんですか？」

果林さんの一言に中川さんは少し表情が険しくなる。

「隠しているのか、とぼけてるのか知らないけど別にいいわ」

果林さんは徐に鞆の中に手を入れ、一冊の本を取り出す。

中川さんはそれを見て、眉が一瞬動いた。

「生徒名簿、勝手に借りてごめんなさいね。優木せつ菜という名前の人物は見つけられなかったわ。……いないはずの人物とどうやって廃部のやり取りが出来たのかしら。」

ねえ……？ 優木せつ菜さん？」

中川さんは顔色一つ変えることなく果林さんの事を凝視していた。

自分ではここまで不利な状況に立たされるとすぐに心が折れてしまう自信がある。

「……随分と勘が良いんですね」

中川さんは果林さんの言葉を肯定した。

やはりこの人は中川菜々であり優木せつ菜本人ということか。

果林さんの後ろで慎が目を見開いていた。

信頼を寄せていた人が、憧れの存在として輝いていた人がかたや同好会を潰し、かたや俺の夢を潰そうとしたのだ。

シヨックが大きく、事実を認めたくないのだろう。

「……否定しないのね」

果林さんは微笑みながら会話を続ける。

「別に……いざれバレるだろうと思っていましたから。ですが同好会として一緒に活動していない貴女にそう言われるとは思いませんでしたが」

「私は貴女の正体については正直そこまで興味ないわ。ただ、私の親友の夢を簡単につぶしてくれるなんて随分肝が据わっているなと思っただけが勝手に動いただけ」

果林さんは腕を組みながら答える。

声色が落ちているので少しでも隙を見せたら刺してくるのではないかと思わせるほどに恐怖感が滲み出ていた。

「ちなみに貴女の事に真っ先に気付いたのは私ではなくて輝弥君よ」

「……………」

中川さんは何も言わずに俺へと目を向ける。

その裏に隠されている感情は憤りなのか虚無なのか読み取ることができなかった。

「僕も……最初は確証なんてなかったんです。昨日、あそこまで拒絶される理由が分からなかったし、どうしてせつ菜さんの事を庇おうとするのか理解が出来ませんでした」

俺は目線を下に落とし昨日の出来事を思い出しながら話す。

「ですが、貴女が優木せつ菜さんというのなら話は早いです。

せつ菜さん、どうしてあの時俺をライブへ連れ出したんですか!？」

「輝弥……………」

「同好会の事情をしずくさんから聞いた時……貴女がどういう気持ちであそこに立っていたのか……。俺には分からないんです……。俺

はあの場で確かに貴女に心をつちりと掴まれました。同好会に入って……スクールアイドルを目指す人たちにしか歌えない曲を作りたいと……夢を叶えたいと本気で思えたんです……!!」

「……………」

俺は自分の感情が制御できておらず、ありのままの想いをせつ菜さんへぶつける。

彼女もそれを聞いて全身に力が入っているように感じる。

「それを貴女は……自分勝手な都合で……同好会を……!!」

「輝弥くん、ストップ!」

「……………」

自分の口からとめどなく溢れ出る想いとこみ上げてくる怒り。

放たれる言葉に危険を察知したのか、それをせき止めたのはエマさんだった。

「輝弥くん、言いたいことは分かるけど私からも一つだけ言わせて?」

そう言うとエマさんはせつ菜さんへ向き合った。

「せつ菜ちゃん、どうして廃部にしたの?」

「一時的に活動を休止しようって言ってたよね? それがどうしてもいきなり……………」

「教えてください、せつ菜さん……………」

彼方さんとしずくさんもせつ菜さんへ訴えかける。

そうだ、今せつ菜さんに物申したいのはこの人達な筈だ。

活動休止と言った矢先の同好会の廃部。

そのメンバーであればこの状況を納得できるはずがない。

「……………」私にはスクールアイドルをやる資格なんてないんです……………」

「えっ? 今なんて…………?」

せつ菜さんは小声で答えていたが上手く聞き取ることが出来なかった。

「……………」私はスクールアイドルをやめたんです。同好会は最低五人以上でのみ活動が許可されます。今までスクールアイドル同好会はその最低人数での活動でしたがメンバーの退部により廃部にせざるを得なくなりました。……………」それだけのことです」

「それだけって……あんた……そんな軽く言える口なのかよ!!」

「慎君、落ち着きなさい。今ここで激昂しても仕方ないわよ」

せつ菜さんの答えに納得がいかない慎は思わず噛みつくが果林さんに制止される。

「でも……あれはせつ菜ちゃんだけのせいじゃないって言ったでしょ？ 私たちにも悪いところはあったんだからせつ菜ちゃんだけが背負う罪じゃないよ」

「……………」

彼方さんのフォローが入るがせつ菜さんは俺達にそっぽを向け、校舎外へと体を向ける。

「せつ菜ちゃん……!」

「優木せつ菜はもういません!!」

エマさんの声を振り切るようにせつ菜さんは大きな声で被せてきた。

突然の出来事に俺たちは言葉を失うのだった。

「……私はスクールアイドル同好会に戻るつもりはありません。やりたいでしたら皆さんのみでやって下さい」

「せつ菜……さん……」

せつ菜さんの声は今にも消え入りそうなくらい弱々しく、目の前が真っ暗になっているように思えた。

「……そう。貴女がそう言うのならこっちは勝手にやらせてもらうわ。今日はもう帰りましょ」

「果林さん……!?! まだ話は……!」

「もう終わってるわよ。私たちがここに来た目的は何？ 優木せつ菜とのお話、なんていう学校内ならどこでもやれることをここでやろうとしていたとでも言うつもり?」

俺は踵を返そうとする果林さんに待ったをかけるが、逆に言い返されてしまう。

果林さんの正論に俺は反論する余地はなかった。

「貴方達はスクールアイドルをもう一度やりたくて集まったんでしょ？ なら再結成するための条件を聞くことがまずは最優先じゃない

かしら」

果林さんはそう言い放つとそそくさと生徒会室を出ようとする。扉の前で立ち止まりこちらへ、もといせつ菜さんの方へと振り返る。

「スクールアイドル同好会はメンバーが集まればもう一度結成してもいいのよね？ 生徒会長さん」

「……はい。最低人数の五人を集めれば同好会として再度立ち上げて頂いて構いません」

「……それが聞ければ十分よ。なら今日は帰るわね。エマ、行きましょ？」

あまりにも唐突な展開に果林さん以外は付いていけなかった。

いや、あの人は元々スクールアイドル云々よりもエマさんの為だけに動いていた。

夢に見ていたスクールアイドルに彼女がなれるように手助けしていたに過ぎない。

これが朝香果林という人物なのだ。

「う、うん……」

エマさんは戸惑いながらも果林さんの後を付いて生徒会室から去っていく。

「さて、もう要件はないでしょう？ 私はまだ仕事がありますのでこれでお引き取り願えますか？」

扉の方を見て呆けていると、中川さんに声を掛けられ我に返る。

先ほどまでのやり取りが鉄に出来た錆のようにしつかりと頭にこびり付いて中々拭う事が出来ない。

「貴方達に何を言われようが、これが私の選んだ道です。貴方は貴方の行きたい道へ……やりたい事へ進んでくださいね」

「中川さん……」

中川さんの最後の言葉には以前感じた温かな空気が纏われていたような気がした。

「輝弥、俺達も帰ろうぜ」

慎にも促され生徒会室を後にする。

生徒会室の扉を閉めようとした瞬間、席で仕事をしている中川さんの顔が光って見えたのは気のせいだろうか。

「二応、スクールアイドル同好会については再開できるようなったけど……みんなは嬉しい？」

生徒会室の外に出て校舎外にと歩いていた時、彼方さんが声を掛けてきた。

「私は活動再開については嬉しく思います。ですが……こんな再開の仕方は……うれしくありません」

「僕も同じ気持ちです。まだ蟠りが胸の中に残っているというか……まだ腑に落ちないというか……」

しずくさんと俺はその胸中を吐露する。

お互い考えることは同じなようだ。

本来ならば最難関である生徒会長を乗り越えたことで念願だったスクールアイドル同好会での活動に胸を躍らせるのだろうが、今の俺は逆に冷め切っていた。

「二人も同じなんだね。彼方ちゃんも同じ気持ちだよ。このまま続けてもスツキリはしないけど、今はそうも言ってられないんじゃないかな？」

彼方さんはこちらを安心させるように微笑みかける。

そんな彼方さんとは裏腹に慎は俯きながら歩いている。

さつきまでのせつ菜さんの態度にまだ苛立ちが残っているのか少し眉間に皺が寄っているようだった。

「そうですね、こうしてまた活動できるんです。今はそれを素直に喜びましょう」

「うんうん、思う事はあるけど、まずは一步前進って事で笑顔で帰ってきましょう〜！」

彼方さんは場を和ませるように拳を突き上げるように喜びの感情を大きさに表現した。

だがそれも束の間、彼方さんはすぐに腕を下して俺と慎の方へと体を向けた。

「輝弥くん、慎くん。今回は本当にありがとうね。二人の力が無かったらここまで進歩は無かったと思うから改めてお礼を言わせて？」

「私からも言わせて？ 輝弥くん、慎くん。二人とこうして仲良くなれてなかったら私は路頭に迷っていたかもしれない……。本当にありがとうね」

彼方さんが今回の俺たちの活動について感謝を述べるとしずくさんも便乗してお礼を述べる。

「いえ、俺たちはむしろ中川さんに……。せつ菜さんに不用意に突っかかるうとして状況を悪化しかねませんでした……。お礼を述べるべきは部外者ながらにも真摯に動いてくれた果林さんだと思います」

俺がそう反論すると彼方さんは頬をぷくぷくと膨らませて睨んでくる。

睨んでくると言ったが、果林さんほどの威圧感を放っているわけでもないのに逆に愛くるしさを感じる。

「むむ。彼方ちゃんはそういうことを言いたいんじゃないんです。確かに果林ちゃんも凄く頑張ってくれたけど、君がいなければせつ菜ちゃんに近づくことはできなかつたんだよ？」

「そうだよ。それに慎くんの言葉も私たちを奮い立たせてくれたんだよ？ こんな状況でも諦めちゃいけないんだって心から思えたんだもん」

「しずくちゃんの言う通り。今は二人の行動に感謝をしたいんだからそれは素直に受け取ってほしいな？」

二人からの賛辞の言葉に俺たちはたじたじになるばかりだった。

俺だけならともかく慎もこういうまっすぐな言葉には弱いんだな。「そういうことであれば素直に受け取ります」

「俺達も当然と思って行動しただけですけど、彼方さんとしずくが喜んでくれるのならばそれは何よりです」

「うむ、素直な子はお姉ちゃん大好きだぞ？」

そう言いながら彼方さんは俺の頭を撫でてくる。

「んんっ!? 彼方さん、頭を撫でるのは流石にやめてください!」

俺は咄嗟に後退りし、彼方さんのなでなでから逃げる。

「むふふっ、ごめんね〜？　ちよつとからかいたくなつちやつた〜♪」
そう言いながらも謝っている気が微塵も感じられない。

彼方さんも侮つてはいけないタイプだったことを失念していた。

「ぶはっ！　お前、本当によくからかわれるな！」

「ふふっ、輝弥くんは相変わらずだね」

「三人にしてなんなんですか〜もう〜!!」

久々のこのやり取りに恥ずかしさもあrittつ、また和やかな空気が戻ってくるのだなと実感が湧いて、思わず顔が綻ぶ。

その裏でとある少女に対する一抹の不安がしこりとして残っているままだったが。

想いは刃に

【菜々視点】

巴さん達がスクールアイドル同好会の再結成を直談判してきた日の夜、私はその日の授業で出てきた課題を片付けるために勉強机へ向き合っていた。

授業は真面目に受け黒板に書かれた内容も後で見返しやすくするように要点を抑えながらノートを取っていたので復習をする際には重宝している。

ですが、今日の私は調子が悪いみたいでした。

課題の量が多いわけではなく、いつもの私であれば三十分あればこなせるのですが、現時点で倍の時間が経過していました。

私がこうなっている原因は分かっています。

今もその原因となる言葉が私の脳内で音楽の如く繰り返し再生されています。

(同好会に入って……スクールアイドルを目指す人たちにしか歌えない曲を作りたいと……夢を叶えたいと本気で思えたんです……!!)

(それを貴女は……自分勝手な都合で……同好会を……!!)

(それだけって……あんた……そんな軽く言える口なのかよ!!)

「はあ……。私の事を慕ってくれていたというのに流石にこれは来るものがありますね……」

ときに音楽室で一緒の時間を過ごして親睦を深め、ときに悩み相談に乗って彼らとの距離を縮めていけたというのに、今日の出来事で全てが振り出しに戻ってしまった気がします。

いや、振り出しよりもマイナスからのスタートと言った方が正しいでしょうか。

「明日から彼らにどういう顔を向ければいいでしょうかね……」

彼らに対しての方便も考えながら私はふと押し入れと目を向ける。

「……………」

私はふと押し入れの取っ手を握り、中を物色する。

中には親に隠れてライトノベルやアニメのブルーレイを保管している。

アニメ鑑賞やラノベ読みは優木せつ菜の……もとい中川菜々の意外と見られる一面だが、私はそれをひた隠しにしながら今まで生活をしている。

こんな姿を見た両親や学校の生徒はどういう反応をするのか。

それを知るのが怖くて、誰にも打ち明けられず独りで趣味に没頭している。

だがそんなアニメグッズらが並べられている押し入れの中でもとりわけ目立つ存在となっているのが、スクールアイドルの衣装だ。

私は徐に衣装を手に取り感傷に浸る。

先日実施したライブで着た大切な衣装。

これを身に纏う事でいつもの私とは違う私が自分の中に入ってくる感覚。

中川菜々から優木せつ菜に切り替わる瞬間。

そしてこの衣装を着たライブは巴さん達に優木せつ菜を見せた決定的な瞬間であり、ここからあの二人の物語は進み始めた、という所でしようかね。

「菜々ー？ 入るわよー？」

物思いに更けていると部屋の外から母親の声が聞こえ扉をノックする音が響く。

「は、はい！ どうぞ！」

母の声が聞こえた瞬間、衣装を反射的に押し入れの中にしまい扉を閉めて勉強机に向き合う。

こういった緊急時は動きに無駄がなく洗練されているのは私だけではないと信じています。

「勉強は捗ってる？ はい、少し休憩したら？」

母はお盆にお菓子と紅茶を乗せ、差し入れてくれました。

「うん、勉強は大丈夫。今日は少し課題の量が多くてね」

「そう。無理はしないようにね」

母は差し入れを渡し労いの言葉を言って満足したのか部屋から去っていききました。

私は後ろから聞こえる扉の閉まる音が静まった瞬間、差し入れてもらったコップを机に置きベッドへと向かう。

そして、全身から力が抜けベッドに倒れこみます。

「はあっ……ここまで何もやる気が起きないのはいつぶりなのかな……」

酷く脱力感に襲われているこの感覚はいつ以来だろうか。

深夜に放送しているアニメをリアルタイムで見るのが楽しくてそれがきっかけで連日夜更かした結果、風邪を拗らせた時以来でしよ
うかね。

今ではそれを反省点に携帯で月額サービスのアプリを使ってアニメを視聴しておりますが。

それは置いておいて、他所事でやる気が起きないというのは私にとつては身に覚えがない事でしたが、実際に体感してみるとその力は
すさまじいものですね。

見ていたアニメでも好きな人に恋い焦がれ、勉強やスポーツが手に付かないという状況はありましたが今ではその気持ちが理解できて
しまいます。

まあ、私は今抱いているのは恋なんていう美しいものではなく罪悪
感という残酷なものです。

「……課題は明日の朝でもやれるし、それでやろうかな……」
そうして、枕に顔を埋め嫌なことを忘れるように眠りに着こうとす
る。

だがこういう時に限ってそんな簡単に夢の中という甘い楽園には
連れて行ってくれない。

忘れたくても頭に蘇るのは同好会のあの練習の後にあった出来事。

今でも昨日のように鮮明に思い出すのはスクールアイドル同好会を廃部にさせるきつかけとなったあの練習。

「スクールアイドルが大好きなんでしょう？ やりたいんでしょう？ こんな事で根を上げるようでは大好きを皆さんに届けることはできませんよ！」

一人前のスクールアイドルになるために今日も来たるライブに向けて練習にも熱が入っていました。

今は近くに迫っているライブに向けて練習をしていますが、ここで成功すればいずれはラブライブに出場して私が目指した理想のスクールアイドルになることが出来る。

その為にこのライブは失敗できないと思い、いつも以上に力が入っていました。

「でもっ……!!」

しかし、そんな私のやり方に反旗を翻したのは誰よりも可愛いを追及しているかすみさんだった。

「でもっ……こんな全然可愛くないです!! 大好きを届けるとかカッコいいを見せるとかではなくて、かすみんはもっと可愛いのがやりたいんです!!」

私はその言葉にはっとしました。

私はかすみさんのやりたい事や彼女の可愛い所をパフォーマンスや仕草に反映させたいと思い、向き合ってきたつもりでしたがその気持ち本人には届いていなかったのです。

「なっ……!」 それでは私が周りを見れていないみたいじゃないですか!! 私はかすみさんのやりたいことも尊重したうえで……!」

「あんなので尊重したなんて言わないで下さい! かすみんの今の気持ちも現に分かっていないじゃないですか! その発言が周りを見れていない証拠なんです!!」

私は自分の意見を伝えようと反論しようとしたがかすみさんに一蹴される。

そしてかすみさんから放たれた一言が私に衝撃を与えました。

(かすみさんの……今の……気持ち……?)

私は彼女の事を理解していたつもりでしたが、どうして私の想いが彼女に届いていないのか理解できませんでした。

そして、眉をぴくぴくさせながら反論しようとした時、その場の空気が止まった。

「もうこんな喧嘩やめようよ!!」

エマさんが普段の穏やかな声色からは想像できない程に、泣きそうになりながらも声を大きく上げていました。

「お願いだから、仲間同士で争うのはやめようよ……」

「エマさん……」

「エマ先輩……」

私はエマさんの訴えを聞き、金づちで頭を叩かれたような衝撃が襲ってきました。

自分の大好きを広めるために、皆さんの大好きを広めたいが為にやっていたことは所詮独りよがりだったことに気付いたのです。

「……私はっ……」

自分の愚かさに歯痒さを隠せませんでした。

そして、それと同時に皆さんからの目が怖くなりその場から逃げるように屋上を立ち去ろうとしました。

「せつ菜さん……!」

「今日の練習は……これで終わりにします……。皆さん、気を付けて帰って下さい……」

しずくさんから待ったの聲がかかるがそれを振り切り、練習を終える連絡だけ残し私は屋上から姿を消すのでした。

私は屋上から逃げるように部室へ戻った後、人目に付かないように物陰へと隠れました。

「はぁ……はぁ……!!」

先ほどまで私が皆さんに行っていた所業がフラッシュバックする。

私がやりたかったのはこんなひどい事じゃない。

私がやりたかったのはもっと楽しい事。

皆さんと素敵な青春の一ページを刻むことだったのに。

その大切なページを私自身の手で無残に引き裂いていた。

「私は……自分の大好きを貫こうとして……皆さんの大好きを……否定していた……。こんなことで……理想のスクールアイドルになれるわけがない……!」

私は物陰で蹲り、涙がこみ上げてきた。

私が泣いていいはずがないのは分かっている。

一番泣きたかったのはかすみさんやエマさん達のはずだ。

だが、そう思っているにも相反するように身体の中の水分が涙となって外へと出ていく。

「ううっ……うわああああ……! ひっく……う

わああああん……」

外に漏れないように泣き声を上げる。

独りしかいない部室ではその声がひたすらに反響していた。

否が応でも私の耳に入ってくる。

「こんな……こんなことをしたかったわけじゃないのに……!!」

今になって途轍もない罪悪感が私を苛んでくる。

頭の中に浮かんだ同好会みんなの笑顔が狂気と苦痛に満ちた顔へと変わっていき、それが私の精神を抉ってくる。

「……ようやく分かりましたか?」

私しかいない部室の中で一人の少女の声が聞こえてくる。

「貴女のやろうとしていることは誰かのため、なんていう綺麗事ではないんです。自分勝手に同好会の皆さんを巻き込んで混乱に陥れただけなんですよ」

少女は容赦のない言葉で私へ事実を突きつけてくる。

嘘紛れのない真実に私は弁解のしようがなかった。

「貴女は昔言っていましたね? 人の喜ぶ顔が見たいと。そのために自分が大好きとまっすぐに向き合わなければ誰もついてこないと」

私は徐にその場で立ち上がる。

そして、部室に用意していた全身鏡の前に立つ。

「ですが、現実とは違ったんですよ。そもそも貴女の後ろには誰も付い

てきてなかったんです。貴女が後ろを振り向かず前しか見ていないから、誰もいないんですよ」

「ええ。私も今になって……それを痛いほど実感しました」

少女の言葉に合わせるように私も言葉を紡いでいく。

「私が皆さんを引つ張っていけば素敵な未来を作っていける。そんな傲慢な考えを私はいつの間にか持つていたのでしようね」

「はい。そんな貴女に誰が付いてきたいと思いますか？」

「ええ、いるはずがないです。私でさえも嫌悪感を抱いてしまったのですから」

「……なら、どうしますか？」

少女の問いに私は間髪を入れず答える。

「……貴女ならそれを聞かずとも分かっているでしょう？ もう一人の私なんですから。」

ね？ 中川菜々さん。」

全身鏡を見つめ、そこには私が映っていた。

いや、これが優木せつ菜なのか、中川菜々なのかは本人でさえも分からない。

「決まっています。私はスクールアイドルをやるべきではなかったんです。私は誰かを支えられるような力を持っていない。誰かのヒーローには……なれない……」

「優木せつ菜さん……」

鏡に映る中川菜々は私の名前を呼びながら涙を流していた。

「ふふっ……貴女の涙を見るのは……ひ、久々ですね……。私に同情しているんですか……？」

中川菜々は頬を涙で濡らしながらも返答をしない。

「……まあどちらでもいいです。生徒会長、中川菜々さん。私のお願いを聞いてください」

「……どうぞ……」

「私……優木せつ菜は……スクールアイドル同好会から退部します……。退部手続きを……させて下さい……」

「……っ。貴女がそれで良いのであれば私はそれを止めません。この

後、生徒会室へ来て下さい……」

そして、中川菜々は私の脳裏に焼き付けるように最後に言葉を言い残した。

練習着のポケットからヘアバンドを取り出して、三つ編みのお下げに髪を戻しながら。

「さようなら、優木せつ菜さん……」

こうして優木せつ菜はスクールアイドル同好会から去ることとなった。

ベッドで追憶に更けていたらいつの間にか枕に濡れ跡が残っていた。

まだ湿り気を感じるので、時間はそう経っていない。

「私には……あそこにおいていい資格はないんです……」

そうして、私は夢の中へと誘われるのだった。

今度は何の障害もなくすんなり眠ることが出来た。

本編『最強のスクールアイドル加入』 切っても切れぬもの

「……………」

同好会が活動再開となった一方、せつ菜さんの事が気がりとなり気分は晴れることはない。

家に着いても雲が晴れることはなかった。

部屋で勉強机へ向き合い、頬杖を突きながらこれからの事を考えていると扉をノックする音が聞こえてきた。

「輝弥？ 入ってもいいかしら？」

「姉さん？ どうぞー」

入室許可をすると部屋着姿の姉さんが入ってきた。

手には差し入れ等を持ってきている様子はないので労いに来たようには見えなかった。

「姉さん、どうしたの？」

「貴方、今日帰ってからずっと機嫌が悪かったから何かあったのになって思っただけ」

確かに今日家に着いた時、いつもと声色が違っていたしご飯を食べている間も姉さんからの話題振りに空返事をしていたので姉さんはそれが気になったようだ。

「ああ、ごめん。ちよつと今日学校であまり気分が良くないことがあって……………」

「もしかして……………いじめとか……………？」

「いや、そういうのじゃないよー！」

姉さんからの問いに濁すような言い方をしてしまい、姉さんは少し不安を滲ませた声を上げる。

俺は否定するように声を被せて言葉を続ける。

「実はとある同好会の部長さんが退部しようとしてるんだ。その人はそれを大好きで始めたのにいざいざが原因でその大好きをやめようとして……………折角やりたいことを真っ向から挑戦できてその人に

とって幸せな時間がやってくるのにこんな形で幕を閉じてしまうなんてあまりにも酷だから……」

俺はせつ菜さんの姿がフラッシュバックしながら姉さんに問いかける。

「……姉さんは今の演劇同好会で自分がやろうとした事がきつかけでその同好会がバラバラになったら、それでも演劇の事を好きでいられる?」

「自分のやろうとしたことがきつかけで……ねえ……」

姉さんは俺の問いに対して返答を考えながらベッドへと腰掛ける。

「私は……その場では嫌いになっても永久に嫌いになることは出来ないと思うな」

「たとえ大切な仲間との間に亀裂が走ったとしても?」

「それでも、よ。私は両親や祖母の舞台で煌めく姿を見て演劇が好きになった。そして、それが今の私を形成するきつかけになったんだもの。憧れとして抱いていた夢をこの手で叶えることが出来たからその喜びは何物にも代えがたいもの」

「……………」

姉さんのまっすぐな言葉に俺は何も言わず耳を傾ける。

「それにね? もし嫌いになっても何かきつかけがあればそれが引き金となってもう一度舞台に立ちたい、演劇をやりたいっていう熱が再燃するのよ。だから何者にもこの関係を引き離すことはできない、私は舞台とは切っても切れない関係になったと言っても過言ではないと思うわ」

そうだ、姉さんはこういう人物だ。

一度好きになってしまったものは決して離さない。

舞台の事も、姉弟である俺の事もずっと想い続ける一途な人。

こんな人が舞台を嫌いになったらこの人から何が残るのだろうか、そう考えてしまうほどに巴 珠緒という人物は演劇、舞台で形成されておりの人生は彩られているのだ。

「ははっ、流石舞台バカってところだね」

「ちよっと。バカって言うのはひどいんじゃない?」

俺は姉さんが舞台に染められた女だったことを冗談交じりに弄る。
姉さんは俺の言葉を真に受けずに流していく。

「でも……ふふっ、違うわね」

そう言いながら姉さんは笑う。

「やっぱり……好きに対してはそういう考えになるのが普通なんだね……」

「誰だってそうよ？ 輝弥だって、ピアノを弾くのが好きって言うたでしょ？ それを何かのきっかけでやめることになっても貴方からピアノという存在を完全に消すことは出来る？」

「それは……無理だね」

俺は苦笑しながら答える。

俺からピアノが無くなったならそれこそ何も価値のない浅はかな人間になってしまう。

ピアノへの熱が冷めてしまったとしても思わぬ所から引き金は現れ、その価値に縋ろうとして思わず手をかけ、自分の意思でトリガーを引く未来が見える。

「でしょ？ それと同じことよ」

「そっか……」

俺は心のつつかえが取れ気分が少し晴れる。

「それにね？ 高校生は好きなことを好きに挑戦できる時間が沢山あるの。その大切な時を好きなことに使わずにいるのって凄く勿体ないしこの後の人生で絶対後悔するわ」

「……!!」

姉さんの一言に俺は雷の如く衝撃が走った。

高校生活は人生に一度きりしかない。

こうしてスクールアイドルの魅力に気付くことが出来たのもこの一回きりの人生では想像もできない運命だ。

俺はこの学校で悔いのない高校生活を送りたい。

今までみじめだった自分が誰かを照らす光になれるチャンスなのだ。
だ。

そんなチャンスを、俺を引き入れてくれた人と一緒にやりたい。

「なるほどね……。姉さん、ありがとう」

「ふふっ、ようやく意志は固まったみたいね。……にしても貴方がそこまで熱心になるなんて余程いい部活動に出会えたのね?」

姉さんは俺の踏ん切りの付いた顔を見て全身の力を抜く。

だが、それとは裏腹に今度は自分の番と俺へジト目を向けながら質問してくる。

「えっ!? まま……まあ……ねえ……?」

「ちなみにどこの部活なの?」

「えっ……と……」

俺は途端に口を噤む。

姉に対してスクールアイドル同好会と答えるのが滅茶苦茶恥ずかしい。

笑われるような気しかななくて今すぐにトイレにでも駆け込みたい。

駆け込んだら逃げ道はなくなってしまうが。

ここでじたばたしても埒が明かないので俺は心を決める。

自分で決めた道だ。笑われてもいい。

「……ス……スクールアイドル同好会……」

「……………」

姉さんは口を閉じたまま俺を見つめる。

石像みたいに固まってしまったため何かリアクションはしてほしいものだ。

「ス、スクールアイドルっていうのは、高校生がやるアイドル活動だよ。つて言っても俺はアイドルになるわけじゃなくてアイドル志望の人を手助けするサポーターみたいな位置でやりたいなってこと!」

「輝弥が……ステージに立って歌うわけじゃないのね……?」

姉さんは表情を変えずに質問を続ける。

だが、姉さんは無機質な返答を行っているつもりだろうが俺には少し憂い帯びたような声色に聞こえた。

「歌うつもりはないよ。俺は自分の音楽を紡ぎたくてここに來たし、それを叶えられる場所がここにあった。俺は……姉さんみたいに出

来た人間じゃないから」

「……誰もそんなことは一言も言っていないけど？　でも……素敵なところじゃない」

「えっ？」

姉さんから感嘆の声が聞こえ俺は思わず聞き返してしまった。

「だって貴方が自分自身の意思でそれをやりたいって言ったじゃない。今までずっと私の後ろを付いて来ていた貴方が自分の手で好きなことを、やりたいことを見つけた。それはもう巴　珠緒の弟じゃない一人の巴　輝弥の人生のスタートよ」

「姉さん……ありがとう」

姉さんはこういう人間だ。

自分の意思で決めた道を決して笑って邪魔することはない。

むしろそれを応援するためにいつも背中を後押ししてくれる。

姉さんが傍にいてくれるから俺は自分のやりたいことを見つけることが出来たのだ。

「でも、少し悔しいな。昔は、貴方がピアノを弾いて私がそれを歌うのが夢なんだって言ってたのに……これじゃ先を越されちゃうわ」

「なっ！　む、昔の事は掘り返さなくていいでしょ！　別に……姉さんとの夢を諦めたわけじゃないし……」

俺は昔姉さんに語った夢を思い出して恥ずかしさが増していく。

だが、姉さんと何かを一緒にやりたかったのは間違いないし今は平行線で歩いていてもその道がいつか交わることを信じて、夢を諦めないことも伝えておく。

「そう？　ならその時を楽しみにしておくわね」

そう言い残すと姉さんは部屋の外へと出ていく。

心の内に秘めた小さな願いを吐露しながら。

(もう貴方は……あの時の輝弥じゃない……。私は……信じてるわ……)

姉さんが部屋を出たのを確認すると俺はふと思いついたようにケータイを取り出し、とある動画を探すのだった。

姉さんとの姉弟話に花を咲かせた次の日、俺は昼休憩が始まったと同時にとある場所へと向かおうとした。

「輝弥ー？ 食堂に行かないのか？ しずくと一緒に食べないかって誘ってきてたけど？」

「あつ、ごめん。少し野暮用があるから先に行つてて」

「ふうん、分かった。しずくと待つてるから、ちゃんと来いよな？」

慎は特に詮索することなくお腹を満たそうと食堂へと足を運んだ。

俺は慎がいなくなったのを確認すると目的の場所へと向かった。

「ありがとうございます」

俺は生徒会室へ行き、音楽室の使用許可書を貰う。

今日は中川さんは不在だったので副会長さんに印鑑を貰った。

音楽室へ着いたらピアノ用の椅子へと腰を掛け、鍵盤蓋を開ける。

俺は弾く前に気持ちを落ち着かせるために一旦深呼吸をする。

「うまく弾けるか分かんないけど……」

そうして、俺はいつもとは違う曲を弾き始めた。

優しいイントロから始まる、俺がこの道に歩ききつかけをくれた曲。

あの人の曲は聴くだけでも自分の夢を後押ししてくれる力をくれるがそれはこうして弾いてるときも同様だ。

あの人の歌声が自然と聞こえてくるような感じがして凄く勇気が湧いてくる。

本当に優木せつ菜というスクールアイドルは凄い。

やっぱりあの人はこんな所でくたばっていい存在ではないと痛感させられる。

そして、それと同時にどうやってあの人をもう一度奮い立たせることが出来るかを考えていると、知らない人から声を掛けられる。

「ねえねえ!! 今のつてもしかしてCHASEだよね!」

黒髪をツインテールにした女子生徒が音楽室の前で鑑賞していたようだ。

胸のリボンはピンク色をしているので二年生のようだった。

「わあ！ しかも男の子だ！ 綺麗な髪だから女の子が弾いてるよう
に見えてた……！」

「……それは男の僕に対してだ！ 失礼な発言じゃないですか？」

ついに可愛いから女の子にレベルアップしてしまった。

全く、他人からの俺はどう見えてるんだ。

「つてあああ、ごめんね！ 悪気はなかったの！ 私のクラス男子い
ないからさ……ちよつと珍しく見えちゃって……」

元気に喋ったと思つたら失言してしまったことに対して深く頭を
下げてる。

中須さん並みに感情の起伏が激しい気がする。

「貴女のクラスには男子はいないんですか？」

「うん、つていきなり突っかかってごめんね。自己紹介がまだだつた
ね」

そうすると女生徒は俺に向き直り、挨拶を交わす。

「私、普通科二年の高咲 侑！ よろしくね！」

侑さんとの出逢い、それはこれからの同好会の動きに大きな変革を
もたらすのだつた。

似た者同士の共振

「私は普通科二年の高咲 侑！ よろしくね！ 貴方は？」

侑先輩が自己紹介をしてきたので俺も併せて自己紹介をする。

「僕は音楽科一年の巴 輝弥です。よろしくお願いします。侑先輩」

「あはは、そんな堅くならなくていいよ！ よろしくね、巴君！」

俺は相手が上級生だから堅苦しく挨拶をするが、侑先輩はそれをむず痒く感じたのか頭の後ろを搔く。

「そ、そうですか？ では侑さん……で呼ばせてもらいます」

「うんうん、それくらいが私も丁度いいかも」

上級生に対して先輩付けせずに名前呼びするのは忍びないが本人たつての希望とあればそれを無下にするわけにもいかない。

「にしても侑さんのクラスは普通科なのに男子はいないんですか？」

「そうなんだよね。他のクラスは少数だけれどもいるのに私の所だけはゼロ。すごい偶然だよ。輝弥君の所も？」

「どうなんでしょうね。僕のクラスは僕ともう一人いるくらいで同じ学科では聞いたことがないですね。人から聞いた話だと普通科には少しいるって聞きましたけど……」

「やっぱりこの学園は女子の方が人気高いからそれだけの差が出てくるってことだね」

侑さんと他愛無い会話が続く。

この人、変に気を遣わず自分のペースに合わせてくれるから凄く話しやすい。

あと、さつきまで苗字呼びだったのにもう名前呼びに変わっていた。

俺が名前呼びに変えた影響なのだろうか。

そこまでされると返って気を使ってしまう可能性が高いが。

「あっ!! ってそんなことを話に来たんじゃないよ!!」

何かを思い出したかのように侑さんは突然大声を上げる。

理由は一つしか思い当たらない。

「さつきの曲、CHASEだったよね?! もしかして輝弥君も優木せ

つ菜ちゃんのファン!?」

侑さんは突然目にハートが映ってるんじゃないかと思わせるくらいに目を輝かせながら接近してくる。

更には意識していないのか手まで握ってきているのでこの人の熱量は相当なものだという事が伝わってくる。

「えっ? ええつと……!」

「うんうん、言わなくても分かるよ! いいよねCHASE!! いや、CHASEだけじゃなくてせつ菜ちゃんもだけど、あの子見ると凄く力が湧いてくるよね!! 私もこの前のライブ見てからせつ菜ちゃんのファンになっちゃってね……!!」

俺が侑さんへの回答にしどろもどろになっているがお構いなしに侑さんのマシンガントークが炸裂する。

しかもどんどん顔も近づいてきて、ついにはお互いの鼻があと数センチで当たるといふ所まで来ている。

ここから感じる彼女の鼻息の荒さは尋常ではなかった。

「あの……ち、近いです……!!」

「あつ!? ご、ごめんね……つい熱くなっちゃって……! いやあはは……分かる人が見つかったことがすごく嬉しくてつい舞い上がっちゃった……!」

侑さんは自分の行いを思い出したのか顔をほんのり紅潮させながら手を後ろでもじもじさせている。

こんなことされたら男子は普通に騙されてしまうから侑さんは天然たらしの素質があるのかもしれない。

「そ、そんなに落ち込まないで下さい! 自分もちよつとびっくりしただけなので……!」

俺は侑さんが手を離れたことに少し残念な気持ちになる。

だが、そんな煩惱は切り捨てて、先ほどの侑さんの発言に気になる所があった。

「それと……この前のライブ……と言うと……?」

「あれ、知らない? 先週、ダイバーシティのフェスティバル広場でやってたライブなんだけどねー?」

俺はそこで少し眉をしかめる。

それは俺とこの人は同じ時間を共有していたと確証付けるものだったからだ。

「優木せつ菜さんのお披露目ライブ……ですよね？」

「ああ……そう……なのかな？　ごめんね？　私、途中から参加したからライブの趣旨をあんまり知らなくて……あはは……」

侑さんはそう言い後頭部に手を当てるが俺の発言に気になった箇所があつたのか、それをやめて俺にまた一歩近づく。

「つて輝弥君知ってるの!？」

「知ってるも何も僕もそのライブに参加してましたから」

「ええー!!　そうだったの!?　………はっ!　そういえば確かにニジガクの制服を着た男子生徒を見たような……?」

侑さんはこれまた大きなりアクションで驚くがすぐさま先日のライブを思い出すように手を顎に当てて思慮していく。

「と言つても僕も侑さんの事はあまり覚えていないですから、それはお互い様ですよ」

「そっか……」

侑さんはまだ腑に落ちていないようで不完全燃焼のままだったが、考えても仕方ないと思つたのか話題を元に戻す。

「輝弥君はどうしてライブを見に行つてたの？」

「僕は大した動機じゃないんです。スクールアイドルの事はあんまり詳しいわけじゃなかったんですけど、ある人に近々ライブが開催されるから一度行つてみては？　と提案されたんです」

「そうなんだね。実は私もスクールアイドルの事はあんまり知らないんだ。あはは、私たちってなんだか似てるね」

侑さんの言葉に俺は凄く共感を得る。

お互いスクールアイドルを詳しく知らず、動機は違うけれども同じライブに偶然参加していた。

こんな奇跡は早々巡りあう事は無いとおもう。

「ふふつ、そうですね。という事は侑さんもスクールアイドル同好会に入ろうと思ってるんですか？」

「うん。友達とライブを一緒に見て、お互いにときめいちやってね……。私はアイドルとしてじゃなくて、みんなを支える立場で参加したいなって思ってたの」

「侑さんもなんですね。僕も同好会に入るつもりなんです。と言っても侑さんと同じようにアイドルではなくマネージャーとして活動していきななって思ってますが」

「輝弥君もそうなんだ！でも輝弥君っていい顔立ちだからスクールアイドルに向いてると思うけどなあ」

「ぼ、僕なんかがステージに出ても誰も喜びませんよ……。それを言うなら侑さんも素敵な方ですし……」

「な、何を言ってるのさ、君はー？私なんかじゃ人の応援なんて出来ないから私こそ誰も喜ばないよ……」

お互いが褒めて謙遜してと繰り返していたが、突然空気がだんまりする。

だが俺はその空気に耐えられず思わず笑いがこみ上げてくる。

それは侑さんも同じようだ。

「ぶっ、あはははは。なんだか私たちって結構似た者同士だね」

「ははっ、本当にそうですね。なんだか近い存在に感じます」

初対面でここまでウマが合う人は全国で見ても雀の涙ではないだろうか。

「なら一緒にスクールアイドル同好会を駆け抜ける仲間としてこれからよろしくね」

侑さんはそう言うと言手を差し出してきた。

「……はい、こちらこそよろしくお願いします」

俺は差し出された手を握り返す。

自分よりも小さいながらも握る力は強いその手からはこれから走っていく道を駆け抜ける自信に満ち溢れているようだった。

すると、ポケットに入れていた自分のケータイが振動し始めた。

「ん？なんだろう、すみません」

侑さんに一言断りを入れケータイを覗くと慎から電話通知が出ていた。

「あつ!! しまった、昼ごはんの事忘れてた!! すみません、友人とお昼を取るので僕は先に失礼します!」

「ああ、いいよ。呼び止めちゃってごめんね? 私の事は気にしないで行つてきなよ」

そう言う俺は鞆を持ち、侑さんに頭を下げて音楽室を去つていった。

【??? 視点】

今日の昼は校内の見回りをやって、終わったら昼休憩を取るつもりだった。

昨日、あの出来事がフラッシュバックしてからすぐに寝つけたはいものの朝の目覚めは良くなかったので午前中は少し瞼が重かった。

午後の授業を真面目に聞くために気分転換がてら見回りと称して散歩をしていた。

今日は教室棟を見回っているがふと聞き覚えのある音楽が聞こえてきた。

「ん? この曲は……?」

今となつてはあまり聞きたくない私にとっての大切な曲のメロディが流れてきた。

だが、メロディと言つてもそれは一個一個音を叩いてる幼稚園児の音楽教室で聞こえてくるような拙いものだ。

いつもピアノの音が聞こえてくるとすればとある少年を頭に浮かべるが、この旋律を聞く限りだとどうやら彼ではない。

私は音楽室の前に着いたので中を覗くと、過去に数回顔を合わせている黒髪をツインテールにした女の子がピアノの椅子に座っていた。

【侑視点】

音楽室から聞こえてきた素敵なメロディで私は前に感じたトキメキが胸の中で再燃していた。

ここであつた子は輝弥君と言つて若々しい一年生だけだよって聞いたことは一年生のレベルではないと思う。

CHASEをピアノであんなに完璧に弾けるって早々いないのではないだろうか。

ましてや話を聞けばスクールアイドルやせつ菜ちゃんの事も全く知らなかったという点も驚愕の事実だ。

私はただ歩夢の事を応援したくてスクールアイドル同好会に入ろうとしていたけど、彼の存在を見ると自分の存在価値が薄らいでしまうのではないかと少し悪寒が走ってしまう。

彼の才能に比べて私は特筆すべきものが何もない寂しい女だ。

こんな私でも役に立つことはないのだろうか。

そう思考したとき、ふとピアノが目に入った。

私が彼と同じ土俵に立てるとは思っていない。

むしろそう考えることは烏滸がましく、輝弥君に対して失礼だ。

だけど、私も歩夢の為に、かすみちゃんの為に、みんなの為に私の出来ることをやってみたい。

そう思った瞬間、私の腹は決まった。

思い至ったが吉日、何事もやってみなければ分からないんだ。

ピアノの椅子へと腰を掛け一つ一つの鍵盤を叩いてみる。

何の変哲もない無機質な音が教室内に響く。

これを世間のプロは両手を駆使して一つの音楽を創っているのだ。

こうしてみると改めてピアノが出来る人って尊敬してしまう。

私は自分を変えるきっかけとなった曲の音を一音一音ピアノから聞こえてくる音を頼りに鍵盤を指で叩いていく。

最初は何の曲を弾いているのか自分でも分からないものだったが、少しずつ使う音が分かってきたら少し楽しくなってきた。

今までスクールアイドルとは、音楽とは縁の遠かった私が少し近づけた気がする。

そして、何回も練習を重ねる内にサビのメロディを拙いながらも弾くことが出来た。

まだ兩人差し指で弾くことしかできないけれども、私の好きな曲を弾くことが出来た事実は初心者である私の心を奮い立たせるには十

分だった。

彼がいなくなつてから笑うという感情を捨てていたが、せつ菜ちゃん体が張つて刻んでくれた胸のトキメキのおかげで笑顔を取り戻すことが出来た。

「……………どうしてその曲を……………?」

一人、ピアノに向き合いながら笑顔になつてしていると聞き覚えのある声が耳に入ってきた。

「……………ん? って、うわああ!! 生徒会長ー!?!」

音楽室の前には生徒会長である中川さんが立っており私の方を凝視していた。

少し顔が強張っているように見えるのは気のせいだろうか。

「何をしているんですか、高咲侑さん。ここを使用するには使用許可書が必要です。生徒会に通してらるんですか?」

「ええつと……………その……………」

生徒会長は音楽室に入ってくるなり私にお叱りを授けるのだった。そもそも音楽室を使うのに申請書があるなんて聞いたことなかったから、音楽の事で一杯だった頭の中が一瞬で真っ白にぬりかえられてしまった。

どう弁解しようか考えているとふと黒板に貼つてある紙が目に残った。

生徒会長も私の目線を追うように黒板に目を向ける。

「何を余所見をしているんですか? ………………って、これは……………」

生徒会長は黒板へ近づき貼付してある紙をはがす。

その紙には”音楽室使用許可書”と書いてあった。

そのこの使用者欄には見覚えのある名前が書いてあった。

「……………巴……………輝弥……………」

どうやら知り合いからの呼び出しに焦つてしまったが故に許可書の内容を忘れてしまつていたようだ。

「……………彼も来ていたんですね……………」

「えっ?」

生徒会長が何かボヤいていたが不意であつたが為に聞き取ることに

が出来なかった。

「……見たところ巴さんの姿はありませんが彼はどこに？」

「あつ、友達に呼び出されてたよ。一緒に昼食を取るって言ってたのに忘れてたー！ って言って、鞆を持ってそのまま行っちゃった」

「なら、彼が戻ってくることはなさそうですね」

生徒会長は輝弥君の事に呆れつつも笑っていた。

まるで無邪気にはしゃぐ弟を見守るお姉さんのようだった。

「輝弥君の事を知ってるの？」

「へ？ え、ええ……まあ……。彼はよくここでピアノを弾くために使用許可書を貰いに来ますから、それで少し」

生徒会長は一瞬鳩が豆鉄砲を食ったような表情をしたが、すぐにも通りに戻った。

「へえー、輝弥君はもうこのルールも知ってるんだね」

「はい、彼も貴女と同じように最初は許可書無しに無断で使用していましたからね」

「あはは、そうなんだね」

「ここでも私と輝弥君の奇妙な偶然が重なった。

ここまで運が連なることはあるのだろうか。

「そういうえば、生徒会長はどうしてここに？」

「校内の見回りです。昼休憩の日課として不審なことがないか監視していたんです。そして近くを通った時にピアノの音が聞こえたので覗いてみれば貴女でしたから驚きましたよ」

「あつはは……私も輝弥君のピアノを聞いてたらちよつと興味が湧いちゃって……」

私は生徒会長からの苦言に思わず頭を掻いてしまう。

にしても、こんな時間まで見回りをするなんて本当に生徒会は毎日忙しいんだなと実感する。

だが、先ほど私の事を見て呟いた言葉が私には引っかかっていた。

「あつ、そういうえば、さっききどうしてその曲を……って言ってたけど……もしかして生徒会長って……」

優木せつ菜ちゃんのファンですか!？」

私は生徒会長がせつ菜ちゃんの曲を知っていると思い、容赦なく生徒会長の手を握る。

その目の中のハートが脈動しており純真な眼差しで生徒会長を見つめる。

「ええ!? いやあ……あのお……」

「もうそうならそうだと早く言ってくださいよ! こうしてせつ菜ちゃんの事を知ってる人と会えてうれしいんですから! せつ菜ちゃんの事、どこで知ったんですか? CHASEっていい曲ですよね! 生徒会長は他にもせつ菜ちゃんが歌ってる曲を知ってるんですか? もし知ってるなら教えてほしいです!!」

「あ、あの! ……ち、近いです……」

気が付けば生徒会長と鼻があと数センチで当たるという所まで顔が近づいていた。

そして、さっきの輝弥君の時と同じようにマシンガントークが炸裂してしまい、生徒会長は少し顔を赤くしていた。

「あっ……あっはは……ごめんなさい……」

私はこの癖が抜けることは当分ないんだと痛感し、思わず涙が出てしまうのだった。

星屑の結集

【輝弥視点】

「あつ、やつときたじやねえか。つたくどこで油を売ってたんだよ。」
音楽室で侑さんと長らく雑談をしていた関係で昼ご飯をすっぽかしていたため、慎に呼び出しを食らってしまった。

案の定、慎は少しご立腹だった。

「ごめんごめん。ちよつと用事を済ませてただけだから」

「にしても、昼休憩はあと30分だぞ？ 何が“ちよつと用事”をだよ」

「まあまあ、慎くん。あまり言わないであげて？ まだこうして時間は残ってるんだしさ」

慎がぶんぶん怒っていると一緒にいるしずくさんがそれを宥める。

なんだか手懐け方が手馴れているようにも感じるのは気のせいだろうか。

今日はこの席にいたのはしずくさんと慎の二人だけだった。

「しずくさん、ごめんね？ 折角のお誘いだったのに……」

「ううん。気にしなくていいよ。私も急に誘った身だし先約があったならば仕方ないよ」

「ふくん？ さつき、輝弥が遅れて来ることを知って明らかに落ち込んでたやつの発言とは思えない程達観してるな〜？」

しずくさんは遅れたことに対して咎める事なく笑顔で微笑みかけてくれるが、慎は目を細めながらしずくさんに悪態をついている。

「ち、ちよつと慎くん！ 本人の前では言わないでよ!!」

にやけながら煽る慎に対ししずくさんは顔を真っ赤にする。

「あつはは……そこまで楽しみにしてくれてたのにごめんね……？」

俺は2人の反応に対してどう返せばいいか困惑しつつも当たり障りのない回答をする。

「……はあつ……そういう事を言ってるんじゃないけどな〜……」

慎は俺の反応を見て途轍もなく大きいため息を吐く。

慎に冷たい態度を取られるが、俺としてはしずくさんの反応を見て

早とちりする方が余程嫌なのでこういった態度を取っているのだ。

まあ、慎も俺の反応を楽しみにしているが為にそうばやいているのだろうが。

「そういえば、しずくさんからお誘いとは珍しいね？ 何かあった？」
不貞腐れる慎は放っておいて、しずくさんに誘いの意図を問う。

普通の男子であればこんな美少女にご飯を一緒に食べようなんて誘われたら舞い上がること間違いなしだ。

しずくさんが俺にそういった感情があるとは露にも思っていないが、やはり気になってしまるのが男の性というものだ。

「深い理由があったわけじゃないの。一緒に部活をやることになったけどまだ二人のことをあんまり知らなかったから親睦を深める意味を込めて、ね」

確かにひよんなことから入学初日に知り合ったしずくさんと俺たちだがこうして一緒に食事を取ることもなかったしどういった日常を過ごしているのかも知らない。

「そうだね。まだしずくさんの事も演劇以外で知ってるかと言われたら全くもって皆無だし嬉しいよ」

しずくさんともこれからは部活の仲間として同じ時間を共有するのだ。

個人的にウマが合うんじゃないかと思ってる彼女の事をもっと知りたいし、困った時に頼ってもらえる存在にもなりたい。

そんな事を密かに思いながら、心が昂っている自分がいた。

「でも、慎は一緒に部活に入るとは言っていないからちよつとだけ違うけどね」

「えっ？ あ、ああ……そうだな」

しずくさんが部活仲間として慎も入れていたが彼はスクールアイドル同好会に入るとは言っていないので訂正を入れておく。

とは言うものの当の本人は虚をつかれたのか突然我に返って返答する。

「そういえば、慎はどの部活に入るかは決めたの？」

「うーん、ある程度は絞っているけどまだ本決まりはしてないなあ

……」

スポーツ万能タイプである慎のことだ。

元々やってた所に入るとかありそうだけど、ここ最近は俺の都合に付き合わせている。

そのため部活を見る時間もあまり無いから部活選びに関しては中々難儀させている事だと思う。

「慎くんは元々何か好きなこととかあったの？」

「うーん、とりわけこれが好きってやつは無いけど……ぎっくり言えば体を動かすやつは好きだな。嫌なことがあつた時はそれで気分転換になつたしな」

「そういえば、慎はスクールアイドルの事とか知つてたじゃん。あれは妹さんの影響なの？」

「へえー、慎くんつてスクールアイドルの事も知ってるの？ しかも妹さんもいたんだね！」

「ま、まあ……そうだな……。スクールアイドルの事は妹から聞いたしそれでちよつと勉強した……」

慎はまたも触れてほしくないかのように態度が一変する。

それでも俺としくさんの好奇心はそれを気にも留めずに増していく。

「そうなんだね！ 妹さんは今いくつになるの？」

「確か中二になるつて言つてたよな？ 妹さんもこの学校に来るつもりなのか？」

俺としくさんの質問責めに慎は顔を俯かせ顔を震わせていた。

「……………てくれ……」

「えっ？」

「その話題はやめてくれ……。俺は……この話は好きじゃないんだ」

慎は拳を震わせていた。

これ以上その話題を続けようものなら手を出すと云わんばかりに表情も暗く重いものになつていた。

「あつ……ごめん。妹さんのことを話題に出すの駄目だったか」

「私も慎くんの事情を考えずに……ごめんなさい」

「いや……二人が謝る必要はないさ……。俺がそう言わなかったのが原因なんだし。むしろこつちがごめん。折角一緒にいるのに空気を悪くしちゃって……」

「慎が触れたくない話題について続けても慎が楽しくないだろうからむしろ言ってくれてありがとう。今までも俺がこうやって妹さんの話題を出してた時も無理して喋らせちゃってたんだしだいぶ酷なことをさせてたね」

自分がしたくない話を他人がやっていたら胸糞悪くなってしまうのは間違いないのに慎は平静を装って対応してくれていた。

無理させてしまっていたようで感謝と共に申し訳なきが込み上げてくる。

「輝弥、そう言うのはやめてくれよ……。こんな空気にしたくて言つたわけじゃないんだし気を遣ってほしいわけでもない。ただ……普段通りの穏やかで楽しい時間を過ごしたいだけなんだ」

「慎……そうだな。俺もこれからは気をつけるよ」
人には触れられたくない過去がある。

それに土足で踏み込む愚か者にはなりたくない。

俺は慎がいつかその心の闇を打ち明けてくれる日を信じて待つことにする。

お互いの事を親友と呼ぶにはまだまだ遠い話になりそうだ。

慎に対してまた一つ理解できた所でケータイのバイブレーションが鳴り響く。

「ん？ 私のケータイ？ ちょっとごめんね」

それはしずくさんのスマホから発せられていた。

しずくさんは俺たちに一言断りを入れて通知元を確認するとすぐ俺たちに向き直る。

「輝弥くん、今日の放課後に生徒会室へ入部申請を出す前にちよつとだけ時間いいかな？」

「うん、いいけど……何かあった？」

「作戦会議の招集が掛かったの」

しずくさんは微笑みながら答える。

真意が見えないその笑顔を前にして、俺は吉報である事を願うのみだった。

しずくさんからの呼び出しに一抹の不安を覚えつつ、放課後を迎える。

「輝弥、しずくからの呼び出しがあつたけど行くんだろ？」

「正直嫌な予感しかしないけど呼び出しが掛かったのならば行くしかないでしょ」

軽くため息を吐いて苦笑いを見せると荷物をまとめて出発しようとする。

「そういうえば、慎はどうする？　今までは俺の都合に付き合わせちやつてたけど他の部活とか見に行く？」

俺の問いに慎は少し考える素振りを見せる。

「いや、特に今は入りたい部活とか無いから邪魔じゃなければ付いて行ってもいいか？」

「それはいいけど……わざわざ俺に付き合わなくても良いんだよ？」

慎は自分のことを案じる様子がないので逆にこつちが心配になつてしまう。

「俺が勝手に付いていきたいだけなんだ。輝弥が責任を感じる必要はねえよ」

慎の事を分かつたつもりでいたがまだ知らない事は多いようだ。

「……分かつた。なら一緒に行くかうか」

今は考えても仕方ない。

いずれその真意を確認する事になると思うのでその時まではお預けにしておこう。

しずくさんから指示された場所へ行くとそこにはしずくさんを含め七人は集まっていた。

見知った人とそうじゃない人で半々くらいかと思つて身構えていたが遠目から見た感じ知らない人は一人しかいなかった。

「あつ、輝弥くん！　こつちだよー！」

「おお、輝弥くんお疲れ様〜」

「あれ、誰かと思えば巴くんじゃないですか!! どうしてここにいるんですか!？」

そこにはしずくさん、彼方さん、エマさん、果林さん、中須さん、侑さん、そして知らない女生徒だった。

その人は赤髪を頭の右側にお団子で結えており、優しげな雰囲気はその人の周囲から醸し出されていた。

胸元のリボンはピンク色なので二年生のようだ。

しずくさんが俺を見つけて手を振ると彼方さんはいつも通りマイペースに挨拶をしてくる。

そして、集まったメンバーの中で俺の存在に一番驚いていたのは中須さんだった。

彼女とこうして顔を合わせるのには入学式翌日にスクールアイドル同好会へ勧誘された時以来だ。

まだ二、三週間しか経っていないがそれでもかなりの時間が過ぎていたように感じる。

「彼方さん、お疲れ様です。それに中須さんもお久しぶりですね」

「あれ、輝弥君ってかすみちゃんの事知ってるんだ?」

侑さんは俺と中須さんの関係性が分からず疑問をぶつけてくる。

「はい、この学園に来て早々に勧誘されていたんです」

「そうですよ侑先輩! この人、このかすみんが直々にお誘いしたのにそれを振ったんですよ!! それがどうしてしずくさんからの勧誘に乗ってるんですか?」

中須さんは侑さんに上目遣いで訴えるように俺を悪者にしようとしてる。

俺はそれよりも侑さんの隣にいる赤髪の方が中須さんの行動に何とも言えない表情をしている。

この人が侑さんの言っていたご友人なのだろうか。

「中須さん、人聞きの悪いことを言わないで下さい。確かにあの時はスクールアイドルに興味を持ってなかったし自分は向いていないなんて言いましたけど、同好会のライブを見たりやりたい事について見

つめ直した結果、同好会に入りたいと思うようになったんです」

「そうだよかすみさん。私が誑かしたわけじゃないんだから変な誤解を与えないでよ」

中須さんにあらぬ誤解を持たれたままだとこれからの活動に支障をきたす未来しか見えないのでしつかりと弁解していく。

しずくさんも俺の言葉に被せて中須さんに軽く怒っている。

本人とすればそんな事をやった覚えは何一つないのだから理不尽極まりないだろう。

「そういえば、輝弥君と一緒にいる君は？ 初めて見る顔だけど……？」

侑さんは俺と一緒に来た慎を見て首を傾げる。

確かにこのメンツでは侑さんとご友人は慎を知らないから唐突に彼が姿を見せて状況が分からなくなってしまいうのも無理はない。

「どうも初めまして。音楽科一年の鈴川 慎と言います。輝弥のクラスメイトです」

「慎は僕の友人でこれまで色々相談に乗ってくれたんです。彼は同好会に入るわけではないですが、本人が付いていきたいという事だったので勝手ではあります但しが連れてきました」

「そうなんだね。私は高咲 侑！ これも何かの縁だしよろしくね慎君！」

侑さんはそう言いながら手を差し出す。

この人は持ち前の明るさで慎との距離を詰めていくからその人懐っこさが羨ましく感じる。

「は、はい。こちらこそよろしくお願ひします……！」

「あらっ？ 慎君、もしかして緊張してるのかしら？」

「侑ちゃん、性別問わずに平等に接してくれるから意識しちゃう子も多いんです……」

慎も人懐っこい性格なのですぐ打ち解けるかと思ったがどうやらそうもいかないらしい。

侑さんは天然たらしな所があるから流石の慎でもこれには弱いようだ。

「なるほどね、慎はまっすぐ系お姉さんに弱いと……」

「はあ!? お前も姉氣質系に弱いだろうが!!」

「ちよ、そこで俺に飛び火させるなよ!」

対岸の火事として高みの見物をしていたが、俺の発言を聞き逃さなかつた慎が俺も犠牲にしようとする爆弾を投げてきた。

この状況で俺も巻き添えにするとはなんて質の悪いことをするのだろうか。

「あはは! 二人とも面白いね!」

「やっぱり輝弥君達がいると空気が和むね♪」

「もう……二人とも……」

侑さんはこの光景を見て楽しくなったのか笑っている。

エマさんは弟達の喧嘩を見守る姉のように微笑んでいる。

その横でしずくさんは突然始まったいがみ合いを見て頭を抱えていた。

この光景はさながら部活終わりのありふれた日常のように眩しく輝いていた。

他人を超えた他人

「はあ……疲れた……」

唐突に慎と始まっていたがみ合いがひとまず収束し、俺は疲労感に襲われていた。

何のためにここに来ていたかを忘れてしまうほどに意識を持ってかれていた。

「もう……輝弥くん。今日はこのために呼んだわけじゃないんだからね？」

「うう……面目ないです……」

「ふふっ。でもなんだか賑やかになってきたね」

しずくさんからお咎めを貰い落ち込んでいると赤髪の方が微笑みながら声を上げる。

俺たちの様子を見て小馬鹿にしているようには見えなかった。

「あつ、そういえば歩夢は輝弥君と会うのは初めてだよね？」

侑さんは歩夢と呼んだ方を見て声を掛ける。

確かに俺含め慎もこの人と会うのはこれが初めてだ。

「そうですね。改めて、初めまして。僕は巴 輝弥と言います。音楽科の一年生でスクールアイドル同好会への入部の前に作戦会議を、という事でここに顔を出させていただきました」

「俺もしておいた方がいいよな？ 初めまして、鈴川 慎と言います。先ほど高咲さんにも言いましたが、スクールアイドル同好会へ入るわけではないですが、輝弥の付き添いでここに来させていただきました」

「丁寧ありがとうございます。私は普通科二年の上原 歩夢です。私もまだまだスクールアイドルについては素人だけど、幼馴染の侑ちゃんと一緒に頑張りたいなと思って同好会に入部しようと思っています。これからよろしくね、輝弥くん、慎くん」

俺と慎が丁寧に挨拶をすると上原さんも同じように自己紹介をしてくれた。

この挨拶の時点で真面目な印象が俺の中で根付いていく。

また、エマさんやしずくさんと同じようなお淑やかさも兼ね備えているので自然と肩に力が入ってしまう。

「侑さんとは幼馴染なんですね。という事は侑さんが昨日言っていた友人というのは上原さんの事ですか？」

「うん、そうだよ。この前のダイバーシテイでやってたライブを一緒に見て、スクールアイドル同好会に入りたいねって話してたんだ」

「そんな侑先輩達を捕まえたのがこのかすみんってわけです！」

侑さんと上原さんの入部きっかけについて聞いていたら中須さんが間に入ってきて誇らしげに胸を張っていた。

「中須さんは中須さんの方でメンバーを集めていたんですね。という事は今日こうして集まったのも同好会の再立ち上げに向けた顔合わせってことですか？」

「それもあるんだけど、まずは今はつきりしている情報について共有するべきじゃないかって思ってる」

俺の質問に対してしずくさんが答えてくれる。

だが、それを横で聞いていた慎は集合目的について意図を掴めていないようだった。

「今はつきりしてる情報？」

「それってどういう事なの、しず子？ 同好会立ち上げに必要な人数は揃ってるからそれでいいと思ってたけど……？」

「うん、スクールアイドル同好会をもう一度始動させることは私たちにとって非常に大きなこと」

「だけど、最初に立ち上げた時とは一つだけ状況が違う事があるでしょう？」

中須さんが慎も抱いていたであろう疑問を口にする。

しずくさんとエマさんが一つ一つ情報を確認するように解説してくれる。

エマさんが言っていた最初と今で違う状況とすれば。

俺はここに居るメンバーを見渡して、可能性が高いであろう情報を揭示する。

「優木せつ菜さんの存在……」

「そう、彼方ちゃん達はここでスクールアイドルをやろうとしていて、せつ菜ちゃんを見て、入部しようかと決めてたの。あの時、スクールアイドル同好会を立ち上げようと奔走していたのがせつ菜ちゃんだったから」

彼方さんは俺の発言に小さく頷きながら同好会立ち上げの動機を話してくれた。

「そうだったんですね……。でも……。せつ菜ちゃんは……。スクールアイドルを……」

「……。ねえ、今ここにいない人物の話をする意味はあるのかしら？」
侑さんが彼方さんの発言を聞きせつ菜さんの事に頭を悩ませているが、それを果林さんが遮断してきた。

「貴女達はスクールアイドル同好会を立ち上げたくて色々動いていたのでしょうか？ そののかすみちゃんの言う通り、さっさと同好会を立ち上げてこれからの活動について議論する時間を設けた方がいいんじゃないのかしら？」

果林さんのいう事ももつともだ。

ここに居ないせつ菜さんの事を話しても、大して成果は得られず時間だけが過ぎていく一方だ。

そんな事よりもスクールアイドル活動に注力した方が今後の為にもなるし、それから彼女の事を気に掛ければいいのではないか、果林さんはそう言っているのだ。

「ふう〜ん、部外者のお姉さんにしては良いことを言いますね〜」

中須さんは果林さんの発言を聞いて、今までのこちら側の活動に対して声掛けをしてくれなかった皮肉も込めて賛同の声を上げる。

だが、その皮肉を聞いて果林さんは威圧感を出すように目を細めて中須さんを見つめる。

「へえ〜、随分と面白いことを言うわね〜？」

「ひえ〜冗談ですうー！ これ差し上げるのでどうか勘弁してくださいさあーい……」

中須さんは果林さんの圧力に気圧されてしまい思わずしずくさんの後ろに隠れる。

そして手で持ってた鞆の中からコッペパンを取り出し詫びの品として献上する。

(……何故……コッペパン……?)

俺はその状況が理解できず困惑した。

「あらっ、美味しそうね。有り難くいただくわ」

だがそんな俺を置いてけぼりにして果林さんはそのコッペパンを受け取る。

「確かにかすみさんからすれば果林さんも一緒に行動してる理由は分からないだろうけど、一応かすみさんにも連絡したんだよ？ でも電話に出なかつたから……」

しずくさんが果林さんも同行してる理由について中須さんに解説を入れる。

「えっ？ 本当？ ……あゝ全然気付かなかつたー！」

中須さんはしずくさんの影に隠れながらスマホを手に取り通知を確認する。

十件程の電話通知が入っていたようだ。

「ははっ、そういえば前にもこんな事があつたよな？」

「確かにね。中須さんと初めて会った時もしずくさんから同好会の事で呼び出されてなかつたっけ？」

慎と俺はこの状況にデジャヴを感じ、思わず笑いが込み上げてきた。

だがそれを見て中須さんはぶんぶんと怒りを示した。

「何なのさー！ 二人して！ かぐ男と慎のすけにとやかく言われる筋合いはないよおーだ！」

「かぐ男……？」

「慎のすけってなんだよ！」

中須さんから唐突にあだ名をつけられ俺と慎は困惑が隠せなかった。

「二人のあだ名だよ！ 輝弥だからかぐ男で慎だから慎のすけ！ シンプルでいいと思うけど？」

「輝弥はともかく何で俺は慎のすけなんだよ！ あだ名って言いなが

ら逆に長くなってるじゃないか！」

俺はあだ名を付けられたことがなかったのたまには有りかと思っただが慎は納得がいつてないようだ。

確かに呼び名が長くなってるし、知らない人からすれば彼の本名が慎のすけなのではないかと錯覚されてしまうのは彼にとって迷惑極まりない。

「長くなっても語呂が良ければかすみんとしては有りと思っただからそうしてるんですよーだ！」

「じゃあお前のあだ名も考えてやるよ！ なかすかすみだからかすかすで決まりだな！」

「ぎゃああ!! そ、そのあだ名で呼ぶな!! 慎のすけのくせに——!!」
中須さんの態度に業を煮やしたのか慎は中須さんのあだ名を提供する。

だがそれも中須さんの逆鱗に触れたみたいで先程よりも怒りが激しくなる。

「慎、ストップ」

「かすみさんもどうどう」

今は悠長にしてられないので止めに入る。

しずくさんも中須さんを止めてくれる。

だが、それを尻目に侑さんが何やら笑いを堪えているようだった。

「侑さん？ 何か可笑しかったですか？」

「へあつ？ ああ、ごめんね……。二人を馬鹿にしたわけじゃないんだけど、突然思い出し笑いましたらツボに入っちゃって……」

確かに真面目な話をしている時に限ってその前にあつた出来事が突然フラッシュバックされる現象は分からんでもない。

俺は侑さんの証言に共感を得ていたが隣で歩夢さんは頬を膨らませ怒っていた。

さっきまでの温和な雰囲気が残ったままなので彼女の怒りはそこまで怖さを感じなく、逆に愛くるしさが滲み出していた。

「もう侑ちゃん。こういう時くらいはしっかりしなよ」

「上原さん、そこまでにしましょう。慎と中須さんもそこで止めて。」

話が進まないから」

「とうにかかぐ男はいつまでかすみんと歩夢先輩を他人扱いしてるのさ?」

「えっ?」

これからの活動に関して話を進めようと上原さんを宥めるが今度
は中須さんが俺に噛みついてきた。

「かすみん達はこれからスクールアイドル同好会で一緒に頑張る仲間
でしょ? それなのにいつまで他人行儀にしてるつもりなの? 蚊
帳の外である慎のすけなんかはもう馴染んでるのに」

「確かに……。せっかく一緒にやるんだもん。もし輝弥くんさえ良
ければ侑ちゃん達みたいに呼んでほしいな……?」

中須さんが腕を組みながら指摘とジト目を俺に飛ばし、上原さんは
それとは対照的に怖がらせないように微笑みながら要望してくる。

上原さんが顔を横に傾けながら言うのでそれが俺にとつて
は一番効果が出てきめんだ。

「かすかすと意見が被るとは思わなかつ「かすみんだよ!!」……たけ
ど、それには同意だ。お前も少しは前に踏み出してみろよ。一歩離れ
た距離からじゃなくてもっと近くでみんなの事を見ないとメンバー
の為の曲なんて書けないしマネージャーも務まらないんじゃないか
?」

慎が中須さんをからかいながらも俺にアドバイスをする。

俺は今まで他人から馴れ馴れしく見られたくないし、からかいの対
象として見られたくないが為に人から距離を離していた。

だが、この人達はそんな俺の態度を逆に打ち解けようとしてくれて
いないんじゃないかと心配してくれていたのだ。

どこまでも自己保身に走っていた自分が少しだけ情けなく感じる。

「慎……」

大切な友人がこうして自信を与えてくれるのだ。

それを無下にしてしまっただけでここにいる俺はもはや俺ではなく陰
を好むつまらない人間になってしまう。

そう考えた時、俺は自然と笑みがこぼれた。

「もう少し慎みたいに簡単に考えられればいいんだけどね……」
「ああ？」

慎はバカにされてるように聞こえたようで少し口が悪くなるが俺は気にしない。

「分かりました。ちよつとずつにはなりますけど、お二人との距離も縮められるように頑張ります。だから……こんなぼ……俺ですが、よろしく願います。歩夢さん、かすみ」

俺は吹っ切れて歩夢さんとかすみをそれぞれ見つめ自分の真つ正直な気持ちを吐露する。

どんなに胸中では頑張ろうと張り切ってもそれをすぐに実行できるほど、俺は強い人間ではない。

それを断った上でまずは二人の呼び方を変えていく。

「ま、まあ慎のすけよりはマシだね。その……こちらこそ……よろしく」

「うん！ 私も嬉しいよ！ こちらこそよろしくね、輝弥くん！」

二人も俺の対応を見て片や少し照れながら、片や花が咲いたような満面の笑みを浮かべてくる。

「……輝弥君の焦らし問題が解決した所で次に進んでもいいかしら？」

果林さんは話題を変えるために口火を切る。

果林さんとしてはここまでのやり取りにうんざりしているかと思っただが、彼女の表情を見る限りそう感じている様子は見えなかった。

「そうですね。優木せつ菜さんの……ことですよ……」

「貴方達はどうしてそこまで優木せつ菜に拘るのかしら？ 昨日までのやり取りを聞いてあの子が復帰するつもりは無いと分かったんじゃないの？」

果林さんはそう言いながら俺達を見回す。

せつ菜さんの状況を理解しているメンバーらはその発言に苦言を呈していたが、かすみ、歩夢さん、侑さんはせつ菜さんの現状を知らないため状況が理解できずにいた。

「ええつと……昨日までのやり取りって……どういふことですか？
かすみん達のいない所で何があったんですか？」

「果林さん、先の事を話す前にせつ菜さんの事を三人にも話していい
ですか？ 確かに前に進まなくちやいけないのは事実ですが、同好会
の仲間である彼女たちもそれを知る権利はあるはずですよ」

「はあー……好きにしなさい」

俺の提案に果林さんは苦笑したのち軽くため息を吐く。

こうして、果林さんから承諾を得た所で俺たちは昨日までの活動内
容とそこで知り得た情報について三人と情報共有するのだった。

同好会の根幹

「ええ——!! 生徒会長がせつ菜先輩——!?!」

スクールアイドル同好会の再始動に向けて俺たちが調査した結果を侑さん達に話していると、生徒会長の裏の顔を知ったかすみは驚きの表情を隠せなかった。

今までスクールアイドル同好会のリーダーとしてチームを引っ張ってきたせつ菜さんの正体が自分たちの活動を悉く邪魔してきた生徒会長だったのだから。

かすみが驚いている横で侑さんは顎に手を当て誰にも聞こえない声量で何かを呟いていた。

「……やつぱり……」

「侑ちゃん?」

隣にいた歩夢さんはそんな侑さんを不審に思ったが侑さんはそれを気付いていないようだ。

「せつ菜さんは自分のせいで同好会を壊してしまったと責任を感じてそのけじめとして自分が同好会から去ろうとしているんです」

「確にかすみさんもせつ菜先輩に言いすぎてしまった所はあるけど……だからってやめていい理由にはならないでしょ!」

同好会が廃部になった経緯を知ったかすみは自分の過去の態度を思い返しつつ、それでもせつ菜さんの行動にも憤慨していた。

「それにはかすみと同意だよ。誰よりもスクールアイドルが大好きな人がこんな事で大好きなことだから目を背けていいはずがない。それはあまりにも残酷すぎる」

俺はかすみの意見にも同意しつつ何とかせつ菜さんを引き戻せないか皆に提案する。

「でも、それは貴方達の一方的な考えでしょう? 優木せつ菜はどう思っているのかしらね」

「むう〜! いちいち鼻につきますねー! 嫌味を言いに来ただけならとつと帰ってくれませんか?」

「かすみちゃん、そこまでにしよ? 果林ちゃんは私たちの事を考え

て言ってくれてるだけだから」

果林さんが一歩離れた視点から持論を展開するが、かすみは先ほどから自分の考えとそぐわない果林さんに苛立ちを隠せずにいた。

だが、そんなかすみを見てエマさんが宥めている。

ここにいるかすみ、歩夢さん、侑さん以外のメンバーは果林さんの性格を理解しているつもりなので、その発言が間違っていると思っていないからこそ反論しない。

だが、もしかすみと同じように初対面であつたならばかすみと同じようなりアクションを取る人は少なからずいただろう。

果林さんはかすみに噛みつかれたけれども気に留める様子もなくかすみから貰ったコッペパンを頬張ろうとしている。

「別に私もただ嫌味を言うためにここににいるわけじゃないんだけどね」

果林さんはそう言いながら貰ったコッペパンを半分に割り、半分をエマさんへ譲った。

果林さんとエマさんがコッペパンに頬張り始めると侑さんが口を開く。

「…………あの…………せつ菜ちゃんはスクールアイドルをやめたいんでしよ
うか…………？」

侑さんの問いに俺は自然と口から言葉がこぼれる。

果林さんも頬張るのをやめ、侑さんを見つめる。

「侑さん…………」

「…………どういう事かしら？」

「あんなに情熱を持った人がやめるなんてあんまりです…………。あの時のライブも全力で楽しんでいたせつ菜ちゃんが一人でこんな仕打ちを受けるなんて絶対におかしいですよ！」

「僕も侑さんに同意です。誰よりも自分の大好きを貫こうとしていた人が逆に大好きをひた隠しにしなくちゃいけないなんてそんなことあつては駄目です…………！」

侑さんの発言に賛同の声を上げる。

あのライブを間近で鑑賞していた俺と侑さんの気持ちはせつ菜さ

んはスクールアイドルを辞めてはいけないという願いだけだった。

「みんなは……せつ菜ちゃんはこのまま辞めていいと思いますか？」

「それはだめだよ（です）!!」

侑さんの質問にエマさん、彼方さん、しずくさんが一斉に声を上げる。

「せつ菜ちゃん、誰よりもスクールアイドルに真剣に向き合ってて格好いいのにそれを押し殺して生活するのは絶対辛いよー!」

「彼方ちゃん、お姉さんなのにせつ菜ちゃんの事を何も見てあげられてなかったから……これはせつ菜ちゃんだけが背負う責任じゃないよー!」

「お披露目ライブは流れてしまいましたけど……出来ることならもう一度やりたいです! せつ菜さん無しのライブも……同好会も……そんなの絶対にあり得ません!」

「かすみも……あの時はついカツとなってしまったんですけど……今なら分かります。せつ菜先輩も同じくらいの情熱を持っていたんだって……! だから今度はせつ菜先輩の言葉を拒否しないでしっかりと受け入れた上で一緒に活動をやっていきたいです!!」

三人に追隨する形でかすみも同じように決意を表明する。

同好会がバラバラになる一因を作ってしまったことを気にしているみたいだが、かすみもこれまでの反省も含めて真正面からせつ菜さんに向き合うつもりのようなのだ。

以前会ったときからぶりっ子キャラというイメージが張り付いていたが、今日のかすみはそのイメージを壊すには十分な程、他人の事も尊重する心が顔を覗かせていた。

彼方さんもそんなかすみを見て、思わず抱きついて頭を撫でていく。

「おおく、大きくなったねえくかすみちゃん」

「むうく、彼方先輩それ褒めてます?」

「むふふく褒めてるよ」

「確かに前に会ったかすみとは印象がだいぶ変わってるぜ。しっかりと周りが見えてる良い奴ってというのが分かったよ」

かすみは彼方さんの反応に半信半疑だったが彼方さんは笑いながらも肯定していく。

また、それに合わせて慎もフォローしていく。

慎もかすみに対しての第一印象があまり良くないと思っていたのを見直したようだ。

「それじゃあかすみくんが元々自己中心的な人間みたいじゃん！ かすみくんはそんな人間じゃないよーっだ!! 慎のすけって本当に気が遣えないね！」

「はああ?! 人が折角褒めてたのになんだよその態度はー!! やっぱりお前はかすかすがお似合いだな！」

「かすかす言うなああ!! 慎のすけのくせに——!!」

かすみは慎の発言が気に入らなかつたようで先ほどと同じようにお互いがそれぞれの蔑称を言いながら睨み合っていた。

仲良くなったのは良いけど、どうしてこうもいがみ合うのだろうか。

「かすみさん、落ち着いて」

「慎もそこまで」

「ちいつ……ふん！」

「ぐぬぬ……ふん！」

しずくさんと俺はそれぞれを宥めるがまだ睨み合いは収まらず、ついにはそっぽを向いてしまった。

「まあ、何はともあれやっぱりこの同好会にはせつ菜さんも必要不可欠ということですね」

「そうだね！ せつ菜ちゃんは本当にすごい人だもん！ せつ菜ちゃんへの練習風景とかもっと見てみたい！」

俺が話題を戻すと侑さんもせつ菜さんを引き戻すことに賛同する。

それに他のメンバーも頷いて賛同の意を示す。

しかし、一人だけ異を唱える人物がいた。

「でも結局、戻るかどうかはあの子の気持ち次第よね」

果林さんだ。

確かにここまでは俺たちの願望で話を進めている。

本人がそれを跳ね除けて本当に辞めるつもりであるならば俺たちにそれを止める権利はない。

「ぐう……また水を差すことを……」

「でも、やっぱりそうだよね。せつ菜ちゃん自身がどう思ってるかが一番大事だもんね……」

かすみは果林さんがまた嫌味を言うことに苦言を呈すがエマさんが果林さんの発言を肯定する。

「直接本人に聞いてみる？」

「でもまず話してくれるでしょうか……？」

彼方さんも意見を出すはずとくさんが反論する。

俺たちがどんなに彼女に問い詰めて同好会に戻るように懇願しても口を開くことはないし首を縦に振ることもないだろう。

それだけ優木せつ菜さんが今回の事態を重く受け止めている証拠なのだ。

どう進めていこうか考えていると侑さんが口を開いた。

「……私に任せてくれないかな……？」

「侑ちゃん……？」

侑さんはいつにも増して真剣な表情でこちらを見つめる。

隣にいる歩夢さんもそんな侑さんを不思議に思い、彼女を見つめる。

「何か手があるんですか？」

「……これと言ったものは……正直浮かんでない……。だけど、せつ菜ちゃんの想いは以前に聞いたことがあるからそれを元に私が説得する」

侑さんは少し自信なさげに答える。

以前に聞いたというのはどこかでせつ菜さんと会ったということだろうか。

隣で歩夢さんが驚いた表情をしているので恐らく侑さんとせつ菜さんの二人だけで会ったのだ。

「侑さんも僕達と立ち位置としては同じだと思います。お一人で説得できるのですか？」

「それは……やってみないと分からない……。私もせつ菜ちゃんの本心を全部聞けたわけじゃないから……」

「そんな無知の知では状況は同じだと思います」

俺はそう言い放つと侑さんは少し落ち込んでしまう。

だがそれと同時に俺の頭では別の意見も出ていた。

（どんなに根拠は無くても侑さんみたいに情に任せてぶつかってみるのもありか……）

今までの俺ならこんな考えは切り捨てていたが背に腹は変えられないこの状況、やってみる価値はありだと思った。

やる前から無理だと決めつけるのは俺の悪い癖だがやらぬ後悔よりやる後悔、その気持ちで今はやってみよう。

「……ですが……今はそれしかありませんもんね……」

「えっ?」

「僕もせつ菜さんの事を聞いて自分なりに思う所がありました。もし宜しければその案に僕も付いていってもいいですか?」

「輝弥君……! うん! 是非とも一緒に来てよ!」

侑さんは否定されると思っていたので逆に賛同してもらえることに驚きを隠さず、目を輝かせながら笑顔になり俺の手を両手で握ってくる。

「確かに今の状況じゃあ、せつ菜さんの事を一番分かっているのは輝弥と侑さんだろうから二人に任せるしかないか」

「そうだね。私も輝弥くんと一緒にせつ菜さんには会ってるけど、多分丸く収められちゃうと思うから悔しいけど輝弥くんに任せてもいいかな?」

慎としくさんは賛同の意を示してくれる。

それに呼応するように他のメンバーも同意する。

「同好会で一緒だったかすみん達が何も出来ないのは正直悔しいですけど……こういうのは距離が近すぎない人間の方が話しやすいもんね……」

かすみも顔に悔しさを滲ませながら顔を落とす。

だが、それも一瞬のことで次に俺と侑さんに向き合った時には蟠り

が無くなってすっきりした表情になっていた。

そして、俺たちに頭を深く下げる。

「かぐ男……侑先輩……。せつ菜先輩を……。よろしくお願いします
……！」

「みんな……。ありがとう！ 輝弥君、頑張ろうね！」

「はい！ 絶対……。せつ菜先輩をスクールアイドル同好会に連れ戻す
！」

みんなからの激励の言葉を受け集まった熱意をせつ菜さんにぶつ
ける為に、もう一度あの時のような本気の姿を見せてもらうために俺
たちはより一層力が入るのだった。

優木せつ菜

輝弥達がせつ菜説得に向けて決意を固める少し前。

【せつ菜視点】

授業を終えて、生徒会の仕事を行っていたが業務が捗ることはなかった。

原因は分かっている。

昨日の巴さん達とのいざこざもあるし、昼休憩に会った高咲 侑さんの出来事も一因になっている。

見回りも兼ねて音楽室を訪ねたら高咲 侑さんに出会った。

私の歌をピアノで弾いていたので驚きの声を上げたがそれを聞いた高咲さんは目にハートを映しながら私に迫ってきたのだ。

「あの……！ち、近いです……」

顔があと少しセンチで当たるといところまで近づいており、私は思わず目を瞑りながら高咲さんを制止した。

「あっ……あつはは……ごめんなさい……」

高咲さんも自分の行動を自覚したのか縮こまってしまった。

「そ……それよりも……高咲さんは以前にお会いした時にも優木さんに会いたがってましたね？」

私は空気が気ままずくなるのを感じたので、空気を変えるために話題を変える。

私が高咲さんに聞いた内容は以前に高咲さんと上原さんがスクールアイドル同好会を探していた時に聞いたものだ。

あの時は優木せつ菜に会おうとして同好会の部室を訪ねていたが彼女は部室にこない上に同好会は廃部になることを宣告するのみであつたが。

「そうだね。あの時も私がライブを見た後で興奮冷めやらぬ状態だったし是非とも間近で応援出来たらなって思ってたから」

高咲さんは調子を取り戻し、私が振った話題に乗っかってくる。

「……どうして貴女は優木せつ菜さんにそこまで拘るのですか？」

私は、スクールアイドルに、優木せつ菜に熱い想いを見せる高咲さんのルーツが気になったので聞いてみることにした。

「うん！ この前、お台場でやってたライブを見て凄く胸がドキドキしたんですよ！ せつ菜さんの言葉が……せつ菜さんのパフォーマンスが直に響いたというか……とにかく感動したんですよ！」

高咲さんは少し頭を悩ませていたが、すぐに回答してくれた。目を輝かせながら訴えてくるので、あの時の私のライブが彼女にとって人生の転機だったという事が否が応でも伝わってくる。

私はそんな高咲さんが眩しくなり視線を窓の外へと向ける。

「そうなんですか……自分の夢を……見つけることが出来たんですね」

「うーん、自分の夢は……まだ見つかってないんですけど……。でも、夢を追いかけてる人を応援できたら私も何かが始まるんじゃないかって思ってる！」

「夢を追いかけてる人を……応援出来たら……？」

私は高咲さんの言っていることへの理解が追いつかず、思わず高咲さんの方へ顔を向ける。

「うん！ 私、将来やりたい事とかあんまり考えてなかったんですけど、けど、ここまで夢中になれることも今まで無かったから、やりたい事が見つかるまではこの流れに乗ってみるのも良いんじゃないかなって思ってたんです！」

高咲さんは向けられた視線に答えるようににこつと笑顔で応える。そんな高咲さんを見つめながら私はただただその言葉を噛み締めていく。

「せつ菜さんのおかげでスクールアイドルに興味を持てたし、同好会にも入ったんですよ？」

「同好会……ですか？」

私は高咲さんの同好会という言葉に引っかかりを覚えた。

「はい、かすみちゃんも同好会を復活させようと動いて……って、あつ……！」

高咲さんは私の様子に気が付かず話し続けていたが、自分の失言に気付いたのか思わず口元を手で押さえていた。

「あっ……あの……勝手に活動しようとしているわけじゃなくてですね……？」

慌てふためく高咲さんを見て、私は思わず吹き出してしまった。

「ふふっ、そんなに動揺しなくても同好会発足の規定さえ守っていただけでももう一度活動していただいても問題ないですよ？」

「えっ？ そうなんですか？」

高咲さんは驚きの声を上げる。

「はい、メンバーを五人以上集めて申請を出していただければ受理しますので、生徒会室へお越しください」

私は同好会発足のルールについて説明すると目線を再び窓の外へと向ける。

「……優木さんが知ったらきつと喜ばれるでしょうね」

高咲さんははっと息を飲みながら私を見つめている。

「……どうしてやめちゃったんだろう……」

私の方を見たのは一瞬の事で高咲さんはすぐにピアノへと顔を戻し、ため息を吐きながら静かにぼやく。

私はそれを聞いてもなお無言を貫いていたが、沸々と胸の中の炎が灯されていった。

「せつ菜さんって凄く可愛いし自分の持ち味を分かっているから絶対人気も出ると思ってたのに……。それにあのライブも大成功だったから良いスタートを切ったと思ったのにな……」

「……なんでそんなことを言うんですか……？」

「えっ……？」

高咲さんは私が思わずこぼした言葉を聞いて、理解が追い付いていないようだった。

突然の冷たい口調が余計に彼女を混乱させていたようだ。

「いい幕引きだったじゃないですか。せつ菜さんはあそこで活動をやめて正解だったんですよ。あの人は自分の夢を叶えることしか見えてなくてもっと近くにいた人の事を見れていなかったんですから

……。あのまま活動を続けていたら同好会は崩壊していたことでしょう」

「そ、そんな事……!」

「高咲さんはラブライブをどこ存知ですか?」

高咲さんの言葉を遮断するように高咲さんへ再び顔を向け、言葉を紡いでいく。

「ラブライブ……?」

「全国の高校が競うスクールアイドルの大会とさえ言えば早いでしょう。彼女たちはそこに出場することを夢見てスクールアイドル活動に取り組んでいました。ラブライブに出るためにはグループの結束を高めることは必要不可欠です」

私は話しても意味のないことを知らず知らずの内に吐露していた。

「優木せつ菜さんはそれを分かっているからこそ、誰よりも熱が入り、誰よりも皆を先導しようと精一杯努力を重ね、誰よりも皆に寄り添おうとしました。ですが、彼女たちの性格をしっかりと理解できていない中で自分の価値観を相手に押し付け、メンバーからの信頼を失っていったのです」

高咲さんは何も言わずにこちらの話に耳を傾けている。

今まで同好会の裏話を聞いたことがなかったこともあって少し手が震えているようにも見えたのは気のせいだろうか。

「あまりにも悲痛な話ですよ。誰よりもスクールアイドルを大好きでいた彼女が自分本位の我儘を出してしまったが為にスクールアイドルに殺されたんですから。あまりに惨めで……愚かしいことです……」

私は途中から想いが込み上げてきそうになり自然と力が入ったのを感じる。

「……幻滅しましたか?」

「……えっ……と……」

突然の私からの質問に高咲さんは困惑していた。

まあ無理もないだろう。

同好会での優木せつ菜の実態をいきなり聞かされた挙句、間髪を入

れずに彼女の愚かさを露呈させるように質問を向けていたのですから。

高咲さんとの間に沈黙が数刻流れたのち、音楽室の外から顔を覗かせる者がいた。

「侑ちゃん?」

それは以前に高咲さんを見た時に隣にいた上原さんだった。

「……ふっ、おしゃべりが過ぎましたね。それでは私はこれで。スクールアイドル活動、頑張ってくださいね」

私は沈黙を壊すようにふと笑いを見せ、彼女たちの健闘を願ったのちに音楽室を立ち去る。

見回りを終えた後、いつものように独りで生徒会室に籠り業務をこなしていた時、ふと動画配信サイトでアップしていた自分のライブ映像を見ていた。

これは私が今後同じ過ちを犯さないためにやっていた戒めだ。

スクールアイドルへの想いが溢れそうになったら、無理やりにも自分にあの時の惨状を思い出させ抑制を図るもの。

いつもなら最初の二十秒程を視聴したのちにそのサイトを閉じていたが、今日はそれに付けられているコメントに目が向いた。

「可愛い!!」

「せつ菜ちゃんの曲、本当に元気を貰える!!」

「この人のパフォーマンス、力強くてカッコいい!」

「ライブに出してくれたら俺は全力で応援したい!!」

コメント上位は優木せつ菜への称賛の言葉で溢れていたが下へスクロールする度に目に入るコメントは称賛の声の他に悲観的なものも混じっていた。

「この人、スクールアイドル辞めたらいいな」

「本当なんで辞めたの……?」

「もっと応援したいなって思っってこの人の事調べてたけど、辞めたってマジ?」

「→コメの人、マジやで」

優木せつ菜に向けられた様々な意見が私の心を弄ってくる。

そして、見ていられなくなりパソコンを閉じて思わずデスクに顔を伏せる。

（私は……なんて未練がましい女なんでしょうね……）

そう思うと同時に優木せつ菜という偶像を作るきっかけとなった記憶が私の中に蘇っていった。

私は幼い頃から誰かの為に物事をやるのが大好きだった。

友達に頼ってもらいたくて勉強を頑張りテストが近づいてきた際にはみんなが私の元に寄ってくる。

そして、教えた後で貰う「ありがとう！」の言葉は何物にも代えがたい嬉しさとなり心を満たしていた。

だが、友達からの感謝も嬉しいが、私が一番に見たかったものは親の喜ぶ顔だ。

テストで高得点を取った、先生から沢山褒めてもらえたなどの良い報告をすれば、親は「流石、菜々は偉いね」と頭を撫でてくれる。

それが私にとって何よりの原動力だった。

それが私がこうしていられる主要因だ。

だが、いつまでもそんな優しい言葉を掛けてくれる人は世の中に多くない。

私の親もその一人だ。

私がこうして好成绩を収めることを当たり前前に感じるようになり、

今まで「特別」に感じていた瞬間が「普通」の感覚へと落ちていく合図だったのだ。

貴方ならそうでなくちゃ。

私を勇気づけてくれたあの頃の温かい言葉はいつしか重荷となって私の心に重くのしかかる。

親を失望させたくない、その一心で勉強を頑張っていた。

そんな心のゆとりが無くなったといったタイミングで出逢ったのがアニメの世界だった。

夜遅くまで勉強していたある時、勉強に疲れ一息つこうと誰もいな

いりビングへと足を運んだ。

親は既に寝室で寝ており、リビングは真つ暗だった。

そこで息抜きにふとテレビをつけた先に映っていたのが、戦闘アニメだった。

主人公サイドは自分を想ってくれる人の為に自分の正義をぶつける。
悪役サイドは自分を慕ってくれる民の為に自分の正義をぶつける。

誰かの為に血反吐を吐きながら戦う二人の戦士の雄姿に私は心を奪われた。

ここまで自分の想いをまっすぐな力にしているヒーローの姿が眩しくて憧れの的だった。

自分も誰かのヒーローになりたい。

小さなヒーローではなく、もっとたくさん人の力になれる大きなヒーローになりたい。

それが中川菜々の、優木せつ菜の原点だった。

それから勉強の合間を縫って、他のアニメについても視聴したが戦闘物の他に惹かれたのが音楽アニメだった。

自分たちのやりたい事を音楽で表現して、それを通じてファンの人たちと心をつなげる。

それは私がこの世界に入る上で一番大切にしたい事だと思った。

私のやりたい事、それは自分の大好きをステージで表現し、見てくれる人とそれを分かち合うこと。

一見すると、どうすればそれを作り出すことが出来るか不明瞭な内容だが、私としてはアイドルを目指す上でのコンセプトを作ることが大切なのではないか、それをモットーとして持つことにした。

それからアイドルの道を探す上で目に留まったものがスクールアイドル。

プロのアイドルとは違う、高校生が織りなすアマチュアのアイドル。

ル。

それが、今の私が挑戦するには相応しい舞台だと思った。

それと心配する点がもう一つある。

それは中川菜々という存在だ。

いつもの私のままでステージに上がっても、真面目で堅物な印象を持たれている関係もあるのであまり応援してくれる人はいないのではないか、そう思い生まれたのがもう一人の私。

アニメの主人公の名前を貰い誕生したもう一人の私。

(もう……私は誰かのヒーローではなれないでしょうね……)

誰かの心に寄り添えるようなヒーローになりたかったが、今では正義に滅ぼされる悪役に落ちぶれていた。

人から期待されることは嫌いではない。むしろ好きだ。

それが今の優木せつ菜を作り出したきっかけなのだから。

だが、私がやろうとしてた大好きが誰かの好きを否定していた。

それはただの我儘でしかなく、同好会の仲間にもそれは届いていなかった。

それ故のかすみさんのあの訴えだ。

(あんなので尊重したなんて言わないで下さい！ かすみんの今の気持ちも現に分かっていないじゃないですか！ その発言が周りを見れていない証拠なんです!!)

それから、あの頃の我儘を押し付けていた自分を戒めるために元々計画していたお披露目ライブを私一人で敢行した。

これが同好会メンバーにバレれば何と言われるか考えもしたが、私なりのけじめを付けたかったので同好会に心の中で謝罪をしつつライブを執り行うことにした。

現にライブを行って正解だったと思う。

あのライブを見たことで自分の夢の為に走っていく決意を固めた人間が二人も出来たのだから。

優木せつ菜がいらない新しい同好会がスクールアイドルとしてラブライブを目指す。

我ながら良い舞台構成なのではないでしょうかね。
そんなことを考えていると午後の授業開始の予鈴がなっていた。
私は今後をどう生活しようか考えながら生徒会室を去っていった。
私が破壊した同好会が再び立ち上がり、メンバーたちが優木せつ菜
を取り戻さんと計画を練っていることに気付かずに。

大好きを叫ぶ

【菜々視点】

「……分かりました。その件は私の方で処理をしておきます」
嫌な記憶を蘇らせた日の放課後、生徒会役員全員が揃った定例会を行っていた。

最近の学校内での困り事といえば校内で猫が発見されている報告を数多く聞く。

それは私も把握しており以前に捕まえようとしたのだが、実はとある生徒が密かに飼っている事が発覚した。

下手に誰かに手を出させるよりかは私が手を打った方が確実なので、担当を自分に割り振らせ次の議題へ移そうとする。

「他に議題はありますか？」

私からの問いに誰からも声が上がらないようなので定例会を終えようとした時、沈黙を破るように校内放送のアナウンスが流れてきた。

いつもなら自分に関係ないと判断した瞬間に放送には耳を貸さないが今日はどうやら違うようだ。

「普通科二年、中川菜々さん。優木せつ菜さん。教室棟の屋上へお越し下さい。繰り返しします。普通科二年、……………」

私はその放送を聞いて、眉を細めた。

「生徒会長？ お呼びですよ」

召集が掛けられた放送に私が反応を示していないことを心配して、副会長が声を掛けてくれる。

どうやら私の先ほどの様子は見られていないようだ。

「……分かっています。それでは、今日の定例会を終了します。各自忘れ物等には気を付けてお帰り下さい。お疲れ様でした」

副会長からの催促に返事をしつつ定例会の終了を告げる。

そして、胸の中に嫌な予感を秘めながらも、指定された場所へ向かうために荷物を整理する。

「……それではお先に失礼しますね」

私の言葉に聞き、その場にいたメンバーは一礼してくる。
それを見て満足した私は生徒会室から去った。

その道中、私は先ほどの校内放送の意図について考えていた。
先ほどの放送を普通の人が聞いても何も思う所はないだろう。
部活をやっていた人は放送の内容をひとしきり聞いてからいつも
通りの活動を行い、勉強をしていた人物は放送に耳を傾けながらも知
識を増やすことに余念を欠かさない。

だが、私としてはこの召集には疑問しか浮かんでいなかった。

(何故、私と優木せつ菜を一緒に……?)

私と優木せつ菜を同時に呼びつける。

それは絶対に叶う事の無い望みだ。

優木せつ菜は中川菜々から生まれたもう一人の私。

自分の大好きを具現化するために生まれた偶像。

この二人が同時に現れることなど、私の身体が二つに分かれてもし
ない限り叶わないのだ。

当事者はそれを知った上で呼びつけているのだろうか。

私は屋上へ向かう途中でいくつかの予想を考えた。

(私と優木せつ菜の正体を知ってる人物……巴さん達……? それか
同好会関係なしに朝香さんが呼びつけた……?)

一つは既に私達の正体を既に知っている人物の呼びつけ。

これは同好会の所属していたエマさん達と巴さん、鈴川さん、そし
て同好会に所属していない朝香さんが該当するでしょう。

そしてもう一つ、私の正体を知らない第三者が呼びつけた。

これはシンプルに優木せつ菜のファンによるものである可能性が
高いですが、この説はあまり考えにくいでしょう。

単に優木せつ菜のファンであるならば私を呼びつける可能性はな
いですし、自分で言うのも可笑しいですが普段の生活で私と優木せつ
菜を同一人物だと見破れる人はいないでしょう。

性格が真逆であるし、中川菜々で居る時は優木せつ菜の片鱗を、優
木せつ菜で居る時は中川菜々の片鱗を見せていない自信があるので

可能性は低い。

(となると……やはり巴さんでしょうかね)

二つの説を考えた時にやはり前者の方が可能性として高い。

そして、私に対して一番不満を持っているであろう巴さんが鈴川さんと一緒かはたまた一人で私たちを呼びつけて想いをぶつけてくるという所でしょうか。

(何を言われようと私の決意が変わることはありませんが……)

私の大好きは独りよがりで、同好会に居ても良いものにはならない。

私がいるとラブライブには出る事なんて到底出来ない。

彼と会っても自分の意志は変わらない事を改めて確認していると屋上の扉の前に着いた。

私は深呼吸をした後に取っ手を手に取り、目の前の扉を開く。

扉を開けた隙間から夕陽が差し込んでくる。

それは私の優木せつ菜としての最後の輝きを彩ってくれているようだ。

「……あなたは……!」

屋上に出た先にいたのは私が予想していたものは異なるものだった。

優木せつ菜が屋上に来る少し前。

【輝弥視点】

「普通科二年、中川菜々さん。優木せつ菜さん。教室棟の屋上へお越し下さい。繰り返します。普通科二年、……」

「歩夢、ちゃんと放送してくれてるね」

「そうですね……」

歩夢さんによる校内放送が学校全体に流れている時、俺と侑さんは屋上のベンチで腰掛けていた。

せつ菜さんを同好会へ連れ戻すと決めた後、せつ菜さんをどう呼び

出そうか模索していた時、同好会メンバーが手を挙げてくれた。

せつ菜さんの説得は俺達に委ねる事になるがそれ以外の準備は任せてほしいと立ち上がってくれたのだ。

そうして、俺たちはみんなの意思を尊重して屋上でこうして待機している。

侑さんによると校内放送は歩夢さんとかすみが主導で動いてくれたみたいだ。

どうやら放送委員に伝手があるとのことだったので作戦は上手くいったようだ。

せつ菜さんが来るまでの間、俺と侑さんの間に暫しの無言の時が流れたが俺は気になることがあったのでその沈黙を破る。

「侑さん、どうしてせつ菜さんと一緒に中川さんも呼ぶことにしたんですか？」

そう、先ほどのアナウンスでは中川さんも一緒に呼んでいたのだ。

せつ菜さんを説得するのみであるならばわざわざせつ菜さんと中川さんの二人ではなくせつ菜さんのみを呼べばいいはずなのだ。

「……輝弥君たちの話を聞いてもせつ菜さんと生徒会長は別の人物なんじゃないかって思ってる自分がいてね……。その確認も含めて二人を呼び出してって歩夢にお願いしたんだ」

侑さんははにかみながら答える。

「確かに侑さんは直接本人と話したわけではないですもんね。状況の整理も含めて有りだと思います」

「へへっ、ありがとう」

侑さんの言い分も一概に否定できない自分がいたので、俺は侑さんが自分一人しか思っていないと思わせないように肯定する。

侑さんは俺の意見を聞いて安心したのか笑顔を向けてくる。

スクールアイドルにならないとは言っているが、この人の笑顔も見ていたら凄く力を貰えるような気がした。

そんなことを考えながらも一抹の不安が俺の頭に過っていた。

「……僕たちの言葉は……上手く……せつ菜さんに伝わるでしょうか……？」

「輝弥君……」

「僕は……誰かの世話を焼くことはあっても、言葉で説得するってことはやった事がないですし……僕なんかの言葉があの人に届くのか、少し自信が無くて……」

俺は心に湧いた不安を吐露しつつ、その不安を抑え込むように両手を合わせる。

人間にはそれぞれ得意不得意がある。

誰とでも仲良くできる人懐っこい人や人と話すのが苦手な人見知りな人、千差万別だ。

そんな中で俺は人の話を聞くことが多かった。

それは与太話然りただのありふれた日常会話も同様だ。

その中でも知人からの悩み相談も受けることがあった。

人は話を聞いてくれそう、悩み相談しても良い答えが得られなさそうなど、各個人から漂う匂いを嗅ぎ取り自分と話が出来る人を選別する。

そうした中で俺は聴く側の人間として扱われることが多く、その立場で元気づけることが多かった。

しかし、今回は自分の口で相手を勇気づけるといういつもとは真逆の方法となるので上手くいくか確証がなかった。

合わせた手が自然と震えてくる。

「……大丈夫だよ」

そう言いながら侑さんが震える手に重ねる形で手を乗せてくれる。

俺よりも小さな手だが温かみがあり気持ち落ち着いてくる気がした。

「輝弥君があの時感じたトキメキと今想ってるざわめき、それを真っ向からせつ菜ちゃんにぶつければいいんだよ。こういう時って飾る必要のないまっすぐな言葉が一番響くはずだから」

侑さんはそう言い切るとベンチから立ち上がりガラス張りの柵にもたれかかる。

「侑さん……」

俺はただただ侑さんを見つめるのみだった。

「やっぱり輝弥君って真面目なんだね。私はあんまり深く気にする方じゃなくてどうにでもなるんじゃないかって考えるから輝弥君みたいに慎重に行動を出来ないんだよね」

侑さんは柵にもたれながらも身体をこちらへ向ける。

そして、身体を向き直し俺に手を差し伸べる。

「だから、自信を持ってない輝弥君の背中を、微力ながらも私が押してあげる」

侑さんのその言葉は慎が放ったそれとは違った。

慎は前に立って手を引つ張ることで前へ進ませてくれるが、侑さんは横に立って背中を押して前へ進ませてくれる。

やはりここで出逢った人たちは俺に大きな変革をもたらしてくれる予感がする。

「侑さん、ありがとうございます」

俺はそれしか言葉が出なかった。

いや、それだけで侑さんに気持ちに通じるという確信があった。

そう言う俺はベンチから立ち上がり侑さんの横に並ぶ。

「……そう言ってくれるのはここにいる人達だけですよ……」

「……ん？ 何か言った？」

静かに呟いた俺の言葉は侑さんに届くことはなかった。

否、届けるつもりなど甚だなかった。

「なんでもないです。今はせつ菜さんの説得に全力を注ぎましょう」

そう言い切ったと同時に屋上の扉が開かれる音が聞こえた。

そこには俺たちが呼び出した張本人である中川菜々さんが立っていた。

優木せつ菜さんの姿はいないが、それが答えという事だ。

中川さんは扉の前で屋上を見回し、俺達の姿を確認するとこちらに向かつて歩いてきた。

「あなたは……！」

中川さんは俺達の顔を見て、驚きの声を上げた。

いや、厳密には侑さんの顔を見て、と言った方が正しいが。

中川さんとしては侑さんがここにいることが珍しいと感じたのだ

ろう。

「初めまして、せつ菜ちゃん」

侑さんの言葉に中川さんは一瞬眉をしかめた。

「……巴さん達から聞いたんですね」

「それもあるけど、音楽室で話したときにそうじゃないかなって」

「……音楽室？」

俺は思わず侑さんの方を見る。

「うん。今日、輝弥君がいなくなってからね」

「そういえば、巴さんは使用許可書を置いたままいなくなっただんてし
たね」

「あっ!? 確かに……そうでした……」

あの時は慎からの呼び出しに頭が一杯で使用許可書の存在を完全に失念していた。

「……まああの時の書類は高咲さんが持って行って下さったのでお礼は高咲さんにしてください。それで、私をここに呼んだ理由とは？」

余談をそこまでにして中川さんは本題を切り出す。

中川さんからの問いに侑さんは自分が答えると言うように一歩前に出た。

「……ごめんなさい!!」

そして口火を切ったと思ったら深く頭を下げて謝罪の言葉を述べるのだった。

「……へっ?」

思わず俺は気の抜けた声が出てしまった。

そして、それは中川さんも同様だった。

「なっ……!!? 何なんですかいきなり!」

「私……何でスクールアイドル辞めちゃったんだろうなんて不躰な事を聞いたから、ひどいことを言っちゃったなって思っ……」

侑さんは苦笑いしながら弁明する。

「ふっつ、別に構いませんよ。隠していた私が悪いんですから」

中川さんは苦笑しながら返事をする。

このやり取りを見る限り、この二人の関係性が俺達みたいな悪いも

のには見えなかった。

「そして、巴さんはどうしてここにいるんですか？ 私を同好会に引き戻そうとしているんですか？」

中川さんの視線が俺に向いてくる。

前に感じた冷える感覚を味わいながらも俺は臆しないように立ち向かう。

「……………そうです。貴女を……………優木せつ菜さんをスクールアイドル同好会に連れ戻しに来たんです」

「貴方が私に拘る理由が分かりません。何故そこまでして私に構うのですか」

中川さんは少しうんざりしたように話す。

だが、中川さんがどういう態度で来ようと俺の気持ちが揺らぐことはない。

「決まっています。僕の人生を変えてくれたからです」

「……………」

中川さんは表情を変えず無言で見つめてくる。

「僕は、スクールアイドルに出会うまで何もやりたいことがなかった中身の空っぽな人間でした。音楽に関して勉強をしたいっていう名目だけでここに来て、部活動についても何をやりたいかと言われても今までやってきたことの延長線上でやるくらいかなとしか考えていませんでした」

「輝弥君……………」

「ですが、この学校で自分のピアノを評価してくれる人物に出会って……………そこから自分のやりたい事についてヒントをくれた人物に出会って……………そして、やりたい事を決意させてくれる人物に出会えました！」

中川さん達への想いが溢れてくると同時に自然と握り拳を作っていた。

無意識にやっってしまうほどに俺の言葉を聞いてくれている目の前の人への気持ちで胸がいっぱいだった。

「今の僕がいるのはあの時の中川菜々さんと優木せつ菜さんのお陰な

んです！ 大好きな事はいつでも自分の味方なんだと、その気持ちに嘘を付いたら向き合うのが辛くなると教えてくれた中川さん……。そして、その言葉に一言がなかったように自分の大好きを余すことなく曝け出して一つの空間を作り出していたせつ菜さん……。お二人が僕に勇気をくれたんです！」

「……………」

「貴女が僕に言ってくれた」大好きな気持ちに嘘を付いたら辛くなる”。それをそっくりそのまま中川さんにお返しします。スクールアイドルが大好きでやっていたのであればそれは貫いてください！僕だけが幸せになって……。せつ菜さんが苦しいまま過ごすなんて……。そんなの僕は絶対に嫌です!!」

「……………何も知らずにぺらぺらと言ってくれますね……………」

中川さんは両手をふるふると震わせながら返答する。

先ほどよりも怒気が含まれているのは明らかだった。

「私が抱いていた大好きなんてものは所詮ただの独りよがりだったんですよ!! 大好きな事をありのままにやる……。それが出来るのであれば私は今も同好会でそれを貫いています!! ですが、私の夢は皆さんの事を何も考えていない自己中心的なものだったんです！ それを知った今……。あの頃と同じようにやれると思いますか……………」

最初は強かった中川さんの語気が段々と弱くなっていく。

前同好会の光景がフラッシュバックされているのだろうか。

「あの頃の続きを見ることは出来ないと思います……………」

……………ですが、あの頃と違う夢を見る事は出来ます!!」

「……………」

「せつ菜さんだけが……。自分の大好きを追いかけることが出来ない……。それはあまりにも馬鹿げてます!! 言ってくれましたよね、なりたい自分を我慢しないでいいと。誰も貴女の事を否定していない……。だから貴女は貴女のなりたいスクールアイドルを目指していいんですよ!!」

俺の必死の訴えが中川さんに届いているのか彼女の眼が震えてるように見えた。

そして顔を俯かせた。

「もうだめなんですよ……」

そう言いながら顔を上げた時には中川さんの眼には涙が溢れつつあった。

「もう全部わかっていているんでしよう!? 私が同好会に居たら皆さんの為にならないんですよ!! 私が居たら……ラブライブには出られないんです!!」

彼女はすでにいつもの冷静さを欠いていた。

今ここに居るのは迷える生徒に道を示す生徒会長ではなく、皆から見放され道は閉ざされて途方に暮れたと思っている一人の少女だ。

「……だったら!!」

怒号が鳴り響く中、それをかき消すほどの大きな声が響いた。

「だったら……ラブライブに出なくていい!!」

侑さんだった。

ラブライブ……スクールアイドルなら誰もが目指す高みのステージ……確か慎からそう聞いた。

せつ菜さんもそこを目指す一人のスクールアイドルで彼女もまたラブライブ出場を夢見る少女。

だがその夢を侑さんは出なくていいと切り捨てたのだ。

力強く言い切った侑さんに俺と中川さんは驚愕するのみだった。

だが、そう言ったのも束の間、すぐにアワアワとしながら侑さんは弁明する。

「あつ、あの……! ラブライブがどうかじゃなくて……!」

侑さんは一呼吸置いてから改めて説明に入る。

「私はせつ菜ちゃんが幸せになれないのが、笑顔でいられないのが嫌なだけ。輝弥君も言ったように私達だけが幸せになるなんて嫌なんだよ。私はせつ菜ちゃんのステージが見られればそれでいい。せつ菜ちゃんが幸せになれないのならば、ラブライブに拘らず、せつ菜ちゃんの歌が聴ければそれでいいんだよ」

侑さんの言葉に中川さんは少しはつとした顔を浮かべる。

「……どうして……こんな私に……?」

泣きそうになりながらも疑問を浮かべる中川さんに侑さんの曇り気のない笑顔を向ける。

「決まってるよ！ 大好きだから！ 私をこんな気持ちにさせてくれたのは……せつ菜ちゃんだよ！」

「……っ!!」

その言葉を聞いた瞬間、中川さんの頬から涙が流れた。

今まで彼女自身が抱えていた苦悩や悲しみが一斉に彼女の身体から出ていくようだった。

「貴方達みたいな人は……初めてです……。誰かに期待されるのは……嫌いではありません。ですが……本当に……良いんですか……？ 私の我儘を……大好きを貫いて良いんですか……？」

中川さんはやつと自分の本心を曝け出してくれた。

また否定されるかもしれない、自分の大好きが壊れてしまうかもしれない。

彼女の中でまだ僅かながらも不安な気持ちが残っているのだ。

ならばそれを払拭するのが優木せつ菜さんの背中を追いかけてきた、これから彼女を支える仲間の務めだ。

「勿論!!」

「貴女の大好きを……俺たちが受け止めます!!」

俺たちの言葉に中川さんは既に流れている涙を堪えるように身体に力が入る。

そして、彼女はその涙を自分の腕で拭いきる。

「……分かってるんですか……？」

「えっ？」

突然の中川さんからの問いに俺と侑さんは一瞬理解が追いつかなかった。

「貴方達は今……自分達が思ってる以上に凄いことを言っただですかね」

涙を拭いきった中川さんはふと笑って見せる。

挑戦的な言葉を放ち、俺と侑さんの横を通り過ぎる。

そして、彼女は眼鏡を外し、三つ編みを解いてみせた。

その姿に俺と侑さんは言葉を失った。

この瞬間、目の前にいる少女は生徒会長である中川菜々ではなく一人のスクールアイドル、優木せつ菜に変わったのだ。

こちらに振り向いたせつ菜さんは先ほどまでの泣き顔から凛々しい表情へと変わり、右拳をこちらへ突き出した。

「どうなっても知りませんよ!!」

菜々とは似つかぬ挑発的に言葉に俺たちは自然と笑顔になる。

これこそライブで見た優木せつ菜の姿なのだ。

「これは……始まりの歌です!!」

そう言い放ち、学園の屋上をステージにした優木せつ菜のライブが今、幕を開けた。

歯車は動き出す

【果林視点】

エマ達同好会メンバーとの会合があった後、そのまま寮に帰る気分ではなかったので私は図書室でモデル雑誌を読んでいた。

いつもは読者モデルの仕事が無ければ寮の部屋でまったり自分の時間を過ごすのだが、今日はそういう気にはなれなかった。

理由はただ一つ。

あの子たちが一度グループを去った子をどうやって連れ戻してくるのか気になったからだ。

優木せつ菜によってバラバラになった彼女たちがスクールアイドルとしてもう一度活動できるように発破をかけたつもりだったが、それでもあの子たちは優木せつ菜の事を仲間だと思っているようだ。

そして、どうにかして同好会に引き戻そうと策を巡らせようとしているが私にはそれをする理由が分からなかった。

どのような理由で優木せつ菜が同好会を崩壊させていようが彼女はスクールアイドルを辞めようとした事実は変わらないのだ。

自分の意思で決めたことであればそれを尊重するのも仲間の在り方ではないのかと思っていた。

読者モデルの仕事をしていた時も意欲的に取り組んでいた私に対して、一緒に仕事をしていた子が突然引退宣言をする事もあった。

見た目では平静を装っていたながらも陰では自分には向いていなかったなどの悲観的な心や自分なんかが出来ないという自虐心が働いていたのだと思う。

一度自分の弱さに折れてしまった人間は第三者が慰めだろうが同情だろうがどんな言葉を掛けてきても立ち直ることはない。

否、それを言う資格は第三者にはないのだ。

本人としては誰よりも頑張ってきた、絶え間ない努力を重ねてきた。

それなのに他の人間はそれを超える才能を持つてゐるが為に、亀のように自分のペースでひたむきに走っていた自分を兎のように余裕な

表情をしながら追い抜いていく。

そんな絶望を見せつけられた後で自分の事を知りもしない人間からの同情は何も効果が得られるはずがない。

”いつでも話聞くからね。”

私の事を何も知らないあなたに言った所で何が変わるかしら。

”一人で抱え込まないでね。”

あなたの甘い考えで心労が増えるくらいなら一人で抱えた方が楽なのよ。

ここまでは私が過去に見た堕ちた人とそれに寄り添う人。

仲間と言いなながらも自分の事しか考えてなかった人達による下らない寸劇。

別にエマ達をそれと同じだとは思いはしなくても、状況は皮肉にも一致している。

自分の事を何も知らないエマ達が労いの言葉を掛けようともそれは当人に届くことはない。

優木せつ菜の事を心配して、本来は溜める必要のない疲労を蓄積させては今後の練習にも身が入らない。

そう思つて助言していたが、それに待ったをかける者達が現れた。

巴 輝弥、高咲 侑。

スクールアイドルに関しては素人だけれどもやりたい事を見つけたとして同好会に入部を決意した二人。

優木せつ菜を除いた現同好会メンバーが勢揃いした後、新メンバーも加わり今後の活動に一筋の光が見えたと思つた矢先、輝弥君と侑が優木せつ菜の事を言及した。

私の反対意見に対しても感情でぶつかってきたかすみちゃんに対して毅然と自分の考えをぶつけてきた二人。

二人の態度を見た時、私は内心嬉しかった。

私は過去の経験からみんなに残酷なアドバイスを送ったけど、それを覆そうとしている。

過去の私に出来なかつた事をこの子たちはどう見せてくれるのか、それがすごく楽しみだった。

実際、今の私は図書室でモデル雑誌を読んでいたつもりだが内容が全く頭に入っていない。

一通り読んだと頭が錯覚し次のページ、またその次のページ、そして気が付けば背表紙までたどり着いていたのだ。

(今日は仕事の事を考えるのはやめておきましょう)

そう思いモデル雑誌を閉じてカフェで一息つこうと決めた矢先の事だった。

「普通科二年、中川菜々さん。優木せつ菜さん。教室棟の屋上へお越し下さい。繰り返します。普通科二年、……………」

聞き覚えのある声が図書室の無機質なスピーカーから流れてきた。

(これは……………歩夢ちゃんね……………)

私が優木せつ菜の正体を突き止めようとエマ達と奔走していた時に出会った可愛い女の子。

あの子からしたら私を見るのはトラウマだと思うけれども、今日会った時はそんな不安は微塵も感じられなかった。

単にあの子が私の存在を忘れてしまっているか、もしくはそのトラウマを乗り越えるほどに強く成長したのかは本人のみぞ知る。

歩夢ちゃんに対して成長を喜びながらも一抹の寂しさを覚える親心を噛み締めながらも放送内容について思考を巡らせていた。

(優木せつ菜と直接話すのね……………)

輝弥君と侑が説得すると言っていたので他のメンバーはそれをサポートすると言った所だろう。

ここまでお膳立てを整えるという事は彼女たちの決意は本物なんだと実感する。

(……………吉報を待ってるわ……………)

厳しい戦いになることを心配しつつも成功で終わることを心の中

で願い、私は図書室を去るのだった。

二人の武運を祈りつつ図書室を出たはいいものの靴箱に到着するまでに少し時間を要してしまった。

校舎内でも一人でいると方向感覚が分からなくなってしまうのはきつとどこに行っても教室が横並びに広がっているからだろう。

ここに何か目印となるものがあれば私にとってのバリアフリーとなるので少しは楽になるのだが、ただの自分勝手な願いなので叶う事はないだろう。

時間をかけながらも寮に帰ろうと校舎外に出た瞬間、周りの喧騒が大きくなった。

周囲にはこれから帰宅すると思われる生徒が多くいたので、モデルの仕事をしてる私にもついに待ちが現れたのかと一瞬疑ったが周囲の目線は私ではなくとある一方に向けられていたのでその可能性はすぐに掻き消された。

周囲の目に釣られるように私も顔を上げようとしたが、とある音が耳に入ってきたのでその必要はないと確信した。

(……無事に上手くいったようね)

屋上から聞こえてくる力強い声を耳にして、私は二人の功労者を密かに称えるのだった。

【輝弥視点】

突然始まった優木せつ菜さんのライブを見て、俺はダイバーシティで見たライブよりも気持ちが高揚していた。

それはせつ菜さんとの距離の差や憧れの存在を目の前で拝めたからではない。

今、目の前にいるせつ菜さんは呪縛から解き放たれた新しいせつ菜さんへと生まれ変わっている。

そんなせつ菜さんを見て、俺も心の中の炎が燃え上がっているのだ。

屋上の下では帰宅中の生徒や部活動を行っていた生徒で溢れかえっていたがせつ菜さんの声を聞いて、下にいた全員が彼女の釘付けとなっていた。

俺はふと屋上の壁に潜んでいた歩夢さん達へ目を向ける。

大半は昔のせつ菜さんが戻ってきた事による安堵の表情を浮かべていたが、慎ただ一人だけがそれ以上にいいリアクションを取っていた。

以前のライブでもせつ菜さんのパフォーマンスを見て一番熱くなっていた誰よりも応援していたであろう彼がより成長したせつ菜さんの復活を見て、思わず感極まっているのだ。

(せつ菜さん……やっぱり貴女は……俺たちのヒーローです)

自分の夢に気付かせてくれた人がもう一度立ち上がってくれた。

せつ菜さんにどんなに否定されても諦めずに動いてよかつた心の底から思った瞬間だった。

そして、せつ菜さんへの想いが胸の中を逡巡していた時にはライブがいつの間にか終了を告げていた。

曲の終わりと同時に右手を突き上げたせつ菜さんは息を切らしているが、それでも笑顔を絶やさずにパフォーマンスしていたのが声で理解できた。

「はあっ……はあっ……虹ヶ咲学園、スクールアイドル同好会……優木せつ菜でした!!」

せつ菜さんの自己紹介が終わった時にはライブ中と同じくらいの声量でせつ菜さんのライブを称賛する声が学校中に響いていた。

俺も声に出しはしなかったが、自然と拍手でせつ菜さんの健闘を称えていた。

「……うう——せつ菜ちゃん!!」

「ん? うわあ!!」

そして、俺と一緒に近くでライブを見ていた侑さんはいつの間にか俺の横からいなくなっており気付けばせつ菜さんへと抱き着いていた。

せつ菜さんも不意に声を掛けられたため反応が遅れて侑さんに為

されるがまま尻もちを付くのだった。

「侑さん……」

「えへへ……素敵なライブだったよ!!」

侑さんは屈託のない笑顔でストリートにライブの感想を伝える。

そんな侑さんの表情を見て少し硬い表情をしていたせつ菜さんも思わず吹き出した。

「ぶふっ……あっははは……!! ……ありがとうございます」

「せつ菜さん……! せつ菜さんらしくとても熱いライブでした!

ありがとうございます!」

俺もライブの余韻に浸りつつも早くせつ菜さんに感想を伝えたい
と思い、侑さんに後れながらせつ菜さんの元へと駆け寄る。

そして、感想と一緒にお礼を述べながら深く頭を下げるのだった。

「巴さん……。いえっ……。こちらこそありがとうございます。貴方が
いなければ……。私はもう一人の自分にずっと嘘を付きながら生活し
ていたことでしょう。貴方と侑さん、お二人の熱意が私を変えてくれ
ました。お礼を言わなければいけないのは私の方です。本当に……
ありがとうございます」

「せつ菜さん……」

少し前まで疎遠になっていた二人の仲が復縁されることとなり、俺
は眼に涙を浮かべる。

「せんぱくい? いつまで抱いてるつもりですか?」

三人の温かな空間に痺れを切らしたかすみがジト目で見つめなが
ら侑さんとせつ菜さんの間に入った。

「やっぱりせつ菜さんのライブって凄いね!」

「せつ菜さん……。せつ菜さんの事を何も知らずに無礼な発言をすみま
せんでした……!」

歩夢さんは間近で見たライブに対して素直な感想を述べ、慎は歩夢
さんの後ろから出てきてせつ菜さんに過去の非礼を詫びる。

せつ菜さんは侑さんのハグから解放されると慎へと向き合い、静か
に微笑む。

「鈴木さん……。いえ、あれは貴方の言ってることが正しかったです。

どうか自分を責めないで下さい。……巴さんと一緒に私を救ってくれたこと、感謝しています。ありがとうございます」

せつ菜さんからのお礼の言葉に慎は顔を赤く染まっていた。

「えっ……いや……俺はそんな大層な事してないですから……だから……その……とにかく！ 素敵なライブでした！ こちらこそありがとうございました！」

俺は慎のあたふたする姿を見て、今まで慎が見ていた俺の姿はこんな情けないものだったのかと少し複雑な気持ちを抱いた。

「ふっ、慎も俺の事をもうからかえないな」

「う、うるさい！」

今までの反撃と言わんばかりに慎をからかうが、慎もムキになって反撃してくる。

そんな俺達を遅れて現れたエマさんが宥める。

「まあまあ二人とも♪ せつ菜ちゃん、お帰りなさい！」

「エマさん、それにしずくさんと彼方さんも見ていたんですね」

「やっぱり気になってしまって……。それよりも少し盛り上がりすぎたかもしれませんね」

しずくさんはそう言いながら屋上外へと顔を向ける。

確かに地上ではライブの称賛の声やアンコールを求める声で埋め尽くされていた。

「先生に見つかったら怒られちゃうんじゃないですか？？」

「むふふ、どうする？ 生徒会長」

かすみは騒ぎすぎという事で先生に怒られることを危惧する。

彼方さんは今の状況を楽しみつつ、悪戯っ子のような表情をしながらせつ菜さんに訊ねる。

だが、せつ菜さんは不安を消し去るような不敵な笑顔を向けた。

「今の私は優木せつ菜ですよ？ 見つかる前に退散しましょう！」

中川さんの時には考えられない素行の悪い行動だが、せつ菜さんならば良いかと許容してしまう自分がいる。

「おお———！！」

せつ菜さんの声に呼応しながらその場を逃げるように立ち去る俺

達だった。

この行動に後ろめたさは何も感じなかったのは、これから先の未来が明るく照られているからだろうと駆けながら思うのだった。

本編 『理想のアイドル像』 巡り逢い

【璃奈視点】

とある日の放課後、私はこの学校で初めて出来た友達を待っていた。

その人はとにかく元気に溢れていて、クラスメイトからも人気が高い。

だが、彼女にはその人気を後押しする要素が備わっている。

「お待たせーりなりー！ いやあく、今日もいい汗かいたよ〜！」

部室棟に入る扉の前で立っていると部室棟の中から声を掛けられる。

綺麗な金髪をポニーテールでまとめ、学校指定のパーカーを腰に巻き、動きやすい服装にアレンジを加えた女子生徒。

タオルで首周りの汗を拭いているが、額やこめかみに残っている汗が彼女をほんのり艶っぽく見せ、彼女を遠目から眺めている生徒を男
女問わずに魅了している。

「お疲れさま。愛さん」

彼女は宮下愛さん。

情報処理科の二年生で私の先輩に当たる人。

そして、顔を表に出すことが苦手な私が唯一友達と呼べる人。

私はどんな話をしてても表情が変わることはない。

楽しい話も悲しい話も笑い話も怒り話も、表情変化に乏しい私には
同じ顔色でしか会話が出来ない。

だけど、愛さんはそんな私をおかしく思わず一人の人間として扱っ
てくれる。

私の人生を変えてくれた恩人と言っても過言ではない。

「ありがと♪ 今日バレ部でやってきたけど、前に参戦したとき
よりもみんな上手くなって驚いたよ！」

愛さんは私からの労いの言葉に返事をしつつ、今日の部活動の成果

を教えてくれる。

愛さんは特定の部活動に所属しているわけではなく、運動部の助っ人として各部活動の練習に馳せ参じているのだ。

愛さん曰く、特定の部活で一つを極めるではなく様々な活動を通してみんなとの交流を持ちたいというポリシーの元でこういった活動をしているらしい。

実際愛さんのスポーツセンスは抜群に良い。

その類いまれな運動神経を活用して、どんな競技でもそつなくこなすし本業の部員を差し置いて活躍をすることが多いので、愛さんによく助っ人の要請が来る。

私はいつもなら愛さんの活躍を遠目から見ていることが多いが、今日は授業の課題の関係もあって観戦できなかつたので練習後に落ちあう事として連絡を取っていた。

「これからのバレー部の成長が楽しみだね」

愛さんの嬉しそうな表情に私もつられて笑顔になるべきなのだが、表情が変わることはない。

言葉では楽しそうな雰囲気を出しているが、蓋を開けてみると無表情の人間が上っ面の言葉を並べてるようにしか見えない。

「そうだね、愛さんはもう少しで用済みになっちゃうかもしれないなあ」

愛さんは私の気持ちを汲み取り、お話に付き合ってくれる。

私みたいな人間にも優しく触れてくれるのが愛さんの良い所であり好きな所。

「そういえば、この後はどうしよつか？ またはんぺんの所に行く？」
はんぺんとは、白い猫さんの事で食べ物のはんぺんのように身体が真っ白な事から私と愛さんで名付けた。

この学校内についての間にか住み着いていた所を私と愛さんで発見したのだが、親猫の姿は無くずっと独りで生活していた所を見かねた私たちが密かに学校内で飼っているのだ。

私の家はマンションということもあってペットは禁止、愛さんの家も自宅が飲食店という関係もあり飼う事が出来ない。

だが、このままはんぺんを見過ごすことも出来なかったので秘密裏に学校内で世話をしている。

本来、学校でペットを飼うのは禁止とされているので見つかったらはんぺんとお別れすることになってしまう。

そうならないように常日頃から私と愛さんと餌付けという名の見回りを行っている。

しかし、少し前に校内に猫がいるという情報が生徒会長の耳に入ってしまった。

それを聞いた生徒会長はすぐさま捕まえようと網を持ってはんぺんに対抗していたのだが、寸での所で私と愛さんが仲介に入ったのだ。

はんぺんについて愛さんも事情を説明してくれたが、学校規則もあり生徒会長は中々首を縦に振ってくれなかった。

でも私たちの必死の訴えに応えるように生徒会長ははんぺんに条件を付ける事で校内でのお世話を認めてくれた。

生徒会お散歩役員。

学校の一員として活動すれば追い出す必要もないので隠れてお世話をする必要もないと生徒会長は言ってくれた。

無理なこじつけだとは思うが、それでも私たちの気持ちを尊重してくれた生徒会長には凄く感謝をしている。

「うん、はんぺんに餌を上げる時間だから」

「オツケー。じゃあ行こっか」

愛さんと一緒にはんぺんがいる中庭へ行こうとした瞬間、校内に大きな歌声が響いた。

「おん？ 誰の歌声？」

「……屋上？」

愛さんも周囲をきよろきよろと見渡して声の元を探しているが見つからない様子。

私は空からの歌声が舞い降りているような感覚があったので屋上を見上げた。

そこには見慣れているようで初めて見る人が立っていた。

黒髪を長く伸ばし、その一部をサイドで纏めたその人は既視感があつたのだが、その正体が私にはわからなかった。

「あれって……生徒会長……!? いや……でも……雰囲気が違うね……」

愛さんは目を凝らしながら同じ方向を見上げる。

そして、愛さんが口にした人物を聞いて私ははっとした。

誰と似ているのか分かってはいるはずなのに浮かんでこないこのもどかしさ。

だけど、愛さんのお陰でその気持ち悪さを払拭することが出来た。

目の前に映る人物は予想していた人物とは違うけれども、私の中に浮かんだ疑問が晴れたことで溜飲が下がったを感じる。

「生徒会長はあんなにアグレッシブには歌わないと思う」

もしあの人が生徒会長と言うのであればこれは夢の中なのかもしれない。

そう思わせるほど、生徒会長とあの少女のスタイルは雲泥の差だった。

「そうだね。だけど……不思議と見惚れちゃうなあ……」

愛さんはうっとりするように言葉を漏らした。

こんな愛さんを見るのは初めてだが、その気持ちは狂おしいほどに分かる。

初めて見る人の初めて聞く歌なのに不思議と雑音の様には感じず、むしろ身体が熱くなっていくのが分かった。

うっとりする愛さんを尻目に私も彼女に夢中になっていた。

そして、彼女が歌い切った後、私と愛さんは自然と拍手をしていたのだった。

「凄かったね……さっきのライブ」

ゲリラライブが終了したのち、中庭ではんぺんを見つけてから私と愛さんは終始黄昏ていた。

はんぺんの頭を撫でてその肌触りの良さを体感しているが、それ以上胸が高鳴っていた。

「うん。ずっと……見入ってた……」

愛さんの言葉に人並みの感想しか出てこなかった。

これが、いざ感動を目の当りにしたら語彙力を失うや言葉が出ないという事なのだろう。

私はこういった催しは初めて見るのでどう表現すればいいのか分からなかったが、どうやら愛さんも同じようだ。

このように大騒ぎするようなイベントは愛さんにとっては手馴れているものだと思っていたが現実には違ったようだ。

燃え尽きたように座り込むので一瞬戸惑ったが、いつもの愛さんとは違う姿を見ることが出来たのでこれはこれで貴重な体験だった。

「さっきの優木せつ菜って人……自分の大好きを曝け出してたよね」

「うん。何も恐れてないみたいだった」

「かつこよかったなあ……」

愛さんは先ほどの少女にもう一度会えたいとその場で懇願するよううに手を組んでいた。

「私にも……あんな風にできるかな……」

私もふと自分の願望を吐露する。

私は自分の気持ちを相手に上手く伝えることが出来ない。

でも、せつ菜さんみたいにアイドルになれば、いつか私の本当の気持ちが誰かに届くのかもかもしれないと考えてしまう。

はんぺんを撫でながら地面を見ていると愛さんが声を掛けてくれる。

「じゃあ、一緒にやってみる？」

「えっ？」

あまりに唐突な発言に私は一瞬固まってしまった。

「りなりーが前から叶えようとしてた自分の気持ちを誰かに届ける。アイドルの世界だったらそれが実現できるかもしれないんだよ？」

りなりーの夢が叶うかもしれない、そう思ったら愛さんも一緒にやってみたくなっちゃったよ」

「私の……夢……」

ふとこの世界に入った時の姿を想像する。

みんながりなりーと呼ぶ歓声の元、ステージの上で笑顔を振りまきながら自分の気持ちを歌に込めてその場にいる人たちみんなと気持ちが繋がる。

そんな夢のような世界が実現できたら、なんて素敵なんだろうと胸が躍るような感覚になる。

だが、それと同時に考えてしまうのは反対の世界。

笑顔を作ることが出来ず、見に来てくれた人たちも笑顔が無く誰とも気持ちが繋がらない世界。

いや、むしろこんな私を不気味に感じてライブにすら来ないのかもしれない。

光の裏に影があるのは必然だ。

その影を恐れていては前に進めないことは分かっている。

けれども、過去の私がそれを思い出させ、前に進めなくさせる。

こんな私がアイドルの世界に飛び込んでいいのか迷っているときさんは私の手をはんぺんから離して握ってくる。

「大丈夫！ 愛さんがいるし、りなりーを一人にはさせないよ？ それに、そこならば愛さん以外にもりなりーの事を分かってくれる人はいるはずだから！」

「あっ……」

その言葉を聞いて、私は少し前に会った男の子たちを思い出す。

紺色の髪が線のように靡いた少し可愛い顔の男の子。

そして、黒髪と赤い瞳が印象的な頼もしそうな男の子。

以前、部室棟でスクールアイドル同好会の事を訪ねてきたあの人も、優木せつ菜さんと同じ同好会に所属しているのだろうか。

何を話しても表情が変わる事の無かった私を不気味がらず接してくれた。

あの二人からしたらたかがそんな事を、となるかもしれないが私にとっては最も重要な事だった。

彼らもこの同好会に居るのであれば、二人共仲良くなりたい。

「分かった。愛さんがそう言うなら私もスクールアイドル同好会に入る」

愛さんは私の言葉を聞いた瞬間、笑みを溢しながら大きく抱きしめてくる。

私のなけなしの勇気をいつも大きな腕で受け止めてくれる。

だからこそ、愛さんにもここで何か恩返しが出来たらいいな。

「それでこそだよなりー！　じゃあ、明日さっそくスクールアイドル同好会の部室にレッツゴー!!」

こうして私たちのスクールアイドル人生が静かに幕を開けるのだった。

新たな出会い

【輝弥視点】

「おはよう、姉さん」

せつ菜さんのライブから日が明け、俺は昨日の興奮が冷めやらぬまま朝を迎えていた。

ライブの余韻が身体の中に残っていて、寝ることもままならなかったので正直もう少し寝ていたい気分だったが、そうも言ってもらえない。

「おはよう、輝弥。ご飯出来てるわよ」

姉さんはいつも通り俺より早く起きて朝ご飯を用意してくれる。

同じ高校生とは思えないスペックの差だ。

これが出来る人間と出来ない人間の典型的な構図だろうか。

どんな時も料理には手を抜かず、健康を考えたバランスの良い食事を用意してくれる姉さんは俺の数少ない自慢であり感謝の気持ちと一緒に誇らしくなってくる。

「ありがと、頂きます」

日本の朝食として例に挙げられるご飯と味噌汁、そして魚の塩焼き。

シンプルだけれどもこれを食べる事で今日一日を頑張るための活力が漲る感じがするのだ。

言ってしまうえば、これ以外では朝食としては物足りないとさえ感じる。

朝食を食べながら、俺は昨日のライブを思い出していた。

あの場に演出等を設置した上での完璧なステージは用意されていなかったのにも関わらず俺の視界にはそのステージが映っていた。

過去のライブと差し支えない炎を絡めた熱いパフォーマンス。

そして、熱い想いの下で静かに波打つ水のような反射。

せつ菜さんと菜々さん、この二面性を完璧に表現した素晴らしいステージだった。

そして、そんなせつ菜さんの強さを後押ししたのが、あの楽曲。

あの曲も話によるとせつ菜さんがスクールアイドルを辞めた後、我慢できずに密かに作っていた物らしい。

己の中の迷いと戦いながらも曲を作ったがそれでも最後の一押しを歌うための言葉が浮かんでこなかったのだとか。

そこに俺と侑さんの言葉が響き、自分の胸に生まれた思いが確かな未来へ導くのだという事を歌おうという事で溜飲が下がったそうだ。

やはり自分の大好きな事は辞めようと思っても、心のどこかに蟠りを抱えておりそれを完全に捨てる事は並大抵の人には出来ないのだと痛感した。

だが、実際に大好きを捨ててしまった人に遭遇してしまったら、俺はその人を軽蔑してしまうかもしれない。

時には学生の自分である勉強をすっぽかして、時には襲い掛かる眠気と戦いながら向き合ってきた大好きを簡単に捨てられるという事は、それに対して実は思い入れを持っていたわけでもない薄情な人なのではないかという印象を持ってしまふ可能性があるからだ。

人には大好きを辞めざるを得ない事情があることも理解しなくてはいけない。

ただ、それでも大好きを続けられる可能性が残っているのだとしたらそれを続けてほしい。

それが夢への一步を踏み出させてくれた恩人への恩返しなのだから。

「……輝弥、何か良いことでもあった？」

「えっ？」

突然、姉さんから声を掛けられ俺は一瞬困惑する。

「だって、黙々と食べ進める上にもう食べ終わっちゃってるんだもの」
無意識だった。

せつ菜さんの事で頭を働かせていた内に、消費したエネルギーを直ぐさま補給するように朝食を摂っていた。

いつもなら姉さんと談笑しながら食べていたのだが、やはり今日は少し様子がおかしいようだ。

「あっ……ぐめん、つい……」

「ふふつ、別に良いわ。むしろそこまで無我夢中になっている貴方を見るのも少し久しぶりかもね」

姉さんを置いてけぼりにしてしまい慌てる俺を見て、姉さんはクスリと微笑む。

「……うん……そうだね……」

姉さんの言葉を聞いて俺は少し昔の事を思い出し感傷に浸る。

それは決して思い出したくはない過去なのだ。

理不尽な扱いから姉との比較まで俺のストレスを貯めるには十分すぎる生活だった。

だが、どんな蔑みにあっても姉さんだけは味方で居てくれた。

姉さんが居なければ俺はここにいなかっただろうし、こんなに輝かしい未来が待っている生活など考えられなかっただろう。

「それで？ 貴方がそこまで嬉しそうなのは例の人の件かしら？」

姉さんは昔の事を思い出させまいと話題をすぐに元の話へ切り返す。

例の人というのは以前に姉さんに話したせつ菜さんの事だ。

「うん、姉さんがくれた言葉のお陰でもう一度スクールアイドル同好会が立ち上がったんだ」

「そうなのね。でも、私は助言をただけよ。最後に実行したのは貴方なんだからもつと自信を持ちなさい」

姉さんは俺の事を称賛しながらも決して慢心しないようにと忠告をする。

正直今でも自分が憧れの人の心を動かしたことは俺の中で夢のよくな出来事なのだが、こうして言ってもらえるという事はやはり現実を起こったことなんだと身が引き締まる思いだった。

「それに、スクールアイドル同好会でそのアイドルを目指す子たちの為に曲を作るのでしょうか？ しつかりと自分で決めたことならば、それを貫きなさいね」

「……うん。自分の意思で決めたことだもん。捻じ曲げるつもりはないよ」

俺の決意を聞き、姉さんはほっと一安心するように息を吐いた。

「それが聞けただけでも十分よ。さっ、早く着替えて学校へ行く支度をしてきなさい」

出発する時間が迫ってることに気付かず、俺は食後の挨拶と共に部屋へ戻り身支度を整えるのだった。

学校に到着し、靴箱へすぐには向かわず校舎の前で立ち止まる。

そして、徐に屋上を見つめる。

屋上はいつも通り閑散としており静寂が広がっているが、昨日は真逆だったのだ。

優木せつ菜によるゲリラライブ。

せつ菜さんを近くで見えていた俺や慎もそうだったが、校内で彼女の事を知っていた人物はここでせつ菜さんを拝めるとは思いもよらずテンションが最高潮に達したことだろう。

あわよくばもう一度彼女のライブを見たいと思ってしまうがこれからは俺も観客のままではいられないのだ。

せつ菜さんと同じ同好会に所属するという事はせつ菜さんを支えるという事。

つまりは彼女を応援してくれるファンの為に彼女の良さをより引き出せなくてはいけないということだ。

姉さんが忠告したのはこれも理由になっている。

いつまでも応援者のままでいるな、これからはせつ菜さんや同好会のメンバーを支えなくてはいけないのが同好会に入りみんなの為に曲を作る俺の役目だということを暗に言ってくれたのだ。

彼女たちを輝かせるためには自分から彼女たちに歩み寄り、その内面を知る事が何より重要だ。

それは俺にとっては過酷な道だが、このメンバー達とならそれを成せるような気がする。

屋上を見ると同時に視線の先にも映っていた太陽を見つめ、俺はふと笑みを作る。

「俺は……絶対負けないよ」

願いは口に出すことで言霊となり、自信に勇気を与えてくれる。自分を奮い立たせながら、俺は教室へと向かうのだった。

その日の授業が終わり、教科書等の荷物をまとめる。

スクールアイドル同好会の部室へ向かおうとしたがその瞬間、慎に止められるのだった。

「輝弥、これから同好会か？」

「そうだよ。何かあった？」

急に呼び止められるもんだから、慎との間に何か重要な話でもあったかと思いを巡らす。

「いや、別に大したことじゃないんだけど……俺もそつちに顔を出しに行っても良いか？」

慎はどこか居心地が悪そうにしながら言う。

「別に大丈夫だと思うけど……入る部活動探さなくてもいいの？」

「うーん、あんまり興味をそえられる所が無くてさー、折角なら輝弥がいる所もありかなって思ったんだ」

慎は頭を掻きながら申し訳なさそうに言うが、俺としては大歓迎だ。

この学校で一番最初に仲良くなった慎と一緒に部活がやれるのなら、嬉しいに越したことはない。

それに慎は運動神経抜群、そしてスクールアイドルの事も俺よりは博識なので置いていかれることはないだろう。

むしろ慎がめきめきと頭角を現して俺が置いて行かれそうな気がするので、俺としてはそつちを気を付けなくてはいけない。

「じゃあ、スクールアイドル同好会に入ってくれるってこと!？」

「ま、まあっ……そういう事になるかな……」

俺は慎が同好会に入ってくれると思えば彼に詰め寄るが慎は少し思う所が違ったのか少し冷めた反応をする。

「なんか歯切れが悪い気がするけど……まあいつか。それなら早速入

部の手続きをしよう！」

「えっ、まずはメンバーの了承をもらってからじゃないのか!？」

「同好会のみんなはもう慎の事を知ってるから拒む人なんていないと思うよ！ あっ、でもせつ菜さんには話しておいた方がいいのか」

慎を早くスクールアイドル同好会へ入部させたくて逸る気持ちが抑えられず、慎に諭されてしまいがまず部長には話を通しておくことが先決だとして生徒会室へ行く前に部室へ顔を出すことに決めた。

スクールアイドル同好会の部室へ向かう途中、慎は暗い面持ちだった。

「慎、さっきから顔が暗いけどどうしたの？」

同好会のみんなが受け入れてくれるかどうかを心配しているのだろうか。

いや、彼女たちは慎の事を良くしてくれてるし、かすみはあだ名で呼んだりしてる。

あの子や他の子たちが裏の顔を持つてるようには見えないし、慎への態度も悪いようには見えないから問題ないと思ってるが他に懸念していることがあるのだろうか。

「えっ？ そんなに変な顔してたか？」

「まあね、こーんな感じでどよんとした空気が流れてたよ」

俺はいつかの慎にやられたように俺なりの暗い表情を全力で表現して、慎に見せつける。

「そっかあ……」

（ん？ 意外と乗ってこなかった……）

俺は慎から誇張し過ぎだ、くらいに怒られるかと思ったがまさかの受け入れをされてしまい戸惑いが隠せなかった。

「同好会のみんななら大丈夫だよ。慎だつてあの人達と触れてそれは分かったと思うし、心配することはないよ」

「うん、それは大丈夫だと思ってるけど……」

慎は徐に視線を反らす。

これは前にも見たような光景だ。

「慎、スクールアイドルの事で何かあったの？ いつもこの話をするとき、決まって目線を外すけど」

「へっ？ 別に悪いことがあったわけじゃないさ。これは俺の中の問題だからな」

「……それって……」

「輝弥くん、慎くん！ お疲れ様！」

慎の抱えてる悩みについて言及しようとした矢先、遠くからしずくさんの声が聞こえてきた。

隣にはかすみの姿も見える。

「しずくさん、それにかすみもお疲れ様」

「かぐ男もお疲れさま。あと慎のすけも早いじゃん」

「慎のすけ言うなよ、かすかす」

「そつちもかすかす言うなあ!!」

かすみは俺に挨拶をした後、息をするように慎のあだ名を口にする。

そして、慎がそれを聞いてかすみを煽るというデジャヴが起こる。

「はいはい、そこまで」

「二人ともどうぞう」

しずくさん達が来てしまった事で、慎に先ほどの事を聞くタイミングが無くなってしまった。

(……また別のタイミングで聞くか……)

この先、すぐに彼と別れるわけじゃない。

聞く時間はいくらでもあるのだ。

なら今は焦って問い質す必要もない。

いずれ慎の口から聞けることを信じて考えるのをやめた。

スクールアイドル同好会の部室に全員が集まったのち、まずは部室内のお掃除から始まった。

活動休止してからそこまで時間が経っているわけではないが、気持ちの切り替えという点から部屋を綺麗にしようというかすみの提案

の元、お掃除を繰り返し広げるのだった。

歩夢さんとエマさんが和気藹々と箒で床のゴミを取り除き、侑さんとかすみがちらが先に端まで辿り着くかで勝負しながら雑巾がけで仕上げを行う。

ちなみに俺はしずくさんと一緒に窓や机など備蓄品の拭き取りをやっていた。

「しずくさん、こうして同好会がもう一度立ち上がってよかったね」

黙々と作業するのもつまらないので、しずくさんの元へ歩み寄り話しかける。

「うん、そうだね。輝弥くんが居てくれたお陰だよ。本当にありがとう」

しずくさんは返事をしながらも窓拭きを続けている。

俺もしずくさんが拭いている隣で特に黒ばんでいるわけでもない窓を隅から隅まで掃除をする。

「いや、俺が動けたのはしずくさんが居てくれたお陰もあるんだよ。しずくさんと最初に出会えてなかったらスクールアイドルにそこまですべて示さなかったかもしれないし、あの時のしずくさんの訴えが無かったらこうして動けてなかったと思う。だから、俺だけの偉業ではないよ」

しずくさんからの感謝の言葉を俺なりに噛み砕いてそのままお返しする。

彼女とひよんな出会いをしていなければ、また違った未来があったかもしれないし、せつ菜さんを説得する勇氣も持ててなかったと思う。

「ふふっ、私の為だったらどんなことでもやってくれるんだもんね？」

「なっ、そ、それは……その……言葉の綾というか……」

俺が思い出したくなかった台詞がしずくさん本人から放たれたので、顔が突然赤く染まる。

そして、弁解の言葉が見つからずあたふたしてしまうがそんな俺を見て、しずくさんは思わず吹き出すのだった

「ふっ、冗談だよ。やっぱり輝弥くんってたまにからかいたくなっ

ちやうなつて思つて、ついね」

「えつ、しずくさんまでそつちの人間なのー？ ひどいよー」

しずくさんはそこまで人を弄るといふ事をしない人に思つてたから、少し意外だった。

けれども、彼女まで弄る側に回られたらこつちの対応が多くなり余計に疲労感が増してしまふので勘弁してほしかつた。

「ごめんね。でも、良い反応する輝弥くんにも少しは責任はあると思ふな？」

「……なんだかさつきまで味方に見えてたしずくさんが敵に思えてきた」

さすが女優を目指している卵なのもあつてかしずくさんが煽るよゝうに言つてくるので、俺は目を細めながらしずくさんへの文句をぶつける。

「ふふつ、もう言わないよ。さすがにこれ以上言つたら輝弥くんが怒つちやうから」

「もう金輪際、敵に回つてほしくないよ」

しずくさんが笑つている横で俺はため息を吐きながらぼやくのだった。

「そー！ いちやいちゃしてないでちゃんと掃除してよ！」

話に夢中になり掃除が疎かになつてしまつたので、大きな声と指差しのセットでかすみに指摘されてしまふ。

「べ、別にいちやいちゃしてたわけじゃ……!?!」

かすみのある単語に俺は思わず反応してしまつたが、それはしずくさんも同様だつたようだ。

同じタイミングで反論してしまつたので、はつと双方を見つめ合つたのちすぐに視線を反らす。

「ふうくん、二人共なんだかい雰囲気じゃん？」

「そ、そういうわけじゃないよー！」

しずくさんが赤くなりながらも抗議する。

だが、ここにいるのは思春期真っ只中の高校生。

多感な時期という事もあつてそういつた恋愛話もすぐに発展させ

ようとする。

「確かしずくちゃんと輝弥くんって私と輝弥くんが知り合う前から仲良くしてたんだよね？」

「なら二人の息がぴったりなのも納得だね」

エマさんと侑さんが立て続けに囁し立てていく。

「むうーん……」

「ううーん……」

「あ、あんまりからかわないであげよっ……!? 輝弥くん達が流石に可哀そうだよ……!」

少しずつ頬が膨れ上がっていく俺達を見て歩夢さんが慌てながら咎める。

「はいはい、他の部室から椅子を持ってきたよ♪」

「だいぶ部室内も綺麗になりましたね」

外から彼方さんの声が聞こえてきて、二脚を両手で持って部屋に入ってきた。

続けて、せつ菜さんと慎も続けざまに入ってくる。

三人は部室で使用するための椅子が足りていなかったので、他所の余っている部室から拝借してきたのだ。

「これだけあればみんなの椅子は足りるんじゃないか? ……ていうかなんで輝弥としずくはそんなに赤くなってるんだ?」

「二気にしないで(下さい)」

慎は大机の周りに椅子を並べ終えた後、椅子の数が合ってる事の確認も含めてメンバー全員を一通り見渡すが、視界の端で顔の赤みが残ったままの俺としずくさんが目に入った。

それをひた隠すために有無を言わさない速さで慎の口を塞ぐように試みるが、ここでもしずくさんと息が合っつてしまっ消えかかっていた赤みがさらに増すのだった。

「なんかタイミングがシンクロしてるけど……まあいつか。せつ菜さん、他に何かやる事ってあるんですか?」

慎はジト目で俺達を一瞥するが、すぐに切り替えてせつ菜さんに残ってる仕事が無いか確認する。

「そうですね、ひとまずはこれで完了でしょうか」
「ふっふっふ、まだですよ〜！ 最後にあれを付けなくてはいけないです！」

かすみはそう言いながら、部室の外へと出る。
他のメンバーもそんなかすみに疑問を抱きながらも付いていくように外へと退出する。

そして、かすみは全員が部室の外へと出たのを確認すると扉を閉めて、ポケットから一枚のプレートを取り出す。

それをプレート台にセットすると、そこにはスクールアイドル同好会と書かれた一つの部室が完成していた。

ネームプレートをはめたかすみは完成した部室を見て、誇らしげになっていた。

スクールアイドル同好会を復活させるために一人奔走していたので、彼女なりに色々と思う事があるのだろう。

「むっふっふ〜、これで完成です！」

「これで同好会も復活だねー！」

エマさんも待つてましたと言わんばかりに喜びの声を上げる。

「それじゃあスクールアイドル同好会の最初の活動を始めまーす!!」

「あっ、いたいた!! やっほー!!」

かすみの号令の元、新生スクールアイドル同好会の活動が始まるうとした矢先、聞き覚えのある声が耳に入った。

階段から二人の女子生徒が上ってきたが、その顔には見覚えがあった。

「あれっ、璃奈じゃないか！」

「それと……運動部で活躍してた人……だよな？」

そこには以前にこの部室の場所を教えてくれた情報処理学科の天王寺璃奈さんと金髪をポニーテールにして学校指定のジャケットを腰に巻いたフレッシュな格好をした方が居た。

その人は以前に慎と部活見学をしていた時、様々な運動部で大活躍していた人だ。

「あっ!! 君たちって以前に見に来てくれてた子たちだよな?！」

「えっ!? 覚えてくれてたんですか!」

どうやら金髪の女性は俺達の姿を見て、部活を見に来てくれたことを覚えてくれていたらしい。

そこまで近くで見えていたわけではないのだが、それでも認識してくれていることに驚きが隠せない。

「そりゃあね! 珍しく男子がいるなあ〜って思ってたんだけど、テニスの練習が終わった後にバスケット部に行ったらそこでも見たから、愛さんのファンかな〜って勝手に思ってたよー!」

どうやら愛さんは今までと違う光景だったことで俺たちの姿をより認識するようになったみたいだ。

「それでも凄いことだと思っけどなあ……」

「それが愛さんの凄い所なの、輝弥くん、慎くん」

愛さんと呼ばれた女性にただただ驚嘆の声しか上がらなかつたけど、璃奈さんがそれに乗ってくる。

表情は相変わらず変化なしだが、今の璃奈さんは自慢の姉を紹介するように誇らしげに言ってるように感じた。

「璃奈さん、少し久しぶりだね」

「うん、また会えて嬉しい」

「輝弥さん、お二人のことをご存知なんですか?」

璃奈との再会に喜びを分かち合っているとせつ菜さんが訪ねてくる。

そういえばみんなには何も話してなかったから知らなくて当然だ。

「はい、璃奈さんは慎と同好会の部室を訪ねようとしてた時にその在処を教えてくれたんです。そちらの愛さん? は部活動見学で拝見してたので」

「そういえば、私達にも教えてくれたよね!」

「おん! そっちのお二人さんはスクールアイドル同好会に入ってたんだね! それで、そっちの少年たちは愛さんがいなくなった後でりなりーに声を掛けたって感じ?」

愛さんは侑さんと歩夢さんを見て安堵の表情を浮かべた後、俺と慎に目線を変え訪ねてくる。

「うん、愛さんが居なくなっただけ、そちらのお二人が困っていた場所で見かけたから私が声を掛けたの」

「あの時は本当にありがとうね。おかげでスクールアイドル同好会を見つけることが出来たしこうして活動することが出来るから」

「お礼なんていいよ。それより私たちも……スクールアイドル同好会に入部したい」

「えっ!? そうなの!？」

いきなりの入部宣言に侑さんは思わず愛さんと璃奈さんに一歩近づく。

「うん! 昨日のライブを見て、胸が熱くなってきたー! こんな気持ちになったの初めてだからやってみたいって思ってた!」

「……本当に凄かった」

「あつ……ありがとうございます……!」

早速ライブを見てくれた人からの感想を貰えてせつ菜さんは顔をほんのり赤くしながら返事をする。

そして、侑さんはいつの間にか愛さんの手を握っていた。

「分かるよ……ときめいたんだね!」

「うん♪」

どうやら愛さんと侑さんは気が合うようで侑さんの積極的なアタックを愛さんは躊躇することなく受け止める。

「というわけでスクールアイドル同好会に情報処理学科二年、宮下愛と情報処理学科一年の天王寺璃奈、入部を希望します!」

「あつ、そういえば慎も入部希望を一緒に出せばいいんじゃない?」

「へっ?」

愛さん達の入部志願を聞いて慎の入部希望もせつ菜さんにまずは相談しようと言っていたことを忘れていた。

慎もいきなり話題を振られたため、素っ頓狂な声を上げた。

「あれっ? 慎くんってまだスクールアイドル同好会に入部してなかったっけ?」

「私もてっきりもう入部してるものだと思ってました」

彼方さんとしずくさんは今まで一緒に動いてくれてた事もあつて

既に仲間だと思ってくれていたようだ。

「そうですね、厳密には手続きを行っていませんでしたので、これを機にやってみましょうか。慎さんもそれでいいですか?」

「あつ、はい。問題なしです」

「よし、じゃあ早速入部届を出させてもらおうね!」

せつ菜さんは愛さんと璃奈さんと慎を連れて入部届を提出しに席を外す。

「早速メンバーが増えて益々賑やかになるね♪」

「そうですね。急展開にも程がありますが……でも、悪くないですね」

エマさんの発言に俺は相槌を打つ。

最初は五人だった同好会が少しずつ人数を増やし、現時点で十一人という大所帯になっていた。

もう一度同好会を立ち上げて、せつ菜さんを奮起させて良かったと心から思えた瞬間だった。

少しずつ同好会の輪が広がるのを感じて、俺はただただ期待に胸を膨らますのみだった。

和気藹々

新たに入部した愛さん、璃奈さん、慎も加えて、スクールアイドル同好会はより賑やかになるのだった。

「そういえば、スクールアイドル同好会に入部することにはなっただけど、スクールアイドルって何をするとところなの?」

部室内の大机を囲むように座りながら、愛さんはそう問いかけるのだった。

愛さんの質問にせつ菜さんが代表して答える。

「そこに関してこれから考える所だったんです」

「えっ? どういうこと?」

「スクールアイドル同好会を再始動するにあたり、改めて活動の方針を決めようと思ひまして」

前回のようみんなのやりたいことがバラバラになってはまた同好会内で対立が起きかねないという事で皆のやりたい事を聞いた上でどのように進めていくかを決めていくことにしたのだ。

「まず何をやりたいか皆さんで意見を出し合いたいと思います」

せつ菜さんはそう言いながらホワイトボードを用意する。

「はいはい! スクールアイドルを目指す者としては誰もが憧れるもの、すなわちライブをやりたいです!!」

最初に声を上げたのはかすみだった。

かすみはボードの下にあったマーカーを手に取り、ボードに大きく

「ライブをやりたい!!」と書くのだった。

「ボードに書く内容、もう少しマシンなのはなかったのかよ……?」

「うるさい! 慎のすけのくせに!」

「うるせえ! かすかす!」

「はいはい、そこまで。だけど、スクールアイドルですからやっぱり目指すのはそこになりますよね?」

慎とかすみの言い争いを軽くないなしてしずくさんは話題を元に戻す。

「結局、ライブはまだやれてないもんね」

「こうして人も増えたからもっと賑やかなライブにできるんじゃないかな？」

彼方さんとエマさんはまだライブをやってないこともあって随分と気持ちが昂っているように感じる。

「皆さん、それぞれがやりたい事を考えていると思いますので意見を出し合っていきましよう」

「はいはい！ かすみはとびきり可愛いのが良いです！」

「私はみんなで輪になって踊ったり歌いたいなあー！」

「ライブの幕間でショートドラマを交えてみるのはどうでしょうか？」

「休憩と称してお昼寝タイムとかもいいんじゃない？」

せつ菜さんの次のライブに対する提案がかすみを皮切りに他のメンバーも次々と意見を出していく。

けれども全員の意見は誰一人として被っていない。

「みんなバラバラだね……」

「そうだね。慎くんはどんなライブにしたいか決めてるの？」

歩夢さんからの質問に慎は頭を悩ませる。

「うーん……まだこれと言ってコンセプトは決まってないですね……強いて言えば……みんなが熱くなるようなライブがしたい……とかですかね……」

「熱いライブ！ いいですねえー！ 私も慎さんと同じように見てくれている人たちが熱くさせるライブがしたいです！ 大好きを精一杯表現できるように火薬を大量に投入して気持ちを上げていきたいです！」

「さ、流石にそこまでの演出は難しいんじゃないんですか!？」

「輝弥さん！ 最初から無理と言っていては何もできませんよ!! こういう事はチャレンジあるのみです！」

せつ菜さんのライブ演出に思わず反論してしまったが、せつ菜さんは俺を指差しながら自分の意見を貫いていく。

今の彼女を見ると、本当にあの生徒会長なのかと疑いたくなくなってしまふ。

全校朝礼等で全校生徒の前で堂々と演説している人が今や目の前で次のライブに向けて子供のようなはしゃぎっぷりを見せつつ考えられているのだ。

暫くの間、俺は彼女たちを同一人物として見ることは出来ないだろう。

「火薬を投入って……そういうのじゃなくて私はもっと可愛いのがいいな」

せつ菜さんに圧倒されている俺を尻目に歩夢さんも自分の意見を述べる。

歩夢さんの事はまだこれと言った特徴を掴んでいるわけではないが、女の子らしいというのが俺の中の第一心象だ。

各々が自分のやりたい事で議論してあっている中、璃奈さんと愛さんはただただそれを呆然と眺めているのみだった。

「……すごい白熱してる」

「みんな、やりたい事がバラバラだけど随分とやる気だね?」

愛さんがそうぼやいた時、全員が愛さんに目を向ける。

「……ん? あたし何か変な事言った?」

「あつ、いえ……」

かすみは以前の衝突の件もあり愛さんの発言で少し言葉が詰まる。

「あははっ、そういえば二人はどうかかな?」

そんなかすみを見て、侑さんが作り笑いをして助け舟を出す。

突然質問を振られた愛さん達は少し考え込む所作をする。

「うーん、なんだろうねえ……とにかく楽しいのいいな! みんなで楽しく盛り上がる、それがあたしは一番やりたい事かな!」

愛さんの目指すスクールアイドル像、それもまた他のメンバー達とは違う方向性だった。

ここまでみんなの方向性がバラバラだとグループとしてのコンセプトがまとめづらい。

「確かに、楽しいっていうのも大事だと思うな!」

「僕もそれはありだと思います。見てくれる人が楽しんでくれないと折角来てくれたのに少し勿体ない気持ちにさせちゃうでしょうし」

「そうですね。今はまだ見てくれる人は少ないと思いますが、いつか多くの人の前でライブが出来るようにしたいですね」

愛さんの意見について俺と歩夢さんが賛成する。

そして、せつ菜さんが全員の意見を聞いた上でひとまずの総まとめをする。

現時点はグループの方向性を考えるためにみんなの意見を集約したのみなので、それを考慮した上でどう進めていくのかはまた後日という事だ。

せつ菜さんはかすみへ次に進めるように目線で促す。

「ごほん。ではライブの事は追々考えるところとして。最初にやることは……！」

「あつ、すみません。一つだけ良いですか？」

かすみが進行を続けようとした時、俺は挙手をして発言させてもらうように許可を貰う。

「むっ、話の腰を折るのは感心しないけど……まあいいでしょう。かぐ男くん、どうぞ」

「ありがとう」

発言の許可を貰えたことに感謝しつつ、一旦咳払いする。

「スクールアイドル同好会の楽曲についてなんですけど、僕に作曲させてもらえませんか？」

「作曲を……ですか？」

「はい、僕は自分のピアノを使って沢山の人を笑顔にしたいなと思ってます。その一環として、是非皆さんの曲を作らせてもらいたいです」

「輝弥くん、ピアノ弾けるの!？」

しずくさんに対してピアノを弾けるといふ事を公表していなかったから、彼女からの驚きの声が大きかった。

「輝弥、ピアノは凄く上手いんですよ！ 初めて聞いた時、鳥肌が凄く立ったのを感じましたから！」

「そうですね、あの時はゲームBGMを弾いていましたし」

慎は自分の事じゃないにも関わらず誇らしげに自慢をする。

それに被せるようにせつ菜さんもフォローしてくれるが一つ気になる箇所があった。

「……あれっ? 僕、せつ菜さんにあの時弾いてた曲はゲームBGMって事、教えましたっけ?」

「へあつ?! いや……その……慎さんが感動していた所を偶然聞いたんですよ!! ほら、慎さんも凄く称賛の声を上げてたじゃないですか! それが廊下に漏れてたんです!」

俺からの指摘にせつ菜さんは頓狂な声を出して目線を泳がせていたが少しずつ記憶を思い出していくように言葉を連ねる。

「ああ、確かにその時は初めて聞いた後だったからだいたい感動しましたね」

「そうですよね! ……よかった……」

慎から発言を肯定されたのを確認してせつ菜さんは胸をなでおろす。

最後に何か呟いたようだったがそこまでは聞き取れなかった。

「確かに輝弥くんのピアノは一度聞いたことがあるけど、その時はせつ菜ちゃんのCHASSEを弾いてて凄く上手だったね」

「か、輝弥さんのピアノは卓越していると思います。以前の同好会では私が作曲用のソフトを使って作っておりましたが、やはり私好みのフレーズになってしまるのが問題でしたので是非とも輝弥さんにお任せしたいです」

侑さんとせつ菜さんからの称賛の声に俺は少し恥ずかしくなってくる。

「そういった形で皆さんどうでしょうか?」

「私は賛成だな!」

「愛さんもかぐやんに任せる形で賛成!」

せつ菜さんがメンバー全員に問いかけ、歩夢さんと愛さんの発言を皮切りに全員が賛同の意を込めて頷きで返答する。

「皆さん、ありがとうございます」

曲作りの中で双璧を成す作詞と作曲。

その内の一つが俺の担当として皆からのお墨付きをもらった所で

もう一つの方へ話題は変わるのだった。

「じゃあ、作曲は任せるとしても作詞の方は彼方ちゃん達でやるべきじゃない〜?」

「そうだね。全部を輝弥くんに任せちゃうのはちよつとかわいそうだし作詞と一緒に曲のイメージとかも併せて私達から意見を出させてもらうってというのはどうか?」

彼方さんが作詞のやり方について提案をして、エマさんがそれに賛同してくれる。

作詞をしてもらえるとというのは非常にありがたいことだが、曲のイメージまで貰うというのはやってもらい過ぎではないだろうか。

「曲のイメージについてはいいですよ? 作曲担当であるからには僕がまず形を作るべきだと思うので」

「それだとせつ菜先輩の時と同じようにかぐ男好みの曲になっちゃうわない?」

「それは……」

かすみからの正論に俺は反論の言葉が見つからなかった。

「人数が多い方が曲の方向性も掴みやすいだろうし、輝弥は作曲の面でもまずはやる形でいいんじゃないのか?」

「うん、輝弥くんの負担を減らすっていう点も含めてそれが良いと思うな。みんなで曲のイメージを纏めて、それを輝弥くんに渡すって事でひとまずは決め打ちにしようよ」

慎と侑さんもかすみ達派の意見であり、完全に四面楚歌と化していたので俺がとやかく言って覆りそうな状況ではないと察して、俺は苦笑いを溢した。

「……分かりました。作曲担当として少し腑に落ちない所ではありませんけど、皆さんの意見に従います」

「輝弥さん、何事も一人でやろうとしてくれるのはありがたいですが部長としてそれを認可は出来ません。ここには私たちもいるんです。皆さんで一つの物を作っていくのが何物に代えがたい宝物になるんです。ですから、その宝物の制作に私たちも携わらせてください」

「せつ菜さん……」

俺はせつ菜さんの言葉を聞いたのち、全員の顔を見渡す。

誰一人として嫌な顔をせずむしろ任せてくれと言わんばかりに清々しいほどの笑顔が溢れていた。

「分かりました。出しやばった意見をすみません。ありがとうございます」

「……それでは同好会の曲作りについての方向性もひとまず区切りがついた所で話を戻します!」

話の腰を折られたかすみは空気を変えようと再び咳払いをする。

「ごっほん! それではもう一度、今後ライブをやっていくにあたってまずやること……それはずばり! 特訓です!!」

かすみはきつぱりと人差し指を突き出しながら堂々と言い放つ。

「どんなパフォーマンスをしようにも、どんな歌を歌おうにもしっかりと特訓しない事には何も始まりません!!」

「特訓かあく……そうだよねえ」

「演劇もそうですが、何事も基礎がしっかりしていないと本番では上手くいきませんからね」

「皆さん、練習したい事も各々あると思いますのでそれぞれのチームに分かれて練習する形にしていきましょう」

「そうですね。子集団で分けていけばメンバー同士のコミュニケーションも取れますし、一人一人の特徴を重点的に見ることが出来ますから僕は良いと思います」

特訓のやり方についても自主性を重んじる校風に沿うように各個人のスタイルに合わせて練習を図ることに決めた。

「あつ、はいはい! あたし達、スクールアイドルの事って初めてだから全部の練習に参加していいのかな?」

「俺も一緒にやりたいです! どういうことをやるのか分からないので、是非勉強させてもらいたいです!」

愛さんが璃奈さんと一緒に全部の練習の参加へ志願した。

璃奈さんは愛さんの発言に呼応するように頷き、慎もそれに乗じて声を上げる。

愛さんは自分の発言に乗ってくれる人が居てくれたことに嬉しさ

を感じ、慎へにっこりと笑顔を向ける。

「おお？ シンシンもやる気だね！ 一緒にがんばろ！」

「は、はい！」

「……慎くん、顔が赤くなってる気がする」

「璃奈さん、きつと照れてるんだよ……」

「そこうるせえぞ!!」

いつにも増して気合が入っている慎を横目に璃奈さんと俺がひそひそ話を展開していたがどうやら地獄耳の彼には聞き取られてしまったようだ。

「ふふっ、良いですよ！ 皆さんでこのスクールアイドル同好会をより良いものに作り上げていきましょう！」

せつ菜さんの掛け声を中心に全員の歓声が部室内に響き渡る。

いよいよ、新生スクールアイドル同好会の活動が、発足後初めての練習が、幕を開けるのだった。

キズナアイ

「おおおおお……………おおおおお……………!!」

「じゃあ……………もう少しどうかしらあ……………?」

「こ……………これ以上はムリムリムリいい……………!」

何も事情を知らない人がこのやり取りを目の当たりにしたら誤解されること間違いなしだが断じてそんなやましいことはしていないとだけ言っておく。

ここは学校の屋上。

部室で各々やりたい事を提案しあい、それぞれでグループに分かれて練習することになった。

屋上では体力トレーニングを中心に練習が繰り広げられていた。

ただ練習を始める前にまずは柔軟を行って身体を温めていくこととしたのだが、その時点でとある人に彼方さんはいじめられていた。勿論いじめと言っても質の悪いそれとは違い、筋肉をいじめるという意味だ。

そして彼方さんの相手をしているのは果林さんだ。

果林さんは同好会のメンバーというわけではないが、モデルをやっているとの事で柔軟やストレッチのやり方について力になってくれると言ってエマさんが呼んで下さったのだ。

どうやら彼方さんは柔軟が苦手なように最初に始めた前屈の時点で果林さんに限界まで身体を押しされ悲鳴を上げていたのだ。

「彼方さんって身体柔らかかそうないメージなのにちよつと意外だなあ
〜」

「そう……………だね……………。ちよつ……………慎くん。もう少し優しく押してくれないか?」

「えっ? 輝弥、これくらいで音を上げるのか? まだまだ行けるだろ、もう少し勢いをかけるぜ!」

「えっ!? いたたたた!! ちよつおまつ……………! ギブギブ!!」

弱っている彼方さんを横目に慎に背中を押してもらいながら前屈をしていたが俺も如何せん身体が柔らかい方とはいえない。

彼方さんよりは倒れてると思ってるがそれで許すほど、この男は甘くなかった。

己の限界を理解しているつもりだったのだが、慎はそれを限界と認めずに更なる境地へと体重と追い込みをかける。

慎からの唐突な攻撃により俺は背骨が折れるんじゃないかと心配になりながらも激痛に耐えるがそれでもしんどいので精一杯の声を張って待ったをかけた。

「おおおお……………おおおお……………おおおお……………」

そしてさらにもう一人、柔軟運動に苦しむ人物がいた。

璃奈さんだった。

彼女は何ともないように飄々としているが、その表情とは裏腹に体が直角の状態から何も変化が起こっていない。

璃奈さんの後ろからエマさんが背中を押しているが力を抜いているように錯覚してしまうほどに璃奈さんの身体は倒れなかった。

「……………それが限界……………？」

「……………そうみたい……………」

「……………これもこれで貴重な一面を知れたな……………」

璃奈さんのようなタイプを初めて見た三人はその様子にただただ戸惑いの声を上げるのみだった。

一旦柔軟運動については休憩となり、彼方さんと璃奈さんと俺は疲れがどつと押し寄せてきて床に寝るのだった。

「ったく……………彼方さん達はともかく輝弥はもう少しやれるようにした方がいいぞ?」

「これでも男子の平均には立っていると思ってたけど……………」

「輝弥君は平均で留まる男でいいの? 折角なら上位に入りたいのが男の子の野心つてもんじゃないの?」

慎のボヤキに苦言を呈していると果林さんが覗き込むように顔を近づけながら煽りを入れてくる。

果林さんが前かがみになって近づいてくるので、下から見てる俺にはとある部位が嫌というほど目に入っていた。

「……まあ下には落ちたくないですし、もつと慎にも近づきたいですよ」

「……じゃあこつちにも近づいてみる?」

「ぶっ……!! そう言いながら自分で近づけないで下さい……!」

必死に見ないように堪えていたのに果林さんは否が応でも胸元をゆっくり近づけながら扇動してくるので、流石に耐えられまいと上半身を起き上がらせた。

「わお、輝弥君ってば意外と大胆?」

「彼方さん、どうして今の実態を見て俺にそんな評価を下せるんです?」

彼方さんのトンデモ発言にただただ呆然としていると慎は両手を後頭部に当てながら笑ってくる。

「あはは、さすが輝弥の専売特許って所だな!」

「じゃあ……慎くんも大胆になってみたら?」

慎が俺を嘲笑していると果林さんの標的になってしまった。

そして、慎に対しても自分のスタイルの良さを余すことなく見せつける果林さんに慎もたどたどしくなるしかなかった。

「えっ……いや……べ、別に俺も……そんな必要ないです……」

「もう二人揃ってつれないわね? だけど随分と顔が赤くなってるじゃない? からかい甲斐があつてかわいいわ♪」

「……美の暴力……」

慎と共にまごつかせていると璃奈さんが果林さんを見て羨望の眼差しを向けていた。

やはり果林さんのあの美ボディは同姓ですら虜にしてしまうのか。

「もう果林ちゃんもそこまでにして? 早く練習を続けるよ?」

折角の練習時間を惜しまなく使いたいエマさんは俺達に茶々を入れる果林さんに頬を膨らませながらぶんぶんと怒りの表情を見せる。彼女なりに真剣に怒っているのだろうが、それでも愛くるしさを感じてしまうのが彼女のオーラなのだろうか。

「あらっ、ごめんなさい。やっぱり男の子たちの反応が良くてつい楽しんでしまうわ」

女性としての恥じらいよりも異性をからかう気持ちの方が強いというのは少し考え物ではないかと俺と慎は思わざるを得なかった。

「じゃあ、気を取り直してもう一度柔軟運動を行いましょうか」

「えええ!? 彼方ちゃんこれ以上やると壊れちゃうよおおく」

「私も……」

「また慎にしごかれるのか……」

「おい、ばかぐや」

しごかれ組が口を揃えて不安げな声を上げる。

だが、その不安を消し飛ばすように横から自信に満ち溢れた声が聞こえた。

「大丈夫だよー。愛さんに任せなさいー!」

屋上の扉から愛さんが腕を伸ばしながら輪の中に入ってきた。

緑色のインナーに白いシャツで軽快に動けるようにコーデイネートされた服装はスポーツ万能な愛さんらしい格好だ。

そして、柔軟運動で足を両側に開いたままお腹が地面と密着するほどに倒れこむ姿を見せ、その身体の柔らかさを十二分にアピールしていた。

その姿に俺と彼方さんと璃奈さんからは驚嘆の声が出た。

「別に輝弥たちも練習すれば出来るようになるよ」

「そうそう! シンシンの言う通り! 二人ともまずは体勢作りな?」

愛さんに促されるがまま彼方さんと璃奈さんは長座をする。

「はい、吸って〜?」

愛さんの掛け声と共にゆっくりと息を吸う二人。

「はい、吐いて〜?」

合図と一緒に二人の背中をゆっくりと押す愛さん。

そして、息を吐きながら倒れる二人に更に追い込みをかけるように押す力を強める愛さん。

通常の屈み方ならすぐに彼方さんが悲鳴を上げ、璃奈さんは身体が硬直していたが今回の二人は先ほどまでとは違い幾分か大きく倒れていた。

二人もそれに勘づいたようで少し顔が綻んでいた。

「ね？ 難しいと思ってたことも少しコツを掴めば成果が得られるようになるから楽しいと思えるんじゃない？」

「そうだねえ。さつきよりも大きく倒れられるようになったしそんなに身体もきつくなくなかったよ」

「うん、もう少し頑張ってみる」

愛さんのお陰で彼方さん達は折れていた自信が修復されるのを実感したようだ。

「流石愛さん。苦手を克服させるやり方を熟知してるね」

「伊達に部室棟のヒーローとは呼ばれてないわね」

「部室棟のヒーロー？」

「あらっ、知らないの？ 彼女、いろんな部活から助っ人として依頼が来てるのよ」

「ああ、だからいろんなところで愛さんの姿を見たんだな」

果林さんからの解説によって愛さんの素性をまた一つ知ることが出来た。

確かに以前の見学で活躍している姿を見た際、卓越した運動神経で相手を圧倒していたな。

「よし、なら璃奈達に負けないように輝弥も意地を見せる所だぞ！

さつき二人がやってたように輝弥もやってみろよ！」

「ちよつと待て、慎！ あれはゆっくりと息を吐きながらこそ効果が発揮するもので勢いに任せてやるもんじゃあ……ぎやああああああ!!!」

璃奈さん達の進歩に触発された慎が俺も新境地に立たせようと熱が入ってしまう。

そして太陽の如く燃え上がっている慎に徹底的にしごかれるのだった。

「……もう骨も気持ちもへし折られた……」

「輝弥くん、大丈夫？」

一通りの体力トレーニングが終了し、次の練習に合流するために俺と璃奈さんは移動していた。

慎との暑苦しい練習により体力も何もかもが搾り取られたので、身体の疲労感が尋常ではなかった。

脱力感に苛まれながら歩いているが、そんな俺を心配するように背中を優しくさすってくれる。

璃奈さんがこうして寄り添ってくれるとは思わなかったので密かに驚いている自分がいる。

「ありがとう……璃奈さんの暖かさが胸に沁みるよ……」

「ったく……輝弥、こんなので音を上げてたらこの先持たねえぞ？」

「慎のしごきっぷりが馬鹿なんだって……」

「おいおい、誰が馬鹿だよ？」

「慎以外に誰がいるんだよ？」

慎が不敵な笑みを浮かべながら俺の肩に腕を乗せてくる。

このまま慎にやられ続けるのは癪なので皮肉を織り交ぜながら笑顔で返す。

慎との冷戦状態が数秒間続く中、璃奈さんはそんな俺達をじつと見つめていた。

表情は変わらないが少し目を輝かせているように見えるのは気のせいだろうか。

「二人って凄く仲が良いね。中学の頃からの友人とか？」

「えっ？ いや違うよ。慎とはこの学校で初めて知り合ったんだ」

「そうそう、お互いに狼の群れの中に放り込まれた羊のようにびびりながらな」

「それは慎だけでしょ？」

「ち、ちげーよ！ 輝弥も密かに怯えてただろ!？」

「少なくとも慎よりはびびってないな」

「お、おまえええ——!!」

慎は少し赤面しながら俺に飛び掛かってくる。

男同士の下らない意地の張り合いに璃奈さんは一切笑いを見せていなかったが、それでも羨望の眼差しを向けているように感じた。

「でも、二人みたいに素の自分を出せる相手がいるの凄く羨ましい。私は表情が変わらないからここに来るまではいつもクラスメイトからはおぼけみたいとかロボットみたいだなねっていつもからかわれてた」

璃奈さんは顔を落としながら自分の過去について語ってくれる。

「……璃奈さんはどうしてこの学校に？」

「……私、プログラムとかそっちの情報処理に興味があったからここを志望した。それに、ここなら私の学区から距離は離れてるから同級生の子が少ないし、今までの弱かった自分とさよならをする意味を込めて入学した。……でも、ここに来て最初は何も変わらなかった」

「璃奈……」

「クラスメイトの子とどう馴染めばいいのか分からなかったの。また今までの様に笑ったり驚いたり嬉しそうにしない私を見て不気味に思うんじゃないかって。私の中にその恐怖だけがしこりのように残ってた」

誰よりもみんなと仲良くしたい璃奈さん。

だけど、そんな璃奈さんを見てほくそ笑むように顔を覗かせる過去の記憶。

同級生たちが起こした蛮行が璃奈さんの未来に大きな障がいを生み出しているのだ。

(……なんだか昔の俺を見ているみたいだ……)

璃奈さんを過去の己と照らし合わせてしまう自分がいた。

璃奈さんに同情しようとした時、璃奈さんは突然まっすぐ目を見据えた。

「でも、そんな時に助けてくれたのが愛さんだった。私の事を決してからかおうとせず、悩んでいた私にそっと寄り添っていつも私の事を支えてくれた。愛さんがいてくれたからこそ、今の私が居る」

璃奈さんは何も見えない暗闇の中を黙々と歩いていた時、愛さんという太陽に出会った。

それは璃奈さんの生活に彩りが戻ってきた瞬間だった。

愛さんは誰とでも分け隔てなく接することが出来て、触れ合った人

の心情を敏感に察知する。

そんな人懐っこさが璃奈さんを救ったのだ。

「そうなんだ。愛さんと璃奈さんは強い絆で結ばれてるんだね」

「うん、でも愛さんとだけじゃない。もつと沢山の人と繋がりたい。それに私がスクールアイドル同好会に入ろうと思ったのは輝弥くんと慎くんのお陰でもある」

「えっ、俺達が?」

俺と慎は璃奈さんの為に何かをやった当てがなく、必死に記憶の奥底を掘り起こした。

「あの時、私の事を不思議がりにはしても決して煙たがらずに仲良く話してくれた。同級生でああやって話すことが出来たの初めてだったからすごく嬉しかった」

あの時とは同好会の部室を探していた時の事だ。

部室の場所が分からず慎とくたびれていた時、璃奈さんが助け舟を出してくれた。

同級生の子で気兼ねなく話しかけてくれたことが嬉しかったのでその場の勢いで名前呼び合う所まで発展したけど、それが彼女にとってはありがたかったようだ。

「璃奈さんにそう言ってもらえるなんて少し照れるな……」

「だけど、これからはもつと俺達にも色々相談してこいよ」

「え?」

慎の発言に璃奈さんは驚きの表情を一瞬見せた。

「うん、俺達は璃奈さんの事をもう友達だと思ってる。璃奈さんが不安に思ってた事とか楽しみにしてる事とかもつと話してほしい」

「えっ……いいの? 二人の輪の中に私も入っていいの?」

「当たり前だ! それとも璃奈は迷惑だったか?」

璃奈さんは力強く顔を横にぶんぶんと振り、慎の言葉を否定する。

「いや、迷惑だなんて思ったことない。凄く……嬉しい」

「なら、これからも改めてよろしくね。璃奈さん」

「っ……うん……!」

璃奈さんの返事は今までの中で一番感情が込められているように聞

こえた。

それだけ彼女の中に込み上げるものがあつたのだろう。

「……にしても友人でいるつもりならかすみと同じように呼び捨てにしてもいいんじゃないのかあ〜？」

「えっ!? それは……璃奈さんに迷惑だろうし……」

「……迷惑じゃない。私も二人と仲良くなりたいたいから好きに呼んでほしい」

璃奈さんからの必死の訴えに俺は折れるのみだった。

「うっ……。……分かった。璃奈……。さえ良ければこうして呼ばせてもらうね?」

「うん。ありがとう、輝弥くん」

璃奈の要望に応える事で俺達の間にもた一つ友情が生まれたような実感がした。

「さて、急がないと次の練習に遅れるぜ! 二人共、早く行くぞ!!」

「もう慎! そんな慌てなくても……。まあいつか。璃奈、行く?」

「……うん……!」

先輩たちに叱られないように先行して走る慎を他所に璃奈と二人で並走している。

璃奈の顔は何も変わっていないがそれでも心の中では彼女と笑い合えてる確信があつたのだつた。

スクールアイドル像

璃奈、慎と一緒に同好会の部室へ向かうと既に愛さんとしずくさんが授業を受けるように椅子に座って待機していた。

「遅いぞ三人とも！」

「ほら、三人の席はそこだから座って座って」

愛さんとしずくさんに急かされ、それぞれが用意された席へ着く。

「講義の先生はまだ到着してないのかな？」

「多分、もうそろそろ来ると思うんだけど……」

「呼ばれて飛び出せばばーん、です!!」

次の練習が始まるまで時間を潰そうとしていたら、タイミングを見計らったかのようにかすみが部室外から飛び込んできた。

今日のかすみはいつもと違い、新しいファッションを取り入れていた。

「遅いぞ、かすかすー」

「かすかす言うな、慎のすけ!! 大体三人が遅いからかすみみんな暇を持って余したんだよー!」

「かすみ、時間がもったいないから本題に入る？」

「ふん、かぐ男に免じて慎のすけへの文句はこれくらいにしといてあげる」

慎の態度に憤慨するかすみを窘めると普段は掛けていないであろう眼鏡を整えた。

「さあ! 気を取り直してこれからスクールアイドルについての講義を始めたいと思いますー!」

「いえーい、頼むよーかすかすー!」

「愛先輩までかすかす言わないで下さい!!」

「かすみさんそこまで。それにしてもその眼鏡はどうしたの?」

しずくさんの問いにかすみは見栄を張るように眼鏡のふちをくいと直した。

「よくぞ聞いてくれました! これはせつ菜先輩から借りてきたんです!」

……………無断で」

「……………その根性に敬意を表すよ」

自分の行動を誇らしく思っているのか罪悪感に苛まれているのか分からない態度を見せながら、他所へ目を向けるかすみに俺は呆然とため息を吐くのみだった。

「にしても、スクールアイドルの講義っていったい何を勉強するんだ？」

「それを今から教えようというのだよ、慎のすけくん」

「調子に乗るな、かすかす」

「かあすかす言うなああ!!」

二人の漫才が止まらず講義が先に進む気配が一向に無い。

愛さんもそんな二人を見ながら一緒に茶化すのだった。

「ほーら二人共、時間が無くなっちゃうんだから夫婦漫才はその辺にして早く進めようよ!」

「夫婦言わないで下さい!」

ここまで阿吽の呼吸で喋る内容が揃うのは二人の仲が良い証拠だろう。

「もおく慎のすけは一々被せてこないでよー!」

「お前こそ俺に被せてきてるんだろ!」

「慎、埒が明かないからそこまで」

仲が良いと言っても犬猿の仲だったようだ。

そろそろくどくどくなってきたので慎の肩に手を置き、そつとあやす。

「かすみちゃん、スクールアイドルについてもっと教えてほしい」

「りな子♪ 慎のすけと違って物分かりがいいねえくかすみんがなんでも答えてあげます!」

「かすみさん? いい加減にしなよ?」

猿の方を抑えても犬は猿に向かってキャンキャン吠え続ける一方だったの、そろそろブリーダーの堪忍袋が切れそうだった。

「ひえっ……………じよ、冗談だよおくしず子。ほら〜アイドルが怒るのはご法度だよ? ほら笑顔笑顔ー!」

「うーん、今のかすみさんには私が怒ってるように見えるのかな?

「こんなになんて笑ってるの〜?」

「そう言うしずくさんは口は上向いているが目は笑っていなかった。」

(……しずくさんを敵に回したら命は無いな)

「しずくさんとかすみさんのやり取りを見て、絶対にしずくさんを怒らせることをしないようにしよう」とそつと心に決めた俺なのであった。

「……と悪ふざけはここまでにして、早く本題に入る?」

「……切り替え早すぎないか?」

「……愼くん、何か?」

「いえ、なんでもありません。はい」

般若のようなオーラを纏っていたのに一瞬で普段のしずくさんに戻るのには流石演劇部で培われた能力といった所だろうか。

愼はそんなしずくさんに引き気味だったが、しずくさんから刺されそうな視線を受けて、姿勢を真っすぐに伸ばしながら講義に臨もうとしてごまかすのだった。

「ごっほん! それでは本題に行きます!」

かすみもさすがにおふざけは止めにして、いよいよスクールアイドルの講義が始まった。

「では、最初に質問します! スクールアイドルのあるべき姿とは一体何でしょうか?」

「スクールアイドルのあるべき姿……?」

かすみの最初の質問に早速頭を悩ませる。

「かすみさん、それってどういうこと?」

「どうやらしずくさんでも同じように理解が追いついていないようだった。」

「あれえ〜? しず子、スクールアイドルをやっているのにそんなことも分からないの〜?」

「むう……」

かすみからの煽りにしずくさんは目を細めながらハムスターのように頬を膨らませる。

普段の彼女なら見せないであろうギャップに俺はただ見惚れる一

方だった。

「うーん、見ている人を熱くさせるパフォーマンスをすることか？」

「ふむふむ、慎のすけくんの言う事も正解です」

「も、つていう事は他にもあるの？」

「もつとありますよ！　じゃあかぐ男くん！　他には何かがあると思いますか？」

突然の指名に驚きつつも一呼吸置いて答えを考える。

「そうだなあ……見ている人に力を与えるアイドル……かな？　勇気とか夢とか」

かすみは俺の回答を聞いて、大きく頷きを見せる。

「うんうん、それも正解です！　じゃあこのまま他の三人にも聞いてみましょう！　順番に愛先輩からどうぞ！」

かすみはまだまだ答えを引き出そうと参加者全員へ回答を促した。

「へっ？　んー、なんだろうねえ……。元気をくれるアイドルかな！」

「私は、心を通わせてくれる人だと思う」

「じゃあ見てくれる人を夢中にする存在、つてどうかな？」

かすみはみんなの回答を聞いて大きく手を広げる。

「うううう、正解正解正解ですうー！」

「これ、結局何を言っても正解になるんじゃないか？」

かすみの満足気なりアクションを他所に慎は少し捻くれた発想をぶつける。

「ちつちつち。正解になることは当たり前です！　だってスクールアイドルの在り方は無限大なんですから！　百の発想があつて、百の発想が正解です！」

「ほくん、つまりは自分がなりたいアイドル像を目指せばいいって事か！」

愛さんは手のひらをグーで軽くたたき、自分の中で納得がいったようなりアクションを取る。

「さすが愛先輩、ずばりそう言う事です！　そのためにかすみんはとある重要なことをしたんですが何か気付きましたか？」

かすみからの突然の問題に五人は全員思考を巡らせた。

今までのやり取りの中で謳うほどに大切なことを言っていた記憶が無く、今回はかすみの満足のいく答えを出せる気がしない。

一つ一つ先ほどまでのやり取りを既に読んだ小説のページをめくり返すように雑把に残っている記憶を思い出し出していく。

しかし、いくら読み返しても思い出されるのはかすみの言動よりもしずくさんのそれだ。

勿論、慎とかすみの夫婦漫才もあつたがしずくさんのお怒りモードが目焼き付いてしまいそれ以外の記憶が明瞭に思い出されなかつた。

かすみクイズが始まってから幾分か時間が刻まれたのち、かすみは耐えきれなくなり口を開いた。

「もう、皆さん仕方がないですねえ？ では答えを発表しますよ。」

「……かすみ、お願いします」

「まず、これの一個前に質問した内容は何ですか？ はい、慎のすけくん」

「慎のすけ言うな。えーと……スクールアイドルのべき姿とは何か……だな」

「慎の答えにかすみは満足するように頷く。」

「うんうん、ご名答です！ それではりな子。その問題の答えは一体何だったでしょうか？」

「いろんなスタンスがあつて、不正解はそこにはない」

「流石りな子！ よくわかつてますね！」

「でも、それって何の関係があるの？」

「それを今から言うんだよ、しず子！ どんなやり方でも応援してくれる人たちへの気持ちが届いていればそれは正解なんです。かすみはそのやり方っていうのは人それぞれであり、まさに千差万別だと思っんです！」

「かすみか千差万別なんて言葉を使えるなんて……」

「そこ、茶化さない!! ……ごっほん。話を戻します。皆さんはスクールアイドルを目指す上でコンセプトを決めておかないといけな

いです。かすみならばとにかく可愛い姿をみんなに見せてキョんキョんさせたいステージを見せたいです」

かすみのコンセプトを聞いて、かすみらしくて凄く良いテーマだと密かに納得している自分がいる。

「でも、皆さんはまだそういったテーマというのは決まっていないですよ？ だからこそ、各々がどんなスクールアイドルを目指したいか、それを引き出させたという事です！」

「……つまり、どういうことだ……？」

慎はまだ腑に落ちていないようなので俺はかすみの意見を聞いた上で持論を展開する。

「まだ慎たちはスクールアイドルを目指す上でその理想像を浮かべられていない。その状態では自分が本来やりたかったステージが出来ず、ファンが思い描いているステージとはギャップが生まれてしまう。それを防ぐために自分が描いたイメージを出すことで本人としてはそれを自覚するように、周囲の人間としてもその人のやりたい事を尊重するようになる。という事かな？」

「そっかぁー、愛さんの場合は元気をくれるアイドルって言ったから、それがあたしのやりたい事と少なからず紐付いてるってことだね！」

「私の場合は心を通わせてくれる人……」

「璃奈は自分の想いをみんなに届けたいって言ってたから、間違っていないんじゃないかな？」

俺の解説に愛さんと璃奈は自分が出していた答えを振り返る。

二人ともやりたい事として非常にマッチしていたので何も不思議ではなかった。

「慎くんは見ている人を熱くさせるパフォーマンスをしたいって事なんだね？」

「そうだな。初めてせつ菜さんのライブを見た時に感じた胸の熱くなる感触。あれを自分もやってみたって思ってきた。そういうしずくだって見てくれる人を夢中にさせるっていうのは演劇部の人間としては凄く大事なことだと思うぜ？」

しずくさん達もそれぞれが語った夢に対して会話を弾ませている。

各々が談笑している様子を見てかすみはにんまりしていた。

「むふふ、流石かすみんですね〜！ かすみが輝くだけでなくこうして同好会の手助けも出来るなんてかすみんってば罪なアイドルですう〜！」

「確かにこの講義のお陰で自分がどういったアイドル像を描いていたのか、それを改めて認識出来たから今回のMVPはかすかすかで決まりだね〜！」

「愛先輩、折角良い雰囲気が終われると思ったのにかすかすって言わないで下さいいいいい!!」

かすかすと呼ばれてかすみは不満気にしているのを尻目に俺は今回の講義を有意義に感じていた。

今後のスクールアイドル活動を行う上で自分が目指すアイドル像を認識した上で共有するというのは非常に大切なことだ。

この講義は一番かわいいスクールアイドルを目指すという確固たるコンセプトを持っているかすみじゃないと出来ないものなので、講義の成果をただただ噛み締めるのだった。

そして、噛み締めると同時に俺は自分が提示したコンセプトについて考えていた。

見ている人に力を与える。

スクールアイドルとしてステージに立つわけではないがこれまでの経験から自分が持つに相応しい目標ではないかと密かに自負していた。

スクールアイドル同好会に成長の風が吹いていることを感じつつ、講義は大盛況のまま終了するのだった。

大好きはもう隠さない

かすみのスクールアイドル講座が終了し、次の練習へと向かった。話によると次の内容は発声練習ということでもしかかもせつ菜さんが主体で実施するという事だったのでさぞ厳しい練習を行うのだろうと思ひ兜の緒を締めていたが練習場所を聞かされた瞬間に緒で窮屈となっていた首元に開放感がやってきたのだった。

「うちの学校ってこんな施設も設けられてるのか……」

「自由な校風が売りとは言ってるけど……これは自由過ぎるんじゃないか？」

練習場所に到着し用意されている椅子に座りながら、虹ヶ咲学園の生徒要望に対する反映力の高さについて慎と愕然としていた。

そんな俺達を他所に目の前でせつ菜さんは自分の大好きを思うがままに熱唱していた。

……大きなカラオケモニターの前で。

そう、俺達は虹学内に設置されている音響室という名のカラオケルームに来ていた。

そこではモノホンのカラオケボックスと同じようなスピーカーと専用のモニター、機材が用意されており音源等も申し分ない性能だった。

どうしてそんな設備が用意されているのかは有力な説が無く生徒内で諸説が広がっているが、音楽関係の部活動が総力を上げて学校側に申請した結果、学校側が観念して一部屋だけ用意したという説が一番有力のようだ。

この話を聞いた時、どんな無茶な要望でも多くの人の支持を集め且つ諦めずに声を上げる事が相手の気持ちを動かす近道という事を痛感したのを覚えている。

「おお——！！ やっぱりせつ菜ちゃんの歌声ってかっこいいねえー！ ときめいちやう〜！」

せつ菜さんが歌い終わると侑さんが拍手喝采をしていた。

やはりスクールアイドルにハマるきつかけを貰ったせつ菜さんだからこそ侑さんの感情も昂りを見せるといふものだ。

「俺もせつ菜さんの歌って凄く好きです！心の底から熱いものが込み上げてくる感じがします!!」

慎も侑さんと同じように目を輝かせながらせつ菜さんに賛辞の言葉を並べていた。

「あつ、ありがとうございます……! こうして面と向かって言われると少し恥ずかしいですね……!」

二人の真つすぐな感想にせつ菜さんも思わず照れていた。

「でも、実際のところせつ菜さんの歌は凄いですよ。そのストレートに響く歌詞と力強い歌声が力を与えてくれるんですから」

「うんうん、愛さん達もあの時のせつつーのライブを見てスクールアイドルをやってみたいって思えたんだから、もつと堂々としていいんだよ?」

「せ、せつつー?」

「あだ名だよ! せつ菜だからせつつー! 愛さん的にはいいあだ名だと思っ!」

「あはは、ありがとうございます」

愛さんからの突然のあだ名プレゼントに戸惑いを見せたせつ菜さんだったが、そう呼ばれることがなかったから嬉しそうに笑っていた。

「あつ、ねえねえ愛ちゃん! 私の場合は?」

「んー……。……ゆうゆー!」

侑さんが便乗するように愛さんへあだ名を要求したが、愛さんは困る様子もなく一瞬考えた後侑さんへ命名した。

「ゆうゆっていいね! すごく可愛いと思う! ……ちなみに私は?」

「そうだねえ……。歩夢だからぽむぽむとかどうかかな!」

侑さんのあだ名を気に入った歩夢さんにも愛さんセンスのあだ名が炸裂する。

「ぽ、ぽむぽむっ……!?!」

「ほむほむ……凄く可愛い」

「はい、テレビで出てくるキャラクターみたいで凄く良いと思います」
歩夢さんは予想外の呼び方をされたので少し恥ずかしがるように顔を赤くする。

だが、そんな呼び方を璃奈と俺はかなり良いと感じていた。

女の子らしいあだ名に加えて歩夢さんの雰囲気とマッチしているので是非使ってみたいと思った。

「うわあああ、ほむほむって凄く可愛いじゃん！ 歩夢の新しいあだ名……うーんときめいちやう——!!」

「んー、ほむほむが嫌だったらあゆぴよんとかでも良いけど……」

「なっ……!! だ、だったらほむほむが良いな!! うん、それがいい!!」

愛さんのもう一つのあだ名案が提示されたがそれを聞いた瞬間、歩夢さんが更に顔を紅潮させ前案に乗っかるのだった。

あゆぴよんも凄く可愛いと思ったのだが、何故あそこまで強く否定するのだろうか。

昔ウサギさんに殺されかけたことでもあるのだろうか。

いや、そんなアニメチックなことが起こるわけない。

そもそも、ウサギに殺されかけるとはいつたいうどういうシチュエーションだ。

ウサギから激しい飛び蹴りでも飛んでくるのだろうか。

「ええー、あゆぴよんも良いと思うんですけど……」

「慎くん？ ほむほむで良いからそれ以上はやめようね？」

「……………はい……」

俺が至極下らないことを考えている内に慎がいつもの如く素直な感想をぶつけるが、その言葉を掻き消すように歩夢さんが少し声色を強めながら慎に圧力をかけていく。

笑顔を向けてはいるが、先ほどのしずくさんと同様に目が笑っていないだったのであれば歩夢さんの逆鱗だと察した慎はただただ従うのみだった。

「そういえば、せつつーって誰かに似てると思ったんだけど誰だった

かなあ……?」

「えっ、そ、そうですか……?」

愛さんは思い出したようにせつ菜さんへと話題を変える。

おそらく愛さんが言おうとしている似ている人物というのはあの人の事だろう。

「……あつ、生徒会長」

愛さんがうんうんと唸っているのと璃奈が横から口を挟んできた。

「ん? ……あああ!! そうだ! 生徒会長と似てるなって思ったんだあ!!」

愛さんは璃奈の答えを聞いて一瞬考え込むがすぐに納得がいったように手を叩いた。

「ああ……実は……似てるではなくて……同一人物なんです」

「えっ? ど、どういうこと?」

せつ菜さんからの突然の告白に愛さんは状況が理解できずにいた。

「実は目の前にいる優木せつ菜ちゃんは生徒会長の中川菜々ちゃんなんだよ」

「……ええええええ!!」

侑さんが解説を入れると愛さんは目を見開きながら驚きの反応を見せた。

確かに校内では一番と言っていいほどの真面目っぷりを見せている中川さんが目の前で自分の大好きをぶちまけているのだ。

そのギャップを直ぐに受け入れろという方が至難の業だ。

「……言われても正直全く分からない」

「だよね?! 二人の性格が真逆すぎてそんなの絶対分からないって!!」

せつつーの正体、分かった人いるの!」

「ここに居るんですよー、これが。なっ?」

そう言いながら、慎は俺の方を見てくる。

二やつきながら見てくるその姿は正直かなりムカついたので後できっちりお仕置きをしておこう。

「えっ! カグヤン、分かったの!」

「あと侑ちゃんも気付いたよね?」

「まあ、あながち間違つてはいないかな？ でも明確に分かったのは輝弥くんだけじゃないかな？」

「僕も侑さんと同じようなものだと思いますが……」

正直、俺も中川さんと話した上でそう予想していたのみなので、侑さんが音楽室で話したときに感じた直感と似ているのだがどうやら他の人からしたら少し異なるようだ。

「でも、この二人は共通点が無いからそれを予想できることが凄い。ましてやそれを的中させたことも」

「璃奈、おだてても何も出ないよ？」

璃奈からの評価が一方的に上がっていくのが逆に怖くなり、思わず口を噤ませる。

「……そういえばせつ菜さんにお礼を言えてなかった。あの時、はんぺんを守るように動いてくれてありがとう」

璃奈は俺の発言を聞いて俺への賛辞を改めたのか、せつ菜さんにいつかのお礼を述べる。

だが、俺ははんぺんというおでんの具材名が突然出てきたことで状況が理解できずにいた。

「はんぺん？」

「うん、私と愛さんがこの学校でお世話をしている猫さん。野良猫だったはんぺんを私と愛さんで見つけて密かに学校でお世話をしていたんだけど生徒会に見つかっちゃって……」

「どうにか出来ないかって生徒会長に直談判したら、動物を飼う事は禁止だけでも学校の一員にすれば良しとするってことで生徒会お散歩役員に就任したんだよね♪」

「お散歩……役員……？」

「確かに少し前に猫が校内にいるって噂を聞いたことがあったような……？」

またまた聞きなれない単語が出てきて俺は益々状況が分からなくなり、せつ菜さんへ説明を促すように視線を向けた。

「あの時の璃奈さんとはんぺんさんを見て、二人の絆を引き剥がすことは誰も幸せにならないと判断しまして私の権限を用いてはんぺん

さんをこの学校のメンバーにすることにしましたんです」

「なるほど、そうすれば追い出す必要もないし公然とはんぺんちゃんのお世話ができると……」

「それって特権というより職権乱用じゃ……?」

せつ菜さんの弁明に俺は呆れつつもそういった発想があるかと感心していた。

一方、慎は生徒会長権限の強さに呆然としていた。

「今は私がこの学校の生徒代表です。自由な校風というのは生徒一人一人の声を聞いた上で成し得る事ですから、こういった声を聞くのも生徒会長の務めなのです!」

どうやらこの生徒会長は職権乱用について何も反省する気はないようだ。

「ですが、この学校でお世話すると決めた以上、しっかりとそれは守って下さいね。はんぺんさんを放っておく状態が散見するようでしたらそれなりの処置を考えますので」

「うん、それは絶対守る」

せつ菜さんからの警告を真面目に聞く璃奈。

無表情ながらも力強く答えているので彼女ならば大丈夫だろう。

「じゃあ、今度私達もはんぺんちゃんの所についてお世話してみてもいいかな?」

「それは大丈夫。はんぺんもきつと喜ぶ」

侑さんは璃奈たちがそこまで可愛がる猫と戯れてみたいのか前のめりになりながら聞いていた。

璃奈は特に嫌がる様子もなくむしろ一緒に面倒を見てくれる人がいるならば、とその誘いを気兼ねなく承諾するのだった。

「では、雑談もそこまですて練習を再開しましょう! 次はどなたが歌われますか?」

「歩夢、次行ったら?」

「ええ、私は恥ずかしいよおー……」

次に歌う人を決める事になり侑さんが歩夢さんへ歌うように仕向

けようとするが歩夢さんは乗り気ではないようだ。

まあ、先ほどせつ菜さんが完璧な歌唱力を披露したのでその次になるとその人へも大きな期待が乗っかることとなるので自然とハードルが高くなってしまいうだから、歌いたくなくなるのも無理はないだろう。

「じゃあ輝弥行ったらどうだ？」

「んー、そうだなあ……何かあるかなあ……？」

慎に促され近くに置いてあったデンモクを手に取り歌う曲を探す。だが手に取ったはいいものの俺自身歌える曲が少ないのが現状だ。

いや、音楽関係の趣味があるという事もありカラオケも好きだ。

姉さんとも何回かカラオケで点数勝負をしたこともあり歌唱力にはそれなりに自信がある。

ちなみにカラオケ勝負は毎度接戦にはなりつつも俺の負けで終わっている。

いつの日か姉さんに勝てるように歌のテクニクを身に着けていきたい。

その為にせつ菜さんやしずくさん達の歌い方もしっかりと勉強していきたい。

話が逸れてしまったが、俺が心配しているのは所謂世間一般で流れている曲をあまり知らないという事だ。

俺はインドア派の人間であり休日もアニメを見るかゲームをして過ごすことが多いので俗に言うオタク気質なのだ。

アニメ関係の歌については得意分野だが、それ以外は点で弱い。

姉さんは俺が歌う曲についても合いの手を入れてくれたり、興味を持ってくれるので心置きなく歌うことが出来るのだ。

それが全く赤の他人とのカラオケとなると俺が歌う曲を知らない可能性が高いので気まずい空気が流れてしまう。

乗ってくれる人も中にはいるがそれでも気を使わせているように感じてしまい、人とのカラオケをあまりやらなくなってしまうのがオタクあるあるではないだろうか。

「わあー、輝弥くんがどんな歌を歌うのか楽しみだなあ〜！」

「確かに私も気になっていたので凄く楽しみです！」

「あんまりハードルを上げないで下さい。あんまり有名な歌とかは歌えないので……」

侑さんとせつ菜さんからの期待の声に身が固まってしまふ感覚を覚えつつ、デンモクで歌う曲を探していたら俺が好きアニメのアイドルグループで推しがソロで歌っている曲が目に入ったのでそれを歌う事にした。

(まあ、アニメ関係の曲だけど、王道な曲調のやつだから大丈夫かな……)

俺は一抹の不安を覚えつつ勢いに任せて、入れる事にした。

「……ええっ……!?!」

「……この曲……」

画面に流れる曲名を見てとある人物達が驚きの声を上げていた。

こうして皆の視線を気にしつつ俺のカラオケが始まった。

「ふう……あ、ありがとうございます……」

俺の歌が終わり、顔が火照る感触を覚えつつ一礼をする。

正直、顔を上げた時のみんなのリアクションが怖いところだが果たしてどうなるのか。

「……輝弥って、あんなに歌上手いのか……?」

「輝弥くん、歌上手だねー!! 輝弥くんにもときめいちゃったよ——

!!」

口火を切ったのは慎でいつもの冗談をぶつけてくるかと思っただが、スポーツ選手の神プレイを見た時のように口数が減っており感嘆としていた。

侑さんも目にハートを浮かべながら左右に振り子のように揺れていた。

「そうですね……正直ここまでビブラートやしやくりなどのテクニクを使いこなす歌い方だとは思わなかったので私も鳥肌が立ってしまいました……!」

「流石輝弥くん！ 歌が凄く上手だね！ かつこよかったよ！」

せつ菜さんと歩夢さんからも称賛の声が上がり俺は何とも言えない気持ちになってしまう。

まさかここまで褒めてもらえると思わなかったので自分でも反応に困っている。

「凄く上手だった。それにこの歌、輝弥くんも知ってるんだね」

「えっ、璃奈、この歌知ってるの？」

「うん、アイドルを目指す男の人たちが織りなす青春アニメ。私も見てた」

「そ、そうだったんだ……」

ただ自分が歌いたい曲を選んで歌っただけなのに意外な収穫があった。

まさか璃奈が同じアニメを見ていると思わなかったので驚きが隠せなかった。

「よおーし、輝弥くんの歌に負けないくらい私も頑張るぞお——！」

俺の歌に感化された侑さんはデンモクを手に取り選曲して歌い始める。

慎、歩夢さん、愛さんはそんな侑さんと一緒に盛り上がっている。

そんな侑さん達を他所にせつ菜さんが居心地が悪そうに顔を覗かせながらデンモクを見せてきたのだった。

「か、輝弥さん……その……良ければ次この曲と一緒に歌ってくれませんか……？」

彼女が見せた曲は奇しくも俺が先ほど歌ったアニメシリーズの曲のものだった。

「あれ、この曲……」

俺はその曲名を見て、すぐにせつ菜さんを見返す。

彼女は頬を赤くしながら両腕を太ももに挟みもじもじと目線を反らしていた。

「……せつ菜さん……もしかして……」

「……………」

せつ菜さんは自分の口で真実を喋りたくないのか口を開こうとし

ない。

おそらく彼女の中で色々な想いがぶつかっているのだろう。彼女を刺激しないように優しい声色を意識しつつ声を掛ける。

「……せつ菜さんもアニメってよく見るんですか？」

「……親に隠れて……ですが。私も輝弥さんが見られていたアニメを見ていたので是非一緒に歌えないかと思いましたが……」

「ならそこまでひた隠そうとしなくてもいいんじゃないですか？」

「皆さん、私の趣味を知って軽蔑するんじゃないですか？ 学校では真面目な生徒会長が実は家ではアニメオタクというのは」

せつ菜さんは尤もな不安を吐露する。

確かにアニメオタクのイメージは真面目な中川さんには考えにくいものだ。

中川さんがアニメを見て気持ち熱くするというのは中々思い至らず、それ以外の可能性として文明の利器に触れる趣味を持っている印象だった。

それが蓋を開けてみれば俺と同じようにアニメを見て、時に熱くなり、時に涙するごく普通の女の子だったのだ。

そんな人間味あふれている人を軽蔑する理由はあるのだろうか。

「僕は良いと思いますよ？」

「えっ……？」

「だってあの生徒会長が実はアニメオタクだったなんて、同じオタクの僕からしたら嬉しいものですよ。遠い存在だと思っていた中川さんに親近感が湧くなんてあまり考えられなかったですからね」

「それは……輝弥さんが優しいからじゃないですか？」

「そんな事ないと思いますよ？ 現に璃奈も僕と同じアニメを見てると知って嬉しそうでしたし、きっと璃奈も同じことを考えてると思います。ね、璃奈？」

「うん、せつ菜さんもアニメ好きっていうのを知って嬉しい。もつとアニメの事で話して仲良くなりたい」

不安がっているせつ菜さんに俺の声だけでは届かないと思い、隣に座っていた璃奈にも声を掛ける。

俺とせつ菜さんの会話を聞いていた璃奈はすぐにせつ菜さんに対して共感の意を示す。

「そ、そうですか……」

「せつ菜さん、前に言いましたよね？ 貴女の大好きを受け止めるって。これも同じことだと僕は思います。自分の大好きを隠すことなく曝け出してくださいよ」

俺の言葉にせつ菜さんはただただ俯いていた。

彼女の表情を髪が隠すように靡くため、その顔色を捉えることは出来なかった。

「……本当に……貴方という人は……」

そう呟くせつ菜さんの表情は未だ捉えられていなかったが、少なくとも口元は緩んでいるように見えた。

「……分かりました。これからは私の大好きをもっと皆さんにお見せするようにします。そうでなければ私がやろうとしている野望を叶える事は出来ませんからね」

せつ菜さんがやろうとしている野望。

それは自分や他の人の大好きを全部曝け出せる空間を作り出すこと。

その野望は首謀者であるせつ菜さんが曝け出せなければ決して成し得ることのできない大望なのだ。

「いえーい！ 楽しかったああー！」

「流石、侑さんも歌が上手ですね！」

せつ菜さん達と話していると気付けば侑さんの歌が終わっていた。アイドルをやらない侑さんの歌は中々お目にかかれないはずなのにそのチャンスを不意にしまった。

慎も侑さんへ称賛しているところを見ると侑さんも中々の腕前のようにだ。

「さて、次はどうしようか？」

「私はもう少しみんなの歌を聞いていたいな。みんなの歌を聞いてもっと勉強したい！」

「愛さんもみんなの歌を聞いてひたすらに盛り上がりたい！」

「では、次は私と輝弥さんで入れてもいいですか？ 先ほどの輝弥さんの歌に感化されてしまったので、ここはデュエットでの勝負です！」

「えっ、勝負!？」

せつ菜さんからの突然の宣戦布告に思わず声が上がってしまう。

そんな俺を尻目に侑さんの質問が飛んでくる。

「おおー！ いいねー！ 曲はどんなの？」

「さつき輝弥くんが歌ったアニメシリーズの曲。デュエットで出してる曲もあるからそれを二人が歌うの」

「へえーせっつーもアニメとか見るんだね！ いいじゃん！ じゃあここからはアニソンラツシュって所かな！」

璃奈の解説を聞いて愛さんもせつ菜さんがアニメを見ていることを知るが、特に違和感を持った様子もなくありのままに受け入れていた。

「わあー、同じアニメを知ってるってことは益々盛り上がるってことだね！」

「いきなり輝弥とせつ菜さんのデュエットが見れるなんてな……」

歩夢さんと慎もそんな俺達の協演が楽しみな様子だ。

そんな中、璃奈が小声で話しかけてくるのだった。

「輝弥くん、そのあと私とも歌ってほしい」

どうやら璃奈も同じ仲間と歌いたくて仕方なかったようだ。

璃奈とも仲良くなりたいたいと思っていたのだ、そのお誘いを拒否する理由がどこにあるのだろうか。

「……うん、いいよ。一緒に歌お」

「……うんー」

真顔ではありつつも、気分が上がっていることは声色を聞いて明白だった。

「さあ、輝弥さん!! いきますよお——!!!」

こうしてカラオケルーム内のボルテージが最高潮に達した中で俺とせつ菜さんのデュエットを皮切りにアニソン大会が幕を開けるのだった。

同好会の方向性

「ああ……声出し過ぎちゃったかも……」

「ははっ、一番せがまれてたもんなく！」

歌の練習という名のカラオケ大会は終了し、一日の練習は終了した。

せつ菜さんとのデュエットが終わった後も璃奈とのデュエットや、最近ハマっていたラップを用いたバトル曲についても披露したため、久々に喉を酷使した気がする。

練習が終わり部室に帰る道中、みんなと今日の練習についての振り返りやこの後の時間についてなど各々好きなように駄弁っていた。

歌い過ぎて違和感を感じた喉を必死に鳴らしていると璃奈が近づいてきた。

「輝弥くん、ありがとう。凄く楽しかった」

「こちらこそありがと。璃奈が凄く楽しそうでよかったよ」

璃奈はカラオケ中もずっと表情は変わってはいなかったが、それでも声色が明るくなっていったのでそれだけで彼女が楽しいという気持ちを抱いていたことは鮮烈に伝わってきた。

「輝弥くんとはアニメの趣味とかも合いそうだから、また一緒に行きたい」

「うん、こちらこそだよ」

「輝弥はゲームの方も精通してるからそこも璃奈やせつ菜さんと通ずるものがあるんじゃないのか？」

「……そうなの？」

璃奈は少し顔を傾けながら聞いてくる。

「うん。時折ゲームのBGMを弾きたくて音楽室に寄ってるからまた聴きにきてよ」

「分かった。絶対に行く」

「あの……輝弥さん……。今度は私も参加させてください……」

璃奈と次のピアノ鑑賞会について約束を交わすとせつ菜さんも話に入ってきた。

「良いですよ。僕もせつ菜さんともっとお話したいですし」

「えへへ、約束ですよ?」

「っ……はい」

屈託のない笑顔を向けるせつ菜さんを見て、思わず心拍数が上がるのを感じた。

いつもなら特に気に留める事は無いのだが、今のせつ菜さんは無邪気な女の子の表情をしているため、そのギャップに思わずときめきを覚えてしまった。

「なーに顔を赤くしてんだよ?」

「べ、別にそんなんじゃないよ……!」

慎に腰を肘で突かれながらからかわれてしまったのでつい反射的に否定しようとしたが、慎への効果は皆無に等しかった。

「エマ先輩だったりせつ菜さんだったり……。やっぱり輝弥って姉氣質系女子に弱いだろ?」

「うるさい、まっすぐ系お姉さん」

「お前ええええ!!」

慎といつも通りの煽り合戦が展開され、慎との取っ組み合いが始まる。

「二人共練習が終わっても元気だね」

「もう輝弥くん、慎くん。そういうやり取りは男の子二人の時にしてよ……」

侑さんが俺達の体力に感服している一方、しずくさんはため息を吐きながら呆れていた。

「しずくさん……そういうわけじゃないよ……」

慎が煽ってくるんだから仕方ない。

自分がやられたままで終わるのは癪なのだからつい反撃してしまうのが男の性というものだ。

そんなこんなで部室に到着したが、扉を開けた瞬間に襲ってきたのは今まで嗅いだことがないような不思議な匂いだった。

「ん!? 何ですかこの匂い!」

「なんか表現しがたいような匂いが充満してますけど……」
かすみと慎は思わず鼻を抑えていた。

俺もこの匂いの元について正体を知らないの、原因の物を探したがどうやらそれは大机の上に置かれていたものだ。

「表現しがたいとはシンシン失礼だぞ〜？ 愛さんのおばあちゃん
が作った特製のぬか漬けだよ！ みんなも食べる？」

大机には弁当箱が置いてあり、そこにはキュウリやニンジンなどの
漬物が入っていた。

どうやら愛さんが同好会に入ったことを祝してお祖母さんが用意
してくれたらしい。

「これ凄く美味しいから慎くんたちも食べてみたら？」

「ぼむ先輩、俺はこの匂いに慣れるのから始めていいですか……」

歩夢さんから一緒に食べる事を提案される慎だがぬか漬けを初め
て目の当りにしたので、その独特な匂いに圧倒されていた。

ちなみに慎は歩夢さんの事をぼむ先輩と呼んでいる。

他の先輩と同様に歩夢さんと呼ぶかと思ったが、愛さんが命名した
ぼむぼむというのが気に入ったみたいでそういった呼び方になっ
ている。

流石にあゆびよん先輩だと彼女の逆鱗に触れるので呼ばないみた
いだ。

「ほらっ、輝弥くんもどうぞ！ はい、あーん！」

「じ、自分で食べられますよ……！ も、もう……」

侑さんがキュウリに爪楊枝を刺してそれをこちらへ差し出した。

侑さんから食べるようにせがまれ、その思いやりを無下にするわけ
にはいかなないので恥じらいを残しつつ頂くことにした。

食べたら口の中にキュウリのシャキッとした食感と漬物特有の甘
さが伝わってきて凄く美味しかった。

「あつ、すごく美味しいです！」

「でしょ？ 沢山あるからカグヤンも遠慮せずに食べなよ！ はい、
りなりー」

俺の感想に満足した愛さんは笑顔を向けてくる。

そして、弁当箱の中にある大根を爪楊枝に刺して璃奈へと食べさせる。

璃奈は恥じらうことなく愛さんから貰った大根を口に入れていく。

「あむっ。……うん、美味しい」

「でしよ〜♪」

二人のやり取りが微笑ましく思え、その仲睦まじさが伺えてくるのでまるで姉妹のように見えてくる。

「しずくさん？ 食べないの？」

愛さん達から目を離すとしずくさんがぬか漬けを物欲しそうな目で見ていたようだった。

「私、こういういったものをあまり食べたことがなかったからどんな味なんだろうって思ってた」

「確かに最初は匂いに圧倒されちゃうけど、一度食べたなら病みつきになるよ。はい、しずくさんもどう？」

自分から食べにいかないものを食べる機会があるのだ。

こういう時にチャレンジして自分の好みを広げていくのも今後の役に立つと思い、自分が使ったものとは別の楊枝を用意して大根を刺し、それをしずくさんに差し出す。

「うーん……じゃあ、頂きます。はむっ」

しずくさんは俺から差し出された楊枝を持つことなくそのまま口の中に入れる。

そして、無言で咀嚼しその味を噛み締めている。

「どうかな？」

咀嚼し終え飲み込んだ後にしずくさんから向けられたのは花を咲かせたように開く笑顔だった。

「うわああ……！ これ、凄く美味しいね！」

「だよね！ 愛さんの家のぬか漬け、凄く美味しいから部活終わりの身体に染み渡るよ」

練習終わりでお腹が空いている中でこんなぬか漬けを用意されたら食べ進めてしまうのが人間というものだ。

折角消費したカロリーをリバウンドさせてしまう背徳感に襲われ

ながらもその味に癖になっっているので瞬く間にぬか漬けが俺とせずくさんの胃の中に吸い込まれようとしていた。

「おいおい、二人とも！ 喜んでくれるのは嬉しいけどみんなの分が無くなるから食べ過ぎないでよ〜？」

「でも、しずくちゃんと輝弥くんが気に入るのも分かるわ。ぬか漬けて身体にも良いし練習終わりに一口食べるだけで疲れがどこかへ飛んでいくもの」

「分かるよ！ 痛い痛いのとんでけ〜みたいな感じだよね！」

「エマちゃん、それは少し違うような気がするな〜」

思わず愛さんから待ったを掛けられてしまいが果林さんがすかさずフオローしてくれる。

エマさんも全力で乗っってくれるが、少し例えが違うとして彼方さんから優しくツツコミを入れられる。

「そうなの？ 日本語って難しいね……」

「でもあながち間違っていないんじゃないですか？」

指摘されて落ち込むエマさんを見て侑さんが慰めに入る。

確かに日本語は外国人が一番覚えるのに苦労するらしいからエマさんも同様なのだろう。

挨拶だけでもこんにちは、おはようの他にたくさん種類があるし、一人称に関しても十以上の呼び方があるのだ。

さらに高校生の間ならば擬音語で会話することもおかしくない。

それを日本に來たての外国人が聞いたら理解力を母国に置いてきてしまったのではないかと錯覚してしまうくらいに状況が掴めずじまいになってしまうだろう。

エマさんもこっちに來た時にはさぞ大変だったろうと思い、その苦悩が伺える。

「そうですよ〜、エマ先輩って日本語凄く上手ですし気にすることないと思いますよ〜！」

「えへへ、ありがとうかすみちゃん。こういう時に言う言葉も知ってるよっ！」

かすみちゃん、マジ天使！」

「うわあ〜くん、もうエマ先輩、すきすきですう〜♪」

かすみの褒め言葉にエマさんは嬉しくなつて覚えたてであろう台詞をかすみにぶつける。

それを聞いたかすみは案の定、顔が以上に綻んでおりエマさんへ熱いハグを行っていた。

「一番、ぶつけちゃいけない奴に放つたな……」

「なんか言った!? 慎のすけ!」

「凶に乗るなつて言つてんだよ! かすかす!」

あからさまに承認欲求を求めているように見えたかすみに慎が難癖をつけていた。

それを聞き逃さなかったかすみが平常運転で煽り合いを始めた。

「はいはい、そこまで」

「いいかげんにしてよね、二人共」

そして同じくお決まりのように俺としづくで仲裁に入っていく。

このやり取りはこれから先も延々とやっていくことになるんだらうな。

「そういえば時間もそれなりに過ぎてるし雑談はそこまでにしてそろそろ帰ろうか」

「そうですね。あつ、その前にかすみさん、少し残ってもらってもいいですか?」

「へっ? かすみん何かやりましたか? ……はっ!! め、眼鏡の事は許してくださいあ〜い……!!」

「別に眼鏡の事はよろしいですよ……」

侑さんが時計を見ながら帰路に着こうと声を掛けてくる。

そんな中でせつ菜さんに隠れて眼鏡を借用していたことを怒られると錯覚したかすみはしづくさんの後ろに隠れて震えていた。

「じゃあ僕たちは邪魔するわけにもいかなないので外で待ってますよ?」

「私たちの事を待つて頂く必要はないですが……そうして下さるなら嬉しいです」

二人の話し合いに茶々を入れたくはないので、荷物をまとめて部屋

から引き上げる事にした。

「いやあ、にしても練習楽しかったね!」

「うくん、彼方ちゃんもう少し柔軟を頑張るよお……」

「私も……」

せつ菜さん達を待ったために俺達は校舎外のベンチで屯っていた。

愛さんは両腕を空に向かって伸ばしながら満足気な表情をしており、彼方さんと璃奈は今日の練習で発覚した課題について気分が淀んでいた。

「しずくちゃんはこれから演劇の練習?」

「はい、演劇の方も役を貰えるように頑張らなくてはいけないので」

エマさんからの問いにしずくさんは微笑みながら答える。

今日の練習も中々にハードだったと思うがそれでも変わらず掛け持ちである演劇の練習もこなすというのは凄いことだ。

「大変だねえ、掛け持ちって」

「それでもやりたかったことですから、どちらも中途半端にするつもりはありません」

彼方さんもまだ練習を続けるしずくさんを見て、羨望の眼差しを向けた。

「流石しずくさんだね。でも無理して倒れちゃだめだからね?」

「ふふつ、ありがとう、輝弥くん。心配してくれるのは嬉しいけど、輝弥くんもこれから大変になるんだから輝弥くんも無理しちゃダメだよ?」

ハードワークにならないようにしずくさんに注意を促すが、同好会で作曲を担当することとなった俺が逆に心配される羽目になってしまった。

「ははっ、ならお互い気を付けていかなくちやね」

「ふふつ、そうだね」

知らず知らずの内に相互に心配を掛け合っていたことが少しおかしく、二人して思わず吹き出してしまふのだった。

「そういえば、どういう曲を作ろうとするのか方向性ってもう考えてるのか？」

慎から同好会用の曲について聞かれるが俺はただ首を横に振るのみだった。

「いや、それが何も決まってるんだよね。まだ初日っていうのはあるんだけど……」

「まだ他に心配してるのがあるの？」

「はい。皆さんの個性をどうやったら活かせるのかが分からなくて」

「私たちの個性？」

歩夢さんは言ってる意味が理解できずただただ首を傾げるのみだ。

「歩夢さんの誠実さ、かすみの可愛い、しずくさんのお芝居、愛さんの元氣、彼方さんのマイペース、せつ菜さんの情熱、エマさんの暖かみ、璃奈の想いの通じ合い、慎の熱氣。どれも皆さんを象る重要な要素です。……ですが、それを一つの曲で表現できるかと言うと凄く難しいことだと思っんです」

「ああ……個性がぶつかり合って逆に浮いちやうって事だね」

侑さんの発言に無言で頷く。

テレビで見るようなアイドルと同じようにここにいるみんなも同じようにステージ上で輝く自分を見てもらいたいと思っっているだろう。

そんな彼女たちを彩る要素として楽曲はあるが、一つのテーマを皆で歌うにしてもそれぞれが取り入れたい要素というものは存在するはず。

以前はその要素のぶつかり合った結果、同好会の存続も危うくなっってしまったのだ。

それ故にその方向性を大事にしようとするあまり、大きなチャレンジが出来ずにいる。

「なら一番手っ取り早いのは各々が一人でステージに立つって事だよね？」

「確かにそれが一番の近道です。ですが……」

「見てくれている人たちの視線が私一人に向くととなるとそれだけで怖

くなつてしまいますね……舞台なら役になりきつていたのでまだ大丈夫ですが……」

愛さんの意見に肯定しつつもしずくさんが胸中の不安を吐露する。そう、一人でステージに立てばそれぞれがやりたい事をめいっばい表現できるので十分なのだ。

だが、一人で立つという事は隣で見てくれる人がいないということ。

つまりステージに独りで臨むことになるためその重圧も大きくなる。

ここにいる全員がステージに一人で立つなんてことをやったことがない。

未知であるがゆえにその道を走り抜けることが出来るのかが分からない。

「じゃあかすみちゃん達もそのことで話してるのかな……」

エマさんはふと部室のある方向を見つめ、その視線に誘導されるように全員が同じ方向を見据える。

空はまだ明るく、全員が上を向いているはずなのに俺達にはただ暗く淀んで見えていた。

誰かのヒーロー

かすみとせつ菜さんが教室棟から出てきた後、すぐに別れの挨拶をして各々帰路に着いていた。

「うーん、どう進めていけばいいのかな……」

俺は練習終わりで飲み物が欲しかったため一人で自動販売機に寄っていた。

既にみんなは帰っているのだから今は一人の時間となっていたが、その中でも俺は同好会の進め方について悩んでいた。

今までのようなグループでの活動だとメンバーそれぞれの個性を最大限に活かし切れない可能性がある。

かといつてソロアイドルとして活動するのはハードルが高い。

もちろん、こういうった苦勞は買ってでもこなしていくことがスクールアイドルとしてスキルを上げていく近道だという事は分かっている。

しかし、それは経験者だからこそ出来る挑戦だと思う。

この同好会にいる人はまだ経験が浅い或いは全くの未初心者が集まっているのだ。

まだ右も左も分からない状態でソロアイドルをやるのはあまりいい結果を得られるものには思えなかった。

むしろ一人で立った時の恐怖がトラウマとなってライブに立てなくなってしまうことはないだろうか。

「あつ、カグヤーン！ そんな所に突っ立ってどうしたーん？」
飲み物を買って、一人黄昏ていたら愛さんに声を掛けられた。

財布を手持っていたので彼女も同じように飲み物を調達しようとしていたのだろうか。

「愛さん？ そちらこそどうしたんですか？」

「おん？ 愛さんは喉が渴いちゃったから自販機で買おうと思ってさー。カグヤーンも手に持つてゐるってことは買ったばかりか！」

どうやら俺の予想は当たっていたようだ。

「僕は先ほどの話を整理したくて一人になってたところです」

「そっか。愛さんも一緒にいいかい？」

「はい、いいですよ」

愛さんの要求を断る理由がないため、暫し二人だけの会合を行う。

とは言うものの特に雰囲気を用意するわけでもないので学校内のベンチに腰かけた。

この時間帯だと夕日が建物で隠れているため、ここも彼方さんのお昼寝スポットなのか、なんてことを考えながら一呼吸ついた。

「ここ、ちょうど日陰になってるから風が気持ちいいね！カナちゃんだったらここですぐにすやびしちゃうんじゃない？」

どこからともなく吹いてくる風に高い位置にまとめたポニーテールを揺らしてリラックスしている愛さん。

しかし、まさか彼方さんの件について同じことを考えているとは思わなかった。

「奇遇ですね。僕も同じことを思っていましたよ」

「あははっ、マジ？ あたしら、今までこうして二人で絡んだことなかったけど意外と気があるのかもね♪」

愛さんはおちやらかならそう言うが、彼方さんの影響でそう考えているに過ぎないのではないかと思う。

とはいえ、せつかくの雰囲気の水を差すのは野暮なのでだんまりしておく。

「確かに愛さんはいつも璃奈と一緒にいますし、僕も慎と一緒にいることが多いですからね」

「おん！ 愛さんとりなりーは親友だからね！」

愛さんは屈託のない明るい笑顔を見せてくる。

その表情は見ていると元気が戻ってくるような感じがして、練習疲れが吹っ飛んでいくような感覚がした。

「じゃあ、親友の愛さんから見て璃奈は一人でスクールアイドルのステージに立つことが出来ると思いますか？」

「へっ？ いきなりどうしたん？」

突拍子のない質問に愛さんは素っ頓狂な反応をする。流石に不意打ちが過ぎたので解説を入れる。

「突然すみません。僕が考えていたことって言うのもスクールアイドルの活動方針をどうしていけばいいんだろうって事なんです。同好会にいる人は全員が経験者じゃないので、グループでリーダーの方針に従う形で進めていくのが定石だと思うんです。ですが、それをすると前回の二の舞になってしまうのではないか、という事でみんなが意見を出しにくくなるんじゃないかって思うんです」

「なるほどねえ……」

愛さんは相槌を入れながら話を聞いてくれる。

スクールアイドルに関して素人組である彼女からしたら俺の話に少なからず思う所はあるようだ。

「そこでもう一つある案が、愛さんが部室で提言してくれた一人でステージに立つということです。これも各メンバーの個性を押し出すことが出来る非常に魅力的な内容ですが、その分、みんなの視線が自分一人に集中するという事です」

「二人のパフォーマンスだからこそ一つのミスも目立ってしまうし、お客さんからの重圧が押し寄せてくるって事だね」

「はい。スクールアイドル経験者であるせつ菜さんやかすみは問題ないとは思いますが、歩夢さんや璃奈は全くの初心者。それに人前で何かをやるというのも得意そうには見えません。そんな彼女たちを一人で立たせるというのは些か無謀な気がしまして……」

話し終えた後、スポーツドリンクを口の中へ流し込み喋ったことによる渴きを潤すとペットボトルを両手で包むように持ちながらだんまりする。

こんなことを自分一人で抱えても仕方ないとは分かっているが、次の話し合いまでには自分の中で答えを決めておかないと議論が頓挫してしまう気がしたのでこうして考えているが、やはり答えは見つかりそうにない。

半ば諦め気味にため息を吐くと愛さんが声を掛けてきた。

「……そうやって先の事をしっかりと考えてるなんて凄いね、カグヤ

ンは」

「えっ?」

愛さんはそう言つて目を少し細めながら微笑むとベンチの背もたれに身体を預けるように座り込む。

「愛さん、そんな風に考えたこと、今まで無かったから」

「それは……どういう事ですか……?」

「あたしは、他の人よりも運動神経に恵まれてるからそれをいつもどこかの部活にお邪魔していくのが日常茶飯事だった」

「昼間に言つてた部室棟のヒーロー……ですね」

「うん。でもあたしはそう呼ばれるの実はあんまり好きじゃないんだよね……。だってヒーローは自分の中にある信念を持つて困つてる人を助けるでしょ? あたしは……みんなと楽しくやるのが好きだから参加してらつてだけで自分の快樂の為にやつてるだけだもん」

愛さんはふと天を仰ぐ。

月とスツポンのような正義のヒーローとの格差に呆れているのだろうか。

「だけど、せつつのライブを見て……スクールアイドル同好会に入部して……みんなのスクールアイドルに対しての向き合い方を見て、思つたんだ。あたし……今まで何も考えてなかつたんだなつて」

「愛さん……」

「部活動に助つ人參戦するのもみんなと楽しくやればいいつて思つてたし、あたしがどんなことをやりたいかなんて……そんなこと一ミリも考えたことなかつた」

愛さんはよつと言いなから立ち上がりこちらへ向き直す。

「だから、今は愛さんのやりたい事を見つけて、ゆくゆくはそれを愛さんだけのステージで見せたい!! ……それが、愛さんなりの同好会で活動方法かな」

愛さんのいる場所がちょうど夕日が当たる位置なのもあつて凄く眩しく見えた。

先ほどまでどのように走ればいいのかわからない仔馬だったが、浮かび上がった道を全力で出走してくれるであろう頼もしい姿へ変貌

していた。

そんな愛さんにただただ見惚れていた。

「……なるほど……。素晴らしい考えだと思います。愛さんのその信念、是非サポートさせて下さい」

「えへへ、当然だよ！ あつ、あとね。みんながソロ活動への賛成を口にしたがらない理由として感じることが一つあるんだー」

「ほう？ それは一体……？」

愛さんはビシツという効果音がなるように俊敏に俺を指差した。

「それは……カグヤンについてだよ！」

「ぼ、僕ですか……!？」

「うん！ だって愛さん達がソロでステージに立つっていう事は歌うための曲が必要になるでしょ？ 作曲は現時点カグヤンにしか出来ないから九人分の作曲をカグヤンがすることになるじゃん？ そうなるとカグヤンへの負担が大きくなるから声を上げなかったんだと思うな」

「ああ……確かにそれは言えますね……」

愛さんの言葉に俺は相槌を打つしかできなかった。

俺自身は仮にそうなってしまったとしても、と思う所があったが他のメンバーからすればそれは途轍もなく大きなことなので言い出せずにいたのも無理はない。

「だから、この件はちゃんと現実的にやれるかどうかも含めてしっかりと決めていこ？」

「……そうですね。僕の正義感だけで動いてたら他の方達に心配かけてしまいますもんね。愛さん、ありがとうございます」

「いいよいいよ！ カグヤンこそ話を聞いてくれてありがとう！ 改めて、これからよろしくね！」

二人だけの秘密の会議を終え、愛さんは帰路に着く。

愛さんのお陰で自分の中にあつた靄が晴れていくのを感じた。

やはりあの人は困ってる人に何も言わず手を差し伸べるヒーローの素質があると実感した。

(まあ、本人は否定してるけど……)

自分の中の評価と他人からの評価でギャップが生じるのは自然の摂理だが、愛さんのイメージはプラスに上書きされる一方だった。そして、密かにとある計画も模索し始めた。

次の日、俺は昼休憩に音楽室へ来ていた。

一日の楽しみでもある友人たちとの会合をそっちのけにここに来た理由は一つ。

愛さんの話を聞いた上で今の彼女のイメージに対する曲が作れるかどうかというものだ。

愛さんの正義感をどのように織り込むことが出来るかを挑戦してみたくなった。

確かに一人で九人分の曲を作るのは無謀という話をしたが、それでもやらずに後悔するというのは一番かつこ悪いと思っただのだ。

やらない後悔よりもやる後悔。

挑戦してみても、これが原因であるからこの案は駄目だった、と言い切れるか。

それを確認しなかった。

そして、何よりみんなのやりたい事をサポートすると決めた以上、自分が原因で頓挫するという事はしたくなかった。

自分の中の決意を固めるとピアノ椅子に座り一呼吸着いた。

「ふう。……よし、やろう」

愛さんから貰ったイメージを元にピアノを奏で始めるのだった。

「カグヤーン、おつおつー！　愛さん呼び出して何かあったん？」

その日の放課後、愛さんに音楽室へ来てもらった。

ちなみに身体は慎にしごかれた関係で筋肉痛が凄まじく伸ばしただけでも激痛が走ってくる。

「実は少し聞いてもらいたいものがあるんです」

「へっ？ 愛さんに？」

突然の連絡に愛さんは目が点になった。

突拍子もなくそう切り出したからそうなるのも無理はない。

「はい。……と言ってもワンコーラス分だけなんですけどね」

こうして、小さなピアノ演奏会が始まった。

「はえ、噂には聞いてたけど、カグヤンって本当にピアノ上手なんだね！」

一曲を披露し終え、愛さんは目を輝かせながら拍手をしていた。

真つすぐな称賛のコメントなので少し背中がむず痒くなってしまう。

「あ、ありがとうございます」

「いやあ、聴いてるだけで元気が湧いてくる感じがしたよ！ ちなみにこれって何の歌なの？」

「これは、愛さんに歌ってほしいなと思って作った曲です」

「へっ!? ど、どういうこと!?!」

愛さんは頭が混乱してきたようなので一つずつ説明を始めていく。

「昨日、愛さんと話をして思ったんです。九人分の楽曲を作ることにやる僕への負担。それは相当なものになると思います。ですが、何もやらないまま別案を考えるとというのが気持ち悪くて……一回挑戦してみたいなと思ったんです」

そう言うと、俺は一枚のディスクを鞆から出した。

「その第一号は愛さんです」

「どうして……あたしに？」

「愛さんの誰にでも手を気軽に差し伸べる姿、それってヒーローとしての素質があるからこそできる事だと思っんです。あくまで自分は楽しみたいからやってるだけ……それでも人からのヘルプに対して嫌な顔をせずに手を貸すっていうのは凄く勇気があることだと思います。だからこそ、僕はそれが愛さんのやりたい事につながるんじゃないかなって思ったんです」

手に持っているディスクを愛さんに渡そうと彼女の前へ差し出した。

「まだワンコーラスのみですが、それでも愛さんのイメージを僕なりに表現できたと思ってます。是非、この曲を一緒に作って下さいませんか？」

愛さんは俺から差し出されたディスクを無言で受け取る。

今の愛さんには喜怒哀楽の感情は込められておらず、どのような想いを抱いているかは分からない。

二人の間に暫しの沈黙が訪れる。

そして、固まった空気を破ったのは愛さんだった。

「カグヤンは……あたしにヒーローの姿を重ねてこの曲を作ってくれたんだね。だったら、愛さんはその期待に応えないわけにはいかないか！」

愛さんは笑顔になりながらそう言うと、元気よくディスクを受け取った。

「オツケー！ 後輩がこう言ってくれてるんだもん！ 先輩として情けない姿を見せるわけにはいかないよ！ 是非この曲を愛さん色に染めさせてよ！」

愛さんはウインクを決めていく。

その姿を見て、俺の第一の曲を愛さんに向けて作ってよかった心の底から思った。

「愛さん……ありがとうございます。ここから貴女を最高のスクールアイドルにしてみせます！」

スクールアイドル同好会はまだスタート地点に立ったばかりだが、俺が走り出す道は太陽によって明るく照らされていると実感するのみだった。

見つかる愛、見つからぬ相

「うーん、こんな感じでどうかなー？」

俺が生まれて初めて作った曲を愛さんに渡した後、愛さんが早速作詞したいという事で二人で図書室に来ていた。

「良い歌詞が書けてると思いますよ？　愛さんの想いが込められていて良いと思います」

辞書を片手にノートへ詩を書き綴っていき、ひとしきり歌詞として完成していた。

だが、愛さんは顎に手を当ててうーんと唸っていた。

「だけど、愛さんのにはまだピンと来てないんだよねえ。こう……愛さんの言葉じゃない感じがするっていうか……。もつと愛さんらしさを詰めた歌にしたいんだよね……」

どうやら愛さんは書き上げたばかりの歌詞を見て、自分の事を詠っているように聞こえないみたいだ。

「なるほど。僕目線としては愛さんの事を十分に表現できていると思っただんですが、何か引っかかってる事ですね」

歌い手本人の納得がいつてないようではライブでも気持ちを歌に込めにくくスッキリとした締め方とはならない。

愛さんがこう言うのであれば、俺はただそれに従うのみだ。

「分かりました。では、この案も一つとしてもう一案を作ってみますか？」

「いや、これに愛さんの歌いたい事は書いてあるからこれをベースでいいよ。ただ、これをもう少しブラッシュアップしたいなって所だから」

愛さんは今の歌詞のまままで練り上げたいという事なので、原案の改修として方向性は決まった。

そんな中で机に置いてある俺と愛さんのスマホが震え出した。

突然の通知に軽く驚きつつもスマホを確認して、その通知の内容を確認する。

『明日は9時からレインボー公園でランニングですので忘れないよう

に!!』

『おっけー』

『ラジャ(、◇、)ゞ』

かすみからの休日の部活動についての案内だった。

これまでは各チームに分かれて練習することが主だったので、練習を早めに終わるところや遅くまで残って練習しているところと種々分かれているので最終の連絡が遅れてしまう事がある。

そこで共通のチャットグループを作って、練習終わりで帰る人、残る人、個人別で話さなくてもいいようにと侑さんからの提案で始めたものだ。

かすみの返事に彼方さんと璃奈が返事をする。

璃奈は顔文字もつけて返信しているので、面合わせでは感情が乏しい彼女だがチャット上では感情表現を多めに行っているとところが少し可愛らしさを感じてしまう。

「かすみから連絡が来たって事は、もうみんな上がった感じですかね？」

外を確認すると既に夕日が差し込んでいた。

放課後は愛さんへCDを渡してからこうして歌詞作りに専念していたので、かれこれ二時間近く制作していた。

「ああく確かにもう18時だもんね。切りの良い時間だし今日はここまでにしようか？」

「そうですね。続きは来週にやりましょう」

こうして歌詞作りを一旦止めにして今日は切り上げる事とした。

「いやあく歌詞作りって中々に難しいね〜」

図書室を抜けて校舎外に出た後、愛さんは隣で歩きながらそうぼやいていた。

「それでも、曲を渡してからすぐに作詞してあらかた完成しているのは凄いことですよ」

情報処理学科という事で理系のイメージで考えていたが、文系も得

意なさしづめ向かうところ敵なしといったところだろうか。

もしそうならこの人のスペックの高さに脱帽するばかりだ。

「いやいや、カグヤンが作った曲の出来の良さもあるよ！ それにカグヤンから貰った言葉が愛さんの中で光りかぐやいているからね！」
突然の愛さんのボケに苦笑いしか出てこなかった。

「何ですかそれは……。ダジャレのつもりですか？」

「そうだよー！ 愛さんは暇なときにはいつもダジャレを考えてる人だからね！ ダジャレある所に愛さんありってね！」

言い切ると同時に愛さんは目元でピースを作り、決めポーズを取った。

「ダジャレ好きだったなんて、ちょっと意外ですけど愛さんらしくて愛らしさを感じます」

「ぷっははは！ カグヤン、良いダジャレだねー！」

咄嗟に浮かんだダジャレを口に出したが、愛さんがお腹を抱えながら笑っている。

どうやら俺のダジャレも愛さんのお眼鏡に適ったようだ。

愛さんが嬉しそうに笑う姿は見ていて気持ちが良い。

「そうやって自分の周りの人を笑顔にさせるのも愛さんの魅力なのかもしれませんね」

「へっ？ あたしの？」

「はい、愛さんの近くにしていると不思議と元気がもらえてくるんです。いざという時に助けてくれるかっこいい姿も、無邪気に笑う愛嬌がある姿も……。だから、そんな愛さんの魅力を今回の歌にありつたけに込めたいです！」

太陽のような輝きを持つ愛さんの魅力を自分だけが知っているのは特別感があって嬉しい。

だが、それでもアイドルという面で考えたら折角の愛さんの押しポイントを応援してくれる人たちが知らないと考えたら凄く勿体ない。愛さんへの称賛を連ねると愛さんは照れ隠しをするように後頭部に手を置き遠くを見つめる。

「ええ、そんなやめてよー！ 流石にそこまで言われると愛さんも

恥ずいからさ〜！」

俺に場の空気を持っていかれ、ほんのり赤面する愛さんだが、その表情を見せまいとすぐにかつと笑って見せた。

「……でも、そう言ってくれて嬉しいよ！ あたしの持ち味についてカグヤンのお陰で客観的に見る事が出来た気がする」

「……なら、よかったです」

「この曲はもう少し愛さんの手を変えてみたいと思うから、また相談に乗ってよ」

「ふっ、いつでもお待ちしてます」

愛さんが今回の曲をどのように仕上げるのかを密かに胸を躍らせながら、愛さんと別々の帰路に着いたのだった。

次の日、指定された公園へ向かうために学校の最寄り駅へと来ていた。

そこに来ていた理由は公園に一年生組で一緒に行こうという提案があつたからだ。

俺としては現地集合でいいと思つていたが提案者であるかすみは、「二年生組の仲をもっと深めていきたいの！」と一年生のチャットグループにて熱弁していたので、それを拒否する理由もなかったので賛同の意を示したのだ。

「おっ、輝弥、おはよう。早えじゃねえか」

駅近くのベンチにて一人の時間を堪能していると慎がやってきた。

ランニング向けの軽装と必要最低限の持ち物を入れたポーチバッグで、走ることが日課の爽やかな好青年という印象を受ける。

「おはよう、慎。そういう慎こそ、まだ集合の十分前だよ？」

「それは輝弥も同じだろ？ どれくらい前から来てるんだ？」

「俺も今から五分前くらいだよ。いつもこのくらいで着くようにしてるから」

俺は時間集合となった際には想定外の事態に備えて15分前に着くようにしている。

人によつては真面目過ぎという印象を受けるだろうが、俺としてはこれを当たり前として考えていたのでそう言われても正直しつくりこない。

「ならそんなに大した差じゃねえな」

「ふっ、そうだね」

五分ならそう変わらんと慎は笑い、俺もそれにつられる。

「そういえば、身体の方はどうだ？ 仕上がって来てるか？」

「絶賛筋肉痛だよ。正直今日まで残ってるとは思ってなかったけど……」

「それだけ中学卒業から運動を疎かにしてたって事だろ。身体の事を考える良いきっかけにはなるだろ？」

他のメンバーが到着するのを待ちながら、慎と同好会の練習の話で時間を潰す。

「もう考えるの域を超えてるくらいに絞られてる気がするけどな……」

「とは言っても筋肉痛は腕ぐらいだろ？ 今日ランニングで足を使うのみだから、走る分には何も支障はないさ」

「その考え方はスパルタ顧問の域を超えてるぞ」

その内、彼は仮に足が筋肉痛などで動かなくなったとして、「折れたわけじゃないだろ？ なら大丈夫だ！」と言って首根っこを掴んででも走らせようとする気がしてならない。

「ありや、かぐ男と慎のすげじゃん！ 二人共早くない？」

「輝弥くん、慎くん、おはよう」

温かい気候のはずなのに悪寒を感じている中、かすみと璃奈が駅内から顔を覗かせてきた。

「おはよう、かすみ、璃奈。二人もまだ五分前だよ？」

「それはそうだけど、二人が先に来てると思わなかったから」

「そうだよ。慎のすげとかは寝坊してくるとばかり思ってたから！
ね、りな子？」

「それはかすみちゃんが一方的に言っただけだよ」

慎への偏見について璃奈はかすみと共犯として首に縄を掛けられそうになったが、察しの良い璃奈はすぐに縄の隙間から抜け出してかすみに縄を掛けていた。

「なんならこっちはかすかすが寝坊して泣き喚きながら来ると思ってたわ。な、輝弥?」

「それは慎が一方的に言ってるだけ」

「にやあああ、どういう意味だ、慎のすけええ!! あと、かすかす言うなあああ!!」

慎のすけ発言に眉がぴくつと動いた慎だが、にへら顔をしながらかすみを煽っていく。

どさくさに紛れて俺も共犯に引きずり込もうとするんじゃない。

「……朝から元気」

「……朝はもう少し静かにしてほしいけどな……」

俺はどちらかという朝は苦手な部類なので、大きい声で喋られると頭が痛くなってくるのだ。

だが、そんな事情を露にも知らない二人は日常茶飯事とも呼べるいがみ合いを朝から展開していた。

そんな二人を放置してベンチの慎が座っていた所に璃奈が腰掛けてくる。

「輝弥くん、昨日は愛さんと何してたの?」

「ちよつと、柔軟のコツをね」

流石にソロ曲の事を相談してたと言うとかすみあたりが地獄耳で異常な食いつきをしてきそうなので、璃奈には申し訳ないが嘘のარიバイを作っておく。

だが、璃奈が柔軟を苦手としていることを忘れていたので、それを聞いた璃奈は表情を変えないながらも俯くように下を向いてしまった。

「そうなの? ……私も教えてもらいたかった」

「えっ……あつ、そう……だね……。俺でよければ今度また教えるよ」

璃奈は抜け駆けされたと思っってしまったようで、意外な反応に思わ

ず俺も動揺が隠せなかった。

しかし、璃奈のそんなリアクションも一瞬の事で俺が教えると言った瞬間、すぐに顔を上げてこっちを見てきた。

心なしか目が輝いているように見える。

「ほんとう？　なら今度の柔軟の時、教えてほしい」

「……ああ……分かった。任せて」

次の柔軟運動までにネットで効果がありそうなトレーニング方法を調べなければ、と心に誓った俺であった。

「みんな、おはよう！」

先ほどの慎とのやり取りで感じた悪寒とは違う寒気を感じているとしくさんも到着した。

少し息を切らしているところを見ると俺達が全員集まっているのを見て、少し走ってきたという所だろうか。

「おはよう、しくさん」

「おはよう、輝弥くん。遅くなっちゃってごめんね？」

「とは言っても時間ぴったりだし、謝る必要ないだろ？」

「そうだけど、みんな到着するのが早いから少し気が急いちゃって」

しくさんは予定通りの時間に来ているので特に弁解する必要はないのだが、それでも全員が到着している中で自分が一番遅く着いたというのは彼女にとっては許せない事なのだろう。

そんなしくさんの真面目っぷりを見て、更に彼女への好感度は上がる。

「もうしく子つてば真面目過ぎにも程があるんじゃないの〜？」

「でも、それがしくちゃんの良いところでもある」

「ええ……？　別に私としては普通なんだけどなあ……」

かすみと璃奈の発言にしくは頭を悩ませているが、その気持ちは痛いほどに分かる。

真面目と呼ばれる人たちは、学校の規則は学校側が決められているルールである以上きちんと守る。

また、家の門限も身内に心配をかけないように決められた時間には帰るようにしているのが大半だろう。

今回も同じ例だ。

与えられたひとときを十分に楽しむために時間を守っているに過ぎないのに、これらの事だけで真面目過ぎと呼ばれる理由が分からないのだ。

当人たちは一種のコミュニケーションのつもりで言ってるのかもしれないが、その発言こそが真面目と呼ばれる俺たちは真面目に受け止めてしまうので少しはこちらの気持ちを考えてほしい。

その性格故に弄ばれた過去を思い出しながら俺はそんなことを考えていた。

「それなら輝弥も負けてねえけどな。今日も集合の15分前には着いてみたいだし」

「別に俺は真面目さで勝負をしてるわけじゃないけどな……」

慎も負けじと俺を引き合いに出してしずくさんに対抗させる。突然始まるしょうもない争いにただため息しか出なかった。

「もう、三人とも茶化してないで、時間に遅れちゃうから。輝弥くん、行こっ?」

しずくさんはプリプリと怒りながら、俺に付いてくるように言っ先に出発してしまう。

彼女の反応を見てつい笑いがこぼれてしまったが、そんな俺を見てしずくさんは足を止める。

「ふふっ」

「な、何かおかしい?」

「いや。ただ、俺と似てるなあって思っ」

「か、輝弥くんも茶化さなくても……!」

「俺も……ただこの性格を貫いていただけなのにな……」

「えっ……?」

俺が最後にぼやいた言葉はしずくさんの耳には完全には届かなかったようだ。

「なんでもない。ほら、みんなを待たせちゃうだろうから早く行くよ」

「あっ、じゃあ公園まで競争で一番遅く到着した人はジュース奢りね! じゃあお先い〜!」

「おい、かすかす!! 抜け駆けはするぞおー!」

「ふ、二人共早い……」

かすみの理不尽なレース宣言を皮切りに慎と璃奈が追いかけるように走り抜けていった。

「ほらっ、しずくさんも行くよっ!」

「う……うん……」

しずくさんに声を掛けて、俺は璃奈たちの後ろを自分のペースで付いていく。

そして、しずくさんは俺が放った一言について反芻しながら最後尾を走るのであった。

未知なる道への挑戦

俺は自動販売機の前に立っている。

理由は一つ、突拍子もなく始まったレース勝負に敗北したからだ。自分のペースで走ったはいいものの俺より練習を重ねている時間が長いしずくさんの方に軍配が上がった。

ちなみに既にかすみ達には飲み物を渡しており、今はというと璃奈を連れて公園の中で遊んでいる。

そこそこの距離を走ったのに遊べる気力があるあの二人が羨ましい。

侑さん達が到着したら声を掛けてあげよう。

「はい、しずくさん」

レインボー公園のベンチで一息ついていたしずくさんに後ろから声を掛け、近くの自販機で買ってきた飲み物を差し出した。

「ありがとう、輝弥くん。わざわざ私の分まで買わなくてもいいのに」「そうは言うけど勝負は勝負だし。さすがにしずくさんにだけ無しなのは俺がちよつと気分が悪いというか……」

しずくさんに飲み物を渡すと隣へ腰を掛けながらそんな事を呟く。

「もう……どこかの誰かみたいに真面目だね?」

「ほんと、どこの誰と似てるんだろうね?」

二人で少しからかうような目線で見合うと同じタイミングでプツと笑い出すのだった。

そして、しずくさんはポーチバッグからペットボトルを取り出した。

「じゃあ、はい。私からも。いい勝負をしてくれたお礼に」

「俺が勝負に負けたのに?」

「別にこれは勝敗によるものじゃないからいいの」

しずくさんからの差し入れを拒否するわけにもいかないので渋々受け取る。

そして中身と蓋周りをさつと確認する。

容器の中は量が減っているわけではなく、蓋も開封された形跡はな

いので間違いなく新品の物だ。

「じゃあ、頂くね」

「相変わらずお熱い二人だな」

手洗いを済ませた慎がこちらにやってきて俺達のやり取りを茶化しに来た。

お熱いという言葉に反応したのはしずくさんの方だった。

「べ、別にそういうつもりじゃ……!」

「おん？ 俺はいつも通りの仲の良さだなんて意味で使っただけだぜ？」

「……ならもう少し言葉の使い方勉強してこい」

気の抜けた顔をする慎に軽く悪態をつくどバッグに入れていた飲み物を慎に投げ渡した。

慎は軽やかに蓋の部分をつまみ取るとサンキュー、と言いながら封を切り、汗で流れた水分を補給する。

ごくごくと音を立てながら飲む彼を見ると凄く気持ちが良い。

良い飲みっぷりの慎を見ると彼の首元で何か光るものが見えた。

「慎、何か首に何か付けてる？」

「ん？ ああー、これか？」

慎はそう言うので首から服の中に入れていたアクセサリのようなものを取り出した。

見るとそれは吸い込まれそうな程に美しい輝きを放つ蒼玉が埋め込まれたペンダントだった。

「綺麗だな。蒼い宝石って事はサファイアか？」

「ああ」

慎は静かに呟きながら頷く。

「本当、凄く綺麗……。プレゼントで貰ったの？」

蒼玉に見惚れているしずくさんは、うっとりしながらも慎に顔を向けて質問する。

「ああ。お守りとして家族がプレゼントしてくれただ」

「そうなんだ……。素敵な家族だね」

「……ああ……」

俺は家族というワードから以前に聞いた慎の妹についての話を思い出し、言及してはまずいと考え、ただそう呟いた。

慎も再度気を使わせまいと口元は笑っているが、やはりどこか憂い帯びたものを感じる。

この場の雰囲気を変えるために俺は悪戯っ子のような笑みを浮かべながら慎に語り掛ける。

「それはかすみとかにはあまり見せない方がいいかもな？ あいつならそれを見た瞬間、見せろってせがむか奪いに来るだろうし」

「はっ。そんなことをしようもんならあいつはお前以上に筋トレをきつくしてやるさー！」

俺の言葉を聞いて、慎はやんちゃな少年のような元気を取り戻し、いつもの彼に戻る。

俺以上のしんどさの筋トレはどんな内容なんだ、とひっそり背筋を伸ばすと横でしずくさんがため息を吐いた。

「もう、その後に延々と文句を聞かされるこっちの身にもなってよ？」
「それはしずくと璃奈の専売特許ってことで！」

「全く、慎くんは調子いいんだから……」
サムズアップしながら答える慎にしずくさんは呆れつつもその顔から笑みがこぼれていた。

どうやらしずくさんも慎が明るくなったことで安心したのだろう。

そんなしずくさんを尻目に慎は周囲をきよろきよろと見渡した。
「そういえばかすかすと璃奈は？」

「全員が揃うまで公園に遊びに行くって言って璃奈を連行していったよ」

「相変わらず子供みたいなのはしやぎっぷりだな」
慎はそう悪態をつくくとスマホを取り出して画面を見つめる。

「それで、お前らはここでひっそりとイチャイチャしてたわけか」
「だから別にイチャイチャしてたわけじゃ……!!」

途端に悪ガキのような目線を向けながら慎が煽ってくる。
不意を突かれたのでつい声が大きくなってしまいが、それはしずく

さんも同様のようであったかの同好会であったことがデジャヴとなつてしまった。

阿吽の呼吸で言葉があつてしまい顔を赤面させながらお互いから視線を反らす。

「ぶっはははは!! やっぱり輝弥たちが一番からかいがあるな!」

「……しゅんしゅんしゅんしゅん!!!」

慎から盛大に弄られてぷりぷりと怒りながらしゅんしゅんは慎を追いかけていく。

俺も慎を捕まえようとベンチから立ち上がるが、脳裏に嫌な記憶が蘇っていた。

中学生の時に起こったとある出来事。

一時の感情に振り回された俺が相手から拒否された瞬間。そこから始まる自己嫌悪の時間。

脳裏に過つた嫌な記憶を振り払おうと頭を揺さぶる。

強く揺さぶってしまったせいで少し血の気が引いた感覚があるが、気持ち切り替えるのには十分だった。

「まるで俺達が想い合ってるみたいになつてるけど……。俺は……人を好きにはなつちやいけないんだ……」

誰にも聞こえない声量でそう呟き、彼らに悟られまいと顔色を変え

る。そして、煽り倒した慎にお仕置きをしようと全力で走り出すのだつた。

「ううう……まだ頬がいてえよお……」

「もう。反省してよね?」

慎を頬つねりの刑に処した後、先輩たちが到着するまでベンチで座っていた。

頬に痛みを感じている慎を横目にしゅんしゅんは頬を膨らませてい

る。

「おはよう！ 輝弥くん達、来るの早いね！」

そんな矢先に侑さん、歩夢さん、せつ菜さん、彼方さんが合流した。

「ああ〜！ 侑せんぱあ〜い、おはようございませう〜♪」

「歩夢さん、せつ菜さん。おはよう」

侑さんの姿が見えた瞬間にかすみと璃奈がひよいと姿を現してきた。

かすみは侑さんの姿を見るや彼女の周りをちよこちよことうろちよろしている。

侑さんはそんなかすみの頭を撫でて落ち着かせるが、かすみは犬のようにくうくと鳴くように気持ちよさそうにしている。

歩夢さんはその横で少し複雑な表情をしている。

「璃奈さん、かすみさん、おはようございませう！ 他の皆さんもお早い集合ですね！」

「うむっ。やる気があるのはいいことですねあ〜」

「こつちは朝から疲れてますよ……」

せつ菜さんが元気に挨拶をし、彼方さんはまだ眠気が残っているのか目を閉じながら話しかけてくる。

二人の挨拶に対して慎はくたびれながら返事をする。

「慎の場合は自業自得だ」

「慎くん、何かやったの？」

「気にしないで結構ですよ、侑さん」

侑さんは首を傾げながら聞いてくるが、俺としずくさんとしては聞かせていい話ではないのでしずくさんは笑みを浮かべながら侑さんに待ったをかける。

集合場所にメンバーが揃いつつあるので来ていない人を確認しようとして周囲を見渡した。

「そういうえば、まだエマさんと愛さんが来てないですね？」

「確かにそうだねえ〜？ 愛ちゃんあたりは先に到着してるものだと思ってたけどお〜……」

「ああー！ みんなー！」

二人を探そうと思った矢先にエマさんが声を張りながらこちらへ走ってきた。

「だいぶ汗をかいていたので、先にランニングを始めていたのだろうか。」

「エマさん、おはようございます」

「おはよう、輝弥くん。ねえ、愛ちゃんを見なかった？」

「愛さんですか？」

「俺は慎たちに目配せを送るが知らない、と言うように首を横に振る。」

「さつきまで一緒にいたんだけど、突然走り出して姿が見えなくなっちゃったの……」

「こつちでは姿は見えてないですけど……かすかs「かすみん!!」……二人は見なかったか？」

「愛さんらしき人は見てない」

「慎は公園で遊んでいたかすみと璃奈へ確認するがそれらしき人を見ていないようだ。」

「侑さんがエマさんに状況を確認する。」

「エマさん、何かあったんですか？」

「うーん、特に言い争いをしたわけじゃないんだけど……。ランニングの途中でソロアイドルについての事を話したら、走ってくる!! って言って突然行っちゃったから追いつけなくて……」

「でも集合場所はここと言っているの、既に到着されてるんじゃないでしょうか？」

「エマさんの証言にさくさんが意見を述べる。」

「確かに時間と場所は既に周知しているので公園内の別の場所にいる可能性はある。」

「では、ランニング前の準備運動も兼ねて公園内を一周しましょうか」「せつ菜さんの言う通りですね。細かい場所までは指定してなかったの違う場所にいるかもしれないですね」

「せつ菜さんの提案に賛成の意を示すと他の皆さんも頷き、愛さんの搜索が始まった。」

「さてと、愛さんはどこにいるのかな？」

「彼方さんみたいにお昼寝スポットを探してるわけじゃないもんな
〜」

「むむ〜？ 慎くん、それはどういう事かなあ〜？」

愛さん搜索活動が始まり、俺達は人数ごとに分かれていた。

俺は慎と彼方さんと一緒に搜索をしている。

その中で愛さんがいそうなポイントについてある程度絞れたかったが、そもそもこの公園に来ることすらも無かったので案を出すことすらも厳しかった。

「まあ〜ひとまずはゆつくりと探すって形でいいんじゃない？ どうしても見つからなければ電話すればいいだろうし〜」

「確かにそうですね。焦っても良いことはないですし」

彼方さんのゆつたりとした口調を朝から聞くと少し眠気に誘われてしまう。

だが、彼女の声を聞くと何事も自分のペースでやればいいんだと初心に帰らせてくれる。

「そういうえば彼方さんって休日の朝でも早く起きれるんですね。こういう温かい日は昼まで寝ちゃう人かと思ってました」

「慎くん、さつきから彼方ちゃんに対しての毒が強くない？ 彼方ちゃん泣いちゃうよ〜」

「ああー、そういうつもりで言ったわけじゃないですよ！ ただ、ちよつと気になっただけで……！」

「むふふっ。なあ〜んて。慎くんもからかいがあって可愛いねえ〜。輝弥くんもそうだけど、なんだか弟が出来たみたいでつい頭を撫でたくなっちゃう〜」

「撫でながら言わないで下さいよ……！」

慎を嘘泣きで遊んだ後、弟を可愛がるように慎の頭を撫でる彼方さん。

いきなりされたものだから、慎も顔がカツと赤くなりつい頭を押さえるように隠してしまう。

「彼方さんは姉妹はいるんですか？」

「いるよ。遙ちゃんって言って輝弥くん達と同じ一年生なんだ。彼方ちゃんと違う学校だけど同じようにスクールアイドルを目指してるんだよ♪」

姉妹揃ってのスクールアイドル……彼方さんもかなりの美人さんだからその遙さんもきつと姉譲りの美貌が備わっているんだろう。

「二人してスクールアイドル……ならいずれは同じステージで共演、なんてこともあるかもしれないですね」

「うん、だから彼方ちゃんも遙ちゃんに負けないように日々努力しているのです♪」

彼方さんと慎とそんな平和な会話をしていると正面に見覚えのある金髪の女性の姿があった。

服装についても部活で来ていたものと同じなので、これで違う人物だという方が信じがたい。

「あつ、あれって愛さんじゃないか？」

「おつ、確かにそれっぽいねえ」

「声を掛けてみましょうか」

三人で女性の元へ近づくが、向こうはこちらに気付く様子はなく準備運動をしているようだった。

「あの一、愛さん？」

「おん？ おおー、カグヤンにシンシン、カナちゃんまで！ おはよう！ 三人そろってどうしたん？」

俺の声に反応して振り向いたこの人は案の定愛さんだった。

「どうしたはこっちだよ。全然集場所に姿を見せなくてエマちゃんが焦ってたんだよ」

「あ……確かにエマっちには悪いことしたなあ……ごめんね。あとで謝っておくよ」

「何か悩み事でもあったんですか？」

慎の質問に愛さんは首を横に振った。

「どちらかというところ、もう解決したって所かな！」

「それはどういう事ですか？」

「カグヤン、あたし考えたんだ。スクールアイドルの活動について」
愛さんは真剣な眼差しでこちらを見つめる。

「あたし、今までチームでの活動に関しては色々な部活の助っ人で参戦してたのもあって自信があった。でも、同好会のみんなが自分のやりたい事で悩んでる姿を見て、あたしが分からなくなっちゃった。今まで、あたし自身がやりたいことっていうのを考えたことがなかったんだ」

愛さんは自分の手のひらを見つめながら胸中を吐露する。

「だけど、カグヤンが愛さんに言ってくれたことやエマっちに言われたこと。あたしがいる事でみんなの笑顔が増えるなんて考えたことがなかったんだ！ それを改めて認識したとき、あたしのやりたい事っていうのを自覚することが出来た！」

手のひらをグーで握り、笑顔になる愛さん。

その顔からは、迷いは見えなかった。

「みんなに楽しんでもらうのが好き。自分が楽しむことが好き。そんな楽しいを分かち合う事が出来るのがスクールアイドルなんだよ！ そんな素敵な事を愛さんだけのステージでやりたい！」

「愛さん……」

「だから……見て行ってよ！ 愛さんの姿を……！ 聞いて行ってよ！ 愛さんだけの歌を……楽しんでよ！ 愛さんとのステージを！！」

愛さんはそう言うところ、歌を口ずさみ始め愛さんだけのソロステージが幕を開けた。

静かな語りから始まった曲は暗い夜から太陽が昇り始める様子を彷彿とさせ、次第に愛さんの手により元気で明るい曲調に変わっていく。

突然始まった愛さんのステージに周囲にいた親子達はなんだなんだとざわつき始めたが、それは一瞬の事だった。

楽しそうに踊る愛さんを見て、子供たちが振りを真似しているのだ。

愛さんの煽るようなコールにも相まって盛り上がりが最高潮に達した時、その場にいた人たちに戸惑いの表情はなく、笑顔が溢れていた。

いつの間にか愛さんの歌声を聞いて駆け付けたであろう侑さん達も愛さんの歌に夢中になっていた。

「誰かの太陽になりたい……。凄く愛さんらしくて良いと思います……！」

昨日まではどんなアイドルを目指そうか方向性が定まっていなかった彼女が、今では誰よりもイメージするアイドル像を強く固めていた。

愛さんの掛け声で歌が締め括られると、大きな歓声と拍手で公園内は溢れていた。

歌い終えた愛さんは珍しく息が乱れていた。

息が整うまで下を向いていたけれども、幾分か落ち着いたら後に顔を上げたら自分の姿を見て沢山の人が笑顔になっていた。

「うう~~~~~……さいつこう~~~~!!」

周りの人たちの歓声に愛さんは想いが爆発したように叫ぶ。

そんな愛さんを同好会のメンバーで眺めていた侑さんが口を開いた。

「すごいね……。あれが愛ちゃんのステージなんだ……」

侑さんの発言にみんなが侑さんを見つめる。

「私、愛ちゃん以外のみんなのステージも見てみたい！ 一人で立つステージだけでも……。一人だからこそ色々なことが出来るステージを作ることができると思うの！」

「僕も侑さんの意見に賛成です。グループで見せるものとは違うもの……。それぞれの個性が詰まったライブを是非とも見てみたいです！」
「うんうん！ みんなの想いが込められたライブを実際にやってみた

ら、きつと凄いことで起きそうな気がするの！」

侑さんの想いに負けじと俺自身が感じた想いもぶつけ、みんなへと訴えかける。

だが、やはりというべきかすぐにやろうと言う人間は出てこない。

誰もやったことがない道への挑戦なのだ。

想像も出来ない不安要素が沢山あるだろう。

それでも愛さんのライブを見て実感した。

この同好会は各々がやりたい事を貫くのが正解なのだ。

どんなに茨の道だったとしても最高のステージになることは間違いないと痛感したのだ。

そんな事を考えていると彼方さんが口を開いた。

「……侑ちゃんも輝弥くんも凄いね……」

「えっ？」

「はい。不安な事が沢山ありますが侑さんと輝弥くんがそう言ってくれるなら叶えられそうな気がします」

「愛さんのあんなステージを見せられたら……燃えて来るつてもんだ」

「私も愛さんに負けてられない」

彼方さんを皮切りにしずくさん、慎、璃奈も想いを連ねる。

誰も不安を感じている様子はなく、むしろ愛さんのステージに感化されてやる気に満ち溢れていた。

「ふふっ、私もソロアイドルを目指してみたい！」

「みんなで助け合いながら頑張っていこう！」

「そんな中でも一番の可愛いステージを作るのはかすみんですがね！」

「難しい事ですが、挑戦してみる価値はあると思います。それともう一点忘れてはいけないことがあります」

せつ菜さんはそう言う俺の方を向いた。

「せつ菜さん？」

「私たちがこうしてソロアイドルを目指すという事は作曲担当である輝弥さんの負担が相当なものになります。私たちがやる気になつて

も曲作りの方がままならなければそれは断念せざるを得ません。輝弥さん、私たちの活動を支援して下さいますか？」

以前に愛さんが教えてくれたソロアイドルをやる上での課題。

やはりせつ菜さんもその課題の事を認識していたようで、方向性を決めるあたり俺の意思を重要になってくる。

だが、俺の中で答えはもう決まっている。

「僕は先ほどの意見が答えですよ。皆さんの個性が詰まったライブ、それを見たいですから自分のわがまままで覆すつもりはありません。僕に……皆さんの夢のお手伝いをさせて下さい！」

曇りっ気のない俺の回答にみんなは安堵の表情をしていた。

「……分かりました。ではもう私たちに隠れての作曲は無しですよ？」

「そうだぜ。お前、みんなの曲を作るって言っておきながら愛さんソロの曲を作ってたんだからな。抜け駆けは無しだぞ？」

慎はそう言いながら俺の肩に腕を回してくる。

「ふふっ、分かった。これからは遠慮なしにみんなの曲を作らせてもらうよ」

こうして、愛さんの手で虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会の活動方針は決定し、誰も歩んだ事の無い未知なる道への挑戦が始まるのだった。

他愛ない日常

「よし、準備オツケーっと。慎、行こうか」

「おう」

愛さんのゲリラライブが行われた日から数日後。

いつもと変わらない授業風景が通り過ぎていった後、部活へ向かうための身支度を済ませ慎と部室へ向かっていた。

「にしてもこの前の愛さんのライブ、凄かったなあー。スクールアイドルに関して初心者なのにあそこまで人を惹きつけられるなんてなんだ才能だよな」

「あんなに大盛況になるなんて誰も予想着かないよ」

あのライブの後、愛さんは子供たちからヒーローの様に慕われてしまったため、練習開始が大幅に遅れてしまったのだ。

だが、このライブのお陰で愛さんの魅力を自他共に認識することが出来たので時間をロスした分、収穫は大きかった。

「誰とでも分け隔てなく接することが出来て、気付けば友達になっっているのは愛さんの凄い所だな」

「本人としてはそれを自覚してないから尚のことね」

愛さんの話題で盛り上がっていると部室へたどり着いた。

「……好会の練習に行こうかい!」

「あっはははははは——!!!」

扉を開けようとする部室内から何やら話し声や馬鹿でかい笑い声が聞こえてきた。

突然発せられた声に、思わず扉を開ける事をためらってしまう。

「……………」

「今のって……侑さんだよな……?」

「……そうだと思うけど、流星に近所迷惑が過ぎないか……?」

慎と小さな声でそう話す、扉の前で棒立ちしているわけにもいかない。意を決して扉を開ける。

目の前に飛び込んできたのは土下座姿の侑さんだった。

いや、部室内のみんなは怒っている人は一人もいなさそうなので謝

罪のためのそれではないことは理解できたが、どうして侑さんがそんな態度を取っているのか理解できなかった。

「侑さん!? あの……これは一体……?」

「あつ、カグヤン！ 今日も眩しいくらいかぐやいてるねえ〜！ かぐやだけに!」

「ひい——っひひひい……!! も、もう勘弁してえ……」

愛さんは俺達に目を向け、挨拶と同時に俺の名前を振ったダジャレをかましてくる。

それを聞いた侑さんは手で地面を叩きつつ抱腹絶倒していた。

その光景を目の当たりにして俺は言葉を失っていた。

「ええつと……」

「凄くウケてますね……」

「侑ちゃんは小さい頃からずっと笑いのレベルが赤ちゃんだから」

せつ菜さんが静かに呟くと歩夢さんが苦笑いをしつつ補足を入れてくれた。

笑いのレベルが赤ちゃんって随分とパワーワード過ぎませんか。

「というかなんでダジャレなんですかあ?」

「これもスクールアイドルの練習だよ♪ ほら、ライブMCとかでみんなの前で喋るってなった時、咄嗟に見ている人たちを笑顔にするこ
とができるでしょ?」

「それも一つの手段としていい事だと思いますよ」

「MCか……俺もそういう所を練習していかないといけないなあ
……」

かすみの素朴な疑問に愛さんはにっこりと笑顔を作りながら答えていく。

解答と一緒に述べられた愛さんの考えにせつ菜さんは肯定し、慎はライブ以外の面の練習も考え込む素振りを見せる。

「おつ、シンシンも愛さんのやり方に興味シンシンって感じだね?
シンシンだけに♪」

「も、もうやめてえええ………笑い過ぎてお腹が痛い……ひい〜
……」

「別にダジャレを織り込もうというわけじゃないですよ!？」

愛さんのダジャレ追い打ちが留まるどころを知らず、侑さんの腹筋に大ダメージを与えていく。

慎は愛さんの無理矢理なこじつけに思わずツツコミを入れているが、愛さんはただそれが言いたかっただけと思うのは俺だけだろうか。

俺は荷物をロッカーへしまい、彼方さん達がたむろしている大机の方へと近づいた。

「かーくん、授業お疲れさま。はい、お茶入れたからよかったらどうぞ?」

窓際にいたエマさんが俺に目を向け、ポットで沸かしたお湯とティーバッグでお茶を作ってくれていた。

「ありがとうございます、エマさん。ありがたく頂きますね」

「ふふっ、はい、どうぞ♪」

エマさんからコップを貰い口を付ける。

お湯で沸かしたと言っても熱すぎず、されど冷めてるわけでもない優しい温かさが残っていた。

飲み進めてる途中で俺は先ほどのエマさんの言葉を思い出した。

「……って、かーくん!？」

「えっ? うん♪ 輝弥くんだからかーくん! 愛ちゃんにならってあだ名を考えてみたんだけどどうかな?」

「おお、かーくん、いいじゃない。より弟らしさを感じられて彼方ちゃんは好きだよ」

エマさんが愛さんに負けじとあだ名を考えて下さったのは嬉しい事だが、これまた呼ばれたことがないタイプだったので少し恥ずかしさが湧いてしまう。

「まあ、かぐ男よりかはあだ名らしさがあつていいんじゃないか?」

「ちよっと、慎のすけ! それかすみんをデイスってる!？」

慎がかすみの呼び名にケチをつけるように言うが、当人は案の定そう感じたように慎といがみ合いを始めてしまった。

「相変わらず慎くんとかすみちゃんは元気」

「毎日やってて疲れないのか……」

バチバチと火花が発生している慎たちを他所に璃奈がそう呟き、俺も二人に聞こえない程度の音量で漏らす。

「でも実際かーくんって呼び名、良いと思うよ？ 私は好きだな」

「しずくさんがそう言うってくれるなら嬉しいよ」

「……私も呼んでみても……」

「あつ、エマさん。お茶ごちそうさまでした……」

しずくさんからのフオローに満足した俺はエマさんから貰ったお茶を飲み干したので、エマさんへコップを返そうとした。

だが、エマさんは俺の言動に気付かず、ひとり、空を眺めていた。

「エマさん？ どうかしました？」

「えっ？ ああ、ごめん。どうかした？」

エマさんは鳩が豆鉄砲を食ったような表情をしており、どうやら本当に自分の世界に入り込んでいたみたいだ。

「お茶を飲み終わったので……ごちそうさまでした。コップはどうしておきますようか？」

「あつ、私が洗っておくから貰っていくね。お粗末さまでした」

そう言い、エマさんにコップを差し渡すがそれでも彼女の顔色が晴れる様子は無かった。

「……エマさん、何か悩み事ですか？」

「へっ？ ーん、そうじゃないの。ちよつと考え事をして……」

「なにになにー？ エマっち何か悩みでもあるん？」

「……まさか、エマさんからのエマー・ジエンシー……？」

そう言った瞬間、部室内の空気が凍った。

何気なく放った言葉がダジャレとなっており、俺は今すぐにでもこの場から全力で逃げ出したいくなった。

つい口にしてしまったため、恥ずかしくて周囲を見る事が出来ないがきつと真顔で俺を見つめているに違いないだろう。

それか、寒いギャグを披露して憐れむような眼差しで見ているだろうか。

どうやってこの場を切り抜けようか考えていた時、沈黙を破ったの

は侑さんだった。

「ぶっ……あっはははは!! ちよ、ちよつかーくんまで笑わせてくるのやめてよ……! も、もうむりい……!」

「あはは!! 愛さんも流石に今のは不意打ちだったああ……! カグヤン、真顔でそんな爆弾を放り投げないでよおお……!」

侑さんと愛さんはお腹を抑え込みながら、ぷるぷると身体を小刻みに震わせていた。

どうやら笑いのレベルが赤ん坊だった二人には俺のダジャレはクリーンヒットだったようだ。

他のメンバーはそんな二人を見て笑っていた。

だが、しずくさんだけは頬をぷくつと膨らませながらこちらを睨みつけていた。

睨みつけるとは言っても目つきは鋭くなく頬を膨らませているので逆に愛くるしさが宿っていた。

「しずくさん? そんな顔して何かあったの?」

「別になんでもないよ。どこかの誰かさんが勝手にどこかに行っちゃうんだもん」

「……どこかだけに?」

「……私、今無性に輝弥くんに対して怒りたい気分だよ」

「えっ、今のってそういうことじゃないの?」

「もう、輝弥くんのバカ」

「ええ……」

さつきまで柔和に会話していたはずなのに途端にしずくさんがご立腹になってしまった。

彼女は俺に対して何か言っていたのだろうか。

「……お前って真面目なのか天然なのかどっちなんだ?」

「少なくとも慎よりは真面目だと自負は出来るよ?」

「……俺もお前をぶん殴りたいわ」

「なんで二人共急に辛辣なの?」

二人揃って急に態度が悪くなって俺は状況が理解できなかった。

まあ、慎に対しては若干煽りの意も込めてはいたが。

「しずくちゃん、慎くん。二人にもお茶を入れたから一旦落ち着いて？」

空気を変えようとエマさんがお茶を差し入れる。

二人は頭を下げながらコップを受け取り、ゆっくり喉の奥へとお茶を流し込む。

「……美味しいです」

「……エマさんに免じて、これくらいにしておいてやる」

しずくさんはまだ顔が怖いけれどもしつかりと味の感想を伝えている。

慎も虫の居所が良くなったのか、先ほどよりも穏やかな雰囲気の流れている。

普通に喋っていただけなのに何故こんな理不尽を受けなければならぬのだろうか。

二人を見ながら俺はそう考えざるを得なかった。

本編『私だけの個性』 自分を魅せる

「では、皆さん準備も良さそうなので練習を始めたいと思います」
「せつ菜ちゃん、今日もグループごとに分かれる？」

みんなで部活前のおしゃべりを堪能していたが、せつ菜さんが手を叩いて空気を変える。

そして、歩夢さんは練習内容について尋ねる。

「それでも良いですが、今日は少し趣向を変えてみようかと思いましたが」

「趣向を変える、ですか？」

せつ菜さんの意外な提案に俺は首を傾げる。

「はい、先日の愛さんのライブを見て思ったことがあるんです。皆さんの動画に撮ってプロモーションビデオを作ってみるのはどうでしょうか？」

「プロモーションビデオ？」

新しい活動内容に慎は軽く眉間に皺が寄り頭を悩ませている。

「簡単に言えば自己PRです。皆さん、この前のライブで愛さんの在るべき姿が垣間見えたはずです。今の私たちはどういったライブをしたいか、どういった時間を応援して下さいと共有したいか、既に固まっている人、そうではない人、各個人バラバラだと思えます」

せつ菜さんは全体を眺めながら活動内容について説明を行う。

「そこで、皆さんのやりたい事を考えて頂きそれを動画に撮ってサイトに投稿するんです。そうすれば皆さんの人となりを沢山の人に見て頂くことが出来ますし、この同好会の認知度を上げることが出来ます」

「なるほど、スクールアイドルとしてまずは顔を覚えてもらう事からってことですね」

「いきなり難しそう」

俺はせつ菜さんの案に肯定的な反応を示したが、隣で璃奈は心なし

か不安げであった。

璃奈はかすみの講義のお陰により目指すべき姿を見つける事は出来ているが、それでも実行に移すまではまだ勇気が出ないようだ。

「ふっふー、そんなりな子の為にこれを見せてあげよう！」

かすみは鼻息を荒くしながら自分のスマホでとある動画をこちらに見せてきた。

『やつほお〜?』

「ぶふっ」

「おいこら、慎のすけ！」

かすみが動画再生ボタンをタッチした瞬間、かすみが可愛い子ぶりながら頭に手を当て敬礼のポーズを取る姿が流れ、あまりの不意打ちに思わず動画を一時停止させてしまった。

慎もかすみの求愛行動に吹き出してしまい、本人から睨みつけられていた。

「慎、流石に笑うのは……くっ……失礼だよ……」

「そういうかぐ男も何か堪えてるように聞こえるけど？」

慎がケラケラ笑っていたので咎めようとしたが、俺も密かに笑ってしまっていたのでかすみの怒りの火に油を注いってしまった。

「いきなり見せられた動画でかすみが全力のアピールをしているのはちよつとずるいよ……」

「ちよつと、人のやることにケチつけるつもり!？」

「二人共、流石にかすみさんに失礼だよ」

かすみはぶんぶんと怒りの表情を見せている。

それと一緒にしずくさんも俺達の態度に怒りを募らせる。

「うっ、すまん……」

「俺も言い過ぎた……ごめん」

「ふん！」

しずくさんからも説教されてしまったのでやり過ぎてしまったと俺と慎の間に後悔が生まれていた。

かすみは俺達からの謝罪に対してぶいっとそっぽを向いてしまった。

「輝弥さん、慎さん。かすみさんのやり方も間違いではありません。小馬鹿にするような真似は駄目ですよ?」

「……猛省します」

「せつ菜ちゃん、それくらいにしてあげよ? 輝弥くん達も悪意を持ってやったわけじゃないからさ。かすみちゃんも、ね?」

せつ菜さんからもお叱りを受けしよげていると侑さんが助け舟を出してくれる。

そして、かすみの方にも寄っていき頭を撫でながら宥めていく。

「……まあ侑先輩に免じて今回は許します」

侑さんのお陰でかすみの機嫌は少し良くなったようだ。

仲良くなつていったとしても、冗談の程度を見極めないといけないなど心に決めた瞬間だった。

心を改め、かすみの自己紹介動画をみんなで視聴する。

『やつほおく? みんなのスクールアイドルう、かすみんこと中須かすみでえくす♪ かすみん、スクールアイドル同好会の部長になったんだけどおくそんな大役が務まるか、とつても不安く! でもお、応援してくれるみんなの為にく日本一可愛いスクールアイドルを目指してえく頑張るよ☆』

かすみのプロモーションビデオは見てくれる人たちへ自分の可愛いを沢山見せようと手の込んだものに仕上がっていた。

彼女の得意とするポイントを十二分に活用しており、見ている側としては応援したくなる気持ちになる。

ただ、一つだけツツコミ所があった点は聞き逃さなかった。

「凄く良いんだけど……スクールアイドル同好会の部長って……どういうこと?」

「かすみちゃん……いつの間にスクールアイドル同好会の部長になったのく……?」

彼方さんもジト目でかすみに釈明を求める。

「あく……ええくつと……これは出来心と言いますかあ……」

「かすみちゃん、同好会が活動休止になった時にこの動画を撮影しててね、自分が何としても守るんだって言って孤軍奮闘してたんだよ」

かすみがどう弁明しようか目線を右往左往させていると侑さんが補足を入れてくる。

そういえば俺達は同好会の復活を目論んで活動していた時に彼女は彼女で動いていたと言っていたことを思い出した。

「あつ、そういえばその時に歩夢も自己紹介動画を撮ってたんだよね！」

「み、みんなに見られるのは恥ずかしいよぉ」

侑さんが思い出したように歩夢さんの動画を探している。

歩夢さんはみんなに見られることに恥ずかしくなってしまう、手を身体の前でもじもじしている。

そして、少し時間が経過した後、とある音声が侑さんのスマホから大音量で流れてきた。

『あつ……歩夢だぴよん……』

「えっ?」

「あつ」

「えっ!?!」

大音量で流れてくる歩夢さんの声に俺、侑さん、歩夢さんがそれぞれ違った反応を見せる。

「歩夢だぴよん……あゆぴよん……」

「慎くん、それ以上は駄目だよ?」

「何でもないです、ぼむ先輩」

慎が先ほどの音声を反芻し、以前に話に出していた歩夢さんのあだ名を記憶の底から呼び起こす。

だが、歩夢さんの手で慎の肩に置かれたことでその圧力から彼の記憶より抹消されてしまう。

「侑さん、その動画って投稿されましたか? 私が見たものとは違うものですが……」

「せつ菜ちゃん、お願い、これ以上は深堀りしないで……!」

「かすみちゃんと一緒に、歩夢の自己紹介動画を上げるために練習してたんだよね」

「侑ちゃんもそれ以上言わないでえ……!」

せつ菜さんは過去に漁った動画と違うものという事から内容に対して非常に興味を示しており、侑さんもそれに乗っかる。

だが、歩夢さんとしては黒歴史を皆にばら撒かれてしまっているの益々顔が赤くなっているのが否が応でも伝わってきた。

「それでも歩夢先輩はこの件があつたおかげで歩夢先輩らしい良い動画が出来上がったと思いますよ?」

「うう……それは結果的にだよお……」

かすみのフオローも虚しく歩夢さんの心には届いていないようだ。

「そういえば、歩夢さんの動画つて上がってるんですか?」

「私も見たことがなかったんだけど、調べてみたらあつたよ」

横で調べていたしずくさんが俺に答えてくれる形でスマホの画面を見せてくれた。

『虹ヶ咲学園の普通科二年、上原歩夢です。自分の好きな事、やりたい事を夢見てスクールアイドル同好会に入ることになりました! 私はスクールアイドルに関しての知識は全くないですが、それでも諦めずに一步一步を歩いていく姿を応援してくれたら嬉しいですよ! よろしくね』

その動画に映っている歩夢さんは恥ずかしさを引きずっているような様子はなく、堂々としていた。

かすみというスクールアイドルの権化が横に居ながらも、それに負けじと自分の持ち味を歩夢さんなりに考えて表現しているのだ。

動画の最後に手で作っているうさ耳ポーズは歩夢さんなりに考えた可愛いなのだろう。

かすみとは違った可愛いを追求していて、凄く愛おしさがあつた。歩夢さんの動画を見て俺としずくさんは硬直していた。

「……凄く良いと思います」

「私もそう思います。歩夢さんらしい可愛さがあつて、凄く良いです!」

「ほ、本当?」

「私も歩夢さんの動画、好き」

「このぼむ先輩、凄くかっこいいです。俺も是非参考にしたいです」

歩夢さんは不安気に聞き返すが、璃奈と慎が肯定して歩夢さんを励ます。

そんなみんなの反応を見てかすみは少しご立腹だった。

「なんか一年生組、かすみんの時と反応が違い過ぎない?」

「まあまあ、かすみちゃん。みんな歩夢ちゃんの新しい一面を見れて嬉しいんだよ」

「そうそう、かすみが可愛いことは百も承知なんだからさ!」

かすみがぶくつと頬を膨らませているとエマさんはかすみの頭を撫でながら、愛さんは頬を突きながらかすみの可愛い所を褒めていく。

「えっ? それなら仕方ないですねえ♪ 歩夢先輩はかすみんほどではないですが可愛いことに間違いないですので、それを掘り起こしたかすみんは讃えられるべきです!」

「ダイヤの原石を掘り当てたからって調子に乗るな」

「いてっ。何すんのさ慎のすけ!!」

エマさん達の褒め言葉にたじたじになったかすみは身体をくねくねとうねりながら、歩夢さんの才能を広めたことを誇らしく思っている。

だが、すぐに凶に乗っていると見られてしまったためか慎から手刀で制止される。

「はいはい、かすみさんも慎くんもそこまで。そうなると自己紹介動画を作っているのはかすみさんと歩夢さんだけでしょうか?」

「そうですね。私も自己紹介の動画は上げていなかったもので、是非ともこれに倣って皆さんの分も作りたいと思います」

しずくさんは二人を宥め、今日の活動内容について話を戻した。

せつ菜さんもそういった類の動画を作っていなかったようで、自身の原点回帰も込めて今回の活動を提案してくれたようだ。

「なるほど、良いんじゃないかな? 愛ちゃんのパフォーマンスを見て、みんなのやりたい事も全力で応援したいから是非みんなの想いも聞かせてほしいな!」

侑さんは先日の愛さんのライブから熱冷めやらぬと言った様子で

想いが昂っていた。

「確かに今後の曲作りでも活用できること間違いなしだと思うのでやってみましょう！」

「はい！ それでは皆さんの動画を作るために皆さんで沢山のアイデアを出し合っていきましよう！」

侑さんの言葉に感化された俺は賛同の意を示し、俺達の言葉を聞いたせつ菜さんは安堵の表情を浮かべる。

俺達三人の意見に反対する人はおらず、こうしてスクールアイドル同好会の新しい活動が幕を開けるのだった。

可能性の芽

「そういういえば昨日の愛さんのライブを見て、思ったんですけど」

同好会メンバー各個人の自己紹介動画を制作することで方向性を決めた後、俺はとある疑問を口にした。

「愛さんとせつ菜さんは、この同好会の中でソロライブを実施してる数少ない方達ですから、お先にミュージックビデオを撮っても良いんじゃないんですか？」

「えっ、愛さん達の？」

「はい、折角お二人の晴れ舞台をお披露目できたんです。その場に居合わせた人だけじゃなくてもっとたくさんの人にも見てもらいたいです」

二人のライブは見ている人たちの心を満たしていた。

それは直で見てた人だけじゃなく、動画越しで見ている人にも届けられるものではないかと俺は考えていた。

勿論、これを動画化することは並大抵の事じゃないことは分かっている。

だが、この人達の魅力を現地で参戦していた人しか堪能できない、全国にいるスクールアイドル好きの人たちがせつ菜さん達の勇姿を目に焼き付けられないのは宝の持ち腐れだ。

だからこそ動画として残り、サイトにアップすることで現地に来られない人達でもせつ菜さん達の事を覚えてくれるのではないか。

同好会の知名度を上げられるのではないかと考えたのだ。

俺の案に侑さんは食い気味に乗っかってくれた。

「ああー！ 確かに、それ凄く良さそう！」

「そ、それでは私たちが抜け駆けをしているようですが……？」

「でも、全員分が揃うまで動画サイトを利用しないのも勿体なくないですか？」

せつ菜さんはそれでも否定的な反応を示すが、慎もこちらの意見に賛同してくれる。

「そうだね。せつ菜ちゃんと愛ちゃんはもうスクールアイドルとし

てのスタートを切ってるわけだから抜け駆けも何もないと思うけどなあ〜」

「はい、私たちもお二人に追いつけるように頑張るので、先に進まれるのは良いと思います」

彼方さんとしずくさんもこちらに乗っかっているので、せつ菜さんと愛さんが少数派となった。

「まあー、みんながそういつてくれるならいいんだけど……」

「二人には負けてられないね♪」

エマさんも決意を固めながら笑顔を振りまく。

そんな中、璃奈がとある提案を口にした。

「せつ菜さんと愛さんの動画撮影と編集は私に任せてほしい」

「えっ、璃奈が？」

「うん。私、パソコンの扱いに関しては自信がある。だから、動画編集は任せてほしい」

璃奈の発言に凄く頼もしさを感じた。

ここに居るメンバーで動画編集に長けている人は——俺も含めてだが——如何せん欠けていると思うのが俺の憶測だ。

その中で動画サイトに上げるための技術を兼ね備えている璃奈の特技は凄くありがたいし、活動の中で力になることは間違いない。

「りなりーにパソコンを扱わせたら右に出る者はいないから絶対頼りになるよー!」

「なら、動画制作に関しては璃奈ちゃんを主動で動く形で良いかな？」

「うん、任された」

愛さんと侑さんから太鼓判を押され、璃奈の専属業務が決定した。

「なら、早速二つのグループに分かれて各々の動画制作と行きましようか？」

俺の進言に反対するものはおらず、そこからプロモーションビデオ制作組とミュージックビデオ撮影組で分かれる事になった。

「あつ、輝弥くん。少し良いかな？」

グループ分けを行った後、動画を作るために場所を変える事にしたのだが、廊下を歩いている途中で侑さんに呼び止められた。

「どうかしましたか？ 侑さん」

「実は折り入って相談があつてね……」

侑さんからの相談……新曲の事についてだろうか。

そんなことを考えていたが、帰ってきた回答はそれとは少しニュアンスが異なるものだった。

「歩夢とかすみちゃんの曲についてなんだけど……二人の楽曲を完成させてほしいんだ！」

俺は侑さんの言葉を聞き、理解が追い付かなかった。

歩夢さんは幼馴染として密かに曲の案を考えていたことも分からなくないが、どうしてかすみも出てくるのだろうか。

「……えっ、どういうことですか？」

俺は素直な感想を侑さんにぶつける。

曲を完成させるも何も俺はまず二人の曲を一切齧っていないかったが。

「うん、いきなりこんなことを言つて戸惑うのは当然だと思う。だからちゃんと経緯を説明するね」

侑さんはそう言うと、事の発端を説明してくれた。

「実は、二人と一緒にスクールアイドル同好会の再始動に向けて動いた時、二人がそれぞれの想いを込めた歌を私に歌ってくれたんだよ」

それは二人が自分たちで作詞をして、侑さんに聞かせたという事だろうか。

歩夢さん達の意外な一面が垣間見えた瞬間だった。

「でも、その時はアカペラで歌ってくれただけで、それ以降はその曲らについては一切進展がないんだよね」

侑さんの言わんとしていることが分かってきた。

「なるほど、つまり侑さんとしてはお二人の可能性の芽を摘みたくないということですね」

「おっ、流石かーくん！ 相変わらず察しが良いね！」

「それほどでも、です。にしても侑さんもかーくんと呼ぶんですね」
先ほどまで輝弥くんと呼んでいたのに急にかーくん呼びに変わっていたので、少し気になってしまった。

「エマさんが呼んでていいなあって思ってた私も呼んでみたくなったんだけど、あまり嬉しくなかった?」

「いえ、そんな事ないです。むしろ僕としてはそう呼ばれることがなかったもので……少し……むず痒いと言いますか……」

「あつはは、輝弥くんが照れちゃうなんて珍しいね。なら今後はそう呼んでいくしかないかな、かーくん?」

「……そんな悪戯っ子のように見ないで下さい」

侑さんの揶揄うような目つきに少し口元をムツとする。

だが、その行動とは裏腹に身体が痒みで落ち着かないので噤んでいた口元も緩くなってしまふ。

「あはは、やっぱりかーくんってかわいいな」

「も、もう……それはもういいでしょう……! 話を戻しましょう」

「ぶつ、もう……もういいでしょう……もうだけに……かーくん本当にずるいって……」

「……はあっ……」

俺の意図せぬダジャレでツボに入ってしまった話が進まなくなってしまった。

流星に俺も埒が明かないと思い、ついたため息を吐いてしまふ。

「つて、かーくんごめん! 話を逸らすつもりは毛頭なかったの!」

そんな俺を見て、侑さんはあたふたしながら弁明をし気持ちを切り替えてくれた。

「話を戻すね? さつき、かーくんが言ってくれた通りなんだけど、歩夢たちの気持ちが進められた歌なのに、それを使わずにいるのは私は凄く勿体ないと思うんだ」

侑さんはそう言うと、懇願するように俺に頭を下げた。

「だからお願い! 二人の曲を完成させてあげてほしい!」

侑さんは無理を承知でお願いしているようだが、俺はむしろその内容に興味を示していた。

歩夢さんとかすみがそれほどスクールアイドルに惹かれて、侑さんに想いの丈をぶつけたのだ。

三人の中で留めるだけにしてしまうのは非常に惜しい。

確かに曲をどのような改良するか、そういった方向性は全くと言っていいほど見えていない。

だが、これも自分が前に進むための大きな挑戦なのだ。

それに彼女たちの事をまた一つ知る事が出来るいい機会だというのに、これを利用しないわけにはいかない。

こうして俺の腹は——侑さんが頭を下げる前から分かっていたことだが——決まった。

「分かりました。是非とも僕にやらせて下さい」

「本当!? でも、かーくん、これからプロモーションビデオの制作にも取り掛かるのに……」

侑さんは俺の返事に表情が明るくなるが、もう一つの懸念点を心配し声色が暗くなってしまう。

そう、俺は今回プロモーションビデオ制作のグループに入っていたのだ。

動画撮影となると既に曲は完成されているので俺が居ても邪魔になると思い、そこは動画編集のプロこと璃奈と観察眼のプロこと侑さんに任せようと考えていた。

「歩夢さんとかすみの事を知るいい機会です。それに二人が紡いだ想いを僕も聞きたいです」

俺はたった二言。されど二言だ。

これだけで今回の取り組みにどれだけ興味を示しているか明確に伝わったと思った。

侑さんはそんな俺の意思を汲み取ったのかすぐに安堵の表情になった。

「分かった。なら、かーくんが行き詰まったりしないように私も出来る限り力を貸すね」

「そうしてもらえると助かります。流石に、これにばかり注力していたら慎あたりにとっつかれそうなので……」

「あはは、慎くんならあり得るかもね」

冗談交じりでそんな会話をし、二人の間に柔らかな空気が流れる。侑さんもずっと抱えていた蟠りを無くすことができたから気分は良さそうだ。

「では、歩夢さん達には後でお声掛けします。今は、お互いにやれることをしっかりやっていきましょう」

「うん！・じゃあ、また後でね！」

長話に区切りをつけ、それぞれの持ち場へ向かう。

同好会に入ってから立て続けにイベントが発生しているが、それを苦と思わず次はどんな事が待っているんだと楽しみにしている自分がいた。

俺は、これから先の事に胸を弾ませながらプロモーションビデオ制作組と合流するのだった。

PV撮影

「もう、輝弥くん、どこに行ってたの?」

「お前、目を離すとすぐにどこか行くよな? 方向音痴か?」

「もしそうなら、慎の携帯は今も鳴り響いてるとこだよ」

侑さんと秘密の約束を交わしたのち、俺はプロモーションビデオ制作組に合流した。

こちらの班は慎、しずくさん、エマさん、彼方さんの五人だ。

俺の遅刻にしずくさん、慎から軽く小言を言われるが冗談交じりの返事で受け流す。

俺達は現在学校内のとある一角に来ていた。

辺りには芝生が広がっており、どこからともなく吹かれる風により草々が地面を泳いでいる。

こんな所に居たら彼方さんあたりは自慢の枕を持参し眠ってしまいそうなものだ。

「すやあ……」

「……って本当に寝てる!?!」

流石、眠り姫は伊達ではなかった。

「確かに今日は暖かいし、風も気持ちいいから眠くなっちゃうのは仕方ないね♪」

「ですが、これからプロモーションビデオを作るんですよね!? 彼方さん、起きて下さい!」

エマさんの楽観的な発言にしずくさんは呆れた表情を見せつつ、彼方さんを起こそうと揺り起こす。

「流石、気持ちよさのあまりすぐに寝ちやうのは彼方さんの得意技だな」

「慎くんも呑気なことを言っていないで彼方さんを起こすの手伝ってよー!」

「いや……変に触ろうとして訴えられるのも嫌だし……」

「慎くん……そんなセクハラ紛いな事をしようとしたの?」

「だからそうやって疑われるのがやだって言ってるんだよ……!」

慎の発言に軽く侮蔑の眼差しを向けているしずくさん。
そんなしずくさんを見て慎もため息を吐きながら弁明する。
慎の気持ちも非常に分かる。

起こせと言われれば対応するけれども変に茶化されるのも癪なのだ。

案の定、しずくさんも冗談であるはずだが慎への弄りが入っているので少し慎には同情してしまう。

「意地悪はそこまでするにして、そろそろ本題に入りましょう。ほら彼方さん、起きて下さい」

「むにやあああ〜。枕を取らないでえ〜……」

話が進展を見せなかったので、無理やり彼方さんの元から枕をもぎ取る。

彼方さんは寝転びながら手をパタパタさせ、枕の返還を求めた。

わがまま少女のような素振りが凄く可愛らしかった。

「ふふつ、彼方ちゃん。私の膝枕で寝る？」

「わ〜い、エマちゃんのお膝は世界で一番の気持ち良さだから寝る〜
♪」

子供っぽくなった彼方さんを見て母性を感じたのかエマさんが芝生の上に座り、自分の膝をポンポンと叩いた。

彼方さんもそれを見て、にんまりと笑ってみせエマさんのお膝元へ頭を預けるのだった。

「え、エマさん……!! これでは收拾がつきませんよ!」

「まあまあ、彼方ちゃんはいつも遅くまで頑張ってるんだからこういう時くらいは寝かせてあげよう?」

「むう……」

エマさんへの説得も虚しく丸め込められてしまう。

かすみ辺りがここまでごねたら怒っていただろうが、彼方さんとエマさん相手では怒るに怒れなかった。

「輝弥、なら先に俺達で構想を練って見たらどうだ?」

「そうだね、彼方さんには後で一番のクオリティを要求することにして今は私たちでやってみようよ」

どうしようか考えていると慎から代替案が降ってきた。
しずくさんも慎の意見に賛同する。

しれっと彼方さんへのハードルが上がっていることはここだけの話。

「……そうだね。動画を撮影するにしても、どのように作るかは何も決まってるないし、一回、慎としずくさんで撮影してみよう？」

「じゃあ、私からやろうか？ 慎くんは初めてだから、まずは私が先にやってどんな感じに進めるのか、イメージを掴んでみたらいいと思うよ」

「そうだなあ……先にしずくにやらせるのは気が引けるけど何も知らん身だ。教えてくれ」

「よし、ならしずくさんから早速始めていこうか」

こうして俺達の初めての動画撮影が始まった。

とは言うものの大それた機材を使用するわけでもなく芝生の真ん中に立っているしずくさんをスマホのカメラに収めるのみだった。

スマホ越しにしずくさんを見つめるが、彼女はスマホを向けられても恥ずかしがる様子を見せない。

むしろ、彼女の顔立ちの良さにスマホという壁があるにも関わらず、こちらが恥ずかしくなってくるほどだ。

「じ、じゃあ……行くよっ」

「なんで輝弥が緊張してるんだよ」

思わず声が震えており、慎に喝を入れられる。

「わ、悪かったな！ じゃあ、しずくさん。準備は良いかな？」

「うん、いいよ♪」

しずくさんから気のいい返事を聞いた所で、指でカウントを始める。

三、二、一と刻んだのち、周囲にスマホの録音開始のサウンドが鳴り響いた。

「皆さん、初めまして。虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会に所属しております、国際交流学科一年、桜坂しずくです。私は将来、舞台女優になることを目指してこの学校に入学しました」

手を身体の前で組んだ状態から始まったしずくさんの自己紹介。

挨拶の前に一礼から入る所は彼女の真面目さを物語っている。

「元々は、演劇部に入って自分の力を磨くことを目標としてきましたが、舞台とは違ったステージを魅せるスクールアイドルに心を惹かれました。そして、この世界に入ったことで舞台上で見る私とは一味違う桜坂しずくを見せることが出来たら嬉しいです」

しずくさんの想いと共にカメラの画角から外れない程度の振りを付けながら、カメラマンである俺にパフォーマンスを見せつけてくる。

「まだまだスクールアイドルに関しては新参者ですが、私が作り出す物語を是非堪能して行って下さい！ よろしくお願いします♪」

自分の胸に手を当てたのち、右手をこちらへ差し出すように静かに動かす。

その後の締めめの挨拶と共に笑顔が向けられ、俺はシャッターオフするのだった。

「……………」

「ど、どうだったかな…………？」

撮影が終了し、指で顔を掻くように恥ずかしがるしずくさんは新鮮そのものだ。

やはり彼女でもこういう撮影は緊張するものようだ。

「す、すごくよかった」

「ほ、本当？」

俺は目の前の光景に圧倒され、そのようなありふれた言葉しか出てこなかったが、そんな俺の言葉にしずくさんは満更でもなく嬉しそうだった。

「うん、しずくさんがどんな人なのか、どういったスクールアイドルを目指してるのか……。それらが凄く表現されたと思う」

「そっか……………ならよかった」

「あっ、あと……………凄くきれいで……………つい見惚れてた……………」

「そ、そう……………」

何とか平静を装った感想を送っていたが、我慢できずにしずくさん

の容姿を称賛する感想も口に出してしまふ。

主語は出してはいないものの流石にしずくさんも感じており、真つすぐに純粹な言葉にしずくさんもただただ赤面するのみだった。

お互いを直視出来ずそっぽを向いている二人を、慎はエマさんの横で静観していた。

「……エマさん、コーヒーって無いですかね？」

「部室に戻れば紅茶はあるよ？」

「なら今すぐ帰りましょう。砂糖は無しでお願いします」

「は〜い、ほらっ、彼方ちゃんも戻るよ〜？」

「ふあ〜い、彼方ちゃんも今日は渋い味が飲みたくなってきちゃった〜……」

「おいこらっ、お三方」

慎たちが帰る雰囲気醸し出しているが、絶対に終わらせない。

まだしずくさんしかやってないのだから、とある二人には確実にやらせる。

「おお、イチヤイチヤは済んだか？」

「よし、次は慎だ。しずくさん、捕まえるよ」

「うん、ここまで茶化すという事は自分もされる覚悟があるって事だもんね」

「へーんだ、ここまで捕まえてみるよ！」

「待てええ、慎——！！！」

煽りながら逃げる慎をひっ捕らえようと鬼ごっこが始まった。

校庭の中で始まる男同士の戦いを他所に女性陣は穏やかな時間を過ごしていた。

「ふわあ〜、あの二人は元気だねえ〜」

「ふふっ、そうだね。か〜くん達を見てるとスイスにいる弟たちを思い出すよ」

「彼方ちゃんもあんな弟たちがいたらきつと楽しいだろうなあ〜」

エマさんと彼方さんの母性本能全開の会話が展開されている中、しずくさんは俺達との鬼ごっこに参加せず、エマさん達の会話に参加する。

「あつ、エマさん、侑さんたちが動画撮影から戻ってこられるという事でお茶が欲しいって言ってましたよ？」

「ほんとう？　じゃあ、急いで部室に戻らなくちゃ！　彼方ちゃん達も行く？」

「おっけ……」

「エマさん、彼方さんはもう少し寝ていたいそうなので、私が膝枕しますから先に戻っててください」

「えっ、しずくちゃん？」

エマさんはしずくさんの報せを聞き、部室へ帰ろうと催促したがしずくさんはそれを拒否した。

一緒に戻ろうと身体を起き上がらせた彼方さんはしずくさんから出た発言に目をぱちくりとさせていた。

「分かったよ。じゃあしずくちゃん、彼方ちゃんをお願いね？」

そんな彼方さんを他所にエマさんはしずくさんの発言を聞いて納得したように頷き、そそくさと部室へ戻るのだった。

エマさんの姿が見えなくなった所でしずくさんは笑顔になる。

「さあ、彼方さん。私のお膝でもう少し眠りませんか？」

「しずくちゃん、どういう風の吹き回しだい？　まあ、しずくちゃんのお膝も気持ちよさそうだから是非ともお邪魔したいねえ」

しずくさんは正座を組み、自分の膝を軽くたたいて彼方さんに寝るよう促す。

それを見て、彼方さんは不思議に思いながらもすぐに思考を切り替え、喜びながら頭を預けた。

「うくん♪　エマちゃんのお膝も気持ちよかったけど、しずくちゃんのお膝も中々なものですねあ〜♪」

「……では、撮影を始めましょうか？」

「ん？　それはどういうことかな？」

しずくさんの声色が優し気ながらも少し不安を煽るような口調になり、彼方さんも疑問が浮上した。

「まだプロモーションビデオを撮っていない人がここに居るじゃないですか。だから、それを今から始めるんです」

「えっ、この態勢で？」

「はい♪」

そう言うしずくさんはこれほどまでにないほどの笑顔を放っていた。

「さっ、輝弥くんも準備万端ですし、始めましょう」

「はい、オツケーですよー」

「あれっ？ かーくん、慎くんを追いかけてなかった？」

「あいつは後でしごきます」

「諦めたんだね……」

慎は俺よりも運動神経が良いことは百も承知。

だから途中まで追いかけて行って、校舎の陰で慎の姿が見えなくなったならそこで踵を返して彼方さんの元へと戻っていた。

「はい、という事で彼方さんは先ほどのしずくさん以上のクオリティを見せて下さいね？」

「ち、ちよつと待って、まだ心の準備が……」

「はい、三、二、一……」

スマホを向けて、いきなり動画撮影に入ろうとする俺を見て、彼方さんは慌てた様子を見せるが俺は止めるつもりなどさらさらなかった。

カウントが終わり、録音開始のサウンドが鳴った瞬間、彼方さんは硬直していた。

「え、えくと……や、やつほー？ 虹ヶ咲学園、スクールアイドル同好会の近江彼方で〜す？ 今日はいつもと違う彼方ちゃんの姿をお見せするよ〜？」

「いつも何も、別に今までそんな姿を見せたことないですよ？ 動画は撮ったことないんですから」

必死にひねり出した彼方さんのアドリブもしずくさんの冷たい指摘で一蹴される。

「し、しずくちゃん、動画撮影中なのに声入って大丈夫なの？」

「彼方さん、撮影中ですよ？」

「か、かーくん!？」

しずくさんの声が入っても、璃奈の力を借りてしずくさんの声だけを編集で消せばいい。

そんなやりもしないことを考えながら、この状況を楽しんでいる自分がいた。

こんな風に焦る彼方さんを見るのも新鮮だ。

「ささっ、彼方さん？ PV用の動画は続いていきますよ？」

「終わるまでは帰しませんからね？」

「か、勘弁してええっ……！」

悪魔のような笑みを浮かべるしずくさんと俺のスパルタ動画撮影が始まり、彼方さんが涙を浮かべながら普段ならば出さない声量で白旗を上げた。

そんな三人を陰で覗いている人物がいた。

「……俺もあなるのか……」

俺が追ってきてないことを不審に思った慎は、校舎の壁に身を顰めながら俺達の様子を観察していた。

彼方さんの地獄絵図を目の当りにし、明日は我が身と悟った慎は寒気からかしばらくその場から動けなかったとか。

手掛かり

「ううっ……………もうお嫁にいけない……………」

「ううっ……………俺もお婿にいけない……………」

俺としくさんによるスパルタ教育が終わり、彼方さんと慎は芝生で寝るように転がっていた。

いや倒れていると言った方が正しい。

「ふう。まあ、これくらい出来れば上々じゃないかな?」

「まったく、少しは反省してくださいね?」

二人用の動画撮影が終わり、俺達は腕を組みながら二人を見下ろしていた。

そもそもどうして慎も一緒に倒れているのかというと、彼方さんの特別練習を行っていた時に彼方さんが俺達のあまりの鬼教官っぷりに耐えられず逃げ出してしまったのだ。

そして、その逃げた先が運悪く慎が隠れていた先だった。

慎がバレないようにと息を殺しながら立ち去ろうとしたときに後ろから彼方さんに追突された。

すぐに動き出そうにも慎の身体の上に乗つかる形で居た彼方さんを無理矢理引き剥がすなんてことは彼には出来なかったので、そのまま身動きが取れないまま俺達に捕まったというわけだ。

そんなわけで二人仲良くしごかれたためにひどく疲れ切っていた。

「まさか慎も練習したさから覗き見をしたなんてね」

「そのまま逃げていれば少しは生き永らえることができたのにね」

「ぐうの音も出ねえけど……………どっちにしろ逃がす気ゼロじゃねえか……………」

「もちろん」

意外な形で慎も捕獲できたので、ついしくさんと悪役が言いそうなセリフを並べてしまった。

若干しくさんに演劇スイッチが入っているように見えるのは気

のせいだろうか。

「で、でも……これで彼方ちゃん達の動画撮影は終了なんだよね……？」

彼方さんはこの絶望から救われると思って笑顔になるが俺はその笑顔を一蹴した。

「え？　しないでですよ？」

「……は？」

思わず慎もアイドルが出してはいけないトーンの返事をしていた。

彼方さんも状況が理解できずに呆けていた。

「流石に僕たちの怒声が入った状態のものを投稿したら、ハラスメントでサイト側から訴えられちゃいますしこの学校の名前にも傷が付きますから」

「お前……鬼畜にも程があるだろ……」

「そうさせたのはどこの誰かな？」

先ほどまでの特訓は俺としくさんの私怨も混じっていたので流石にそれを動画として投稿するのはドが付くほどのアホだ。

「中々練習に参加しようとしないう二人に対して、悪戯心が湧いてしまったのは事実ですね」

「まあ、やり過ぎたなどは後々思っただけだね」

「ひ、ひどいよお……」

彼方さんは涙を浮かべながら訴えかけてくる。

上目遣いでこれをやられるとつい罪悪感に駆られてしまうのは彼方さんの為せる業だろうか。

「でも、この練習のお陰でちよつとは動画撮影に向けての見せ方とかは勉強できたんじゃない？」

「俺らはお前らを敵に回したくないことが勉強になったわ……」

俺のお気楽な考えに慎はただ苦言を呈すのみだった。

「むにやああ……やっぱりエマちゃんのお膝が一番落ち着くう……」

「えへへ、こうして彼方ちゃんを撫でてるとネーヴェちゃんを思い出すよ〜♪」

練習も一区切りにして、俺達は部室へ帰っていた。

彼方さんは部室に戻るとくたびれたようにエマさんの膝の上へ猫のように丸くなっていた。

俺達とは別行動をしていた侑さん達も部室へ戻ってきており、今は休憩中だった。

侑さんは聞き慣れない名前を聞いて興味津々だった。

「エマさん、ネーヴェちゃんって？」

「スイスにいる子ヤギの名前だよ」

「子ヤギ？」

「うん♪ 凄くふさふさしてて気持ちいいんだ〜」

今まで聞いたことがなかったが、どうやらエマさんはスイス出身の人のようなのだ。

母国でスクールアイドルの動画を見て、普通の高校生がひたむきに努力する姿に心を惹かれたらしい。

にしても、スクールアイドルに憧れて渡航してくるその挑戦心は並大抵のものではないと思う。

「スイスの山々でヤギたちに囲まれながら歌を歌って、一緒に遊んで……。楽しかったなあ〜」

母国に対して郷愁を感じるエマさんだが、それでも楽しかった思い出が多かったのだろうか顔が綻んでいる。

「エマさん、ずっと日本に居てホームシックとかないんですか？」

「最初はやっぱりあったけど、でも今はそんな事ないよ」

歩夢さんからの質問にエマさんは首を横に振りながら答える。

そして、俺達全員を見渡す。

「かーくんや侑ちゃん、みんなと一緒にいるとスイスの弟や妹たちみたいに見えて凄く胸が温かくなってくるんだ♪」

「なんだか……。恥ずかしいけど嬉しい」

「エマさんがそう言って下さるなら嬉しい事ですね」

璃奈と俺は少し胸が熱くなるのを感じつつ、エマさんとの距離感が

近づいていると実感できて嬉しさが込み上げてくる。

「でも時折、家族から私が日本でちゃんとやれてるか不安でお手紙が届くんだけどね」

エマさんがちよつと呆れるような表情をしながら微笑んでいると、部室の扉が開きせつ菜さんとかすみが入ってきた。

「皆さん、お揃いですね」

「お疲れ様です。せつ菜さん」

「輝弥さん達もお疲れ様です。して、プロモーシヨンビデオの感触はどうでしたか？」

「うーん、しずくさんはいいものが出来たと思うんですけど、彼方さんと慎はまだ完成してないですね」

「……彼方さん、あいつは何を平然と言えるんですかね」

「うむつ、顎に手を当てながら言える所業ではないよね」

せつ菜さんと各々の近況報告をしている横で彼方さんと慎が内輪話を始めた。

俺は気が散りそうだったのでそちらの話を耳に入れないようにせつ菜さんとの話に集中する。

「そうですね……お二人共、まだ緊張が抜けないといった感じですか？」

「いえ、そういうわけではないんです。むしろ二人は撮影時に全然緊張していなかったのびっくりしてます。ただ、動画の構成が普通過ぎるというか……二人の個性を殺してる構成になってしまった感じでしたので……」

「……彼方ちゃん達は夢を見てるのかなあ……？」

「よくもまあ淡々とあんな綺麗な言葉を並べられますね」

「その二人、うるさいですよ」

数刻前に制作した動画を思い返しながら素直な感想を呟いたが、どうやら二人にはスパルタの風景が脳裏に焼き付いてしまっているようだ。

「ふっふっふー、ならここは今までの人たちの勇姿を見て勉強することにしませうー」

そんな慎たちを他所にかすみは胸を張りながらパソコンの方へと席を移し、とある動画を再生するのだった。

『虹ヶ咲学園 普通科二年の上原歩夢です』

「おお、歩夢の動画だねー！」

「ど、どうしてこれを今ここで!?!」

確かに、グループで分かれる前にこの動画は視聴していたが、なぜ今になってもう一度見る事にしたのか分かっていなかった。

「実は最近、かすみん達の自己紹介動画の評判が上がってるんですよ!」

そう言われ、再生回数を確認すると二千回を超えていた。

一般的な動画の視聴回数は百回ほどが基本となり、三百回を超えればそれなりに見ている人がいるものだ。

それが歩夢さんの動画だと二千回再生を超えているのだ。

スクールアイドル好きの人たちからかなり認知してもらえているとプラスに受け止めていいだろう。

「そういえばかすみちゃんの動画はどれくらい再生されているの?」

「それは……もちろん歩夢先輩よりもちよつと上にいる状態でしたね! 皆さん、かすみんの魅力にメロメロなんですよ!」

侑さんの問いに一瞬言葉が詰まったかすみ。

これはかすみのいつもの癖が出ている感じがしたので、密かに自分のスマホでかすみの動画を確認してみた。

「あつ、かすみの動画は再生数、千九百回だった」

「ちよつとかぐ男お!!」

「まあ、かすみにしてはそれなりに人気を得れてるんじゃないのか?」

「慎のすけ! かすみにしては、じゃないしそれなりじゃだめなんだよ! そんな甘い認識だから動画制作も納得のいく出来がしないんじゃないの!?!」

「んだとお、かすかす!! 折角こつちが少しは認めようとしてたのによお!!」

慎が珍しくかすみを褒めていたが言葉のチョイスが気に入らなかつたかすみはそれを一蹴し、つい慎の動画制作の成果に対してケチ

をつけていた。

「かすみちゃん、慎くん。そこまで」

「かすみ、二人は経験の差があるからそんな事で調子に乗らない」

吠えられた慎も噛みつきそうな勢いだったので璃奈が二人を宥める。

俺もかすみの発言が慎をけなしているように聞こえたので、眉間に熱を感じながらつい強めの語気で咎めてしまう。

「ふん！ 別に歩夢先輩の方が上だから悔しい、とかそんな事じゃないしー！」

「皆さんそこまでにしましょう。お互いに闘争心が芽生えているのは良い事ですが、いがみ合うのは違いますよ」

「そうそう、せつ菜ちゃんの言う通りだよ。かすみちゃんも歩夢に負けないくらい可愛いんだからそれぞれの良さがあるんだよ」

一年生組が嫌悪ムードになっているのでせつ菜さんが双方を宥める。

そして、それに呼応するように侑さんもかすみの頭を撫でて、かすみの気持ちを落ち着かせる。

「……やっぱり侑先輩が一番かすみんの事を分かってくれますね」

「かすみさん、慎くんもしっかりと練習してるんだから、それは理解してあげてね」

侑さんにフオーローされ、下がっていたテンションが戻ってきたかすみだが、それに釘をさすようにしずくさんが口を挟んでくる。

「……まあ、ちよつとかかすみんも言い過ぎた……」

「……こつちも……悪い」

かすみはしずくさんの指摘を聞き、自分の発言を反省する。

慎の方も普段は言われることがなかったため、一瞬驚きはしたものの彼女の気持ちを汲み取っていなかったとして自分の発言を謝罪する。

侑さんは二人の仲直りし合う姿を見て満足したようで、うんうんと頷いていた。

「それじゃあ気持ちを入れ替えてさっきの慎くん達の動画撮影のコツ

も聞きながらみんなプロモーション動画制作を進めていかない?」「あれっ、ミュージックビデオ撮影はどうしたんですか?」

各々のグループに分かれての活動と行くはずが、唐突に路線変更してしまったので俺は思わず聞き返した。

「ある程度、ミュージックビデオのイメージは出来てたし動画撮影も始めていこうかって話してたんだけど、やるなら機材とかも揃えたいってりなりーが提案してくれてねー」

「折角のみんなの勇姿だから、最高の動画にしたい」

「そういう事で、今日は動画の構成を作るまでにして本格的な撮影は後からにしようって事にしたの」

「なるほど、もう動画構成や撮影の準備まで進められてるんですね」

璃奈の頼もしい発言に愛さんと歩夢さんも頭が上がりないようだ。でも、そうなるのも仕方ないだろう。

機材用意から動画編集まで任せられる人が目の前にいるのなら、頼りたくなってしまふものだ。

「はい、それに私たちはプロモーションビデオも持っていないので、折角ならそちらも並行して進めていこうという事になったんです」

「別々について話をしてたけど、結局はいつも通りみんなと一緒に考えていくってことで頑張ろう!」

せつ菜さん達の助けもあるのは非常にありがたかった。

正直、俺自身も動画制作などやったことなかったし、中身の精査など何が正解かもわからなかったため今のままだと路頭に迷うと思っていた。

「そうしていただけるのは非常に助かります。是非皆さんのお力も貸してください!」

最初は頓挫してしまうかと思われた動画制作だが、一から作り直していく形でみんな話し合う事とした。

個性を見つける

俺達は大机とホワイトボードを用意し、動画制作に向けた各メンバーの特色を洗い出すところから始めていた。

ホワイトボードには「みんなの個性とは!!」と大々的に書かれていた。

ちなみにタイトルの考案者はかすみである。

ボードに書き切ったかすみは鼻高々になりながらミーティングの音頭を取るのだった。

「さて、まずは誰からでもいいので、皆さんこの人はこんなイメージだなんて思う事をどしどし上げていって下さい！ まずはかすみんの事からでもいいですよ?」

「じゃあ、俺から。まず第一印象から感じた所もあるけど、愛さんは元気がいっぱいってというのが強いな」

「ちよつと、慎のすけ!! そこはかすみんからじゃないの!？」

「好きに言えって言ったのはお前じゃねえか!!」

かすみの開始の言葉を皮切りに慎が意見を出すけど、自分の事を言ってもらえなかったからか、かすみがぶんぶん怒っていた。

ついにかすみの慎に対しての扱いに——当初から雑ではあったが——理不尽さが増している気がする。

と二人の痴話喧嘩は置いておき慎の言ってた愛さんの印象。

これは先日披露したライブの内容だったり、普段の生活から伺える愛さんの姿を見ればその印象で満場一致なのは当然のことだろう。

「まあまあかすかすもシンシンも落ち着きなって！ 愛さんの事をそう言ってくれるのは嬉しいね！ 愛さん的には、カナちゃんは普段はお眠りさんだけどやる時にはやるしやつきりさんっていうギャップが印象的だな」

「愛せんぱいの意見も良いですけど、かすかすは余計です!」

「おおく愛ちゃんありがとうね〜♪ じゃあ、彼方ちゃんとしてはしずくちゃんかな〜。しずくちゃんって普段は凄く真面目だけど、演劇の事となったら天下一品だからそれを全面に押し出してほしいんだ

よね〜」

愛さんと彼方さんが指名を受け、それぞれメンバーの良い所を洗い出していた。

彼方さんはマイペースに取り組むことのもあって、スイツチの入るタイミングが如何せん掴めないがペースを持っていけば、彼方さんの独壇場になることは間違いない。

そして、彼方さんが出したしずくさんへのイメージ。

これもしずくさんと一緒にいる事が多い俺から見ても同じ印象だ。

彼女と同じように真面目が過ぎる————俺だが、しずくさんのやり方に共感する部分も多い。————はそう自覚してる————俺だが、しずくさんのやり方に共感する部分も多い。

いずれはしずくさんの舞台姿を見てみたいものだ。

「あつ、ありがとうございます、彼方さん。では、私は璃奈さんを。璃奈さんは最初は引っ込み思案な子なのかなって思ってたんだけど、実はそうじゃなくて凄く芯のある子っていう所が私は推していきたいポイントです！」

指名を貰ったしずくさんが彼方さんにお礼を述べたのち、璃奈を指名する。

今まで、彼女は表情を上手く出せないことを引け目に感じて自分から積極的に動く事が出来ないのかと思ってたけど、自分に出来ることを見つけて精力的に取り組んでいる。

ここまで第一印象と現印象が異なるのも珍しいと思う。

しずくさんの意見にうんうんと頷いていると、慎がとある単語に食いついた。

「えっ？俺？？」

「絶対言うと思ったけど全然違う。大体慎のある子ってどういう意味だよ……」

「ぶふっ」

「愛さん、侑さん。笑う場面じゃないですよ？」

折角しずくさんが良いことを言ってくれてたのに慎のせいで全て持っていかれた気がする。

「しずくちゃんにそう言ってもらえてうれしい。私は輝弥くんを推したい」

「えっ、俺?..」

しずくより賛辞を述べられ、表情には出ないが嬉しそうな声色で返事をする璃奈。

そんな中で璃奈が指名したのはスクールアイドルではない俺だった。

「うん。私は愛さんのお陰でこの学校に馴染むことが出来た。だけど、輝弥くん達と出会えたお陰で私は学校生活が楽しく思えた。こんな私にも明るく話しかけてくれる優しさに満ち溢れた輝弥くんの事を私は尊敬しているし、是非沢山の人に知ってもらいたい」

今まで聞いたことがなかった熱量で璃奈が俺を挙げてくれた理由について答えてくれた。

同級生からそんな風に褒められることがなかったので璃奈の言葉を聞いて嬉しくなる半面、恥ずかしくて穴があったら入りたいと赤面していく自分がいた。

「べ、別に俺は……」

「私もそれは分かるよ。輝弥くんは人の悩みとかも自分のことのように親身になって聞いてくれるから、傍にいてくれると凄く安心するんです。最初に挙げたのは璃奈さんですけど、同じくらいに挙げたいと思ったのは輝弥くんだからね?..」

「し、しずくさんまで……俺は当たり前のことをただこなしてるだけだよ?..」

「それが凄いんだよ!.. ね?.. 璃奈さん」

「うん」

俺は自分に言い聞かせるのも含めて自分の考えを周知させようとするが、かえって二人の気迫がこもってしまい俺は萎縮するばかりだった。

「確かにスクールアイドル同好会ではありませんが、陰で支えて下さっている方もいてこそ、私達も安心して前に進めるといふものです」

「まさに、空に掛かった虹の袂って言った所だね!..」

せつ菜さんの横でにひひと笑いながら侑さんは上手いこと言ったように見せているが俺には一つ腑に落ちない点があった。

「……せつ菜さんの言葉は嬉しいですが、侑さん。それは貴女にも言える事では？」

「へっ?」

そう、俺は言葉の意味を理解できなかったのではなく、同じことを侑さんにも言えるという事だ。

「空に掛かる虹っていうのは二つの根元から伸びてきますよね? もしその片側を僕が担うというなら、もう反対側を支えるのは侑さんですよ? 僕と同じように皆さんの事を陰で支えていくんですから」

「それ、凄く素敵かも!」

「確かにその案に異存はねえな。実際、侑さんが傍で応援してくれると力がいつにも増して湧いてくるというか、近くに居てくれると安心するんだよな」

侑さんが表現した言葉に乗っかる形で俺が補足を入れると歩夢さんはうんうんと頷きながら賛同してくれた。

慎も異論はなく、彼も侑さんの存在を頼もしく思っているようだ。

「ええ、でも私はかーくんと違って曲作りも何もしてないよ?」

「確かに技術の面ではかーくんに助けられてるけど、いつも一緒に走ったり侑ちゃんなりに練習に参加してくれてる事も私たちは助けられてるんだよ?」

「うむつ、エマちゃんの言う通り、精神面は侑ちゃん、身体面は輝弥くんといった感じで彼方ちゃん達はいつも元気を貰って、いつも以上にしゃっきりさんになってるのだから」

「そう言ってますが、彼方さんはいつも寝てるじゃないですか」

「えへへ、それも愛嬌なのです♪」

「全く都合良いんですから……」

彼方さんの矛盾を指摘しても、当の本人は舌を出して開き直るような素振りを見せる。

そんな態度に俺は呆れつつも微笑んでいた。

これまでは人からここまで信頼してもらえることがなかったからこそ、今のこの時間が温かい。

同好会の一員として恥のないよう自分を律せねばと密かに心に決めた。

「……って、私たちの話に持ってかないでみんなの持ち味を出し合おうよー！」

「おっ、ゆうゆが照れてる！ 普段はそんなに見せないのに珍しいねー！」

「愛ちゃん、こんな時まで茶化さなくていいよー！」

「あつ、じゃあ侑ちゃんから見て私の良いところはどんな所かなー？」

侑さんが愛さんにぶんぷんと怒っていると気を紛らわせるように歩夢さんが自分の事について質問した。

侑さんは歩夢さんの質問に気を落ち着かせて、目をつぶり思考を巡らせていた。

幼馴染からは彼女の良いところはどうか映っているのか、非常に興味が湧くものだ。

「そうだなあ、嬉しそうに笑ってると思ったら急に怒ったり悲しんだり……表情がころころと変わる所かな」

「そ、それって褒めてるのー？」

侑さんの言葉を胸を弾ませながら待っていた歩夢さんだが、侑さんの意見は歩夢さんには褒められてると受けてもらえなかった。

急に表情が悲しくなり頬をぶくつと膨らませながら怒るといふ、侑さんが言った事をタイムリーに体現してくれた。

「ほら、そういうところー！」

「も、もう侑ちゃーんー！」

侑さんが歩夢さんをからかうと歩夢さんは照れ隠しのようになんの手をぼんぼんと叩いていた。

そんな二人のやり取りを見て心が和らいでいくのを実感していると、流石幼馴染と思わざるを得なかった。

俺が二人を温かい眼差しで見守っていると慎が横から小声で入ってきた。

「なあ、輝弥。あそこまで見てて飽きないし可愛いと思う人っているか……?」

「奇遇だな、俺も同じことを思ってた」

「流石にあれをやられると男は死ぬな」

「うん、間違いなく死ぬ。というかその自信しかないね」

「二人共、皆さんがいるところでそんな話はしないでね?」

慎と想いの共有を図っていたが、しずくさんから冷たい眼差しと言動で制止させられる。

しずくさん、そうは言うが歩夢さんのあれは男なら落ちるのも至極当然のことなんですよ。

「ふふっ、にしても侑ちゃんも本当に周りをよく見てるよね?」

「うんうん、スクールアイドルの事を初めてとは思えないほど着眼点も良くて、彼方ちゃん達びっくりしてるよ」

エマさんと彼方さんの称賛の言葉に侑さんは照れるように頭を掻いた。

「いやあ……自分でもここまでのめり込むとは思いませんでしたよ。調べていく内にどんどん楽しくなって行って、頑張るみんなの事を応援したくなるんですね」

「ふふっ、応援して下さる侑さんと輝弥さんの想いも胸にこのまま頑張っていきましょう!」

侑さんを見て笑顔になるせつ菜さん。

そして彼女の一声に乗り、益々メンバー達の意欲も増していく。

和気藹々としながらも相互に高め合える関係、素敵と思いつつ決して絶やしたくないと思いつつ馳せるのだった。

お疲れの方はいませんか？

俺達は各メンバーの良いところを出し終わった所で次のステップに進もうとしていた。

「それじゃあ、次はみんなのやりたいステージ像についても一気にまとめていく？」

「そうだね、やれるところまでとことん詰めていきたいな」

侑さんの提案に歩夢さんが賛同し、他の方々もそれに呼応するように頷いていく。

そんな中で不安な面持ちをしている者が二人いた。

「……私、まだやってみたいステージ像、浮かんでない……」

「俺も具体的な案は浮かんでないから、構想が出来上がった時にお話ししても良いですか？」

二人はスクールアイドルをやる上での目標は考えてはいるものの、どんなライブを作り上げられるかまでは考えられていないようだ。

しかし、それも無理もないことだろう。

璃奈は沢山の人と心を通わせる、慎は見ている人を熱くさせる。

最初から大きな目標を掲げるのは容易いことだが、それをどう実践すれば実現できるのかと言われると中々に難しいものだと思う。

「そうだね、他の人の案も参考にしつつ二人の考えを纏めていけばいいと思うよ」

「では、かすみんの案からいいですかあ？」

慎たちが早計しないようにフォローをしていると、早く自分の事を言いたくて仕方なかったのか、かすみが自分から率先して声を上げる。

「うんうん、かすみちゃんどうぞ！」

「はぁ〜い♪ かすみんはステージ上でかすみんの王国を作りたいですー！」

「王国？」

かすみが作りたいたいという王国に興味湧き、かすみに続きを喋ってもらうように促す。

「そう！ かすみんは世界で一番かわいいスクールアイドルを目指しているんです！ だからこそ、かすみを王様としたキョんキョんする世界を作っていききたいんですよ！」

「かすみさん、それは具体的にどうするか決めてるの？」

「それはまだ決め切れてないけど、何か王国を象徴するものを作ってステージで披露してみたいんだよね〜」

かすみの意見は中々に新鮮なもので面白そうだった。

彼女が自分の可愛いを見せるために実現出来る演出を精一杯考えたのだ。

そんなかすみの願いを叶えてあげたい。

だが、それをやるために必要なことがあるのだが、それは追々やるでしょう。

いつになく真面目な意見を出してくれたかすみにエマさんは感嘆の声が出ていた。

「かすみちゃんの王国、すごく可愛くなりそうで楽しそうだな〜♪」

「確かに凄く華やかなステージになると思いますね。他にかすみのように道具を使ってみたい人はいますかね？」

俺はかすみと同意見の人もいると思い、発言してもらおうように促すと彼方さんが手を挙げてきた。

「なら彼方ちゃんはステージで枕とベッドを使いたいなあ〜♪」

「……まさか彼方さん、ステージ上で寝ようって魂胆じゃないですよね？」

私欲にまみれているのでは、と疑ってかかる慎に彼方さんはジト目をかましながら反論する。

「む〜、寝るんじゃないんです。みんなとリラックスタイムの時間を一緒に堪能するんです〜」

「絶対にそれやる事変わらないですよね!？」

ステージ上の彼方さんと一緒にリラックススタイルという名のお昼寝をやるのだろうか、そんな事をするスクールアイドルは全国を回ってもここで見れなさそうだ。

興味はあるが攻めの姿勢にも程があり過ぎる。

「ほ、他はどうぞでしようか……。エマさんとかは如何ですか？」

彼方さんの案に少し気が抜けてしまったが、気を取り直して他の人はいないかとエマさんに話を振る。

「うーん、何が良いかなあ……。みんなを癒してあげるとかのようなことをしてあげたいとは思ってるんだけど……」

どうやら、エマさんも具体的にやりたい事はまだ煮詰まっていなかったようだ。

しずくさんもエマさんのコンセプトには難儀の表情を示していた。

「エマさんの案も中々に難しい内容ですね……」

「癒してあげるってどういう感じになるのかな？」

歩夢さんが癒しというテーマに出来る事を考えているとせつ菜さんが横から大きな声で参加してきた。

「私であればアニメを見ると、力が湧いてきますよ！ 推しが活躍する所を見られるのは私にとって最高の癒しです！」

「せつ菜ちゃんは相変わらずだね〜！ 私はスクールアイドルの動画を見ると癒されるなく。みんなが頑張っているところを見ると元気を貰える！」

「あつはは、こういう議論になるとやっぱりみんなバラバラになるね！ 愛さんは友達的笑顔とか見ると嬉しくなるなく！ それが自分のお陰で笑顔になったとかだと嬉しくなる！」

歩夢さん以外の二年生組はそれぞれ負けじと自分の癒しを発表する。

どれもその人達らしい意見で聞いてて楽しい。

「輝弥くんは何か癒しになることってあるの？」

お三方のやり取りを微笑ましく見ていると璃奈が俺に話しかけてきた。

「うーん、俺にとって癒しになることは音楽を聴いてる時間だけど、人によっては触ってもらおうと気持ち良くなるとかはあると思うな。例えば、頭を撫でてもらうとか」

「彼方さんだとそれに加えて膝枕なら一瞬で寝るな！」

「慎くん、さつきから彼方ちゃんに対しておちよくっているのかい〜」

？」

慎と彼方さんが先ほどからじゃれ合っているが仲が良い証拠だろう。

エマさんは俺の意見に納得がいく表情をしていた。

「なるほど！ 確かに人の温もりに触れるっていうのは癒し効果があるっていうもんね！ というわけでかーくん！」

「いや、どういうわけですか!?!」

突然格闘ゲームでありそうなポーズを構えるエマさんを見て、思わず声が上がってしまった。

「つまりかーくんを癒してあげたいってことだね！」

「侑さん、解説しなくてもそれは分かります！ でも……僕は大丈夫ですから」

流石にこんな大人数の前で甘える姿なんて見せたくないのも、無理やり以前までの話に切り返していく。

「それよりも先ほど話してたステージの事です。皆さんがやってみた事をもっと具体的に考えられるように出来る事ってないですかね？」

俺の強引な話の返しにもせつ菜さんは真面目に考えてくれていた。「そうですね……。例えば、スクールアイドルはステージに立つのですから衣装も重要になってきます。どんな衣装を着てみたいのかを考えてみるのは如何でしょうか？」

「衣装……はっ！ それならいい方法があるよ！」

せつ菜さんの意見にエマさんがはっとした表情を浮かべ、スマートフォンをポケットから取り出して誰かに電話をかけた。

「エマさん、やけに今日は元気いっぱいですね」

「いつもは私たちを見守るような感じで後ろにいるイメージだったんですけど、何かあったんですかね？」

慎と歩夢さんがエマさんに対して微笑を浮かべているが、その明るさが逆に思う所があるようだ。

「さつき、カグヤンに拒否されたのが効いてるんじゃない？」

「愛さん、根も葉もないことを言わないで下さいよ……」

少し揶揄いの意も込めた言い分に俺はただただ呆れるしかなかった。

流石にあそこで折れてしまうほどエマさんは弱くないと思ってるのだが。

「いやいや、だってエマつちも良きと思つて言つたのに、意外とカグヤンはあっさり切り捨てたからさく。それを引きずってるのかわくつて思つちやつた」

「だって多くの人の前で頭を撫でられるんですよ？ 慎だつたら耐えられるか？」

「……多分……いや、俺も恥ずかしさのあまり逃げ出しそうだ」

俺の意見を慎にも仰ぎ、彼も同様の事を思つたのか視線を反らしながら答える。

そんな俺達に彼方さんは枕に顔を埋めながら質問する。

「でも私達だから大丈夫って事はないのく？」

「むしろ見知ってるからこそ恥ずかしいですよ。だからここはかすみや璃奈にバトンタッチを……」

「お待たせ——！」

話の途中でエマさんが会話に戻ってきた。

電話に出る時と顔色が変わってないので、特に異常などはなさそうだ。

「みんなで何を話してたの？」

「こちらの話です。それより今のお電話は何だつたんですか？」

エマさんから話題の種について掘られるが、触れられなくなかつたので種を埋め返していく。

俺の問いにエマさんは手を一発叩くとある提案を発するのだった。

「これから衣装を貸してもらえらることになったから、みんなで行くかう！」

あまりの急展開にエマさんを除く全員が付いていけなかつた。

改めて話を聞くと、どうやら果林さんが服飾同好会に知り合いがいるとのことで、エマさんの相談を聞いて果林さんが取り持ってくれたみたいだ。

服飾同好会の部室へ行くと、部室内にはたくさんさんの衣装が揃っていた。

「わあ、すげえ……」

「こんな色とりどりの衣装が揃ってるなんて……」

女子組は衣装を見ながら黄色い声を上げているが、服装やファッションに対して元々関心を持っていなかった慎と俺は沢山の衣装を目の前にしてそんな小学生並みの感想しか出てこなかった。

そんな俺達の横にしくさんがやってきた。

「二人共、圧倒されてる？」

「衣装とか服の事をそこまで考えたことがなかったからなく。デザインとかこう……結構作りこまれてるんだなって思って……」

「ふふつ、慎くん、無理に衣装を褒めようとしなくてもいいんだよ。」

珍しく言葉に詰まる慎にしくさんは笑みを溢した。

「でも実際、この同好会の衣装って完成度が高いことで有名だから体育会系とかにも凄く人気なんだって。ユニフォームとかもその人達から案を貰って作ってるって聞いた事があるよ」

「そ、そんな事までできるの!? でも……これを見たら、それも納得出来る気がするよ……」

海外にあるような民族衣装からユニフォームらしい軽装まで豊富な種類の服が揃っているの、外で購入するよりもここで作ってもらった方が気分も高まるし、より一層力が湧いてくるというものだろう。

「そういえば、演劇部も同じようにここで衣装を作ってもらう事とかあるの?」

「そうだよ。でも、私はこの同好会に知り合いがいなかったから提案し辛かったんだ」

「なら、果林さんに感謝だね」

果林さんは確かライフデザイン学科にいたと言っていたので、そういった服飾関係も頼れるというのは本当にありがたいことだ。

果林さんもここで何か衣装をリクエストしたりするのだろうか。

そんな事を考えていると着替えを終えたエマさんが試着室から出てきた。

「みんなお待ちせ！ どう……かな……？」

俺達の前に姿を現したエマさんは、黒のストライプを基調としたメイド服に身を包み、白の布かけや帽子を纏って母性の溢れる優しいメイドがそこには立っていた。

「うわああ!! エマさん可愛い——!! ときめいちやうよおくく!!」

「これは国宝級」

エマさんの姿にトキメキが弾けすぎるがあまり彼女の周りをちよこまかと動く侑さんがいた。

おまけに遠目から璃奈がエマさんの姿を写真に収めようとスマホを構えていた。

そして、持て囃されているエマさんを見てかすみが悔しがっていた。

「ぐぬぬっ……確かにこれは可愛い……。でもかすみんだって着てみれば敏腕メイドとして、エマ先輩に負けるつもりはないですからね!!」

「お前は敏腕メイドというよりかはドジっ子メイドだろ」

「うるさい！ 慎のすけなんか主人の靴を拭く役目で十分だよーっだ

！」

「んだと、かすかす!？」

「はいはい、かすかすも慎のすけもそこまで!」

「かすかす（慎のすけ）言わないで下さい!!」

エマさんへの対抗心に燃えるかすみに慎が毒を吐くが、それに力チンときたかすみもお返しといつもの口喧嘩を始めていく。

いつもの事と見慣れた愛さんが二人のあだ名を呼びながら制止する。

なんで、この二人はこういう時には息がぴったりなのか不思議でな

らない。

「それじゃあ……お帰りなさいませ、ご主人様♪」

エマさんは仲直り(？)した二人を見て、満足したのか俺の方へ向き直りメイドが良く口にする台詞を並べながら手を差し出した。

「えっ……そこで僕ですか？」

「ほらっ、エマがこう言ってるんだから輝弥くんも乗りなさいよ♪」

エマさんの手を取ろうか躊躇していると果林さんが背中を押してエマさんの元へと持っていくた。

自然とみんなの視線がこちらに向くので心臓の鼓動が聞こえるのではないかと思うくらいに脈打っていた。

「うう……た、ただいま……」

「はうううう!! 照れるかーくんもかわいいよおおー!!」

「これは貴重な一面」

「って璃奈、動画で取るのは反則だっぺー!!」

俺の照れシーンにトキメキが限界突破した侑さんは左右にメトロノームの如くゆらゆらしていた。

そして、どきくきに紛れて璃奈も動画を撮っているの思わずエマさんの元から離れ璃奈の元へとすっ飛んでいった。

「ふふっ、こんな輝弥くんも新鮮でいいね」

俺が璃奈からスマホを奪おうと奮闘している横でそう呟くしずくさん。

「いや、そんな暖かい目で見てないで助けてよ——!!」

俺達のやり取りを見て笑顔になっているメンバー達を見て、そう叫ばざるを得なかった俺だった。

二人の関係

「も、もう穴があったら入りたい……」

エマさんとの主人とメイドのやり取りが終わり、俺は慎の背中に顔を埋めていた。

「ふふっ。輝弥くん、かわいかったよ?」

「それは男が言われてもあまり嬉しくないやつだよ……!!」

しずくさんが微笑みながら俺をフォローしているが、それはただ俺の傷を抉っているのみだった。

なお、俺をこんな風にしたエマさんは、というと次の衣装に着替えようと試着室に入っていた。

今度は一体どんな姿で追い詰めようとしているのだろうか。

「ふふっ。やっぱり輝弥くんってからかいがあつて可愛いわ♪」

「もう、果林さんも言わないで下さい……」

部室で一緒に衣装を眺めていた果林さんがこちらを見て笑いながらからかってくる。

異性に可愛いと揶揄されてばかりで流石に気が滅入りそうになる。

「はははっ! さすが輝弥のお家芸だな!」

「……あつ?」

「いてててて! おいつ、肩を握りつぶそうとすんじゃねえよ!」

ついにはいつも通り慎も茶々を入れてくる始末だったので、そこだけは反撃する。

「お待たせー!」

男同士のしよもない喧嘩が始まろうとした矢先にエマさんの声が室内に響き渡った。

掛け声と同時に試着室から出てきたのはとある衣装に身を包んだエマさん。

「がおーっ、クマ・ヴェルデだよ♪」

遊園地でよく見かけるクマのコスプレのような衣装で姿を現したエマさんはふわふわな衣装のお陰もあつて、マスコットキャラクターのような印象を受ける。

「うわあー！ クマさんだ！ 可愛いー！」

クマ・ヴェルデを前にして侑さんはメロメロだった。

そして、全力で抱き着いていき衣装の柔らかさを堪能していた。

「かーくん、行かないの〜？」

「彼方さん、相手の顔が見えてないならともかく、あれに飛び込む勇気が僕にあるとお思いで？」

彼方さんからのゴーサインに俺は行こうとしない。

むしろ慎を差し出そうとしているので、行くの拒否しているのは見え見えだった。

「なんならシンシンと二人で行けばいいじゃん！」

「愛の言う通りよ。さあ行つてらっしやい♪」

「つて、なんで俺もなんだよおお!!」

陰に隠れている俺と一緒に慎もクマ・ヴェルデの懐へ収めようと愛さんと果林さんが全力で背中を押す。

慎は理不尽な扱いに苦言を呈すしかなかった。

「二人共危ない！」

倒れかかろうとしていた俺と慎を見て、エマさんは全力で受け止めようとする。

そして二人仲良くクマ・ヴェルデの中に落ち着いたのだが、揃いもそろって手のやり場に困っていた。

「ぶっ、かぐ男も慎のすけもなんで手を後ろにピンと伸ばしてるの？」

まさかの同調にかすみも吹き出す。

外野からそんな事を言われているが、俺達とはある感情によりそれすらも頭から抜けていた。

「……これっ、気持ちよくないか？」

「……うん。凄くふわふわしてて寝落ちしそう」

クマ・ヴェルデの温もりとさらさらとした服触りに仲良く骨抜きにされていた。

次第に後ろに伸ばしていた手から力が抜け、自然と全身で毛触りを堪能しようと全力で抱き着いていた。

「……これ、知らない人が見たら訴えたりしないよね？」

「歩夢さん、その時は私たちが全力で弁護しましょう……」

冷静に見て女子高生によってたかつて抱き着くという行為に歩夢さんが危機感を覚えていたがせつ菜さんが横で小さく擁護していた。

これは抱き締めた者にしかわからない気持ち良さなのだから、情けない姿を見せるのも致し方ないというものだ。

自分たちだけが堪能してしまうのも勿体ないので、後でしずくさん達にも教えてあげよう。

「……はっ!? 俺は一体……!?!」

「……なんで俺達はぬいぐるみを抱き抱えてるんだ……?」

クマ・ヴェルデを堪能していたはずが、気が付いた時には二人揃ってクマのぬいぐるみを抱きしめていた。

「流石に絵が危なかったからね……」

しずくさんがうんざりするようにため息を吐いている。

そんな言い方をされると俺達が危ない一線を越えたのではないかと錯覚してしまうから勘弁してほしいものだ。

「あつ、二人も起きたね! ねえ、このエマさんをセンターにして写真撮ろうよ!」

「おお! いいねえー!」

侑さんが俺達に気付くと写真を撮るからと手招きされる。

愛さんもノリノリな様子でスマホを構える。

そして、机の上にスマホをセットしタイマーを掛けるとメンバー達の元へと駆け寄る。

俺はエマさんから少し離れてしずくさんと歩夢さんの隣に待機した。

「な、なんだかここまで密集してると凄く恥ずかしくなってくるのは俺だけかな……?」

多くの異性に囲まれている状況について身体が委縮してしまう。

そんな俺を見て、しずくさんが励ましてくれる。

「大丈夫だよ輝弥くん。別に食って掛かるわけじゃないんだから」
「そうだよ♪むしろ輝弥くんって人との距離感を大事にしすぎてるからこれくらいも良いと思うな」

歩夢さんも笑顔を向けながら、気にしないで良いとフォローしてくれる。

こうして近くで歩夢さんの笑顔を見ると、いつも以上に照れてしまうので正直勘弁してほしい所だ。

「で、ですが、歩夢さん……。だからと言ってここまで近くに来ずとも……！」

「ほら、シャッターが切られるよ！」

歩夢さんから距離を空けようと企んでいたがタイマーがそろそろ終わるといふ事での猶予すらも残されていなかった。

どこまでもへっぴり腰な俺を見てしずくさんが仕掛けてきた。

「もう、仕方ないな。ほら輝弥くん♪」

「へあ!? しずくさんなんでこっちに飛び込んでくるの!?!」

なんとしずくさんが背中から抱き着いてきたのだ。

突然の行動に思わず声を荒げる俺だったが、既にカメラの存在など微塵も考えていなかった。

パシヤリと撮影が完了する音が鳴り響き、予想もしないタイミングで写真が出来上がってしまった。

俺はしずくさんの腕から解放されようともがいているが、変に力を入れるのは気が引けるのもどかしい気持ちになっていた。

そんな俺達を他所にかすみ我先にとスマホへと駆け寄り、写真の出来栄えを確認する。

「ぷ。ぷ。ぷ。 慎のすけ、顔ガチガチじゃん。どんだけ緊張してんのさ」

「う、うるせえ！ 周りが女子だらけだと動き辛いんだよ！」

「ですが、この慎さんも新鮮で私は有りだと思いますよ！」

「せつ菜さん、それはなんのフォローにもなっていない気がするんですけどっ！」

やはり慎も慎で俺と同じ葛藤を抱えていたようだ。

そして、侑さんも写真を見ようと顔を覗かせ全体を見渡した。

「おおー、いい写真が出来たねー！ みんないい表情！」

「そうだねー！ これは良い宝物になりそう！」

愛さんも侑さんからスマホを受け取り写真を確認するが、俺が触れて欲しくない箇所気付いてしまった。

「……にしても、カグヤンとしずくは随分とアグレッシブな事してるんだね？」

「愛さん!! それだけは触れないでほしかった……！」

「どれどれ〜？ おお〜、しずくちゃんってば大胆〜♪」

「輝弥くん、しずくちゃんに気が行き過ぎて顔が映ってない」

愛さんの言葉を皮切りに彼方さんもちよっかいを入れてくる。

璃奈もカメラに写っていない俺の事を心配してはいるが、しずくさんの事については触れないでほしかった。

「うう……も、もう今日は駄目かも……」

「か、輝弥くんが固くなってたから、緊張をほぐしてあげようとしたの！」

「しずく……それはこいつには逆効果だぜ……？」

しずくさんも少し顔を赤くしながら反論してくる。

彼女の中に恥じらう心が少しでもあるのであれば、それを大事に一歩踏みとどまってほしかったと切に願ったのはここだけの話。

撮影中に他所事をしていた俺達にエマさんはふくれっ面をしていた。

「もう〜。二人共カメラの前ではちゃんとしようよ。だけど、まだ時間はあるからもう一度写真撮ろうよ！ 今度は果林ちゃんも一緒に！」

「……へっ？」

エマさんはそう言って果林さんの方を見るが、当の本人は気が抜けていたのか情けない声で返事をした。

「確かにさっきまで果林ちゃんも見るだけだったし、今度はこっちで一緒に撮ろうよ〜♪」

「……私は別にいいわよ。同好会のメンバーじゃないし」

彼方さんも果林さんと一緒に撮りたいと駄々をこねるが、果林さんは首を縦には振らなかった。

そして、着信が来たであろう自分のスマホを取り出し、画面を見つめるとすぐにこちらへ向き直った。

「今日は先に上がるわね」

「えっ……う、うん」

果林さんはそう言うのと部室からいなくなる。

突然、果林さんが素っ気ない態度を取りエマさんは寂しげな表情をしていた。

「果林さん、なんだか疲れてるんですかね？」

「エマさんを突き放すなんてらしくない気がするけどな……」

俺と慎は二人の状況が分かっているため憶測を喋る。

だが、エマさんは悲しい表情を消してすぐさま笑顔を見せるとスマホを持ってこちらへ振り向いた。

「私、すぐに着替えるからみんなはカメラに映る準備だけしておいて」
♪

エマさんはそう言うのと試着室へ逃げるように駆け出した。

「エマさんもなんだか様子がおかしい？」

「この感じだとあの二人の間に何かあったように見えるな」

エマさんと果林さん、二人に纏わりつくしがらみは何なのか。

その答えを見つけるのはそう容易い事ではないが、このままだと二人が距離を開けてしまう。

そんな予感がした俺は何とかしてあげたいと心の中で誓ったのだった。

勇気をくれた人

「よし、今日の作曲を始めていくかな。」

服飾同好会での試着会を終えた後、各々がいつも通り練習を始めていた。

俺は侑さんから提案のあった歩夢さんとかすみさんの曲について作っていいこうと思ひ、音楽室へ来ているのだが、活動内容について方針を変更することにした。

理由は先ほどのエマさんの態度だ。

果林さんと喧嘩をしているわけではないようだが、少なくとも良好な関係性とは言えない事だけははっきり言える気がする。

二人の間に何があったのか、それを簡単に本人たちに問い質せるほど俺も無神経ではない。

彼女たちの問題に部外者が介入してもいい結果にはならない。

だからこそ、少しでもエマさん達の迷いを晴らせるようにやれることを見つけていかなくてはいけない。

そう決意を胸にピアノの前に座ったが、正直エマさんの歌についてインスピレーションが何も浮かんでいなかった。

「……そういえば、スイスの曲ってどういう曲調が多いんだろう……？」

エマさんはスイス出身の人なので、母国のイメージを織り交ぜたものを作るのも有りかと考え、スマホでスイス民謡について調べる。

動画サイトでスイス民謡を投稿している動画があったため、それを開いて視聴する。

「……軽快なリズムだけれども広大な自然の中にいるような穏やかな気持ちにさせてくれる……」

三拍子で刻まれる音楽に俺は目を瞑りながらリズムに合わせて頭を動かしていた。

「明るいけれども、自分の心を包み込んでくれる温かさ……。まるでエマさんみたいだ」

こじつけが過ぎるかもしれないが、同好会の長女的なポジションで

いつも傍でメンバーの事を支えるエマさんはこういった曲調の歌が彼女らしさを体現しているのではないかと感じた。

「よしっ。なんとなく曲の方向性は出来た気がする。あとは歌詞をどう作っていくか……」

前回の愛さんの時と同じようにこちらが作曲したものを本人と一緒に作詞していくか。

だが、今のエマさんはそれをこなせる精神状態なのだろうか。

現状果林さんとのいざこざがありそうなこの状況で作詞をやっていくとなると、かえってプレッシャーとなり、どちらも中途半端に取り進むことになる気がしてしまう。

どうやってエマさんに曲を引き渡そうか考えていた時、音楽室の扉が開く音がした。

「あつ、輝弥くん。ここに居たんだね。」

音楽室へ入ってきたのは意外にも歩夢さんだった。

「歩夢さん？ お一人とは珍しいですね。何かありましたか？」

「うん、私たちが外で練習してる間、輝弥くんは音楽室で作曲してるって聞いたから一人で大丈夫かなーって……。えへへ、迷惑だったかな？」

歩夢さんは苦笑いしながらそう答える。

一人で仕事をしてる俺をわざわざ見に来てくれたと思うと少し顔が綻んでしまう。

「迷惑なんてことないですよ。むしろ気に掛けて下さってありがとうございます。ごじます。」

「ふふっ、よかった。この前は愛ちゃんの曲を作ってたんだよね？ 次は誰のを作るとかってもう決まってるの？」

歩夢さんは勉強机用の椅子を俺が座っているピアノ椅子の隣に持ってきて腰掛ける。

礼儀正しく座る姿に歩夢さんの誠実な性格が如実に表れている。

「いえ、正直誰を優先にとかっていうのはあまり考えていないんですよ。この前のも曲を作るきっかけをくれたのが愛さんだったただけなので」

俺はメンバーの鼻屑をしているような感覚に陥り少しバツが悪い顔をする。

だが、歩夢さんはそんな俺を咎める事は無かった。

「そうなんだね。じゃあ、次は誰のつていうのは決まってるの?」

「うくん、そうですね……」

歩夢さんの問いに俺は唸り声を上げながら天井を仰ぐ。

「今考えているのは三人なんですよ」

「そ、そんなに決めてるの!?!」

俺の回答に歩夢さんは少し声を荒げる。

そこまでオーバーにリアクションする事でもないのでは、と俺は歩夢さんの素直な反応に笑みがこぼれる。

「はい、一人はエマさん。そして残りはかすみと歩夢さんのお二人です」

「わ、私も……!?!」

自分も決まっていたことに驚く歩夢さん。

「はい、実は侑さんから以前に歩夢さんとかすみか侑さんに向けて自分のスクールアイドルへの想いを歌に込めてくれたという話を聞きまして」

「そうなの……!?! な、なんだか恥ずかしいなあ……」

はぐらかして話しても歩夢さんならすぐに勘付くだろうと思い、包み隠さず事の発端を話したが歩夢さんは恥ずかしくなってきた膝上で手をもじもじさせている。

「でも、決して馬鹿にするつもりで話したわけではないんですよ?」

侑さんは歩夢さんのその想いを無下にしたくないつもりで僕に声を掛けて下さったんです。」

「侑ちゃんがそんな事を……。」

侑さんが俺に託したものを告げ、歩夢さんは少し顔を下げた。

「本当に素敵な幼馴染ですね。誰よりも近くで歩夢さんの事を応援して下さるんですから。」

「……ふふっ。本当にね。いつも自分勝手に突っ走っていくことが多いんだけど、それでも私の事は決して置いていかないの。」

侑さんへささやかな小言を呟いているが、笑顔で語っている歩夢さんはそれを苦には思っていないようだ。

むしろ、自分を見たことのない世界へ連れて行ってくれる童話の世界の白うさぎのような存在に感じているのだろう。

大人びているようだけれども子供のように無邪気な笑っているようにも見えるそれを見て、俺は歩夢さんに対して興味が湧いた。

「……良ければ、もう少し教えてくれませんか？　僕、歩夢さんの事をもっと知りたいです！」

「うん！　私で良いなら！」

俺のリクエストに歩夢さんが応えてくれる。

「でも、輝弥くんの事も沢山教えてね？　私、まだ輝弥くんの事もあんまり深く知ってるわけじゃないから……」

「そうですね。教えてもらってばかりじゃ不公平ですし。でも、それこそ僕の方が多分つまらないですよ……？」

俺は歩夢さんみたいにも楽しい世界へ連れて行ってくれる友人はいなかったし、充実した過去を生きていたかと言われたら首を縦には振り辛かった。

「そんな事ないよ。そうやって自分の事を悲観的に考えちゃうのは輝弥くんの悪い癖だよ！」

歩夢さんはそんな事ないと眉間に眉を寄せながら異を唱えた。

だが、そんな表情もすぐに解いて優しいお姉さんのようなオーラを纏わせる。

「それに、輝弥くんの事を知ってるのと知ってないのでは、これから先の信頼関係に関わるんじゃないかなって思うから」

「歩夢さん……」

「大丈夫。今までがどんなに辛い過去だったとしてもそれは絶対良い方向へ未来が進むきっかけだから、自分の事を卑下しないであげて？」

歩夢さんは俺の肩に手を乗せてくる。

決して重すぎず、されど軽すぎもしない力の入り方に俺は少し安心感を抱いていた。

「……ありがとうございます。僕にこうして親身になってくれるのは、歩夢さんが初めてです。」

「そうかな？ えへへっ、輝弥くんが弟みたいだから、ついお姉さんみたいになっちゃった。」

「つて、歩夢さんも僕の事を可愛いって言うんですか!？」

「そうは言っていないけど……でも、そう言えるくらいに輝弥くんの方がちょっとだけ分かった気がする♪」

「絶対に思ってる表情じゃないですかー……!」

優しいお姉さんかと思っただけなら急に他の人と同じようにならなくてくる歩夢さん。

だが、かすみ達のそれとは違って決して嫌とは思わず、むしろ歩夢さんならばいいかと許せてしまう自分もいる。

「……ってこんなことを話してる場合じゃなかったよね!! ご、ごめんね……つい私もからかいたくなっちゃって……」

「そうやって情に訴えてくるのはずるいですよ……」

本題から話が逸れ、俺の貴重な時間を無駄にしたと思ったのか、歩夢さんがしおらしくなってしまう。

本当にこの人は侑さんが言った通り、表情がころころと変わって見てて飽きない人だ。

こういう人が近くに居てくれたらどんなに幸せだっただろうか。

そんな達観した考えを抱いてしまうほどに今の時間は楽しい。

「まあ、雑談はこれくらいにして本題に戻しましょう。歩夢さんがスクールアイドルをやるうと思っただききっかけって何なんですか？」

歩夢さんの事をからかっても埒が明かなくなってしまうので、俺も話題を戻して仕切り直す。

俺からの質問に歩夢さんは人差し指を顎に当てながら考えていた。「うん、私ね、小さい頃から特筆してやりたいことっていうのが無かったんだ。」

歩夢さんは再び手を膝の上に置いて、ゆっくり話を始める。

「幼い頃からおままごととか女の子が着るような可愛い服を自分で着たり、見たりするのが大好きだった。でも、それって普通の女の子で

はよく見る光景だよね。」

「そうですね。それが女の子であればよくある特徴だと思います。」

確かに侑さんのような明るい元気な女の子であれば外で遊ぶことが多い。

だが、それとは反対に歩夢さんのような大人しい女の子ならば、屋内で人形遊びやおままごとで遊んでいる印象がある。

なんらおかしいことはないごく普通のことだ。

「うん。でも、成長していくにつれて自分にはピンクの服は子供っぽいな、とか少し無理してるんじゃないかなって思うようになって、気が付けばそういった服を買ったり着なくなっちゃったんだ。」

確かにそういった服は子供が着るからこそ可愛さが芽生えるものもある。

ピンク色の服も子供が着る分には年相応の女の子としてオシヤレに目覚めつつあるのかな、と感じてしまう。

それが大人になると次第に達観するようになり、流石にもう似合わないなどと自分を卑下して遠ざかってしまうようになる。

だが、今の歩夢さんは可愛らしい服を着ても違和感はないし可愛いことに間違いはないと思う。

だが、人の感覚と自分の感覚というものは絶対に合わないもので、歩夢さんの場合はどう頑張っても謙遜する気持ちの方が勝つてしまうのだろう。

「でも、それらを嫌いになったわけじゃないの。ただ、もう自分には似合わないなって思って、普通の女の子を演じてた。」

俺は何も言わずに歩夢さんの言葉に耳を傾ける。

「だけど、侑ちゃんと一緒にお台場で見たせつ菜ちゃんの姿を見て、凄く感動したの。せつ菜ちゃんは自分の大好きを包み隠さず見ている私たちにぶつけてくれて、自分にはもう……って塞いでた気持ちを開けてくれたの。」

「せつ菜さんのお披露目ライブの時……ですよね。」

「うん、輝弥くんもいたんだよね？ 侑ちゃんが悔しがってたよ。あの時に声を掛けていればもっと早くから仲良くなったのに——！つ

て。」

「あの時は僕もせつ菜さんにしか目が行ってませんでしたからね。お二人の姿も見たのかもしれないですが、記憶になくて……。」

自分の記憶力の無さに少しばかり歯痒さを感じたが、歩夢さんは首を横に振って否定の意を示す。

「それは気にしないで。あの時は周りに沢山女の子もいたから見つけられないのは仕方ないよ。」

歩夢さんはそう言って俺をフォローしてくれると話に戻した。

「それでね、私もあんな風に自分のやりたい事を素直にやれたら、どんなに素敵なんだろうって思えたの。それに侑ちゃんと一緒に何かをやるなんてことも今までなかったから、あのライブも見て侑ちゃんも同じ気持ちで……なら一緒にやろうよって声を掛けて、同好会に入ることにしたの」

「なるほど、侑さんが同好会に入るように声を掛けたのかと思ったんですけど、意外にも歩夢さんからなんですわ？」

「うん！ 自分一人では勇氣も自信もないけど侑ちゃんが一緒に私の夢を見てくれるって言うてくれたから、今ではちゃんと覚えてよかったですって思ってるよ」

俺は歩夢さんの話を聞いて、二人の信頼関係がより素敵に思えた。

今までは侑さんの背中をついていくばかりだっただろうに、そんな引っ込み思案な印象のある歩夢さんが侑さんに精一杯の勇氣で訴えたのだ。

自分の気持ちを素直に話せて、しかもそれに賛同してくれる人というのは早々出会えないと思う。

だからこそ、この二人は強固な絆で結ばれていると改めて認識することが出来た。

「ありがとうございます。おかげさまで良いメモディーが生み出せそうですね。」

「ほんと？ それならよかったー！ 輝弥君が少しでも楽になるように私も頑張るからこれからも一緒によろしくね♪」

「はい。こちらこそよろしくお願ひしますね、歩夢さん！」

歩夢さんが胸に抱いていた想いを聞いて、より歩夢さんに向けた楽曲のイメージを掴んでいくことが出来た。

それと同時に歩夢さんの優しくもそれでいて芯が通った性格に俺は好感を覚えるのだった。

I , m j u s t m e .

「そういうえば、輝弥くんってどうして音楽に興味を持ったの？」

歩夢さんのイメージを聞きその構想に基づいた作曲案が浮かんできたので早速始めようとした矢先、歩夢さんは今度は自分の番と俺に質問を投げてきた。

「僕ですか？ あまり大したお話は無いですよ？」

「それでもいいよ。さっきも言ったように私が輝弥くんの事を知りたくて聞いているんだもん。あつ、でも言いづらいならばそれでも無理し
て言わなくてもいいよ……？」

歩夢さんは大丈夫と言っておきながら、俺の事を気遣ってなのかすぐに眉を下がる。

どこまでも人の事を考えられる優しい方だなと俺は思わず笑顔になる。

「いや、別に特段嫌というわけではないので僕は良いですよ？」

「本当？ それならよかった！」

俺は了承の意を示すと安心した歩夢さんはすぐに笑顔になった。

本当に見えていて退屈しない方だ。

「うちは舞台俳優や音楽関係の仕事をしている家柄で、その関係もあつて音楽がいつも身近にあつたんです」

「そうなの？ 輝弥くんの家って結構凄いところなんだね」

「でも、両親曰くまだそこまで名は売れてないローカル音楽家と言つていましたけどね。でも、祖母は舞台女優として凄く名の知れた方だったんです。」

俺は音楽の事と一緒にそのルーツとなった家族の事についても話すことにした。

「僕は一つ上の姉がいるのですが、姉はそんな祖母の姿を見て将来舞台女優の道に進むと夢を語っているんです」

「そうなんだ。お姉さんって事はきつと輝弥くんみたいに美人で素敵
な人なんだね！」

突然、俺の事を褒めつつ顔も知らぬ姉の姿を想像して心を弾ませる

歩夢さん。

そんな歩夢さんを他所に俺は目を反らしながら答える。

「……僕の事はともかく、姉さんは美人だと思いますよ。」

「ふふっ、なんだか慎くん達が輝弥くんの事を可愛いつてからかう理由が分かる気がするよ」

「べ、別に今はそれは関係ないでしょう!？」

歩夢さんから揶揄われて少し顔が熱くなってしまうが、話が脱線してしまったので咳払いをする。

「ごっほん。話を戻しますが、僕は家にあつたピアノを幼い頃から遊び目的で触っていました。ですが、ゲームや舞台での音楽の良さを知っていくにつれて、自分でも弾いてみたいという欲求が湧いてきて、そこから本格的にピアノを練習するようになっていったんです。」

俺は幼い頃に姉さんと一緒に語った夢を思い出しながら、ふと目の前にあるピアノにそっと触れる。

鍵盤を叩いていないので音は鳴らずに、その冷たさだけが手のひらに伝わってきた。

「お姉さんは舞台上に、輝弥くんは作曲家の道につて事だね？」

「はい。でも、めきめきと頭角を現す姉さんに嫉妬したり、周囲からそんな優秀な姉と比較されたりなど散々な目にも遭いました」

俺は昔の事を振り返り、つい笑顔が消えてしまう。

「姉さんはいつも舞台の主演を勝ち取ったり、賞状を受け取ったりと何かしら優秀な成績を収めていましたが、対して僕はそんな事は無く、そんな姉さんの弟という事で周囲からはこちらにも羨望の目が向いてきました。」

「……………」

歩夢さんは何も言わない。いつしか笑顔もなくなっており真剣に俺の話聞いてくれていることが伺える。

「お前は何も実績がないんだな、運動神経も中途半端だな、とか……正直言って舞台とは関係のない事でもいちやもんを付けられましたね」

「そんなひどいことを……」

「身内に優秀な者がいるとそうなるんですよ。自分の知らない所で勝手に噂が広がって……勝手に期待して……勝手に失望して……挙句の果てにはそれを揶揄してきて……正直音楽から離れようかな、なんてことも考えてました。」

俺は鍵盤を撫でながらそう答える。

そして、重くなる空気を変えるように笑みを作る。

「ですが、そんな僕に姉さんだけは味方で居てくれました。僕がどんなに姉さんにジェラシーを感じて距離を離していたとしても、姉さんは決して僕の事を見捨てずに守ろうとしてくれたんです。」

「優しい……お姉さんなんだね。」

俺が笑顔になったのを見て安心したのか歩夢さんも微笑む。

「今の僕がいるのも姉さんのお陰。だから姉さんから受けた恩に報いるために僕はこの学校に来たんです。そして……こうして歩夢さん達という素敵な人たちにも出会えました。」

俺はピアノ椅子から立ち、歩夢さんへと向き合う。

歩夢さんはその行動に思考を巡らせていた。

「姉さんの夢もそうですが、今は皆さんの為に僕が出来る事を全力でやるつもりです。ですから、これからも……是非こんな僕ですが仲良くしてください」

そう言い切ると歩夢さんへ自分の音楽への熱意の再確認も含めて深く一礼する。

歩夢さんに言うのも可笑しな状況だとは理解している。

だが、こうして自分の過去を話しているのは紛れもない歩夢さんただ一人なのだ。

姉との約束、同好会メンバーの約束を果たすためにあの頃の弱かった自分にお別れをするという意志も込めた礼だった。

「……輝弥くんも一人で頑張ってたんだね。」

歩夢さんの声が聞こえ、俺が顔を上げると歩夢さんも席を立ちこちらへ向き直っていた。

「大丈夫。今ここに居るのは一人の男の子、巴 輝弥くんだから。独りで抱え込まないでね。私達……もう友達なんだもん。友達が悩ん

でる時は傍にいてあげるからいつでも頼ってあげるから、私の時も何かあつたら助けてね」

歩夢さんは静かにそう言うのと俺の頭を撫でてくる。

まるで本当の弟をあやすように優しく心地よい気持ち良さだった。いきなり撫でられるものだから俺は心拍数が上がるのを感じるが、姉さんのそれと似た温もりを感じたのか俺は何とも言えない安心感に包まれていた。

「もう……撫でないで下さい。恥ずかしいですから……」

「でも、輝弥くん、嬉しそうだよ?」

「これは決してそういうのじゃないです」

「もう、素直じゃないんだから」

歩夢さんと恋仲な関係ではないが、そう思わせても可笑しくないやり取りが目の前に広がっている。

歩夢さんは俺の扱いを完全に理解してしまったようだ。

悲しく思えるが、それと同時に彼女との距離感が一気に縮まったと感じて嬉しくもなった。

「でも、輝弥くんの事を知れてよかった。話してくれてありがとうね」
♪

「ごちんごそ話を聞いて下さってありがとうございます。これからも歩夢さんの事、全力でお助けしますね」

「うん!」

歩夢さんとお礼を言い合い、二人しかいない教室の中でただひたすらに笑い合っていたのだった。

歩夢さんとの談笑後、部活も終了し俺は帰宅した。

「ただいまー」

挨拶をしても返事が返ってくることはない。

恐らく次の舞台に向けての練習で忙しくなっているのだろう。

「姉さんはまだ帰ってきてないか……」

自室で荷物を置き、リビングへ向かうと机の上に一枚のチラシが置いてあった。

表紙には姉さんが写っており次の舞台の開催が決定したことを知らせる所謂キービジュアルというものだ。

「……本当、姉さんはかっこいいなあ」

チラシを見て思わずそんな言葉を漏らした。

普段は穏やかな雰囲気醸し出しているのに、舞台では別人のように変貌する。

そのギャップで観客を虜にして中学校でも密かに人気を集めていた。

そんな学生時代で姉さんが輝いていた事もあり、俺は陰の存在となっていた。

姉さんが褒められることは苦痛ではない。

むしろ嬉しいし誇らしい事だ。

だが、全ての人間が純粋な気持ちから姉さんを称賛していたわけではなく、姉さんを引き合いに出して俺の存在を軽んじる人間もいた。

それがトラウマとなり俺の胸にはしこりとして残っているが、同時に思い出される言葉もある。

「貴方は私の弟……。だけど、貴方は巴 輝弥。それ以上でも以下でもないのよ」

「分かってる。俺はあの頃の俺じゃない。もうあんな事に負けるもんか……」

「……ただいまー」

過去は過去。

そう割り切って改めて前に進む決意をしていた時、扉が開く音がした。

姉さんが帰ってきたようだ。

「あらっ、輝弥。お疲れさま。ごめんね、遅くなっちゃって。」

「おかえり、姉さん。全然いいよ、俺もさつき帰ってきたばかりだから。それよりもさ、姉さん次の舞台で主演やるんだね?」

俺は置いてあったチラシを手に取り、姉さんへ見せる。

姉さんは荷物を置き、夕食の用意をしながらチラシを一瞥する。

「ええ。と言っても、まだ話が決まったばかりなんだけどね。今日はその打ち合わせ」

「いよいよ姉さんが主演の舞台を見ることが出来るんだね。楽しみだよ。」

「なんだか随分と嬉しそうね?」

俺の表情を見て、姉さんはそう呟く。

「だって姉さんが主役なんだもん。弟としては誇らしい気持ちでいっぱいだよ?」

「急にどうしたの? そうやっておだてても何も出ないわよ?」

藪から棒に褒めちぎられて姉さんはいい訝しんでしまう。

「いや、改めて姉さんの弟でよかったなって思ってたさ」

「もう何よ、それ」

ますます状況が分からないと姉さんはふふっ、つい吹き出してしまふ。

「学校で何かあったの?」

「あったよ。いい意味で」

姉さんからの問いについて含みのある言い方をしてしまう。

だが、すぐに切り替えて俺はある質問を姉さんへ投げる。

「ねえ、姉さん。姉さんは……俺が弟でよかった?」

「えっ? 本当にいきなり何を言い出すのよ?」

突拍子もなく投げられた質問に姉さんもついに心配の眼差しを向ける。

だが、そんな表情をされても俺は必死に弁解する様子は見せず、至って冷静に補足をする。

「……今日ふと昔の事を思い出してさ……。姉さんと約束した幼かった日の事や眩しいキラメキを見せる姉さんに嫉妬して口を聞か

かった事。あの頃から両親は仕事の関係で家を留守にすることが多くて、姉さんにお世話を焼いてもらっていたのに酷いことをしたなって思っ……」

うちの両親は音楽関係の仕事に勤めている関係もあり各地へ出向いての仕事が多い。

その為、中学の頃からはほぼ姉さんとの二人きりの生活がメインとなっていた。

そんな中で学校での出来事もあり、ただでさえ大変な姉さんに更なる心労を募らせてしまったのだ。

過ぎたことではあるが、それでも俺の事を見捨てずに付き添ってくれたことは凄くありがたい事なのだ。

それを感謝しなければいけないと思い、ついそんな質問を投げってしまった。

「もう終わったことよ」

「だけど……！」

俺が続けて弁解しようとする姉さんは口に手を当てて制止するように促す。

「あの頃は、みんなまだ子供だから言葉が及ぼす影響というものを理解していないだけ。それに貴方がそう言われているのに気づかなかった私も甘かったわ」

「……………」

俺は何も言わずに姉さんの言葉を待つ。

「貴方がそう考えられるようになったって事は貴方も少し大人になっただって事かしらね。私は素直に嬉しいわ」

「……俺は別に……」

「先にあなたの問いに答えておくとね、私は貴方が弟でよかったと思ってる。いや、むしろ貴方じゃなかったら私も壊れていたかもしれない」

料理の仕込みが終わり、ヒーターにタイマーを掛けると姉さんはエプロン等を外してキッチンからこちらへとやってくる。

「貴方が昔語った夢。私はそれを叶えるために自分に出来る事を増や

していこうと思ったの。私の事を貴方にとって最高のお姉さんとして見てもらいたいもの。辛いときも貴方の言葉が、貴方の笑顔が私を勇気づけてくれたの」

「俺が……姉さんに……？」

姉さんは俺の横に腰を下ろして正座を組んだ状態で話の続きを喋る。

「ええ。だから、私も貴方が弟でよかったと思ってるし、貴方がこうして音楽の道を走ってくれてることが嬉しいの。だから自分の事を卑下しないであげて？」

姉さんは俺の頭を撫でながらそう慰めていく。

この年で撫でられるのは恥ずかしいものだが、いつも姉さんから感じていた温かさを久々に感じる事が出来たので今日ばかりは嬉しいくなってしまおう。

「分かった。ありがとう、姉さん」

「ごちらこそ気に掛けてくれてありがとうね、輝弥。」

姉さんと姉弟の絆を確認し合いほっとしていたら腹の虫が鳴ってしまった。

「ふふっ、もう少しでご飯が出来るから食べましょうか」

「ははっ、うん」

突然のヘンテコな音に思わず笑い合い、ご飯の準備を進める。

それから姉さんと一緒に食べたご飯はいつもよりも美味しく感じたのだった。

癒してあげたい

歩夢さんと二人で昔話に花を咲かせた次の日。

昼休憩となった先で俺が向かったのは食堂ではなく音楽室だった。いつもなら慎やしずくさん達と一緒にご飯を食べるのだが、今日は少し違った。

「さてと、エマさんが来るまで……」

そう、今日はエマさんを音楽室へ呼び出しているのだ。

理由は昨日の夜に考えた楽曲案を聞いてもらう事。

そして、もう一つの彼女と友人についての事。

エマさんが果林さんとの間に抱えている蟠りを払拭しなければ、彼女は心の底からスクールアイドルを楽しむことが出来ないのではないか、そんな事を考えていた。

「かーくん！ お待たせー！」

姉さんに作ってもらったお弁当を先に開けておこうと思った矢先にエマさんが息を切らしながら入ってきた。

「エマさん、お疲れ様です。急にお呼びしてすみません」

「ううん、気にしないで！ 折角のかーくんからの誘いなんだもん！ むしろ誘ってくれてありがとうね♪」

朝に突然チャットで昼食の誘いをしてしまったので、急な予定を入れてしまい少し申し訳なさを感じているがエマさんは気にさせまいと笑顔で感謝を述べる。

その振る舞いから昨日の出来事から果林さんとのいざこざが続いているようには見えない。

「いえいえ、そう言ったださるならお誘いした甲斐がありました」

「ふふつ、それで今日はどうしたの？ かーくんが一緒にご飯を食べようなんて珍しいね？」

エマさんが本題へと切り出した。

彼女の問いに俺は特に慌てる様子も見せず、弁当を静かに開封する。

「ちよつとやりたいことがありまして、それに向けてお話をしがてら

一緒にご飯も食べたいと思ひまして」

「やりたい事？」

俺の話にエマさんは頭にハテナを浮かべているが、エマさんのお腹から虫の音が聞こえてきた。

その気の抜ける音を耳にして、俺は思わず笑みがこぼれてしまった。

「……積もる話も後にして、まずはご飯を食べましょうか？」

「あははっ……そうだねえ……」

エマさんは少し慌てたように鞆から昼食を取り出す。

心なしか顔が赤くなっていた。

「エマさん、それは購買で売ってるパンですか？」

「うん！ 食堂以外で食べる時は購買のパンを買ってくるんだー♪」

エマさんが取り出したのは綺麗に包装されたホットドッグだった。

しかし、彼女が出したのはその一本のみで他にパンを取り出す素振りは見せなかった。

「あれっ？ お昼ご飯はそれだけですか？」

「えっ!? んーん、まだ鞆の中にあるよ！ いきなり机に広げたらはしたないかなって思っ……」

エマさんは鞆の中にまだパンは残ってることを示すように側面を叩く。

袋の擦れる音が聞こえてきて、まだ三、四本は入っていることが予想できた。

そして、今度は自分の番とエマさんが俺の弁当を舐めるように見渡した。

「それにしてもかーくんのお弁当も美味しそうだね！ これってお母さんに作ってもらってるの？」

「いえ、このお弁当は姉に作ってもらったんです」

「ええー!? かーくんってお姉ちゃんがいるの!？」

身内の事を話すとエマさんは目玉が飛び出るんじゃないかという勢いで驚きの声を上げる。

歩夢さんはころころと表情が変わるけど、エマさんは一回のリアク

シヨンが大きいのでこれもまた見ていて飽きないものだった。

「……そんなに驚くことですよ。」

「驚くよー！ だってお弁当をお姉さんがいつも作ってる事もそうだけど、かーくんが姉弟だったっていう事にもびっくりだもん！」

俺はそれに対しての共感を覚えられずにいたが、エマさんは口早に捲し立ててきた。

「エマさんも沢山の弟妹がいると仰ってたじゃないですか。それと同じことですよ」

「それはそうだけど……。でも、かーくんがこんなに素敵なんだもん！ きっとお姉さんも同じくらい美人だなんて考えたら、もっと羨ましいなって思っちゃって……」

自分が褒められるのはむしろ痒くなってしまうが、姉さんが美人なのは認める。

女子高に通っているので異性との色恋沙汰は聞かないが、共学校に通っていたらきつと姉さんに惚れる男は数多くいたことだろう。

尤も姉さんはそこいらの男に目もくれないだろうし、俺もおいそれとは認めはしないだろうが。

「もう、僕の事は良いですよ。それよりも早くご飯を食べちゃいましょ？」

「あつ！ うん、そうだね！ 折角のかーくんとの時間なんだもん、沢山おしゃべりしたいな♪」

その後、食事中にエマさんと沢山の事を話した。

エマさんが何のためにこの学校に来たのか、どうしてスクールアイドルになりたかったのか。

普段は話を聞いてくれる立場だったエマさんが自分の事を話してくれることに嬉しさを覚えていた。

海外にまで伝わっているスクールアイドル。

それを見てエマさんはやりたいと心から願い、日本にやってきたの

だ。

その行動力は尊敬に値する。

以前に話していたホームシックは無いことも本当に凄いことだと思う。

俺の場合だと、何も状況が分からずに慌ててしまう未来しか見えない。

いや、エマさんの場合は自分から退路を断つ意味も込めて日本に来る決断をしたのかもしれない。

国を超えれば身近な人に頼ることは出来ない。

自分の力で何とかしなければ自分が生きていけなくなるのだ。

そう考えると誰よりも胆力のあるたくましい方だと改めて実感する。

「ふう〜、お腹いっぱい♪」

「エマさんの話を聞いている内にご飯が無くなっちゃいましたね」

俺はそう言いながら自分の弁当を見つめる。

普段は食堂で昼食を取っているが、今回はエマさんとの時間を何よりも大事にしたいと姉さんに頼んでお弁当を作ってもらった。

姉さんはいつもと違う俺の要求に戸惑いを見せながらも快く引き受けてくれたが、多く作り過ぎてしまったかもと心配していたのだ。

だが、そんな心配も一緒に飲み込むほどにただただエマさんとの時間が楽しくて、食事が進んでいたのだ。

「にしても、エマさんって本当にスクールアイドルが好きなんですわね」「うん！ やるからには後悔したくないから今しかできないことを全力で楽しみたいからね！」

「……今しかできないこと……か……」

エマさんのその言葉を反芻し、俺は一人の生徒の顔を思い浮かべる。

「かーくん？」

「エマさん、スクールアイドルをこのまま続けてもいいんですか？」

「えっ？」

突然の俺の質問にエマさんは頭の整理が追い付かず、つい聞き返し

てしまう。

「このまま一人でスクールアイドルをやってもいいんですか？」

「かーくんどうしたの？ 一人でって私たちはソロアイドルを……」

「そういうことじゃないです」

エマさんは薄々俺の言いたい事を感じてか、とぼけたような反応を見せるが俺は一蹴する。

「……果林さんの事、何か考えてるんじゃないんですか？」

「……っ」

エマさんは触れられなくなかったように悲しげな表情をする。

「……昨日のあのやり取り、普段のお二人なら考えられないんじゃないかなと思っただんです。果林さんはどんなことがあってもエマさんのお力になりたいと仰っていましたし、エマさんには相応の信頼を寄せていたと思います。……なのに、あの突き放し方は友人のそれとは思えませんでした……」

「かーくん……」

「それに最近、思い出したことがあっただんです」

俺の言葉にエマさんは首を傾げる。

そして、俺はため息を吐きながら呆れるように笑顔を作る。

「果林さんって同好会のメンバーじゃなかったんですよね……」

「あっ……」

エマさんは俺の言葉にはっとしている。

それは自分の考えが甘かったことを突きつけられてショックを受けているのか、自分と同じ考えを持った人が見つかって嬉しくなっているのか、すぐには読み取れなかった。

「果林さんという時間って凄く楽しいんですね。僕らとも仲良くして下さるし、メンバーの事をかなり見ていらして、沢山アドバイスもくれる。いつの間にか同じ部活のメンバーであるものと錯覚してました」

「かーくんも……そうだったんだね……」

エマさんの感情はどうやら後者だったようだ。

俺と同じ考えで安心したのかつい笑みがこぼれていた。

「僕、エマさんも同じことを考えていたと思っただんです」

「えっ?」

「この学校に来て最初に出会えた友達がこうして仲良くなった部活の後輩と親身な関係でいてくれること。大好きな友人と一緒に同じ時間を共有できていたこと。エマさんは僕が抱く楽しいという感情より何倍も強い感情を抱いていたのじゃないかなって」

「……私も思ってたんだ。果林ちゃんは同好会が無くなるうとした時もいつも私の隣で微笑んで見守ってくれて、かーくんたちと行動を共にするってなった時にも変わらず率先して動いてくれた。だから果林ちゃんも同じ気持ちだったんじゃないかなって……」

エマさんの言葉を聞きながら、俺は過去の果林さんの行動を振り返った。

しずくさんから同好会活動停止の話聞いて憤慨していた所を横から入りエマさんの為に、と精力的に活動していたところ。

せつ菜さんに立ち向かうためにメンバーを集める所からと彼方さんから探すべきでは、と提案してくれたところ。

彼方さんと璃奈と俺が筋トレに悪戦苦闘している中、愛さんや慎と一緒にどうすれば効果的に練習が出来るかを考えてくれたところ。

どれを取っても、ただエマさんの為だけという言葉で片付けられるものではないと俺は確信めいたことを持っていた。

「でも、果林ちゃんはそうじゃなかったみたい……。果林ちゃんは私のためを思ってやっただけって言ってたから、私だけが舞い上がってたみたい……。えへへっ、なんだか恥ずかしいね」

自分の思い上がりだったことを思い知らされたエマさんは照れ隠すように頭を掻きながら笑ってみせる。

そんなエマさんを見て、ふと立ち上がる。

「本当にそうでしょうか?」

「えっ?」

俺の言っていることが分からず、困惑するエマさん。

そんなエマさんを置いて、俺はピアノの方へと向かう。

「本当にエマさんの為だけなら、自分から生徒名簿を取りに行くなん

て博打を仕掛けないと思えますよ?」

俺は以前に生徒会室から生徒名簿を持ち去り、せつ菜さんの正体を追っていた時の事を思い出した。

あれは生徒の個人情報に掲載されている秘匿性の高い文書であるため、それを生徒会長の許可なく持ち出すことはどのような理由があるろうと始末書を書かされてもおかしくはないバツのはずだ。

そんな自分の得にならないハイリスクな行為を、人の為だけで動けたというのなら果林さんは相当なお人好しという事だ。

だが、これまで一緒に活動してきたからこそ果林さんはそんな理由だけで動く人物ではないと自信を持って言える気がした。

時に姉御肌として俺達の事を優しく見守り、時に客観的な意見から歯に衣着せぬ発言で俺達を叱責するところ。

それは密かに自分も楽しいと感じたからこそ出た愛なのではないか、そう考えていた。

「そうかな……」

「きつとそのはずです。……実は果林さん自身もこの中に自分が入っていないことから劣等感みたいなのを抱いている可能性だ……」

「そんなの……」

「はい、分かるはずがないです」

果林さんの心が分からず不安になっていくエマさんに俺ははつきりと言いつける。

「正直、僕なんかが言っても果林さんは理由を話してくれるとは思えません」

「……………」

手を膝の上でもじもじさせているエマさんに俺は手を差し出した。

「そこで、エマさんの番ですよ」

「……………私?」

「はい。エマさんなら果林さんも信頼してる。エマさんが胸の中に抱いている感情を果林さんに負けない気持ちでぶつけければ、果林さんもそれに応えてくれるはずですよ」

「かーくん……」

「エマさんにこの歌を送ります。エマさんの持ち味を考えた時にこんな曲ならエマさんにぴったりだと思って完成させたんです」

俺は昨日まで聞いていたスイス民謡のフレーズも織り込んで作った曲をエマさんに聞かせてみせた。

俺のピアノ演奏中、エマさんは一言も言葉を紡がずに俺を見つめていた。

それは感動のあまり圧倒されているのか、果林さんの事を考えて曲が耳に入っていないだけなのかはエマさんのみぞ知るだ。

だが、どのような事を考えていようとこの方法がエマさんには届くと思った。

エマさんはスクールアイドルとして沢山の人の心を温かくしてあげたいと言っていた。

ならば、言葉で訴えかけるよりもスクールアイドルとしてのエマさんを見せつける方がより効果的だと感じた。

まさに論より証拠。

想いをぶつけるといいうのも結果を見せて相手を納得させる方が早いと感じたのだ。

まもなく演奏が終わり、俺は再びエマさんに向き合った。

エマさんは感動から口を半開きにしながら俺の演奏に対して小さく拍手を送ってくれる。

エマさんのささやかな拍手に俺は一礼した後に、鞆から一枚のCDを差し出す。

「これが今披露した曲です」

「今の曲がこの中に入ってるの?」

「はい。ですが、歌詞はついていません。それをエマさんが完成させるんです」

「私が……」

エマさんは受け取ったCDを見つめながら不安げに呟く。

まだ弱気になっているエマさんに俺は跪いてエマさんへと向き合いCDを握っていない左手を握る。

「誰よりもスクールアイドルの事が大好きなエマさんなら絶対大丈夫です。僕が保証します」

エマさんははつとした表情をするが、すぐに笑顔になる。

「ふふっ、ありがとう、かーくん。かーくんがここまでしてくれたのに私が一步を踏み出さないのはずるいよね」

エマさんはCDを膝の上に置き、両手で俺の手を握り返してくる。

「もう少し、自分の中で気持ちを整理してみるね。まだ、この曲に合う歌詞が作れる自信はないけどもう一度自分がやりたい事を考えてみるね」

「……はい、まずは自分の中で答えを見つける所からです」

「ありがとう、かーくん♪」

エマさんから迷いの晴れた清々しい笑顔をぶつけられるが、俺はそれよりも気になっていることがあり、そちらに意識がいつていた。

「……お礼はいいんですけど、そろそろ手を離してくれませんか……？　なんだか恥ずかしくなってきました……」

「えっ!?　かーくん、自分で握ってきたのに!?!」

「そ、それは言わないで下さい……!　そうなんですけど、いざ言われるとかつこつけちゃったなって思って余計に……!」

つい出来心から出た行動を思い返し顔が熱くなってきた。

そんな俺を見てエマさんは手を離した。

密かにほっとする俺だったが、その次に俺の頭を撫でてきた。

「そんな事ないよ。かーくんに言われなければ私ははずつとうじうじと後ろを向いてたところだったから、かーくんのお陰だよ♪」

「な、ならよかったです……」

手を握られる以上の事をされてしまい、さらに俺は落ち着きが無くなっていった。

そして、半ば強制的にやめさせるように俺はその場から立った。

「で、では、今日の練習も曲作りを主軸でやっていきますよ!　それではお時間も少なくなってきたので、僕はこれで失礼します!」

恥ずかしさからこの場を早く立ち去りたいと気が急いてしまった俺は放課後の練習方針だけ伝え荷物を纏めてそそくさと音楽室を出

てしまった。

「……本当にありがとうね、かーくん」

一人取り残された音楽室でエマさんはただ一言だけ、微笑むように俺が去った方面を見ながらそう呟いた。

貴女のやりたい事は？

エマさんと一緒に昼食を取った日の放課後、俺達は学園の校庭でエマさんのプロモーションビデオ撮影の準備をしていた。

昨日の服飾同好会でエマさんに似合いそうな服装をピックアップして、今度はそれを試着した状態で撮影に臨もうという話になった。

服飾同好会の人達は、自分たちの用意した衣装がこういった形で活用されるなら拒否する理由はないという事ですぐに了承の意を示してくれた。

エマさんも再び沢山の衣装を着れることを嬉しく思っていたが、流石に借り物という事もあり衣装に着替えた後は極力汚れが付かないように慎重に行動していた。

「エマさん。その衣装、凄く素敵ですよ！」

「ありがとう、侑ちゃん♪ 今日の撮影は成果が得られるように頑張るよ！」

侑さんからの励ましの言葉にエマさんは笑顔で答える。

お昼に二人で話をした影響もあってか表情は明るい印象だった。

「エマっちは白いドレスも似合うね！」

「うん、女神様みたいで凄く綺麗。可愛い」

エマさんは白を基調としたドレスに身を包んでおり、愛さんと璃奈はその姿を絶賛していた。

そして、彼方さんが手に何かを持ちながらエマさんの元へと駆け寄った。

「エマちゃん、これを頭に付けてみたらもっといいいんじゃないかな〜？」

彼方さんはそう言いながらエマさんの頭に三葉で作ったリングを乗せた。

白いドレスに三つ葉のリングを被ったエマさんはギリシャ神話に出てくるような女神そのものだった。

「うん、凄く良いですよ。エマさんの雰囲気合っていて僕は好きです」

「さつきよりも凄く可愛い！ うん、ますますときめいちやうね！」

俺が称賛を述べると侑さんもカメラをセッティングしながら感嘆の声を上げていた。

「えへへ♪ 彼方ちゃん、ありがとう」

「むふふ、果林ちゃんに負けじとエマちゃんに似合うものを選んでみたよ♪」

果林さんは昨日の試着会の時にエマさんに似合う服をチョイスして、読者モデルと呼ばれる所以のセンスの良さを見せていた。

彼方さんもそれに負けじとエマさんと相性が良さそうなアクセサリーを探してくれたようだ。

「じゃあ、エマさん。準備はいいかな？」

「……………」

撮影に向けて準備万端となったところでエマさんに声を掛けるが当の本人は突如顔を俯かせてしまい、俺の合図に返事をしなかった。

「エマさん？」

「…………えっ!? どうしたの!？」

「こちらの台詞ですよ。今から録画を開始しますよ?」

いきなり声を掛けられて驚いた様子のエマさん。

こちらとしては突然大きな声を出されて内心驚いていた。

今から撮影を始める旨を伝えるとエマさんは気を落ち着かせようと深呼吸した。

「あつ…………ふう…………。うん、ごめんね?」

「はい、それじゃあ行きますよ?」

エマさんの様子を見てスタートできると判断した俺は指で三、二、一とカウントダウンした後録画開始のボタンを押した。

「…………虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会に所属しています、エマ・ヴェルデです。国際交流学科の三年生でスイスからやってきました」
いつものエマさんらしい明るい挨拶が始まった自己紹介だが、カメラの前で聴いている俺の後ろで彼方さんと侑さんがひそひそとエマさんの様子について話をしていた。

「なんだか元気が無いですね？」

「んー、お眠なのかなあ〜……?」

流石に動画撮影をしている中で眠くなるのは彼方さんくらいだとは思いますが、エマさんが心ここに在らずとなっている要因は薄々分かっていた。

恐らく先ほどの彼方さんの口から出てきた果林さんという言葉だろう。

勿論、果林さんと喧嘩をしているわけではないが、それでも気掛かりになっていることは事実だろう。

どうすれば果林さんと話が出来なのか、お昼に渡した楽曲の事も考えた上でまだ答えが出ていないのだと思う。

しかし、原因が分かったところで俺には何も手助けができない所が非情にも現実だ。

二人の間に起きている問題に口出しをするのは野暮というもの。

仲裁した所で二人きりだからこそ出来る話を断ち切ってしまう事になる。

ここはエマさん自身の力で切り開いていくしかないのだ。

「……こんな私だけど、応援してくれたら嬉しいな。改めてよろしくね♪」

そんなこんなで気が付けば締め言葉に移っていたので俺は切りのいいタイミングでカメラの録画ボタンを押して撮影を終了する。

撮影が終了して気が抜けたのかエマさんは笑顔を保ったままだがふにやっと力が抜けているようだった。

「えへへ、どうだったかな？」

「うん、内容としては良いと思いますよ。エマさんが目標としている事やエマさんから感じ取れる雰囲気や掴み取れた気がします」

エマさんからの確認に俺は嘘偽りのない感想を伝える。

内容としては沢山の人に見てもらおう分には申し分ない。

しかし、それも内容は、という所だ。

「ですが、表情や仕草が少し心ここに在らずと言った印象を与えてしまうかなと思いました。侑さん達はどうですか？」

「……そうだね、私もかーくんと同じようにいつものエマさんらしさを感じなかったかな。いつもはもう少し元気に笑顔を向けてくれる印象だったけど、今は無理してるように感じました」

「彼方ちゃんも同意見かな」

俺はエマさんの話し方に感じた違和感や改善点について伝える。

そして、自分の意見だけを押し付けるわけにはいけないので侑さんと彼方さんにも意見を仰いだのだが、どうやら二人も同じことを感じていたようだ。

「……そっか……」

俺達三人の率直な意見を聞いてエマさんは顔色を悪くする。

「あっ……も、もちろんこれは自分たちが感じたことなのでエマさんが良いと思っただけなら、それは否定しませんが……」

そんなエマさんを見て余計な心痛を増やしてしまったと思い、俺はつい慰めの言葉をぶつける。

が、エマさんは首を横に強く振りそれを否定した様子を見せる。

「んーん、かーくんたちが全員そう感じてるって事はきつとそうなんだよ。みんなさえ良ければもう一度撮り直してもいいかな？」

「……分かりました。余計な事を言っすみませんでした」

「全然いいよ♪ むしろかーくんは気を使ってくれたんだよね。かーくんにそうやって気を使わせちゃうなんて私もまだまだだね……えへへ」

俺は先ほど放った慰めの言葉が返ってエマさんに不安を与えてしまったと思い、謝罪の言葉を述べる。

だが、エマさんはそれを気にしてないことを示すように先ほどの張ったような笑顔とは違ういつものエマさんの暖かな笑顔を向けてくる。

これが本番でも見せることが出来れば文句ないのだが、そう思い通りにいかないのが現実というものだ。

「いえっ……僕が変に気を張り過ぎてるだけです。では、もう一度行きましょうか」

こうしてエマさんの動画撮影は続いたのだが、なかなか納得のいく

内容になることはなかった。

気持ちを切り替えようと一時動画撮影を中断していた時、エマさんは忽然と校庭から席を離してしまったので居場所を探していた。

俺は普段とは違う場所で風を感じていると思い、教室棟の屋上に来ていたと予想したがそこには誰もいなかった。

「屋上にいないということは……部室かな……？」

エマさんの居場所に予想をつけられるのはこのこと部室くらいしか俺には出来なかった。

屋上を後にし、部室棟へ向かおうと足を運ぶと部室棟の入口で侑さんと歩夢さんが歩いていった。

「侑さん、歩夢さん！」

「あつ、かーくん！ どうしたの？」

俺の声を聞いて振り返る侑さんに部室棟へ来た目的を伝える。

「エマさんを探しているんですが……お二人は見かけませんでしたか？」

「実は私たちも探してる所なの。侑ちゃんからエマさんの事を聞いて何か悩みでもあるのかなって思っ、もしかしたら部室にいるのかもってこつちに顔を出したんだ」

「どうやら歩夢さん達も目的は同じだったようでエマさんを探していたようだ。」

「そうですか、僕も部室へこれから顔を出そうと思っていたのでタイミングが合ってよかったです」

「なら一緒に行こうよ！ 歩夢の曲の事についても聞きたいしさ！」

「僕は一向に構いませんが歩夢さんは大丈夫ですか？」

侑さんの突然の提案に俺は賛同の声を上げるが、歩夢さんの意向も確認する。

「私も全然大丈夫だよ！ ちょっと恥ずかしいけど侑ちゃんだったら

……!」

「どうやら歩夢さんも問題はないようだ。

「分かりました。では、状況だけでもお話しておきますね」

「こうして俺と歩夢さんによる楽曲制作の進展を侑さんに話すことにした。」

部室へ向かう途中、紆余曲折を経て作曲の方向性が決まったことを報告したら侑さんは安心したように頷いていた。

「そっか、歩夢がスクールアイドルに興味を持った動機も含めて曲に織り込もうとしてるんだね」

「はい。歩夢さんが自分から動いて侑さんをスクールアイドル同好会に誘ったという事には驚きましたが、それと同時に僕は歩夢さんへの印象も改めることが出来た良いきっかけにもなりました」

「えっ、そうだったの!?!」

「思わぬ告白に歩夢さんは驚きの声を上げた。」

「実はそうなんです。僕、歩夢さんの事を最初は侑さんに付いてきてスクールアイドルになったんだと思っていました」

「俺は歩夢さんへの第一印象について話し始めた。」

初めて歩夢さんを見た時、幼馴染である侑さんと一緒に部活で楽しく過ごしたいという至ってシンプルな気持ちからここに来たのかと思っていた。

「勿論、それは決して悪い事ではない。」

「むしろそういった理由も部活に入る動機としては申し分ないものだ。」

「だが、友人である侑さんは同じ動機なのかと言われたらそれは確証を持って答えることは出来ないだろう。」

「侑さんがスクールアイドルに対して凄く熱心でしたし精神的に組み込んだらうなって事は伝わってきたんです。ですが、対して歩夢さんはまだそうだったわけでもなかったので、果たして同好会の練習に

ついでこれるだけの気持ちがあるのかを少し疑問視している部分があったんです」

実際、友達と一緒に始めたがそれはわいわいやるだけのものと考えており、真剣なレベルのそれを想像していなくてあまりの練習の厳しさに耐えられずに部活をやめてしまうという例も少なくはないだろう。

歩夢さんもそれと同じ類いのものと思って少し心配にはなっていた。

「そっか、輝弥くんはそうやって思ってたんだね」

「す、すみません……先輩に対して凄く失礼なことを言って……!」

「んーん! 気にしないで? 確かに私はスクールアイドルに関しては初心者だし、実際侑ちゃんやみんなの指示で活動しているところはあるから……」

歩夢さんへ無礼を働いてしまい慌てながら謝罪を述べたが、歩夢さんは気にしないでと声を掛けてくれる。

本人もそれは自覚していたようで、あははと苦笑しながら自分の活動について振り返った。

「でも、自己紹介動画や楽曲制作と一緒にやってきて、それは違うんだってことを知る事が出来ました。自分の強みを見つけられないながらも決して努力を怠らない姿や一人で取り組んでた僕に声を掛けて傍で励ましてくれる姿。それは歩夢さんにも本気で頑張りたいという気持ちがあるから起こせることなんだと思っただんです」

昨日、歩夢さんが自分を気に掛けて探してくれたことや俺の過去の事について話した時を思い出しながら歩夢さんの魅力を熱弁していた。

あの出来事があったから歩夢さんの事をもっと知ることが出来たし、彼女の為に良い曲を作りたいとより強く決心することが出来たのだ。

「そこまで言ってもらえるのは嬉しいけど、な、なんだか恥ずかしいよおー……!」

「確かに誰よりも努力家な所は歩夢の一番の強みだね。実際それで

勉強面も成績は優秀な方だし」

少し顔を赤くしている歩夢さんを他所に侑さんは思い出すように顔を上に向け、歩夢さんの特徴について振り返っていた。

「それに事ある毎に表情がころころと変わる所も凄く表情豊かで魅力的なポイントですよね？」

「あつ、やっぱりかーくんもそれは分かる？」

「それはもちろん」

そして、少し揶揄うように歩夢さんの愛嬌あるポイントに付いて話した。

侑さんもそれを直ぐに感じ取ったようで悪戯っ子のような表情をしながら共感してくれる。

「も、もう二人してからかうのはやめてよお〜！」

歩夢さんは大きめに声を上げて俺達の肩をポコポコと叩いたのだった。

三人で同好会の部室へ到着し、扉を開けると中にはエマさんが立っていた。

「エマさん、お疲れ様です！」

「あつ、侑ちゃん。それにかーくん達もどうしたの？」

窓から外を眺めていたエマさんはこちらへ振り向く。

エマさんの問いに侑さんと歩夢さんが答えてくれる。

「だってエマさん、休憩に入ってから全然帰ってこなかったから何かあったのかなって思ってた」

「大丈夫ですか？ 具合が悪いとか無いですか？」

「んーん、大丈夫。心配かけちゃってごめんね。本当はみんなの心もほかほかにしてあげられないといけないのに……」

身体に異常が無いことを教えてくれるが、途中で俺達から視線を外

して俯くような表情をするエマさん。

そんな様子を見て侑さんは疑問の声を上げる。

「エマさん?」

「あつ、ううん、なんでもないの! 撮影頑張らなきゃだよね!」

エマさんは笑顔を作り部屋を出ようとしますが、侑さんが机の上に置いてある誰かの鞆を見て興味を示した。

「あれっ、これって最新号?」

「そうだよ、もしよかったら読む?」

どうやら鞆はエマさんのもので中には昨今のスクールアイドル事情を掲載している雑誌の最新刊のようだ。

エマさんの許可を貰って侑さんは雑誌を手に取り中身を読んでいたが、その最中で雑誌の間から一枚の紙が落ちた。

「ん? なんだこれ……?」

何かイベントの応募用紙のようなものを想像しながら用紙を拾い内容を確認すると、その予想とは大きく異なるものだった。

「っ!? エマさん……これ……!?!」

「うん? ……へっ……?」

書かれている内容を見せるとエマさんに見せるとエマさんも驚きの声を上げた。

その表紙には名前の記入欄に「朝香果林」と記載されたアンケート用紙が挟まっていた。

どうして果林さんのものが混じっているのかは不明だが、エマさんの反応を見る限りおそらくこの雑誌は元々果林さんが所持していた物だろう。

だが、今は誰の所有物であったかという話はどうでもよい。

問題はそのアンケート用紙に記載されている内容だ。

アンケートの内容はモデルのプライベートに迫るものとなっていた。

最初の質問は「モデルとして心掛けていることは?」という内容だが、それには「毎日ストレッチすること」と果林さんらしい回答が書かれていた。

そして、次の質問で「今、一番興味があることは？」の質問に対して果林さんが答えていた内容をエマさんが復唱する。

「……スクールアイドル……」

その次にある「休みにやってみたいことは？」に対しては「友だちと思い切り遊ぶ、お台場でブラブラ食べ歩いたり」と普段は聞くことが出来ないであろう内容がそこには書かれていた。

「これって……」

「果林さん、僕らの知らない所でこんなことを書いてたんですね」

昨日、エマさんに対して素っ気ない態度を取っていた人が書いていたとは思えない内容だが、わざわざ興味があることにスクールアイドルと書くという事は本人にその気はあるということだろう。

「エマさん、これは本人の望みを叶えてあげるチャンスじゃないですか？」

「えっ?」

「まだ、今日の時点でエマさんの中にも迷いがあつたはずですよ。であれば、それを払えるチャンスだと思いますよ」

先ほどの撮影時点では、まだエマさん自身も悩みに悩んでいたはず。

この用紙を見れば果林さんに対して次に何をするべきか、それは明白なはずだ。

「果林ちゃん……」

俺の言葉に聞いてエマさんは用紙を見つめる。

そして、真剣な表情のまま幾ばくかの静寂が流れる。

「……うん……私、いつてくる!!」

「へっ!? え、エマさん!?!」

エマさんは決心がついたのか、用紙と鞆を抱えて部室から立ち去ろうと駆け出した。

侑さんは驚きの声を上げるが、エマさんは足を止める事は無い。

いや、エマさん自身が俺に対して言うことがあつたのか、そこで足を止めた。

「かーくん! ……ありがとう」

エマさんはただ一言、俺を見ながらそうお礼を言い部室外へ出た。
「……待ってます」

俺はエマさんに届いていないことを承知の上でそう呟いた。

「さあ、エマさんは急用が出来て早退したという事にして、僕たちは練習を再開しましょう！」

そして、扉の方を見て呆然としている侑さん達へと振り返り、練習を再開するように促す。

だが、今日の練習の本題であるPV撮影が疎かになってしまい歩夢さんは不安になる。

「で、でも、エマさんのPV撮影は……？」

「それはきつと大丈夫です。エマさんならば……」

俺はスクールアイドル雑誌を手に取りながら、エマさんの成功をただただ祈るのみだった。

自信からか不安から来るものか分からないが、雑誌を握る力が強くなっており少し表紙に折り目が付いてしまっていたのはここだけの話。

今だからこそ出来ること

エマさんが部室からいなくなった後、練習内容を変えらるゝとしてせつ菜さんから指示があつた。

せつ菜さんは急にいなくなつたエマさんに苦言を呈していたが、本人の事情が事情なので今回は目を瞑ると言つていた。

このツケとして次回の練習で今日と同じミスをしたら罰を考へておくと言つていたので密かにぞつとしたのはここだけの話。

俺は歩夢さんの曲を作ろうかと思ひ、音楽室へ行こうとしたが慎に引き留められる。

「輝弥、一緒に外へ行かぬか？」

「外？」

突拍子もなく受けた誘ひに俺は彼の意図が読めずつい聞き返す。

「そつ、たまには外のレジャー施設で遊びに行かぬか？ 色んなスポーツで楽しめるし身体も動かせるので一石二鳥だろ？」

「まあ、それは妙案だと思ふけど、せつ菜さんが許してくれるのかな？」

後者の事情を聞くと魅力的な話ではあるが、前者の通り遊びに行くと思はれてしまい、流石に許可してくれないのでは、と疑問を口にすゝる。

だが、慎は心配ないと言わんばかりに力強くサムズアップした。

「大丈夫だ！ さっきの理由を説明したら絶賛して快く了承してくれただぜ！」

「……マジか」

大方、二人で沢山の血と汗の滲む練習を重ねてくるとかアニメの世界でありがちな台詞を言つてせつ菜さんを納得させたのだろう。

だが外に出る口実はさておき、俺は内心楽しみにしていた。

「じゃあ、今回は俺たち二人だけのこと？」

「そうだなあ。しづく達にも声を掛けたんだけど、かすみの遊びに付き合はされるみたいであつちは女子会つて名目で遊びに行くようだぜ？」

「そ、そうなのか……」

せつ菜さんとしては一年生組がこぞって帰る光景を見て、不審に思ったりしないだろうか。

彼女が認可したというならそこにとやかく言うつもりは無いが、にしても自由過ぎないかと俺は心配していた。

「まあ、慎と一緒に遊びに行くって今までやったことなかったもんね。折角だし二人で遊び尽くそうよ」

慎と二人きりでレジャー施設等に行き遊びに行く機会があまりなかったのだ。

いつもは部活で忙しかったり、時に遊ぶ機会はあってもしずくさんや他のメンバーも一緒だったりと中々男子限定での付き合いは少なかった。

故に俺はこのお出かけが楽しみだった。

「おうさー！ なら早速行こうぜー！」

俺のワクワクしている声を聞き満足した慎はニカッと笑いながら出発し、俺もそれに付いていくのだった。

レジャー施設内の競技場へ足を運び、これからやる競技の腕前を慎が確認してくる。

「輝弥、お前ってどれくらいボウリングは上手いんだ？」

「うーん、スコアは100前後の平均的なタイプだよ」

俺達は自分のサイズに合ったボウルを持ちながら割り振られたレーンへと歩いていった。

お台場には各種スポーツを楽しむことが出来る大型レジャー施設があるのだが、その一環で遊ぶことが出来るボウリング場にまず来ていた。

「へえー、俺も150前後でさまよう事が多いから似たようなもんだな」

「それ、だいぶ差がない?」

「ようはその時の気分でスコアが変わるって事だ!」

「……それはみんな同じことだ」

慎の奇妙な持論を聞き、苦笑いしながら俺は指定レーンにボウルを置いた。

ボウリングは姉さんと年に1回ほどのペースでやる程度のものだ。

お互いとりわけ得意というわけでもないが、二人で初めてやった際には似たようなスコアを叩きだしていたので、いつしか姉弟間での恒例イベントとしてボウリング勝負を行っている。

それに勝負が終わった後のカラオケで燃え上がった闘志が収まるのも実によく出来た流れだと今となっては思う。

「ただ普通にやるだけじゃつまらないから勝負しようぜ?」

「……なんか慎が勝ちそうな気がするけど、一応内容は聞いておこうかな?」

俺は決まり切った流れが頭に浮かんでしまい、慎の事を大人げないとも言うようにジト目で見つめる。

だが、慎はそんな俺の視線にはお構いなしで手に持ったボウルを俺に見せつけるように構えながら勝負の内容について触れていく。

「今回は三ゲームやるからその合計スコアで勝負だ!」

「負けた方は?」

「そんな大掛かりな罰ゲームにするつもりは無いしこの後に飲むジュースを奢るって事で」

慎はそこら辺の常識を弁えてるようで比較的穏便な罰ゲームであることに俺は内心安堵していた。

だが、勝負と言われたら俄然やる気が出てくるのが男というものなので慎の提案に賛成するように手に持ったボウルを突き合わせるように手を差し出した。

「ならオツケー。その勝負、乗った!」

こうして俺達だけの小さな勝負が幕を開ける。

「……やっぱり慎には叶いつこないなあ……」

慎とのボウリング勝負を終えた後、俺は予想していた結末である慎に奢るといふシチュエーションを実行していた。

最初は慎と30ほどのスコア差を叩きだされてしまったが、次第に感覚を掴んだ俺が二ゲーム目でスコア差を5まで持ち返した。

そして、そこまでの勝負で現在が部活の練習明けというのもあってか疲労が蓄積しており三ゲーム目では集中力が切れて結局慎に逃げ切られてしまった。

「ははっ、それにしても輝弥って凄くフォームが綺麗だよな〜？ 傍から見ればプロと思われても可笑しくないじゃねえか？」

「うーん、俺としてはあくまで自然とやってるだけだからあんまり自覚は無いんだけど……」

そう、慎は俺の投球中に事ある毎に投球フォームが綺麗と褒めてくれたので、それによる嬉しさと恥ずかしさが押し寄せてきたのも敗因の一つである。

しかも、この男は決して俺を陥れようとして言っているのではなくうんうんと唸りながら本心で褒めてくれていたので余計に俺としてはいたたまれない気持ちになってしまった。

「そうかな？」

「絶対そうだって！ 今度しづく達も誘って一緒にやろうぜ？ その時に見てもらえば俺の言いたい事が絶対分かってもらえるはずさ！」

「うーん、じゃあ楽しみにしておこうかな……？」

次回遊びに来る際にしづくさん達を誘う事も確定したことで自販機で買ったスポーツドリンクを慎に差し出した。

慎は「さんきゅ」とお礼を言いながら蓋を開けて一口ぐいと流し込んでいく。

「この後はどうする？」

「そうだなあ〜……折角だし外に出てそこらのベンチで風にでも当たろうぜ？」

慎の提案に賛成し俺達はレジャー施設内から出る事にした。

「にしても、慎にはどうしてもスポーツ系での勝負となると勝てないなあ〜」

レジャー施設を出てベンチへ向かう道中、俺はこれまでのスポーツが絡んだ慎との勝負を振り返っていた。

やはり運動神経に関しては何の方が秀でていることもあり、中々慎へ吠え面をかかせることが出来ない。

むしろ慎にその実力差を見せつけられ俺は茫然自失となっている始末だった。

「あのなあ、輝弥だって筋は良いんだぜ？　今回だって最終的には俺が逃げ切ったけど、一時はあと一歩まで迫ってきたじゃねえか」

慎ははあつとため息を吐きながら俺にガンを飛ばしてくる。

「それでも、最終的な結果は変わらずだよ？　慎の才能にはどうしても勝てないよー……」

慎がフオローしてくれるが、勝てないものは勝てないと俺は開き直る。

だが、最初は俺を励ますように言っていた慎だが捻くれる俺の態度を見てから怪訝な表情をしながら厳しく叱責する。

「ばあーか、才能なんでもんで言い訳すんじゃないやねえよ。そんなもんは出来ない自分の事を都合よく正当化しようとする甘い奴が言うセリフだぜ？」

そして、慎は俺から視線を外し表情が陰を落とす。

「それに、そうやって卑下ばかりされるとこっちだって楽しくなくなるんだよ……」

そんな慎の様子を見て、俺は自分の先ほどの行動を反省する。

「…………ごめん、俺が幼稚だったな」

「…………こうやって一緒に楽しく遊べるのもお前だからこそ出来る事な

んだよ。だからそんな興覚めするような事を言わないでくれよ……」
「……うん、気を付ける」

珍しく慎が気落ちしているので、俺は一言だけそう呟き前へと視線を向ける。

きつと彼の中で俺が隣で居るということが何よりも安心するという事だろう。

過去の彼の事情に関しては未知ではあるが、それでもそこまで想ってくれているという事は慎は俺に対して相当な信頼を置いているという証になるはずだ。

ならば、俺もその関係性を自らの手で壊したくはないので、これからも慎が楽しいと思ってくれるように自分の在り方を考えなくてはいけない。

俺としても、こうして厚い信頼を寄せてくれる人物が現れてくれたのだ。

絶対に手放したくない。

「じゃあ、今度は慎の泣きつ面を拝めるようにもつと練習しないといけないね？ それか今度はしずくさん達とチーム戦でもいいかもね？」

俺は重くなった空気を変えるように少し声色を明るくして慎へと話しかける。

慎も変わった話題にすぐ食いつき、明るい表情を見せる。

「へへっ、それもいいじゃねえか！ なら輝弥はしずくとのペアで決まりだな？」

「なら慎もかすみとのコンビで決まりだね？」

「なんでそうなるんだよ!?!」

「だって喧嘩するほど仲が良いって言うでしょ？」

「俺とあいつはそんな関係じゃねえっての!!」

慎とのいつもの喧騒が戻ってきて、俺はつい「ぷっ」、と笑いが込み上げた。

そして、慎もそれにつられて一緒に大きく笑い声を上げる。

二人でここまで声高らかに笑ったのは初めてかもしれない。

ひとしきり笑い合ったが、慎はまだお腹が痛いのか抑え込むような態勢を取っていた。

「はあっー……ありがとな、輝弥」

「どうしたの、いきなり？」

急にお礼を述べてくるので、思わず問いかけてしまった。

「こんな俺と一緒に居てくれてさ」

「そんなの当たり前でしょ？ 俺達、もう親友なんだしさ？」

「親友……」

慎が俺の言った言葉を反芻し考え込むような素振りを見せる。

そんな彼の様子を見て、俺はまた言葉のチョイスを誤ったかと錯覚し少し不安になってしまう。

「もしかして、嫌だった？」

「えっ、あつ、いや……そうじゃないんだ……。その……嬉しくてさ……」

「ふふっ、なんだか今日の慎は変だね？ 遊び過ぎてもうお眠なのか？」

「ふっ、俺を彼方さんと一緒にするんじゃないやねえよ……」

俺の冗談にも慎はそつと微笑みながらツツコミを入れてくる。

そうやって返してくるといふ事は俺の言葉は間違っていないんだと密かに安心していた。

「俺達、ずつと友達だよな？」

「当然だよ。慎が俺の事を友達とってくれてる限り、俺も慎の事、ずつと友達だと思ってる」

不安気に聞いてくる慎に俺は間髪を入れずに返答する。

そして、俺はずつと彼に向けて手を差し出す。

「これからも、よろしくね？」

慎は何か込み上げるものがあるのかぐつと口を噤むと首を横に数回振ると、俺の手を握り返してきた。

「ああ、もちろんだ！」

そう力強く返答する慎の表情はすこぶる晴れやかだった。

互いの友情を認識し合った後、俺達はこの先の事を話し合った。

「さて、気持ちも新たにできたことだし、この後どうするか？」

「そうだね、もうお開きにしてもいいけど……」

俺はそう言い、周囲を見渡す。

その時、とある二人の姿を見つける。

(あれは……果林さんとエマさん?)

そこには果林さんとエマさんがいた。

二人だけで遊んでいるのか、エマさんがはしゃいでいる様子を見て果林さんが一緒になって笑顔で楽しんでいる様子だった。

「慎、今日はここら辺にしようか。俺はちよつと姉さんから頼まれた用事があるから先に帰っていいよ」

「ん、そうか? 分かった、じゃあまた明日な! 輝弥、今日は楽し

かったぜ!」

「うん、俺も楽しかったよ」

俺は姉さんからのお使いと嘘を吐き、慎と別れる。

何も聞き返さずにいてくれるあたり、慎が純粋な少年で居てくれてよかったと心から思った。

慎と別れた後、二人の様子が気になり密かに尾行した。

二人はダイバーシティから南下した先にある科学館へ入っていった。

「もしかして……さっきのアンケートに書いてあったことを……?」

俺は二人がここにいる経緯を振り返り、果林さんが回答していたアンケート内容を思い出した。

『友達と楽しい切り遊ぶ、お台場でぶらぶらと食べ歩いたり』と書いてあったので、エマさんはそれを叶えようとして果林さんを連れ出したのだろう。

俺も科学館内へ足を踏み入れ、二人を探そうとしているとどこからともなくエマさんの声が聞こえてきた。

「……して言ってくれなかったの?」

「エマさんの声……この先かな?」

そこまで遠い場所にいるわけではないと確信した俺はいる可能性が高い場所に足を運んだ。

案の定、そこには果林さんとエマさんが立っていた。

エマさんは一枚の紙を果林さんに見せつけている。

恐らくアンケート用紙だろうとすぐに察しがついた。

俺は柱の陰に隠れて二人の会話を傍聴していた。

「私には興味無いふりをして……自分の心にしまいこんで……」

「……………」

エマさんの痛烈な訴えに果林さんは目を背けながらただ黙っていた。

本人としてもなんて返せばいいのか分からないのかもしれない。

「ねえ、この前に言ったこと覚えてる？」

「……………何かしら？」

「私、みんなの心をポカポカにできるスクールアイドルになりたいと思ってるってこと。でも……私は一番近くにいた果林ちゃんの心を癒してあげられてなかった……。それどころか果林ちゃんの悩みの種になって……。こんな私が人の心を温めてあげるなんて出来な
いよね……」

エマさんが胸中を吐露してる姿を見て、俺は胸が痛くなった。

今まで何も言わずに付いてきてくれた果林さんが友人である自分には一言も相談せずに一人で抱えていたこと。

それは、まるで昔の自分を見ているようだったからだ。

周囲の人間からの圧力に押し潰されて何もかも嫌になりかけていた時、姉さんが自ら発起して助けてくれたこと。

あの時は俺がSOSを出したわけでもないし、俺自身もどうすれば良いのか分からなかったが故に何も言えずにいた。

姉さんの行動がなければ自分は破滅していたかもしれない。

実は果林さんも俺と状況は異なるが似た心情であったのかもしれない。

スクールアイドルとして琢磨しているエマさんの姿に憧れを抱きつつも果林さん自身で何かが邪魔をして誰にも相談できずに一人で抱えてしまっていた。

故にその苛立ちからエマさんにも冷たく当たってしまったのだ。

ではないか。

「……それは違う……！」

「果林ちゃん……？」

エマさんの自分を卑下する発言を聞いて、果林さんは少し声を荒げて否定した。

「エマは……十分私の心を癒してくれていたわ……。そんな事を言わないで……」

果林さんは大好きなエマさんの事を否定するのはやめろと言わんばかりに、エマさんに鋭い視線をぶつけた。

そんな果林さんを見てエマさんは萎縮してしまうが、すぐに穏やかな眼差しに変わる果林さん。

本当にこの人はエマさんの事を大事にしているんだと分かる瞬間だった。

「……エマの為に同好会を手伝うようになって……。そしたら、楽しかったわ」

「……………」

果林さんの意外な心情が吐露され、エマさんは目を見開いた。

「皆で一つの目標に向かって……。悩んだり……。言い合ったり……。笑ったり……。下らないと思って遠ざけてきた事が……。全部楽しかった」
楽しかった、そう発言する果林さんの表情は優しいものだった。

だが、そんな表情になったのも束の間、苦悶の表情をしながらエマさんから身体を背ける。

「でも私は……。朝香果林はそんなキャラじゃない……。一人でクールに格好つけて、一人で大人ぶって……。気付けば独りになってた」

痛烈に自分へダメ出しをする果林さんだが、その身体は小刻みに震えていた。

群れるのは苦手と何でも一人でそつなくこなす一匹狼な果林さんを一人の人間として格好いいと思っていたのだが、その裏は凄く繊細なものだった。

エマさんの為と思っていたことが実は自分も感化されてしまっていた。

だけど、元々定着していた一匹狼のイメージが果林さんを縛り付けていた。

故にそちらの世界に入ってしまったら本来の自分ではなくなってしまうのではないか、そんな畏怖もあったのかもしれない。

「分かったでしょう？ 悪かったのは私、エマのせいじゃないわ。エマならきつと皆の心を……」

「……果林ちゃん」

必死に言葉を紡ぐ果林さんを黙らせるように後ろからエマさんが優しく抱き締める。

それは一人で藻掻くことしかできなかった果林さんを守っているようにも見えた。

「……エマ……」

「いいんだよ。どんな果林ちゃんでも、笑顔でいてくれるならそれが一番だよ」

どんな果林ちゃんでも。

それはクールな果林さんもみんなと和気藹々とする果林さんも全てを受け入れるというメッセージだった。

自分の腕を握って一人の寂しさを誤魔化していた果林さんもエマさんの行動により自然とその力が弱まって無気力になっていた。

「だからきつと大丈夫だよ」

エマさんは果林さんから離れ、少し距離を開ける。

果林さんは突然解放された身体に疑問を持ち、振り返るとエマさんは満面の笑みで果林さんを見ていた。

「もつと果林ちゃんの気持ち、聞かせて？ 私に！」

そう言いながらエマさんは果林さんへ手を差し出す。

そして、とある曲を歌い始めた。

聞き覚えのあるフレーズに俺はすぐに自分の予想を口にした。

「このメロディー……あの時の……っ」

それは昼休憩にエマさんへ聞かせた曲に歌詞を付けたものだ。

あの時は作曲のみをしていたのだが、エマさんはそれをこの短時間でそれに合う歌詞を考えていたのだ。

どこでそんな時間を作ったのかは分からない。

果林さんに対する想いがこの曲に相応しい歌詞を浮かび上がらせたのかもしれない。

アカペラで歌っているエマさんは所々リズムやフレーズが臆気になっっているが、それでも彼女は笑顔でいる事をやめない。

そんなエマさんに俺と果林さんは終始釘付けだった。

目の前にいる人に向けた歌を笑顔で、全力で歌う事により、自然とその人の心を癒している。

俺も遠目で見ているにも関わらず、エマさんの姿が眩しくて彼女の笑顔を見て元気や勇気が湧いてくるようだった。

スクールアイドルに憧れて故郷を離れ異国の地にやってきたエマさん。

果林さんに支えてもらいながら自分の在りたい姿を見つける事が出来た彼女が今度は助けてくれた独りの少女に勇気を与える番。

俺はそんなソロステージに見惚れてしまうのだった。

感傷に浸っているとエマさんの歌は終わっていた。

「……果林ちゃん」

歌い終えたエマさんは息を切らしておらず、ただ真っ直ぐに目の前にいる少女を見つめ、その名前を呼んだ。

果林さんは目の前で太陽のように眩いキラメキを放つエマさんにその表面を覆っていた冷たい氷を解かされていた。

「スクールアイドル……出来るかしら？ 私に」

微笑みながら問いかける果林さんにエマさんは最後の一押しを掛ける。

「やりたいと思った時から、きつともう始まってると思う！」

「ふふっ、そうね♪」

エマさんの答えに満足した果林さんは彼女に匹敵するほどに眩しい笑顔を放っていた。

大団円で収まったところを見て俺は踵を返し、二人に気付かれないように施設内を出た。

「……やりたいと思った時から、既に始まって……」

風に吹かれながら一人歩いていると先ほどのエマさんの言葉が脳裏を過り、つい口に出していた。

それを眩きながら帰路に着いていると道中でせつ菜さんのお披露目ライブがあった場所が見えてきたのでそちらの方角に目を向ける。

「俺のこの活動も、やりたいと思ったあの時から始まってたんだな」

せつ菜さんのステージを見て、スクールアイドルの眩しさを知ったあの日。

そこから慎と一緒に同好会の事情を聞いて回ったり、同好会の再起を願って奔走したのが既に懐かしく思えてくる。

「まだまだ、俺の人生は始まったばかりなんだ……」

柄にもなく一人そう眩き、俺はダイバーシティを後にし帰路に着くのだった。

オンリーワン

果林さん達の仲直りを見届けた翌日の放課後、俺は部室へ寄らずに音楽室へ来ていた。

というのも、今回は自分の意思で来たのではなく人から呼び出しを受けて足を運んだのだ。

「お疲れ様でーす………?」

呼び出した人が既に来ているかどうか分からなかった為、室内の反応を伺うように挨拶をする。

しかし、俺の挨拶に対しての返事はなかった。

「まだ来てないか……。じゃあ、何をしたいようかな……」

音楽室の入り口で突っ立っているわけにもいかないので、とりあえず荷物を置いてピアノの前に行こうかと思った時、俺の耳元に優しい吐息が聞こえてきた。

「ふう〜……」

「ひゃうあ!?! えっ、果林さん!?!」

急にこそばゆい感覚に襲われ、顔の温度が上がるのを感じつつ耳を守るように隠す。

そして、吐息を感じた方向へ振り返るとそこには果林さんが立っていた。

「ふふっ、輝弥くんってば可愛い反応するわね?」

「もう果林ちゃん〜、行くのが早いよ〜!」

果林さんは俺の反応を見てからかう様に笑う。

そんな果林さんの後ろからは、エマさんが走ってこっちにやって来ていた。

「あつ、え、エマさん……どうして果林さんまで……?」

今回、エマさんから指名を受けたのだが果林さんが来るという情報までは聞いていなかったの、俺は余計に頭が混乱していたのだ。

「ごめんね、かーくん。実は今日かーくんを誘ったのは果林ちゃんと決めたことなの」

「そ、それはどういう……?」

エマさんは悪びれるように暗い表情をしながら謝罪をする。
そんな彼女の様子に状況が追い付いていけず、思考が固まっていると果林さんが解説してくれる。

「エマの曲を輝弥くんが作ってくれたって聞いてね。まだ途中までしか出来てない感じだったから一緒に完成させようと思って」
「あ、あの時に歌った……」

果林さんはどうやら昨日エマさんが歌った曲について、まだ未完成であることに納得がいかなかった様子でそれをエマさんの曲として完成させようと奮い立っていた。

それと同時に俺は果林さんのとある単語が引つかかった。

「ん？ 一緒に……？」

「ふふつ、そうよ。まだ申請は出してないけど、私、スクールアイドル同好会に入ることにしたから」

「えっ、そうだったんですか!？」

俺は昨日二人が仲直りする場面を目撃してしまっているのですが、その情報は薄々勘付いていた事なので驚くことは無いのだが、こっそり陰で見ていることがバレるわけにはいかなかったので驚いたりアクションを取る。

だが、果林さんは白々しい俺の様子に笑みを浮かべながら目を細める。

「……輝弥くん、『あの時に歌った』ってどこかでエマが歌ってる所を見たことがあるのかしら？」

「……いや、別にそう言うことじゃないですよ。エマさんと一緒に曲を作った時に練習していただけですから……」

「ふう〜ん？ エマはこの曲はメロディだけ作ってもらったって言うって歌ったなんて一言も言っていなかったけど？」

俺は自分で地雷を踏んでしまった事を後悔しつつ、なんとか切り抜けられないか必死に頭の中を回転させた。

「えっ？ 果林ちゃん、私は別にそんな事言っていなかったよね？」

「へっ、ちよっ……エマっ!？」

果林さんは昨日の出来事を見られていたと思い、問い詰めようと俺

に鎌を掛けたようだがエマさんが果林さんの意図を読めず彼女が用意した鎌を全力で蹴り飛ばしていた。

「果林さん……」

「なっ、べ、別に何でもないわよ！ からかうような真似をして悪かったわね！」

俺は果林さんへ冷ややかな視線を向けると果林さんは突っぱねるようにぷいっとそっぽを向いてしまった。

「そ、そこまで怒らなくても……」

「大丈夫だよ、かーくん。果林ちゃん、少しムキになってるだけだから♪」

「も、もうエマもやめなさいよー！」

拗ねる果林さんを宥めるようにエマさんが頭を撫でるが、果林さんには逆効果だったようですぐにエマさんから離れて頭を手で隠した。

やはりクールな果林さんでも母性の塊であるエマさんの前には歯が立たなかった。

「と、とりあえず話を戻しましょう。果林さんは色々あつて同好会で一緒にスクールアイドルをやる、エマさんは昨日作った曲を完成させたいって事で良いんですね？」

話が大きく逸れてしまったので、二人がここに来た目的と経緯について確認する。

果林さんも軽く咳払いするとすぐにいつもの飄々とした様子に変わる。

「そうね、みんなに入部の事を話す前にエマの曲も完成させてから一緒に報告したいと思って」

「……となると悠長に構えているわけにはいきませんか？」

「ふふっ、そういうこと♪」

ただでさえせつ菜さんはエマさんが練習をドタキャンしたことで少しご立腹だ。

そんな中でもしつかりと自分のやることをやってみせたのだと言う所を見せていかなければいけないが、こういう事は短期決戦が効果的だ。

遅くになって言い訳をしながら説明するというのは些か格好がつかないというもの。

エマさんの面目に保たねばならないので気合を入れる事にした。

果林さんもそれを承知の上で俺を呼び出してこうして直談判してきたのだ。

彼女らの期待に応えねばと俺は兜の緒を締め直すのだった。

「これで形になりましたね……」

「そうね、後はPV撮影を完了させるのみね」

エマさん達と楽曲作りを始めてからどれだけの時間が経っただろうか。

音楽室へ来た時には青空が広がっていたのに、今の時点で黄昏れが訪れているので少なくとも2時間以上は経っているだろう。

俺は完成したピアノの楽譜を手に取り、一つのファイルにしまう。

「これは今日中に僕が編曲して明日にはエマさんにお渡しできるようにします」

「かーくん、本当に何かから何までありがとうね。かーくんが居なかったらもっと苦労してるだろうから凄く助かったよ」

エマさんはそうお礼を述べると労うように笑顔を向ける。

彼女のこの表情を見るだけで先程まで楽譜と睨めっこして痛んだ目が癒されていくように感じる。

「にしても、楽曲一つ作るだけでも本当に骨が折れるわね。これを10人分作るなんて輝弥くんに対しての負担が大きすぎない？」

果林さんは首の疲れを癒すために肩をほぐすと自分のスマホで同好会メンバーの既にアップされている動画を眺める。

果林さんからしたら楽曲についてはソロとはいえど皆で協力して作っているものだと思うっていたので、俺がピアノが弾けるということ

で作曲に抜擢されているのは衝撃のようだ。

「それでも、歌詞は皆さんが書いているんですよ？　僕は皆さんのイメージに合う曲を、僕の持ち味であるピアノを用いて担当させてもらってるのであまり苦痛は感じないですね。むしろ楽しいです」

「そうなのね。……ねえ、今後は私の為の曲も作ってくれるのよね？」
「もちろんです。果林さんだけを蔑ろにするつもりはないですし、むしろどんなイメージになるのか凄く楽しみにしている自分もいます」
俺は果林さんの質問に対して屈託のない答えをぶつける。

果林さんは既存のメンバーとは全く違う雰囲気醸し出しているので、それをどのように工夫すれば際立たせることが出来るのか、今からわくわくしているのだ。

迷いのない答えを聞き、果林さんは安心したように笑みをこぼす。

「なら、これから沢山頼らせてね、輝弥くん？」

「ふふっ、こちらこそ果林さんのいろんな姿を見せて下さいね？」

次の楽曲制作に向けて気持ちを高めているとエマさんが俺たちのやり取りを見て、頬をぷくつと膨らませる。

「もう二人だけ仲良くして欲しいよ〜！　私も混ぜて♪」

そう言うときエマさんは俺たちの身体を自分に引き寄せて精一杯のハグをしてきた。

「うわあ!?!　エマさん、流石にそれはストップです……!」

「あらっ？　輝弥くん赤くなってるの？　じゃあ私も一緒に……ぎゅーっ♪」

エマさんのハグで赤くなる俺を見て、果林さんも悪戯心が芽生えたのか俺の腰に手を回しエマさんとの間に俺を挟み込み、いつの間にかサンドイッチになっていた。

ただのサンドイッチならいいが、それで終わらないのがこの二人なのだ。

二人のお身体は世間一般で言う美ボディというもの。

それでサンドイッチにするということとは……つまりそういうことだ。

更にやばい状況になったのを察した俺は抜け出そうと試みるが腰

に手を回されている関係上、逃げるといふ選択肢が残されていなかった。

現実是非情である。

「か、か、果林さん、それは流石に勘弁して下さいよー!!」

それから二人が解放してくれたのは十分後のことだった。

「うう……散々な目に遭った……」

ようやく解放されたのだが、楽曲制作時の疲労も合わさり今までに見ないような怠さが体を蝕んでいた。

そんな中で俺は最後に誰かいないかと思い、部室へと足を運んでいた。

ちなみに果林さんたちは既に寮へ帰ってしまったので、今は俺一人だ。

部室棟へ入ると電気が点いているので、棟内にはまだ人が残っていることが窺えた。

「まだ電気が点いてるなんて熱心だなあ……」

自分の眩いたことがブーメランとなっていて、自覚しつつ同好会の部室前へ行くと、扉の隙間から光が漏れていた。

「ん？ こんな時間まで一体誰が……？」

俺は中にいる人が驚かないように扉を静かに開けて、部室内を覗く。

中にいるのは練習熱心なせつ菜さんかと思っていたが、その予想は難なく崩れ去るのだった。

「ううくん、これじゃあかすみんの魅力を届ける事なんて……」

部室ではかすみと鏡と睨めっこしながら、何か考え込んでるようだった。

「かすみ？ こんな時間までどうしたのさ？」

「えっ？ かぐ男、なんでいるの!？」

俺はかすみに声を掛けながら部室へ入ると、彼女は途轍もない回転でこちらへ振り向いた。

まあ、今日の練習は欠席する旨を連絡していたので俺がいることに驚きが隠せないのは無理もないだろう。

「別に、これといった理由は無いけど……誰か残ってるのかなって思ってた。そういうかすみはどうしてまだ残ってるのさ？」

かすみからの質問に答えると、今度は自分の番とかすみへ居残りの理由を確認する。

「今日の練習で上手く出来なかった所があつてね、それを完璧にしよ
うと少しだけ残ってたんだー」

「それって、ポージングのこと？」

部室から覗いていた時にかすみは全身鏡の前にポージングを確認していたので、おそらくはその練習だろう。

しかし、かすみは他のメンバーと違ってそこまで粗が残っているようには見えないのだがどうして彼女はそんな練習をわざわざ居残りを
してまで実施しているのか分からなかった。

「そうだけど、もしかしてかぐ男……覗いてたの？」

俺の予想が的中していたことを教えてくれたかすみだが、自分の行動を知っている様子の俺に対して不審な目を向ける。

「それに関してはおめん。いきなり扉を開けて驚かせたくなかったんだよ。それよりも、かすみってポージングの時は指先にまで集中して特に気になる所は無かったと思うけどそんなに駄目だった？」

俺は陰で覗いていたことを詫びつつ、状況の補足を行う。

その内容にかすみはムツとした表情をしながらも納得が言ったよう
でこれ以上追求しなくなった。

「確かに振付に関してはミスはないと思ってるよ？ だけど、今のま
まじゃゆうぞうむぞうのスクールアイドルの中に埋もれちゃうから
ダメなのー！」

「ゆうぞう……？ ……もしかして有象無象……？」

「あつ……そ、そうとも言うー！」

「……そうとしか言わないよ……」

かすみは難しい言葉を説明しようとしたが、逆に自分が勉強を苦手として露呈する羽目になってしまった。

かすみの勉強についてはそこまでにして、俺はかすみの言ってることについて言及する。

「それで、有象無象のアイドルの中に埋もれちゃうって言うのは？」

「あのね、今じゃスクールアイドルは全国でも数えきれないほど多くいるの。そんな中でみんなと同じことをしているだけだと『ただみんなと同じことが出来るだけの取り柄が無いアイドル』っていう印象を与えちゃうんだよ」

かすみの自論に俺ははっとする。

スクールアイドルはラブライブと呼ばれる公式大会が年2回のペースで開催され、毎回観客席が満席になってしまうほどの人気っぷりだと慎から聞いたことがある。

それがアイドル達と同じ高校生らへ瞬間に広がっていき、自分たちもやってみたいと初めの一步を踏み出す子たちも少なからずいるのだ。

その結果、スクールアイドル人口は増加していき、ただ可愛い、ただカッコいいだけでは人気を勝ち取れないレベルへと最低水準が上がってしまっているのが現状だ。

「この同好会は基本的にソロアイドルが主軸だからステージ上で比べられるわけじゃないけど、それでもステージ外でそういった論争は出てくると思うの」

「確かに、みんな個性的で魅力的なメンバーだもんね」

俺はかすみの話を聞きながら机の近くにあった椅子へ腰かけ、もう一個椅子を近くへ寄せてかすみも座るように促す。

かすみは「ありがとっ」と一言お礼を述べて水を飲みながら腰を下ろす。

「そうそう。ただでさえせつ菜先輩はその熱いステージで応援してくれるファンの心を掴んでるし、彼方さんやエマさんも持ち前の包容力でステージを自分の世界に変える。ましてや初心者である歩夢先輩もこの前に撮ったプロモーションビデオで密かに人気を集めてるし

で、うかうかしてられないんだよ」

かすみはいつもの可愛い子ぶる様子を一切見せず、手に持っているペットボトルを真剣な眼差しで見つめていた。

「かすみは前にも言ったように誰より可愛い姿を見せて、フアンの人達をキュンキュンさせたいの。だからどういった角度から映せば一番かわいい私を見せられるのかを研究してる。私にしか出来ない唯一のきらめきを見てもらうために……」

いつになく貪欲な姿勢を見せるかすみに対して、俺は彼女へ向けていた印象を改める。

彼女への第一印象は自分が誰よりも可愛い人間であること—— 実際可愛いのだが—— をみんなにひけらかすようなオツムが弱い印象を持っていた。

無論、彼女ともこうして同じ時間を過ごしていく内にそれは大きな間違いだったことは認めている。

しかし、ここまでストイックに自分の持ち味を研究しているとは思っていなかったので、そんな姿が俺には凄く眩しく輝いていた。

「かすみはかすみなりの可愛いを表現するために常に研究を重ねているんだね」

「それは当然だよ！ かぐ男だつて自分の事をかっこよく見てほしくて仕草を意識したりファツションセンスを磨いたりするでしょ？」

「まあ……確かにそれはあるね……」

好きな人に対して自分の良い所を見てもらいたいと思うのは人間として当たり前前事なので、妙に説得力のある例えに俺は腑に落ちる。

「まあ、かぐ男の場合はしず子に対してかな？」

「はっ!? 別にしずくさんの事は関係ないよ!?!」

かすみは突然いたずらっ子のような表情でこちらを見つめ、俺の身体を自分の肘で突っついてくる。

いきなりこの場にいないしずくさんへの好意を話題に出され、俺は顔の温度が急上昇してしまう。

「ええ〜? だつてえ、かぐ男つてばいつもしず子をさん付けで呼ぶ

じやくん？ それってしず子に対してのかすみ達とは違う思い入れがあるって事じゃないの〜？」

「……確かにしずくさんは一緒に同好会を再起させようと手を取り合った友達だよ。しずくさんが抱えてた葛藤も悩みも俺と一緒に受け止めてあげたいって思えた大切な人。……ただ、それだけだよ」「……それだけって言うけど、随分と大きくない？」

しずくさんに感じている事ただ純粹にまとめたただが かすみは何か思う所があったようでジト目でこちらを見つめていた。

「べ、別に俺が思ってることを正直に話したただだよ？ 本当に……」「ふうくん、なんだか惚気話を聞かされてるようであつと腹立たしかった」

「な、なんでそう解釈しちゃうのさ!？」

変に茶化されるのも嫌なので言葉を選んだつもりだったが、かすみは氣に入らず口元がへの字になってムツとしていた。

「ま、いいんだけどさ、こつちもかぐ男の話になるとしず子がいつにも増して意気揚々になるから何かあつたのかなあ〜、って思っただけだよ」

「しずくさんが……?」

かすみが告げた意外な真実に俺は驚きを隠せなかった。

確かに、同好会では女性陣の中だとしずくさんと一番仲が良いと勝手に思っていたが、どうやら彼女の方も同じように感じていたという事だろうか。

「そうそう。って言ってもしず子も無自覚だから気付いていないんだけどね」

かすみは話を切り上げるように「よいしょっ」と声を出しながら立ち上がり、机の上に置いていた自分の鞆を持つ。

「さてと、かすみさんはそろそろ帰ろうと思うけど、かぐ男も帰る?」

「あつ、うん。そのつもりだよ」

「なら、ぱぱっと着替えてくるからちよつと待っててよ。途中まで一緒に帰ろっ?」

かすみの急な提案に俺は嫌な顔をすることなく承諾した。

かすみはロッカールームで制服に着替えている最中、俺は部室棟の前で待機していた。

彼女を待っている中、俺は先ほどこすみが言っていたことを思い出していた。

「……しずくさんも俺と一緒に居る事を楽しいと思ってくれてるのか……」

かすみと話していたしずくさんが俺の事になると口が達者になること。

確かに最初に会った時と比べてお互いに砕けて話せるようになったと思える。

それに性格も生真面目で堅物とこれまた似た印象を受けたところも親近感が湧いて、波長が合うと感じていた。

しずくさんも同じ印象を持ってきているのならば、と想像すると嬉しくなってきたつい笑みがこぼれてしまう。

だが、それと同時にとある考えも脳裏によぎってしまい俺の口元から笑みがなくなっていく。

「でも、もし向こうが逆の事を考えていたら……」

そう言いながら頭に浮かぶのはしずくさんが俺に対して特別な感情を抱いていなく『ただ話すのが楽しいだけの異性』という印象を持っていたら。

俺だけが勝手に舞い上がっていて、向こうは冷めていたら。

温厚なしずくさんがそんな冷たいことはしないと信じているが、可能性はゼロとは言い切れない。

人間関係とは言葉に出すことが全て真実であるとは限らないのだから。

常に人とは自分の心の中に秘密を隠しているものだ。

過去の出来事が未だ思い出される俺も同じだ。

吐き出したところで何も変わりはないからこそ、自分の心の奥底

へ眠らせている。

そして、ふとした瞬間にそれが起き上がり、俺を蝕んでいく。

しずくさんも裏でそんな事を思っていたら、と想像すると俺は考えなしに喜べずにいた。

「まあ、かすみが言ってたことをしずくさんに話さなければいけないだけだよ……」

知らぬが仏という言葉があるようにかすみから聞いたことを内密にしておけば、お互いに今まで通りの良好な関係を築けるというもの。

そんな事を思い、俺はひとまずこの件に関して考えるのをやめる。それがお互いの身の為だと自分の心に言い聞かせながら。

ありのままの自分を

「かぐ男、お待たせー!」

部室棟の扉前で突っ立っていると、制服に着替えたかすみ姿を現した。

俺を待たせていることを気にしていたのか、少し息が上がってるように見える。

だが、そんな中でも服装や髪型が乱れた様子はないので、そこは流石アイドル意識を強く持っていることが伺える。

「パパッと着替えたつもりなんだけど、待った?」

「いや、そんなことないよ? じゃあ行こっか」

かすみは待たせたのではないかと少しだけ不安にしていたが、余計な心配をさせないように返事をする。

そして、帰るように促すとかすみも「おおー♪」と快活に返事をするのだった。

「いやあ、にしても今日の練習も疲れたなあ。かすみん、もうお腹ぺこぺこだよお」

部室棟を出発し、かすみは疲れた身体をほぐすように両手を空へと向ける。

そして、うーんと身体を伸ばした後、お腹を落ち着かせるようにさする。

そんなかすみを横目に俺は彼女に話そうと思っていた事を切り出した。

「そういえば侑さんから聞いたんだけど、かすみって以前にあの人の前で歌を披露したって本当?」

俺は以前に侑さんが言ってた事を確認する。

『かすみちゃん達の歌を完成させてほしい』

その言葉をきっかけに始めた作曲だが、今では歩夢さんの曲はひとまず形になりつつある。

彼女の人となりに触れた結果、自分でも納得のいくメロディーが浮かんできたので、歩夢さんに曲を渡せる日はそう遠くない。

しかし、かすみの曲はまだ一切手をつけられていなかった。

その理由も至極単純なもので俺自身が中須かすみという人物のことを何も知らなかったが故に手を付けられずにいた。

今までは猫かぶりキャラという印象が強かったために俺が意図せず彼女と距離を開けてしまっていた節があった。

だが、今日のストイックな姿勢とスクールアイドルに対しての考え方はその凝り固まった印象を変えるのに十分だった。

「えっ？ まあ確かに侑先輩には聞かせてたけど、もしかしてあの人が言ってたの？」

「うん、かすみが内に抱えてるものを腐らせるのは勿体ないってあの人がね」

「そっか〜！ やっぱ侑先輩は見る目があるねえ〜♪ かすみんの事を可愛いって一言言ってくれる人も侑先輩だし、やはりあの時声を掛けたかすみんの目に狂いはなかった……！」

侑さんが話してたことをかすみに聞かせると照れ隠すように身体をくねらせて満更でもない表情をしていた。

上機嫌なかすみの横で俺はふと足を止める。

不思議に思ったかすみは同じように足を止めて、こちらを見つめる。

「かぐ男、どしたの？」

「俺、かすみに謝らなくちゃいけない」

「えっ。なんなのさ、いきなり!？」

唐突な告白にかすみは驚きの声を上げる。

「かすみの事を今までは自分の可愛いを押し付けるわがままな人だと思ってた。でも……今日のかすみを見たら、それは真っ赤な嘘だっと思ひ知らされて……俺はかすみの本質を知らずに勝手にわがままな人ってレッテルを貼って……勝手な価値観でモノを判断してた事が凄く恥ずかしい」

俺は彼女に抱いてたことを正直に口にする。

自分の中でしか考えていないことを誰かの前で、ましてや本人に話すなど俺も随分と質が悪い事をしていると自覚はしている。

だが、一度言葉にすることで自分の気持ちを整理したかったのだ。

「だから……本当にぐめん……！」

俺は深々とかすみに対して頭を下げる。

かすみが俺の言葉を聞いてどう返すのかは皆目見当がつかない。

許すか否か、または叱ってくるかそうじゃないか。

彼女の言葉を待っているとかすみが口を開いた。

「かぐ男、そんな事を思ってたんだね」

「ああ……」

かすみの声色からだと言葉の表情が掴めないため、俺はただ相槌を打つしか出来なかった。

だが、かすみはそんな俺の顔を両手で掴み、自分と目を合わせさせる。

「むっ!!」

「ひいつ!」

顔を上げた瞬間に映っていたのはかすみの怒り顔だった。

「かぐ男って全然デリカシー無いね!!」

「……へっ?」

いきなり説教から始まり、俺は状況に追いつけずにいた。

「それってかぐ男が自分の中で思ってた事なんですよ? それをかすみに言うってどういうセンスしてるのさ!? そんなの『反省してる自分かっこいい』とか思ってるキザな奴のやることだよ!!」

「えっ……でも、俺は本当に……」

矢継ぎ早に喋るかすみに弁解を挟もうとしたが、その隙すらも与えずかすみは続けていく。

「だったら尚更自分の中だけで整理するか、かすみんのいない所でやりなよ! それを聞いてかすみんが『かぐ男、わざわざ言ってくれるなんて優しいねえ♪』とか言うと思った!? そんなのありえないしむしろ聞かされる身からしたら溜まったもんじゃないよ! かぐ男自身が気持ち良くなってるだけかかすみんは全く良い気分にならない

いからね!？」

彼女の言っていることは正しい。

俺はかすみとの距離を縮めるための口実として、彼女を貶していたことを暴露という横暴に出してしまったていた。

本人としては対等に接してくれていたのに俺は無意識のうちに見下すような形で彼女を見ていたのだ。

そんな扱いをされていたことを知って憤慨しない人間はいない。

そこで『しっかりと反省している輝弥、素敵♪』なんて思う人は相当なバカか自己陶醉が強い人間だろう。

かすみの真っ正直で、尚且つ真っ当な意見に俺は何も言えなかった。

「……そうだね……俺も考えなしだった……」

「全く、かぐ男からそうやって扱われてたなんて本当に心外だよ！

しず子とかだったら二度と口を聞かなくなるんじゃない？」

「うっ……そ、そうかも……」

先ほどの失言をしくさんにしていたら、と思うと同時にかすみからの叱責を彼女からされたらと想像すると俺は悪寒が止まらなかった。

「俺……最低な事をしたな……」

自己嫌悪に陥りうなだれているとかすみが声を掛けてきた。

「……まあ、かぐ男がそう思う気持ちも分かるよ。かすみもそうやって言われた事あるし」

「えっ?」

かすみの発言を驚いて顔を上げるとかすみは達観したような表情でこちらを見つめ微笑んでいた。

それはこちらへの同情から向けられたものではなく、感傷に浸るような雰囲気醸し出していた。

「私もね、スクールアイドルを目指すと決めてからこのスタイルを貫いてただけど、やっぱり批判されることも少なくなかったの。『自分の事を可愛いつて言うなんて、随分と欲しがりだね』なんてことも言われたし」

「そう……だったんだ……」

かすみの過去を聞いて俺はトラウマを呼び起こさせてしまったように罪悪感が湧いてくる。

だが、かすみは空気を交えるように声色を一段と明るくする。

「でも、そんな言葉は気にしないようにした。だって、欲しいものは欲しがないと絶対手に入らないから！ 自分の心の中だけで留めておくなんてしたら誰の心にも届かないし、しっかりと自分の声で発信することが相手に要求する上で一番の近道だから！」

かすみは目をキラキラと輝かせながら訴えてくる。

前進の仕方を学んだ彼女だからこそ、この言葉はより説得力を増している

目の前ではきはきと語るかすみの姿に俺は心を奪われていた。

「……強いなだね、かすみって」

「えへっ、それも過去があるからこそだよ。昔言われたからこそ今のかすみのやり方を決定づける事も出来たし、あの言葉らのお陰で挫折することもなくなったんだから！」

かすみは胸を張りながら言い切る。

彼女が俺の想像している以上に苦しい道を歩いていたことを知り、ますます彼女の力になりたいと強く思うことが出来た。

「ありがと、話してくれて」

「ま、まあ、かぐ男があんな発言をしたからしょうがなくというか……かすみんのこんな話、滅多に聞けないんだから聞いた以上は誰よりも可愛い曲を作ってよね!？」

俺の素直なお礼にかすみは恥ずかしくなったのか、途端に口を籠らせてしまう。

だが、それも束の間恥ずかしさをひた隠すように、ピシッと指を俺に突きつけて一番の曲を作るように釘を刺す。

いつも以上に素直じゃないかすみの姿に俺は貴重な一面を見ることが出来て、つい笑顔がこぼれる。

「……ああ、かすみの可愛いを全力で引き出してみせるから任せてよ」
「ふん、それならよし！ もうかすみんは帰るからね！ じゃあ、また

明日！」

かすみはその場にいるのが恥ずかしくなったからか、逃げるように走り去ってしまった。

「誰よりも可愛いを追求するのは、自分の可愛いを否定された経験があるが故……か……」

アニメ的一幕に在りそうなセリフを吐きながら、俺はかすみがいなくなつた方向を見据えていた。

「……俺も素直にならないと、ちゃんと見てもらえないのかな……」

俺は素を曝け出すのが苦手で、相手から変な風に思われないかを想像してしまいそういつた行動が出来ずに萎縮してしまう。

だが、かすみのように自分から行動しなければいつまで経っても弱い自分のままで終わってしまうのもまた事実。

内気な自分を変えるためには、自ら茨の道を進むしかないが今の俺にはその道を歩くための度胸がない。

「ひとまずは、今の俺に出来ることから始めていくしかないか……」

ここで考えても仕方ないと思い、俺は自分の悩みについて区切りをつける。

そして、無性に姉さんのご飯が恋しくなり、急ぎ足で家に帰るのがあった。

翌日、放課後になり慎と一緒に部室へ向かった。

「お疲れ様です」

「あつ、かーくんに慎くん！ お疲れ様！」

「侑さん、お早いですね。お疲れ様です」

今日は侑さんと歩夢さんが一番最初に来ており既に練習着に着替えており準備は万端だった。

「まだ二人だけなんですネ？」

「そうだったんだけど……」

慎の発言に歩夢さんは急にこちらをチラチラ見ながら口を籠らせ

る。

だが、その目はこちらを見ているようには見えなかった。

「ふう〜……」

「うわああ!?! な、何ですか!?!」

「ふふつ、慎くん可愛い声を出すじゃない♪」

「慎は耳に寒気を感じたようで耳を塞ぎながら風が吹いてきた方向を振り向いた。

そこには果林さん、エマさん、彼方さんの三年生組が来ていた。

同好会のメンバーではないと思っっている慎は果林さんが来ていることに驚きを隠せなかった。

「へっ、なんで果林さんがここにいらっしゃるんですか?」

「果林さんお疲れ様です」

「輝弥くん、お疲れ様。改めて今日からよろしくね?」

驚いている慎を他所に俺は果林さんと挨拶を交わす。

何も驚く様子を見せずに至っていつも通りの挨拶をする俺を見て、慎は怪訝な眼差しを向ける。

「なんで輝弥はそんなに冷静なんだよ?」

「それは……」

「やつほおー! 皆さんお疲れ様ですうー♪」

疑問を抱いている慎に事情を説明しようとした矢先、その声を遮るようにかすみ大きな声で挨拶して入室してきた。

そこにはしずくさんと璃奈も居合わせていた。

「あらっ、お疲れ様」

「えっ! なんで果林先輩がいるんですか!?!」

かすみの姿を見て果林さんは挨拶を返すが、かすみも先程の慎と同じようなリアクションを取りながら普段はいないであろう人物の姿に驚愕していた。

「まあ、当然その反応になるわよね。私、スクールアイドル同好会に入部することにしたから」

「えええええ!?!」

「ま、マジですか!?!」

果林さんの告白に慎とかすみはこれまた息ぴったりと言わんばかりに驚嘆していた。

「一体どういう経緯からそうなったんですか!？」

「ま、色々あったの。ね、エマ?」

「えへへ、そうだね♪」

果林さんはエマさんに目配せをしてエマさんもそれに呼応するよううに笑顔で返す。

「俺も昨日、急に声を掛けられたからびっくりしたんだよ。ここに来たってことはもう入部届は提出されたんですね?」

「はい、果林さんの入部届は生徒会で受理しましたのでご安心下さい!」

慎に驚かなかった事情を説明した後、果林さんの方へ視線を向け同好会の部員になったことを確認すると返事をしたのは扉の奥から顔を覗かせるせつ菜さんの姿があった。

「にしても、スクールアイドルとモデルさんのお仕事を両立なんて大丈夫ですかあ? 中途半端になったりしたら大変なことになりますよお?」

ひとまず状況を理解したかすみは目を細めながら果林さんを挑発するように煽る。

仮にも一年生が上級生に対して取つていい態度じゃないだろう、と内心肝を冷やしたが当の果林さんは笑顔で返した。

「ふふっ♪ ええ、どちらも生半可な気持ちで挑むつもりはないわ?」

私のことを一番に見てもらえるように頑張るから指導よろしくね、かすみちゃん?」

「うぐっ、と、当然です! 一番可愛いかすみさんがどうしたら果林先輩をもっと可愛くできるか伝授してあげましょう!」

まさかの煽り返しに遭い、一瞬臆するかすみだったがそれに動揺する姿を見せず、すぐに闘志をぶつけてきた。

「ますます強力なライバルが増えてきたなあ……。負けてられないね、慎?」

「おうさ! こういうのは相手が多い方が燃えるってmondし賑やか

なものいいじゃねえか！」

新たなライバルの出現に慎は燃え滾っていた。

だが、そんな慎を見て、果林さんは獲物を引つ捕らえるように視線を泳がせた。

「じゃあ、まずは慎くんとかすみちゃんを倒すために……輝弥くん、私のための曲作り、お願いね♪」

満面の笑みで俺に声を掛ける果林さん。

「ええー!? ちよ、ちよつと抜け駆けはするいですからね!! かぐ男はまずかすみの曲から作ってもらうんですから!!」

若輩者に先手を取られて、かすみは焦りの表情を見せる。

だがかすみの曲から、という発言に一番に牙を向けたのは慎だった。

「はあっ!? 先に俺からだろうが! かすかすは後から作ってもらえよー!」

「うるさいなあ! 自分から曲のことを喋ってない慎のすけの癖にー!!」

「んだと、お前ええ!!」

「……はあっ……、相変わらず元気だなあ……」

果林さんが焚きつけ役として加わってしまい二人の口論が更に加速する様を見て、俺は嫌な予感しかしないな、とただ頭痛を堪えることしか出来なかった。

本編『想いの伝播』

一緒に遊ぼう

果林さんがスクールアイドル同好会に入部してから数日が経過した。

彼女が参入してくれたおかげでスクールアイドル同好会は更に活気が増していた。

果林さんの一切の妥協を許さない体育会系な姿勢はメンバーらの意識を変えるきっかけとなっており、練習に対しての意識を改める事が出来ている。

特に彼女の加入でより闘志を燃やしている人物がいる。

それはせつ菜さんとかすみだ。

誰よりもスクールアイドルに対して情熱を持っている二人だが、初心者ながらも他のメンバーより貪欲に上を目指していく果林さんの姿に負けず嫌いな二人は感化され、今よりも精力的に活動にいそしんでいる。

こうしてスクールアイドル同好会のレベルが上がっていることを感じるとある日の放課後、その日は部活が久々にお休みなのでピアノでも弾きに行こうかと思っていた。

そう慎と話していた俺の元へ意外な来訪者が尋ねてくる。

「輝弥くん、少しいい?」

教室の廊下から顔を出しながら声を掛けてきたのは璃奈だった。

「璃奈、どうしたの? 今日部活はお休みだったと思うけど……」

「うん、だからこそ輝弥くん達の所へ来た」

淡々と答える璃奈に俺は首を傾げる。

「愛さんや侑さん達と一緒にジョイポリスへ遊びに行くの。これから行こうと思ってるんだけど、もし輝弥くんと慎くんさえ良ければ一緒

にどうかな?」

なんと、璃奈が直々に遊びに行かないかと声を掛けてくれた。あまり見ない璃奈からの誘いに俺は少し嬉しくなった。

「へえー、面白そうだね。一緒について行っていいの?」

「うん、二人にも声を掛けていいか聞いたら、快くオツケーしてくれ
た」

「そう言ってくれてるのは嬉しい事だな。でも、輝弥、ピアノを弾こう
かなって言ってたけど大丈夫か?」

慎はそう言いながら俺の方を見て反応を伺う。

だが、ピアノを弾くのはやるのが無かった時に行く時間つぶしの
ようなものなので、それを最優先にするべきことではない。

慎の質問に俺は微笑みながら返事をする。

「別にピアノなんていつでもやれるから大丈夫だよ。璃奈、是非一緒
に参加させてほしいな」

「……! うん、ありがとう」

参加の意を示すと璃奈は明るい声色でお礼を述べる。

璃奈とはいつも一年生組で遊ぶことが度々あるが上級生組と遊ぶ
機会は中々恵まれなかったので非常に楽しみである。

「(ちんちん)そだよ。慎も一緒に行くよな?」

こういう楽しいことならば乗り気だろうと思ってるが、念の為に
慎の意向も確認する。

だが、彼からの返事はその予想とは反するものだった。

「うーん、行きたいけどちと野暮用があるから今日はやめとくわ」

「そう? 買い物かなにか?」

「いや、それとは違うんだけどとにかく俺はいいさ、お前らで行ってこ
いよ」

もし慎の用事が短時間で済むのであれば一緒に付いていこうかと
思ったけど、慎は多くは語らずに俺達からの誘いを断る。

理由について聞いても有耶無耶にされてしまい、慎は荷物を持って
そそくさと教室を出てしまった。

「あつ、慎! ……行っちゃった……」

「慎くんが用事で来れないって珍しいね。しかも帰り方もちよつと強引だった気がする」

慎の力技に璃奈も疑問を抱いたようだ。

だが、本人がいない所で喋っていては仕方ないので愛さんらの為にも早々に出発するように璃奈へ促す。

「でも、過ぎたものは仕方ないし愛さん達も待たせちゃうだろうからこのまま行こっか?」

「うん、慎くんはまた今度誘おう」

璃奈も俺の提案に賛同し、一緒に愛さん達へ合流するために教室を出発するのだった。

愛さん達と合流し、俺達はデックス東京ビーチへと向かっていた。

参加メンバーは愛さん、侑さん、歩夢さん、璃奈、俺の五人で、慎は来ないことを報告したら三人共不思議がった様子を示していた。

「へえー、シンシンってこういう楽しい事には結構乗っかるタイプだと思ってたんだけど、珍しいもんだね」

「慎くんにも外せない事情があつたのかなあ?」

「うーん、でも野暮用って言つたのでそこまで大それたことじゃないと思つてたんですけどね……」

歩夢さんの質問に補足を入れるとより珍妙な表情をする愛さんと歩夢さん。

だが、そこに侑さんが割って入ってくる。

「まあ慎くんにも色々あるだろうし、あんまり言及しちや悪いよ。また今度誘つて一緒に遊ぼうよー」

「そうだね! シンシンもきつと来てくれるだろうからその時にまた行こっか! 今日は男子がカグヤン一人だけど頑張るんだぞー?」

侑さんの意見に愛さんも賛同した。

そして、男一人という立場を慮つてか俺へ目を向け檄を飛ばしてく

る。

「ははっ……ほどほどにお願いしますね」

俺は色々な場所へ連れ回されそうな予感がして、乾いた笑いが出てくるのと同時にそう祈りざるを得なかった。

「わあああ〜助けて歩夢うう!! かーくーん!!」

デックス東京ビーチに到着し、目的のジョイポリス内へ入ると早速VRを使ったシューティングゲームをプレイしていた。

これは参加者各位がそれぞれのバックパックを担ぎ、用意された銃を持つて襲ってくるモンスター達を倒していくゲームだ。

複数人での協力プレイという事で五人全員で参加していたのだが、最初は余裕綽々と言った様子で敵を薙ぎ払っていった侑さんだったが、気が付けば敵に囲まれていて四面楚歌と化していたのだ。

侑さんは敵から攻撃を喰らわないように後退しながら迎撃するが、焦るがあまり照準が定まっておらずモンスターには攻撃が一切届いていないので侑さんの周りにモンスターが増えていく一方だった。

「侑ちゃん、今行くよ!」

「こちらも手助けしたいんですが、処理し切れません!」

歩夢さんは手馴れた様子で目の前の敵を倒し侑さんの元へと駆け寄る。

俺も後に続こうと思ったが、如何せん照準合わせが上手くいかず敵を倒すのに時間がかかっている。

愛さんも遠くにいるため、カバーが追い付かない。

どうしようか思考を巡らせていると横からモンスターが不意をついて俺に襲ってきた。

「や、やばい! 間に合わない!」

目の前の敵に銃を構えようとするが目と鼻の先まで近づいておりやられると確信したその時、目の前にいたモンスターが突然爆ぜた。

「へっ……?」

突然モンスターがいなくなり状況を整理していると横から声を掛けてくる人物がいた。

「輝弥くん、大丈夫?」

「り、璃奈!」

俺に襲ってきたモンスターを璃奈が仕留めてくれたのだ。

彼女がいなければ俺はあそこでやられていた事だろう。

「ごめんね、助かったよ!」

「ここは私が食い止めるから侑さんの所に行つてあげて?」

「えっ、でも……!」

璃奈は一言そう伝えると遠くから来るモンスターの群れに飛び込んでいった。

不安気な俺をよそに璃奈は正確無比なスナイプ力でモンスターの急所を打ち抜き一発で仕留めていく。

「す、すごい……!」

璃奈のゲームセンスの高さに圧倒されていたが、突っ立ってられないと俺は気を取り戻し侑さんと歩夢さんの元へと向かう。

「侑さん、歩夢さん、無事ですか!」

「輝弥くん、来てくれてありがとう! 私は奥の敵を倒すから輝弥くんは侑ちゃんを守つてて!」

「は、はいっ!」

歩夢さんは俺の姿を見つけると侑さんの事を任せても大丈夫と踏んだのか、自分から敵陣へと飛び込んでいった。

普段の穏やかな性格からは想像もつかない凛々しい姿に俺は見惚れてしまっていた。

「うわああああ……!!」

「……はっ! 侑さん!」

だが、そんな余裕もなく侑さんの声で我に返るとすぐさま声が上がった方向へ駆けていく。

とある扉に入った先で侑さんはモンスターに追われており逃げ回っていた。

「侑さん！ 今助けます!!」

侑さんとモンスターの間に割り込むとすぐさま銃を構えて、敵を倒していく。

「か、かーくん……ありがとう!! かーくんが来てくれれば百人力だよ!」

侑さんは俺の姿を見るや一気に元気を取り戻し銃を構え直して一緒に襲ってくる敵を倒していく。

そして、敵を倒し切って歩夢さん達の元へ行こうとしたその時、会場アナウンスが鳴り響く。

『現在ご利用中のお客様にご連絡いたします。プレイ終了時刻となりましたのでゲームを終了いたしました。武器の回収を行いますので会場入口までお越し下さい。繰り返しお伝えいたします……』

目の前に広がっていた仮想空間が消え去り、一気に現実世界へと引き戻される。

「どうやら終わったみたいですね」

VRゴーグルを外して辺りを見渡す。

そこには俺と侑さんしかおらず、先ほどまでモンスターが蔓延っていた場所とは思えない殺風景が広がっていた。

「侑さん、大丈夫ですか?」

モンスターに追われた疲労感と張り詰めた空気から脱したからか侑さんは息を切らしながら膝を押さえていた。

「侑さん……?」

中々返事をしないので俺は心配になり侑さんへと顔を近づける。

だが、その瞬間侑さんが俺に力一杯に抱き着いてきた。

「ひゃうあ!?! 侑さん!?!」

「うううう、かーくんが助けに来てくれたおかげで命拾いしたよおお! 本当にありがとう!!」

驚いている俺を他所に侑さんは抱き着きながら最上級の賛辞を述べる。

お礼を言ってくれるのは良いけれども、流石にここまで力の入ったハグは求めていないのでどうにか抜け出したいが、力を入れる事に抵

抗が出る。

「べ、別に俺は当然の事をしたままで……!!」

「でも歩夢ってば、かーくんが来るかも、って言っていきなり私を置いてけぼりにしたんだからね!? 私、こういうアクション系あんまり得意じゃないのにひどいよー!」

「そ、そうですか……」

俺は早く解放してもらおうと侑さんへの返事も手短に済ませようとするが、侑さんは中々放してくれない。

だが、それも束の間、すぐに解放されるが今度は近い距離に侑さんの顔があった。

「だから……かーくんが手助けしてくれたから心強かった! ありがとう——!!」

本当に戦場から帰ってきたような口調で侑さんは再度お礼を述べると再び力を込めてハグするのだった。

「ううう……それは良いんですけど早く解放してくださいあああ!!!」

「あつ、やっとゆうゆとカグヤンが帰ってきた! 二人とも遅くない?」

「もう侑ちゃん達、どこに行ってたの?」

侑さんのハグ地獄が終わりアトラクション入り口に向かうと武器を片付け終わり、鞆を持った愛さん達が待っていた。

「いや、その……遠くまで行ってしまっただこまで帰ってくるのに途中迷ってしまいました……」

俺は先ほどの出来事を公言されたくないため、それっぽい嘘をついてやり過ぎそうとする。

だが、俺達の様子がおかしく感じたのか璃奈がとある指摘をする。

「……なんか二人共顔赤くない?」

「へえっ!？」

「り、璃奈!! 別にそんな事ないぞ? 動き回って暑くなってるだけだから! ですよ、ね、侑さん?」

「そ、そうそう! いや、歩夢が急にいなくなっちゃったから本当に焦ったんだからね!？」

実は侑さんもあの後、ふと我に返り自分の行った事を急に恥じらい出してしまったのだ。

その為、帰り道もお互い気まずさから会話もせずにドギマギしながら開始地点まで戻ってきたのだ。

俺の必死の言い訳に侑さんも相槌を打ち、話題を歩夢さんの行動へとすり替えようとする。

「だ、だって侑ちゃんが一人でどんどん私達から離れていくから中々追い付けなくて……だから輝弥くんに向かってもらったの!」

急に指名を受けた歩夢さんの必死の形相で弁解を述べる。

どうやら歩夢さんも侑さんに付いていつていたようだが、侑さんの逃げ足についていけず困っていたようだ。

「あっはは! その光景めっちゃ面白そうじゃん! 横から見てみたかったなあ〜!」

俺達三人の論争を愛さんは笑いながら見つめる。

そんな中、璃奈の姿を見て声を上げる女の子たちがいた。

「あれっ? 天王寺さん……?」

名前を呼ばれていると分かり、璃奈はその子らへと顔を向けるが相手の正体が誰なのかすぐに判別がついた様子だった。

「……あっ」

「友達?」

「……クラスメイト」

どうやら彼女らは璃奈のクラスメイトのようだ。

でも侑さんの『友達か』という質問に対して『クラスメイト』と返している辺り、あまり親密な関係ではないことが伺える。

「天王寺さんも来てたんだね。……って、あああ!!」

眼鏡をかけた少女が璃奈を一瞥した後、愛さんを見て大きな声を上

げる。

「貴女は……もしかしてスクールアイドル同好会の宮下愛さんですよね!？」

「へっ? そうだけど……」

突然顔を近づけられながらも平然を装いながら愛さんは返事をする。

そして、眼鏡をかけた子が愛さんに食いついている内に、右側にサイドテールを結んだ子は歩夢さんにかっついていた。

「あ、あの、上原歩夢先輩ですよね!？」

「う、うん……」

「この前のPV見ました! 歩夢さんらしい努力家な一面が垣間見えて好きになってしまいました!」

「わ、私も愛さんのパフォーマンスを動画で見て、凄く元気がもらえました!」

どうやら二人は歩夢さんと愛さんの動画を見てファンになったようだ。

密かに学校内にも同好会の存在が認知されているようで安心する。

「天王寺さんの動画も見たよ!」

「……!」

歩夢さん達がファンの子たちと話してる間に黄土色の髪の子が璃奈の動画を視聴していた事を連絡してくれる。

「バーチャルキャラで自己紹介なんて斬新で面白かったよ! それに凄く可愛いし!」

俺はそれを聞いて一つ疑問が浮かんだ。

「えっ、璃奈って動画上げてたっけ?」

そう、俺はその動画を見たことがないので彼女らがしている会話の内容が分かかっていないのだ。

「あれっ、カグヤン知らなかったの!? 結構な時間をりなりーやみんなと一緒に動画制作に割いて作ってたけど……」

「ああ……ここ最近ずっと曲作りをやっていたのでそこら辺の活動にあまり干渉できていなかったかもですね……」

愛さんの曲を皮切りにエマさん、歩夢さん、かすみと続けざまに作曲を続けていたので他のメンバーらの動画制作状況を把握できていなかった。

メンバーらを支えると言いながらこの体たらくは改善しないといけない。

「あつ、巴君もスクールアイドル同好会に入ってるんだね」

「そうですね、僕の事知ってるんですか？」

俺は動画に出演しているわけではないしクラスも違うので認知されてることに驚きだ。

「当然だよ！ この学校の男子って凄く貴重だから女子の間では話題の的だよ？」

「ああー……そうですね」

女子が大半のこの学校では男子という稀有な存在に目を奪われてしまみたいだ。

そんな中で少なからず自分も知られているのは嬉しいようで恥ずかしい。

「それに巴君は一年の中でもとびっきりの人気を誇ってるよ♪ 君と同じクラスの鈴川君と人気度に差が無くてどっこいどっこいなんだよ！」

「べ、別に俺はそうやって持て囃される人間じゃ……！」

俺は女子からそれなりの人気を有しているようだが、気恥ずかしさが勝っているので正直勘弁してほしい。

それに慎と同じ人気というのも俺個人としては俄かに信じがたい。

あつ、慎を使ったダジャレが出来上がった。

そんな下らない事を考えていると女子たちはノンノンと指を振りながら補足する。

「ほらほら、そういう謙虚にしちゃうところとかがかわいくて上級生からの人気が凄いいんだよ！」

「だ、だから求めてないんだってばー！ー！！」

突然始まったガールズトークに俺は何も言い返すことが出来ず、先ほどの侑さんの件とは別の意味で顔が熱くなってしまった。

その後、同好会メンバーからもそれをネタに弄られてしまうのはここだけの話。

あの頃の自分から

「ああ……まだ顔が熱い……」

璃奈のクラスメイト達と遭遇し、俺達男子の存在が同じ学校の女子らの話題の種になっていることを知った俺は先ほどまで受けていた弄りを乗り越えてやっと平常に戻ってきた。

「ごめんね、巴君とこうしてお話するには初めてなのに、いきなり失礼な事ばかり言っちゃって」

「……まあ悪口を言われてるわけじゃなくて安心しましたよ……」

色葉さんと言う眼鏡少女は苦笑いを浮かべながら謝罪を入れてくる。

だが、今までこういった経験をしたことが無かったのでそんなに悪い気はしなかった。

むしろ今冷静に考えてみると、恥ずかしかつたけれどもこうして自分の事も認知されていることは嬉しい事なのかもしれない。

「そういうえば皆さんはどうしてここに来てたんですか？」

「あつ、もしかして次のライブの視察とかですか!？」

サイドテールの少女、今日子さんは話題を俺達が来ていた目的に切り替える。

それを聞いて黄土色の髪の少女、浅希さんは食い気味にライブの準備なのかと予想する。

「いや、私たちはここに遊びに来てただけだよ」

「あつ、そうですか……。他のスクールアイドルの子たちもここでライブをやったので、てつきり皆さんもそうかと……。ごめんなさい、つい早とちりしてしまって、あははっ……」

侑さんが手を振りながら浅希さんの予想を否定する。

早とちりしてしまった事を浅希さんは謝罪するが、心なしか寂しそうな笑顔を向けてくる。

だが、彼女の言葉を聞いて愛さんは後頭部へ両手を持っていきながらあつけらかなと返事をする。

「でも、愛さん達ってまだこういう所でライブしたことないからいつ

そやっちゃう？」

「ええー？　そ、そんなすぐには出来ないんじゃないかなあ……？」

歩夢さんが困り顔になりながら指摘するが彼女の言うことは正論だ。

この同好会は未だ全員がライブを出来るようになっていない。

体力的な面は成長しているので身体を動かすという事に関しては心配無用なのだが、問題は楽曲だ。

俺が作曲担当となっていている面もあり、全員分の曲をおいそれと用意できないし各メンバーと曲のコンセプトについても打ち合わせが出来ているわけではない。

だが、そうだった事情だからこそライブが行えないだけで時が満ちればここでも出来るようになる。

彼女らが早く日の目を浴びれるように俺も精進しなければいけないと思ったその時、隣で璃奈が俯きながら何かを呟いていた。

「……やる……」

「璃奈？」

璃奈が呟いた言葉が聞き取れず、聞き返すと顔を浅希さん達へと向け堂々と宣言した。

「私……ここでライブやりたい！」

なんとジョイポリスでライブをやることを宣言してしまった。

「へっ、璃奈!？」

「天王寺さん、本当!？」

璃奈の唐突な発言に俺達同好会メンバーが驚いている中、色葉さん達はその発言に目を輝かせていた。

「うん。まだ決まってるわけじゃないけど絶対ここでやる」

「わあー！　決まったら教えて！　わたし絶対見に行くから！」

「うん、その時はまた連絡するから待ってて」

「分かった、楽しみにしてるよ！　じゃあ私達、VRゲームの予約があるからこの辺で。じゃあね、天王寺さん、巴君！」

今日子さんらは俺達が先ほどまでプレイしていたVRアトラクションの予約時間が迫っていたみたいで軽く頭を下げると入り口の

方へ掛けていった。

さらっととんでもないことを言った璃奈に俺はなんと声を掛けようか迷っていた。

すると無表情のままこちらを振り向いた。

「り、璃奈……？」

璃奈の反応を確かめようと名前を呼ぶが、彼女から出てきた言葉は先ほどの威勢の良さからかけ離れた言葉だった。

「……………、どうしよう」

「えっ、璃奈ちゃん!? いきなり弱気!?!」

璃奈の意外な一言に侑さんもつい心配になる。

「っ、つい勢いで言っちゃった……………」

「まあ、待ってくれるって言ってたもんねえ……。応援してくれてる人から言われたら愛さんもつい言っちゃうかも」

「ですが、今からやっぱりやめますなんて事は……………」

勢いで答えてしまった事を反省している璃奈に愛さんが優しくフォローをする。

だが、フォローした所で口に出してしまった事はそうそう曲げる事は出来ない。

ましてやライブという同好会にとっての重大なイベントを軽々とやる、と宣言してしまったので彼女たちも本気で受け止めているだろう。

その期待を壊して同好会の信頼を落とすことは避けたい。

「でも、ライブをやるにしてもこの施設が空いてる日を聞いてみてそこに向けて今から準備するのも間に合うんじゃないかな?」

「どうやら侑さんも気持ちは一緒だったようで、すぐにライブ開催に向けて提案を出してくれる。」

「そうだね! 愛さん、このスタッフに聞いてみるよ! りなりー、一緒に行こ?」

「う、うん」

愛さんも乗り気なようでスタッフへ直談判しに行こうと璃奈の手を引いてエントランスへと向かっていく。

「でも、本当にライブなんてやれるのかな……」

愛さん達が抜けていった場所を見ながら、隣で歩夢さんが呟いた。「まあ、璃奈ちゃんがあーやって自分から言うのも珍しいし、さっきの子たちに感化されちゃったんじゃない？」

侑さんは笑顔であっけらかんと返事をするが、俺は事情が事情なこともあり気が気ではなかった。

「で、ですが、まだ璃奈の曲を一ミリも手を付けていないんですよ？それで今からライブの準備……」

そう、まだ璃奈の曲は一切手を付けられていない。

曲の方向性すらも決めていないので、全くの無の状態だ。

どのように進めようか悩んでいると侑さんが肩に手を置く。

「とりあえず、日程が決まってるからでも遅くはないと思うよ？ それにかーくんが一人で取り組むわけじゃないんだし、そこは私達も出来る範囲で手伝うから」

「そうだよ、輝弥くんってば一人で抱え込んじゃうだろうから何かあればすぐに言うんだよ？ 私達も力になるから！」

「侑さん、歩夢さん……。ありがとうございます」

二人からの優しい言葉に俺は胸が温かくなる。

璃奈のライブがいつになるかは分からないが、それでもなるようにしかないのが世の常。

今の自分に出来る事を精一杯やるしかない、そう腹を括った時、愛さん達が戻ってきて直談判した結果を報告してくれた。

しかし、その内容を聞いて、俺の不安はより助長されるのだった。

「ええー!? りな子がライブをやるんですかー!?」

次の日、璃奈がライブを行う事を同好会で報告した。

一番に驚きの声を上げたのはかすみで前のめりになりながら璃奈へ詰め寄った。

「にしても随分と急だね〜？」

彼方さんもゆったりとした口調ながらも驚きの感情を露わにしている。

「クラスメイトの子達を見てたら、つい口走っちゃった……」

「でも、ライブをやることに關しては良い事だと思いますよ！ 璃奈さんはまだライブをやったことがないですし、こうして一から準備に携われるのも凄く良い経験です！」

璃奈は小声で弁解するが、せつ菜さんは今回の思い切った行動を評価していた。

確かに璃奈は自分の口で『これをやりたい』なんてことは言ってる事を今まで聞いたことが無かった。

だからこそ彼女の真つすぐな気持ちが伝わってくるのが分かる。

そう、応援したくなるのだが、それよりも俺が心配していることが別にあるのだ。

「輝弥くん、どうしたの？」

怪訝な表情をしている俺を気にしてか、しずくさんが隣で声を掛けってくる。

「いやー……ライブをやることになるのは良いんだけど……良いんだけどさ……」

「？」

肝心な所を言わずに勿体ぶる俺を見てしずくさんは首を傾げる。

だが、そんなしずくさんを尻目に俺は昨日発表された情報を思い出し、お腹が痛くなってくるのを感じる。

痛みを抑えるようにお腹をさすっている俺を他所に慎が璃奈に質問する。

「それで、ライブはいつやるんだ？」

その質問を聞いて璃奈は一瞬びくっとして俯く。

「たまたま空きが出た関係もあって……来週の土曜日」

「ええー!? そ、それもめっちゃ急じゃん!!」

そう、璃奈がライブをやるのが来週の土曜日とかなりの短期間なのだ。

「ああ……輝弥くん、それで……」

「……そうなんだよ……」

ただでさえ曲作りが何もできていなかったというのにライブが2週間を切っているというこの状態。

今すぐにも取り掛からなければ璃奈に大きな迷惑が掛かることは分かっているが、それでも流石に昨日と今日はずっとこれで頭を悩ませていた。

「でもやると決まったからには今更無理とは言えないのでしょ？」

「うん、そこでスケジュールは押さええてくれて、ライブのステージも向こうがこつちの要望に合わせて準備してくれるって言っていました」

果林さんの質問に侑さんが答える。

ステージは店側が準備を担ってくれるという事なので、凄くありがたいことだ。

だが、それでもライブまでにやることは沢山ある。

いきなり大きな課題がぶつけられ、部室内の空気が重くなる中、璃奈が口を開いた。

「……この前の自己紹介もキャラクターに頼っていたし、自分の姿を見せての活動をやるのが怖かった。……そんな私でも応援してくれる人がいることが嬉しくて、喜んでもらいたかった」

璃奈の想いを聞いて、全員が一言も発することなく彼女の言葉に耳を傾けている。

「……色々足りないことが多いのは分かってる。だけど、私にやる精一杯をみんなに見てもらいたい」

璃奈はそう言うと言席を立ちあがる。

「同好会のみんなにはたくさんの迷惑をかけると思う。特に輝弥くんには曲作りのことで一番大変な想いをさせちゃう。いきなりこんなわがままを言っでごめんなさい」

璃奈は全体を見渡したのちに俺をじっと見つめる。

俺も神秘的な顔で璃奈を見つめ返し、璃奈は自分の言った事の重大さ

を感じたのか謝罪を述べる。

「だけど、このチャンスを不意にしたくない。だから……みんなの力を私に貸してほしい。……お願いします」

みんなからの視線を受けても臆する様子を見せない璃奈。

そして、堂々と自分の意思を示し、頭を下げてくる。

璃奈がここまで真剣に考えて、みんなに対して訴えてくるのは璃奈にとってクラスメイトからの言葉が本当に嬉しかったからだろう。

彼女の言葉を聞いて思い出したことがある。

それは璃奈が同好会に入って間もなかった時の事だ。

『今までの弱かった自分とさよならをする意味を込めて入学した。……でも、ここに来て最初は何も変わらなかった』

璃奈が昔、感情を出すことが苦手だったことを逆手に取った同級生からの弄り。

その影響もあって、前に踏み出す勇氣を持てなかった璃奈。

だが、そんな彼女が今ここでけなしの勇氣を持って過去の自分が出来なかったことに挑もうとしているのだ。

それに対して否定の意見を出す理由がどこにも見当たらなかった。

璃奈の意志に返事をするために俺は席から立ち上がる。

「……璃奈」

「……輝弥くん」

突然、俺から呼ばれ璃奈はこちらを振り向く。

「今、璃奈が立っている状況は凄く厳しい所だよ。楽曲は出来てない、振り付けも出来ない。ステージ衣装もないし、どんなステージを作りたいかという構想も出来上がってない。全くの更地の状態なんだ」

「……うん」

俺は璃奈に自分が今いる立ち位置について事細かく説明する。

皮肉に聞こえるだろうが、これが事実なのだ。

しかし、璃奈はそれを聞いても、表情を変える事はない。

「この二週間余りは璃奈にとってかなり大変な時間になる。どんなに

辛い道でも走り切らなくちゃいけない。その覚悟があるかな？」

これは引き返すなら今だ、という最後の忠告でもある。

現在の状況を突きつけた上で、璃奈に決断を促す。

璃奈はそれに対して力強く首を縦に振る。

心なしか顔にも覚悟が決まったようなオーラが出ている。

「……やる。自分で言ったことだから、決して自分で捻じ曲げたくない」

迷いのない璃奈の言葉に俺は安心して笑顔になる。

「……分かった。璃奈がそこまで言うなら、俺も覚悟を決める。大変だけど一緒に乗り切って行く？」

「……うん……!! ありがとう、輝弥くん」

「どうするかは決まったみたいだね。二人の為に私達も頑張って支えるから絶対、ライブ成功させようね！」

「りなりーがこんな頼もしいことを言ってくれるから、愛さんも負けないくらい応援するぞー!!」

侑さん達の言葉に呼応するように他のメンバー達も頷いて肯定の意を示してくれる。

それを見て、璃奈は目を見開いて驚いた表情をしていた。

「侑さん……愛さん……ありがとう」

「それでは、早速璃奈さんのライブに向けて、同好会一同で力を合わせて頑張っていきましょう!!」

せつ菜さんの掛け声と共に部室内には全員の大きな歓声が響き渡った。

こうしてスクールアイドル同好会にとっての初の大仕事開幕を開けた。

変わるために

「ぐっぬぬぬ……」

璃奈の単独ライブ開催が決まり、早速その日の練習から同好会一同の熱は最高潮に達していた。

俺は璃奈と一緒に屋上で柔軟をやっていたが俺の背中を押す人間のせいでもはや恒例となっている俺の扱きが始まっていた。

「おらっ、輝弥！ もっともっと気合い入れろよ！ そんなんじや璃奈にすぐ追いつかれるぞ！」

「そ、そんなことわかってるけど……慎、お前はいつもだけど加減というのをさあつ……」

「言い訳は無用！ 一気に行くぜっ！」

「ちよっ、だからそんな事すんなって……ああああああ!!」

慎が熱血教師の如く燃え滾っており、背中に乗られてる俺にはなす術がなく一気に背中への負荷が重りとなって襲いかかってきた。

「慎くん、そこまで。からかうのは良いけど、やり過ぎると輝弥くんの身体が壊れるわよ?」

璃奈の柔軟を手伝っている果林さんが呆れるようにこちらを見ながら慎を静止する。

「あつ。は、はーい」

慎も果林さんの忠告を聴き素直に背中から降りて身体を解放してくれた。

「ああ……今日も今日とで腰が痛い……」

「あー……悪いな。つい輝弥相手にするともっと鍛えてやりたいって思っちまって……」

腰を押さえながら立ち上がると慎は悪びれる様子を見せながら謝罪してくる。

そんな慎へ笑顔を作って気にしない様子を見せる。

「いや、実際あんまり身体は鍛えてるわけじゃないから、そうやって感じちゃうのは仕方ないよ。だけど……次からはもうちよっと優しくやってくれな?」

「おう、同じことはしないように俺も気を付ける。果林さんありがとうございます」

慎と軽く和解が済んだところで彼は止めに入ってくれた果林さんに礼を述べた。

「ふふっ、別に良いわよ。二人が仲良くやるのは見てて楽しいけど、過度なそれは互いの関係を破壊しかねないから気を付けなさいね?」

「はっ、はいっ!」

慎は果林さんの言葉を噛み締めた後、大きな声で返事をする。

そこまでしつかりとした返事をする必要があるのかと思うところはあるが、そこは慎なりのポリシーがあるのかもしれない。

「にしても璃奈、随分と身体が曲がるようになったね?」

と慎から視線を外して璃奈の柔軟に目を向ける。

今まで身体がガチガチに硬かったがために押されても微動だにできなかった彼女とは違い、あと少しで床にお腹がつきそうというレベルまで成果が出ていた。

璃奈の上達ぶりに驚嘆の声を上げると、慎も璃奈を見ながら感心していた。

「本当だよな? いつの間にかここまでできるようになって俺もびっくりだわ」

「部活の間だけじゃなくて、家に帰ってから最近毎日欠かさずやってるからその効果も出てるのかも」

「これならだいぶ良いライブが出来そうね、璃奈ちゃん」

「うん! 璃奈ちゃんのこの気合いに私たちも負けてられないね♪」

璃奈の弛まぬ努力を聞いて果林さんは期待に胸を膨らませていた。

そして、エマさんも負けじと両手を胸の前でぐっと握り、意気込んでいる様子が伺えた。

「輝弥くん、次は走り込みに行きたい。一緒に行こ?」

柔軟が終わり、俺をランニングへと誘う璃奈。

普段は見せない積極性が新鮮で俺もやる気になってくる。

「うん、いいよ。じゃあこのままグラウンドまで行こっか!」

「よっしゃ、俺も付いていくぜー!」

璃奈の提案を承諾すると慎は我先にと屋上を出発する。

そして、それに付いていくように俺と璃奈も屋上を後にする。

「……もう、元気が良いんだから」

「ふふっ、でも賑やかで楽しいでしょ?」

「……それもそうね」

屋上に取り残された果林さんとエマさんも出遅れた分を取り返すように屋上を駆け出すのだった。

「やつほおー! 皆さーん、可愛いかすみんですよー!」

ランニングが終わり次に向かったのは部室だった。

そこではかすみ、愛さん、侑さん、歩夢さんがステージを想定した練習を行っていた。

かすみがさながらステージに立っているようにポーズを取りながら観客役である俺たちにアピールをする。

自分の可愛いポイントがどこかを勉強しているからか、さりげない目配せや満面の笑顔でこつちを見られると慣れるとは言えどもやはりドキドキしてしまうのはかすみの努力の賜物だ。

「いえーい、可愛いよかすみちゃん!!」

侑さんもそんなかすみにトキメキを感じているようだ。

「こつち向いてー、かすかすー!」

「可愛いぞー、かすかすー」

「愛先輩、かすかすじゃありません! それに慎のすけ、あんたはもうちよつと観客になりきってよ!! ふん!」

愛さんの元気な煽りと慎の野次馬めいたトーンでかすみは頬を膨らませて拗ねてしまった。

「流石、かすみちゃん。見てると凄く元気が貰える」

「私もかすみちゃんと目が合うとちよつと嬉しくなっちゃうな♪」

「むっふっふっふー、りな子と歩夢先輩は分かってますねえー？ そんな二人にかすみんからプレゼントをあげちゃいます♪」

璃奈達の賛辞にご満悦なかすみはお返しにと口元に手を当てた。

「んーつま♡」

なんと、渾身の投げキッスを飛ばしてくれた。

こんな事を好きな子からされたら嬉しさのあまり、言葉も出ないだろう。

俺たちはそんなかすみからの愛の贈り物に対して、

「……………」

苦笑いや無表情が広がっていた。

「ちよちよつと皆さん、なんでそんなに微妙な反応なんですか!? 流

石にかすみんも泣きますよ!?!」

かすみ眉間にこれ以上ないほどのしわを寄せて、放送禁止レベルの怒りの表情を見せると俺は気を鎮めようとフォローする。

「いや、本来なら凄くドキドキするし嬉しいだろうけど……………」

「お前の場合、なんかあざとさが勝ってて逆に冷めてしまうというかな〜」

だが、俺が作り上げようとした土台を慎が全力でぶち壊しやがった。

慎の言葉を聞いて、かすみはますます立腹している。

「はあく〜!!? そんなの慎のすけが勝手に言ってるだけじゃん! そんな事ないですよね、侑先輩!?!」

もうアイドルの姿を投棄したかすみは自分の味方になってくれる人を探すように侑先輩へ懇願する。

目を潤ませながら訴えるかすみを見て、侑さんは苦笑いしながら返事をした。

「あつはは……………今のも良いとは思うけど、私としてはもう少しフランクな感じでやれば、もっとかすみちゃんの可愛いところがみんなに伝わると思うな!」

「へっ…………… うううう、侑せんぱあく〜い〜! やっぱり侑先輩だけがかすみんの味方ですう〜!!」

かすみは侑さんのフォローに感激して侑さんの胸に飛び込むのだった。

「……あいつ、侑さんの前だとチヨロすぎるよな？」

「慎、思ってもそんなこと言っちゃだめ」

「……お前も思ってたんじゃないか」

「……何のことかな……？」

「男子二人!! 聞こえてるよ!!」

慎と小声で失礼極まりないやり取りをしているとかすみの地獄耳が俺たちの言葉を捉えていた。

「ステージでの立ち振る舞いに慣れてるかすみちゃんでも出来ないことがある……。私にも出来るかな……」

みんなから見られることに慣れてるかすみが投げキッスで微妙な反応だったことを受けて、璃奈は自分もつとひどい始末になってしまっているのではないかと想像してしまったようで、少し不安げな様子だった。

「璃奈、別に出来ないことを無理にやる必要はないんだよ？ かすみは自分には出来ると思っただからやってるのであって、嫌々やってるわけじゃないから」

「そうだよ璃奈ちゃん。私もああいうことは多分出来ないからいつも通りの私でみんなに話しかける気がするな？」

俺が璃奈へ気にしないように説得すると歩夢さんもそれに続いて、自分も同じようには出来ないかと共感の意を示してくれる。

「こうやって誰よりも傍でその人の不安に向き合って、悩みを払拭してくれるのは歩夢さんの凄いなところだ。」

と、歩夢さんの真心に感心していると侑さんが歩夢さんにとある要求をした。

「ねえねえ、折角なら歩夢もやってすれば？ 中々やれない機会だしいい練習になると思うよ？」

「ええ!? い、いいよお……私は……」

「えー、歩夢いつもそう言ってやらないじゃん。璃奈ちゃんの為もあるけど、歩夢自身が今後ステージに立った時に困るでしょ？」

「そ、それはそうだけど……」

歩夢さんはそう言うのと両指を合わせながら口をもぐもぐさせる。大勢の人の前で喋るなんてことは今までの歩夢さんでは考えられなかっただろうから勇気が出ないのは無理もない。

しかし、歩夢さんのそんな気持ちに負けじと侑さんが手をぐいと引っ張って皆の前に立たせる。

「ほらほら、私たちも歩夢の事を精一杯応援するからやってみようよ！」

「ああ、ちよつと、侑ちゃん！」

「僕も歩夢さんがステージに立つ姿がどんなものなのか見てみたいですよ。歩夢さんが優しく観客に話しかける姿を見たいんですが……駄目ですか……？」

「うう、そんな目で訴えるのはずるいよお、輝弥くん……！」

壇上に立つても抵抗を試みようとする歩夢さんに俺は懇願するよな声を出して歩夢さんへ訴えかける。

歩夢さんには効果抜群だったようでムスツとしながらも諦めたように真ん中に立つのだった。

「……お前、姑息な手を使うな？」

「べ、別にそういうつもりではなかったけど……俺は本当に歩夢さんのそれが見たかっただけで……」

「はいはい、天然たらしの素質があるということだな」

「ど、どういう意味だよっ!？」

「そういう意味だ」

俺はただ本音を話したただけなのに慎に横から狡いやり口だところこそと揶揄され、しまいには呆れさせてしまった。

そんな態度を取られるならどうやって言えば歩夢さんは首を縦に振ってくれるのかを教えてほしい。

「ふう……」

そんな俺達を他所に歩夢さんは一息ついて集中していた。

その後、すぐに普段の歩夢さんらしい穏やかな笑顔が映った。

「皆さん、今日は私のライブに来てくれて本当にありがとうございま

す♪ 楽しんでもらってますかー?」

「いえーい! 楽しんでまーす!!」

「慎のすけ、かすみんの時とリアクションがまるで違うじゃん!!」

歩夢さんの煽りに慎が全力で応えている。

かすみとは天と地ほどの反応の差があるので、本人も流石に不服なようだ。

そんな中、侑さんも慎に負けじと大きな声で返事をする。

「歩夢ー! 今日もーかわいいよー!!」

「へっ!? か、かわいいって……そんなあ……!」

「そういう所も凄く可愛いよおー!!」

「ううー、ゆ、侑ちゃーん!!」

可愛いと真っ直ぐに褒められ歩夢さんは照れを隠すように身体の前で両手を握る。

顔をほんのり紅潮させながら行われたその仕草は男二人には耐えられなかった。

「ぼむ先輩のあれはお前のやつよりやばい……」

「……俺のがっていうところは置いといてその意見には賛成……」

「さすが歩夢さん、輝弥くん達を夢中にさせてる……。私も、見習いた
い」

「も、もう! 輝弥くん達もそういう事を言うのはやめてええ——!!」

歩夢さんの照れ隠しの姿を見て彼女へのトキメキが止まらない俺達、そしてそれを見て奮起する璃奈。

一年生組の受けが予想外に良かったために歩夢さんもただただ恥じらいを消すためにそう叫ぶしかなかった。

更なる課題

「では輝弥さん、すみませんがご協力をお願いします！」

「はい、お任せください」

侑さん達との練習を終え、璃奈と一緒に音楽室へ向かった。

いつもなら作曲をするためにこの場所へと足を運ぶが、今回は少し違う。

今日はせつ菜さんからとある練習の為に付き合っただけという事で依頼があったのだ。

「声の音域を広げる方法をしずくさんから教えてもらいましたので、今回、しずくさんからのご指導と輝弥さんのピアノを活用してその練習を行いたいと思います！」

「いえ、二人とも今日はご指導のほどよろしくね♪」

アイドルとしてステージで歌う以上、聴いてもらう人たちへ少しでも心地の良い歌を提供することがアイドル側が意識すべきポイントの一つである。

しずくさんが演劇部で行っている声域を広げるための練習方法を教えてくれたので、それを実践することで自分の出せる声域を理解し、さらに今よりも広げられるようにということから練習メニューに採用したのだ。

そして、自分たちの声にピアノの音も併せる事で自分たちが正しくその音を出せているのかを客観的に聞くことが出来ることから俺は指導側として練習に参加する。

せつ菜さんの練習開始の音頭に彼方さんが手を上げて張り切っている様子を見せる。

ちなみにこの練習に参加するのはせつ菜さん、彼方さん、璃奈、しずくさん、俺の五人だ。

「しずくちゃん、今日はよろしくね？」

「任せて、璃奈さん！ 上手く教えられるか分からないけど、私なりに頑張るから！ 輝弥くん、何かあればフォローお願いしてもいいかな

「？」

「もちろん、しずくさんが困らないように俺もサポートするよ」

「それではまず第一ステップから……」

こうしてしずくさん指導によるボイストレーニングが幕を開けた。

「あーあーあーあーあー。……しずくちゃん、どうだった？」

璃奈はしずくさんから教えてもらった内容をおさらいし、音階の出
し方が違和感の無いものか確認してもらっていた。

一音一音の音程はバラバラだが音階の繋ぎ方が上手く、一つのメロ
デーとして成り立っているので俺としては申し分ない出来だと思
う。

しずくさんも俺と同意見だったようで拍手をしながら璃奈の成長
を褒める。

「うん、ばっちりだよ！ 本当に璃奈さんは飲み込みが早いね♪」

「んーん、しずくちゃんの教え方が上手いからだよ」

しずくさんから褒められてむず痒く感じたのか璃奈は謙遜する様
子を見せる。

璃奈の成長速度も目を見張るものだが、しずくさんの教え方も凄く
上手い。

最初はしずくさんからの指摘についていけずに苦戦する璃奈だっ
たが、しずくさんも教え方を工夫して指導してくれたことで璃奈も少
しずつコツを掴んでいった。

俺のサポートなど必要もなかったように安心したのと同時に
ちよっぴり寂しさも覚えたのはここだけの話。

「彼方ちゃんもしずくちゃんから教えてもらってたらもう少し早く上
達してたと思うと惜しいことしたなあ〜」

「もう、彼方さんはすぐにお昼寝しようと思を眩ますんですからそれ

は自業自得です」

「むうくん、しずくちゃんが彼方ちゃんに冷たい……彼方ちゃん寂しくて泣いちゃいそうだよ」

「泣きべそをかく演技をしてもダメです!」

彼方さんの泣き真似もしずくさんの前では無に帰っていた。

効かないと察した彼方さんはアヒル口になりながら俺の方へ擦り寄ってきた。

「じゃあいいもくん。彼方ちゃんはかーくんと一緒に練習するから」

「……彼方さん、その怪しげな右手は何ですか?」

俺の右肩へ彼方さんが右手をゆったり乗せてくる。

その後、左肩へ左手も優しく乗せてくる。

ゆつくりと触れられるのでくすぐったい感覚を覚えてしまう。

「むふふ、かーくんの首筋に……お邪魔します♪」

そう言うと彼方さんは途端に俺の首に両手を回して、身を預けるようにうなじへと顔を埋める。

「ひゃうあ!?! さ、流石に脈絡無さすぎますよ、彼方さん!」

「ちよ、ちよつと彼方さん! 輝弥くんがピアノに集中できないですよ! 早く離れてください!」

俺の背中を寝ようとしている彼方さんに乱暴することも出来ず、何とか声をかけて揺り起こそうとするが全く効果がない。

しずくさんも、異性相手でも容赦のないスキンシップを行う彼方さんに慌てつつも無理やり後ろから身体を掴んで引き剥がそうとする。

だが、首根つこをホールドされてる状態で強硬手段で引き剥がそうとすると何が起こるか、大体の人は察しがつくだろう。

「うう!? ちよ、ちよつとしずくさん……!! 苦しい……息が出来ない……!!」

彼方さんから首を掴まれているので抵抗することも叶わず首が締め付けられていた。

「さ、三人ともあまり暴れないで下さい! 椅子が転げ落ちて大変ですよ!?!」

椅子の上でしつちやかめつちやかとなつている様子を見て、せつ菜さんも声を掛けるが時すでに遅し。

「……危ないっ!」

璃奈も思わず声をあげるが、重心が後ろに掛かりすぎたために椅子が滑り、俺と彼方さんがしずくさんへと倒れ込む形で動いてしまった。

「うわあああ!!」

「きやあああ!!」

音楽室内に椅子の倒れる音が盛大に響き渡る。

「いつてて……」

偶然にも俺はピアノに膝が引つかかったお陰もあつて彼方さん達の乗つかることなく倒れた椅子のフレーム部分に尻餅をつく形ですんだ。

だが、ピアノにぶつた膝と蹴りを入れられたような衝撃で椅子にぶつかったお尻がヒリヒリと痛み出している。

痛みを感じる箇所を摩つていると璃奈がそばに寄ってくる。

「大丈夫? 輝弥くん」

「う、うん……何とかね……そ、それよりしずくさん達は……?」

「彼方さんは無事ですが、しずくさんが彼方さんの下敷きに! だ、大丈夫ですか、しずくさん!」

璃奈に手を引っ張ってもらつて何とか立ち上がった俺はしずくさん達へと駆け寄る。

しずくさんが彼方さんを後ろから抱き締めるような形で支えており彼方さんか彼女の上に乗つかる形で何とか無事だったようだ。

「うう、び、びっくりしたあ……」

「か、彼方さん……お怪我はないですか……?」

流石に身体に降りかかる衝撃を前に彼方さんも驚きの声を上げるが、しずくさんが下敷きになつていることに気付くのが遅れていた。

「へっ……? ああ……!! しずくちゃん大丈夫!」

普通であれば聞こえることがない方向から声が聞こえ、疑問に思いながらも彼方さんが下に目を向けるとすぐさましずくさんの上に

乗っていると察し、すぐに起き上がる。

俺はすぐにしずくさんの元へ駆け寄り、しゃがみ込んで目線を合わせる。

「しずくさん、大丈夫!?!」

「うん……なんとか……。あははっ、ちよつと強引にやりすぎちゃったかな……?」

「そ、そんな呑気なことを言ってる場合じゃないよ?! 怪我はない?」
「大丈夫、私だってそんなに柔な身体じゃないもん。すぐに立ち上られ……っつ……」

心配する俺を他所に何ともない表情を浮かべながらしずくさんは起きあがろうとするが、お尻を強く打ち付けたからか痛みがやってきたようでそちらに手を当てる様子を見せる。

「さつき彼方さんに強く乗られる形で尻餅をついたんだから、平気なわけないよ! 早く保健室で診てもらおう?」

「ほ、本当に大丈夫だよ輝弥くん……! 乗つかるとは言っても大して体重がかかってたわけじゃないし、彼方さんも重いわけじゃないから……」

俺が必死に説得するもしずくさんは頑なに拒否する。

恐らく璃奈の練習時間を無駄にしたくないから、自分のことを後回しにしているのだろう。

だが、今の惨状を目の当たりにしたせつ菜さんから厳しい声が寄せられる。

「いいえっ、しずくさん。大事になる前に先に異常がないかだけ診てもらった方がいいです。今すぐに保健室へ行ってください」

「で、ですが……!」

「ですが何もありません。異常が無ければそれで良いですが、まずは身体に支障が無いことを確認してからです。でないと練習に参加するのは認めません」

「……はいっ……」

せつ菜さんからきっぱりと正論を言われ、しずくさんは何も言い返すことが出来ない。

本人としても事実であることを自覚しているからか歯軋りしながらせつ菜さんの言葉を噛み締める事しか出来なかった。

しずくさんから反論の言葉が聞こえてこなかったことで了承したと判断したせつ菜さんはこちらへ顔を向ける。

「輝弥さん、しずくさんに付いて行ってあげてくれませんか？ 貴方も先ほど痛みを感じているような節がありましたので」

「は、はい。わかりました」

俺の返事に満足したせつ菜さんは笑顔になる。

そして、すぐに彼方さんと璃奈の方へ顔を向け、練習の再開を促した。

三人の練習の邪魔をするわけにはいかないと俺はしずくさんに声を掛ける。

「しずくさん、行く？」

「……うん」

しずくさんはやはり納得がいていないようだったが、これ以上言っても時間の無駄だと感じたのか一緒に保健室へ向かうことにした。

保健室へ向かう道中、俺としずくさんの間には沈黙が続いていた。彼女と喧嘩をしたというわけではないが、しずくさんの先ほどまでの反応を見て俺は自分から声を掛けられずにいた。

俺は、怒りなどで気分が悪いときは自分の中で踏ん切りがつくまでは外部のいかなる音も遮断したくなるタイプだ。

そこで迂闊に声を掛けられると当然喋りたくない気分のままなので、不機嫌になったまま返事をしてしまう。

もし、しずくさんも同じだったならばきつと声を掛けられたくはな

いだらうと思ひ、俺はただだんまりを貫き彼女から声を掛けられることを待っていた。

そうして沈黙が重なること数分、ついにその均衡が破られた。

「…………ごめんね、輝弥くん」

しずくさんが静寂を破るが、俺は突然彼女から謝られたのでつい聞き返してしまう。

「どうしたの？ いきなり」

「だって、輝弥くんが彼方さんから押揃われてるのを見てられなくて手を出したのに、私のせいで一緒にこうして練習の時間を無駄にしちゃったから…………」

俺の様子を気にしながら申し訳なさそうにしずくさんは弁解する。

でも、しずくさんが助けようとしてくれていたことに俺は嬉しさが込み上げており、空気を和ませる意も込めて笑みを向ける。

「あっはは、別にいいよ。元はと言えばあれは彼方さんが悪いんだし、しずくさんはむしろ俺の為に手を差し出してくれたんだもん。俺は嬉しかったよ？」

「か、輝弥くんはそう言ってくれるけど、私たち一步間違えれば大怪我するところだったんだよ？ 私ももう少し考えて行動しないといけないなあ…………」

俺が笑顔で返す様子を見てしずくさんは少し呆れた様子を見せる。

確かに打ち所が悪ければ今こうして出来ているしずくさんとのひとときも出来なくなってしまうところだったので、しずくさんの言うことも理解できるので一概に否定は出来ない。

しずくさんは天井を仰ぎながら先ほどの自分の行動を反省すると同時に同じ過ちを犯さないように、とすぐにやれそうな対策を考える。

隣でうんうん唸っている横で俺はあっけらかんとしていた。

「でも、しずくさんは今も十分考えて行動してるよ？ だってさっきのせつ菜さんに対しての反論だって璃奈の練習時間を無駄にしたくないから出た言葉でしょ？」

「そ、それは…………だって折角璃奈さんが自分の力でやるって言ったん

だもん。その気持ちに水を差すことはしたくなくて……」

しずくさんは真剣な表情をしながら胸中を明かす。

やはり璃奈に対して思っていることは皆同じなようだ。

今まで皆に付いてくることが大半だった璃奈がクラスメイトの為に、と勇気を出してライブをやりたいと宣言した。

それは兄妹のやることについてきていた妹が突然自分たちの手を離れ己が道を進み始めることに親心が働くようなもので、心配になりつつも自分たち出来る事はやりたいと思いき気が入ってしまったのだ。

しずくさんはその気合いが空回りしてしまったこともあり自責の念に駆られていた。

「確かに自分の身体を蔑ろにするっていうのは部長であるせつ菜さんの目線からすれば良しとは言えない。だけど、それでも璃奈の為に、つてことで行動しようとするしずくさんの真つすぐな所は俺は好きだな」

自分を犠牲にしてまで他人の為に頑張ろうとするしずくさんの姿を見て、まるで自分を見ているような感覚を覚えていたので益々彼女に対して親近感が湧いていた。

だが、突然の告白とも取れる発言にしずくさんはぶっ、と吹き出した。

「……もう輝弥くんってば、どんな意味でも女の子に対して好きなんて軽々しく言っちゃ駄目だよ?」

「ええ!? ベ、別に俺はそういう意味じゃあ……!!」

「あつはは、そんなの分かってるよ♪」

しずくさんからの揶揄いに頬を赤くして苦言を呈していると、またその反応も面白かったようでしずくさんの笑い声が響いていた。

さつきまで不機嫌にしていた人とは思えない屈託のない笑顔で俺も安心して笑顔になる。

「ふふっ。とりあえず、しずくさんが元気になってくれてよかったよ」

「ふふっ、そうだね。ありがと、輝弥くん」

ひとしきり笑った後、しずくさんは感謝の言葉を紡ぐ。

「……別にお互い様だよ。しずくさんに何かあれば俺が話を聞くし、頑張つて力になるから。だから……」

「うん、輝弥くんが困つていれば私が力になってあげるから」

「ありがと、その時はよろしくね？」

俺の言葉にしずくさんは、うんと頷いて肯定の意を示す。

ひとまずしずくさんの言動についての話が終わり、話題は璃奈へと変わった。

「それにしても璃奈さんってどんどん上達してるよね？ 少し前まではまだ右も左もわからない様子だったのに、気が付けば同じ目線に立っているような感じがしていつの間にか置いていかれそうな気がするよ」

「自分から意見を発することも多くなってるから、同好会……いや、この学校に来てから本当に変わったんだなあって思うよ」

そう言いながら俺は入学したての頃に璃奈が話してくれたことを思い出した。

感情を出すのが苦手、という事から過去にいじめのような仕打ちを受けた璃奈。

だけど、自分のやりたい事から逃げずに向き合い続けた結果、この虹ヶ咲学園に入学し愛さんや俺達と出会い、璃奈の中で何かが大きく変化していたのだ。

いつかの練習の時、真つすぐ歩く先を見据えながら話してくれた璃奈は今でも記憶に残っている。

今の璃奈は凄く勢いが乗っているので、その流れを止めないようこのままライブまで突っ走っていかせてあげたいと思っている。

だが、それと同時に俺は誰も気にしていなかったであろうとある疑問が頭に浮かんだ。

「あつ、そういえば璃奈って……ライブ中は感情をどうやって出すのかな……？」

「えっ？」

俺の突然の疑問にしずくさんは言っている事が理解できず首を傾げる。

「今の俺たちって璃奈は無表情のままでもどういう気持ちを抱いているのが分かる。それって璃奈が感情を出すことが苦手ということを知ってるからこそ出来ることだよね」

俺は璃奈が抱えてる事情について改めてしずくさんに説明する。

当然、既に同好会メンバーは全員が知っている内容なのでしずくさんもそこから続く問題点が何なのか分からない様子だ。

「そうだけど……。それと何か関係あるの?」

「……その事情を知らない人がステージで感情を出せないまま歌ってる璃奈を見たら、どう思うのかな……?」

「あつ……」

疑問を口にしたときにしずくさんは全てを理解したようではっとした。

例えば、自分が腕にギプス等は付けないが、実は障がいを抱えていて腕を使うことができない身体だ、ということを知れば、その人間達は当人の事情を鑑みて行動できる。

だが、それを側から見れば『何でこの人は周囲の人間に手取り足取り助けてもらっているんだ?』と疑問に思うはずだ。

そう思ってしまうのも当たり前のことなので、今回の場合でも事前に璃奈の事情をアナウンスしておけばいい話である。

だが、それを知らずにライブに参加する人も今後は出てくるだろう。

そういった人たちが初めて璃奈のライブを見た時、『この人、本当に俺たちに会えて嬉しいのか? 口から出まかせを言っているのではないか?』と不審に思ってしまう人が少なからず出てくるはずだ。

せっかく璃奈はみんなと繋がりたい、とこれからのアイドル像に対してイメージを持っているのに、その事情のせいで手詰まりになってしまうのはなんとしても避けたい。

「うーん、確かに考えなくちゃいけないことだよね……。一度、璃奈さんも交えて話してみよっか?」

「そうだね、本人の意思を聞いてからでも遅くはないし」

当人がいない所で話を続けても明確に方向性が決まるわけではな

い。

そう思い、俺たちはこの話題をここで打ち切ることにした。

この後、保健室で診てもらい、お互い身体に異常はないと診断されたが、ライブ前に考えなければいけない事が一つ増え、ますます頭を悩ませることになった。

今の彼女なら

「とりあえず、お互い何も悪い所が無くてよかったね」

保健室での診察が終了し、俺はしずくさんと一緒に音楽室へと向かっていった。

地面や椅子にぶつかった影響で少し青痣になるだけに留まったように骨まで影響のある怪我ではなかった。

「本当にね。璃奈さん達はまだ音楽室で練習してるのかな？」

「どうだろうね？ だったら早く合流しないと」

そんな話を話していると音楽室へ近づいてきた。

だが、室内からせつ菜さん達の練習している声が聞こえなかった。

「……随分と静かだね？」

「璃奈達、外へ走りに行ったのかな？」

物音一つ聞こえない状況に疑問を抱きながら音楽室へ到着し扉を開ける。

「あつ、おかえり。輝弥くん、しずくちゃん」

そこには璃奈が一人椅子にちょこんと座っていた。

練習着のままだったので帰ろうとするために待ってたわけではなさそうさ。

「ただいま、璃奈さん」

「ただいま。璃奈、せつ菜さん達は？」

「二人は慎くん達と合流して筋力トレーニングをするって行っちゃった。私も行ききたかったけど、楽曲のコンセプトについて輝弥くんと話したいなって思って、ここで待ってた」

大方、彼方さんへのお仕置きも込めて筋トレに参加すると言い出したのだろう。

おまけに慎と合流するというから、きっと俺と同じように扱われることで間違いない。

「そっか、わざわざ待っててくれてありがとう」

「それよりも、二人は怪我は大丈夫だった？」

「うん、少し腫れてる程度で済んだから大丈夫。練習も問題なく再開

「できるよ♪」

「ならよかった……」

璃奈の質問にしずくさんが笑顔で返事をする。

しずくさんの返答に満足した璃奈はほっと息を吐き安心した様子を見せる。

「でも、練習の仕方は見直せって釘を刺されたけどね……」

自省を込めて先生から言われた忠告を伝える。

椅子から転げ落ちるなんて随分と危険な練習をしているんだね、なんて毒を吐かれたが、そう捉える人がいても可笑しくないのもまた事実だ。

「これから気を付けていけばいいと思う」

「そうそう。それに輝弥くんは一ミリも悪くないんだから気にしないでいいんだよ」

先生からのお叱りを思い出して軽く落ち込んでいると璃奈としずくさんが励ましてくれた。

そう言ってもらえるだけで心が洗われていくように感じる。

「二人共……ありがとう」

「ふふっ、別にいいよ♪」

そう言うのと、しずくさんは話題を璃奈の練習へと戻した。

「じゃあ、輝弥くん達はそのまま曲作りやってくっ？」

「うん、そのつもりだよ」

俺はしずくさんの問いに返事をしてピアノの前へと歩いていった。

璃奈が待っていてくれたというのだから、早速曲作りを始めようと準備にかかる。

しずくさんはそんな俺の答えに頷き音楽室から出ようとする。

「なら、私はかすみさんの方へ合流してステージ練習に参加してくるから、時間が早く終わればかすみさんと一緒にこっちへ合流するね」

「わかった、身体には気を付けてね」

「ありがとう、輝弥くんもね」

お互いに身体への負担を掛けないように忠告をして、しずくさんは音楽室から去っていった。

気を付けて、とは言ったものの練習はステージを想定したものだから危ないことはないだろう。

彼方さん達の方へ行くと言い出したら流石に止めていたが。

「じゃあ、俺達も始めよっか」

「うん、改めてよろしくね」

「こちらこそ、よろしく」

こうして俺と璃奈による初めての楽曲制作の打ち合わせが幕を開けた。

「では、まず璃奈がどういうテーマで曲を歌いたいか、だけど璃奈自身何かこういうのを歌ってみたい！ ってコンセプトは決まってる？」

まずは本人がどういった曲を所望しているのかを確認する。

璃奈とはこういった話はあまりしてこなかったものだから、出来る限り璃奈の希望に添えるようにしたい。

だが、当の本人は表情は変えないがうーんと頭を悩ませていた。

「ごめんなさい、まだ明確に決まってる……」

「あつ、全然大丈夫だよ！ 初めての事だから決まってるなくても無理はないから」

落ち込む様子を見せる璃奈へ明るい口調で励ます。

恐らく未体験のゾーンに入って手探り状態だからこそ、何が正解かわからないので行き詰まっているのだろう。

こういった時こそマネージャーである俺の出番だ。

「そういうえば、璃奈は以前にスクールアイドルのあるべき姿として心を通わせられる人って言ってたよね？」

俺は先日かすみ先生の元で行われたスクールアイドル講義で璃奈が話していた事について触れる。

かすみを引き出させた、ステージに立つメンバー達の目指したい

姿。

そこで璃奈は『心を通わせられる人』と答えており、璃奈自身が沢山の人と繋がりたいとも言っていたので、それが璃奈の目指すアイドル像、やりたい事だという事が分かったのだ。

「うん。この学校で愛さんや輝弥くん達と出会って私は変わることが出来た。今まで手を取ってもらって人の輪に入ることが多かった私だけど、今度は私の手でみんなと繋がりたい」

「よし。なら、まずはそれが璃奈のやりたい事だからそれを歌詞で織り込んでいけるね」

璃奈の想いを聴いて俺はひとまず歌詞の方向性を決めていく。

随分ととんとん拍子で歌詞についてのコンセプトが決まってしまったので璃奈は驚いた様子を見せる。

「あつ……こんな簡単な事でいいの……？」

「うん、こういう雑把な事でいいんだよ。一見脈絡もない些事でも視点を切り替えれば大きな進展につながるなんてよくあることだから」
そう、自分が今立っている現在地と進みたい目的地さえ分かっていたら、そこへ辿り着くまでの道筋は自ずと開けるものだ。

最初は独りで歩く途方もない道のりだったとしても、一緒に歩く人間がいれば違う目線からの意見で一気に目的地までの距離が近くなることもある。

百の人間がいれば百の意見がある。

「視点を……変える……」

璃奈もそのことに気が付いたようで、俺から目を外しピアノを見つめていた。

そして、不安気だった璃奈の雰囲気は突然変わり、目が据わっているように見えた。

「ありがとう、輝弥くん。おかげで私の伝えたい言葉が出てきそう」

「そっか、璃奈の力になれたようで良かったよ」

璃奈の頼もしい言葉を聞いて、作詞はこのまま璃奈に任せる事にした。

「じゃあ、詞は璃奈に任せてみてもいい？ もちろん、まだ難しいって

思うなら一緒に……」

「大丈夫、まずは輝弥くんから貰ったヒントを元に私一人でやってみる。行き詰まった時にまた相談してもいい?」

「うん、遠慮なく声を掛けてね」

ひとまず詞に関しては璃奈が構想を練るという形で話が収束した。

次は俺が主軸で動くことになる曲に関してだ。

だが、正直どうい曲調に、音遣いにしようか方向性が俺も特に決まっていなかった。

「うーん、俺も璃奈の曲をどうい感じにしようかな」

後頭部へ両手を回し天井を仰ぐと俺は気になることがあったのを思い出した。

「そういえば、璃奈のPVを見たことがなかったから、今見てもいい?」

璃奈が作ったバーチャルキャラによる自己紹介がどういものなのか気になっていたのだ。

それを見る事で何かアイデアが出てくるかもしれない。

「そういえば、輝弥くんはまだ見たことないって言ってたね」

「うん、璃奈が自作した動画って話だから何かヒントになるものがある気がするから」

「分かった。ちよつと恥ずかしいけど、大丈夫」

璃奈の承諾を得て、俺は自分のスマホから璃奈の動画を探した。

目的の物はすぐに見つかり、動画再生は4千回を超えていた。

各メンバーのPVの中でも上位に入るレベルの人気を誇っているので、動画の内容に関しての興味がますます湧いた。

そして、再生するといきなりバーチャルキャラが出てきた。

『にゃん♪ 皆さん初めまして! 天王寺璃奈です!』

猫のフォルムに電子ボードを顔に付けた可愛いキャラクターが璃奈の声で自己紹介を行っていた。

尻尾がコンセントになっていたり、猫耳をつけていたりとチャームポイントが幾つも用意されていて、その作り込みに感服する。

「いつの間にかこんなキャラクターを作ってたんだね?」

「こうして自己紹介動画を作ってみるのも他の人とは違う新しさが生まれるかなって思ってた」

創作の裏話を聞きながら俺は動画内のキャラクターを見返す。

動画内では電子ボードで表情をコロコロ変えながらコミカルな動きで愛くるしさを出して璃奈の事について語っていた。

コメントでも『このキャラクター可愛い♪』『天王寺璃奈ちゃんの声、凄く綺麗で羨ましい！』と評判が良く再生数が上位に入るのも納得した。

動画に寄せられているコメントを読んでいるとある内容に目が留まった。

『こんな可愛い声で喋るって事は実際に会えたら笑顔でファンサとか送ってくれそう！』

普通の人からすれば言われたら嬉しい内容だが、俺はそうはならなかった。

実際に会えたら。

そう、こういった言葉は動画のキャラクターを見た上で本人がどういった人物かを想像しながら言っているのだ。

事実、動画の出来は良いし、璃奈の持ち味を最大限に活かせる内容だと思う。

だが、動画による活動を重ねた上で実際に璃奈を目の前にした時、彼女の事情を知らない人はどんな感想を抱くのか。

最初は感情が乏しい所が人形みたいで可愛い、なんて彼女を褒めるだろう。

しかし、璃奈がもし感情を上手く出せないだつたとして時間が経過しても無表情だったとしたら相手は彼女の事をそれでも好きと言ってくれるのか？

心の底から璃奈を推してくれる人であればそれも魅力の一つ、として受け入れてくれるだろうが彼女に対して思い入れの無い人、若しくは反対の意見を持つ人はそんな璃奈の特徴を揶揄して心無い言葉をぶつけるのではないだろうか。

人気になればそういった批判を貰うのも当然なのだが、それを言わ

れる側は耐性を持っているかと言われれば100%イエスとは言えない。

ましてや璃奈は昔そういった言葉を掛けられているのだ。

もう一度それを聞いてしまった暁には過去のトラウマが再燃して彼女の心を苛んでしまうのではないか。

璃奈に同じ光景を見させたくないため、ライブの演出に関してアレンジを利かせるように出来ないか提案しようと思ったが璃奈の表情を見てそれを伝えることが憚ってしまった。

「見に来てくれるみんな、どんな顔してくれるかな……」

そう呟いた彼女の表情は変わらないままだったが、ライブを楽しみにしている声色だった。

応援してくれる人たちの事を考えて胸を躍らせている璃奈を見て、俺は彼女の闘志に水を差してしまうと思い、つい黙ってしまう。

それは今の彼女の勢いを止めてしまう事が目に見えているからだ。今まで見たことが無いくらいに眩しい彼女の姿を見て、何も言うことが出来なかった。

突然何も喋らなくなった俺を見て、璃奈はこちらへ顔を向ける。

「輝弥くん、どうしたの？」

「へっ、ええつと……」

唐突に振られたため、俺はなんて返そうかたじろいしてしまう。

「……ら、ライブ、楽しみなだね！」

「……うん！ 楽しみ……！」

あまりにも情けない自分の返し方に嫌気が差してしまう。

璃奈も俺の言葉を聞いて鼓舞されたようで、益々わくわくしていることが伝わってくる。

だが、ここまで胸を昂らせている璃奈を見て、俺の中で先ほどの否定的な意見が消えかけているのを実感した。

(……今の璃奈ならば……昔の璃奈を超える事が出来るのかもしれない……)

もしかしたら、自分が過剰に心配しているだけかもしれない。今に至るまで璃奈も大きく成長している姿を見せているのだ。

ならば、それを信じてみてもいいかもしれないと俺は野暮なことを口にした自分を恥じた。

その後は引き続き璃奈と一緒に楽曲に関しての意見を出し合うのだった。

青天の霹靂

「かぐ男ー、りな子ー、遊びに来たよー!」

「輝弥くん! お疲れさまー♪」

璃奈との作曲。始めた頃は外で運動部の掛け声が響いていたが、今ではその喧騒も無く青空も橙色に染まっていた。

しずくさんとかすみを迎えに来るまで外の景色の変化に気付かず二人で黙々と作業に集中していただろう。

「しずくさん、かすみ、お疲れ様。もう今日の練習は終わり?」

「うん、気がついたら時間が遅くなってたから輝弥くん達の様子を見に来たの」

「侑先輩達は先に帰っちゃったけど、かぐ男達を置いて帰るのは流石に気が引けちゃうからわざわざ顔を出しに来てあげたんだからね!」

かすみの言う通り、確かに同好会のグループチャットで『お先に失礼しますね!』と快活に返事をする侑さんを皮切りに他のメンバーも次々に返事をしていった。

練習に集中するためにスマホのバイブが鳴らないように設定していたため、璃奈共々全く気付いていなかったがそれだけ璃奈の曲作りに力を注げられた証拠だろう。

そんな中で俺たちのことを見に来てあげた自分に感謝しろとでも言いたげな素直じゃないかすみに苦笑いを浮かべる。

「なあーにが、顔を出しに来てあげた、だ? お前が真っ先に輝弥たちの所に声掛けようと張り切ってたじゃねえか」

「んにゃああああ!! 慎のすけ、余計なことを言わなくていいの!!」

ぶっ満悦になっているかすみに水を差すように扉の前で慎が苦言を呈す。

気持ち良くなっていた所に邪魔が入り、かすみも慎へガンを飛ばしながら文句で返す。

「相変わらず二人は練習終わりでも元気だね。璃奈、俺達もひとまずここまでにしよっか?」

「うん、今日はありがと。輝弥くんのお陰で曲も形になってきた感じ

がする」

「いや、璃奈が積極的に意見を言ってくれるから出来てるんだよ」

俺と璃奈の褒めちぎり合う姿を見て、慎はむず痒く感じたのか頭を搔いていた。

「お前ら、その辺にしてさっさと着替えに行けよ？　いつまで経っても帰れねえじゃねえか」

「あつ、ごめん。じゃあ三人とも、また後でね」

練習を終えて制服へ着替えるために荷物を纏め、女子三人へ別れを告げて音楽室を去った。

「……で、どうなんだ？　璃奈の曲作りは」

俺がロッカーで着替えている最中、慎は横で他人のロッカーにもたれかかりながらこちらへ状況を聞いてきた。

「順調だよ。璃奈のお陰で予想よりもだいぶ早く進んでてびっくりだよ」

シャツのボタンを留めながら嬉々として慎に報告する。

いつにも増して機嫌が良い俺の姿を見て、慎も安心した様子を見せる。

「そうか、始めたての頃は神妙な顔をしてたのに、今じゃ大違いだな。慎はミーティング時の俺の態度を思い出して茶化してくる。」

「そう言わないでよ、最初は大抵そんな抱くもんだよ？」

揶揄われたように聞こえたので、俺も自分なりの意見を慎にぶつける。

いきなり大きな課題を突き付けられて正常な思考を出来る人間は相当な胆力の持ち主だ。

実際、俺自身の未熟さ故に不安を感じていたが、当初は璃奈がどのようなを考えているのかが全く読めなかったのだ。

いや、今まで同じ時を過ごしたことで彼女の事を分かった気でいたのかもしれない。

楽しい時間を過ごすことに夢中で、それ以上深く知ろうとしていなかったからこそいざという時に彼女の不明点が浮き彫りになり自信喪失となつてしまったのだろう。

「不安になるのは確かに分かるけど、別に独りでやってるわけじゃねえんだからもう少し肩の力を抜いて考えてみればいいじゃねえか」

「慎は作曲っていう歌う上での重要ポジションを担当してないから言えるんだよ」

「まあ、俺には到底出来る仕事じゃねえからな」

「……潔い発言で逆に尊敬するよ」

あつけらんかんとしている慎を見て、ため息を吐く。

だが、そんな俺を一瞥し慎は天井を仰ぐ。

「そんな大役をお前に任せるからこそ、お前が意固地にならないように俺達がカバーしてやるって言ってたんだ。そういうクツション役も必要だろ?」

慎はそう言つてこちらを見つめ微笑んでくる。

なんだかんだ言つて友人の事を大切にしようとする慎のポリシーは本当に尊敬できるところで、俺が女性だったら今の発言で惚れてしまうことだろう。

まあ、俺は男性に対してそういうった気質は無いで問題ないのだが。

「……ほんと、慎と話してると考えすぎる俺がバカに思えてくるよ」

「あん? それ、どういう意味だよ?」

「褒めてるんだよ」

「ならいい」

歩夢さんからも再三言われていることだが、自分が何とかしなくては、と自己責任に駆られてしまう癖は直していかないといけない。

堅物である自分を壊すためにどうにか出来ないか改めて模索しようとするが、慎が声を掛けてきた。

「でも、輝弥はどうしてもそういう思想で動いちゃうんだろうな。いきなりお前がとにかくやってみよう! なんて言い出したら逆に不

安になっちまうし」

「……悔しいけど、自分でもそう思えてきたよ」

人の性格というのは付け焼刃では直すことが出来ない。

どんなに悪事を働いた犯罪者でも刑務所に入って善人に更生できるのかと言われても、同じ過ちを繰り返し再び刑務所入りするという事例も少なくない。

俺の堅い性格は自分でも直すことは無理だと思ってるし、むしろ急にアグレッシブな性格に変わったら流石に自分を受け入れる事が出来ないだろう。

「だから、輝弥はとことん気になる所を洗い出していけよ。そして、俺にそれを話せ。輝弥が問題を洗い出して俺が内容を聞いてお前にフォロウをする。それで十分やっていけんじゃねえか？」

「俺が出来ないことを慎がフォロウするってこと？」

「そ、お互いの長所をカバーし合えれば俺達は誰よりも強くなれる。そうすれば向かうところ敵なしだろ？」

お互いの長所をカバーし合う。

それは何事も自分一人でこなせるようにならなければいけない、と意地を張って努力してきた俺には温かい言葉だった。

メンバーの楽曲作りを担当するとなったからには生半可な覚悟ではやり切ることは出来ないと自分を律してきていた。

しかし、その考え方のせいで今回のライブの事で璃奈を始めとしたメンバー達に余計な心配を与えてしまった。

いつもみんなが言っている、『困ったことがあれば声を掛けて』。

これも俺の中ではもう少しやれるところがあるんじゃないか、すぐに援助を求めるのは甘いんじゃないのか、そう思った思考からこの言葉を真摯に受け止めることが出来ずに自分で解決させようと奔走してしまう。

「……なんだか安直な発想に聞こえるけど、それも凄く大事なことだね」

「だろ？ お前も侑さん達には自分がしっかりとやれるところを見てほしいだろうさ。だからそれまでの苦労は俺と一緒に解決してやる

から言っつてこいよ。俺にならば気兼ねなく相談できるだろう？」

「……確かに慎になら何でも話せると思うな」

確かに侑さん達の前では、一人の人間、男性として頼まれたことをそつなくこなせるところを見てもらいたい。

だからこそ、その過程で発生した問題を話して不安にさせたくないのだ。

「へへっ、なら今度から決まりだな。こういうった練習終わりとかでもっとお互いの状況を話していこうぜ」

「分かった。なら頼りにさせてもらおうかな？」

「おうさ！ なんなら最悪の場合は輝弥たちが曲作ってる間に割り込んで状況を聞くんていう強硬手段も使えるから逃げれると思うなよ？」

「お……穏便に頼むよ？」

握り拳を作りながら半ば脅しの意を込めて忠告する慎に対して絶対に敵に回してはいけなないと心に決めたのであった。

それから、璃奈のライブに向けて円滑に準備は進められた。

歩夢さん達とのステージ練習も、彼女が得意としない大勢の人の前でトークとなるが『苦手だから、という理由でやらないっていうのは避けたい』として、積極的に練習に励んでいた。

しずくさんらとの発声練習、果林さんらとの柔軟運動、愛さん達との体力トレーニング。

璃奈はこれらに対して一切音を上げることなく誠実に取り組んでいた。

それと並行して、侑さんとの共同作業でライブ告知の動画作りにも勤しんでいた。

既に今週末に迫ったライブという事で動画サイトでの宣伝とジョイポリス内でも告知映像を流してもらえることになり、メンバー達の

士気は一層高まっていた。

「ふう〜。りな子、だいぶ仕上がってきたんじゃない?」

「そう?」

ライブまであと二日。

体力トレーニングの休憩中にかすみが息をつきながら璃奈の成長ぶりに感嘆の声を上げていた。

当の本人はその自覚がなく、少し戸惑っている様子が伺えた。

そんな璃奈へせつ菜さんも肯定の意を示す。

「はい! 少し見ない間はかなり基礎が出来上がっていましたのでびつくりしました! 輝弥さんもそう思いますよね?」

「そうですね。僕もうかうかしてはいられないです」

「……そっか」

せつ菜さんから意見を求められ俺も璃奈の成長を称賛するが、本人はライブが迫っている緊張からか素直に褒められて嬉しいものからきているものかは分からないが、無表情のままただ一言漏らすのみだった。

すると遠くから璃奈を呼ぶ声が聞こえてきた。

「天王寺さーん!」

浅希さん、色葉さん、今日子さんの三人だ。

「新しい動画見たよ!」

「ライブ、今週末だよね!」

「絶対に見に行くから頑張ってね!」

どうやら璃奈のライブが近い事もあり、応援に来てくれたみたいだ。

「みんな……」

三人を見て驚いている様子を見せる璃奈に俺はとある提案をした。

「璃奈、三人の所に行って意気込みでも言ってきたら?」

「……うん」

璃奈の決意を再認識させる意も込めてそんな提案をしたが、璃奈もうんと頷いて三人の元へと駆け寄る。

「璃奈さん、すっかり強くなりましたね。これなら明後日のライブも期待できそうです！」

「はい、ここまで自分の力で頑張ってきたんです。絶対報われますよ」
璃奈の後ろ姿を見て、せつ菜さんとこれまでの練習を振り返っていた。

彼女がやりたいと言ったあの日から彼女を主軸にライブの準備が行われた。

突貫工事にはなったがなんとか形として完成し、後は本番まで身体をしつかりと休めるところだ。

「あ、あの……もしよかったら……」

緊張からか声が小さくなりつつもしつかりと相手に気持ちを伝えようとする璃奈。

しかし、突如璃奈が窓の方を目を向けるとはっと目を見開いたのが分かった。

「……璃奈……?」

「て、天王寺さん?」

突然だんまりしてしまう璃奈を見て色葉さんが声を掛ける。

そして、その問いかけに璃奈は静かに返事をする。

「……何でもない……」

璃奈は一言、そう呟くと重い足取りで三人の横を通り抜けていった。

「り、璃奈さん!」

「……ごめん。今日は帰るね……」

「りな子……?」

今までにないトーンで告げられ、あまりの急な出来事に璃奈を追いかける事が出来ないせつ菜さんとかすみ。

そんな彼女たちを尻目に、俺は璃奈を追いかけずに先ほど彼女がいた場所へと走り出してその場で窓の方へ振り向いた。

璃奈がああ場で何かを見て途端に意気消沈してしまったのだから、

何か隠されているのではと考えたのだ。

だが、窓越しに誰かがいたような形跡はない。

また、彼女を揶揄するような悪戯が施されていたような形跡もない。

一目見た感じでは璃奈を阻害する要因らしきものは見当たらず、頭を悩ませる。

「一体なんで……？」

顎に手を当てて思い当たりそうな原因を考えていると、俺はとある発言を思い出した。

『そういえば璃奈って……ライブ中は感情をどうやって出すのかな……』

『今の俺たちって璃奈は無表情のままでもどういう気持ちを抱いているのかが分かる。それって璃奈が感情を出すことが苦手ということを知ってるからこそ出来ることだよ』

いつかのしずくさんと話した『璃奈はライブの際にも感情表現をどのようにするのか』という内容。

今それが思い出されたのが天啓なのか偶然なのかは分からないが、何故か重要なポイントであるように感じてしまった。

「……まさかっ……？」

俺は頭の中に一つの予想が浮かび、それを確かめるために窓ガラスを注視する。

ガラス越しに映る校舎内には誰もいなかったが、それでもたった一人、俺の視界に映る人物がいた。

そこには眉を顰める俺自身が映っていた。

「……もしかして……そういうことか……」

璃奈が突然帰ってしまった理由。

その一端を理解してしまい、俺はライブの雲行きが怪しくなるのを肌で感じ頭を悩ませてしまうのだった。

今までの弱い自分とは

璃奈が練習を突然ボイコットしてしまってから翌日、練習の場に彼女が姿を見せる事は無かった。

急遽、校舎屋上へ璃奈を除く全員を集合させ、ミーティングを開くこととしたが全員の顔色は良くない。

そうなるのも無理はない。

ライブは翌日に迫っており、それに対して準備が万全と言える状態ではないのだ。

ましてや、ライブの主役である璃奈が不在となると今日の練習も意味を為さないものとなってしまふ。

今、同好会は由々しき状態へと陥っている。

場の空気が重くなっている中、侑さんが口を開く。

「璃奈ちゃん、来ないね……」

「俺も電話やチャットで連絡していますけど、何一つ返ってきません」
慎も璃奈のスマホへ連絡を送っていたが、首を横に振りそれからの進展がないことを示す。

「なんで……りな子のライブ、明日ですよね!? それがどうして……!」

「そんなの私たちにも分からないわ。璃奈ちゃんが何も言わずに欠席してるんだから」

何も手立てが無いことに腹が立っているのかかすみ声が荒げていた。

だが、そんな彼女を果林さんが諫める。

声色からしてかなりご立腹のように聞こえるが、それほど果林さんも璃奈のライブを楽しみにしていたからそれを裏切られた事への気持ちの裏返しだろうか。

「どなたか、璃奈さんがこうなってしまった原因を知っている方はいますか?」

「彼方ちゃんにはさっぱり……」

「私もこれと言っては……」

せつ菜さんからの問いに彼方さんと歩夢さんは何も情報なしと首を横に振り返事をする。

何も状況の進展が見られず、無言の時間が続くとしずくさんが突如口を開いた。

「……輝弥くん、この前話してた璃奈さんの事……あれって関係してないのかな？」

「……っ」

「しずくちゃん、それってどういうこと？」

しずくさんが言っていた『あれ』、それがどういった内容を指しているのか想像するのはそう難くなかった。

侑さんからの催促にしずくさんはこちらを見つめる。

その視線に自分が答えると言うように頷いてみせ、説明しようとして口を開いた。

「そこは僕が話します。これは璃奈から直接聞いたわけではないですが……」

俺は決して彼女から聞いた情報ではない為、内容が確定的なものではないことを念頭に置いてもらい話を進める事にした。

「しずくさんと以前に『璃奈はステージ上での感情表現をどうするのか』という話になったんです。璃奈は感情を出すのが苦手というのが自他共に認めている認識かと思えます」

俺の発言に愛さんを始め、全員が肯定の意を示す。

「おそらく璃奈は、感情表現が苦手だけれども今の自分ならばそれを克服できているのではないか、みんななどの練習のお陰で苦手を払拭出来たと考えてるのかと思います。ですが……璃奈は昨日、ガラス越しに見てしまったんです。感情が無だった自分の顔を」

俺は昨日璃奈がショックを受ける羽目になった原因を調べた結果、それをメンバーらに伝える。

今までの同好会での練習を経て、璃奈は自分への自信が付き始めており今度のライブでも絶対やり切ろうという確固たる意志があったはずだ。

自分の心の内ではみんなの為に頑張ろうと気張っていたのだが、そ

れが表情に出ておらずそのギャップにショックを受けてしまったのだ。

ガラス越しに自分の顔を見て、笑顔でも不安気でもない無表情の自分を見て、過去のトラウマがフラッシュバックしてしまった。

俺が掲げた問題について状況が理解し切れていない慎は疑問を口にする。

「でも、それが璃奈のやろうとしてたみんなと繋がりたいってのとか問題でもあんのか？」

「つまり私たちが璃奈さんの事を認めていても、ファンの方達は璃奈さんを見てどう捉えるのか……それが分からないという事ですね」

せつ菜さんの回答に俺は無言で頷き肯定の意を示す。

「それってどんなに璃奈ちゃんが頑張ってパフォーマンスをしても、表情一つでファンの人達には気持ちが届いていないんじゃないかって捉えられるってことだよね〜？」

「いくらファンの皆さんでもそんな事……!!」

「確かに、それは無いとは言いつてもいいわね」

彼方さんも璃奈が直面している問題について理解したみたいだった。

かすみは応援してくれる人たちが璃奈を裏切っているように聞こえたのか必死に反論しようとするが、確実に否定できるものではないと果林さんに一蹴されてしまう。

そんな中、歩夢さんは璃奈がここに来ない事について不安を覚える。

「璃奈ちゃん、このままライブやらなくて終わるのかな……？」

「あの子が来ないのであれば私たちだけで練習しようとしても無駄でしょ？ 今日解散にしない？」

「むうー……！ 果林先輩、先ほどからりな子に対して冷たくないですか!?! 大事な同好会の仲間でしょう!?!」

練習に来ない璃奈に対して冷酷な様子を見せる果林さんにかすみは堪忍袋の緒が切れる。

今までも悩むメンバーらに対してストレートな物言いをしてきた

果林さんがここまで冷たく当たっている事は少し不思議だ。

果林さんの様子に頭を悩ませているとエマさんが果林さんの顔を覗いてきた。

「果林ちゃん……もしかして拗ねてる?」

「はあ!? な、なんでよ?」

「だって果林ちゃん、ライブ当日はモデルのお仕事を入れられないようにしてたもんね♪」

「えっ、そうなんですかあ!?!」

果林さんはエマさんの発言が凶星だったようで声を荒げていた。

誰よりもクールに構えていた果林さんが実は誰よりも璃奈のライブを楽しみにしていることにかすみも驚きを隠せない様子だ。

エマさんに言い当てられて果林さんはぷくつと頬を膨らませながら反論する様子を見せる。

「べ、別に、私はせっかくここまで準備したのに何も披露されないのが勿体ないと思っただけよ!」

「へえ、果林さんにしては可愛い所もあるじゃないですか?」

「慎くん、お黙りなさい」

「むにゅっ!?! は、はなしてくらさいよ!」

果林さんが拗ねていると慎が物珍しそうに彼女を見ておちよくる。

だが、後輩に舐められたくないのか果林さんは反撃と言わんばかりに慎の頬を引っ張って諷める。

そんな二人を他所に彼方さんは璃奈の話へと戻す。

「でもやっぱり、このまま終わらせちゃうのは勿体ないよね?」

「そうですよ! まず璃奈ちゃんと話をしよう!」

侑さんも彼方さんの意見に乗り璃奈の元へ行くことを提案する。

しかし、その横で愛さんはずっと真剣な表情で璃奈の事を考えていた。

「愛さん?」

「……………愛さん、ちよつと行ってくる!!」

「ええー!? ちよつと愛さん!?!」

愛さんはふと思いついたようので校舎内へと戻ってしまった。

「えー！ 行くってどこへ!？」

「はっ！ そんなの、璃奈の所以外にねえだろ！」

愛さんが走り去るのを眺めながらかすみは声を上げるが、慎は愛さんの行先についてすぐに理解したようで疑問を持つかすみへ回答すると我先にと先に駆け出してしまった。

「で、でもいきなり過ぎませんかあー!!」

「……やっぱり、ほっとけないよね〜」

考え無しに行動してるように見えていたかすみは文句を言いつつも慎に続くように屋上を出ていつてしまった。

彼方さんも一歩距離を置いた発言をしているが、気持ちはみんなと同じように笑顔を浮かべながら走り出す。

先に行く彼方さん達を見て、一緒に続くようにとしずくさんは俺に声を掛ける。

「輝弥くん、行くっ?」

だが俺は足が重くて動けなかった。

「どうしたの、輝弥くん?」

しずくさんへ返事をしない俺を心配してか歩夢さんが詰め寄ってきて声を掛けてくる。

「えっ? あっ……すみません。少し……自分が情けなくて……」

「えっ、輝弥くんが気にすることでもあるの?」

俺の発言の意図が読めず侑さんは聞き返す。

「……今まで作曲とかも二人で一緒にやって、璃奈が抱えている問題を俺が一番理解しているはずだったのに、こういう時に自分から動かずにあまつさえ事態が悪化してから行動しようとする自分が卑怯に思えてきまして……そんな僕が……彼女の元へ行つていいのやら……」

俺は苦虫を噛み潰したような表情をしながら足が重い理由を告白する。

本来であれば自分も一緒に行きたい。

同好会の仲間として、一人の友人として璃奈の悩みを聞いてあげたい。

だがこうなる可能性について、以前に脳裏を過っていたのだ。

その時は璃奈ならば出来るかも、なんて勝手に彼女に期待して自分は高みの見物をしていたのだ。

一種の裏切り行為をやっている自分に嫌気が差して彼女の元へ行く資格がないからこそこうして足が地に根を張っているように動くことが出来なかった。

璃奈への罪悪感に苛まれているとせつ菜さんがゆっくりと俺の前に歩み寄ってきた。

「輝弥さん。それでは貴方は卑怯者の輝弥さんのままでいますか？」

「えっ……？」

卑怯者、とせつ菜さんらしからぬ言葉が聞こえ思わず顔を上げる。

そこには心なしか不機嫌になっているせつ菜さんが立っていた。

「確かに輝弥さんが璃奈さんの問題について一番分かっていたと思います。ですが、今の貴方は璃奈さんの為に動けなかった弱い自分を、『そんなことない』と私たちに否定してほしいように聞こえます。卑怯者の自分を誰かに否定してもらおう前にそんな自分を輝弥さん自身が肯定しなければ、貴方は変わらないと思います」

「……………」

誰かに否定してもらおう前に自分で自分を肯定する。

意図せず皆の優しさに甘えていた自分にはそれは重い一言だった。

「そうね。変わりたい意志があるのであれば自分の力で変えないと何も意味が無いわよ」

果林さんはそう言いながらその場を離れようとする。

「……先に行ってるわね。これは強制しているわけじゃないから、輝弥くんは自分の好きに動けばいいと思うわ」

微笑を浮かべながら歩いて屋上を去る果林さんを見てエマさんはふと小言を呟いた。

「もう果林ちゃんもあんなに文句言ってたのに……」

小言を言っているエマさんは果林さんが璃奈の為に動いている事が分かって嬉しそうだった。

「かーくん。自分に責任を感じたならその責任は自分で負わないと、

だよ！」

エマさんはこちらへ振り向きアドバイスを送るとすぐに果林さんの後を追って屋上から姿を消す。

「……歩夢、私たちも行くこう？」

「……うん」

侑さんは歩夢さんに声を掛け一緒に璃奈の元へ向かおうと提案する。

歩夢さんも少し不安気ではあるが侑さんの言葉に賛同する。

だが、二人が歩き出したところでふと侑さんが足を止めた。

「……かーくん！」

「……は、はい！」

突然名前を呼ばれ、不意に姿勢を正してしまう。

その刹那、侑さんはこちらへ振り向きやんちゃな少年のような表情をしながら力強く俺を指差した。

「君の悪い癖、出てるよー！」

「………っ！」

侑さんの言う悪い癖、それがどういったものかを想像するのはそう難い事ではなかった。

「しつかり反省してね！」

「……輝弥くん、待ってるから！」

侑さんは表情を変えずに反省するよう伝えようと璃奈の元へと出発した。

歩夢さんは侑さんとは対照的に俺が来てくれることを信じて、待ってる、と一言だけ告げると侑さんと一緒に屋上から出ていく。

「輝弥さん、貴方が璃奈さんの元へ来ることについて無理強いはしません。ですが、来るにしても自分が受け持ってしまった贖罪は自分で清算してくださいね？」

せつ菜さんは言葉の最後に笑顔を見せながらそう言い残し屋上を出て、この場には俺としずくさんの二人だけが残ってしまった。

メンバーからの言葉に茫然自失としているとしずくさんは静かに隣へ歩み寄ってくる。

どうやって声を掛けようか分からずしずくさんはただ不安そうに名前を呼ぶだけだった。

「輝弥くん……」

「……俺、本当に自分が情けないって思う」

俺は俯きながら自虐に走る。

「しずくさんと前に璃奈の事で話をしておきながら何もやらずに口だけの人間になって……今ここでもみんなに慰めてもらおうと被害者面して……ずるいよね、あはは……」

「そんなに自分を責めないであげて？ 私たちも輝弥くんに任せているばかりにこうなることに気付かなかったんだから……」

悲痛な表情をしながら胸の前で手を合わせるしずくさんにはにかみながら笑顔を見せる。

「そう。歩夢さんにも言われたのにな……『一人で抱え込まないで』って……」

侑さんが先ほど言ってた反省。

それは以前に歩夢さんと話してた自分一人で悩みを抱えるな、という事だ。

「本当、俺の悪い癖だね」

はにかむ俺にしずくさんも微笑を浮かべる。

「……そうだよ。皆さんに甘えることと皆さんに頼ることは似ているようで違うこと。何かあればもっとお互いに声を掛け合おう？」

「うん！ その時は是非頼らせてね？」

「もちろん♪」

自分の気持ちにケリをつけるように両頬をパチンと一回叩く。

優しめに叩きはしたつもりだが思いの外、力が強かったようで少し痛覚があった。

「俺も行く。せつ菜さん達が変わってくれたように、今度は俺が璃奈を変えよう。もう……俺は自分から逃げない……」

改めて決意を口にして胸の前で拳を作る。

自分の中でけじめをつける事が出来たからか、握る力も強さを増していた。

「……行こう！ しずくさん！」

「……っ！ うん！」

こうして、俺としずくさんは璃奈の元へと向かう為に走り出した。
今一人で自分の悩みを抱え込んでる璃奈を救うために。

過去から繋がる未来

傷心している璃奈を救うため、俺は先に出発した同好会メンバーのしんがりを務める形でしずくさんと一緒に向かっていた。

「そういえば璃奈の家ってどこら辺にあるのかな？」

「愛さんから貰った地図を見ると……この信号を渡ってもう少し道なりに真つすぐだね」

璃奈の家の住所についてちゃんと覚えていなかったのでもしずくさんに確認すると、しずくさんは事前に愛さんから送られた住所を頼りに地図アプリで確認した。

そういえば屋上で最後にしずくさんと話していた時にスマホのバイブレーションが鳴っていたことを思い出した。あれはそういうことだったんだ。

「じゃあ、もう少し掛かりそうだね。早く皆に追いつかないと……」

「輝弥くん、逸る気持ちも分かるけど今は焦っても仕方ないよ。愛さん達は待ってくれてるはずだから急ぐけど焦らずで、ね？」

「……そうだね」

しずくさんから諭されて俺は一呼吸着いて気持ちを落ち着ける。同好会のみんなは俺達が来てくれると信じているはず。だからこそ早く行かねば、と気持ち^せが急いでいたが、焦るがあまりこの道中でトラブルを起こしてしまうことは言語道断だ。

俺はまたしずくさんが居なければ独りで焦って動いていた事だろう。

「ありがとう、しずくさん」

「ふふっ、こういう時はお互い様だよ。私だって輝弥くんと同じ立場だったらきつと同じ気持ちになるだろうから」

「ははっ、ならその時は俺がしずくさんの為^{ため}にがんばる！」

「うん！ その時はよろしくね？」

しずくさんと二人で笑い合っていた時、止まれを示していた信号が直進するように水先案内してくれていた。

「あつ、かーくん！」

しずくさんと地図の案内通りに走っていると侑さんが俺達を見つけて手を振っていた。侑さんの周りには俺達より先に出発したメンバーが全員揃っていた。

「侑さん……、皆さんお待ちせしました」

「もう大丈夫なんだね？」

「はい、僕も自分の為すべきことに向き合います。だから、一緒に行かせて下さい」

自分一人で物事を解決させようとする。それは今後の人生で必要な能力であることに間違いはない。だが、全ての事柄を人からの助けなしにできる人間はいない。それを素直に認めなければならぬ。

言葉足らずになってしまったものその熱意が侑さんに届いたのか元気に笑ってみせた。

「オツケー！ なら一緒に行こう！」

「あの……ちなみに璃奈さんの家はどちらにあるんですか？ 皆さんがここにいますという事はもう到着したと思っただけですが……」

しずくさんが璃奈の家について確認する。確かに彼女も璃奈の家について話を聞いたことが無いため詳細を知らない。俺としずくさん以外のメンバーらが揃っている。既に家が近いということは察しが付く。

「璃奈ちゃんの家はあそこだよ」

しずくさんの問いに歩夢さんは指を差して答えを示してくれる。

歩夢さんが指を差した場所にはマンションが建っており予想外の回答に俺としずくさんは怪訝な表情を浮かべるのみだった。

「……璃奈ってこんなところに住んでるのか……？」

「……璃奈さんの家って結構裕福な所なんだね……」

「ほらっ、二人共！ 呆けてないで行くよ」

璃奈の意外な家庭環境に驚いているが、今はそんな事に現を抜かし

ている場合じゃない。愛さんを筆頭に他のメンバーらも璃奈のマンションへと入っていく。侑さんに声を掛けられてなければもう少しここで固まっていたかもしれない。

「あつ、はいっ！」

侑さんに付いていくように俺としくさんも後を追うのだった。

マンションのロビーで愛さんはインターホンで天王寺家の部屋番号を入力して呼び鈴を鳴らす。流石マンションという事もあって防犯性は高く家主が門扉のオートロックを解除しないと屋内へは入れない仕組みとなっていた。

「璃奈ちゃん。出てくれるかな……」

「それはあの子次第ね」

家主からの応答が来るまでの間にエマさんは不安を口にしているが、果林さんは達観した様子でエマさんに返事をする。

「……りなりー、いる？」

中々応答が来ないことに痺れを切らしたのかインターホン越しに璃奈へ問いかける。

「……やっぱり相当落ち込んでるのかな……」

進展を見せない様子に俺も少し胸がざわついてくる。璃奈が出てくれる方法を考えようとした時。

『わっ……!?!』

機械越しに少女の声が聞こえた。それは紛れもない璃奈の声だった。

だが、璃奈の返事について言及する前にせつ菜さんが困惑の声を上げる。

「あ、愛さん、いきなりなりーはどうかと思えますよ！」

「あ、ああごめんごめん。この時間帯はりなりー一人だって聞いたからつい……」

せつ菜さんの問いに補足を入れる愛さん。それと合わせてエマさ

んも先ほど聞こえてきた声について確認する。

「でも、今璃奈ちゃんの声が聞こえた気がするよ?」

「本当ですかあ……?」

「俺も聞こえたからいるにはいるんだろうな」

かすみは聞き取れなかったようだ。が、憤も肯定してくれているから俺だけの思い過ごしというわけではなさそう。だが、こちらが一方的に話をしていても家主側からの返事は一向に返ってこない。

「りなりー?」

画面越しに見ているであろう璃奈を怖がらせないように愛さんは一段明るい口調で彼女へ問いかける。

「ちよつとだけ、いいかな?」

愛さんの問いかけに対する返しは無い。俺も璃奈と話したい事が沢山あるが、今はそのタイミングじゃない。こういう時は彼女と一番仲が良い愛さんに任せる事が得策だ。

数十秒経過した後、愛さんの問いに応えるように門扉が開いた。これが璃奈の返事ということだろうか。

「……行こう!」

愛さんを先頭に璃奈の部屋番号に向かう。

そして、璃奈の部屋に辿り着き愛さんはドアへ手を掛ける。どうやら鍵が掛かっている様子はなく難なくドアが開いた。部屋の鍵は門扉と連携して錠が切り替えられるのだろうか。

「……勝手に人の家に入ってるけど大丈夫なのかな……?」

「今更そうも……と言いたい所だが、実は俺も気になってた……」

この時間帯は両親が出払っているということだし、メンバーらもいるから心配する事は何もないのだが、不法侵入しているような感覚に陥ってしまい少し気持ちが落ち着かない。

憤も同じことを思ったようでバツの悪そうに苦悶の表情をしていた。

「二人共々、別に部屋を荒らすつもりじゃないし後で璃奈ちゃんに説明すればいいから今は行くよ?」

背中を押されながら彼方さんに説得される。確かに今は是非も

言ってられない状況なので侑さん達の後ろを付いていく。侑さんは一つだけ閉められていた扉の前で立ち止まる。おそらくそこが璃奈の部屋なのだろう。

侑さんは一つ唾を飲み込むと意を決してノブを握りゆっくりと扉を開いた。

「お邪魔しまーす……。璃奈ちゃーん……。？」

扉を開けるとそこは部屋の電気が付いておらずカーテンも閉じており完璧に遮光していた。おかげで部屋の中は真っ暗であり部屋の中の様子が全く見えなかった。

侑さんの返事に応える声がないのでここにも璃奈はいないのかと思っていたが、他に璃奈の部屋らしき場所は見つからなかった。他で見当の付く場所がない。

「……………」だよ」

「えっ？」

どこからともなく突然璃奈の声が聞こえた。籠っているように聞こえた様子からどこかに隠れているということは感じ取れたが正確な場所までは分からない。

かすみが近くの壁に取り付いていたスイッチを押すと部屋全体が明るくなつたが、そこには明らかに部屋の雰囲気合っていない段ボールが置かれていた。

声の籠り方や聞こえた方角からしたらそこに璃奈が隠れているのは明白だった。

「ええー!? な、なんで段ボール!?」

「ばかすかす、余計なことを言うな」

かすみは璃奈の隠れ方に声を上げるが、傷心状態の彼女を刺激しているように感じて慎が喝を入れる。状況を察したかすみは自分の手で口を押さえ喋らないようにする。

そんな中、無言で愛さんは璃奈が隠れている段ボールへと近づく。いつになく真剣な表情をしている愛さんを見るのはこれが初めてかもしれない。

「りなりー?」

「……ごめんね、急に練習休んじやって……」

「本当だよ……。心配したんだぞ？」

口調が強くなる愛さんだが、声音は怒気を含んでいなかった。そして、璃奈と同じ目線で話を聴こうと段ボールと同じ高さにまでしゃがみ込んだ。

「どうしたの？」

「……自分が恥ずかしくなった」

璃奈の声音は心なしか憂いを帯びており、今にも泣きだしそうになるのではないかと錯覚してしまう。

「私は……何も変わってなかった。昔から楽しいのに怒ってるって思われたり、友達が欲しかったのにこんな私だから誰とも仲良くなれなかった。それどころか……私の事を不気味だって陰で言ってる人もいた」

璃奈の言葉に俺は眉を顰めながら胸が痛くなるのを実感する。学校で笑っていない自分の表情を鏡越しに見た時、誰一人として友達がいなかった、辛かった頃の記憶がフラッシュバックしてしまったのだろう。

そのトラウマが璃奈の中に蘇り、彼女の心を苛んでいたのだ。

「もうあの頃と同じようになりたくない。それを思ってた。でも……どれだけ頑張っても私の心が晴れる事はなかった。今もクラスに友達は……いない」

クラスに友達はいないと語る璃奈。表情が見えない中でそう語る彼女にただただ心が苦しくなる。

「ずっと独りで心が張り裂けそうだった。これからどうしようか悩んでた時に……愛さんに出会った」

「りなりー……」

「愛さんだけじゃない、輝弥くんや慎くんにも出会うことが出来た。こんな私を怖がらずに仲良くしてくれた。そのお陰で私ももう少しだけ頑張ってみようって思えた」

愛さんや俺たちと出会って世界が変わった。それは璃奈が同好会に入ったばかりの頃にも話してくれたことだ。

小さい頃から感情表現が苦手なために周囲の人間から煙たがられ、その結果、彼女も自分から仲良くなるうと声を掛けることが出来なくなっていた。当時はそんな事情も露知らずで璃奈に話しかけたがそれが彼女にとって大きな変革をもたらしていたのだ。

「そして、同好会に入ったことで私は自分に自信を持てた。今まで自分には出来ないと思ってたことが出来るようになってる実感があった」

そう訴える璃奈の声音は先ほどよりもぐっと明るくなる。

「……でも、私は見ちゃった。楽しそうにしていけない自分を」

だが、付けつけられた事実を噛み締めながらすぐに声のトーンは下がる。

自分の姿を見た、というのやはり昨日の練習の最中に校舎のガラス越しに映った自分のことだろう。心の中では楽しいという感情が駆け巡っていたのにそれが表情にあらわれない自分に恐怖を覚えてしまったようだ。

「その瞬間、怖くなった。自分だけが楽しいと思つてて周りの人にはそれが伝わっていなかった。昔の記憶が蘇つて私は何も変わっていなかったんだって事実が……怖くなったの……」

璃奈は自然と声が震えているようだった。それはまだ泣きまいと我慢してるようにも既に涙が堪え切れなくなつてるようにも聞こえた。

「それから練習をすることが怖くなって逃げちゃった……。ごめんなさい……。みんなの期待を裏切つて……。ごめんなさい……」

璃奈は懇願するようにただ謝罪の言葉を連ねる。

俺達は璃奈が凄い勢いで成長を重ねているからこそ頼もしい存在に見えていた。彼女もそれを自分でも認識していたからこそ、もつとみんなの役に立とうと奔走していた。だが、自分の弱さが見えた瞬間に自分の中の何かポキッと音を立てながら折れてしまい、立ち直れなくなつてしまった。同好会メンバーの期待を背負っていたのにも容易く投げだしてしまった自分に嫌気が差してしまつたのだらう。

「璃奈……」

俺は彼女の名を呼びながら近づこうとすると先に侑さんが璃奈の元へと近づいた。そして、そっと璃奈の目線に並ぶようにしゃがみ込んだ。

「……ありがと、話してくれて」

侑さんが真っ先に掛けた言葉は感謝の言葉だった。一人で健気に頑張る璃奈だからこそこうして本音を話してくれたことが純粋に嬉しかったのだろう。

「私、璃奈ちゃんのライブが観たいな」

「えっ?」

「だって、璃奈ちゃんの方が努力が沢山詰まったライブなんだから。やっぱり報われてほしいし凄く楽しみにしてるよ?」

「……愛さんもそう思うよ」

侑さんはそっと微笑みながら自分の気持ちを璃奈に伝える。今までの璃奈の姿を見て、侑さんは心の底から彼女の勇姿を拝みたいと思っているのだ。そして、侑さんの想いに呼応するように愛さんも同意を示す。

「璃奈……」

次は自分の番と言わんばかりに俺も璃奈の元へ近づく。

「璃奈はさ、自分の事を何も変わってなかったって言ってるけど、それは違うと思うんだ」

「……輝弥くん?」

「確かに最初はずっと愛さんやみんなの後ろを付いてくるが多かったと思う。でもさ、自分のやりたい事を見つけてからはなんでも一人で頑張ってたじゃん。自分なりにどういうライブをやりたいか決めて、その為に何をしなくちゃいけないのかずっと意見を求めてくれてた。それって昔の自分のままでいたくないっていう璃奈自身の気持ちの表れだったんじゃないかな?」

俺はこれまでの練習風景を思い返しながら璃奈を説得する。同好会に入部してからライブをやること決めた時までの間に璃奈は凄く頑張ってた。苦手だった運動に関しても自分なりに沢山努力を重ねて

きたからこそ、みんなと同じくらいに練習についていけるようになっていた。それは璃奈の意欲が練習に出ていた何よりの証拠だ。

「それに……練習をしてる時の璃奈、凄く楽しそうなのが伝わってきたよ?」

「えっ……?」

俺は練習の時に璃奈へ感じていた想いを伝える。

璃奈は表情には出ずともその仕草や行動から彼女の気持ちは伝わってきていた。声色が明るくなったり積極的に取り組んでいる様子だったり、璃奈が抱いていた熱意や感情は行動を通してこちらにも伝わっていた。

だが、当人はそんな自覚が無く俺の言葉を素直に受け止める事が出来ていないようだ。

「うんうん、璃奈さんの楽しいって気持ち、私にも伝わってたよ!」

「誰よりも努力家な璃奈ちゃんって私たちにはない凄い所で本当に尊敬するよね♪」

「うむっ、璃奈ちゃんの健気な姿を見て彼方ちゃん達も良い刺激を貰うよね」

困惑している璃奈へしずくさん、エマさん、彼方さんも後に続いて璃奈の良い所を喋っていく。

「機械に強い所も私たちは持っていない要素ですので璃奈さんのお陰で動画投稿や配信に向けての準備は捗っていますよね!」

「出来なかったことを出来るようにしてる璃奈ちゃんを見ると私も負けていられないって熱くなっちゃうのよね」

せつ菜さん、果林さんもこれまでを振り返って璃奈に対して思っていたことを告白する。

「……璃奈、まだ自分に自信が持てない?」

メンバーからの賛辞を一切の返事を示さない璃奈に俺は優しく問いかける。自分は大したことをしていないと、皆の方が凄いと思つて卑下してしまっている彼女が顔を覗かせているのかもしれない。

「……全く……」

「わっ」

すると、慎が俺の近くへ歩み寄り段ボールと同じ高さに座り込んできた。そして、いきなり彼女が入っている段ボールを上からとんとんと軽く叩いた。衝撃は無くともいきなり段ボールを叩かれて璃奈が驚きの声を上げる。

「璃奈、出来ないことを出来ないと言って何が悪いんだ？」

「慎くん？」

「ここにいる人たちがさ、全ての物事を当たり前にそつなくこなせる人達だと思うか？ 勉強が苦手なかすみだつて輝弥の手を借りながら曲の歌詞を作ってるんだ。人に頼ることが苦手な輝弥は俺らが見張ってないとすぐに一人で頑張ろうとする。こいつらだつて、それぞれ苦手な事があるんだ」

慎はため息を吐きながらも意固地になる子供に言い聞かせるように璃奈へ話しかける。いきなり例え話の種として名前を出されたかすみは一瞬怪訝な表情をしたが、慎が伝えようとしていることが分かっているのか、すぐに呆れたように笑って無言を貫いた。

「いいじゃねえか、苦手な事は苦手でも。俺達は自分達じやどうにも出来ないことをいつも璃奈にも助けてもらってるんだ。璃奈も自分が出来ないことに対してそこまで責める必要はねえんじやねえの？」

「慎の言う通りだよ。それに、出来ないことを自覚しているならそれを出来るようにすることはできる。過去の失敗を今から挑戦することで未来の成功に変えられるんだよ」

「過去の失敗を……未来の成功に……」

「そうだよ、りな子。自分の弱みを強みに変えるのだつて一人前のスクールアイドルには必要なことだよ？」

俺と慎の言葉を聞いて、璃奈は復唱してその内容を反芻する。かすみも少しからかうような口調でスクールアイドルの秘訣としてアドバイスを送る。彼女もよくライブ配信中に失敗をしてしまうが、それを逆手にドジっ子な私もかわいいとして短所を推す要素として取り入れているのだ。

「みんなの言うようになりーはりなりーが思っている以上に凄いことをしてるし、出来なかったことに対してこれから挑戦しようとする歩き

出してるんだよ。だから、愛さん達にもそれを手助けさせてよ。……りなりーが苦手にしてることを長所に変えられるようにあたしらもサポートするからさ」

愛さんはそう言いながら璃奈のいる段ボールをそっと抱きしめる。段ボールは多少の変形を見せながらも璃奈が取っているであろう体勢に近い形を形成していた。

「みんな……ありがとう……。こんな私を……応援してくれて……支えてくれてありがとう……」

璃奈はもう一度声を震わせながらメンバー全員に対してお礼の言葉を述べる。同好会の皆が語った言葉が璃奈の心に届いたようだ。

「ライブまで時間はある。それまでに今できることを考えて最高のライブを迎えられるように頑張ろ？」

「……うん。私、もう逃げない。今までのダメだった私とお別れするために前に進む」

璃奈はそう自分に言い聞かせると、段ボールを被りながらそつと立ち上がる。そして、段ボールを外して顔色を俺達に見せてくれた。目は少し赤くなっているがいつもより据わった表情をしているように感じた。

「璃奈ちゃん……！ よし、璃奈ちゃんが次のライブを成功させられるように虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会、ここから挽回していきましょうー!!」

改めて決意を固めた璃奈を見て安心した侑さんは力強く立ちあがりメンバー全員顔を見渡し檄を飛ばす。侑さんの言葉に刺激を受け、同好会一同はそれに続くように腕を天井に向けながら掛け声を上げるのだった。

奇怪な家族

璃奈が再起を決意し、スクールアイドル同好会一同は明日に迫っている璃奈のライブに向けて緊急ミーティングを開いた。

「それでは璃奈さんのライブを成功させるために今一度、準備が必要な内容について整理しましょう。時間は残されていません。やれる限りを尽くして、明日のライブにぶつけていきましよう！」

せつ菜さんがいつにも増して力強い言葉で檄を飛ばしてくる。だが、実際問題その通りなのだ。時間はあまり残されていないので、残っている課題について確実にこなしていかなければ明日のライブには間に合わない。

璃奈の家のリビングを借りて最後の追い込みを仕掛ける為に俺もいつもより気合を入れる必要がある。

「まずは璃奈さんのライブの準備についてどこまで進んでいるかを確認したいと思います。まずは輝弥さん、楽曲制作の方はどこまで進んでいますか？」

せつ菜さんから曲作りの進捗を問われ、今の状況を素直に告白する。

「……状況についてですが、まだ完成には至ってません。璃奈のお陰で歌詞とメロディーラインについては出来上がっていますが、編曲が出来上がっていないのでそれをこれから突き詰めていくことになりました」

「わかりました。璃奈さんがライブで披露する大事なものです。無理を言いますが、今日中にそれを完成させるように努めていきましょう。でなければ次に進むことは出来ません」

「……はいー」

せつ菜さんから楽曲完成のタイムリミットを指定される。正直、今日で編曲から楽曲の完成までを完遂させるといえるのはかなりの無理難題に思える。だが、悠長なことと言ってられないし俺もせつ菜さんがそう言わずとも今日中での完成を目標に動くつもりだったので覚

悟は決まっていた。

「次にダンスについてです。これは私から説明します。こちらも現時点で楽曲が出来上がっていない点もあり、詳細の振り付けについて何も出来ていません。ですが、今の璃奈さんは筋力、持久力、柔軟性ともに過去の璃奈さんとは比にならないほどに高い水準まで上がっています。ですので、今日中に楽曲が完成すれば少なくとも明日の朝までは相応のクオリティで出せるようになるかと思えます」

ダンスの状況についてはせつ菜さんが自ら説明してくれる。振り付けは楽曲とシンクロすることでその良さを発揮する。つまり、その大元となる楽曲が出来ていなければ先に進むことはできない。これを進めるためには楽曲の完成がなにより最優先事項なのだ。

だが、それでも明日の朝まで振り付けの練習がお預けになるのは問題だ。

「せつ菜さん、今は並行して振り付けも着手していかないと璃奈への負担が大きくなります。ひとまずはピアノで作ったものをお渡しするのでそちらで構想を練りましょう。僕も全力を尽くして曲は完成させますので」

ステージに上がるのは璃奈だ。璃奈の成長速度が著しいとはいえども明日のライブ前までに振り付けを完璧にするというのは流石に無茶が過ぎる。であれば、現時点で出来ている楽曲をベースにダンスを考えるのも案としては最良だろう。

「……そうですね。私も少し悠長に考えてしまっていました。では輝弥さん、後で楽曲のデータを送ってください。慎さん、かすみさん、お二人の力も貸して下さい」

「全体のバランスを見るのは任せて下さい。細かい所作についてはかすみの方が強いんでそこは手分けしてやっていきます」

「ふふくん任せてください！ りな子に似合うかわいい振り付けをたくさん考えてきてますから！ このかすみんに出来ないことはありません！」

せつ菜さんからの依頼に慎とかすみは二人揃って笑顔で返事をする。いつもはハチャメチャコンビではあるが、こういった土壇場で見

せる二人の息の良さは阿吽の呼吸だ。この二人ならば絶対に良いものを作ってくれるとそう思い込ませてくれた。

「心強い限りです。次はステージ演出についてです。愛さん、こちらは如何ですか？」

「うん、こっちはりなりーが事前に沢山提案してくれたおかげもあってジョイポリの方とは順調に進んでるよ！ 後は曲と当てはめて合わせていくのみだから、これは明日のリハーサルで最終調整する形で問題ないと思う！」

ステージ演出の構想案について報告する愛さんの表情は心底明るいもので懸念事項はない様子だった。思ったよりも順調に進んでいることにせつ菜さんは安堵の表情を見せる。

「それはよかったです。それでは愛さんはジョイポリスのスタッフと明日の動きについて最終打ち合わせをお願いしていいですか？ 侑さん、歩夢さん、しずくさんは本日限りで別のグループのサポートに入って下さい」

「では、私はかすみさん達のダンス振付について一緒に参加しますね！」

「じゃあ私は愛ちゃんの打ち合わせと一緒に行くよ！ 歩夢はどうする？」

「うーん……私は衣装作りの方に参加しようかな。そちらはどこまで進んでるんですか？」

せつ菜さんより愛さんは明日のリハーサルからライブ本番までの打ち合わせに行ってもらうように指示を貰う。また、ステージ演出に關して今日中にラストでやることがないため、しずくさんはかすみ達のグループに、侑さんは愛さんと一緒に打ち合わせへ、歩夢さんは衣装作りチームに参加することになった。

歩夢さんからの衣装作りに關しての質問に果林さんが答える。

「こっちも順調に進んでいるわ。璃奈ちゃんが作ったPVの衣装を元に原案は考えてるわ」

「これからその案を用いて衣装作りをやっていくから歩夢ちゃんも協力してくれるなら今日中には大方は完成すると思うね」

「だから、今日の空いた時間に璃奈ちゃんには試着してもらうことになると思うから、また声掛けさせてね？」

衣装担当組である果林さん、彼方さん、エマさんも滞りなく作業は進んでいるようだ。さすがライフデザイン学科の二人がいることで衣装案に様々な着想が得られているようだった。そこに裁縫を得意とするエマさんと歩夢さんが加入してくれたらまさに鬼に金棒だ。

「みんな……ありがとう。私のためにここまで手伝ってくれて……」

「これも璃奈が頑張ってるからだよ。璃奈が積極的に動いたからこそみんなもその気持ちに応えてくれてるんだよ」

最悪の事態を想定していた璃奈はこのどんでん返しに驚きを隠せないようだった。だが、これも璃奈の努力の賜物なのだ。璃奈のライブを楽しみにしているのに加えて率先してライブの準備を進めてきていた璃奈の姿に同好会一同は感心している。だからこそ彼女には報われてほしいのだ。

「皆さん、本当にありがとうございます。思っていたよりも状況は好転しているようですので、この勢いを止めることなく全員で突き進んでいきましょう！」

「おおー！！」

せつ菜さんの言葉に同好会全員で声が合わさり皆の想いが一つになっっている事を実感した。

同好会の勢いに拍車が掛かったところで俺は自分の作業場所としてとある場所に連れてもらっていた。

「輝弥くんはこの部屋を使って」

「えっ、ここって璃奈の部屋だよな？」

そう、そこは先ほど璃奈が鳴りを潜めていた部屋だった。

「うん、ここなら電子ピアノとそれに接続するヘッドホンもあるから

外に音を漏らさずに楽曲作りに集中できる。それにパソコンには作曲ソフトも入ってるからこれを使って編曲も出来る。輝弥くんが作曲をするには十分だと思う」

「なるほどね。確かにここまで充実したものを用意してくれてるなら少しは良いものができそう」

部屋の中を見渡すと璃奈が話していた電子ピアノやヘッドホンの他に最新ハードのゲーム機も揃っている。璃奈が一人でも退屈しないようにと両親が気を利かせてくれていたのだろうか。

そんな事を考えていると璃奈はパソコンの電源を入れて扉の前に移動する。

「私は他の人達の作業場所を案内してくるから先に作業してて？ すぐに戻ってくるから」

「わかった。ありがとうね」

璃奈は他の人達もそれなりの環境で作業できるように準備してくれたみたいでそちらの案内の為に一時的に席を外す。璃奈が扉を閉めると彼女の部屋に一人取り残される状態となり、パソコンの電源音だけが空間の中に響き渡っていた。

「……にしても、璃奈の家って本当になんでも揃ってるなあ……」

この場で一人佇みながら、俺はふとそんなことを呟く。

俺の今の家はお世辞にも大きいとはいえないアパートであり、そこで姉さんと二人暮らししている。部屋分けについても俺に不自由をさせたくないからと俺に個室を用意し、姉さんはリビングで勉強や演劇の練習に勤しんでいるのだ。

こうして家の裕福さを璃奈の家で突きつけられてしまうが、それでも幸せじゃなかったかと言われればそうではない。家で姉さんと一緒に居る時間は俺にとっても楽しかったし、姉さんと話をすることで孤独感も無くなって充実感に満ち溢れていた。その為、ここを羨ましいとは思いつつも璃奈と同じように過ごせるかと言われたら、俺は首を縦に振れない気がする。

「って、ぼーっとしてる場合じゃない。今は一刻も早く曲を完成させないといけないんだ」

思わずノスタルジーに浸ってしまい、俺は首を横にぶんぶんと振って意識を現実へと引き戻す。そして、璃奈が用意してくれたパソコンの前に座り作曲ソフトを立ち上げる。

「まずはせつ菜さん達が振付を考えられるように楽曲を送らないと……」

俺は先ほどのミーティングの話思い出して、自分のスマホに落とし込んでいたピアノのみの楽曲データをパソコンへと送信する。そして、必要な時にすぐにデータを授受できるようにと常備していたCDをパソコンへ挿入し、パソコンからCDへとデータを書き込む。こちら辺の作業も璃奈に教えてもらったおかげで以前よりもスムーズに操作できていた。

「よし、CDはこれでオツケーだからあとはせつ菜さんの所に届けに……」

行くだけ。慣れた手つきでCDの書き込みを終え、そう言いながら外に出ようと扉を開けた時、俺の足に何かが掴まる感触を覚えた。

「ひゃつ!? な、なに!?!」

突然足に絡みつかれ、思わずすぐに振り払おうとしたがその正体を見た時、すぐにその考えをやめた。

『ニャ〜』

そこにいたのは猫の姿をしたロボットだった。

「こ、これは……猫なのか……?」

「あつ、アラン」

俺が猫型ロボットにたじろいでいると璃奈が戻ってきた。そしてアランと呼ぶとそれに反応して猫ロボが璃奈の元へと駆け寄っている。

「璃奈、この子は一体?」

「この子は猫型ロボットのアランちゃん。この家で買ってるペットで私の家族」

『にゃ〜ん♪』

璃奈がアランちゃんを抱えると嬉しそうな声を上げながらアランちゃんは璃奈に頬ずりをする。璃奈はアランちゃんが急に求愛行動

を取ってきたことに驚く様子も見せず平然としていた。

「アランちゃん、嬉しそうだね」

「うん、アランは私の事をとても気に入ってくれてる。だけど、輝弥くんのことにも気になってると思う」

「えっ、そうなの？」

「うん、初対面で足に絡むのはすごく稀なこと。撫でてあげたらすぐに懐くと思う」

璃奈はそう言いながら、抱きかかえたアランをこちらへ差し出す。アランの表情は変えることがなくこちらを青い瞳のようなガラス玉がただただ見つめていた。

無機質なガラス玉の目に少し畏怖しながらも璃奈からアランを受け取る。触り心地はロボットのそれだが、重みは実際の猫と同じようだった。

息を飲み込みながらアランの後頭部を撫でると嬉しそうな鳴き声を上げる。そして、俺の胸に顔をうずめてきた。

『にやおくん♪』

ロボットなので表情が変わることはないが、それでも無表情なアランが俺の撫で回しに喜んでるのが伝わってくる。

「アランちゃん、凄く嬉しそうだね」

「輝弥くんは撫で方が上手。それにアランは輝弥くんをやさしい人として理解してる」

「そ、それも分かるものなの？」

「少し撫でられただけで顔をうずめるなんてそうそうしないから、アランは輝弥くんの事が大好き」

璃奈も心なしか目が見開いているように見える。アランちゃんが見せるこの動作はそれほど珍しいもののように思う。

アランちゃんがそこまで気を許していることがわかって、俺もふと緊張の糸が解ける。先ほどまで身構えてしまっていたことが少し恥ずかしい。

「そっか……ならよかった」

頭をもう一度優しく撫でてあげるとより甘えた声を出しながら身

を預けてくるアランちゃん。この様子を見た時に俺はとあることに気が付いた。

「そういえばアランちゃんを見て思ったけど、この子って璃奈に似てるね」

「えっ、私に……？」

「うん。表情は変わらないんだけど、行動で感情を表すところはとも似てる。それにすごく人懐っこい所も璃奈にそっくり。やっぱりペットも飼い主に似るんだね」

「そうなんだ……あまり意識したことなかった」

俺の気付きに璃奈は目を丸くする。アランと親しみ過ぎているが故にこういった事に気付かなかったのかもしれない。

「でも、せつかくならアランちゃんも感情表現でできればいいのにね？ 嬉しそうな時は口角を上げたり、怒る時は眉間を寄せるような表情になったり、それで表情を作れたら、今のままでもかわいいけどもつと愛でてあげたくなるかも」

「表情を……作る……」

俺が何気なく発した言葉に璃奈はオウム返しで口に出す。突然何かを考え込むように目線を落とし口を噤んでしまう。

「璃奈？」

「……これだ」

「えっ？」

いきなり納得したように声音が良くなる璃奈。彼女が何を考えてその発言に至ったかが分からず困惑の色が隠せなかった。

そんな俺を他所に璃奈は俺が抱えていたアランを手繰り寄せ、アランの顔を俺の眼前に突きつける。

「私のライブ……これでいくー！」

「……どういふこと？」

アランの顔を目の前にチラつかせながら言われ、俺は彼女の伝えた意図が分からずネジが飛んだロボットみたいに思考が働かなくなるのだった。

新しい私

「愛ちやーん！ 照明の感じ、どうー？」

「うーん、位置はいいけど、少し眩しすぎるかなー？ 少し調整できるー？」

「はーい！ ……こんな感じー？」

「オッケーオッケー！ 完璧だよー！」

璃奈の家での最終準備が終わった次の日。いよいよ璃奈のライブ当日であり、朝からステージ準備組は大忙しだった。

愛さんはステージ上に立ちライブが始まった際のシチュエーションを考えて舞台装置の問題点がないかを確認する。その一方で侑さんは各照明のセッティングを手伝っていた。

侑さんは率先して準備を買って出ており、最初はスタッフから照明の操作方法を教えてもらっていた。最初はたどたどしかった操作だが、次第に慣れていったお陰もあり今では愛さんとの連携プレイより順調に各照明の確認作業を進めている。

侑さん達の力により舞台の準備は滞りなく進められているので、その光景を客席側から見ていた俺はほっと息をつく。

「ひとまず、ライブステージの方は大丈夫そうだね」

「うん、愛さん達のおかげでなんとか形になった」

璃奈は表情には出ずともその声色から安心した様子であることが窺えた。昨日から楽曲やダンスの振付に関しては突貫作業で形にすることができたため、無事にライブを始められそうでひとまずはよかった。

「……本当にみんなには感謝をしてもきれない。輝弥くん達が居なかったら私はこうしてライブを始める事ができなかった。一人では何もできなかったのに、みんなのおかげでライブをやる事ができる。そのことが本当に私にとってすごく大切に、守りたいもの」

「璃奈……」

ライブ前だからか璃奈はふとこれまでを振り返る。一時的に彼女

の中のトラウマが蘇つて練習が頓挫してしまった時間はあつた。その結果、ここまで急ピツチで準備を進める事になつてしまった事を璃奈は申し訳なく思つているようだ。

「そんなの気にしなくていいんだよ。前にも言つたでしょ？ みんな、璃奈のライブを楽しみにしてるからここまで協力してるつて」

璃奈へ再三言つている、同好会メンバーらは璃奈のライブを見たいから手伝うこと。何度もそう言つて璃奈へフォローしても本人としてはやはり気にする部分もあるようだ。だが、それと同時にここまで順調に進んでいる要素として一番重要なものもあることを忘れてはいけない。

「それに、みんながここまで順調に準備を進められたのつて璃奈のおかげでもあるんだよ？」

「えっ……？」

自分のおかげ。その意味がまるで理解できず、璃奈は目を白黒させている。

「みんな、昨日の進捗確認の時になんて言つてた？」

「……遅れてるけど今日までには形にできる……」

「それもそうだけど、誰のおかげで？」

「……………」

俺の追加の質問に璃奈は答えることができずにだんまりする。いや、実は気付いているがそれを自分の口に出すことができないのかもしれない。

「これは全部璃奈のおかげで完了してたんだよ。璃奈が自分の力でライブに必要な事を形にしてくれたからこそ俺達もこうして停滞することなく準備ができてるんだから、もっと自信持つていいんだよ？」

昨日の打ち合わせで俺やせつ菜さん、愛さん達が話していた各準備に対しての状況報告。それらの頭には必ず璃奈の成果もあつて形にすることができたと口を揃えて言つている。全員にそこまで言わしめるのはなかなかに難しい事だと思うが、それを彼女は成し遂げているのだ。

「……………そっか……………」

「あまり実感がない？」

「いつも人から避けられてばかりだった私が誰かの心を動かしてることが信じられなくて……」

璃奈は自分の胸中に渦巻いていた心配を口にする。怖い、不気味と揶揄され遠ざけられてた彼女はいつしか自分のいかなる行動も謙遜するような考えに陥ってしまったようだ。

「ふふっ、確かに自分の言葉が誰かの心を動かすなんて想像つかないと思う。でも、今の璃奈はそれが出来てる。これって過去の自分から成長してる証拠じゃないかな？」

「……うん。今、自分の事を少し誇らしく思ってる」

「でしょ？ 人の心を動かせるようになった今の璃奈なら、少し前に話してた願いも絶対叶えられる」

少し前に話してた願い、それがどういった内容なのか今の璃奈にはそう難い事ではなかった。

「みんなと繋がりたい……」

「うん、今の璃奈なら出来るって俺は自信を持って言えるよ」

璃奈のこれまでの活動を振り返り、自分の力で道を切り拓いてきた実績がこうして形になっているからこそ俺も躊躇なく胸を張ってそう言い切ることが出来る。

「……あ、ありがとうっ……」

俺からの励ましの言葉に璃奈は俺に向けていた視線を一瞬外す。

璃奈が少しよそよそしい様子を見せているとライブホールの入り口から歩夢さんに声を掛けられる。

「あっ、良かった！ 璃奈ちゃん、ライブ衣装の調整が終わったから確認してもらってもいいかな？」

「うん、すぐ行く」

歩夢さんの問いかけに璃奈がすぐさまは肯定すると、歩夢さんはクスリと笑顔を見せてその場から姿を消した。

「じゃあ、行っておいでよ」

璃奈の姿はライブが始まる直前に拝めればいいと思っていた俺はここに残ろうとする。だが、璃奈はホールの外へ出ようとせず俺の制

服の裾を掴んできた。

「璃奈？」

「ステージに出る前に改めて問題ないか一緒に確認してほしい。だめ……かな？」

璃奈は突然上目遣いでそう訴えてきた。まさか璃奈がそんな手法を使うとは予想しておらず、あまつさえ少し顔を紅潮させているようにも見える。それは情に訴えかける方法としてあまりにも残酷なものだ。

「……そんな頼み方されたら断れないでしょ。分かった、一緒に行こうか」

「うん……！」

こうして璃奈の口車にまんまと乗せられた俺は一緒にスタッフルームへと足を運ぶのだった。

スタッフルームにある一室の前で俺はベンチに腰を下ろしながら待機していた。現在、璃奈がライブ衣装を試着しているので俺はそれが終わるまで部屋の外で待っている。

「それにしても、アランちゃんのあれがヒントになるとは……」

俺は今回のライブ衣装の目玉である一部分のことについて思い返していた。

璃奈の家で飼っている猫型ロボットのアラン。表情が変わらないあの子を見て、璃奈が突然思い切った提案を投げたときは驚いた。果たしてそんなものが出来るのか、またそれがライブに及ぼす影響は如何ほどのなのか、全く予想が付かなかったのだ。

だが、そうは言ってもメンバー全員が璃奈の提案に賛同したのだから何も文句を言うつもりはない。それよりも昨日その話を出したにも関わらず、目的の品がその日中に完成するという事実の方が俺とし

ては恐ろしい。彼女の持ち前の機械知識により達成できた所業ではあるのだが、俺が作曲している間にそんな作業が迅速に行われていたことが想像できなかった。

「……輝弥くん、お待たせ」

そんな事を考えていると璃奈が衣装を纏って部屋から出てきた。

灰色を基調としワンポイントデザインとして猫のイラストやライオンが描かれている衣装。また、猫耳や背中の子猫の小さな羽で彼女の小動物感のある愛くるしさが表現されていた。また、その中でも群を抜いてインパクトを与えるものが一つある。

「表情、上手く変わってる?」

璃奈は顔に付けた電子ボードを指差して表情が変わっているかを確認する。デフォルトの微笑み顔がニツコリ笑顔、しよんぼり顔に変化して、璃奈の表情を遺憾なく表現していた。

そう、これが璃奈の提案した秘策。感情を出すことが苦手である璃奈が、表情を作れたなら、という俺の発言を元に制作したボードだ。璃奈がどういった感情を示しているかをすぐさまこのボードが代弁してくれるというもので、続けざまに切り替わる表情を見て、そのクオリティの高さが窺えた。

「ふふっ。うん、ちゃんと笑ってるししよんぼりしてるよ」

「そっか、ならよかった」

俺の反応を見て、電子ボードがちゃんと作動しているようで安心したのかボードの表情がほっとするものに変わっている。早速お手製のボードを使いこなしているようで思わず感嘆の声が漏れる。

「アランちゃんに感謝しないとね?」

「うん、今回のこの提案はアランと輝弥くんが居なかったら出なかった。二人には本当に感謝の言葉しか出ない。ありがとう」

璃奈は顔に取り付けたボードを取り外して素顔を見せてくれる。ボードを付けた璃奈も個性的で可愛らしいのだが、やはり素顔の璃奈も凄くかわいい。これが脱いでも美人というものだろうか。

「俺は何もしてないよ。むしろ……璃奈に迷惑をかけてばかりだった」

「そんなこと——」

「あるよ」

そんなことない。そう言おうとする璃奈に俺は言葉を被せる。笑顔を見せていた俺がいつの間にか深刻な顔つきになっていることを察した璃奈も思わずだんまりする。先ほどまでの穏やかな雰囲気は鳴りを潜めておりいつしか厳かな雰囲気を漂っていた。

「俺は……璃奈の隣で一緒に曲作りをしていたのに今回の問題について何も出来なかった。この問題にぶつかるとは思えないと予想できていたのに璃奈ならばできるんじゃないかって勝手に決めつけて、誰にも相談せずに自己完結させてた。璃奈が籠った時にも俺は真っ先に動くことができなくて、みんなの後ろを付いていくことしかできなかった」

「輝弥くん……」

話していく内に自分の無力さが実感として湧いてきてしまい思わず歯ぎしりしてしまう。真剣な面持ちで吐露する俺を璃奈は少し目を見開いて驚きの表情を見せてくる。

「璃奈……辛い思いをさせて、本当にごめん」

俺はそう言いながら璃奈の方を向いて綺麗な直角を描く。

こんなことを言っても何も変わらないことはわかっている。これはただの自己満足に過ぎない。だけど、昨今の活動で誰よりも近くで璃奈と一緒に準備してきたにも関わらず何もしてやれなかった自分を俺はただ許せなかった。

頭を下げて数刻ののち、璃奈の足音が聞こえる。もしかしたらかすみと同じように何か言ってくるのかもしれない。そう思い、つい手を握る力が強くなる。

身体を強張らせていた中で璃奈が取った行動は俺の頭を撫でるものだった。

「……ありがとう」

「えっ……。璃奈……？」

思いがけない行動に俺はすぐに頭を上げる事ができず、頭を下げた状態で硬直してしまう。

「輝弥くんがそこまで私の事を考えててくれて、わたし嬉しい」

「……でも、俺はこの問題から目を背けよう——！」

あくまで称賛しようとする璃奈に俺は顔を上げて弁明しようとするがすぐさま璃奈に声を被せられる。

「だけど、それは私自身が向き合わなくちゃいけない問題。輝弥くん達から指摘されて気付いてるようだったら、私は私の事を何も分かっていない証拠。遅かれ早かれ突き当たる問題だった」

「……それはそうだけど……」

璃奈の言葉に俺は言い返すことができず、たじろいでしまう。そんな俺を慰めるように璃奈は俺の右手を握る。

「輝弥くんは私の身を案じて提案することに抵抗を覚えたと思う。だけど、そうして私の事を気に掛けてくれる輝弥くんの事が、私は好き」
「……………」

璃奈からストレートに告白され一気に心拍数が上がるのを実感する。

「むしろ私は輝弥くんに余計な心配を掛けさせちゃった。それは今後の反省点。輝弥くんが自分の事を悪いと思うように私にも自分が悪いと思った点はある。これからそれを……一緒に変えていこう？」

璃奈はお互いの手を胸の前に持つてきながらそうお願いしてくる。好きと口に出した璃奈は顔を少し紅潮してるようにも見え、思わず息を飲んでしまう。

だが、俺の事を非難せずむしろ寄り添ってくれるところを見て、俺は嬉しくなり笑顔になる。

「璃奈、ありがとう。そう言ってくれてなんだか救われたよ」

「ならよかった。璃奈ちゃんボード、『ブイ』！」

「ぶっ、あははっ！　ここでそれはずるいよ……！」

油断した所に璃奈ちゃんボードと称して璃奈は自分の顔に電子ボードを当てながらピースサインを作る。そこにタイミングよくボードがドヤ顔を作り出し、その息の良さに思わず吹き出してしまった。

「えへへ、使い方に慣れてきた」

「さすがに手馴れ過ぎじゃない？」

璃奈は誇らしげにそう語るが、並大抵の人にはできない芸当だろう。ひとまず笑いも収まり落ち着いてきたところで遠くから璃奈を呼ぶ声が聞こえた。

「あつ、璃奈ー！　愛さん達が最終リハーサルやるつてよー！」

「慎くん。分かった、すぐ行くね」

愛さん達から最終リハーサルの呼び出しを貰い、それに承諾すると慎は準備が残っているのかすぐにこの場から姿を消す。

「じゃあ、私行くね？」

「うん、がんばって。応援してるよ」

璃奈が手を振りながらステージのある方向へと駆け出し、俺はそれを同じ手を振り返しながら見送る。

「同じ過ちを犯さないように、もっともっと頑張らないと……！」

璃奈が居なくなった方面を見ながら俺は改めてそう決意するのだった。

その後、璃奈のライブは大盛況で終わった。璃奈ちゃんボードを付けた状態で登場した際はバーチャル世界から飛び出してきたような衝撃が客席中に広がり、感嘆の声が上がっていた。

そして、表情をころころと変えながら踊る姿はアイドルのそれと同等であり、璃奈はこうして新しいスクールアイドルの形を確立させ、虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会の知名度を飛躍的に上げるのだった。

「土曜の璃奈のライブは凄かったなあ〜」

ライブ後の週明け、授業が終わり部室へ向かう途中で璃奈のライブについて慎と語り合っていた。

「そうだね、あのボードがあそこまで人気を博すなんて思いもよらなかったよ」

「確かに、あれを思いついた輝弥もすげえけど、それを一日で作り上げる璃奈の技量もすげえもんだ」

あのライブ後、SNSには『電子ボードを付けた謎のスクールアイドル——現る!?!』という見出しの元で璃奈の事が各所でフィーチャーされておりスクールアイドル界に衝撃を走らせていた。

「でもその素顔を知ってるのが俺達だけっていうのも、ちよつと嬉しいよね?」

「ああ、それ分かる!　なんか秘密を握ってるみたいでかっこいいよなあ〜!」

あれから璃奈も璃奈ちゃんボードが気に入り、今後のライブでも使用していくとのことだった。

その為、今後もボードを付けた状態でライブに臨むのだが、その裏の顔をメンバーや生徒しか知らないとなるとなおさら貴重でおいしい立ち位置にいる。

そんな話をしてしていると部室へと到着した。

「お疲れ様ですー」

「輝弥くん、慎くん、お疲れさま」

そこには璃奈しかおらず、彼女が一人で待っていたようだった。

「おっ、璃奈じゃねえか。一昨日のライブの疲れは残ってねえか?」

「大丈夫、むしろ次のライブに向けて今から練習したい」

璃奈はそう言うと言に靴に入れた何かを取り出す。それは一冊のスケッチブックだった。そして、とあるページを開くと自分の顔の前に持ってくる。

「璃奈ちゃんボード『メラメラ〜』」

「ははっ!　なんだそれめちやくちやいいじゃん!」

それは電子ボードでもやっていた感情表現。スケッチブックに自分の種々折々の表情を織り交ぜた似顔絵を描いて、それを顔に当てて自分の気持ちを伝えるというものだ。

慎も今までに見たことがないコミュニケーションの取り方にも関わらず、凄く新鮮に見えたようで面白い発想のようで気に入っていた。

「クラスの子にも凄く評判が良くて、これからはこれを私の新しいスタイルとしてやっていくことにする」

「ふふっ。うん、これも璃奈らしくていいと思うな」

璃奈達と話していると突然スマホのバイブレーションが響いた。

「ん？ 誰だろっ……？」

通知の画面を見るとしずくさんであり、電話のようだった。

「もしもし？ しずくさん、どうかしたの？」

『あつ、輝弥くん？ 今どこにいる？』

スマホ越しに聞こえるしずくさんの声は少し焦りのような、それだけで少し疲れているような感じがした。

「今、部室だよ。何かあった？」

『実は彼方さんが校庭のベンチで寝ててなかなか起きないの……！だからお願い、彼方さんを部室まで運ぶの手伝って……！』

「あははっ、彼方さんも相変わらずだね。わかった、これからそっち向かうよ」

『ごめんね、ありがとう！ それじゃあ、また後でね！』

しずくさんとの通話も終了し、スマホの通話画面を閉じると横で聞いている慎は会話から何かを察したようで苦笑いをしていた。

「彼方さん、どこかで寝てるってか？」

「校庭のベンチで寝てるってさ」

「あの人も相変わらずだな」

「でも、彼方さんらしい」

小言を言いつつも3人で笑い合う。しかし、いつまでもしずくさんを一人にさせるわけにはいかなないので、荷物をロッカーに置いて彼女たちの所へ行く準備をする。

「じゃあ行ってくるよ」

「お前一人で大丈夫か？ 俺も行くさ」

「慎がそういうならお願いするよ」

俺一人の力では心許ないと踏んだのか慎も一緒についていくことを進言してくれた。だが、実際ついてくれて嬉しいものだ。正直なところ俺の筋力で彼方さんを運べなかった場合が怖いからその時は慎に任せよう。

と、慎がついてくるのが確定し俺はもう一度ここへ残らせてしまう少女のことも考えた。

「璃奈も行く？」

「うん、私もついていく」

璃奈も一人で残るのは寂しかったのか俺たちと行動を共にすることにした。それに対して俺は肯定の意を示すように頷いてみせる。

「よし、じゃあ眠り姫を迎えにいこうか」

「璃奈ちゃんボード、『おおー！』」

璃奈は楽しみであることを示すように元気な笑顔のイラストを見せてくる。

それは今までの弱かった自分から新しい自分へ変わった証のようにも見えるのだった。

本編『君だから出来ることを』 新しい挑戦

「さてとつ、慎、お待たせ」

璃奈のライブが終わってから1週間が経った。彼女の斬新かつ新鮮な試みのおかげで虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会の知名度は飛躍的に上がり、SNS上でも話題が沸騰していた。

この勢いを止めるわけにはいかないとメンバー全員の熱が更に増しており、やる気に満ち溢れていた。俺も御多分に洩れず次のライブの為に楽曲の構想を練りたくて仕方なかったくらいだ。

普段と変わらないペースで授業が終了し、いつも通り教科書類を鞆へしまっていると既に片付けが完了している慎は隣の席の机に座って俺の準備を待っていた。いつも待たせているのは申し訳ないと思うが、一応他の生徒のものだから机の上に座るのは気にした方がいいんじゃないかと思うのはここだけの話。

「よっしや、じゃあ行くか」

慎が俺の合図に待ってましたと言わんばかりに机から腰を上げ、さっそく出発しようとして歩き出す。

「そういうえば、次のライブは誰がやるのかな？」

「この前の璃奈がでかい事をやったもんなあ。おかげで次にライブをやる人のプレッシャーは相当だぜ？」

部室へ向かう途中、次にライブを行う人の予想を立てていた。だが、その回答として慎はうーんと考え込みながら明確な人物の名を出そうとはしない。

それもそのはずだ。璃奈の出した成果は凄まじいものでこの同好会のファンをかなりの数、獲得する結果につながった。それから次のライブを執行するとなれば、璃奈のライブの時は、はたまたそれ以上のクオリティを大衆は求めるだろう。そのためか、いつもライブをやることに乗り気だった慎は今回ばかりは委縮している様子だった。

「こういう時は勢いに乗るべき、って慎が我先に声を上げるかと思っただけど、意外とそうでもないんだね？」

「あれと比べる必要はねえことは分かってるけど、それでもなあ……」

慎が苦悶の表情を見せていると俺達と同じように部室へ向かう道中だったのか菜々さんと偶然鉢合わせた。

「おや、輝弥さんに慎さん。お疲れ様です」

「菜々さん、お疲れ様です。菜々さんもこれから部活に行きますか？」

「そうです。それに慎さんにお話があったのでそれもあつてちようど良いタイミングでした」

「へっ、俺に……ですか？」

慎の問いに菜々さんは頷いてみせる。菜々さんが珍しく慎に用事があるようでそれもスクールアイドルの事に関してだろうか。

「ここでお話するのもなんですので練習着に着替えて部室へ来てください」

「はい、わかりました」

慎の返事に満足したのか菜々さんは部室へと歩き始めた。彼女の後ろを追うように俺と慎も付いていくが、俺の横で慎は少し考え事をしている様子だった。

「……何か気になる？」

「………もしかして……次のライブの事か？」

「それは分からない。だけど、可能性はあるかもね」

「………そうか」

慎は自分にはまだ早いと思っているのか、彼には珍しく固い面持ちをしていた。菜々さんは慎のみを指名し、俺もいる中でそんな相談を彼女がするという事は慎のプライベートな事情に関するそれではないことは分かる。

慎がどんな相談をされるのか、俺も内心やきもきしながら部室へと向かうのだった。

練習着に着替えてから部室へ向かうと、既にメンバー達は全員揃っており、各々の談笑を楽しんでいた。先ほどまで一生徒だった菜々さんもここでは既にせつ菜さんの姿に変わっている。

俺達が入ってくるのいち早く気付いたのはしずくさんだった。

「あつ、輝弥くん。お疲れさま！」

「お疲れさま、しずくさん。もう全員揃ってるんだね？」

「はいっ！ あとはお二人が来るのを待つだけでした！」

せつ菜さんは俺の問いに元気に返事をしてくれる。先ほどまで知的な雰囲気を漂わせていた菜々さんからあつという間に性格がガラツと変わってしまうのは今では慣れたものだがそれにしても不思議な感覚に陥る。

「じゃあ、慎くん達も来てくれたから話してくれるんだよね？ せつ菜ちゃん」

「はい、そのつもりです」

練習前のミーティングとして侑さん達も集められたようで詳細の話について何も聞かされていないようだった。しずくさんと彼方さんの間に用意されている各々の椅子へ俺と慎は腰を下ろすとせつ菜さんは軽く咳ばらいをして、集まってもらった趣旨について話しはじめた。

「今回お集まり頂いたのは他でもありません。次のライブについてです。先週、実施した璃奈さんのライブにより私たちの知名度はより大きいものになりました」

「うん、璃奈ちゃんの手伝いをする事でライブに向けてやらなくちゃいけないことをしっかりと理解できて凄く良い経験になったよね！」

侑さんの意見に全員が頷いて同感の意を示す。俺は曲作りを集中的にやっていたのでその他の動きをあまり把握していない。けれども短い時間の中であそこまで完成度の高いライブを行うことがで

きたのはみんなが意見を出し合って効率的に準備を進められた事に他ならない。

「はい。ですが、同好会としてはまだライブを一回しか実施していません。更に沢山の人に見てもらうために外で開催されるスクールアイドルのライブイベントにも参加するべきだと思っんです」

せつ菜さんの言う事ももっともだ。まだこの同好会は立ち上げて2ヶ月足らずであり、ライブの経験数も1回のみ。ましてや、生で観客に見てもらっているのは旧同好会でライブを行ったせつ菜さん、お台場のレインボー公園でゲリラライブをした愛さん、そして新同好会で最初にライブを行った璃奈のみだ。その他のメンバーはMVという形で発表しているが、それでも全員分がアップされているわけではない。残りのメンバーについても同じようにステージへ出て、アイドルとして売らなければいけないのだ。

「そこで次のライブを探していた時に、こんなイベントを見つけたんです。その名も、『魁さきがけ！ Top of the Men's School IDOL!』、略してTMSです！」

「トップ オブ ザ……メンズスクールアイドル……?」

俺が思わずイベント名を復唱するとせつ菜さんが続けてイベント概要について解説をいれてくれる。

「こちらは世間では母数が少ない男性のスクールアイドルのみを対象にしたものになります！ 男性スクールアイドルがシノギを削り、その頂点を争うものです！」

「男性のスクールアイドル……ということはどううちの同好会だとシンシンが対象だよね？」

愛さんに倣う形でメンバー全員が慎の方を見つめる。慎はそのタイトルが語られた段階から察しがついていたのだろうか真剣な表情で話を聞いていた。

「そうです。開催は今から2週間後で、大会の規模としてはそこまで大きいものではなく都内のスクールアイドルに限定するものになります。慎さんのデビューステージにはおあつらえ向きではないかと思ひまして、今回はその提案となります」

「おおー！ ついに慎くんもステージに立てるんだー！ 今から楽しみ〜！」

「もう侑ちゃん、まだ慎くんの意向を聞いていないのに気が早いよ？ 慎くんはこの話を聞いてどう思うかな？」

横でテンションが上がっている侑さんを諫めながら歩夢さんは慎に問いかける。イベントに出る出ないを決めるのは参加対象者である慎のみだ。部室に来るまでに話していた璃奈の勢いに続かなければいけないプレッシャー、それも相まって先ほどまでの慎は乗り気ではなかったのだが、この提案を聞いて彼は乗るのだろうか。

そんな事を考えていると慎は徐に口を開いた。

「……正直、自分がどういうライブをやりたいか、どんな姿を見せたいか、そんな構想はまだ固まってないんです。そんな中でイベントへ参加しても大丈夫でしょうか？」

「それは今後の慎さんの気持ち次第です。貴方が答えを見つけれられるように私たちも全力でサポートします」

「そうね。みんながみんな、既にやりたい事が固まっているかと言われたらそうじゃないと思うし、練習しながら見つけていけばいいと思うわ」

「私も助けてもらった分、今度は慎くんのお手伝いをする。璃奈ちゃんボード『むん』」

時間はまだあるからこそ、その道中で答えを見つけなければいい。慎の不安にせつ菜さんと果林さんがそうアドバイスを出してくれる。そして、璃奈も自分のことを支えてくれた恩返しとして全力でサポートすると自信の似顔絵を描いたスケッチブック、通称璃奈ちゃんボードを当てながらそう言うてくれた。

まだ、迷いの色が残っている慎にかすみが胸を張りながら悪戯顔で慎へ意見を出す。

「まあ、慎のすけがやるっていうならかすみもちよ〜とただけなら手伝ってあげなくもないよ？」

「んな意地の悪い奴はこっちから願い下げだな？」

「なあ?! 人が折角サポートしてあげようって言ってるのに!!」

「はいはい、かすみさん。どうどう。慎くんがやってみたいなら、挑戦してみてくださいと思うよっ」

自分の気持ちを一蹴されて憤慨するかすみを宥めながらしずくさんも慎をフォローする。その場にいる全員から賛成の意見が貰えたことに安心感を覚えたのか慎の固かった表情に笑顔が戻った。

「そっか……みんながそう言ってくれるなら、挑戦してみようかな……」

「大丈夫、慎くんが活躍できるように彼方ちゃん達もたくさんがんばるから♪」

「そう言ってくれるのは嬉しいですけど、彼方さんは頭を撫でるのをやめてくださいよ……!!」

慎が挑戦する意欲を見せると彼方さんは慎の頭を撫で始める。突然の行動に慎もびくつとしながらも心地が良いのか抵抗する意欲を見せない。

「ふふっ、初ライブ、絶対に成功させようね♪」

一種の姉弟のようなやり取りを見ながらエマさんは楽しそうに笑う。俺達も彼女らと想いは同じだ。慎がやると言ったからには最高のライブとなるように全力で邁進するのみだ。

「では、決まりですね?」

「はい。俺、TMSに出て絶対に結果を残してみせます!」

せつ菜さんの最終確認に慎は力強く頷いてみせ参加を表明する。

「わかりました。それでは早速私はイベントに参加するために運営とコンタクトを取ります。慎さんの初ライブに向けて虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会一同で力を合わせてがんばりましょう!」

「「おおー……!!」」

世間的には少数派である男性スクールアイドル。それがどのような大会になるのか予想ができない。それでも慎はスクールアイドルとして結果を出したいと意気込んでいる。いつになく奮起している慎を見て、絶対に勝たせたいと心の内で強く誓うのだった。

練習終わりのひとときを

TMSに向けた緊急ミーティングが終わり、俺達はいつも通り練習を始めていた。璃奈のライブまではハイペースで練習も詰め込んでいたため、無理強いを控える意も込めてここ一週間はそこその練習量としている。その為、今日もランニングや筋力トレーニングは合計1時間ほどで終了して、現在は柔軟を二人一組で実施していた。

「……これくらいで……どうっ？」

「おう……もつと……強くっ……押してくれ……」

「さすがにだいぶやってるよ？ これ以上はだめ」

俺の体重を掛けた前屈に慎は屈する様子を見せず、更に強い力を所望する。だが、無理強いは良くないと言った手前、これ以上は身体に負担を掛けると思い、彼の要望に反対する。

「はあっ、分かったよ」

慎も俺の制止で理解したのか身体の力を抜き前屈を崩す。そして、胡坐を搔いて楽な姿勢を取っていた。そんな慎に俺はクーラーボックスからスポーツドリンクを取り出し座り込む慎の横からすつと差し出す。慎もサンキュ、と一言礼を言つて、ドリンクを喉の奥へと流し込む。

「気合が入るのは分かるけど、今日まではほどほどに話だったでしよっ？」

「それは分かってんだけどなあ……」

ひとしきり飲み終わると慎は遠くを見据えながら黄昏る。彼がここまで思いふける様を見るのはなかなか珍しい。

慎との間に流れる奇妙な沈黙を破つたのは意外にもかすみだった。

「うわっ、慎のすけが辛気くさい顔してるう……！」

「あっはは、しんのすけがしん気くさいって？ かすかすく良いダジャレだねえ〜！」

「むきいー！ 別にダジャレのつもりじゃないですし、かすかすって呼ばないでくださいー！」

慎に似つかわしくない表情をかすみは揶揄するが、隣にいた愛さんはすぐさまダジャレに食い付いてかすみとの即興漫才を始める。

「お前も下らねえことを言っつてんじやねえよ、ばかすかす」
「なにー!？」

ちよつかいを掛けられた慎はいつものように怪訝な表情をしながらかすみに怒るかと思つたが、意外にも穏やかな顔色をしている。あまりに今までと違う反応に俺は驚きを隠せなかった。

「……慎がかすみに突つかからないなんて、これから雨でも降るのかな……?」

「いやいや、むしろ槍でも降ってくるんじゃない?」

「あんたらは俺をなんだと思っつてんだ?」

冗談のつもりで呟いた虚言に愛さんも乗っかかり、慎が珍しく憤慨している。だが、それも一瞬の事ですぐに慎の表情は戻り、何かを考えながら地面へ視線を向けた。

「次が俺の番つて考えたら嫌でも身体に力が入つちまつてさ、らしくねえ事をしちまつてたな」

慎は自分がどんなライブを出来るのか、どんなパフォーマンスで観客を魅了させることができるのか、何も分かつていない。いや、むしろそれが当然のことだ。人間、初めて挑むことについては何から手を付ければいいのか分からないし、自分が今やつてることが最上の選択なのか判断もつかない。それ故に慎も先行きが見えない不安からナイーブな気分になっていたのだろう。

そんな慎を励ますように俺は彼の肩に手を置く。

「考えても仕方ないよ。まだ始まつたばかりなんだし地道に頑張つていい?」

「……そうだな、くよくよしても仕方ねえな」

自分の肩に置かれた手に被せるように慎は自分の手を乗せてくる。そして、こちらを見据えて微笑んでくる。

「おん? シンシン、首に掛けてるそれつてなんなん?」

すると、愛さんは慎の首元に見える紐に目が行つたようだ。

「あつ、これですか?」

愛さんの問いに慎は首から下げているものを見せてきた。それはいつかの練習の時に俺としくさんに見せてくれたペンダントだ。

ペンダントの先にあしらわれているサファイアが顔を覗かせるとかすみも目をキラキラと輝かせていた。

「ええ、なにそれ!? 慎のすけには似つかわしくないものを付けてるんだね!」

「似つかわしくねえって言うな、ばかすかす! こいつは家族から貰った大切な誕生日プレゼントだ」

かすみも冗談のつもりで言ったのだろうが慎は彼女の不躰な発言に自然と語気が強くなる。慎の意志を汲んだのか愛さんは興味ありげに蒼玉を見据える。

「そつかあ……、こんな綺麗なアクセサリを買ってくれるなんて素敵な家族なんだね?」

「はい……! 大好きな家族で……あいつの——」

「おっ、みんないたいたー! おーいそろそろ練習切り上げるよー!」
慎が何か眩こうとした矢先に侑さんが屋上に顔を出して、終了の音頭を取ってくれる。他のメンバーもそれを聞いて各々制服に着替えようと部室へ戻ろうと歩き始める。

「慎、最後に何か言おうとした?」

「……いや、なんでもない。さっ、俺達も帰ろうぜ、輝弥」

俺は慎が言おうとしたことが気になったが、慎は特に言及する様子も見せずに帰路に着こうとする。触れていいことかも分からないし、慎もすぐにその場から立ち去ってしまったので俺は何も言わずに彼の後を付いていくのみだった。

「あつ、輝弥くん! お疲れさま♪」

制服へ着替え終わり、校舎の外へ出るとしくさん、かすみ、璃奈の三人が待っていた。

「お疲れさま、三人とも待っててくれたの？」

「今日は練習が早く終わったからそのまま遊びに行きたいなってかすみちゃんか」

「ちよつ、りな子！ それは言わなくてもいいじゃん!! かすみんはただ最近は練習尽くしだったから息抜きしたいなあって言ったただけだもん！」

「でも、折角なら輝弥くんたちにも声を掛けようって言ったのはかすみさんだよな？」

「しず子おー!!」

璃奈としずくさんから余計なことを言われて慌てふためかすみだったが、彼女がまさか俺たちにも声を掛けてくれるとは思わなくて笑みがこぼれてしまう。こういう時は女子だけで遊びに行くのが鉄板だと思っていたからなおさら嬉しくなる。

「あつはは、かすみもそこまで突っかからなくてもいいのに。三人が良いなら俺も参加させてほしいな。慎も行くよね？」

1年生全員で揃って遊びに行くことなんてそうそう滅多にない。こういう事ならば慎も乗ってくれるだろうと思い、来てくれることを前提で慎にも確認したが、意外にも彼の口から出たのは否定の言葉だった。

「ああー……悪い。俺、今日は野暮用があるんだ」

「えっ？ そうなの？」

「折角揃ったのにみんなまで遊べないの……寂しい……。璃奈ちゃんボード『しょぼん』」

まさか反対すると思わなかったので俺はつい素っ頓狂な声を出してしまう。そして、璃奈も同じことを思ったのかボードに落ち込んだ顔を描いて悲しんでいる様子を表現する。

「悪いけど、別の日に遊ぼうぜ。じゃあ、俺は先に行くから、お疲れ」

「あつ、慎ー」

別れの挨拶だけ言うと慎はそそくさと帰ってしまった。引き留めようと声を張るが慎は足を止める様子は無い。

「慎くんが遊びに行くのを断るなんて珍しいね？」

「うん……。みんなが揃う事もあんまりないから楽しみにしてたんだけど……」

慎が去っている方角を見ながらしずくさんは俺の横に移動してくる。

慎とは二人で遊びに行くことはザラにあるがしずくさん達も交えて皆で遊ぶことは今までやったことがない。だからこそこうして彼女らが誘ってくれたことは凄く嬉しかったのだが、その願いも虚しく潰えたように思える。

しずくさんと一緒に呆然としてしていると横からかすみがつつつつとあくどい笑みを浮かべながらある提案をしてきた。

「ねえねえ、このまま慎のすけの跡を付けてみない？」

「尾行するの？」

「だって、せっかく全員で遊べる機会なのにそれを断るなんて余程の事情じゃない？ しずくさんやかぐ男だって気になるでしょ？」

「まあ、気にならないと言えば嘘になるけど……」

かすみの提案に肯定はすれども同意はしかねた。俺たちとの用事を断るということは相応の私用ということ。それに干渉するのは慎のプライバシーを侵害しているようであり良い気がしない。だが、目の前のショートボブの少女にとってそんな事はお構いなしのことだった。

「それに……。もし慎のすけにスキヤンダルが発覚したらどうするのさ？」

「す、スキヤンダル……。？」

慎とは縁遠そうな言葉に俺は顔をしかめるがかすみは気にする様子を見せずに人差し指を俺に突きつける。

「そう！ 仮にもスクールアイドルを名乗ってる慎のすけが他校の生徒とかと色恋沙汰になってるなんて話が上がったら、その瞬間に慎のすけのメンツも丸つぶれ！ 最悪の場合、この同好会の存続も危ういことになるかもしれないよ？」

「さすがに慎くんに限ってそんな事は……」

「100%無いと言い切れる？ りな子」

「そ、それは……」

猛烈な勢いで捲し立てるかすみに璃奈が待ったを掛けようとするもかすみも止まる気はない。彼女の剣幕に璃奈も思わず言葉を失ってしまふ。

璃奈でもダメだと判断したしずくさんはムスツとしながらかすみを咎める。

「もう、かすみさんがただ慎くんの事が気になってるだけでしょ？
だったらかすみさんが一人で行けばいいのに」

「それだともし慎のすけが抵抗してきたらかすみんが太刀打ちできないじゃん！ そのためのしず子たちなんだから！」

「ただの巻き込まれ損じゃないか……」

かすみの言いがかりに俺は頭痛が抑えきれず眉間に指を当てる。俺たち三人が苦言を呈しているところを見てかすみは軽くため息をつくと弁解を始めた。

「……もちろん慎のすけにとってデリケートな問題で、もし慎のすけにも見つかったらその時はかすみんから謝るよ？ だけど、変な事に出してたら嫌だからそれだけでも見に行きたいの」

観念したようにかすみは今回の目的を伝える。慎といつも口喧嘩が絶えない彼女だが、なんだかんだ言いながらも慎の身を案じているようで、それ故の提案みたいだ。

「もう、そういうことならそう言えばいいのに」

「本当にね？ かすみさんも素直じゃないんだから」

「もう〜！ 二人揃ってそんな暖かそうな目で見ないでよ〜！」

しずくさんと二人で微笑むとかすみは照れ隠しのように地団駄を踏む。

「三人とも、行くなら準備しないと慎くんを見失っちゃう」

「あつ、それもそうだね。なら早速出発しようか？」

璃奈の催促を聞いて出発の音頭を取るようにかすみへと目を向ける。俺からの視線に気づいたかすみは咳ばらいをするといつも笑顔に戻る。

「ご、ごっほん。では、早速慎のすけの様子を見守り隊として、しゅっ

ぱーっ!!」

「おおー!」

「いつの間にか新しい隊が結成されてるし……まあ、いつか」

かすみが即興で付けた隊名に苦笑を浮かべながらも拳を突き上げる三人に呼応するように俺も拳を突き上げるのだった。

慎の秘密

「慎のすけが電車に乗っていった！ ほら、かすみ達も行くよ！」
「う、うん！」

私用で先に帰ろうとする慎を見守ると称した追跡を開始して、学校から最寄りの駅で慎は電車に乗って帰路に着こうとしていた。俺達は乗る号車をずらして慎に悟られないように同じ電車へと乗り込んだ。急いで電車へ駆け込んだからか息を荒げ身体が熱くなっていた。「さてと、ここから慎のすけを見逃さないようにしつかりと見張るよ！」

「それはやるんだけどさ……」

かすみは当たり前前のことを話しているが、他の三人はとある一点が気になって仕方なかった。

「このマスクとサングラスはなんだ？」

「さすがに暑苦しい……」

璃奈はそう言いながらマスクを顎まで下げて新鮮な空気を吸う。俺達は四人そろってマスクとサングラスで顔を見られないように変装していた。だが、全員が同じ格好をしているからか周囲からの視線が地味に突き刺さって心が痛くなってくる。

「当たり前でしょ！ 慎のすけにバレないようにするのが目的なんだからこれくらいは当然だよ！ それにいずれはかすみ達も人気者になるんだから周囲に気付かれないようにする練習にもつながるんだよ！」

「確かにいずれは使えるようになるかもだけど、みんなでこんな格好してたら絶対気付かれるよ……」

しずくさんも表情は見えないが項垂れているように見える様子からきつと俺や璃奈と同じ感情を抱いているのだろう。かすみの言う有名税も分からなくもないが今の俺達にとっては無用の長物だ。まだライブを全員がやれてるわけではないし、知名度が上がったとは言ってもそれは世間一般で見れば雀の涙と言っても過言ではないと

思う。無論、応援してくれるファンを増やすために邁進中ではあるが、まだまだ道のりは遠い。

「そういえば、TMSってどんなイベントなのかな？」

璃奈が慎の出場する予定のトップ・オブ・ザ・メンズ・スクールアイドル、通称TMSのイベント概要について聞いてきた。俺も詳細については何も知らないのでイベントのホームページを調べて概要を確認してみる。

「えーと……出場する人は男性のスクールアイドルのみで、抽選で選ばれた順番にパフォーマンスして全出場者のそれが終わったら参加した観客の投票によって優勝者を決めるものだね」

「披露するものはダンス、歌唱のジャンルは問わず。そして既存曲か新曲かも制限はないんだね」

公式サイトを閲覧しながら、イベント概要を読み上げる。しずくさんも俺に続いて出場条件を読み上げてくれた。だが、彼女が読み上げた一文にかすみは意見を被せてきた。

「曲の制限は問わないとは言ってるけど、やっぱり新曲が一番インパクトは強いよね？ 慎のすけのデビューライブだしここで観客の心を掴み取って自信に繋げなくちゃいけないし！」

「そうだね。新曲を作ることになるから慎にもかなり負担を掛けることになるけど悠長なこととも言ってられないし明日から頑張らないと」
「輝弥くんも無理しないようにね？」 璃奈さんのライブから Spanien が短いし、輝弥くんにも相当な負担が掛かると思うから」

新曲作りが立て続けに行われている関係上、しずくさんは作曲担当である俺の心配もしてくれる。しずくさんの優しさを感じつつ俺は笑ってみせた。

「ありがとう、しずくさん。でも、俺は大丈夫。無理強いはしないつもりだから、そこは安心して？」

「そんなこと言うけどお、かぐ男はすぐ一人でやろうとするから嫌でもかすみん達が近くで見えるからね？」

「うん。初ライブをする慎くんも大事だけど、その基盤を作る輝弥くんのことでもすごく大事。だから、私たちに手伝えることはなんでも

言ってね？ 璃奈ちゃんボード『むん』」

頑張る程度については以前に侑さんや歩夢さんから釘を刺されているので理解しているつもりだ。しかし、俺の性格もあるのかかすみは曲作りに参加する意思を示す。璃奈も参加とまでは言わないが協力する旨をボードを使いながら伝えてくれた。

「……分かった。俺も言わずに抱えちゃう可能性があるから、その時は是非近くで見張ってほしいな」

「むっふっふ、当たり前じゃん！ かぐ男はしず子に似て変な意固地になる所があるからそこはかすみんたちが見てあげないと〜！」

「ちよつと、かすみさん！ 私に似てってどういうこと!？」

突然自分を引き合いに出されたことにしずくさんは驚きつつも、褒められたそれではじゃないことを一瞬で理解しぶんぷんと憤慨する。

「べつにつ〜？ ただ似てるって言っただけなのにそんなに怒ることないんじやくん？ お似合いって言ってるわけじゃないし〜？」

「むう……かすみさんなんか知らない」

かわいい反応を見せるしずくさんを面白がるようにかすみは煽る様子を見せる。だがすぐにしずくさんは拗ねるようにぷいつと顔を背けてしまった。

「あくん、しず子〜ごめんってば〜！」

そんなしずくさんを見て、かすみは彼女に泣きついて許しを乞うた。しずくさんに嫌われたくなければそんなことしなければいいのに、こんな所もなんだかかすみらしい。

「輝弥くん、顔が赤いけどどうしたの？」

「へっ？ べ、別になんでもないよ。ずっとマスクを付けてたからか顔の周りが熱くなってたのかな、あっはは」

かすみにしずくさんと似ていると言われて嬉しさと恥ずかしさが込み上げていたが、その気持ち表情に出してしまったみたいで璃奈に見つかってしまった。咄嗟にそれっぽい嘘を吐いて誤魔化そうと思ったが璃奈には無意味だったようだ。

「でも、マスク外してからそれなりに時間は経ってるよ?？」

「うっ……」

簡単に矛盾を指摘され苦虫を噛んだ顔をする。彼女のことを変に意識してるわけではないことを弁解しなくてはいけないが、口下手な俺では次に言うべき言葉が見つからず固まってしまった。

だが、そんな俺に璃奈は何を思ったのか自分の手を俺の手に重ねたのだった。

「……抱え込みすぎないでね？」

「璃奈……」

まっすぐに見据えられながらただ一言、彼女はそう呟いた。それがどういう意図を持ってした発言なのかはわからない。俺の心の中までは流石に察することはできていないだろうから、彼女なりの励まし方を考えた結果、こうなったのだろう。

「うん、ありがとね」

「って、慎のすけ、ここで降りてるじゃん！ 早くかすみ達も続くよ！」

「あつ、待ってよかすみさん！」

璃奈と2人で話していたらかすみ大きな声を上げて慎が下車していたことに気づいた。彼女に続く形でしずくさん、俺、璃奈の順番に電車から降りていくのだった。

「なんで慎は海浜公園駅で降りたんだろう……？」

建物の影に隠れながら慎の後ろをついているが、ふと俺はそんな疑問を呟いた。俺達は慎がてっきり誰かと遊ぶものとはかり思っていた。おまけに場所も学園からはそれほど遠くないところだから、それも含めてここで降りた意味が分からず不思議に思ったのだ。

「海浜公園で誰かと待ち合わせしてるのかなあ？」

「でも、行き先は公園から外れてるよ？」

しずくさんの言う通り、慎は海浜公園の方へは向かわずにアパートが立ち並んでいる方向へと歩みを進めている。人と待ち合わせをす

るなら公園が最適なのだが、その選択を取らないのが妙に腑に落ちないのだ。

「もしかして家に帰ろうとしてるだけなのかな？」

「それなら野暮用なんて言わないんじゃない？　でも、慎が仮病を使うようには思えないし……」

璃奈の予想も一理あるが、それでは早く帰る理由が見つからない。

正解が見つからないまま彼の後をついていくと、レインボー公園の管理事務所や台場アパートの横を通り過ぎて一段と開けた場所へ出ていった。

「慎のすけって本当に誰かと待ち合わせしてるんじゃないの？　じゃないとこんなへんぴな所には来ないと思うんだけど？」

「うーん、それも否定できないところがまたなあ……」

アパートの陰に隠れながら彼の後を追う俺達4人。かすみも少し疲れてしまったのか先ほどの憶測を掘り返す。確かにここならば誰にも気づかれないし誰かと密会するには最適な場所なので、その可能性も十二分にあるのだ。

「あつ、慎くんが立ち止まったよ！」

すると慎は開けた先にある台地に設けられた石段を登り切るとそこで立ち止まった。彼が今立っている場所は俺達がいる所よりも少し高いところにあり遠くからでも彼の姿を容易に認識できる。

「なんであそこで止まったんだ？　ここは特にパワースポットとかではないはずだけど……」

「……ねえ。慎くん、何か言っていない？」

台地で静止した目的を考えていると璃奈は慎の言動に耳を傾けるように促す。しかし、アパートの陰からでは彼の声がちゃんと聞き取れないので台地の下にある草むらにかすみと璃奈、俺としずくさんの二手に分かれて身を潜める。そして、慎の言葉にそつと耳を傾けた。「……待たせたな、真結まゆり。同好会のミーティングが長引いて来るのが遅れちゃった」

慎は女の子の名前を出し、この場所への来訪が遅れてしまった事を詫びる様子を見せていた。だが、そんな彼には少しおかしな点があつ

た。

「真結……。女の子の名前だから、やっぱりかすみさんの言う通り……？」

「でも、しずくさん。ちょっと待って、その真結って子……。どこにもいないよ？」

そう、俺達にはその女の子らしき姿がどこにも見えないのだ。慎の後ろ姿で隠れている可能性もあるが、服装や髪型など面影が何一つ見えなかった。彼が靈感を持って話聞いたことはないが、いきなり慎が何も無い所に話しかけており不審に思えてしまった。

「ははっ、別にお前の事を忘れたわけじゃないぞ？　っていうか、お前の事を忘れる事なんて絶対に出来るはずがないさ。……。俺の大事な……。妹なんだからよ……」

「妹……。まさか……？」

慎が語りかけたその言葉に俺はこれまでの慎の行動を振り返る。俺がスクールアイドル同好会に入る際に言ってくれた身内からのエールについて。そして、妹の話になりそうになった瞬間に話題を切り捨てていたところ。これらを組み合わせて俺の中である一説が浮上した。

だが、それを口に出す前に慎は突然跪いた。しかし、慎が屈んでくれたおかげで彼の姿で隠れていた物が俺達の目に映る事となった。

「あれは……。墓石……？」

「……。やっぱり……」

しずくさんは姿を見せた大理石のお墓に口と目を開けて呆気にとられていた。しかし、慎は俺達に気付くこともなく墓石に向かって語り始めた。

「今日さ、次のライブの話になったんだよ。この前に話した俺の同級生の璃奈がライブを成功させて、この勢いのまま次へ走ろうって事で誰が次にライブをやるかって話になったんだ」

「……………」

「そうしたら、今度は俺に白羽の矢が立ったんだよ。トップ・オブ・ザ・メンズ・スクールアイドルって言って男のスクールアイドルのみで行

われるイベントなんだってさ。2週間後に開催されるそれに俺が出場することになったんだ！」

墓石へ話しかける慎の声は段々大きくなっていき、嬉しさも込み上げていくようだった。

「今までは誰かのサポートに回るが多かったけど、今度は俺の番。お前が観たかった景色を俺が見せてやるから、お前が叶えられなかった夢を……俺が叶えてみせる。だから……応援してくれよな？」

「真結ちゃんが観たかった景色……」

憂いを帯びながらもどこか優しくな雰囲気ですり掛ける慎。真結ちゃんはスクールアイドルを目指していたのだろう。初めてかすみから同好会への勧誘を受けた際に、その当時から慎は既にスクールアイドルの事を知っていた。それは真結ちゃんの存在もあって知り得たことなのだろう。

「明日から本格的に練習が始まる。しばらくはちゃんと顔を出せないと思うから寂しがらんじゃねえぞ？」

慎はそう言うのと徐に立ち上がりこちらへと踵を返した。突然彼が戻ってきたので、思わずしずくさんと肩身を寄せながら息を潜ませる。しずくさんとの近い距離感や慎にバレないかで心臓が激しく鼓動しているが、慎は俺達に気付く様子もなく駅の方面へと歩いていった。

「……ふう……なんとか気付かれずに済んだね」

「そうだね。こっちに戻ってきたときはドキツとしたけど」

慎の姿が見えなくなり、俺はしずくさんから離れて一息つく。かすみ達も草木から抜けてこちらへと駆け寄ってきた。

「ねえねえ！ さっき慎のすけが話してたのって……！」

「その答えが、この先にあるよ」

かすみの問いに俺は墓石を見据えながら言葉を被せる。そして、その答えを確認するために俺達は石段を登り、墓石へと近づく。

「……鈴川^{すずかわ} 真結^{まゆり}。昨年亡くなり享年 13歳。ということ、やっぱり慎の妹は……」

墓石に刻印されていた名前と生が失われた年齢を読み上げる。ま

だ中学生にも関わらず早すぎる死を迎えている慎の妹に同情せざるを得なかった。

「……前から慎くんが妹さんの事を話したがらなかったのはこういうことだったんだね」

しずくさんの言葉に俺は頷いて肯定する。慎の立場としては既にこの世からいなくなっている妹の話をして、暗い雰囲気にしたり余計な気を遣わせなくなかったのだろう。俺達の事を気に掛けてくれる慎の配慮に頭が上がりなかった。

「妹さんもスクールアイドルに憧れてたんだね。だからその想いを慎くんが受け継いだ」

「ふん、それがどうだっていうのさ！」

慎と彼の妹の想いに触れた璃奈はより一層ライブを成功させたいと声音が大きくなった感覚があった。しかし、それと反対にかすみは何か思うところがあるのか不服げに腕を組んでいた。

「かすみさん？ どうしてそんなことを——」

「慎のすけにどんな理由があっても練習のやり方を変えるつもりはないからね！ かすみ達がやろうとしていることは今ここでスクールアイドルをやってる慎のすけを誰よりも輝かせることなんだから！」

大事なことを隠していたことに怒っているのかと思ったが、どうやらかすみはそうではないようだ。大きな声で語るそれは墓石に眠っている真結ちゃんへも伝えているようだった。

にこつと微笑むかすみを見て、俺達三人もつられて笑顔になる。

「そうだね、慎にどんな事情があっても俺達の目的は変わらない。慎がやると決めた以上、悔いのないように全力でサポートをするのみだよ」

「みんなで慎くんの力になろう！」

「私もがんばる。璃奈ちゃんボード『おぉー』」

璃奈が声を一緒に腕を突き上げる。それに合わせて他の三人も一緒に声を合わせながら天へと突きあげた。そして、俺は真結ちゃんの眠る墓石へと振り向き眼前で正座を組んだ。

「真結ちゃん、慎の夢を俺達が支えます。今回のイベントに参加する誰よりも、彼を輝かせてみせるから。だから、どうか慎の事を……俺達の事を……見守っていてください」

そう言いながら俺は手を合わせて祈りを捧げる。後ろからしずくさん達の声が全く聞こえないことから恐らく俺の後に続く形で彼女たちも弔意を表しているのだろう。

祈りを捧げる俺達の元へ静かに風が吹き出した。そつと頬を撫でる優しい清風はまるで真結ちゃんの想いが俺達の中へ吹きこまれるような不思議な感覚だった。

それが君の……？

「じゃあ、今日は作曲を始めていこうか？」

「おうよ、よろしく頼むぜ」

慎の秘密を知った次の日。今日はライブをやるための要でもある楽曲作りを行う事としていた。あの後、慎は俺達の存在に気付いた様子もなかったので、今日もいつもと変わらぬ装いで音楽室へやってきた。

「今回、慎が歌いたいテーマに沿って楽曲を作っていくことになるけど、慎はこういう歌を歌いたいとかイメージはある？」

曲作りを行うにあたり、俺は鉄板の質問をする。制作を始める際に一番必要なものは本人の意思に沿っているかである。だが、俺の質問に慎は腕を組んで渋い顔を作っていた。

「うーん、悪いけどまだ明確なイメージは出来てないんだ。俺なりに考えてるんだけどイマイチピンとこなくてな……」

「そっか、でも自分がいざやるってなると中々実感が湧きにくいよね。じゃあ、俺も慎に歌ってほしいイメージを出すからそこから広げてみようよ」

俺も素案作りに関して慎に任せっきりにしたくなかったので慎が以前に語ってくれたことも含めて密かに構想を練っていたのだ。

「本当か？ いつも頼りつきりにしてて悪いな……」

「別に気にしないでよ。慎はいつも俺の事を助けてくれてるんだもん。これくらいはできるようにしないと慎に申し訳が立たないから」
手を合わせて申し訳ない様子を見せる慎にふつと微笑んで気にしていない様子を見せる。これまでは曲作りに根詰めていた所を慎に見張っててもらっていたから無理強いすることなく作業を進めることができていた。だからこそ、今回はこれまでの恩を返す意も込めて慎のライブへこの上なく気合が入っているのだ。

「……ありがとうな。なら輝弥が思うイメージを教えてくれよ」

「うん、任せてよ！」

慎の催促を聞き、俺は鞆にしまっているノートを取り出す。これに慎の曲について思い描いていた物を箇条書きで書き連ねているのだ。「まず、慎って以前にかすみからスクールアイドルのあるべき姿は何かって聞かれた時に、見ている人を熱くさせるパフォーマンスをするって言ってたでしょ?」

「ああー……そんな事も言ってたな?」

かすみによるスクールアイドル講座が開かれた時に慎が言っていたことを掘り返す。慎は自分の言ったことが臆気になっているのか曖昧な返事をしていた。

「もう、自分で言ったのに忘れたの? まあいいんだけど……それで、もしかすると慎はそういうパフォーマンスをしたいのかなって思っ
て、まだ乱雑だけど合いそうなイメージを書いてみたんだ」

そう言いながら俺はノートを閉じ、ピアノを弾き始める。最初はスローペースで曲が始まっていくが中盤に進むにつれてテンポが上がってくる。黙々と弾いている横で慎は口を噤んだまま俺が奏でるピアノの旋律に耳を傾けていた。

暫し無言のまま時間が流れていき、俺がデモを弾き終わると慎は無表情のまま拍手を送ってくれた。

「なるほどな……、熱くなるとは言ってもアップテンポで乗るわけではなくミディアムテンポでじっくりと燃え滾らせるって事か」

「うん。激しく燃えるようなイメージでも良いんだけど、それだとせつ菜さんと被る気がするからその棲み分けも兼ねてね。慎だったらこういうのでもこなせそうな気がするから」

普段、慎と接してる印象として、やらないと何も始まらないという信念をモットーに何事にも常に挑戦する気概で彼は挑んでいるように思える。そして、周りがどのように進めばいいか分からなくなった時にも彼なりの励まし方で前に進む勇気を与えてくれる。寂しさや不安で冷えた心を篝火かがりの如くやさしく温めてくれるのだ。

俺の考えに慎は顎に手を添えながら噛み締めるように頷く。

「ふーん、今の俺って周囲からはそうやって見られてるのか……」

「全員からかどうかは分からないけど、少なくとも俺はそう見てるよ」
「……なんか、はつきりとそうやって言われると恥ずかしくなってくるな」

慎はそう言いながら顔を赤くする。普段は自分のことを客観的な意見を聞く機会が少ないから、自分の知らないことが分かって余計に恥ずかしくなってくるのだろう。

「ふふっ、慎がそうやって照れるのも珍しいね。慎は俺のイメージを聞いてどう思った？ 慎自身が思ってる事と認識が似てたら嬉しいんだけど……」

「そうだな……。俺は、どちらかというときキラキラした姿を見せて……観客たちに夢を見せてあげたいなって……思ってるかな……？」
「……キラキラした……姿……？」

俺の問いに慎は少し考え込む素振りを見せながら彼自身が思い描いている姿とのギャップについて答えてくれる。篝火のようなやさしい雰囲気という先ほどの俺の意見と食い違っていたのでつい奇異なものを見る表情をしてしまった。

「あつ、俺、変な事言っちゃったか？」

「えっ？ いや、そうじゃないんだけど、さっきまでの俺の意見を肯定的に聴いてくれてたと思ったからまさか方向性が違う意見が出ると思わなくて」

「確かにそうかもしれないけど、世間一般のスクールアイドルはどちらかというとき後者の方が多いだろ？ アイドルを見に来る人達は純粹にイベントを楽しむ人もいれば、悩みを抱えていて元気をもらうために足を運んでる人だっている。俺は、過去にひどく落ち込んで物事が何も手に付かない時期があった。だから、そんな人たちにも俺なりのやり方でエールを送りたいんだ」

慎の言い分もわかる。彼が言いたい事はおそらく妹を亡くしてからの生活の事を意味しているのだろう。そこで何かしらの縁からこうして立ち直ることができたからこそ、自分と同じ境遇の人間を救ってあげたい、そう考えているのだろう。

(というこ)とは静かに燃えるというよりは明るい元気の出る曲の方

が良いって事かな……?)

慎の意見を聞いて、俺は彼の言葉を反芻しながら楽曲の方向性について考え直す。慎が求めているものと俺が提示したものはかみ合っていない。そうなれば彼が要求するものは愛さんと似たものになる可能性が高いが、彼がその方向性を望むのであれば応えてやるのが作曲者の役目だ。

「……分かった。慎がそう言うならもう少し俺も曲の構成を考え直してみるよ。また相談させて?」

「ああ。だけど、せっかく作ってくれたのに悪いな」

「別にいいって。これは俺が感じたことを形にただけで慎の希望が何も入っていないから。一番は歌い手である慎が気持ちよく歌えるようにすることだから、今の意見はすごく助かるよ」

俺がせっかく考えてきた案を否定したことに頭を下げる慎だが、気にしてほしくない俺はフォローの言葉を掛ける。むしろここで俺の意志を貫いてしまったらこれは『慎のための曲』ではなく『俺のための曲』となってしまう。それは慎を見に来た観客の楽しみを奪ってしまうことと同義だ。

すると、音楽室の扉がガラガラと音を立てながら開いた。

「やつほお〜二人とも! しっかりやつてるか見に来たよ〜!」

そこにはかすみがついて、どうやら俺達の進捗を確認しに来たようだった。

「やあかすみ、練習は順調?」

「まあね〜♪ ダンスや筋力トレーニングもばっちりこなしてきて今は休憩中なんだ〜」

練習を楽しくやれてる証拠か、かすみはルンルンとスキップしながら俺達の横へやってきた。

「ってそれよりも、慎のすけの曲作りは順調なの?」

「えーと、案は考えてきてたんだけど、慎のお眼鏡にかなうものじゃなかったから再考することにしたよ」

あははつと笑いながら進捗を説明しているとかすみは気の抜けた返事をしてきた。

「へっ？ 初めの案って慎のすけが考えてきてたわけじゃないの？」

「うん、まだ慎もどういうのが自分に合うのかが分からなくてイメージが掴めてないって言ってたから、まずは俺が慎で描いたイメージを聞かせてたんだ」

「……ふうくん。そうなんだ」

かすみは口ではそう言いつつも何か物申したげな表情をしていた。だが、俺はそれを気に留めずに話を続ける。

「最初は静かに燃えるイメージで考えてたんだけど、慎はどちらかというとキラキラした曲を歌いたいって言ってたから、そっちの方向で曲を考え直すことにしたんだよ」

「えっ……慎のすけがキラキラ……？」

「なんだよ、何か文句でもあんのか？」

慎が語った曲のイメージについて教えてくるとかすみは眉をぴくつと動かして怪訝な顔をする。そんな彼女の態度に慎も眉をしかめながら噛みつくこうとする。

「……いや。慎のすけにそんなイメージが合うのか考えたけど、慎のすけがそうしたいと思うならとやかく言ってもだめだよな」

だが、かすみはそのいがみ合いに乗ろうとはせず、すぐに困り眉を作りながら笑顔を見せる。いつもと違うその所作に俺は違和感を覚える。

「かすみ？ 一体何を——」

「って、かすみん、もう休憩時間が終わっちゃうから戻らないとー！」

問いかけようとした矢先にかすみは思い出したかのように声を上げながら席を立ち、音楽室の扉へと駆け寄る。そして、音楽室を去る直前にこちらへ振り返り、ビシツと指を差してくる。

「それじゃあ二人とも次もサボらずにね！」

「あつ、かすみ！」

呼び止めようと声を掛けるもかすみは耳を貸さずに扉をバタリと閉めてしまった。

「……俺達も曲作りを一旦止めてそっちに合流しようと思ったのに……」

「つたく、あいつの早とちりも変わんねえな」

今から作り直すとなると時間が更にかかってしまう。そうなる慎のライブに向けたその他の準備も疎かになってしまったため、今回は俺の宿題として切り上げようとしていたのだ。

慎もかすみが居なくなつた方向を見つめながら苦笑する。そして、徐に立ち上がるとずつとまともに動かしていなかつた両腕を天井へ思いつきり伸ばした。

「俺達も外へ行こうぜ。今回の事、俺ももう少し考えてみるから」

「うん、わかつた」

楽曲作りは振出しに戻ってしまったが、それでも慎の本音を聞き出せたことが収穫ではあるのでこれが次につながることに期待をしつつ俺達は音楽室から退室し、部室へと足を運ぶのだった。

それがあந்தなの？

TMS用の楽曲制作に向けた初めての打ち合わせをしてから数日後、俺と慎は屋上でダンス練習をしていた。愛さんの手拍子のリズムを聴きながら慎は振り付けの練習に励んでいた。

「はい、シンシン！　ここで大きくターン！」

「はい!!」

「おお！　慎くん、凄く上手だね♪」

「うんうん、さすがは運動神経が抜群っていうのもあって飲み込みが早いね」

慎は愛さんの手拍子に合わせたステップからのターンを流れるように決めてみせ、エマさんと彼方さんは拍手しながら賛辞を述べた。「へへっ、そう言ってくれて嬉しいです。部活が終わってから一人自主練してるんでその成果が出てみたいですよ」

「ほく、流石シンシン！　初イベントっていうのもあって自信ありって感じ？」

「……愛さんのダジャレはともかく、やる気に満ちているのは言えますね」

「もう〜シンシン、つめたくい！」

愛さんの渾身のダジャレも慎は親身に聞こうとはせず、愛さんはしょぼんとしていた。

確かに慎の熱量が日に日に増しているのはひしひしと伝わってくる。俺達の出した練習メニューについて文句ひとつ言わずに始め、完璧にこなしている。ダンスに関しては元々の運動能力が優れているのもありメキメキと上達を見せていた。

「う〜ん……………」

そんな事を考えていると彼のダンスを遠くで見ている侑さんが首を傾げていた。いつもは慎についても声を上げて褒めちぎる侑さんなのだが珍しく頭を悩ませていたので、俺は慎たちの元を離れて彼女の元へと近づいた。

「侑さん？　どうかしましたか？」

「うーん、確かに慎くんってアイドル向きのスタイルだからダンスはすごく映えるんだけど……今回の曲のコンセプトと合っていないように感じるんだよねえ……」

侑さんが心配していた事、それは慎の魅力を最大限に発揮できるパフォーマンスと彼のやりたいことがアンマッチしているように思えてしまったことだ。そして、その違和感は俺も密かに抱いていたことだった。

「……侑さんもやっぱり同じことを思いましたか？」

「同じことを……ってことはかーくんも？」

「はい。でも、慎がそれをやりたいって言っていましたから始まったものでもないのに否定から入るのはいけないと思って……」

俺と同じ意見を持つていたことを知った侑さんは少し安堵したように見えたが、それでも蟠りが拭えたわけではないのでうーんと唸りを上げる。そんな侑さんの異変に気付いたかすみが二つ分のペットボトルを持つてこちらへやってきた。

「侑せんぱあゝい♪　そんなに深刻な顔をしてどうしたんですかあゝ？」

「あつ、かすみちゃん」

「せつかくの可愛い顔が台無しですよ！　よければこれをどうぞ♪」

「ふふつ。ありがと、かすみちゃん」

かすみのお陰で少し沈んでいた気持ちが楽になったのかふつと笑顔がこぼれる侑さん。そして、かすみからスポーツドリンクを貰うとぐいっと飲んで口の中を潤していく。

「確かに、慎くんがそうしたいって言うんだからあの子が精一杯輝けるように私たちが頑張ってサポートしないと慎くんが可哀想だよね！」

「はい、慎がやると決めたんです。それに向けて全力で支えましょう」

侑さんの檄に俺も感化されてぐつと握り拳を作って意気込みをぶつける。二人で気合を入れているとかすみはダンスの話題から切り替える。

「そういえば、慎のすけってダンスの方は少しずつ進んでるけど楽曲はどうなの？」

「うーん、情けない話なんだけどそれがあまり収穫が無いんだよね……」

かすみからの問いに嘘をつくわけにもいかず正直に打ち明ける。意外にも進捗が無い事に侑さんは驚きの声を上げる。

「えっ、それ大丈夫なの？」

「正直、ライブの日が刻々と迫って来てるので大丈夫とは言えないです。けれど、慎の要求するイメージになかなか近づけることができて頭を抱えています」

俺が楽曲の形を作ることができない理由、それは俺が思い描いていた事と慎が想像しているステージとのギャップである。俺は元々小さい炎が次第に大きく燃え広がるような曲を考えていた。だが、彼はそれとは違う王道のアイドルものをやりたいと言っている。ステージに立つ彼を十分に輝かせたい為に俺も試行錯誤しているが、それでも慎に合うイメージが見つからずなかなか問屋が卸さないのだ。

「そっか……。かーくと慎くんの事だから、すぐにできるものかと思っただけど意外とそういうわけにもいかないんだね」

「はい……。自分の力量不足を認めません」

「あつ、かーくんの事を悪く言うつもりはないからそんなに落ち込まないで？ 当初の構想から路線変更するのって凄く大変なことだと思うからかーくんが苦労するのも無理はないよ。私も何か意見を出せるかもしれないから一緒に考えさせてよ」

「ふふっ。ありがとうございます、侑さん」

時間だけが過ぎていくこの状況にモヤモヤしている俺だが侑さんは決して責めようとはせずに協力する姿勢を見せてくれる。彼女の優しさには胸が温かくなる感覚を覚える。

だが、横でかすみはいつかの音楽室で見た時みたいに真顔でこちらのやり取りを聞いていた。

「……ねえ、かぐ男。あの後から、かぐ男が楽曲の方向性を考えてる時って慎のすけも一緒にいるの？」

あの後、というのはかすみ音楽室で俺たちの様子を見に来た時のことを言っているのだろう。

「いや、俺がまずは案を出すって話にしてるから、あの時からは何もやってないよ？ 慎にはその間はダンスとか歌唱力とか、別のことを磨くように言ってるから」

「……………そっか。……………」

かすみの質問に答えると彼女はその内容に納得がいかなかったのか少し不機嫌な様子だった。

確かに側から見れば俺に丸投げにしてるように見えるかもしれない。だが、決して簡単とは言えないこの課題に対して二人で無性に時間を掛けてしまうのはただでさえ練習時間が少ないこの状況ではあまり効率的とは言えない。それを慎と話して、お互いに合意の上で今のやり方に決めたのだ。

「さあ、もうダンス練習の時間は区切りをつけて、この後はミーティングだからささっとストレッチを終わらせて部室へ行きましょう？」

「確かに、かーくんの言う通りだね。かすみちゃん、みんなに声を掛けてここでの練習を切り上げるよ！」

「……………はぁーい、わかりましたあ〜」

俺と侑さんの催促にかすみは特に言い返すようなことはせず、我先にと屋上を後にする。

「慎、結構な時間やってるから切り上げるよ。片付けは俺がやっておくから先に部室へ向かっておいて」

「おう、わかった。悪いけど先に行かせてもらいな」

慎は俺の言葉に悪びれる様子を見せながら屋上を後にする。その後続く形で愛さんたちも去っていく。

「かーくん、私も手伝うよ」

「あつ、ありがとうございます。助かります」

「いいっていいってー！」

侑さんは笑顔で言いながら屋上を一周して忘れ物がないかを確認する。見回りを侑さんに任せて、俺は部室から持ってきたクーラーボックスを持って扉の前へと立つ。

「よしっ、特に問題はないから私たちも戻ろうか！」

「はい、行きましよう」

侑さんの言葉に相槌を打ち、二人で屋上を後にするのだった。

「慎くんのダンスがだいぶ形になってきたよね！ 私、今からワクワクしてきたよ！」

部室へ向かう途中、開催が1週間後に迫っているTMSに向けて気持ちが昂りつつあるのか侑さんは快活にそう話しかけてきた。

「確かに、話を聴いた時はまだ2週間と思っていましたでしたがされど2週間ですね。樂觀視していたわけではなかったですが、悠長にはしてられないですね」

「うんうん、こういう時ほど時間が流れるのってあつという間だよね！」

俺はまだ慎の曲が出来上がってないことに引け目を感じているが、侑さんは特に気にする様子を見せない。今の時点でも俺の中で焦りが滲み出ていることを察しつつもそつとしておいてくれているのだろう。

「でも、まだ時間はあるし大丈夫だよ！ かーくんは一人じゃないんだし、私も精一杯考えるから一緒に頑張ろう？」

「そうですね。すみません、本来なら侑さんの担当ではないのに……」
「もう、かーくんは真面目過ぎるよ？ こういう時はお互い様。かーくんも大切な仲間なのにかーくんばかりがしんどい思いをするのはダメでしょ？ こういうのは分け合っていけないとき！」

余計なことに付き合わせる結果となり俺はいたたまれない気持ちになってしまいが、侑さんは笑顔で落ち込んだ気持ちを吹き飛ばしてくれる。

「じゃないとかーくんがまた思い詰めちゃうだろうし？」

「べ、別に僕は何回もそんなことをしてるわけじゃ……………ありましたね……………」

おちよくなるように目線を細めながら侑さんは見つめてくる。侑さんの言葉にそんなことはないかと否定しようとしたが思い返してみるといつも一人で悩んでは誰かに助けてもらってる構図しか思い出されなかったので認めざる得なかった。

「あはは、そこまで真剣になるのもかーくんの良い所だけだね！でも、かーくんに何かあればその時は私が力になるから、その時は遠慮なく言つてよね？ なんならこっちから行くかもしれないし？」

「はい、その時はお願いします。僕は変わらず自分で解決しようと思うので強引にでもお願いします」

「自分でそれを言っちゃうのもどうかとは思うけど……………」

二人でそんな話を話していると部室前まで到着した。既に俺たち以外のメンバーは全員揃って、今はみんな雑談でもしているのだから。

そう思った時だった。

「……………に出る気あるの!？」

「ん？ 今の声……………かすみちゃん？」

「かすみのあんな怒声、珍しいですね？」

突然、部室の外にまで聞こえるくらいの声量でかすみの怒号が聞こえてきて侑さんと顔を見合わせる。かすみが喧嘩をする相手と言えば、いつもの流れだと慎なのだがそれでもここまで感情を露わにはしないだろう。

「……………あるに決まってるだろ!! お前に何が……………!!」

「……………かすみの喧嘩相手は……………慎？」

「でも、いつものやり取りじゃないよね……………?」

口論しているメンバーがいつもの二人で呆れた表情を取ってしまった。侑さんも普段のそれと違うことに察しがついていた。ここで

突っ立っていても仕方ないと思い、軽く呼吸を整えてから部室内へと入る。

「慎、かすみ、一体何の騒ぎ?」

「あつ、輝弥くん……」

俺たちの姿を見てしずくさんが一番に声を上げる。部室内には俺たち以外のメンバーが全員揃っている。そして、慎とかすみが見合っただけで、他のメンバーはそれを囲うように立っていた。「あつ、かぐ男! 最近ずつと思ってたんだけどTMSに向けた準備に慎のすけが全然関わってないけど、おかしいんじゃないの?」

慎と論争していたかすみは俺を見るや、こちらへ言葉の矛先を向けた。かすみの問いに疑問を浮かべ真剣な表情で聞き返す。

「……関わってないっていうのはどういうこと? 慎は打ち合わせとかにも参加してるし、振付もマスターしてきてるよ?」

俺の弁論に対してかすみはそうじゃないと言わんばかりに顔を横に振って否定の意思を見せる。

「確かに参加はしてるよ! でも、慎のすけが自分の意見を言ってるところを見たことないんだけど?」

「楽曲作りの時に慎が歌いたい曲のコンセプトを話してくれてたけどそれは違う?」

「最初は言ったと思うけど、その後はかぐ男が考えてるでしょ?」

今俺たちが立たされている状況を正直に突きつけられ、俺は一瞬言葉が噤む。

「それは……。でも、未だにたたき台を作れてない俺が原因であつて慎に非は……」

非はない、そう伝えようと思った矢先にかすみは「むきいいー!!」と大声を上げた。

「これは慎のすけの曲でしょ!? なんでかぐ男が困ってる状況で手伝わないの!?! それどころか、なんで呑気に振付の練習をやってるのさ!?!」

「か、かすみちゃん、いったん落ち着いて……!」

段々とボリュームが上がり興奮状態となっているかすみに歩夢さ

んは冷や汗を掻きながら静止しようと試みる。だが、矢継ぎ早に慎を否定されて黙っている俺ではなかった。

「……二人で考えるのは時間がかかるから、その何も産まない時間を過ぎさせないために慎には練習をやってもらってるんだ！　これは慎と話し合って決めたことなんだよー！」

「か、輝弥くん！　輝弥くんも落ち着いて？」

「だからってかぐ男だけに任せたら、それこそ今までと変わらないじゃん！　結局はかぐ男が一人で悩む形になってそんなので進展があるわけないじゃん！」

しずくさんも普段は喧嘩をしない俺がここまで感情的になってる様子を見兼ねて声を掛けるも、かすみは構わずに反論する。そして、かすみはついに言ってはならない言葉を口にしてしまう。

「これだけ人任せにしてる状態だったら……慎のすけなんかスクールアイドルに向いてるわけがないじゃん!!!」

「……………っ！」

アイドルに向いてない。その言葉を聴いた瞬間、彼女の後ろにいた慎は目を見開いて激しく動揺していた。そして、その顔を見てしまった俺はどんな理由があれども友人を愚弄されたショックから腕に力が込もってしまう。

「……………かすみ……………お前……………!!」

「も、もうやめて下さい!!」

堪忍袋の緒が切れて、かすみの元へ歩き出そうとした瞬間に俺とかすみの間にせつ菜さんが割って入った。

「お二人の言いたいこともわかります！　ライブまで時間が無いからこそこの妥協案であることも、それでは満足のいくライブにならないということも！　ですが、そんな切羽詰まった状態だからこそ手を取り合って現状を打破していく必要があるのではないですか!？」

「せつ菜さん……………。ですが……………!」

「かーくん、そこまで。言い返したい気持ちは分かるけど、これ以上はやめよう?」

慎のことを好き放題に言われた悔しさが拭い切れず、なおも言い返

そうとしたが侑さんにそつと肩に手を置かれる。

「かすみちゃんもそこまでにしなさい？　今ここで怒鳴っても状況は変わらないわ？」

「でも……!!」

「もういいですよ」

かすみも諦めが悪いようで果林さんに嗜められてもまだやめようとしなかったが、慎の失笑も混じった乾いた声が響いた。

「慎？」

「確かに、かすみの言う通り俺は輝弥に丸投げしてた。碌に力を貸そうともせずにライブをやるうだなんてワガママにも程があるよな」

慎の言葉には覇気がなく今にも全てを投げ出しそうな声色だった。

「違う。さつきも言ったが、それは二人でそうしようって決めたことであって決して慎が悪いわけじゃ——」

「いいんだ、輝弥。ありがとうな」

口が早くなってしまう俺に慎は笑ってみせる。だが、その微笑みはいつもの勇気をくれるものじゃなく不安を煽るものだった。

「かすみの言う通り、俺はスクールアイドルそのものに向いてないのかもしれないねえ。……ちよつと、考えさせてくれ」

「あつ、待ってよ、慎！」

荷物を纏めて帰路につこうとする慎を肩に手を乗せて静止しようとするが、彼は止まる様子を見せずに俺を横目で一瞥して部室を後にした。

「なんで……慎がそう考えなくちやいけないんだよ……」

来たるTMSに向けて準備は着実に進んできたと思われていたが、思わぬアクシデントにより今後の進め方を見直さざるを得なくなつた。

相棒の意味

「……すみませんでした。ライブイベントが近づいている中でこのようなことを……」

急遽移動した音楽室にて俺はその場に居合わせている人物らに頭を下げて謝罪していた。

慎が部室から立ち去った後、状況を整理するために渦中の人物であるかすみと俺を別々に事情聴取する事となった。俺の話を聴くことになったのはしずくさん、彼方さん、歩夢さん、エマさん、璃奈の5人だ。

俺の謝罪を聴いた上で最初に口を開いたのは彼方さんだった。椅子に腰を下ろした状態で項垂れている俺に彼方さんはそつと俺の肩に手を乗せる。優しく触れる彼女の手の温もりに冷え込んでいた俺の心も少し温かみを覚えてくる。

「気にしないで？ かーくんがあんな風に感情的になるのは事情があつてのことだと思ふし、それよりも慎くん達の間になにかがあつたのかーくんの分かる範囲で教えてもらえる？」

「輝弥くんがムキになるのもそうだけど、慎くんとかすみちゃんがそこまで言い争うなんてこともなかったもんね？」

「かすみちゃん、急に慎くんに突っかかってちよつと怖かった」

途端に感情的になった俺もさることながら、歩夢さんと璃奈は事件の発端となったかすみ達のやり取りに違和感を覚えているようだった。確かにこれまでもあの二人は論争しつつも決して過激なものにはならず、お互いの意志を弁えた上でやっていたので、大事になることはなかった。その点も含めて説明する必要がある。

「かすみが言っていることは間違っているわけではないんです。事の発端は慎との楽曲制作でした」

こうして俺は慎とかすみが喧嘩をすることになった経緯について

話し始めた。俺の出した案が慎の意図とそぐわなかった事、そこから俺一人で曲の素案作りを実施していた事、そしてその行為がかすみからは慎が他人任せにしているように見えた事。

「……………」

これらを話し終えた時、全員がどのよう言葉返そうか困惑している様子だった。

しかし、こうなるのも無理はないだろう。スクールアイドル同好会としての知名度が上がリ、なおかつメンバーらの活気にあふれた活動がよく見えていた水面下でこのようなトラブルが発生していたのだ。あまりに唐突で状況が上手く飲み込めていない状態だろう。

「かすみは慎のことを非難していましたが、彼は悪くないんです。先ほども言いましたが、俺はただ慎の練習時間も無駄にしたくなかったからこそ彼と話し合って……………」

歩夢さんらに弁解をする俺だが、次第に己の無力さが実感として湧いてきてしまい膝の上で握っていた拳が力を増していた。爪が皮に食い込む感覚を覚え、自然と歯軋りもしていた。

無論、こんな言い訳をしても仕方ないことは俺自身がわかっていて。以前にかすみからも咎められたように、これは被害者ヅラをしているように見えるだけなのだ。実際は俺も慎のことを苦しめる羽目になった加害者側の人間でありかすみの非難の対象は俺になっても何らおかしくないことなのだ。

自分への非難が奔流しているとエマさんが俺の握り拳をそっと包み込んでくれた。

「……………」ありがとう、かーくん。辛い状況なのに話してくれて。おかげでどうして慎くん達が喧嘩しちゃったのか、やっとわかったよ」

事情を話してくれたことにエマさんは笑顔を見せながら礼を述べた。そして、慎達のみならず俺のことも労う様子を見せられ、俺はますます胸が痛くなった。

「……………」エマさん、本当に優しすぎますよ。俺はむしろ責められる人間なのにどうして…………、本来ならば歩夢さんからも怒られて当然なんですよ？ 一人でやろうとするなど釘を刺されているにも関わらず、ま

た僕は同じようなことをしているんですから……!」

そうして俺は歩夢さんの方を見つめる。エマさんの楽曲を作ろうとしていた時に突然開かれた歩夢さんとの対談。そこでは歩夢さんの人となりを知るのと同時に俺の過去についても話すことになったが、その結果もあり歩夢さんは俺のことを気に掛けてくれるようになった。普段は侑さんの後ろか隣で一緒にいることが多いが、別れて活動する時などでは俺の近くにすることが多く、彼女なりに俺を気遣ってくれているのだ。

しかし、歩夢さんの目がない時に限り俺は無理強いすることが多く、それにより璃奈の時や今回のように一人でこなそうとヤケになっ
てしまっているのだ。

突然自分の名前を呼ばれた歩夢さんは一瞬驚きはしたけれどもすぐに笑ってみせ、首を横に振って俺の発言を否定する意思を見せる。「今の輝弥くんは慎くんと話し合った上でその結論に辿り着いていたんでしょ? なら、それは怒る理由にはならないよ。今までの輝弥くんだったら誰にも相談しないで抱え込んでいたけど、今回は違う。ちゃんと何かあったら慎くんと話し合って解決しよう」と動いていたんだから、それが輝弥くんを非難する理由にはならないよ」

毅然とした態度で語る歩夢さんに俺は吞まれていた。確かに彼女の言う通り、過去の俺であれば慎と進め方を話し合った後は曲が完成するまでは何も言わなかっただろう。悩みを相談し俺のために余計な時間を割いてほしくないからだ。

歩夢さんの意見にエマさんも相槌を打って、言葉を被せる。

「うん、歩夢ちゃんの言う通り、かーくんはしっかりと考えた上で取り組んでくれてたから咎めるつもりはないよ。でも……」

俺のことをフォローしながらもエマさんの表情は少し切なさが込められていた。何か物申したげな表情をしていたが、エマさんは一呼吸つくどゆっくりと口を開いた。

「かーくんにとって慎くんって信頼を置くことができない存在なのかな……?」

「……えっ……う？」

エマさんの突然の質問に俺は言葉の意味が飲み込めず困惑する。そんな俺を他所にエマさんは話を続ける。

「いつもかーくんと慎くんって息がぴったりで、お互いのことをよくわかってるから二人にとってお互いが良き相棒なんだなって思ってたんだけど……もし本当に相棒だと思ってるなら、こういった苦労とかも分かち合うことが出来ないのかなって思っちゃって……」

「苦労を……分かち合う……？」

苦労を分かち合う、それがどういう意味を持っているのか俺にはよく分からなかった。大変なことを相手と共有することは必ずしも問題の解決策につながるわけじゃないし、最悪の場合は余計な気苦労を負わせ今後のパフォーマンスにも影響してしまう。故にその言葉の意味がわからなかった。

「かーくんは慎くんが少しでも練習量を増やせるように自分への負担を増やしてる。それは慎くんのことをよく考えてて凄く良いなって思うんだ？ でも、慎くんや他の人の視点から見ると、かーくんは慎くんのことを十分に信頼してないから自分一人でやろうとしているんじゃないのかって思っちゃうかもしれないの」

「なっ……！！ 俺は慎のことをそうやって見たことなんて一回も……！！」

エマさんから俺が絶対に考えていない可能性について提唱され、思わず声を荒げる。だが、そうなることをわかっていたのかエマさんはおちつかせるように俺の手を握る力を強め静止させる。

「うん、分かってるよ。かーくんは優しい男の子だもん。そんな風に考えてるなんてことは絶対じゃないと思うから。でも、もしかしたら慎くんもかーくんの力になってあげたいんじゃないのかなって思うの」

「慎が……俺の力に……？」

「うんうん。慎くんだって、今回は念願の初ライブになるんだもん。かーくんに頼ってばかりじゃいられないってあの子も思ってるんじゃないのかな？」

彼方さんは背中をそつと叩きながらエマさんに続く。

「かーくんが慎くんのことを輝かせてあげたいように、慎くんも自分の意見を話して少しでもかーくんの助けになりたいと思ってるはずだよ?」

「彼方ちゃんの言う通り。だから、慎くんも交えて一緒に曲作りをやれないかな? 今からでも遅くないと思うんだ♪」

エマさんと彼方さんの言葉に俺はハツとした。

彼女らの言う通り、俺は慎のことを良き友人であると同時に最高の相棒だと思ってる。だからこそ、相棒として彼のことを輝かせてあげたい。故に彼には余計な時間を取らせまいと息巻いていたのだが、それがかえって慎のストレスになっていたのかもしれない。俺は曲作りで悩んでいることを慎に話して心労をかけたくなかった。しかし、それが慎からしてみれば悩みを打ち明けても仕方ないとして心の底から信頼されてないように見えるのだろう。

亡き妹の為に努力を重ねる慎を見て、一層力が入っていた俺だがいつの間にかそれは大きく空振りを見せており、いつしか俺たちの間に小さく亀裂が生じていたのだ。

「そうか……。俺も慎のことを信じ切れていなかったのかな……」

「でも、かすみちゃんが慎くんに怒ったのは、きつとそことは違う理由なんだろうね」

「そうですね、かすみさんは輝弥くんの次に慎くんのことをよく見るから、輝弥くんとは一歩違った視点で気になることがあったんだと思うな」

慎のことで思い悩む様子を見せるとエマさんはうーんと唸りながらかすみが憤慨している理由に言及する。しずくさんもかすみの親友だからこそ彼女が何故怒りを見せたのかしずくさんなりに予想を立てていた。

「かすみなりの……視点で……」

「でも、それを聞くならまずは慎くんと話をしてからだよね?」

彼方さんはそう言うと言つと幼子のように俺に後ろから抱きついてくる。いつもなら近すぎる彼方さんのパーソナル距離に赤面している俺だが、それすらも気にする余裕が無かった。それは慎になんと声を掛け

ればいいのかわからないからだ。

「慎と話すって言っても……何を言えばいいのか……」

「輝弥くん、大丈夫だよ。かすみさんは慎くんのことを知ってるとは言ってもひとっだけのはつきりしてることがあるから」

「……はつきりしてるんこと？」

しずくさんの言ってることがわからず、思わず聞き返す。そんな俺にしずくさんは嫌な顔を一つせず笑顔で教えてくれる。

「うん、かすみさんが慎くんに言った『慎くんなんかスクールアイドルに向いてるわけがない』。あれは、かすみさんの本心じゃないよ」

「えっ？ ……あつ」

しずくさんが言った『かすみの本心じゃない』。それがどういった意味を持つているのか、想像するには難くなかった。

かすみはスクールアイドルへの熱意を誰よりも持っており、スクールアイドルのことを誰よりも理解している。せつ菜さんと一悶着したのも彼女らの愛が強いが故に勃発したものだ。そして、かすみはその一件でスクールアイドル存続の危機に瀕した経験があるからこそ、他人の大好きや想いを無碍にする発言はしないようにしているのだ。「かすみちゃんは私たちの中でもスクールアイドルの本質を特に理解しているからね。かすみちゃんも慎くんのこれまでの練習を見て、あの子がなにか大切な想いを持ってスクールアイドルをやっていることは分かっていると思うから、絶対にあの言葉は本音じゃないと彼方ちゃんも睨んでるのだ」

彼方さんは俺から離れると名探偵のように顎に手を当てて決めポーズを取る。その横で璃奈もうんうんと頷いて肯定の意を示す。

「それにかすみちゃんが本心から言ったとしても輝弥くんはそれを否定していると思う。さつき、部室でかすみちゃんに駆け寄ろうとしたのもその証拠でしょ？」

「……それは当然だよ。璃奈達の熱量も凄いけど、それと同じくらいに慎も真剣にスクールアイドルと向き合ってる。そんな慎がスクールアイドルに向いていないなんて絶対にそんなことないから」

璃奈の問いに俺は間髪を容れずに答える。慎の練習を間近で見

いる俺だからこそ、彼が今までの活動を遊びで取り組んでいたのか否か容易に想像できる。

俺のはつきりとした物言いを聞いてしずくさんは満足したように笑顔になる。

「なら、その言葉を伝えてこようよ。今の慎くんに必要なのは背中を押してくれる言葉だと思うから、それは輝弥くんにか届けられないことだよ!」

「しずくさん……」

しずくさんの言葉を胸の中に溶かしていく。かすみの言葉を正直に受け止めたであろう慎はスクールアイドルを続けるか否かを自分の中でせめぎ合いになっているはず。そんなことは絶対にさせてはいけない。

彼は身内との優劣の差で比べられることが多かった俺を一人の男として見てくれた。スクールアイドル同好会で叶えようとした音楽への道を後押ししてくれたのだ。慎は俺に付いてくる形となったけれども同好会に入る決意を固めた。だからこそ、慎に受けた恩をここで返さなければどこで返せというのか。

それを考えた瞬間、俺の腹は決まった。

「わかったよ。慎に俺の気持ち伝えてくる。そして、あいつをここに連れて帰ってくるよ」

「うん、私たちは待ってるよ、輝弥くん」

「うむ、吉報を待ってるよ」

覚悟の決まった俺の表情を見て、しずくさんは自分の胸の前で手を組みながら優しく送り出してくれる。彼方さんもうんうんと俺が確実に連れて帰ってくることを信じているようだった。

二人の言葉に胸が温かくなる感覚を覚えながら音楽室を出ようとするが、そんな矢先にエマさんは素朴な疑問をぶつける。

「でも、慎くんがどこに行ったのか分かるの?」

「……絶対ではないですが、心当たりはあります」

「……確かに慎くんなら……あそこに……」

先日のごともあり、彼と会うためにどこへ行けばいいのか容易に想

像できた。璃奈もそれを思い出したようだ。俺と璃奈の答えに満足したエマさんは笑顔に戻る。

「……そっか。なら、かーくんに任せるね。慎くんを……私たちの友達を……お願いね」

「……はい。必ず慎をここに連れて来ます」

エマさんからの想いを受け取り、俺は慎を探しに音楽室を後にする。

俺にとっての最高の友達を……相棒を迎えに。

限りない灰色の空の下で

——俺が部室を出てから、どれくらい走っただろう。

みんなの前から逃げて、どれくらい経っただろう。

悪い記憶を消し去ろうと走る勢いは自然と強まるが、部室で告げられた言葉だけはどうしても振り払うことはできなかった。

『慎のすけなんかスクールアイドルに向いてるわけないじゃん!!!』

「……んなこと……俺が一番分かってんだよ」

今にも雨が降りそうな灰色の空の中で俺は走りながら、呼吸を乱しながらそう呟いた。

あいつの言ってることは正しい。俺は自分の力で考えようとせず相棒へ任せつきりにしていた。あいつならばこの状況をどうにかしてくれるんじゃないか、そんな期待を押し付けていた。

いや、端から任せようとしていたわけではない。待ちに待った俺の番だったのだ。むしろ自分のやりたいことをたくさん提案したかった。せつ菜さんや愛さん、璃奈のライブを見て、自分の時にはどんなパフォーマンスをやりたいか、ある程度のイメージはできていたのだ。

だが、そんな中で俺の頭にはとある人物が思い返された。思い返されたと言ってもその人物のことを一度たりとも忘れたことがない。否、忘れるはずがない。

俺がこの世界に入ったきっかけと言っても過言ではない先導者と呼ぶべき人物。この世界で生きる歓びを教えてくれた人物。そして、その世界に入ることすら許されなかった人物。

「……うわあ!!」

既にこの世にいない人物の事を考えていたら何もない所で躓いてしまった。あまりにも唐突な出来事に反応できず、無情にコンクリートへ身体を打ち付けてしまう。走っていた勢いもあり膝小僧を擦りむいた感覚がある。今にでも立ち上がってあいつの所まで向かいたかったが、すぐに起き上がることができなかった。

「……………真結^{まゆり}……………すまねえ……………」

今できた傷の痛みが疼くのと同時に己の無力さを痛感してしまった。スクールアイドルとしての役割を満足に全うできず、ただ周囲の人間を振り回しただけの俺が、スクールアイドルという夢を夢のままに終わらせざるを得なかった妹にどうやって顔向けすればいいのかわからなくなったからだ。

だが、妹は優しい女の子だ。こうして皆の前から逃げた臆病者の俺でもあいつは何も言わずにそばで寄り添ってくれるだろう。今の俺にはあいつのそばしか拠り所がないのだ。

「……………」

そう考えた時、俺はもう少しだけ頑張ろうと思えた。ただただ弱い兄だけでも、荒んだ心の癒しを求めるように俺は再度走り出した。

妹の形見が地面の上を転がっていることに気付かずに。――

「……………」

しずくさん達に見送られて、虹ヶ咲学園を出発した俺は電車に乗り込んだ。先に学園を抜けた慎がどこにいるのか、その候補を洗い出すのはそう難しいことではなかった。

しかし、確実にその場所にいるかと言われたら確証を持つことができないため俺は電車内の座席に腰を掛けながら密かに神頼みをしていた。

あの時、かすみに強引に連れて行かされたお陰で慎がどこにいるのかの候補に迷うことがなくなったため、いずれ彼女には何か差し入れでも入れておかないといけない。

そして、それと同時に慎に対してなんと言葉を掛けようかも考えていた。しずくさんからは慎がスクールアイドルに向いている旨を俺の想いのままにぶつけたいと言っていたが、俺は上手く気持ちを伝えることが得意ではない。それに加えて慎と真面目な話をするの

はこれが初めてだ。慎自身が複雑な家族事情を抱えているのでそういったプライベートの話題について触れようと思わなかったのだ。

いつもは飄々としている慎も中身はとても繊細だ。かすみから受けた言葉も慎にとっては大きいものできつと楔として彼の心に刺さっているのだろう。その傷口を広げないように発言には注意しなければいけない。

『——次は、お台場海浜公園前。お台場海浜公園前です——』

「あつ、もうそこまで来てたのか」

考え事をしていたら電車のアナウンスが俺の降りる駅名を案内していた。ここを乗り過ぎすわけにはいかなないので席を立って電車を降りた。

改札を抜けて目的の場所へ向かおうと歩き始めた時、スマホが通知を知らせるバイブレーションを鳴らしていた。

「……あつ、しずくさん……」

そこにはしずくさんからのメッセージが書いてあった。

『輝弥くん、一緒についていけなくてごめんね？ 私たちが付いていくのは慎くんにとって圧力を掛けるように見える恐れがあったから、今は輝弥くんだけが頼りです。こっちはかすみさんと話をして、かすみさんも自分の発言には反省しているから、こっちは心配しないでね。慎くんを連れ戻せるのは輝弥くんしかいないです。私には輝弥くんにこういった応援を送ることしか出来ないけど無事に成功することを祈ってます。慎くんのこと、よろしくね？』

「……ありがとう、しずくさん」

しずくさんからの激励のメッセージを見て、嬉しくなり口元が緩む。応援を送ることしかできないと彼女は言っているが、それが非常に助かるのだ。こうして彼女らの想いも受け取ること、一人で慎と向き合っているのではないと分かり、力をもらえるのだ。

「しずくさんやみんなの気持ち、確かに受け取ったよ。慎は必ず連れて帰る。絶対に失敗なんてしない」

しずくさんのメッセージにより一層気持ちが引き締まった俺はスマホをポケットにしまい、目的地へと歩き始める。

その時、足元に見覚えのあるものを見つけた。

「……んっ？ これは……」

それは慎が肌身離さずに持っていたペンダントだった。よく見るとペンダントの紐がすり切れており、そのままでは機能せず紐を結ばないと使用できない状態となっていた。

「慎がこれを捨てるなんて事は……いや、絶対にない」

ペンダントの先端に組み込まれているサファイアを見つめながら、これが落ちていた憶測を立てるが不測の事態だったと推測する。

慎はこのペンダントを誕生日プレゼントで恐らく妹から貰っている。ずっと妹のことを大切にしている慎のことだ、気分が落ち込んでしまった腹いせでこのペンダントに当たるとは思えない。

「……天気も悪くなってきたし急がないと……」

いつの間にか限りなく灰色が広がっていた空を見て、悠長にもしてられないと俺は拾ったペンダントを握りしめながら走り出した。

幸い海浜公園から目的の場所まで距離は遠くない。ものの5分ほどそれなりのペースで走っていればすぐに到着する。そう考えると慎たちと一緒に練習へ参加した結果がここで報われ、走りながら妙な安心感を抱いた。

目的地に到着するまでにそう時間を要すことはなかった。俺が来た場所がかすみたちと一緒に慎を追跡した最終地点である慎の妹、鈴川真結ちゃんのお墓だっているお墓だった。

しかし、到着したもののお墓の正面に慎の姿はなかった。

「……俺の読み違いか……？」

今までの彼ならば、ここで妹にその日にあった出来事を話していることだろう。しかし、目の前にその姿は見えないということは既に帰路についてしまったのだろうか。

慎の姿が見えないこともあり、俺も踵を返し別の場所を探そうと

思ったが、せっかく妹さんの墓前に来たこともあり祈りだけは捧げておこうとお墓が立っている先の階段を登り始める。

「……………だっ……………」

「ん？ この声……………」

階段を登り始めた矢先に突如聞こえた男性の声。その声には聞き覚えしかなかった。

「慎がいるのか？」

声の出所を探ろうと俺は歩みを止め耳を澄ませる。墓石の方から声や吐息が聴こえるので其方へ探索してみるとお墓の後ろで墓石に背中を預けるように座り込んでいた。腕で顔を隠しており眠っているように見えた。

「よかった……………ここにいたんだ」

他に慎の行く宛が思い浮かばず途方に暮れるかと思つた矢先に見つかったためひとまず安心した。しかし、それと同時にひとつの疑問が浮かんだ。

(……………そういえば、さっき呟いてた言葉はなんだつたんだろう)

先ほど階段を登っている時に何かを呟いているのは聞こえた。しかし、実はただの寝言であり言葉という言葉が発していなかっただけかもしれない。

そう思つた瞬間、慎の手先が突然震え始めた。

「……………真結……………弱い兄ちゃん……………ごめんよ……………」

唐突に慎は真結ちゃんへの謝罪を述べた。腕で彼の表情は見えないが眠りながらも彼女に見放されている夢でも見ているのだろうか。

「俺……………輝弥があそこまで頑張ってくれたのに……………俺は何もせずにこのうと練習してあいつに難しいことを押し付けてた……………。こんなじゃ……………かすみが怒るのも当然だよ……………。お前が見れなかつた景色を見せようと頑張つてたと思つたのに、こんな体たらくじゃ絶対に叶うわけないよ……………」

「……………」

慎の自虐に俺は何も言葉を発さずに見守る。ここまではつきりと言葉を紡ぐということは彼は寝ているわけではなく腕で目を隠し

ながら項垂れているだけだった。妹の陰に隠れながら己の非力を憐れんでいた。

「俺がやろうとしたのはこんなじゃねえ……。見てくれてるみんなを最高の笑顔にすることだ……。それがお前の見たかった景色でもあるんだよな……」

応援してくれるみんなが笑顔になること。それを妹の願いと語る慎。否応なしに夢を諦めざるを得なかった真結ちゃんの為に慎は自分が代わりにスクールアイドルになることを決意していたようだった。

「でも……。俺のことを支えてくれる相棒を……。友達を笑顔に出来ないなら……。俺はスクールアイドルには向いてないんだろうな……」

慎の言葉は段々と声色が暗くなり、声量も小さくなっていた。かすみの言葉が彼にとってそれほどに大きいものだったようだ。

「……輝弥のこと……。親友なんて呼べねえよな……」

「そんなことない」

「……えっ?」

何もかもを悲観的に捉えてしまう慎に対して、ついに我慢ができずに声を掛ける。突然、ここにはいないと思っていた人物の声が聞こえ、慎は耳を疑うようにこちらへ顔を向けた。その顔は涙のせいで目元が赤く腫れており、折角の端正な顔が台無しになっていた。

「か、輝弥……!?! ど、どうしてここに……?」

「以前に慎の姿をここで見たことがあったからもしかしてここにいないんじゃないかなって思ってた」

まだ状況に追いついていない慎は立ち上がることができず、座り込んだままだった。そんな状態でもお構いなしに先ほどの慎の発言に対して待ったを掛ける。

「それよりも慎、俺のことを親友なんて呼べないって言ったよね」

「そ、それは……」

俺の問いに慎は口をもごつかせる。本来ならば絶対に聞かれないと思っていた発言。それを他人に、ましてや親友と豪語する人物に聞かれていたのだ。気が動転しない人間がいるはずがない。

「……そんなの、こつちのセリフだよ」

「えっ?」

俺の言葉に慎は困惑し疑問を浮かべる。そして、数刻の沈黙の内にポツポツと雨が降り始め、二人の身体を濡らし始める。

「俺は……慎が安心して練習できるようにやれることは一人で全部こなそうとしてた。慎だつてこのライブに気合いが入ってるだろうに、その気持ちをも無碍にして俺は一人で曲を作ろうとしてた。慎の想いも理解しようと思わずに独りで闇雲に取り組もうとしてた。慎と向き合っていなかったのは……俺の方だよ……」

俺は慎がどうしてスクールアイドルになろうと思ったのか、どうして今回の曲を明るい曲調の元気を与える曲にしたいと言ったのか、これまで一切聞こうとしなかった。彼の心に土足で入るような感覚を覚えてしまい、いつか話してくれると信じて何も言わなかった。それは二人の関係性の変化を恐れ、現状の距離感を保とうとしていた俺の保守的な考えが裏目に出たが故であり、それは今回の問題にも少なからず影響を与えていた。

そう考えると、次第に己の無力さを痛感し目に涙が溜まり始めた。

「俺だつて……慎のことをよく知ろうとしなかった……。慎が何を考えているのか理解しようとしなくて中途半端な立ち位置で慎と対話してた。そんなので親友なんて呼べるわけないよ……」

震える声と一緒に目から涙が流れる。すると一度流れ出した涙は留まることをしらずに顔を伝いながら地面へ雨と一緒に流れ落ちていく。そして、同じように涙を浮かべている慎の前に座り込み、俺はそつと正面から彼を抱きしめる。

「……今まで……独りにして……ごめんね……慎……」

鼻を嚙りながら涙声で彼に釈明すると慎は首を横に振りながら俺を抱き返す。

「……なんで……なんでお前が謝るんだよ……! 俺だつて……俺だつて独りで抱えちゃってたんだ……! それでお前に気を使わせたくなかったのにそれがここまで余計な気苦労を負わせちゃってたんだ……。こつちこそ……ごめんよ……輝弥……!」

そう言つて、慎は子供のように泣きじやくり始める。俺も声を上げずとも静かに泣いており、彼の泣き声を聞きながら自然と腕の力が強くなつていた。

降りしきる雨の中、親友になれなかつた惨めな二人の姿が周囲には虚しく映つていた。

冷えた心に暖かい珠を

「……落ち着いた?」

「……ああ。もう大丈夫だ」

雨が降りしきる中で泣き合った俺たちは気持ちさがひと段落し、今は俺が日頃から持参していた折り畳み傘を開いて墓前で雨を凌いでいた。数刻前まで声を荒げて泣いていた慎は先ほどの自分を思い出し恥ずかしくなったのかそっぽを向いて顔を赤くしていた。

「……急にあんなことして悪かった」

「別に気にしないでよ。ここには俺たち二人しかいないんだから」

途端に恥じらいを見せる慎に思わず笑みがこぼれてしまう。俺としては普段では見れない新鮮な慎の姿が拝めて満足だったのだが、本人はそうはいかないようだ。

「……それが余計に嫌なんだよ」

「どうしてさ?」

「お前に弱みを握られた感じがして妙にムカつくんだよ」

「そんなの自業自得じゃん」

「……うるせえ」

悪態をつかれた慎は肘で俺を小突いてくる。力加減は弁えているようでそこまで痛覚を感じなかった。

「それよりこの後どうする? だいぶ雨に濡れちゃったけど」

「……冷えるだろうから帰らなくちゃいけないけど、正直まだお前と離れたくねえ」

「奇遇だね。俺も同じことを思ったところ」

雨で体温を奪われているので早いところお風呂に入るなり身体を温めないといけないが、まだ慎と話をしていたと思う自分がいる。慎も同じように考えてるようで、目線を落としながら答えてくれた。

すると、俺はあるアイデアが浮かび慎に提案してみることにした。

「あつ、なら家に来る? 姉さんに連絡してお風呂を用意してもらおうし、せっかくなら曲のこともこのまましっかりと突き詰めたいし」

俺は思い切って慎に家へ招待してみることにした。ここから寮まではそれなりに距離があるし、一人の時間が多くなってしまふ。それならこちらの家で彼の事をもっと知りたいし、これまで遅れてしまった楽曲制作の分も取り返したい。俺の提案に慎はすぐに承諾せず、少し考え込む様子を見せる。

「ありがたいことだけど……俺がいて邪魔にならないのか？」

「それは大丈夫だよ。なら今から確認するから」

「えっ、今から!？」

慎が驚いている横で俺はスマホを取り出し姉さんに連絡を取る。この時間は演劇の練習をしているかもしれないが、もし出なければチャットで知らせておけばいいだろう。

呼び出し音が鳴り始めてまもなく、すぐに通話先へかかる音が鳴った。

『もしもし?』

「もしもし、姉さん? 急に電話してごめんね。今は部活中?」

『いいえ、今日はもう練習は終わって家にいるわ。どうしたの?』

姉さんは既に帰宅済みのようで声も普段と同じように家で聞いているトーンだった。話は早いと思った俺はすぐさま要件を伝える。

「突然なんだけど、今から友達を連れて来てもいいかな? 二人とも雨に濡れちゃって、本人も寮から距離があるしスクールアイドルの事で突き詰めたいなと思ってさ」

『それはいいけど……今はどこにいるの?』

「台場の海浜公園の近くだよ。ここからなら歩いて15分くらいだと思うから」

俺の相談に姉さんはうーんと声を出しながら考え込む様子を見せる。だが、それも一瞬のことですぐに返事が返ってきた。

『分かったわ。お風呂を用意しておくから気をつけて帰ってきてね?』

「姉さん、ありがとう……! すぐに向かうから!」

家への招待を快諾してくれた姉さんに礼を述べつつ電話を切る。姉さんとの話が終わった様子を見て慎はやきもきしながら声を掛け

てくる。

「……どうだったんだ？」

「姉さんもいいってさ。すぐにお風呂も用意してくれるって言うからすぐに準備して行こっ！」

「あつ、輝弥！」

出発しようとした矢先、慎に裾を掴まれ待ったをかけられる。半ば強引に決めてしまったため、何か小言の一つでも言われるのかと構えてしまう。だが、慎から返ってきた言葉は予想を反するものだった。

「あつ……ありがとう……」

シンプルにお礼を述べることが恥ずかしかったのか慎は目をそらし少し頬が赤くなっていた。素直になれない慎について笑いがこぼれてしまう。

「ふふっ、別にいいよ。俺たちは友達でしょ？」

「……ああ……そうだな」

こうして二人で笑い合いながら、俺の家へと歩いていくのだった。

海浜公園から歩くこと数十分、慎と他愛ない会話をしながら一軒のアパートの中に入り俺と姉さんの住んでいる部屋まで到着した。

「さっ、上がってよ」

「お、お邪魔します」

扉を開け慎に入るように促すと慎は躊躇いを見せながら家の中へと上がった。そして、扉の音が聞こえたからか姉さんがリビングから紫色の長髪を靡かせながら顔を覗かせてきた。

「あらっ、おかえり輝弥。その子がお友達？」

「ただいま姉さん。そうだよ、鈴川 慎って言うんだ」

「は、初めまして……！ 鈴川 慎と言います！」

俺の姉との初顔合わせということもあり慎はガチガチに緊張していた。そんな慎の空気を感じ取った姉さんは静かに微笑みながら挨拶を交わす。

「ふふつ、初めまして。私は巴 珠緒と言います。いつも輝弥がお世話になってます」

「こ、こちらこそいつも輝弥にはお世話になってます……!」

姉さんの笑顔にドギマギしている慎に思わず吹き出してしまう。

「……慎、緊張してるね?」

「想像よりもめっちゃ美人で驚いてるだけだ……!」

「それを緊張してるって言うんだよ……」

凶星をつかれた慎は苦し紛れの言い訳を放つが照れながら言っているため、全く意味を為してなかった。確かに姉さんの容姿の美しさは弟たる俺が一番よくわかってるのでそれに関しては保証する。

「姉さん、急にお願いしてごめんね?」

「気にしないでいいわ。既にお風呂は沸いてるから濡れてるだろうしすぐに入りなさい?」

先に連絡しておいたおかげで既にお風呂の用意はできているようだった。

「わかった。慎、服は準備しておくから先に入っていよいよ」

「あつ、ああ……」

慎はずつと雨に濡れていたことに加え精神的にも辛い状態が続いていた。まずは心身の休息が必要と判断しお風呂に入るように促す。

ただ、慎も自分が一番風呂で良いのかと疑問を抱いたが、反発しても時間だけが過ぎるのみと判断したのかすぐに荷物を置いて準備に入った。

「それにしても、どうしてあんなにびしょ濡れだったの? 輝弥、折り畳み傘をいつも持っていたでしょ?」

慎に着せる服を用意してからリビングで休息を取っていると、姉さんはお茶を用意しながらそう質問してきた。

「ええつと……持ってはいたんだけど……色々とあつてさ……」

慎の事情をひけらかすのもよろしくないと思いつつ、別の言い訳が

見つからなかったので思わず口を噤んでしまう。姉さんもそんな俺の様子にため息をつく。

「……別にとやかく言うつもりはないけど、慎くんも酷い濡れ具合だったからあの子の為にもしつかりしなさい？　これで風邪を引かれたら私もあの子のご家族に顔が立たないから」

「……………うん。ごめんなさい」

姉さんからのお叱りに俺はぐうの音も出さず、甘んじてその言葉を受け入れる。スクールアイドルとしてライブが近づいている彼の為にも、お互いの体調管理はしつかりと守らなければならぬ。

「反省してるならいいわ。次から気をつけていきましょう。……そういえば、慎くんも貴方と同じスクールアイドル同好会に入ってるの？」

俺の様子から反省している様子を見て取れた姉さんはこれ以上の追及はやめて話題を変える。友達がいることは既に話していたが同じ同好会に所属していることは話していなかった。

「そうだよ。慎ってかつこよくてね、ダンスのキレも良くてすごくアイドルに向いてるんだ！」

「そう……………」

「それに運動神経も良くてね、俺なんかと全然違うんだよ。情に熱くてなんでもできて俺の憧れなんだ」

慎のことを紹介しようと思いつい声色が明るくなる。口が達者になる俺の様子を見て姉さんにはこりと微笑んでみせる。

「……………慎は俺の自慢の友達だから、絶対に次のライブで勝たせてあげたいんだ」

「輝弥……………」

慎の覚悟を聞いた今だからこそ、メンズ・オブ・スクールアイドルに向けての気合いが高まっている。慎と思いの丈をぶつけ合った今、この熱が冷めないうちに叩きこんでおきたい。そんなことを思いながら話したからか、突然厳かな様子に変わった俺を姉さんはただ見つめていた。だが、すぐに笑顔へ戻り俺の頭を撫でてくる。

「……………ふふっ、だからそんなに気合いが入ってるのね」

「ね、姉さん……」

突然の姉さんの行動につい声が上がってしまふ。だが、そんな俺に気が留めず、姉さんは撫でるのやめてふと立ち上がる。

「慎くんのために負けられないのはわかったわ。なら、なおさら体調を崩してはいられないわね」

「……そうだね」

姉さんに先ほどの出来事を掘り返され、俺はいたたまれない気持ちになる。そのタイミシングとちようど合わさるようにお風呂から上がった慎がリビングへと顔を出した。

「お風呂上がりました〜」

「あつ、はーい。慎くん、お湯加減は大丈夫だった？」

「はい、凄く気持ちよかったです。一番風呂をもらってすみません……」

「別に良いのよ。これからご飯を作るからゆつくり寛いでいってね」

姉さんはそう言いながら台所で用意していたお茶を慎に差し出す。とてつもない計らいに慎は渋々受け取るもどこか落ち着かない様子を見せていた。

「そ、そんな……ご飯までもらってもいいんですか？」

「別に一人増えたところで変わらないから大丈夫よ。輝弥が、慎くんのライブのために気合いが入ってるみたいだからそれなら色々とお話ができるようにしないとイケないからね。輝弥、お風呂を上がったらご飯を食べれるようにしておくから入ってきなさい」

姉さんはエプロンを付けながら答える。そして、俺の方を向いてお風呂に入るように促した。

「うん、すぐ準備して入ってくるよ」

俺は姉さんの言葉に二言で返事をしてお風呂に入るべくパジャマを用意して洗面所へと向かうのだった。

「珠緒さん、何から何までありがとうございます」

輝弥が風呂へ入りに行きリビングでは俺と輝弥の姉さん、珠緒さんの二人きりになった。俺は輝弥たちの手厚い歓迎に頭が上がりなかつた。

「ふふっ、気にしないで。狭い部屋で何も無い所だけどゆつくりしていつてね。あつ、今日はハンバーグを作ろうと思ってただけ、慎くんは苦手な食べ物はある？」

「いえっ、特にないので気にしなくて良いですよ」

珠緒さんから好みの質問をされるが、俺は料理に関しては好き嫌いを持つてゐるわけではないので気遣う必要はない旨を伝える。

「分かつたわ。腕によりをかけて作るから待つてね」

珠緒さんは俺の回答に満足したようですぐに調理を始めた。

その間、俺は珠緒さんとの二人きりのこの空間をどう切り抜けようか思考を巡らす。輝弥からお姉さんの存在は聞かされてはいたが、ここまで輝弥と同じ、いやそれ以上に気配りに長けてしつかりしているとは思わなかつた。それに輝弥に似てとても美人であるため、顔をまじまじと見つめるのも憚れる。

「……ねえ、慎くん」

「は、はいー」

珠緒さんとの話題を探そうとしていた時に料理をしている珠緒さんから声を掛けられて、つい声音が跳ねてしまう。

「……輝弥は学校ではどんな感じかしら？」

「えっ、輝弥……ですか？」

物静かな様子で珠緒さんは学校での普段の輝弥について質問してくる。

「そう……ですね。凄く良い奴ですよ。いつも真面目でどんなことにも誠実に取り組んで、俺の自慢の友人です」

学校での輝弥について俺が感じた気持ちを素直に伝える。だが、これだけだと当たり障りがなくて味気足りないかもしれない。現に珠緒さんは俺の答えに返事をせず無言で聞き入っている。きつと珠緒

さんが聞きたいのはそういうことではないのかもしれない。

「……輝弥はとにかく責任感が強くて、スクールアイドル同好会でもアイドルをやるメンバーを輝かせたいからって、いつも自分一人でもなでもこなそうとするんです。それが頼もしいと思う反面、逆に危なっかしく感じる時もあったって、他のメンバーも心配することが多いんです」

「……そうなのね」

輝弥のことは誰よりも頼りにしている。だが、それと同時にあいつに抱いている不安要素についても余すことなく伝える。

口に出した通り、輝弥は誰よりも真面目。何か問題を抱えていても他の人を不安にさせないように自分の中で押し留めてしまう。珠緒さんが俺にそう質問してきたのもきつとそういうことだ。彼女が聞きたいのは学校でもしつかりと自分の好きなことを謳歌できているのかということだろう。

不安要素を吐露したことで珠緒さんは少し落ち込む様子を見せる。いや、落ち込むというよりかはやはりそうかと言わんばかりに達観している様子でもあった。

「でも、あいつがそうしてくれるのも俺たちのことを信頼しているからなんだと思うんです。輝弥は……少し前までは珠緒さんと比べられることを嫌がっていました。珠緒さんの名前を出されるたびに怪訝な顔をして、辛そうな表情をしていました」

輝弥と知り合って数日、入部場所を探していたときに演劇部の部長から言われたお姉さんとの比較。その時のあいつは今でも覚えていて。声を張って『自分は姉さんとは違う』と言い切った輝弥の目は、先輩後輩という立場など関係なくただ目の前の相手を刺してしまいうなそんな感覚だった。

「……………」

「でも、スクールアイドル同好会でなら他の誰でもない巴　輝弥として見てもらえる。音楽の実力で評価してくれるメンバー達のおかげで輝弥は今、この学校での生活を十分に楽しんでいます」

輝弥が自分のやりたいことについて悩んでいた時、せつ菜さんが見

せてくれたありのままの大好きを叫ぶこと。それは輝弥に大きな影響を与えたようです。すぐにこの同好会へ入るって決めていた。そして、そこにいるメンバーはそんな輝弥のことを『文武両道でよく出来たお姉さんの弟』というレッテルを貼ることなく『ただ一人の巴 輝弥』として見てくれていた。もちろんお姉さんのことを何も知らないからだとは思うものの、何も蟠りを抱えずに受け入れてくれるからこそ、あいつにとっては居心地が良いのだ。

「自分に夢を与えてくれた人がスクールアイドルを辞めそうになった時もあいつは率先して動いてくれて……輝弥がいなかったらスクールアイドル同好会は今ほど盛り上がり上がっていないと思います」

「……そう、だからあの時……」

珠緒さんは俺の発言を聞いて、何かを思い出したように考え込む素振りを見せる。せつ菜さんの一件の時に何か姉弟で話していたのだろう。だが、そこに言及をするつもりはなく、俺は話を続ける。

「俺も輝弥が居てくれたことでこの部活に入ってよかったなって心の底から思ってます。俺にとってあいつは……親友であり相棒なんです」

真結の墓の前で涙を流し合った俺たち。あの時、本当ならば俺があいつに怒られて然るべきなのに輝弥は『俺の想いも理解せずに一人で取り組んでしまっていた』と自分の不甲斐なさを憂っていたのだ。お互いがお互いに気を遣ってしまうがあまりに本心で語ろうとしなかった。あの苦悩が今の俺を変えてくれている。もう輝弥の前で隠し事はしたくないのだ。

「……輝弥は良い仲間を……そして、良い友達を持ったのね」

俺が語っているうちに料理を仕込みを終えていた珠緒さんはリビングに顔を出して目を潤ませていた。そして、俺の前に座り込み深々と頭を下げてきた。

「慎くん、輝弥のことを見守ってくれて本当にありがとう。あの子にそこまで親密な関係になっている相手がいてくれて私は嬉しいわ。そして、その相手が輝弥のことをしっかりと隣で見ってくれる貴方だっ
てことも……」

「い、いえっ……！俺はそこまで出来た人間じゃないです。俺も輝弥に支えられてここまでやってこられたので、むしろお礼を言いたいのはこちらの方です。輝弥と出会わせてくれてありがとうございます……！」

珠緒さんばかりに頭を下げさせるわけにはいかないので俺も俺であいつと仲良くさせてもらえた嬉しさをお礼に込める。お互いに頭を下げ合っている様子がおかしかったからか俺と珠緒さんは同じタイミングで顔を見合わせて吹き出してしまふ。

「ふふっ。私たち、何をやっているのかしらね」

「ははっ、本当ですね。輝弥に見られたらなんて言われるか……」

二人で笑い合っていると洗面所のドアが開く音が聞こえる。どうやら輝弥が風呂から上がったようだ。

「貴方がそこまで輝弥のことを見てくれているなら安心だわ。これからも私の弟を……輝弥のことをよろしくね？」

「……はい！こちらこそよろしくお願いします！」

珠緒さんの為にも輝弥のことは相棒として誰よりも近くで支える。その決意を今一度噛み締めながら珠緒さんに対して強く返事をするのだった。

心の殻を破って

「お、お邪魔しま〜す……」

「もう、慎つてば今更部屋に入るだけで緊張しすぎだつてば」

「そう言うけどよ、他人の部屋なんてそうそう入らんだろ？」

姉さんを交えた食事を終えて、俺は慎を自室へ案内していた。慎は先ほど寮長に連絡を取り、急遽外で宿泊することになった旨を伝えていた。横で話の雰囲気聞いていたが特に外泊に関しての制約はなく寮長は快く了承してくれた。しかし、連絡は早めにするこゝと、と釘を刺されていたので次回から気をつけなくてはいけない。

「まあ、そうだけど……それでも大袈裟じゃない？」

「お前も他人の家に泊まれば分かるさ」

「じゃあ、今度は慎の部屋に遊びに行かせてよ？」

「何もねえけどいいの？」

「慎がいるからいいの」

「へっ、なんだそれ」

俺の部屋に上がってから他愛無い会話を繰り広げていると部屋の外からノックが聞こえ、すぐに姉さんが入ってきた。

「輝弥、慎くん、お茶とお菓子を用意したから2人でどうぞ」

「えっ、そこまでしてもらっていいんですか……？」

夕食や寝泊まりだけでなく夜食まで用意してもらい、慎は手厚すぎる歓迎に頭が上がらない様子だった。困惑している慎に姉さんはふっと笑ってみせる。

「気にしないでいいわよ。せっかく輝弥がお友達を連れてきたんだから、私も気合いが入っちゃったわ」

姉さんは手短に作ったプリンと一緒に紅茶を用意してくれていた。姉さんは料理だけでなくお菓子作りも長けており、どんなお菓子を作らせても味や見た目は一級品なのだ。

「ありがと、姉さん。食べ終わったらまた持っていくね」

「ええ、それじゃあゆっくりね」

そう言つて姉さんは部屋から去っていく。慎は姉さんが作ったプリンを美味しそうに見つめ、そつとスプーンを刺していく。慎が掬つたスプーン上でプリンが踊つており、プリンの見映えがより際立っていた。

「……じゃあ、い、頂きます」

「うん、どうぞ」

既に立ち去つた姉さんの代わりに慎の挨拶に返事をする。慎は意を決してプリンを頬張る。口に啜えて数秒後、慎は目をカツと見開き、その表情だけでプリンの美味しさを表現していた。

「……う、美味い……！　おい、これって本当にさつと作つただけなのか？　調理時間と美味しさの比率がまるで合つてねえぞ!？」

「ふふん、これが姉さんのすごいところだから」

「お前が自慢げに言うなよ」

姉さんは料理経験が豊富ということもあつて、少ない材料でハイクオリティな料理を作れる。姉さんに家事を任せるのもそれ故であり、俺の出る幕が何一つないのだ。姉さんの凄さをドヤ顔で語るも、お前が言うなど慎に一蹴されてしまい少しだけ悲しい気持ちになる。

「まあ、それはそれとして……。いよいよ本格的にやるんだろ?」

慎はプリンに舌鼓を打ちながら、本題へと話を変える。今日、慎を家に泊まらせることにしたのも、これまで相応の進捗を見せていなかった楽曲作りを本格的に始動させるためだ。

「うん。これまでの遅れをここで取り返さないと、あとでせつ菜さん達になんて言われるか……」

ライブまで1週間を切っている。せつかくの休日も、今日と明日で最後となるため最後の追い上げとして活用できるのがこのタイミングしかない。

「よし、なら今の方向性を軸にパパツと進めていこうぜ」

「あつ、その事についてなんだけど……」

慎は合掌しながら作曲への意欲を見せるが、その前にある提案したく作曲に待ったをかける。

「あん?　どうしたんだ?」

「……一つ頼みがあるんだけど……曲のコンセプトについて、もう一度見詰め直してみない？」

「……えっ？」

突然の相談に慎は驚きの表情を隠せない。曲のコンセプトを見つめ直す、それは今作ってる曲を没にするということ。現状の方向性で費やしてきた時間を不意にするということなのだ。

「……これは俺のわがままなんだけど、今の俺にはこのコンセプトを貫いたまま慎の曲として作れる自信がないんだ。そして……今のこれが……慎に合つても……思えない……」

「……輝弥……」

合つてると思えない、そう告げられた慎はショックを顔に出すまいと耐えていたがそれでも口や眉は震えてるように見えた。

「慎がどういった意図でこのコンセプトをやろうと思ってるのかは分からない。でも、これは慎の本当にやりたいこととは違う気がするんだ……」

慎は「自分と同じような悩んでる人たちを救えるように、みんなに元気をあげたい」というイメージを掲げていた。そのイメージを掲げた終着点はおかしくない。だが、その為の手段が慎に合っていないのだ。侑さんやかすみが覚えた違和感もおそらくこれだろう。

「この発言が慎に失礼なことだということは分かってる。それでも、慎の初ライブを成功させる為には、このコンセプトは変えるべきだと思うんだ」

俺はこれまでも慎の想いを尊重したいと考えて、批判する事を避けていた。しかし、その結果が昼間のそれだ。今回の相談は慎の要望通りに曲を作れない俺のわがままも入っている。慎の初ライブを必ず成功させたい、その為にこの状況を変えたいのだ。

「………どうかな？」

慎の回答を俺は何も言わずに見守る。これでも慎が今のままやりたいというのであれば、その意思を尊重する。慎の意見もじっくり聞いた上で曲作りに時間を割くつもりだ。固唾を飲みながら返事を待っていると、慎は徐に微笑み出した。

「……やっぱりそうなるか……」

「えっ？」

慎がボソツと何かを呟いたが不意の出来事だったため正確に聞き取ることができなかった。

「わかった。お前がそう言うなら変えようぜ」

「えっ……いい、いいの？」

反論の一つや二つが飛んでくるかと思っていたが、案外簡単に承諾されて思わず聞き返してしまう。

「ああ、輝弥が言ってくれることはいつも正しいからな。こういう時はお前に付いていった方が絶対正解だし、変えていこうぜ」

「で、でも……それだとまたかすみ……？」

「何も考えてない、って言われるよなあ」

俺が懸念していた事を慎はあっけらかんと答える。元々はライブの事を全く自分で考えてないと指摘され、それがかすみとの喧嘩の発端となっている。

「でも、薄々分かつてはいたんだ。これじゃダメかもなって」

「慎……」

「かすみや輝弥が言ったからとか、そんなことは関係ない。今は自分でも考えた上でコンセプトを変えた方がいいと思ってる。だから、輝弥にはそれを一緒に考えてほしい」

真剣な面持ちで語る慎。それは以前とは違い、覚悟を決めている顔だった。部室を離れてから一人で見つめ直した事で慎自身の中で考え方が変わっているようだ。

「……コンセプトを変えるってことは、また一からダンス練習や歌の練習をしなくちゃいけない。それでもいい？」

「やってやるさ。もう俺は、俺自身に嘘を付かねえ」

最後にもう一度慎の覚悟を確認すると慎は間髪を容れずに問題ないと返事をする。その様子に俺も腹を決めた。

「……わかった。ならここから再スタートを決めよう」

「おうさ、よろしく頼むぜ」

拳を突き合わせて笑顔になる俺と慎。ここからリスタートするこ

ととなったが、その前に一つだけやらなければいけないことがあった。

「それと、一つお願いがあるんだ」

「ん？　なんだ？」

「……慎のこと、もつと教えてくれないかな？」

「えっ、俺のこと？」

俺の質問の意図を理解できなかった慎は首を傾げる。確かにこれだけだと頭が混乱してしまうのも無理はない。

「うん。俺は、慎の事をもつと知りたい。慎の過去のことや……真結ちゃんのこと……」

「……っ！」

真結ちゃんの事も聞きたいと知り、慎は一瞬たじろぐ様子を見せる。だが、それに臆さず話を続ける。

「慎が当初話してたアイドルイメージや曲コンセプトって、きつと真結ちゃんのことも入ってると思うんだ。真結ちゃんのことを大事にしてる慎があの子から何をもらったのか、それを知りたい」

慎が興味本位だけでスクールアイドルをやりうと思っただけじゃないのはこれまでの彼を見ていればわかる。それは真結ちゃんの影響も少なからず関わっていると思うのだ。それに慎が墓前で呟いていた「真結ちゃんの見れなかった景色を見せたかった」という発言の意図も気になる。

「勿論もし慎が話したくないというならそれでもいい。でも……もう俺は慎に気を使いたくない」

「……どういうことだ？」

「慎とは気が置けない存在でありたいんだ。お互いの事情を理解した上で誰よりも近くで寄り添える関係、それこそが真に相棒って呼べるんじゃないのかなって」

「輝弥……」

気が置けない関係性というのはすごく難しい。気心の知れた仲ならお互いのことを信頼しているからこそ気を遣うこともなく自分の心そのままに話をできる。しかし、気心が知れたからと言って相手にど

んな話が出来るかというところでは違ふ。相手の心情を省みずに自分の好きに話をするというのは、自分が話してて気持ちが良いだけのものが大半であり、それはただのマスターベーションなのだ。

これまで慎と一緒に過ごしたことにより彼の信念に触れることができた。今回も慎の過去に触れることで彼のことをより大事にしたいと思えるし、より親友として手を取り合える気がするのだ。

「……だめ……かな？」

一抹の不安を抱きながら俺は慎に再度問いかける。妹の存在に触れることは慎にとつてはとてもデリケートな話だ。でも、このまま立ち往生してしまうよりは新しく一步を踏み出さなくてはいい。今の俺と慎ならこの話題に触れても大丈夫、そう信じているのだ。

そう考えていると慎はついに重い口を開いた。

「……わかった。お前がそこまで言うなら話すよ」

「……………いいの？」

「……ここまで来て引き下がるわけにもいかねえだろ？　俺のこれまでと

……妹のこと……輝弥に知ってほしい」

「……わかった。ありがとう」

了承を出してくれた慎に笑顔で返事をする。彼がどんな生を歩んでいたのか、それを理解しなければこの先ずっと後悔することになる。今後の慎との歩み方の為にも。

そう決意を固めると、慎は自分の半生を語り始めるのだった。

慎の過去

俺は幼い頃から身体を動かすことが大好きだった。運動神経は元から優れていたのもあり、サッカーやバスケット、野球など球技に関してはどれもすぐにコツを掴んで相応の成績を収めていた。

そして、そんな俺には一人の妹がいた。

名前は鈴川すずかわ 真結まゆり。何事も明るく元気に取り組む可愛らしい妹だ。歳は俺の二つ下で兄妹の年齢が近いこともあり、お互いの話も合いやすくていつも仲が良かった。

真結は俺と違い、運動はあまり得意ではなかったがそれでも外で遊ぶことは好きでよく友達と公園で遊んでいた。

そんな妹も家でハマっていることがあった。それはアイドルを応援すること。妹は世間の女の子と同じように可愛いものが好きだ。テレビで見るアイドルのパフォーマンスにはいつも釘付けになっていた。録画も欠かさずやつてもらって、時間がある時はそのパフォーマンスを見て、練習するくらいだ。

「真結、またそのアイドル見てるのか？」

「あつ、お兄ちゃん！ だって、この人たちを見てると元気をもらえるんだもん！ 何回でも見てられるよ！」

「それでも、これで10回目くらいじゃねえか？」

「それくらい飽きずに見るほどかわいってことなの！」

その日も真結はリビングでアイドルが出演するテレビ番組を見ていた。録画していたものを何回も見ているため、次にどんな曲が披露されるのか俺も自然と理解してしまうほどに彼女は熱中していた。だが、今日は普段と違いステージが終わると真結は脱力感を味わいながら静かに何かを呟いた。

「……いいなあ……」

「真結？」

妹の発言をもう一度聞こうと俺は問いかける。

「わたしもこの人たちみたいにキラキラな衣装を着て、歌を歌ってみ

たいな……。だつてすぐくまぶしいんだもん」

真結はテレビに映るアイドルを羨望の眼差しで見つめる。カメラの前だからこそ笑顔やウィンクでのファンサービスも送ってくれているが、そんな可愛らしい姿が真結には羨ましく見えるようだ。

「この人たちみたいなの可愛いアイドルに……。わたしもなれるかな……」

真結はアイドルへ密かに憧れを抱いているようだった。たくさんの人の前でキラキラした姿を見せる彼女たちの姿がまぶしく見えるようだ。

「そんなの今はわからないだろ」

「えっ?」

真結が抱いている不安に俺はそんなものはわからないと言う。俺の言っていることを理解できず真結は疑問を浮かべる。

「これから先のことなんて今考えても分かるわけがない。でも、その未来のために今から始めることはできると思うぜ」

真結は当時、まだ小学生。その願望を抱いたからといって頭ごなしに否定しようとする人間はいない。むしろ、子どもの頃からそういった夢を持つというのは良いことだと思う。俺も当時は中学生になっただけだったけど、将来のことなんてまだ考えるつもりもなく、ただ漫然と自分の好きなことに明け暮れていた。

「真結は可愛いし、もしアイドルをやるっていうなら俺は全力で応援するぜ」

「もうお兄ちゃん、なんだか恥ずかしくなるからやめてよ」

可愛いと褒めてやったら真結は顔を赤くして照れ笑いを浮かべる。そういった仕草も男の目線で見るとすぐく応援したくなるから、彼女にはアイドルの適正が備わってるんじゃないかと思う。

「……でも、ありがとう。お兄ちゃんがそう言ってくれるなら、わたし、がんばって目指してみようかな……」

「ああ。その時は俺が真結のファン第一号だな?」

「もうく本当に気が早いってば〜!」

そう言っただけ俺と真結は笑い合う。

これが、真結がアイドルを目指すことになったきっかけ。元々アイドルに憧れは抱いてはいたが目指すことなど夢のまた夢だと思っていた。むしろ普通ならば他人に話したところで冗談として揶揄されていたかもしれない。

だが、俺は真結の想いを理解している。彼女がどのような目でテレビに映るアイドルを見ていたか、その始終を目撃しているからこそ応援してあげたかったのだ。

それから彼女は中学校に入ってからあることを進言してきた。

「お兄ちゃん。私、ダンススクールに通おうと思うの」

「ダンススクールに？」

家で普段通りの日常を過ごしていた時、ふと真結が俺を訪ね開口一番にそう言った。

真結はアイドルになるための第一ステップとしてまずはダンスを踊れるようにしたいと考えたようだった。身体を動かすことは好きな真結だが、スポーツをやっているわけではないので体力があるとはあまり言えない。だからこそ、専門のコーチに教わることで効率が良いと踏んだのだろう。

「そうか。いいんじゃないか？ 身体作りもアイドルを目指す上で大事なことだ。ダンスは詳しくねえからあまり力にはなれねえと思うけど、でも応援してるぜ」

「ありがとう。お兄ちゃんならそう言ってくれると思ったよ。それと……この件でお兄ちゃんに相談があるんだ」

真結が口を籠らせながら俺に相談をするなんて今まで見たことがなかった。

「なんだ？ 俺にできることならなんでもやってやるよ」

「……ダンススクールがない時、私のダンスを見てもらえないかな……？」

「ダンスを見る？」
頼みごとの内容に疑問を浮かべていると真結は詳しく補足してくれる。

「学校がない時は先生から教わったことを家で自主練しようと思ってるんだけど、私一人だと上手く出来るかわからないし筋トレとかも自信ないんだ……。だから、お兄ちゃんに隣で見たいの」

真結の頼み、それは運動をあまりやらなかった彼女からしたら当然の相談だった。自分一人で闇雲に挑戦するよりかはその分野に精通している人間に教えてもらった方が無駄にならない。

だが、それを聞いて即座に了承することが出来ないことも事実だ。俺は中学3年生になり、部活動でバスケットをやっていた俺は放課後も部活に明け暮れており、彼女の練習に時間を割くことができるかわからなかった。

「……お兄ちゃんに無理を言ってることはわかってるんだ。部活でも良い成績を取ってるし、プレーヤーとして優秀だって話はよく耳にするから。毎日じゃなくても、お兄ちゃんの手が空いてる時でいいの」
真結は表情を暗くしながら自分の手を握る。無茶な要求を出しているようで罪悪感を抱いているようだ。

「……だめ……かな……？」

不安げな表情で俺を見つめる真結。その目は心なしか諦めを宿しているようにも見える。

彼女がこうして真剣に悩みを打ち明けるのは初めてだ。普段であれば何気ない様子で相談してくることがお決まりだったが、今の彼女は普段のそれとは程遠い様子。これまで以上に自分の将来を考えているし、俺の生活を案じてくれているようだ。俺のことまで気遣ってくれる真結を見て、良い妹を持ったもんだと俺は密かに思う。

「わかった。お前がそう言うならやってやるよ」

「えっ、ほんとう!？」

了承をもらえると思わず顔を近づけながら確認してくる。

「ああ。ただ、体力作りっていうのは毎日続けないと意味がない。それにダンスをやるための体幹も必要になってくるからな。だから、ダンススクールの有無に関わらず、これは毎日やるぞ。そのために俺も付き合っつてやる」

「ま、毎日!?! それにお兄ちゃんも付き合っつて……」

「お前がそれだけ自分の夢に向き合おうとしてんだ。真結がやりたいことに本気で取り組もうとしてるから俺もそれに応えてやりたい」

真結の願いは俺の願い。ずっと俺の後ろを付いてきていた妹が自分の意志で将来を決めたのだ。その抱いた願いは絶対に壊しちゃいけない。そして、俺が原因でその道を諦めてしまうなんて、もつてのほかだ。

「大丈夫だ。本当にキツそうであればまた言うし、真結は気にしなくていいさ。その代わり、やるなら自分のやれるところまでしつかりと貫けよ?」

「……うん、わかった! お兄ちゃんが協力してくれるなら、私もやることは全部やってみる!」

真結は決意を固めるようにそう言う俺に頭を下げてくる。

「お兄ちゃん、ありがとう。ふつつか者ですが、よろしくお願いします!」

「それは少し意味合いが違うけど……まあいいか。真結を誰もが好きになってしまおうようなそんなアイドル目指して頑張るぞ!」

「おお〜!!」

こうして、俺と真結によるアイドルを目指す二人三脚の旅が始まる。

それからというもの、真結は非力ながらに俺の指導へ必死に食らいついていった。

筋トレをやり方やダンススクールを終えた後の走り込み、正直体育会系の練習と遜色ない扱きとはなったが、真結は決して弱音を吐かなかった。疲労で身体が動かなくなったり、筋肉痛に苛まれたりと今ま

で体験したことがないような辛さが身体に押し寄せてきた。

だが、彼女は負けじと立ち向かっていた。アイドルを目指したいという真結の心が真結自身を奮い立たせていたのだ。

そして、ダンスに関してもダンススクールに通ったことでめきめきと頭角を現していった。自主練で身体を鍛えているから、というのもあるが体幹の良さは同期生と比べても目を見張るものらしく、それは俺と同様に運動に対してのポテンシャルを秘めていた証拠だろう。

それと合わせて、彼女と同じように俺にも大きく変化があった。

当時、俺自身も真結がどのようなダンスをやっているのかを理解するために彼女が習得したダンスを真似していた。俺もダンスに関しての知識を習得しておくことで彼女が行き詰まった時に、具体的な助言を与えやすくなるためだ。

正直、バスケットをこなしながらダンスのことも覚えるというのはとてもなく大変なことだが、今まで経験したことがない内容をたくさん知ることができたため、新鮮な気持ちだった。その結果、ダンスで身体を使い方についてバスケットにも活かすことができ、真結だけでなく俺の成長にも貢献することになったのだ。

「お兄ちゃん、誕生日おめでとう〜！」

真結がアイドルを目指す決意を固めてから半年。真結は見た目こそ大きな変化はないが、運動能力に関してはめざましい成長を遂げている。毎日のランニングについてもいつも5kmほど走っているが途中で息を切らすことも無くなった。

そして、ダンスに関しても様々なテクニックを身につけていた。より魅力的に見せる手の振り方やステージ上での動き方など講師も感嘆の声をあげていたと真結から話を聞いていた。

そんな練習に明け暮れていた日々の最中、その日は俺の誕生日だった。学校が終わって家族での誕生日パーティを催しており、真結は祝

福するためのクラッカーを俺の頭上に向かって祝砲をあげる。

「ああ、ありがと。なんだかんだでもう15歳になっちまったな」

「でも、まだ伸び盛りじゃん！ 部活だってお兄ちゃんの活躍で成果を上げられてるんだし、妹として私も鼻が高いよ〜！」

そう言っつて真結はふんと鼻息を立てる。彼女の言う通り、真結と毎日欠かさず練習を重ねたおかげで、俺も運動能力が向上していた。部活動の大会でも常にレギュラーとしてチームを引っ張り、他の選手にも追従を許さなかったのだ。知らぬ間にそこまで高いレベルに登っている事実には俺自身が驚きを隠せなかったまでである。

「だけど、それはお前の練習に付き合ってるおかげさ。真結があの時アイドルを目指すなんて言わなかったら、俺も部活での練習に満足してて今の状態には辿り着けてなかっただろうさ」

もし、真結が今までの彼女と同じようにただ夢見る少女のままだったならば、俺も変わっていなかっただろう。彼女のために付き合ったことが奇しくも俺自身の成長にも関わっているからこそ、真結には感謝の念しか抱かなかった。

「真結が勇気を出さなかったら、今の俺はここにはいない。だから、ありがとうな」

「お兄ちゃん……」

頭を撫でながら真結にお礼を言うのと真結はダンマリとしながら俺を見つめる。自分の勇気が誰かの手助けにつながっていた事実には驚いているのだろう。

「わたしも、お兄ちゃんがいなかったらここまでやれなかった。どんなに辛くてもお兄ちゃんが側で応援してくれたからわたしもここまで続けることができてる。そして、これからもアイドルを目指すために頑張っていこうと思うの」

真結は自身の想いをそう語ると、懐からとある小箱を取り出す。

「だから、お兄ちゃんへのこれまでの感謝とこれからお世話になりますという思いを込めて……」

真結からの誕生日プレゼントだと悟った俺は笑顔でそれを受け取る。そして、徐に蓋を開けて箱の中身を確認すると、そこにはペンダ

ントが入っており、先端には蒼玉が埋め込まれていた。

「なんだこれ？ ペンダント？」

「うん、お兄ちゃんがこれからも勝てますようにっていうおまじないも込めたわたしからのプレゼント！ 未来のアイドル、鈴川真結のファン第一号に向けた贈り物、なんてね♪」

未来のアイドルと呼称し真結は元気に笑って見せる。きつと今までの感謝の品として渡すとなると重く受け取られてしまうため、未来のアイドルから贈り物と称してプレゼントを用意してくれたのだろう。

「先に付いてるのはサファイアでね、お兄ちゃんの誕生石。『揺るぎない心の象徴』って意味があつてすごくお兄ちゃんにぴったりだなつて思つたの」

「揺るぎない心の象徴……」

まさか真結が誕生石や石言葉を調べた上で選んでくれたと思わず、嬉しさのあまり言葉が出てこなくなつてしまった。自分のためだけでなく妹のためにも自分にできることを誠実に取り組むその姿が真結にとっては眩しく、かつこよく見えていたのかもしれない。

「……ありがとう。すごく嬉しいよ」

「えへへっ、喜んでもらえたならよかつた……！」

俺が嬉しそうにしている様子を見て安心した真結はほつとした顔でそう語る。そして、「それとね……」と次の話題に話を切り替える。「わたし、アイドルを目指す上でスクールアイドルを始めてみようと思うの」

「スクールアイドル……？」

スクールアイドルという聞きなれない単語に俺は首を傾げる。俺がこういった反応を示すことをわかつていた真結はすぐにスクールアイドルについて説明してくれる。

「学校でやるアイドルなんだけどね、高校ではすごく人気のコンテンツなんだって！ 普通の高校生が自分たちで本物のアイドルと同じようにライブをやったりイベントを行ったりするんだって！」

「へえ、今はそんな文化もあるのか……」

アイドルと同じようにイベントやライブを開催する。一般的な大人でもやらないであろう催しを高校生の時点で行うというのだ。俺にとってはまったくの未知の話だったのでどういったことをやるのか皆目検討がつかなかった。

「今だとラブライブっていうスクールアイドルの大会もあるみたいだね？ アイドルを目指す上でこれに挑むのもいいなって思ったの」「なるほどなあ……」

プロのアイドルを目指すために、アマチュアのアイドルとしてラブライブへ参加して将来のために経験を積む。真結の目指すアイドルプランとしてはまさに最良の案といえる内容だろう。

「スクールアイドルは高校生からじゃないとなれないから、今はまだ無理だけど……。でも高校生になったら、わたし絶対にスクールアイドルになる！」

きっぱりと言い切った真結の様子に俺は静かに笑みを浮かべる。自分の道をしっかりと決めているその姿に俺が申し入れる内容など何もなかった。

「……分かった。真結がそう言うなら俺は応援するのみだ。まずはスクールアイドルを目指して頑張っていこうぜ！」

「おおう！」

真結のアイドルへの道は順調に構築されていった。彼女の目指す最終目標、そこにたどり着くための道のり、その歩き方、全ては順風満帆に完成されており、あとは真結の心の赴くままに走るのみだった。

しかし、そんな彼女と彼女のためのレールをあまりにも唐突な嵐が破壊の限りを尽くすのだった。

「お兄ちゃんの最後の試合、楽しみだなあ。絶対誰よりも声を張って応援するからね！」

誕生日を迎えてから数週間、俺は中学3年生ということもあり部活も引退を控えていた。その日はバスケット部として挑む最後の大会。これが終わった時、俺は部活動を引退することになる。

「おう、コートで聞いてやるぜ。それにしても、こんな朝早くからついてこなくてもよかったのに、お前は物好きだよな」

「だって、お兄ちゃんの最後の大会なんだから。今日は最初から最後までずっと一緒に見ていたいから！」

俺は会場での最後の練習や開会式などがあるため一般の観客よりも早めに出なくてはいけない。真結は一般の観客なので俺と時間を合わせる必要はないのだが、彼女は「ついていく」と言って聞かなかつたのだ。しかし、俺としても最後の大会ということで緊張してしまふ節はあつただろうから真結がついて来てくれたのは精神的にも助かる。

「まあ、俺も気がまぎれるってもんだからそれは感謝してる。今日は絶対優勝を掴み取ってみせるさ」

「おっ！ 慎重手、気合はばっちりですね〜！」

握り拳を作りながら、そう意気込む様子を見せると真結もマイクを持つてる風を装ってアナウンサーのような口調を取る。朝から二人して元気だなと我ながら思う。

すると、真結は俺の首元に何か掛けられていることに気が付いた。

「あつ、お兄ちゃん、首に何か掛けてる？」

「おっ、気付いたか。実はこれだ」

そう言つて、俺は首に掛けているものを取り出す。その正体を知り、真結は大きな声を上げる。

「……それ、この前の誕生日プレゼントの!？」

俺が掛けていたのは誕生日に真結からもらったサファイアが装飾されているペンダントだ。

「これをつけてると不思議と力が湧いてくるんだ。今まで真結と練習してきたことが自信となつて俺に力をくれる。だから、今日の大会でも絶対に勇気を与えてくれると思つてな」

このペンダントをつけてからというもの、部活の成績も非常によくなっていた。彼女との体力作りのお陰もさることながら、まるでおまじないが掛けられているような気分になり、相手に臆することがなくなり、より限界へ挑戦する勇気をもらえたのだ。

「そうなんだ〜！ ……えへへっ、私のプレゼントがこうしてお兄ちゃんの力になってるって思うと嬉しいな……！」

真結は何気ない自分のプレゼントが兄の活力になっていて、知ってはにかむ様子を見せる。

「今日もこれがあることでどんな試合にも勝てる気がするんだ。だから絶対見ててくれよな」

「……うん！ 私、絶対応援するからね！」

真結と話していると会場が目前に見えてきた。会場に向かうための交差点で俺たちは赤信号で立ち止まる。

「よーし、今日は私ものを喰らす勢いで声を出すからしっかりと聞いててね！」

「ああ、当たり前だ！」

そして、横断歩道の信号が青に切り替わる。真結は切り替わったことを確認して我先にと走り出した。

「さあ、お兄ちゃん！ 早くはや——」

真結がその声を上げたとき、世界が著しく遅くなって見えた。突然の超能力で時間が遅くなってしまったのか、真実は誰にもわからない。だが、世界が遅くなっている一方で目の前で訪れる事象には何も抵抗ができなかった。

大きくクラクションを鳴らして走る自動車。ゆっくりと音の発信される方向を見つめる真結。逃げることもできずに、1トンを超える金属の凶器が真結に襲い掛かる。鈍い音を発しながら真結は声を上げることなく大きく吹き飛ばされた。

「……真結………？」

真結を撥ねた反動で交差点のガードレールに衝突し停車する自動

車。突然の騒音を聞いて周囲に人が集まりはじめ喧騒が大きくなる。

そして、路上で這う姿勢のままピクリとも動かない真結を見て、俺は今の状況を一瞬で理解した。

「……………まゆりいいいいいいいいいい!!!」

交差点周囲の騒めきが大きくなる中、俺の悲鳴にも近い叫びが辺りに響き渡るのだった。

絶望に打ちひしがれながら

一人のアイドルを志していた少女が事故で亡くなった。それはあまりに唐突で予想もできなかった出来事だった。加害者は居眠り運転を起こしていたようで信号の切り替わりに気づかず交差点に侵入してしまったという話らしい。

しかし、今の俺にはそんなことはどうでもよかった。たった数秒前まで隣で笑っていた最愛の妹が路上に転がっている事実だけが俺の頭の中にこびりついていった。

事故後、周囲の人間の協力を得てすぐに真結は病院へ搬送されたが、全身を複雑骨折しており、内臓を多数貫いていたことから治療もままならない即死とのことだった。

「ううっ……まゆりい……すまねえ…………」

病院で医者には妹の死を告げられてから俺は椅子に座りながら項垂れることしかできなかった。目の前で妹が殺されるのをただ見ることしかできなかった自分が許せなかった。出場する予定だった大会も参加を辞退し、病院へ付いてきたはいいものの手を出せるわけもなかった妹に対しての謝罪を繰り返すロボットのようになっていた。

「慎………」

項垂れながら泣いていると両親がやってきた。二人とも普段の落ち着いた装いではあるが、よほど急いで来たのかいつもはセットしている髪が乱れ、肩で息をしていた。

「とう……さん………かあさん…………」

「真結は………？」

母さんからの問いに俺は肩を落としながら首を横に振る。それだけで母さんは全てを悟ってしまふ。

「ああ………そんな………真結……………」

娘が亡くなった事実が実感として湧いてきた母さんは手で顔を覆いながら咽び泣く。父さんはそつと母さんの頭に手を置いて悲しみを和らげようとしていた。だが、それも一瞬のことで、すぐに父さんは俺の元に歩み寄る。

「慎、辛かったな……。私たちが付いて行ってやればよかったのに……すまなかった……」

父さんは妹を見てやれなかった自分を恥じながら俺をそつと抱きしめる。ふと抱きしめられ、父さんの身体の大きさと温もりを直に感じ、より涙腺が緩くなってしまう。

「……うう……ごめん……。まゆりを止められなくて……ごめん……」

「……一人で……よく耐えたな……」

「ううっ……うわああああ……!!」

父親の温かみを感じながら病院内に俺たち残された家族の泣き声だけが虚しく響き渡るのだった。

真結の死から数日。彼女がこの世を去った事実受け入れたくなかったが、朝起きても夜寝る時も彼女の姿がないことがこの上ない事実として思い知らされてしまう。

そして、否が応でも彼女の死を実感してしまう瞬間がすぐに訪れる。

それは学校内での生徒の反応。普段は軽口を叩き合う友人も俺の様子を伺うようになってしまい自分たちから話しかけることが無くなってしまった。そして、妹の死は瞬く間に学校内で拡散され、すれ違う人々は口を揃えて俺に聞こえないように憐れみの声を漏らす。

部員仲間にも大会当日のドタキャンがあったこともあり、彼らへの

申し訳なさからまともに話しかけることも出来ず逃げてしまう始末だ。

こうして人の目から逃げるように過ごす俺は学校にいたことがしんどくなり、いつしか学校にも行かずに引きこもるようになってしまった。家に引きこもってしまった俺を両親は何も言わずに見守ってくれた。このまま現実から目を逸らし続けても残るのは虚無のみ。妹の死を乗り越えて前に進まなければいけないのだが、身体が言うことを聞かない。頭では理解しても身体が認めないのだった。

そうして学校を休むようになってから1週間。両親は仕事へ行き、家には俺一人だった。何もしないままではいけないと妹の部屋に向かう。少しずつ妹の死を受け入れるために、俺は彼女の部屋を整理しようと考えた。彼女の部屋はあの日から姿形を変えていない。しかし、いつまでも手付かずしておくわけにはいかず、せめて片付けてあげようと思ったのだった。

真結の部屋を片付ける内に様々な物が出てきた。彼女が大切にしていたぬいぐるみ、勉強のために愛用していた好きなキャラの描かれた筆記用具。小学生の頃に使用していたランドセル。中学生になつてからも彼女は記念としてクローゼットに大切にしまっていたようだった。どれも真結にとって生を全うした証。どうしても処分する気もなれず、どうしたものかと困っていた。

「……………ん？　なんだこれ……………」

周囲を見渡すと真結の勉強机の隅にUSBメモリーが置いてあった。パソコンに詳しくない彼女の部屋に何故そんなものが置いてあるのか不思議でならなかった。以前、父さんにパソコンの使い方を見せてもらったことがあるため、俺はすぐに自室へ行きメモリーの中身を確認する。

(あいつのダンスとかが入ってるのか……?)

パソコンの起動が完了すると、俺はパソコンの入力端子にUSBを挿入しデータを読み取る。

「これは……あいつのダンス練習か……」

そこには推察通りダンス練習を自撮りした動画が多数入っていた。どうやらダンススクールが終わった後や俺との練習の合間に自分でダンスを撮影していたようだ。客観的に自分のダンスを見る手法として講師から教わったのだろう。

「スクールに通い始めてからと比べると、本当に成長してるもんだな……」

スクール入校直後のダンス動画はお世辞にも上手いとは言えず、初心者の域を出なかった。しかし、1, 2ヶ月も超えると目に見えてダンスのレベルが上がっており立ち回りや細部への拘りなどダンスへの集中力が段違いだった。

彼女のダンス風景を眺めていると、これまでと異なるサムネイルの動画が出てきた。動画時間としてはそれまでのダンス練習より少し短い程度のもだが笑顔の真結が正面から映されており、違った趣向の動画であることが見て取れる。

「……?」

動画の内容について、予想がつかなかったので俺は何気なく動画を再生する。

『皆さん、こんにちは！ まゆりんこと、鈴川 真結です！』

……って自分の言うのも恥ずかしいんだけど……』

動画ではサムネイルと同じように真結が正面から映されており、彼女もカメラをまっすぐに見つめていた。まるで動画を見ている視聴者に向けたメッセージのようだ。

『私は今、アイドルになるためにたくさん練習をしています！元々体力がある方ではなかったので筋トレなんかは特にしんどいです！ それにダンススクールの先生も厳しくて……いつも怒られます！』

真結は普段の練習風景について語ってくれる。講師に怒られると言っている割に笑顔が消えていないのがその練習の充実さを表している証拠だろう。

『でも、辛くなんかありません！ だって、私はテレビで見てるアイドルに勇気を貰って、私も同じようになりたいって思ってるからこんな苦しきはなんてことないです！』

いつもは憧れるだけだったアイドルに手を伸ばすために、今は研鑽を積む時。彼女もそれを自覚しており、日々弛まぬ努力をしているのだ。

「それに、私のことを誰よりも近くで応援してくれる人がいるから、その人に返してあげたいんです」

「……それって……」

真結が誰のことを示唆しているのか、それを的中させるのはそう難しいことではなかった。

『その人は部活が終わってから付きつきりで私のサポートをしてくれて、この夢を追いたいって話をした時も全力で応援するって言って

くれました。私がこうして今を走れているのもその人のおかげなんです！』

真結の言葉を聞いて乾いていた涙が込み上げてきた。彼女が俺に直接感謝の言葉を伝えてきたのは誕生日の時以外ではあまり無く、なかなか聴くことができないのだ。そして、それを動画で聞かされることになってしまったこの状況も相まってより心が痛くなってくる。

『だからその人には、私の成長した姿を見せてあげたいんです。いつかステージに立って沢山の人に希望をあげられるアイドルに、私は必ずなってみせます！……だから応援しててくださいいね？』

「…………ぐずつ…………真結…………そんなことを……………」

俺は堪えていた涙を抑え切れず嗚咽を出しながら顔をうずめる。動画の中で真結は締め挨拶をしていたが、もう俺の耳には届いていない。彼女が真剣に追いかけていた夢が、自信満々に語っていた将来が、ほんの一瞬の出来事で閉ざされてしまったのだから。

「まゆりい…………ごめん……………。ほんとうに……………ごめん……………」

今更謝つても彼女が生き返ることはない。それが自然の摂理なのにどこかで認めたくない自分がある。しかしどれだけ悔いても時は戻らない。ここにいるのは俺一人だけ。ならば、残された俺が彼女のためにその使命を果たさなければならぬ。

「…………真結。俺、お前の意志を継ぐ。お前が見たかった景色を…………俺が見せてやる」

彼女の動画を見たことにより、俺の中で気持ちの整理がついた。な

いものねだりで自分の世界に籠っていたがそれだけでは何も変わらない。むしろこのままでは真結の想いが消えてしまう。彼女がこの世界に存在した証が消えてしまうのだ。

そのことを再認識した時、俺の行動は早かった。両親が仕事から帰ってきた時に、事の顛末を話した。自分が彼女の想いを背負ってアイドルになると話した時、二人は驚きの表情を浮かべたが普段と違う俺の様子を見て、すぐに事情を理解し協力してくれることになったのだ。

そして、アイドルを目指すにしても次に探さなくてはいけないのは高校だ。俺は高校受験をしなければいけない時期。他の生徒は志望校を見つけており、合格に向けて勉強していたが俺は彼らと大きくブランクがある。その差も埋めつつアイドルに必要な要素を勉強できる場所を見つけなければいけなかった。

だが、俺自身を客観的に自己分析した時、ダンスや体力などの運動能力に関しては申し分ないと自覚している。故に部活動ではレギュラーを獲得していたし、真結のダンス練習に付き合っていたおかげで曲がりなりにもダンスは形になっていたからだ。

その上で、次に勉強しなければいけないところが音楽について。俺は歌があまり上手とは言えない。人並みに歌えはしても、それはアイドルになった時に大きな足枷になる。その欠点をカバーするためにはまず音楽を学ぶ必要がある。

そこで見つけたのが、虹ヶ咲学園。全国から中学生がこぞって集まるマンモス校でその学科は普通科のみならず文系、デジタル系、保健系と多彩だった。その中に音楽科も入っているため、臨むのならば本気で目指したいということでこの学校を選ぶことにした。

虹ヶ咲学園はその人気の高さゆえに倍率も高い。特に音楽科は楽器を弾けたり音楽的センスを兼ね備えている人も多いが故に敷居が高かった。中学の担任も「そんなの無茶だ」と異を唱えていた。だが、やらずに諦めるなんてこともしたくないため、担任の反対を押し切って受験願を出した。

やるからには本気で、ということ受験が始まるまでの期間、学校の先生とマンツーマン指導で夜遅くまで勉強していた。もう頭に入らないと思い、気持ち折れそうになったこともあったがそんな時に真結の言葉が思い出される。『いつか沢山の人に希望を届けられるアイドルになりたい』と胸を張って語った彼女の姿が俺を奮い立たせてくれた。

長い受験勉強との戦いの末に自分の手元へ合格通知が届いたときは両親とはもちろん学校の先生とも熱いハグを交わした。当人も本当に受かるとは思わず、感情を爆発させたのは久方ぶりのことだった。

そして、この学園に足を踏み入れたことで自身に大きな転機が訪れた。

「……………」が虹ヶ咲学園か……………」

入学初日、校舎の姿を眼前に拝み俺は改めて自身が成し遂げたことを振り返る。

唐突な妹との別れ、アイドルを目指すために必要な音楽の知識を蓄えようと先生との熱血指導、喜びの感情を爆発させた合格通知。バスに熱中していた時には考えられない今の自分の姿に驚きを隠せなかった。

しかし、これは俺が本気で望んだこと。だから、何も悔いはないし臆するつもりもなかった。周囲には女子生徒が闊歩していたがその目に負けるつもりはない。緊張しないとさえ嘘になるが気持ちで

負けては元も子もないと考えていた。

「音楽科……1―1……鈴木 慎……」

自分の名前を名簿から探し音楽科の教室へ向かう。親元を離れて寮で生活することになった俺はここでは本当の意味で一人だった。せめて似た境遇の男子がいれば少しは気持ちも紛れると思っていたのだが、なかなか見つからない。

そう思っていた矢先だった。

「……あの子……もしかして……」

教室で一人タブレットと睨めっこしている紺色の髪の少年。後ろ姿は一瞬女子生徒に見えはしたが制服が俺と同じであるため、もしかしたらと俺は勇気を出した。

「あの……」

突然声を掛けられた少年はタブレットから目を離しこちらを見つめる。

「はい。なんですか?」

中性的で耳心地が良い声。優しく向けられた笑顔は穏やかな印象を与えてくる。

「君もこの教室の生徒だね?」

「そうですけど、もしかして君も?」

そうだという彼の言葉を聞いて、緊張の糸が解ける感覚がする。

「そうなんです! やっと男子が見つかって安心したよ」

「そっか! 僕もここまで男子の姿を見なかったからすごく不安だったんですよ……」

少年も俺がクラスメイトと知り、ほっと胸を撫で下ろす。彼も平然を装っているながら内心は不安を隠せなかったようだ。

「俺、鈴木 慎っていうんだ。よろしく。えっと……」

先ほどの名簿で少年の名前を見忘れたのでなんて呼べばいいか戸惑っていると彼は落ち着きながら自身の名前を教えてくれる。

「僕……いや、俺は巴 輝弥。気軽に輝弥って呼んで」

これが、俺にとって自慢の相棒と呼べる輝弥との出会い。
そして、俺の物語の始まり。

慎の決意

「……これが俺の半生だ」

慎は長く話し続けた反動からか大きなため息をついて脱力する。21時ごろから彼の話を聞き始めたが、現時点で23時になっており、約二時間は彼の話を聞いていたことになる。姉さんが用意してくれた紅茶も彼の話を聞きながら飲んではいしたが、途中から聴くことに専念してしまったこともあり今は煙もたつておらず冷めていた。

「長く話しちまって悪かったな。これが、俺が虹ヶ咲学園に来た理由、そしてスクールアイドル同好会に入ることを決めた理由だ。俺は妹が成しえなかつた夢を叶えるために、あいつが憧れていた景色を見せるためにここに来たんだ」

「……」

「……と言つても、最終的にはあいつの願いに囚われてて自分を見失つちまつたけどな」

そう言つて慎は自虐気味に語る。妹のためと称して活動してきた慎だが、かすみにも指摘された「自分のライブについて考えられていない」について凶星だつたことを認めているようだ。

慎は真結ちゃんのためにスクールアイドルとしてステージで輝いている姿を見せてあげようと思つていた。しかし、それを成すために真結ちゃんが観たかつた景色を見せようとしていたので、慎は彼女がスクールアイドルとしてありたかつた姿を彼自身の手で体現しようとしていたのだ。

かすみはそのことを見抜いており、それが前述の発言にもつながつているようだった。

「……輝弥？」

慎はいつまで経つても言葉を発しようとしないうえを不審に思い、顔を覗きに来る。ずっと俯いていたこともあり心配しているようにも見える。

「……慎、話してくれてありがとう。おかげで慎の事がやっとわかる

ようになった気がする」

「輝弥……」

俺は顔を上げて慎に笑顔を見せるが、その笑顔に違和感を覚えた慎は浮かない様子を見せる。その違和感を合っており、俺はすぐに悔やむ表情へ変わる。

「それと……自分のみじめさも痛感しちやつたよ」

「えっ?」

突然、自分の事を責める様子に慎は疑問符を浮かべ発言の意図を問う。

「慎がずっと一人で真結ちゃんのために戦ってきたのに、それに手を貸せなかった自分が許せなくなつたんだ」

許せないと話しながら俺はいつの間で作っていた握り拳に力が入る。慎が話さなかつたから、という理由だけにあらず、慎との今の関係性が変わることを恐れて声を掛けられなかつた自分の弱さを痛感してしまつたのだ。

「今まで……力になつてあげられなくてごめん。俺はやつと慎と対等の立場になれた気がする」

「輝弥……。俺もつまらねえ意地を張つて悪かつた。色々と気を遣わせちまつて、俺も情けねえよ」

俺の謝罪に対して慎も己の非を詫びるように顔を落とす。

「でも、慎の想いを聞いてやつと決心がついた。慎の曲のコンセプトは……やっぱり変えるべきだつて」

「どうしてだ?」

「慎が語ってくれた曲のコンセプト、あれつて真結ちゃんがアイドルになつた時のことを思つて言つてたと思うんだ。でも、今ここにいるのは真結ちゃんじゃなくて慎。慎が一番映える演出でライブを披露することがたくさんの人に元気をあげたいという真結ちゃんの願いにも繋がると思うんだ」

慎の当初話していた曲のコンセプトがどうしても彼のイメージと合わなかつた理由、それはそのイメージが彼のものではなく真結ちゃんのものだつたからだ。彼は真結ちゃんの意志を尊重したくて彼女

が求めていたものを自分が体現しようと画策していただろう。それでは彼自身の想いがなく遠くない内にドツボにはまってしまうのが目に見えてしまう。

尤もこんなことを言わずとも既に彼は理解しているだろうから皆まで言わずとも俺の意図は伝わっていることだろう。

「……まったく、ほんととお前に隠し事は出来ねえな」

「俺は慎の相棒だよ?」

ため息交じりにぼやく慎に俺は薄ら笑いを見せる。手玉に取られる感覚を覚えている慎は苦笑を浮かべ、自身の考えを語ってくれた。

「確かに、輝弥の言う通りだよ。俺は真結の見たかった景色を見せるために明るい曲を作りたいって言ったんだ。でも、それだと俺が良くても輝弥やみんなを困らせちゃうんだよな」

「慎……」

「だから、俺は自分のやりたいことを尊重する。だから……協力してくれるか?」

慎は目線を外に反らしながらそう問いかける。顔が若干赤くなっているのも本人としては改めて言うのが恥ずかしいのだろう。そんな彼の様子に可笑しさを抱きつつも、否定する理由はどこにもなかった。

「当然だよ。今日から早速、曲の作り直しだから気合を入れないとだよー!」

「時間も遅いし、ほどほどにな……?」

曲作りに熱意を出す俺に慎はたじろぐ様子を見せる。だが、ライブまで1週間で切っている中で悠長に構えている時間もないため、加減をするつもりは毛頭ない。

こうして俺たち二人の徹夜作業による曲作りが始まった。

慎とのお泊り会兼曲作り強化合宿から一夜明け、俺たちは部室前に来ていた。目的は二つ、昨日のかすみと慎の喧嘩についての謝罪とこれからの練習がハードになることに対する相談。

慎と話して、同好会の皆にも協力を仰がなければいけないということと翌日の練習前に部室へ集まってもらったことになったのだ。昨晩、深夜にその連絡を展開したのだが1分も待たずに全員から了承の返事が届いたため、それほどに今回の件を心配していたようにも窺えた。

「慎、大丈夫？」

「あ、ああ……」

部室内には既に俺たち以外の全員が待ち構えているだろう。あとは俺たちが入るだけだが、慎がバツの悪そうな表情をしており扉を開けるのをためらっている。今回のトラブルもあって、気持ちの整理が付いていないのだろう。

「大丈夫、誰も慎の事を責めるつもりはないし、絶対協力してくれる。もう……慎は独りじゃないから」

不安そうな慎に俺は肩へそつと手を置く。少し震えていた彼の肩が俺に触れられたことで静かになる。そして、俺の手に慎は自分の手を乗せる。

「輝弥……ありがとうな」

慎のお礼の言葉に俺は頷いて答える。そして、慎は笑顔を見せたままドアノブに手を掛けてゆっくりと扉を開けた。

「慎くん、かーくん、おはよう」

俺たちが入ってきたことを確認して侑さんが挨拶をしてくる。部室内では予想通り俺たち以外の10人が揃っており、横一列になって待ち構えていた。

「おはようございます、侑さん」

侑さんに挨拶を返し次は慎の番と彼の背中を優しく叩く。状況を察した慎は先ほどの笑顔は鳴りを潜め、なんと切り出していこうか言葉を探しているようだった。

「……えっと、皆さん……その……心配を掛けてすみませんでした」

謝罪の言葉を述べたのち、慎は自身の胸中について語り始める。

「昨日、あれからずっと考えて一つの結論を出しました。それは今回の大会に悔いを残さないようにしたい。そのために俺に必要なことを考えて……今のままじゃだめだって気づきました」

全員の顔を見渡しながらそう語る慎。そして、誰も慎の言葉を聞き逃さないようにしっかりと聞き入っている様子だった。

「俺は……俺自身のつまらない意地で皆さんを困らせてしまいました。でも、もうそれもおしまいにします。昨日、輝弥ともどのように進めるか二人で話し合いました。そして、曲を一から作り直そうという結論で合意しました」

慎は確認を取るように俺の方を見つめる。彼の発言に肯定するようになんは力強く頷いて見せる。

「ライブが来週にまで迫っている状態で振り出しに戻すのは正気の沙汰じゃないことはわかっていきます。それでも、今よりも確実に良いものに仕上げることができるとそう確信してます。だから……!!」

慎は懇願するように大きく頭を下げる。そして、はつきりと自分の口から彼女たちへ自身の願いを伝える。

「俺のライブに向けて……もう少しだけ……皆さんの力を貸してください……!!」

慎はそう言ってメンバーらの返事を待つ。思えば、慎がこうして同好会の皆にお願いをするのは今回が初めてのことだ。今までは周囲が決めたことに自分の意見を交えつつ協力することが多かった。だからこそ、彼に頼ってばかりいた自分たちが今度は頼られる存在になったとなると気合が入らないはずがない。

その想いを代弁するように侑さんが口を開いた。

「慎くん、戻ってきてくれてありがとう。君の気持ち、確かに受け取ったよ」

「侑さん……」

「慎さんがそう仰るなら反対をする理由はありません！ 皆さんもそうですよ？」

侑さんに続けて語るせつ菜さんは慎の意見に肯定的な返事をしつ

つ、他のメンバーへも同じ思いであることを確認する。

「当ったり前じゃん！ シンシンが熱シンに語ってるんだもん！ やってやるしかないもんね！」

「慎くんの迷いが吹っ切れた上での言葉だもの。異を唱えるつもりはないわ」

愛さんと果林さんも賛同の意を示す。その他のメンバーも各々が同意の言葉を上げていく。みんなの頼もしい言葉に慎は瞳を潤ませる様子を見せる。

「皆さん……。俺なんかのために、ありがとうございます」

「それは違うよ、慎くん」

自虐的になる慎にしくさんは待ったの声を上げる。

「これは慎くんが自分でやりたいって言ってくれたことだもん。自分の思いには胸を張っていい？」

「それに、慎くんは今まで私たちの事を手伝ってくれたから、その恩返しでもある。慎くんが私たちのために頑張ってくれたことを、今度は私たちがやってあげる番。璃奈ちゃんボード『につこりん』」

しくさんに呼応するように璃奈も胸中を明かす。言葉の最後に見せた璃奈ちゃんボードは満面の笑みを浮かべたものが映されており、自身のやる気も体現しているようだった。

「しく……。璃奈……。ありがとう」

「では、時間もあまりありません。早速ミーティングの準備をしていくとしましょうー！」

「じゃあ、まずは練習着に着替えてこようか！ またここで集合だね！」

せつ菜さんと侑さんの音頭に全員が返事をして、着替えのために部屋を後にする。

「慎、俺たちも行こうか」

「ああ、そうだ——」

「……待ってー！」

侑さん達に続いて着替えに行こうとした矢先、部室で一人佇んでいたかすみが見え、声を上げた。

「し、慎のすけだけは残ってくれる……?」

「……かすみ……?」

「ほ、ほんの少しだけでいいから!」

決まりが悪そうにかすみは慎を部室へ残らせようとする。かすみが慎を呼び止めた理由、それが分からないほど野暮な俺たちではない。

「じゃあ、俺たちは先に行ってるから、二人で話をつけておいてよ?」

「かすみさん、慎くん。またあとでね?」

「お、おう……」

すぐに事情を察した俺はしずくさんや璃奈と一緒に部室の外へ出る。慎は困惑しながらも部室でかすみと二人きりで残ることにした。

部室の扉を閉めた後、本来ならば慎たちに進言した通りに更衣室で着替えに行くのだがそのつもりはさらさらなかった。

「……やっぱり気になっちゃうよね」

なかなか足を動かさない俺にしずくさんも苦笑しながら同じ考えだと明かしてくれる。その場にいる璃奈も同様だった。

「また喧嘩しないか聞き耳を立てる。璃奈ちゃんボード『むん』」

「璃奈ってば……。でもそういう理由で監視しておくのもアリだよ
ね」

理由はなんであれ、二人の中でしつかりとけじめをつけられているかを見届ける必要がある。そう自分に言い聞かせてしずくさん、璃奈と一緒に部室の扉へ耳を傾ける。

中ではかすみは慎へ会話を切り出しているところだった。

『……あ、あのさ……し、慎のすけ……』

『……悪かったな、余計な気苦労を掛けさせちまって』

かすみが話し始めようとした矢先に慎が言葉を被せてくる。突然の謝罪にかすみも困惑している様子だった。

『な、なんで慎のすけが謝るのさ!?!』

『あの時、お前に言われたことは正しかったからだよ。俺はあいつの優しさに甘えてて自分で物事を考えようとしなかった。ひたすら努力を欠かさないお前から見れば、俺の姿はそりや怠慢に見えるだろう』

よ』

「慎……」

慎の甘さ、それは彼だけが経験するものではない。子供の頃にこれが欲しいと言えば、両親が好きなのを何でも買ってくれるのと同じように、人から受ける優しさにはいつまでも縋りたくなるものだ。しかし、そんな甘い蜜も延々と受け取れない。いずれは自立しなければいけないのだ。その自立のタイミングがかすみと慎の間で違った、ただそれだけのことなのだ。

『それでも！……それでもかすみは……慎のすけに言っちゃいけないことを言った……。スクールアイドルに向いてないなんて、慎のすけが……スクールアイドルを目指してる人が言われたくない言葉をかすみは言った……！』

『かすみ……』

『あんたが……あんたがスクールアイドルに向いてないなんてこと……絶対にない……！人の目につかないところであんたが誰よりも努力してることを私は知ってる。あんたが……妹さんの為に頑張ってることも……』

『お前……いつの間知ってるんだ……!?!』

かすみの口から出た事実には慎はたじろぐ様子を見せる。慎からすれば、妹の為にスクールアイドルをやっていることを知ってるのは俺一人だけなのだ。

『……この前、あんたが野暮用で帰った時にしず子達と一緒に追いかけたんだ……。なんの事情があったんだろうって』

『それは輝弥も一緒だったのか？』

『……うん、かぐ男もそれは知ってる。でも、かぐ男には何も言わないであげて。かぐ男達はかすみが無理やり連れて来ただけだから……』

慎の怒気が含まれているような話し方にかすみは一瞬固まる様子を見せたものの隠し事はできないと察したのか正直に事の顛末を話す。故意に慎の事情を知ろうとしたわけではないとして俺たちを庇う発言をする所に彼女の優しさが垣間見える。

『別にそんなことはどうでもいいさ。あいつからも軽く話は聞いてるからな』

『……そっか』

慎も俺たちの尾行について言及するつもりはない。かすみも慎の反応から同じように察して次の言葉を探してる様子だった。

『……話を戻すけど、さっきも言ったようにあんたは誰よりもアイドルを真剣に勉強していた。なのに、あんたの事情も理解せずに私は私の自己満足を押し付けてた』

『……………』

『だから……本当にごめんなさい。し……慎……』

かすみの声色はいつもの軽口ではなく真剣なものだった。最後の名前呼びの部分は少し恥らいが残っている様子が窺えるが、それでも照れ隠しを見せないところは彼女なりの誠実さを示しているように見える。

『……こんなタイミングでお前がちゃんと名前で呼ぶことになるとはな。これじゃあ俺も気安くかすかすなんて呼べねえじゃねえか』

『は!?! 今は大事な話してる時なのに、なんでそんなどうでもいいことを……………』

『そうだ、もうどうでもいいことなんだよ』

『……あんた、一体何を言ってるのさ?』

唐突な慎のからかいに怒りの感情を露わにするかすみだったが、すぐさま慎に一蹴される。困惑しているかすみに慎は続けて言葉を紡ぐ。

『俺たちはここでお互いの気持ちをつつけあった。本気の喧嘩をして、俺たちは双方に抱えてる蟠りを解消した』

『……………』

『ならこれ以上言い合う必要もないだろ。もうあいつらにも……お前にも……余計な心配は掛けさせたくないからな……』

『慎……』

『改めて迷惑をかけて悪かったな、かすみ。それと、俺のために叱ってくれてありがとな』

慎はこれまでの非礼を詫びるのと同時に叱責してくれたことへの感謝をぶつける。かすみがい出さなければライブも中途半端になっていたり、最悪の場合同好会の仲にも亀裂が入っていたかもしれない。それを考えると今のうちにこの問題を解消することができて本当に良かったと思う。

『ふ、ふん！ 別に慎のすけの為に言ったわけじゃないから！ かすみはあくまで同好会の名前に傷がつくのを見たくないからやっただけだから！』

『はいはい、そういうことにおいてやるよ』

『もう〜！ なんなのさ〜慎のすけ〜!!』

かすみ達が仲直りした様子を聴いてしずくさんは小声で俺に笑顔で話しかける。

「……もう二人は大丈夫そうだね」

「うん、ひとまずは一件落着だね。もつとも、ここからが本番なんだけど」

ほっと胸を撫で下ろしながらも、俺は今後の展開に不安視する。振り出しに戻った曲作り、それに伴ってのダンスの再構築、ライブ演出など考えることが山ほどにある。全員で力を合わせなければ達成させることは到底不可能だ。

「でも、大丈夫。今の私たちはこれまでの私たちと違う」

「璃奈……。うん、そうだね」

璃奈の言葉に俺も頷く。彼女の言う通り、この同好会はこれまでと同じような逆境を乗り越えて来た。ピンチもチャンスに変えてきたこの同好会ならば不可能はない、そう思わせるほどの実績を持っているのだ。

「その為にもまずはここから移動しないと！ かすみさん達に見つかっちゃうよ？」

「確かに、慎に余計なお咎めは貰いたくないからさっさと行こうか」

移動が遅れた慎たちにどやされるのは勘弁なので、彼らに勘付かれないように部室前を後にする。

ここから俺たち同好会のTMSに向けた逆襲劇が始まるのだった。

TMS当日

とある日の朝、スマホのアラームで目を覚ました俺はカーテンを開けて太陽の光を全身で浴びていた。今日は雲が一ミリも無い晴天。イベントをこなすには絶好の日和だ。

煌びやかな陽光を受けながら深呼吸する。寝起きで冷えていた身体が心なしか内側から温もりを帯びているようだった。

「……この空もあいつの門出を祝ってくれてるのかな」

柄にもないことをつぶやきながら、地平線から顔を出し始めたばかりの太陽を見つめる。まだ目を瞑るほどの眩しさを有していないため目視をすることは容易だ。

「今日がトップ・オブ・メンズスクールアイドル当日。ここで慎の成果が出るんだ……」

そう、今日は待ちに待った男性スクールアイドルのための大会が開催される。そんな大切な日の朝ということもありここまでやってきたんだというノスタルジーがふと脳裏をよぎってしまう。

「輝弥？ ご飯の用意ができてるから早く来なさいね？」

朝日を眺めていると扉をノックして姉さんが朝食の呼びかけをしてきた。アラームを切ってから時間が経過していたので姉さんも寝坊していないか心配だったようだ。

「はーい、今行くよー」

姉さんのせつかくの料理を覚ましてしまうわけにもいかない俺はすぐに朝食を食べるためにリビングへと向かう。

姉さんの朝食を堪能した俺はすぐに外出のための支度を始めた。外出と言っても私服で出かけるわけではなく学生として基本である

制服へと身を包む。大会会場内での行動もライブ参加者以外は同校の生徒であれば制服で応援することと規定されているのだ。

「はい、輝弥。お弁当」

身支度を済ませ、下駄箱で靴を履いていると姉さんが弁当を持ってきてくれた。大会ということで一日中会場内に入り浸ることになるため姉さんが手作りのお弁当を用意してくれたのだ。

「それと……これも」

弁当と一緒に用意してくれたもの、それは俺が少し前に道端で拾ったとある装飾だ。渡してくれた物を見て、俺は満足げに笑みを浮かべる。

「ありがとう、姉さん」

「いいえ。……いよいよ、今日が慎くんのライブなのね」

姉さんが手に持った弁当を渡しながら今日のイベントの事を話す。姉さんも弟である俺の友人として、慎がステージに出ることを嬉しく思っているようだ。

「うん。この日のために用意してきたからね、姉さんも見に来るんですよ?」

「ええ。今日は部活をお休みさせていただくことになったから、部屋の片付けを終えてから会場に向かうわね」

そう、姉さんはこの日のためにわざわざ演劇の練習を休んでくれたのだ。いつもは演劇バカという言葉が相応しいほどに演劇の練習に明け暮れる姉さんだが、そんな姉さんが慎のライブをここまで楽しみにしてくれていることに俺はとても鼻が高かった。

「わかった。気をつけて来てね」

「わかってるわ。貴方も事故なんか巻き込まれないようにね?」

姉さんの言葉に一瞬動作が止まる。姉さんが事故という言葉を口にしたのは偶然のこと。意図したものではないことはわかっているが、それでも慎から聞いた話が頭を過ってしまう。

大会当日に事故で命を亡くした真結ちゃん。慎にとってあの日の出来事は何にも代えられないほどのトラウマであり今思い返しても心が痛くなることだろう。

でも、もう彼は孤独ではない。共に進む仲間として、友人として、相棒として俺が隣に立っているのだ。

「大丈夫だよ。じゃあ、俺ももう行くからね」

「ええ、いつてらっしやい」

弁当も鞆にしまい準備を済ませた俺は玄関で手を振って見送ってくれる姉さんを尻目に家を出るのだった。

家を出発して俺が到着した場所は虹ヶ咲学園。どうしてライブ会場ではないかという開会式まで時間があるということ、パフォーマンスの最終調整を行うことにしたのだ。それとライブ用の衣装や音源も部室で保管しているためその回収も目的としている。

「おっ！ おはよう、かーくん！」

「輝弥くん、おはよう！」

部室には既に侑さんと歩夢さんがおり、他のメンバーが揃うまで雑談をしているようだった。

「侑さん、歩夢さん、おはようございます」

「いよいよ今日がライブ本番だねー！ うう、慎くんのライブが今から楽しみだよー！」

「侑ちゃん、昨日もなかなか寝付けなかったって言ってたもんね」

侑さんは慎のライブを今か今かと待ち侘びており、楽しみのあまり落ち着かない様子だった。

「でも、侑さんの気持ちもわかります。この日のためにやれることは全部やってきたつもりなので」

この日のために虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会は血のにじむような時間を過ごしてきた。曲の再製作を決意してからというもの、1週間しか猶予がない中で俺たちは璃奈のライブの時と同じように各チームで分かれて総力戦で挑んだ。

「中々にハードスケジュールだったけど、それでもやれることはやったよね」

「はい。あとは、慎が本番で決めるのみです」

「……随分とプレッシャーを掛けてくるじゃねえか」

わくわくを抑えきれない様子の歩夢さんと話していると後ろから慎の声が聞こえてくる。荒っぽい口調の割に表情は穏やかだった。

「やあ慎。気分はどう？」

「……緊張はしてるけど、それよりも楽しみが強いさ」

「ふふっ、万全なようだね」

慎の勝気な様子を見て俺も安心する。と言っても慎が緊張のあまりご飯が喉を通らなかつたなどと情けないことは言わないだろうけれども。

「おっ、今日の主役のシンシンもいるじゃ〜ん！ おっはよ〜！」

「おはよう慎くん。緊張してなさそうで安心した」

そんなことを言っていると愛さんと璃奈が部室へ入ってくる。そして、他のメンバーも次々と挨拶と一緒に入室してきた。

「よし、これであとはかすみちゃんだけだね」

「かすみさんが遅いのは珍しいですね……。いつもは早く来られますが……」

侑さんは全体を見渡して、まだ部室に来ていないメンバーを確認し、せつ菜さんはこの状況を少し不思議がる。確かに彼女はいつも練習への参加も早い。必ずではないが、一番乗りで部室で準備しているし、一番ではなくも早くに準備を済ませ、全員が揃ったらすぐに練習を始められるようにしているのだ。

「慎くんのライブだから緊張しているのかしらね？」

「そんな遠足前の小学生じゃないですし……」

果林さんの冗談に失笑を浮かべていると俺のスマホがバイブレーションを上げる。電話主を確認するとそこには『中須かすみ』の文字が表示されていた。

「かすみ？」

「もしかして、遅刻の連絡か？ ったく、本当にあいつは……」

慎が苦言を呈しているのを横目に俺は着信に応じる。遅刻はないにしろ何かトラブルでもあったのかと思っただが、スマホを耳に当てた瞬間、その不安は一瞬で崩れ去った。

『もうくおっせい!! かぐ男たち、今どこにいるのさ!!』

「えっ? 部室でみんなと待ってたけど……」

開口一番、とてつもない剣幕で怒るかすみに俺は平静を装って答える。俺の電話を聞いて、周囲のみんなは状況が読めないからか、訝しむ様子を見せる。

『もうかすみんは準備終わってるの! 早く正門に来てよね!』

「で、でも、部室に衣装やCDが……」

『もう持つてきてるから! とにかく早く来ること! じゃあ!』

間髪を容れずにかすみからの電話が切れてしまった。ものすごい勢いで捲し立てられ、頭の理解が追いついていなかった。困惑している俺を見て、慎は声を掛けてくる。

「かすみ、もう来てるのか?」

「うん……もう正門前にいるって……」

「確かに、ここに保管してた衣装やCDは何処にもないものね」

果林さんはそう言ってロッカーの中を漁る。現地入り前に部室へ来たのも今日のライブで使用する道具らを取りに来るのも目的だったのだ。

「なんだかんだ、かすみちゃんが慎くんのライブを一番楽しみにしてるのかもね」

「そうでないところまで率先して準備はしないですからね」

彼方さんとしずくさんも言うようにメンバーの誰一人に一言も告げず、黙々と準備を進めているというのはそれだけ今日のライブを楽しみにしていた証拠だろう。

だが、かすみは絶対にそうとは言わない。慎のライブを楽しみにしてるなんて正直に言えるほど、かすみは素直ではない。きっと恥じらいや照れもあっただろうからそれをひた隠すためにこのような手を考えたのだろう。

「なら、素直にももの言えないお子様の為にも早く行ってやらねえと

な？」

「それを本人の前で言ったら、かすみ絶対怒るからやめてよね？」

如何にもおちよくる気全開の慎に俺は軽く警鐘を鳴らす。ライブ前から追いかけてここをして怪我でもされたら元も子もない。

「分かつてるさ。さすがに今日だけはこつちも勘弁したいし、それでもあいつを待たせるのは癪だからさっさと行こうぜ」

「うん。皆さんも大丈夫ですね？」

俺の確認に全員が頷いて答えてみせる。みんなの返事に満足した俺は我先にとかすみの元へと向かう。

「もう〜かぐ男遅い!! それに慎のすけも今日はあんたが主役なのにかすみよりも遅く準備してるってどういうつもりなのさ!」

全員で正門前へ移動するとかすみはその近くにあるベンチで荷物を揃えて腰を下ろしていた。相応の時間待たされたようで随分とお冠状態だった。

「ごめんごめん、まさかかすみが一番楽しみにしてると思わなくてびっくりしちゃったんだよ」

「べ、別にかすみんが楽しみにしてるわけじゃないじゃん! ただ慎のすけがダサイところを見せるんじゃないかって落ち着かなくなっただけだから!」

「あっはは、そういうことしておくよ」

「ぐぬぬ〜すました顔を見せないでよ〜!」

凶星を突かれたようにかすみはそっぽを向きながら慎への罵詈雑言をぶつける。しかし途端に口が回るかすみを見て、それが真実ではないとわかるのは造作もないことだった。

歯ぎしりしながらこちらをにらみつけてくるかすみを見て、慎が彼女へ近づいていく。

「慎?」

いつにもまして神妙な面持ちの慎に、俺は彼女につつかかるんじゃないかと心配してしまう。だが、慎は何も言わずにかすみの横に置いてある衣装やCDが入ったカバンを持つ。そして、かすみに対して嘲笑を浮かべた。

「……おいはかすかす! 一人で意地なんか張っても可愛くねえぞ!

さつさと準備して会場に行くんだから遅れんじゃねえぞ!!」

「きつ!! ばかすかす言うなああ!! しんのすけええええ!!」

逆鱗に触れる呼び方をされたかすみはすぐにアイドルがしてはいけないほどに眉間へしわが寄る。そして、煽りながらその場から走り去る慎になんとしてでも噛みついてやろうと本気で追いかける。追いかけてつこをしないと叫びながら結局繰り広げる二人に少し呆れてしまう。

「……もうあの二人は……」

「やっぱり慎くんも我慢できなかったみたいだね」

いつもの調子に戻る二人に思わずため息をついてしまうが、そんな俺の横でしずくさんも苦笑を浮かべる。

しかし、そんな中で侑さんはあっけらかんとしていた。

「でも、今の慎くんにはこれが一番緊張をほぐすのには最適なんじゃない?」

「そうね、慎くんがあそこまで騒げるのもかすみちゃんがいてこそだもの」

果林さんもその通りと相槌を打つ。

確かに俺や他の一年生組だと言葉を掛けることで気を紛らわせようとするがかすみは慎との距離がある意味で一番近い。悪ふざけができる関係性——無論、かすみはそんなことを望んではないが——としては彼女が一番最適なのだ。

「……まあ、一種の準備運動になっていいんですかね?」

「それでも、本番前に過度な疲労はダメですがね……」

そう言ってせつ菜さんはかすみと慎を諫めようと駆けだす。やはりこういう時はサブリーダーとしてせつ菜さんが動いてくれること

が解決に一番早く近づく。

「じゃあ、私たちも行くこうか。早くしないと三人に遅れちゃうよ！」

「あつ、待ってよ侑ちゃん！」

侑さんの後を付いていくように走り出す歩夢さん。他のメンバーもその後を各々のペースで追いかけるのだった。

会場に着くとそこには大会に参加する男性スクールアイドルを拝もうと女性のファンと思わしき人たちが闊歩していた。

「す、すごい人の数だね」

「ここにいる人たちが今日のライブの観客なんだよね……？」

「想像よりも多い。璃奈ちゃんボード『あわあわ』」

専用のうちわを作った人やスマホで今日の参加者を確認している人など千差万別だったが、共通してTMSのお客さんということが分かる。

俺としずくさんと璃奈はあまりのスケールの大きさに思わず息を？んでしまった。自分がステージに上がるわけではないがそれでも手が震えてくるような感覚を覚える。

「なんだか目に映る男の子がみんなステージに出るように見えてくるねえ〜」

「彼方さん、そんなことを言いながら僕を見るのはあんまりですよ？」

「ふっふっ、彼方ちゃんはいつでも楽しみにしてるよ〜？」

「一体何に期待してるんですか!?!」

君もスクールアイドルになるんだと言わんばかりの眼差しを向ける彼方さん。俺には慎ほど人を惹きつける魅力はないし、みんなを虜にする武器を持っているわけじゃない。俺ではスクールアイドルなど努められるわけがない。

「あつ、あそこにいるのはK O C H I さん!? それにあちらには日向漣ひゅうがれん、それにペイントネームさんもいるではないですか!!」

遠くにいる男性を見て、せつ菜さんはテンションが上がっている。どうやら今回参加するスクールアイドルグループのようだ。

「せつつー、男の子のスクールアイドルにも詳しいんだね?」

「当たり前です! スクールアイドルは性別を超えます! 彼らからも学べるものはたくさんありますので! それに女性のそれと売り出し方が基本的に違いますので、新しい発見があつてすごく新鮮な気分になりますよ?」

「ほくん、愛さんも男の子のスクールアイドルでどんな人がいるのか今度調べてみようかな?」

「ぜひ調べてみてください! ……つてああ~~~~!!」

矢継ぎ早に語るせつ菜さんが何かを見つけて途端に大きな声を上げた。顔を赤くしてアワアワとしているせつ菜さんの見る方角には6人組の男子高校生が歩いていた。

「あ、あれはDrawing Story!? リーダーの賀射がいは 刃を筆頭に組まれた男性スクールアイドルでも有名なグループです!」

「その名前、聞いたことある! ドロストつて、遊牙ゆうぎば 愛良あいら、山本照哉てらや、斉藤さいとう 京雅きょうが、龍元りゅうげん 大和やまと 今上いまがみ 月末つきみの6人組で歌やダンス、それに各メンバーの個性も相まって密かに人気を集めてるんだよね?」

侑さんもその名前を調べたことがあるのかグループの詳細について教えてくれる。確かに、端正な二枚目もいれば厳格な見た目で運動に優れた者、それに甘いマスクの青年、可愛いルックスの少年など全く毛色の異なるメンバーが揃っている。

『刃〜! いつものあれやつて〜!』

「あれはライブが始まってから。楽しみにしてくれているのはいいけど、本番までのお預けな?」

リーダーと思われる茶髪の青年の賀射さんはファンからの恒例のネタと思わしきものを振られるが、やる様子を見せない。

「さすが、刃さん。今日も今日とてお堅いですね〜?」

「なら代わりに俺が良いことをしてやろうか？ オラ……もつとこつち来いよっ。」

『ギャ〜〜!!』

賀射さんより少し背の低い優しい雰囲気、紫髪の男性が賀射さんを揶揄う中、青髪のツンツン頭の青年が先ほどの女子高生らにクールな声で煽りを入れる。

「ナンパしようとするな、てるてる坊主」

「おい、坊主は余計だろ？」

「愛良さん、あまり言わないであげて下さい。照哉さんも少し薄くなってるの気にしてるんですから」

「いや、薄くなってねえし微塵も気にしてねえわ」

ショートのお茶髪で筋肉質な愛良と呼ばれた青年と白髪のおかつぱで甘いルックスの青年が青髪の照哉さんを芸人さながらにイジっていく。

唐突に始まったコントに周囲の人々は笑いの渦に巻き込まれていくが、そんな中で金髪のミディアムヘアで眼鏡をかけた青年がそばをむいて苦言を呈していた。

「はあ……刃さん、僕らは今日漫才をしに来たんですっけ？」

「京雅、んなわけねえだろ。おいこんな所でセミ売ってねえでさっさと行くぞ」

「セミっ？」

「油でしょ？」

「アブラゼミかよ……」

その場を去りながら唐突なボケを繰り出す刃さん。そのボケは紫髪の青年にしか理解が追いついてなく、他のメンバーも呆気に取られていた。

ぶつくさ言いながらその場を後にするドロスト。彼らを追いかけてファンもいなくなってしまう、辺りは嵐が過ぎた後のように静寂に包まれていた。

「……すごく癖の強い人たちだったね」

「あの人たちがどんなパフォーマンスをするのか想像できないけど

……でも、油断は禁物だね」

彼らが人気に違わないレベルのスクールアイドルなのか疑ってしまいたくなる。だが、そうして招いた油断が自分の首を絞める。しずくさんは兜の緒を締めるように忠告を促す。

「果林ちゃん、さっきの人が言ってたセミを売るってどういう意味なの？」

「あれは『油を売る』という言葉の油をアブラゼミに変換したジョークよ」

「なるほど……愛ちゃんのダジャレとは違った面白さがあるね♪」

「確かにああいうジョークもありなら愛さんも練習しがいがあるかも！」

「いやそつちを極めなくていいですからね？」

刃さんのジョークで会話が弾むエマさん達に俺は失笑する。だが、それも束の間、すぐに慎の様子を窺う。彼らを見て慎が変な気を起こさなければ良いが。

「慎、大丈夫？」

「……当たり前だ。相手がどんなに有名だろうがそんなものは関係ねえ。俺は輝弥やみんながいてくれたおかげでステージに立てる。今更恐れるものなんかないさ」

これまでの練習が自信に繋がっているようで格上相手でも臆する様子を見せない慎。こういった時に見せる彼の勝気な性格は何よりも頼もしく見える。

「それを聞けて安心した。じゃあ、俺たちも会場入りして準備を始めましょう！」

俺の声かけに全員が頷く。

まもなく開催するTMS。来たるべき時に備えて全員で会場の中へ足を踏み入れるのだった。

奇妙な宿敵

TMS当日。会場に入るとそこには観客とスクールアイドルが入り混じっていた。会場内は女性のファンが多く溢れており各アイドルを囲う形でサインを求めたり歓声を上げていた。

「こういったスクールアイドルの大会は初めてだけど、男性のもでもこれだけの規模なんだ……」

「ほんと、スクールアイドルってどこまでも世界が広いな」

周囲で団子状態となってる人らを見て俺と慎はスクールアイドルの世界の広さを実感する。男性のアイドルはマイノリティだけれども、この人気ぶりを見るととても狭い世界とは思えなかった。

「確かに周囲のレベルは高いですが、心配することはありませんよ！今の慎さんは他の人に負けていないレベルのパフォーマンスができます！自分の力を信じましょう！」

「そうね。気持ちで負けていたら勝てるものも勝てないわ。それに貴方も動画で顔は見せてるんだし、応援してくれる子はいるはずよ？」

「そう思いたいですけどねえ……」

せつ菜さんと果林さんに尻を叩かれ、慎も渋々返事をするが自分と他のアイドル達とのオーラの違いに言葉が見つからない様子だ。

慎としてはこれが初めてのスクールアイドルのイベント。ましてやステージに立つことも今回が初となるのだ。練習は積みど本番は積んでいない。本番に挑んだ回数としては明らかに負けているからこそ他のアイドル達に気圧されてしまうのだ。

「……なあ、あれってニジガクじゃね?」

慎へのフォローの言葉を考えていると、遠くからうちの学校の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

声のする方へ顔を向けると、そこには紫髪の青年と青髪の青年がこちらを見てひそひそ話をしていた。

「あれは……さつき外にいた……」

「Drawing Storyの今上 月未さんと山本 照哉さんで

すね」

顔を見覚えがあつたので記憶を掘り起こそうとしたらせつ菜さんが答えを教えてくださいました。

「なあ月未さん。一緒に行つてサイン貰つてこないか？」

「いいねえ、俺もあの子らのファンだからぜひ貰いたいね」

「月未さんに照哉さん、二人してなに抜け駆けしようとしてるんですか。俺も混ぜてくださいよ！」

月未さんと照哉さんに突つかかる金髪の男性。確か、京雅と呼ばれていたはずだ。付いてくることに賛成の京雅さんを見て、月未さんが大きく声を上げる。

「よっしゃ、じゃあ時間もまだあるしさっさと貰いに行こうぜ！」

「何してるんですか、三人とも？」

こちらへ駆けだそうとした三人を引き留めたのは白髪をまとつた甘いルックスの青年、龍元 大和さんだった。大和さんに呼び止められた照哉さんが代表して言葉を返した。

「何つて、サインをもらいに行くんだよ。ほら、最近巷で話題の虹ヶ咲学園のスクールアイドルがここに集まつてるんだぜ？　ここで貰わずしていつ貰うんだよ？」

「ですが、僕たちは遊びに来ているわけではありませんよ？　刃さんも言つてたじゃないですか、今日はライブをしに来たんですから緊張感持たないと」

大和さんはリーダーである刃さんの事を第一に考えているようで彼の言葉を優先に行動するようだ。だが、そんな彼の忠告にも照哉さん達は噛みつきこうとする。

「でもよ、大和。そうは言つても変に緊張感を持ちすぎても良くないだろ？　程よく気も抜かないと疲れちまうぜ？」

「刃くんの言うことも分かるし、すぐに戻るからちよつとだけだし、いいでしょ。それに……」

大和さんの耳元で何かを囁く月未さん。それを聞いて大和さんは顔を赤くしたじろぐ様子を見せる。

「べ、別に僕はそんな……!!」

「だって目の前に歩夢ちゃんがいるわけだし……?」

「大和くん、一緒に沼へ落ちようぜ?」

照れる様子を見せる大和さんの肩を持つように固める月未さんと京雅さん。どうやら大和さんは歩夢さんのファンなようで一緒にサインをもらいに行こうと唆されている様だ。

「……なんなんでしょう、このやり取り」

「妙に気になっちゃって動こうにも動けないね……」

四人のやり取りを見て頭が痛くなる感覚を覚えていると、侑さんも苦笑しながらどうしようか頭を悩ませる。スクールアイドルとしてサインなどのファンサービスを欠かしたくないが、彼らのそれが本気か冗談か読み取れない以上、そのまま立ち去ってもいいものなのか憚られてしまう。

「おい、お前ら!」

全員で困り果てていると茶髪のみディアムな男性が橙髪の男性と一緒に四人を咎めに来た。その男性は言わずもがな Drawing Story のリーダー、賀射 刃さんだ。

「初対面の人らを困らせるんじゃないやねえよ。彼女らもお前らが邪魔で動けねえじゃねえか」

「刃くん、でも……」

「でも、じゃねえんだよ。月未さん、いつもは嗜める側のあんたがまさか悪ノリ組に参加するなんてな」

「だって、俺がスクールアイドルを始めるきっかけになった虹ヶ咲学園の子たちがいるんだよ? それこそ彼方ちゃんが東雲学園にいたころから応援してたんだから、せつかくなら挨拶でもさせてよ!」

「おく? なんだか彼方ちゃんがお呼ばれされちゃったぞ?」

月未さんの推しが唐突に暴露され、彼方さんも驚きの声を上げる。だが、そんなことよりも俺は月未さんが発した言動の方に気が行ってしまう。

「……彼方さんって東雲学園にいたんですか?」

「そうだよ。元々はそっちでスクールアイドルをやってたけど、家の事もあつてこっちに転校してきたんだよ」

確かに、虹ヶ咲学園には特待生制度というものがあり、相応の成績を有していれば学費支援が受けられる。彼方さんがまさかそこまで優等生だったとは露知らず、なんとも失礼なことを考えてしまっていた。

「そろそろライブ抽選が始まるって言ってるだろ。時間に遅れることはしたくねえんだ」

「いつも思うけど、刃くんって堅すぎるよね?」

「確かに堅い。それはまさしくイチモ——」

「照哉、しばくぞ?」

俺たちをそっちのけで、先ほど会場の外でやっていたようなやり取りを繰り返すドロストのメンバーたち。一瞬、爆弾発言が飛びかけたが刃さんがいち早く察知し事なきを得ていた。

メンバーの珍事のため息を漏らす刃さんは思い出したかのようにこちらへ振り向き、挨拶を交わしてくれる。

「虹ヶ咲学園の皆さん。こんな下らないやり取りを見せてしまい申し訳ない」

「いえっ、気にしないでください。むしろ動画で見ているいつもの皆さんで安心しました!」

(……あの会話が日常的に交わされてるの……??)

非礼を詫びる刃さんにせつ菜さんは代表して気にしていない旨を伝える。だが、これまでのやり取りが日常茶飯事で行われていることに俺は内心驚きを隠せなかった。

そんなことを思っていると刃さんはせつ菜さんの言葉を聞いて安堵の表情を浮かべる。

「そう言ってもらえるなら安心だ。改めて、俺たちは吹笛学園すいてきのスクールアイドル、Drawing Story。そして、俺はリーダーの賀射 刃だ」

「は、初めまして……!」

メンバーを冷たくあしらっていた態度から一変し、急に温和な雰囲気醸し出す刃さんに俺は緊張が走ってしまう。手慣れている人ならば即座に空気を変えることを造作もないのだろうか。

「優木せつ菜さんに俺たちを知ってもらえてるなんて光栄な限りだ。うちのメンバーは皆さんの一ファンなので、喜びを隠せなかった。どうか許してやってほしい」

「そりゃあ、あのせつ菜ちゃんに認知してもらえてるのならそれに勝る喜びはないですよ？ なんなら今死んでも悔いはないですわ」

「じゃあ、後で安らかに眠らせてやるから今は黙ってるな？」

後ろで照哉さんが冗談を交えつつ嬉しさを露わにするが、刃さんは彼の方を振り向きもせず、先ほどの言動を許していないのか命に関わる発言をぶつける。

「ひ、ひどい……」

「まあ、これが照哉だから仕方ないね」

照哉さんが体操座りで咽び泣いているが、月未さんは投げやりでありそれに加えて誰一人として彼を心配する様子を見せない。彼らは本当にこのようなやり取りをずっと繰り返しているのか。

「それよりも、今日貴女方がここに来たのは……彼らの応援、ですか？」

そう言っただけ刃さんは俺と慎を見つめる。温和な雰囲気だけれども妙に視線が品定めしているように見えてしまうのは俺が警戒しすぎなのだろうか。

「いや、僕は違います。あくまで皆さんのマネージャーですので、この大会では慎が参加します」

「そうだったんだ。君もアイドル向きな雰囲気があったから、勘違いして悪かったね」

この人、自分の非はしっかり自覚するし他人を持ち上げるのがすごく上手だ。きつと実力のみでなくこういった気配りも出来るからこそリーダーとしては勿論、チームとしてもレベルが高いのだと改めて分かる。

「鈴木くんは以前に動画で拝見したけど、今回が初ステージだね？」

君がどんなパフォーマンスをするのか楽しみにしてるよ」

刃さんはそう言って少し目を細める。やはり慎のことも自己紹介PVで知っているようだ。実力者からこのように目を付けられるの

は妙な圧力を掛けられていると錯覚し精神面に影響を与える恐れがある。

「へっ、そうやって余裕垂れているのも今のうちですよ？ 俺は負けつつもりなんか一切ないの？」

だが、そんなプレッシャーにも近い応援の言葉を掛けられる慎は臆するどころか好戦的に笑みを浮かべた。刃さんを挑発するような口ぶりに、彼の隣で無言を貫いていた遊牙 愛羅さんが怒りの感情を露わにしながら口を開いた。

「……てめえ、刃さんに向かってどの口を——」

「よせっ、愛羅」

慎へ突っかかろうとする愛羅さんを制止する刃さん。微笑みながら語るその顔には慎の煽りなど一切気に留めていないようだった。彼の制止で愛羅さんが我を抑えたのを確認すると刃さんは慎へ向き直る。

「その威勢や良し。勝負である以上、我々も本気でぶつからせてもらう。お互いにベストを尽くそう」

慎の表情につられるように刃さんも好戦的な表情になる。そして、互いの健闘を祈ると180度振り返り、大会本部が設置されているステージへ歩きはじめる。

「月未さん、照哉、愛羅、京雅、大和。まもなく俺たちの抽選の時間だ。行くぞ」

大会本部ではライブを行う順番を決める抽選が行われている。ドロストはまもなく時間が迫っているようで、そちらへ向かうようだった。

「はあっ、まあサインは後で貰うかあ……」

「それではまた後でね、虹ヶ咲学園の皆さん」

「……………」

刃さんの呼びかけにより次々と彼の後ろをついていくメンバーたち。照哉さんは後頭部に手を置きながら小言を呟く一方、月未さんはこちらへ手を振りながら別れの挨拶を述べる。愛羅さんは自身のリーダーである刃さんを挑発した慎に蛇をも殺すような目つきで睨

みつけた後、すぐにメンバーの後ろをそそくさと追いかける。

「……行っちゃった」

「なんだか嵐のような人たちだったね？」

途端に静寂が訪れる中で侑さんと歩夢さんが口を開く。この場をかき乱せるだけかき乱し、ドロストの個性の強さを見せつけられたような感覚だった。

「ふむ、確かに男性スクールアイドルの中でトップクラスの人気を誇るだけありますねえ〜？」

「あの刃つて人、メンバーの扱いは冷たかったけど、それでもあの人の周りは温かな雰囲気があった」

「そうだね。他の皆さんの雰囲気を見ると、あの人にはチームを引っ張る適正が備わってるんだなってすごく伝わってくるもんね」

かすみ、璃奈、しずくさんも初めて見るであろうドロストに抱いた感想を吐露する。特に、メンバー一人一人の個性は強いけれどもそれらを纏め、主格として立っている刃さんはただならぬオーラをまとっていた。

「おいおい、みんなが弱気になってどうするんだよ？ 俺はああいう奴の出鼻を挫きたくなるから、この状況は俄然燃えるってもんだ」

「慎……」

彼らの雰囲気呑まれ空気が重くなるのをいち早く察した慎はすぐに明るい声色でメンバー全員へ呼びかける。ドロストを倒す、と息巻いている慎が本心で語っているのか虚勢を張っているのか読み取ることが出来なかったが彼の言い分は尤もだ。

ステージに立つのは慎一人だけだ。俺たちが不安な様子を見せていれば、それは少なからず慎へ影響をもたらす。ならばここでやることは彼らへの畏怖ではなく慎やみんなを鼓舞することだ。

「慎の言う通りです。俺たちがあの人らに呑まれていては仕方ありません。慎が彼らに勝てるように最終調整を行っていきましょう！」

俺の言葉にメンバーらも笑顔を取り戻し頷く姿を見せる。そして、会場内で行われる抽選や最終リハーサルに向けて全員で準備に取り掛かるのだった。

「ひとまず、本番に向けての最終調整は大丈夫だね」

本部での手続きやライブ前のリハーサルを終えた俺たちは専用で用意されていた楽屋で休憩を取っていた。パフォーマンスや演出は熟考を重ねていたおかげもあつて相当な完成度になっていると自負している。

「ああ、ここからは他のアイドルのライブを見させてもらうさ」

慎も過度な練習を行うつもりはなく、一観客としてこの大会を楽しむつもりでいるようだ。だが、この大会は初っ端からその楽しむ心を忘れさせてしまいそうな状況を作っていた。

「慎くんの出番は一番最後……。そして、まさかDrawing Storyがスタートを担当することになるとはね……」

侑さんがライブ抽選の結果について口にする。そう、この抽選でドロストはハナを担当することになったのだ。この大会の優勝候補と言われており絶大な人気を有する彼らがハナを務めるということはお客さん達は彼らのパフォーマンスを基準にその後続くグループを見ていくことになる。

彼らが人気なものそのライブの完成度の高さ故もあるだろう。まだ彼らを知らない人たちにも相応のインパクトを与えることになるはずだ。その状態でドロストに続くグループが彼らを超えるには彼ら以上のパフォーマンスを見せなければいけない。

慎はその反対で大トリを務めることになっている。彼らのパフォーマンスから時間が経ち、ライブの最後ということもあつてお客さんの気持ちも「次が最後か」とそれまでに登壇したグループよりは脚光を浴びることになるはずだ。しかし、より注目を浴びることになるからこそ慎に降りかかるプレッシャーも大きくなるということだ。

「そうですけど、沢山の人に見てもらえるせつかくの機会です。これ

は逆にチャンスとして捉えないと」

不安な様子の侑さんに慎は笑みを浮かべながら強気な発言をする。それを聞いて果林さんが発破をかける。

「そうね。確かに他のグループよりも大変ではあるけど、これを持ち切れないようなら今後に活かしていくことは難しくなるわ」

「慎さんは初めてのライブとなりますが、一番最初からこのような大役で出られることはまたとない機会です。是非ここを乗り切って、今後の糧としましょう！」

せつ菜さんの言う通り、スクールアイドル生活を送る中で大トリを飾れることはそう頻度の高いことではない。恐らくこのような対バンイベントで一番緊張が増す立ち位置は大トリだろう。それをアイドル始めた頃の頃から担当させてもらえるのは有り難いことだ。

「慎くんの番まではまだ時間もあるしひとまず会場に行って他の人たちのライブを見に行こうよ！」

「そろそろDrawing Storyの皆さんのライブも始まりますからね」

エマさんがライブを見に行くことに意欲を示す。しずくさんも一人の観客としてこのライブを楽しみにしているようだった。

「そうだね。とりあえず今はあの人たちのライブを見ていきましよう。慎もいいよね？」

「ああ、準備はバッチリだ。早く会場に行って敵情視察と行こうぜ」

こうして、俺たちは楽屋での休憩を終え会場内の観客席へと足を運ぶのだった。

「す、すごい人の数だ……！」

観客席に到着し、会場内を埋め尽くすペンライトの数に思わず圧倒される。

観客席と言ったものの余計な混乱を避けるためにスクールアイドルとその関係者らは、関係者席という観客席とは違う場所から観覧することになっている。

大きな体育館の観客席全てが埋まっているように見え、それだけでも動員数はざっと千人近くはいるだろう。

「そ、想像よりもスケールがでかい……」

「こ、こんな大勢の中で歌えるなんて、シンシンすごいよー!」

予想よりも人がごった返している様子に目を見開いて驚きの表情を示す璃奈。愛さんも大きすぎる規模に圧倒されていたが、すぐに慎を励ます様子を見せる。

だが、今の慎には彼女の言葉は届いていなかった。

「……………」

観客席を見て唾を飲み込む慎。初めてアイドルとして立つステージに畏怖の念が過ったのかもしれない。その顔からは笑顔は消えており、怯えるようにも見えるその表情からは先ほどの威勢が無くなっていた。

「………慎?」

「へっ? あっ、悪い輝弥。何か言ったか?」

「いや、慎が堅くなってたから大丈夫かなって思っただけ」

「まあ、思ったよりはでかい場所だったけど、別になんともないさ!

ビビるのも、今だけだ……。ステージに立つ頃には……」

俺の問いかけに息巻いて答えて見せたが、すぐにその覇気は無くなる。心なしか構えたガッツポーズも震えている様に見える。

「慎……あの——」

慎を励まそうと思った時、会場の照明が一齐に落ちた。それと同時に会場内のボルテージが上がる。ライブ幕開けの合図だ。

ステージの中央に歩いてくる影が6つ。その正体が誰かは言わずもがなわかっている。

アイドル達の姿にますます黄色い声援が上がる観客たち。そして、その声を静止するように刃さんの声が響いた。

「どうもー!! 俺たち……」

『夢を描き』

『物語を紡ぐ』

「6人の未来を引き寄せる」

『We Are Drawing Story!!』

決め台詞を言い放つと観客の歓声が大きくなる。各々が推しであるメンバーの名前を喉が枯れるほどに叫んでいる。その様を見るだけでドロストの人気の高さがそんじよそこらのグループとは一線を画すレベルだとよくわかる。

「今日は待ちに待ったトップ・オブ・ザ・メンズ・スクールアイドルだ！」

「この日のために僕たちはたくさん準備をしてきました！」

「応援してくれるみんなのために最高のパフォーマンスをお届けするよー！」

照哉さんを皮切りに大和さん、月未さんが続く。

「俺たちが口火を切るわけだが……遅れる奴はいねえよなあ!？」

「最初からぶちかましていきましょー！」

愛羅さんと京雅さんの煽りでお客さん達は大声で返事をする。そして、ステージ上のメンバーたちの視線が刃さんへ集まる。刃さんは目を閉じながらマイクを持って口を開く。

「俺たちの夢はこんなところで終わらない。みんながいる限り、俺たちの夢は続く」

淡々と語る刃さんは大きく開眼し口元を緩める。

「お前ら、最高の物語をここに刻むぞ!!!」

そう言つて刃さんはメンバーらを見渡す。全員が頷くと一斉に顔を下げる。

「——人生山あり谷ありだけど——」

「——その中で見つけた愛を——」

「——一つ一つ君と育みたい——」

「——今日が忘れられないように——」

「——俺たちがあなたたちを照る光になる——」

「——皆がいることで俺たちがいる——」

一人一人が顔を上げながら自分の名前を織り込んだフレーズをつなげていく。刃さんが最後を担当すると全員が天井を指さしながら大きく声を張り上げた。

『Drawing Story、ライブスタート!!』

掛け声と同時に舞台装置のクラツカーが大きく音を上げる。鳴りやむことを知らなかった観客のボルテージは最高潮に達する。

こうして彼らのライブ開始の合図と共にTMSの火蓋が切られるのだった。

絆という僕らの証

Drawing Storyのライブ、それはこれまで見てきたライブとは一線を画すものだった。曲が流れた瞬間の彼らの空気の変わり方。彼らだからこそ成せる聴き心地の良い歌声とハーモニー。ライブ中の観客のコールの大きさ。今までで見てきたものとはレベルに大差があつた。

リーダーである刃さんはその主格たるに相応しい歌声やダンス能力を有しており、愛羅さんはその寡黙な雰囲気とは裏腹の優しい歌声が凄く特徴的だ。月未さんは歌やダンスはさることながら率先して観客に煽りを入れライブの一体感を生み出させており、照哉さんは先ほどのおちゃらけた雰囲気とは異なるキレの良いダンスでチームを引っ張っている。京雅さんはメンバーの声に合わせて甘いルックスを活かしたファンサービスが観客の心を射抜いている。

この6人、個性はバラバラだけれどもそれぞれの強みを理解しておりそれを十二分に発揮している。Drawing Storyが如何にして人気を集めているのか、その全てがこのライブに詰まっていた。

「……す、すごい」

「ここまでのレベルなんて……」

彼らのレベルの高さにメンバー全員が呆気に取られている中、俺は必死に声を絞り出ししずくさんもそれに返事をしてくれる。

「動画で彼らの完成度の高さは把握していましたが、やはり生で見ると迫力が違いますね……」

「あの人たち、かっこいいね……!!」

せつ菜さんも実際のライブを見たことはなかったようで、隣で見ていたエマさんと一緒に彼らのパフォーマンスに魅了されていた。

「この前のりなりーのライブも良かったけど、正直それを超えてるよね……!?!」

「うん。レベルが全然違う」

これまでのニジガクのライブの中で一番の完成度を誇っていた璃奈のライブも、彼らと観客の盛り上がり様を見ると雲泥の差のように思えてしまう。ステージに上がった璃奈と彼女を誰よりも近くで支えていた愛さんが言うのだから間違いない。

「……慎、大丈夫？」

「……………」

彼らのステージを見て意気消沈していないか不安に思い、慎に声を掛けたが無言で彼らを凝視しているのみだった。こちらの話を聞いていない様子の慎に先ほどよりも大きめの声で呼びかける。

「………慎！」

「うあ!?! き、急にどうしたんだよ?」

「どうしたも何も慎が突然ダンマリしちやったから心配になったんだよ」

「あつ………そうか、悪いな。声を掛けてくれたことに全然気づかなかった」

俺が無視されたことに憤慨していると勘違いする慎。だが、俺もそこまで怒っているわけではないとすぐさまフォローを入れる。

「いや、怒ってるわけじゃないよ。それよりも、いよいよライブが始まった。あの人たちにも、その他のスクールアイドルにも負けない様に頑張ろ?」

「……………ああ」

慎は俯く様子を見せながら俺へ言葉を返す。

不穏な空気が関係者席内に漂う中、ドロストの歌とそれに熱狂する観客たちの声がやけに大きなボリュームで聞こえるのだった。

ついに火蓋が切って落とされたTMS。Drawing Storyを皮切りに次々とスクールアイドルグループがライブを行って

いく。

どのグループも高い完成度を有しており見ていて楽しいものだが、それでもハナを務めた彼らの足元には及ばない。それだけはすぐに理解できてしまった。

観客の歓声もドロストの時と今とでは明確に違う。大いに盛り上がっているのだが、それでも熱量が段違いだったのだ。男性スクールアイドル界の先頭を走っていると言っても過言ではない彼らを超えることはそう簡単なことではない。

「……慎くん、大丈夫かな……」

TMSが行われている中、俺はしずくさんと一緒に飲み物を買おうと自動販売機へ向かっていた。会場の廊下に設置されているため、一度席から離れなくてはいけなかったのだ。

自動販売機まで向かっている途中、しずくさんがポロツと不安を吐露した。

「刃さん達のライブ、すごかったもんね。慎は負けてないと……思いたいけど……」

今日の慎のライブに向けて、同好会総出で血のにじむような練習を重ねてきた。慎と想いを共有し、曲も熟考してきた。文句なしの完成度を誇っていると自信を持ちたいが、初めて見る男性スクールアイドルの世界を見て、そのレベルの高さに愕然としてしまったのだ。少数派な世界と言えどもその実力は生半可なものではないと痛感している。

「慎くんなんて声を掛けてあげればいいんだろう……」

「それは……」

しずくさんの問いに俺は言葉を噤んでしまう。簡単な励ましの言葉では彼を勇気づけることはできない。同情の言葉を掛けても舞台に上がる彼に対して何の解決策にはならない。

「……あらっ？ 輝弥？」

腕を組みながらうーんと唸っていると対面から俺を呼びかける声が聞こえた。

「えっ？ 姉さん!?!」

「えっ……この人、輝弥くんのお姉さんなの!？」

そこには私服姿の姉さんがおり、会場内の物販で買ったであろうペンライトの入った袋を手に持っていた。

「もう、何をそんなに驚いてるの？ 朝にライブを見に行くって話したばかりじゃない」

「そ、そうだけどもまさかここで鉢合わせることになるなんて思わなかったから……」

一般客の観覧席に入れるところまで歩いていたのでぼったり居合わせるなんてこともおかしなことではない。しかし、それでも早速遭遇することになるとは誰も想像できないものだ。

「それで、そちらが輝弥くんと同じ同好会の子？」

「は、はい！ 桜坂しずくと申します！」

「……桜坂？」

姉さんからの視線を受け、しずくさんは自己紹介をする。だが、姉さんは彼女の名前を聞いて疑問を抱いている様子だった。

「ねえ、貴女って演劇部に所属していたわよね？」

「そ、そうですが……。あれ？ お姉さんもどこかで見た覚えが……」

「ふふっ、やっぱり。私は巴 珠緒。別の学校で演劇同好会の部長を務めています」

「……はっ！ もしかして、あの新撰組の舞台を披露した同好会の子!？」

姉さんの名前を聞いて、しずくさんは口を覆いながら目を見開いて驚きの表情を浮かべる。姉さんとしずくさん、どうやら演劇部の関係でお互いに名前を知っているようだった。

「姉さん、しずくさんの事知ってるんだ？」

「ええ。虹ヶ咲学園の部長さんとは面識があってね。部活交流でこちらに来てくれた際にすごく熱心な一年生が入部してくれたって話してたわ」

「確かに、その時はスクールアイドルの件もあって合同練習はお休みしてしまったので顔を合わせる機会がなかったですから。私も珠緒さんのことは、中学の頃に舞台上で拝見して凛々しく振舞う立ち姿が美しくて本当に見惚れてしまったのを覚えています！」

姉さんは演劇部の部長さんから、しずくさんは姉さんの舞台を実際に見て存在を認識しているようだった。まさか、既にお互いの事を知っているとは思わず、世間は狭いことを痛感する。

「ありがとう。桜坂さんとはいずれ会ってみたいと思っていたからこうして巡り会えて嬉しいわ」

「私もです！　こうしてお会いできた珠緒さんがすごく穏やかな雰囲気の方で……舞台上で土方歳三を演じていたことが少し信じられなくなってしまう」

俺も当時の姉さんの舞台は見たことがある。豪邁不屈と謳われた土方歳三と羞花閉月な姉さん。性格が正反対であるにも関わらず完璧に土方を演じきった姿は今でも覚えている。鋭い声で隊員に喝を入れたり、雄々しく敵軍へ啖呵を切る姿は普段の彼女からは想像がつかない。

「ふふっ、そこまで言われちゃうと照れるわね。今度、また時間があるときにゆっくりお話ししましょう？」

「あつ、そうですね。すみません、せっかくライブに来られたのに……」

「いいわよ、気にしないで。それと……輝弥、浮かない顔をしていたけどどうかしたの？」

しずくさんとの談話を一区切りして姉さんは俺の様子を窺う。どうやら先ほどのしずくさんとのやり取りを目撃されていたようで妙な顔をしていたのが気にかかっているようだ。

「実は慎になんて声を掛けてあげればいいのかわからなくて……。これまでステージに上がったスクールアイドル達はみんなレベルが高くて……慎が負けることはないと思ってるんだけど、いつもの覇気がないというか……」

俺はDrawing Storyのライブを見てからの慎について状況を説明する。慎は彼らを前にしても臆することなく威勢を張っていたが、それも今では鳴りを潜めてしまっている。どんな逆境に立とうとも慎が声を上げてくれればそれだけで心を奮い立たせてくれたのだが、その慎が普段のそれではないのだ。

「……なんだか慎くんの気持ち、私にも分かるわ」

「えっ?」

話すことが見つからず、頭を悩ませていたところに姉さんが口を挟む。慎の気持ちが変わるといえるということがどういう意味なのか俺にはわからなかった。

「私も初めて新撰組の座長を務めると決まった時、最初は何も不安に思うことはなかったわ。むしろせっかくリーダーとして演劇同好会を引っ張ることになるのだから、この公演もよりよいものにしていきたいと気合も入っていた」

「あの時の舞台で……?」

「ええ。でも、日に日に公演の時間が近づいていくにつれて不安にも駆られるようになったわ。これで大丈夫なのか、本当に私が座長を務めてこの舞台は成功していくのか、理由のない恐怖が身体を襲ってきた」

姉さんは両手を胸に当てながら当時の心境を吐露する。昔から姉さんは弱気なところを見せてこなかったからこそ、こういった話を聞くのは初めてだった。

「でも、そんな時に助けてくれたのは貴方だったの」

「俺が……?」

「そう、輝弥が舞台を見に来てくれるって言うてくれたことが私にとっては何より力になった。貴方の前で不甲斐ないところを見せたくない、貴方の前でだけはかっこいい姉でありたいって」

俺は自分が姉さんの力になっていた事実が受け入れられなく、姉さんの話を聞いて呆然としていた。しかし、そんな俺の様子を気に留めることもなく姉さんは続ける。

「それと、これまでの私にとって一番の勇気となっていたのは……これよ」

そう言うって姉さんが指を差したのは自分のストレートな長髪にアークセントを与えている赤いリボンの髪留めだった。

「それって、俺が姉さんの誕生日にプレゼントであげた……」

「そう。この髪留めがあることで貴方がそばにいてくれると安心感

を与えてくれるの。私は独りで舞台に立っているわけではないと教えてくれるのよ」

「……！」

姉さんの言葉を聞いて、俺はハツとする。今の慎に足りていないたった一つの大切なものをまだ渡せていなかった。姉さんが俺の些細なプレゼントを大切に使っているように、慎にとってもこれは何物にも代えがたい大切な物なのだ。

「その様子だと、あれはまだ渡せてないみたいね」

「……なかなか渡すタイミングが見つからなくて迷ってたんだけど……でも、今見つかった。姉さん、ありがとう」

「そう思うのなら、早くあの子の元へ行つてあげなさい。今の慎くんにとってそれが一番必要なはずよ」

「分かった。行こう、しずくさん！」

「ああ、ちよつと輝弥くん!？」

善は急げとばかりにしずくさんの手を握つて、俺は来た道を引き返す。行く先は一つだけ。一人で不安になっているであろう友人へ衣装を完成させる最後のアイテムを渡すために俺は廊下を駆けるのだった。

急いで関係者席に戻ると璃奈とかすみがちちらへ振り向く。

「あ、輝弥くん」

「璃奈、慎はどこにいる？」

「慎のすけなら衣装に着替えてくるって言って楽屋へ行つたよ。全く、まだ他のスクールアイドルがライブを披露してるって言うのに気が早いなあ〜！」

慎の出番まではまだ時間がある。それなのに衣装へ着替えるということはそれだけ彼自身、居ても立っても居られない状態ということだろう。

「……やっぱり慎くんは……」

「うん、だいぶプレッシャーに圧されてる状態だね」

「えく？ ドロストを相手にあんなに威張ってたのに？」

「彼らのライブを見る前と見た後じゃ、状況はまるで違うよ。俺は慎の様子を見てくる」

彼女らにそう告げて、すぐに関係者席を立ち去ろうとしたが部屋を出る直前に璃奈が声を掛けてくる。

「輝弥くん」

「ん？」

「慎くんのこと、お願い。今の私たちじゃ、慎くんは何を言っても届かないと思うから」

「うん、今頼りになるのは輝弥くんだけだから……いつも任せっきりにしてごめんね？」

璃奈としくさんが俺に想いを託してくれる横でかすみは気恥ずかしいのか腕を組んでぶいっとそっぽを向いている。だが、そんなかすみの反応だけで彼女がどのような想いを抱いているのか瞬時に理解できる。

「大丈夫だよ。俺は慎の相棒だから、こういう時にこそ相棒が横で支えてあげないとね」

首を縦に振りながら彼女らに答えるとしくさん達も頬を緩める。しくさん達のエールを背に受けながら、俺は楽屋へと向かっていくのだった。

「慎、いゝねっ」

慎の着替え用として設けられた楽屋へ到着した俺は扉を数回ノックして部屋の主の返事を待つ。しかし、待てど待てど返ってくるのは沈黙だけだった。

このまま突っ立っているのは時間が勿体ないと俺はゆっくり扉を開ける。

「慎……う？」

部屋の中はもぬけの殻で慎がいる様子はなかった。一体どこで油を売っているのかと思った矢先、楽屋内に設けられた試着室が使用されていることが見て取れた。慎の靴も試着室の入り口に置いてあることから、彼がここにいることは明白だった。

「慎？」

「ん、輝弥か。どうかしたか？」

「慎がもう衣装に着替えてるって聞いてね、衣装はどんな感じ？」

「ああ、ちよつと待ってる」

そうすると慎はカーテンを開け衣装姿を見せてきた。

黒をベースのロングコートに紅いマントが右肩のみに掛かっており、まるで軍服を思わせるような印象を与える。また全体的にスラッと細い線をしている慎の体格も衣装のおかげでよりスタイルの良さを助長させていた。

慎のビジュアルとバッチリ合っている衣装を見て、俺も感嘆の声を漏らす。

「うん、すごく似合ってるよ。やっぱり歩夢さん達に任せて正解だったね」

「……まるで自分じゃねえみたいだ、本当に俺もスクールアイドルの一人なんだって実感しちまうな」

慎は照れを隠せないのか頬を指で掻く仕草を見せる。普段の頼もしさから一転して照れ屋な姿を見せる慎はとても貴重であり、これも良いギャップだと思う。

「でも、それじゃあまだ足りないね」

「ど、どういふことだよ？」

「慎の衣装を完成させるために必要なアイテムがあるんだよ。これが

無くちや慎は負けちやうから」

俺はそう言つて胸ポケットからあるアクセサリーを取り出す。慎がその正体を知るのはその時間を必要なことではなかった。

「それって……!?!」

「この前、慎を探してた時にお台場で落ちてるのを見つけたんだ。首に掛ける紐がボロボロになってたけど、姉さんが直してくれたんだよ」

俺が姉さんをお願いしたもの、それは慎が真結ちゃんから貰ったアクセサリーを直してほしいというものだ。宝石部に損傷が入っていないことが唯一の僥倖であり、紐ならば容易に直せるということ姉さんに協力を仰いだのだ。

「珠緒さんも……」

「慎は一人でこの舞台に立つけど、そこに掛ける思いは慎一人のものじゃない。ここには真結ちゃんの願いも込められてる」

手のひらにペンダントを乗せながら慎に訴えかける。彼も手に乗ってるペンダントを凝視しながら固まって動かなかつた。

「これは慎だけの初ライブじゃない。真結ちゃんの想いも乗ってる二人の初ライブなんだ。だから、真結ちゃんも一緒に連れて行ってよ」
「輝弥……」

「Drawing Storyのライブに圧倒されて不安になってたと思うけど、大丈夫。今の慎には真結ちゃんがいる。このペンダントは二人をつなぐ絆の証でしょ?」

「……………」

ペンダントを慎の手の中に収めながら両手で握る。最初は慎は驚く様子を見せていたが、俺の言葉を聞いていつものように笑みを浮かべる。

「つたく、本当にお前には敵わねえな」

「慎……」

「正直、こいつが無いとわかってからは不安だったんだ。いつもは傍で見守ってくれた真結がどこかへ行っちゃったような感覚を覚えちゃまって、虚勢を張つてごまかすしか俺にはできなかつた」

慎はペンダントをまじまじと見つめながら自身の胸中を語る。彼の言葉を聞いてもつと早く渡せられればと少し歯がゆさを感じてしまう自分もいる。

「でも、お前がこれを見つけてくれて……珠緒さんもわざわざ直してくれて……本当に感謝しかねえ。本当にありがとう……」

慎はそう言つて深々と頭を下げる。ここまで慎が本気で感謝の言葉を述べるのは非常に珍しいことだ。それだけこのペンダントが見つかったことは彼にとって大きいことなのだろう。

「こいつがあれば俺はなんだつてやれる。もう何も怖くなんかないさ」

俺から受け取ったペンダントを首に掛けながら慎は自信満々にそう語る。これまでの弱気だった姿が嘘のようだった。

「よし、なら最後の調整に入ろうか。大トリを派手に飾ろう」
「ああー！」

その意気込みが空回りとならないように、確かな自信へと変えるべく俺たちは最後の練習をしようと専用のリハーサル場へと向かうのだった。

「あつ、輝弥くん、おかえり！」

最後の調整を終え、TMSもいよいよ大詰めを迎えていた。関係者席に戻ると全員が席に座つてステージ上を見つめていた。だが、Drawing Storyのライブを見終わった後のような緊迫感は薄れており同好会内の空気はどこか穏やかな雰囲気だった。

「ただいま、しずくさん。さつきと空気が変わらない？」

「輝弥くんになら慎くんを任せても大丈夫だと思って、私たちは今後

の為にも今行われているライブをしつかりと研究しようって話にしたんだ」

「俺への信用が大きすぎない?」

「それだけ輝弥くんは頼りになるってこと。璃奈ちゃんボード『ブイ』」

席に着きながらしずくさんと璃奈から賛辞の言葉を投げられる。これまでが頼りにならなかったからこそ今があるだけであり、今回でやっとマネージャーとして一人前になったのではないだろうかと考える自分がいる。

「それで? 慎のすけはもう大丈夫なんだよね?」

「うん、もう慎は大丈夫。さっきまで最後の調整をしてきたし今まで最高のパフォーマンスを見られるんじゃないかな」

「はあ、まったく慎のすけってばこんな時までそっかしいんだから」

かすみは大きくため息をつきながら、慎の頼りなさに文句を言う。だが、彼女がこうやって威張ってる時は大抵ある特徴が隠されている。

「そんなこと言ってるけど、ここで待ってる時はかすみさんが一番心配してたじゃん」

「べ、別にそんなことないし! しず子は余計なことを言わないでよ〜!」

「でもそれは事実。かすみちゃんが一番落ち着いてなかった」

「り、りな子までえ〜!」

しずくさんと璃奈も同じことを考えていたようで、間髪を容れずに指摘する。かすみは慎について大っぴらに文句を言うときは大抵彼女自身が誰よりも慎を心配しているのだ。かすみとしてはそんなことを慎に知られたらなんといじられるか分かったもんじやないからひた隠しにしているが、彼女も嘘がつけないタイプだからすぐにわかってしまう。

「かすみ、安心して。もう慎を脅かすものはないから」

「そっかあ……って、だから心配してないってば〜!」

俺もしずくさん達のノリに合わせようと少し小細工を施す。かすみはまんまと引つかかってくれるので本当にいじり甲斐があるというものだ。

横でかすみがぶんぷんと怒ってる中、俺のスマホがメッセージを来たことを知らせるべくバイブレーションがなっていた。

『慎くんは大丈夫そう?』

スマホを見ると送り主は姉さんで慎のことを心配してくれているようだった。

『うん、あと少しで最高にかっこいい慎が見れるから楽しみにしててよ』

『ええ。私も演劇同好会のメンバーと一緒に応援してるわ』

「……なんだかんだで、姉さんが一番このライブを楽しみにしてるのかもな……」

姉さんとのやり取りを見ながら俺はふとそう呟く。広い観客席の中に姉さんとその一行もいると思うと不思議な気分だ。姉さんがアイドルのライブを見に来るなんて正直あまり想像できなかった。これも俺が新しい世界に飛び込んだ結果なのだろう。そう思うと少しむず痒くなってくる。

そんなことを考えていると、会場全体の照明が落ちる。直前まで出番だったスクールアイドルのライブは終了し、次はいよいよトリを飾る慎の番だ。

『さあ皆さま〜! ここまで大いに盛り上がったTMSも次が最後となりま〜す! このイベントのトリを飾るのは、なんとスクールアイドルとしてデビューしてから初のステージとなる虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会の期待の新人、鈴川慎だ〜!!』

MCの紹介により、慎に対しての歓声はさらに大きく上がる。ここにいる人のうち、慎の自己紹介動画を見てくれている人は少ないだろう。でも、これまでのアイドル達のおかげで場のボルテージは最高潮に達しており、ここまで整えられた舞台はそうそう無いだろう。

「いよいよ慎くんの番だね……!」

「うん。……がんばれよ、慎……」

そう言つて俺は両手を握り、慎の健闘を祈る。

そして、慎が紅い軍服にも見て取れる衣装を身に纏いながらステージ上に姿を現す。彼が壇上上がったことで会場は慎へのエールに包まれる。初めてのライブでここまでの歓声を浴びるのも滅多にないことではないだろうか。

『皆さん、初めまして！ 先ほど紹介にもあつた通り、今回が初めてのステージとなる虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会の鈴川慎だ！』

慎が大きな声で自己紹介すると会場では彼の名前を声高々に叫ぶ人であふれていた。その様子を見て慎も少し照れくさい様子だ。

『これまでに俺は動画サイトで自己PR動画しか挙げられていない。正直、今回がどんなライブになるのか俺自身にもまるで想像がつかない。でも、だからこそわくわくするってもんだ！ 今日、ここに来てくれた皆を絶対に後悔させないから、最後の最後まで一緒に盛り上がっていきましょう!!』

慎が拳を強く天へ突きあげながら声を張ると会場もそれに合わせて大きな声で返事をしてくれる。今、彼と会場の想いは一つとなつている。ライブを始めるには最高のタイミングだ。

『……それと……には俺以外の想いもこもってる』

「慎……？」

ライブを始めるのかと思いきや、まだMCを続ける慎。これ以上何を話すのか一抹の不安になる。

『……まで一緒に練習に付き合ってくれた同好会の想い。俺の背中を後押ししてくれた人の想い。そして……この場に立てなかつた大切な人の想い……』

「……っ！」

この場に立てなかつた人、この会場にいる人たちはそれが誰のことなのか露知らずだ。だが、今の彼には敢えてそれを話さなければいけない理由があつた。

『このステージにいるのは俺一人だが、そんな沢山の人の想いを俺の身体を通して感じてほしい。絶対、後悔させないからなあ!!』

言葉の最後で声のボリュームを調整することでした空

気とさせずに、いよいよライブが始まるという高揚感を駆り立てる。慎はアイドル初心者とは思えないほどにMC力が長けていた。

『それじゃあ……トップ・オブ・メンズ・スクールアイドル、ラストライブ……Look at me!!』

こうして、TMSの最後を飾る慎のライブがついに幕を開けた。

変わらぬもの、変わるもの

慎の優しい歌声から始まったライブは会場内に大きな衝撃を走らせた。

ライブ開始前の煽る口調とは大きく異なる歌い方で観客らは小さくどよめきを見せていた。だが、ステージ天井に吊るされている一本のスポットライトからのみ照らされている慎の姿が映されている所を見て、どよめきは自然消滅していった。

俯くように歌う慎と天井からの照明により、彼の表情は髪で覆われ感情を読み取ることが出来なく、全体の衣装の暗さも相まって、彼のシルエットのみが観客側の目に映るようになっていた。しかし、スローテンポな慎の歌にメロディーが盛り上がる様子を見せると同時に慎も顔を上げて、好戦的な笑みを浮かべながら歌唱を続ける。

ミディアムテンポへ転調しながら響く力強いサウンドが全身に伝わるのと合わせて、冷ややかな感覚を覚えながらも楽しみを拭えないような今まで覚えたことのない鳥肌が生み出されていく。

「慎くん……」

転調後の力強い歌声が会場内に響く中、慎のパフォーマンスに見惚れていたしずくさんは横で感嘆の声を漏らしていた。無論、しずくさんのみならず関係者席で参加している他のメンバーらも歓声を上げられずそのパフォーマンスにただただ目を奪われていた。

「……うん、やっぱり慎はこうでない……」

ただ一人、俺だけが慎のライブはここまでのレベルになると予感していたこともあり、してやったりと安堵の笑みを浮かべていた。

慎と二人で話し合った彼のライブに合うイメージ。元気に皆へエールを送るものではなく、その存在感により見ている人を圧倒させるというイメージはこのライブで十二分に体現できており、観客の心を掴んでいるように思えた。曲のテンポに合わせて繰り返し広げるダンスもこれまでの練習やりハーサルの時より洗練されており、文句なしの完成度を誇っていた。

また慎はダンスをしながら歌を歌うことを課題にも挙げていた。身体を動かしながら歌うことで声にブレが生じてしまうことも問題視していたのだが、既にライブを行なっているせつ菜さんや愛さん、璃奈にコツを教えてもらおうことで、それすらも克服していた。

まさに非の打ち所がない慎の姿。彼の煌びやかな光景を目にしなから、俺はとある人物のことを頭で考えていた。

(……真結ちゃん。今の君の目に……お兄ちゃんはどうかやって見えてるのかな……)

スクールアイドルへの憧れを抱きながらも、不測の事態によりその道を歩くことができなくなった真結ちゃん。そんな彼女の想いを引き継ぐ形でスクールアイドルになった慎を今のあの子はどう見ているのだろうか。

少なくとも俺の目にはとてもきらめいているように見えている。慎の目指していたスクールアイドル像が正確に体現されており、真結ちゃんが憧れていたスクールアイドルとして慎が映っていたらとても喜ばしいことと思う。

そして、同時に俺はあることを考えていた。

(慎のステージ……眩しいなあ……)

それは舞台上立つ慎への羨望。俺は舞台の下で皆を支える縁の下の力持ちとなる存在であるため、ステージ上に立つアイドルと同じ舞台は見られない。だが、目を細めてみてしまうほど煌めいている慎を見ると、彼が見ている景色がどういったものなのか気になってしまうのだ。

(俺がそこに立つのは……なんて考えるのは野暮だよね……)

俺はステージに上がる逸材ではない。人前に立って誰かの支えになるなんて縁遠い話だ。姉との比較から自信を無くしている自分はそのような存在にはなれない。

なれないことを自覚はしつつも、憧れを抱いてしまうのはなぜだろうか……。

『……みんなああ!! ライブ、楽しんでくれて……ありがとうなあああ!!!』

俺らしくもないことを考えているとライブはいつの間にか終わりを迎えており、音楽が流れ終わると同時に決めポーズを取った慎は観客の激しい歓声を浴びながら、自分の事を応援してくれた大勢のファンに手を振って感謝の言葉を贈った。今の彼はこのステージに立ったスクールアイドルの中で一番輝かしい笑顔を浮かべていた。

彼の明るい笑顔とそのパフォーマンスに賞賛の拍手を送りながら、俺はとんだ些事を考えたものだと思ほど頭によぎったことを忘れ、今この瞬間を楽しむのだった。

「慎くんお疲れさま!! 本当にかっこよくてトキめいちやったよ〜!!」

ライブ、閉会式を終えた慎を囲んで俺たちは楽屋にて彼への祝杯を挙げていた。侑さんは慎の凛々しい姿を見た鳥肌が抑えきれず、未だに感情が昂ったままだ。

「うん! 私も慎くんの姿に目を離せなかったよ!」

「あんなに大きい場所ですっごいパフォーマンスを成功させちゃうんだから流石シンシンだね!」

歩夢さんと愛さんも早く感想を伝えたくて仕方ないようで我先にと慎へ伝えていく。

「私のライブと違ってすごく胸が熱くなった。璃奈ちゃんボード『メラメラ』」

「へへっ。サンキュー璃奈。それに侑さんやぼむ先輩、愛先輩もありがとうございます」

璃奈がボードを用いて心が熱くなったことを伝えると慎も自身の

やりたかったことがしつかりと体现できていることを認識でき、改めてメンバー全員への感謝を述べた。

「だけど、まさか慎くんが準優勝で終わっちゃうなんてねえ……」

メンバーらが喜び一色で染まっている一方で、彼方さんが今回の慎の成績についても言及する。

TMSの成績は、慎は準優勝に終わってしまった。オオトリとして観客の心を鷲掴みにできたのだが、それでも優勝したスクールアイドルには一歩手が届かずで終わってしまったのだ。

「でも、あの人たちが優勝するのも納得だよ。だって慎くんのライブと同じように楽しかったもん♪」

「そうですね。グループとしての一体感とメンバー一人一人の強み、それらが十分に活かされていて私も呆気に取られていました」

エマさんとしずくさんの言う通り、今回優勝したアイドルや結果について異議を唱えることはない。むしろこれまで個々で活動していたこの同好会とは違った強みを見せつけられ、まだまだ自分たちは井の中の蛙だったことを思い知らされたのだ。

「だけど、いい勉強にもなったわよね？ 慎くんの存在感を広めるきっかけではあったけれども、まだ彼らとの知名度の差があった。歌やパフォーマンスだけじゃなく、そういった要素も今回の敗北につながったと思うわ」

「果林さんの言う通りです。ですが、この敗北は決して無駄にはなりません。必ず明日につながるものです。慎さんとしても今日のライブを通じて、自分に不足しているところが見つかったと思います。その反省すべきポイントとして捉え、次のライブでは必ず勝ちましょう！」

果林さんの的確な指摘も合わせて、せつ菜さんが今回のライブを通しての総括を述べる。確かに今回のライブでは敗北の味を知ることになったが、それをスパイスに次のメニューを考える材料にすればよいのだ。

ましてや慎はまだ一年生であり、スクールアイドルをやる時間はたくさんある。これからも多くの経験を経ることでここでの雪辱を晴

らすこともできるようになるはずだ。そのために俺も慎を支えられるようにもつと沢山の事を勉強して、新しいことへのチャレンジも考えなければいけない。

メンバーらが各々感想を伝える中、一人だけ無言を貫いている人物に全員の焦点が合わさる。今回のライブを誰よりも待ち望んでいた一人の少女に。

「ふん、あんだだけ威勢を張っておいて準優勝なんて、本当に詰めが甘いよね慎のすけは」

「かすみさん……」

慎の実力を認めようとせずつと返そうとするかすみにしずくさんがため息をつく。

「応援してくれる人たちも見ろ目が無いよ。こんなに泥臭くやってきた男を評価しないなんてさ？」

「かすみ、お前……」

まさか彼女が自身を褒めると思わなかった慎は軽く目を見開く。そんな慎を気に留めずかすみは顔を赤くしながら言葉を続ける。

「……慎のすけのくせによくやったじゃん。かすみんはあんだのライブ、すごく楽しかった」

そつぽを向きながら賛辞を述べるかすみ。どこまでも素直にならないかすみメンバー全員が苦笑を浮かべている。これもまたかすみの良さの一つだ。

「へっ、お前は相変わらず可愛くねえな？」

「はあ!? 人が褒めてやってんのになにその態度!!」

「別に、これがお前らしいから何とも思わねえさ」

「なんかすごくムカつくんだけど……!!」

「まあまあかすみさん、どうどう。それだけ慎くんのライブが凄かったんだもんね」

慎とかすみの痴話喧嘩にも近いやり取りを久々に見て、少しほっこりする一方であまりうるさくするのも良くないとしずくさんがかすみをたしなめる。

ぐぬぬと唸っているかすみを尻目に次は俺の番と、慎へメッセージ

を送る。

「あははっ……。ひとまず、ライブお疲れさま慎。すごく……。かつこよかったよ」

「輝弥……。なんだか改めてお前にそう言われると照れちゃうな」
色々と考えていることはありつつも慎への労いの言葉を贈ると、慎はにへら顔で顔を掻く様子を見せる。

「本当、ありがとうな輝弥。輝弥がずっと俺を応援してくれたおかげで今日は結果を残せた。お前がいなかったら今の俺はいない」

「そっか……。それならよかったよ」

改まって感謝を伝える慎に俺も頷く。そして、すぐに話を切り替えるように慎は両手を頭に乗せてライブで感じた想いを伝えてくる。

「あくあ、輝弥にもこっちの景色を見せてやりたかったなく！ めちやくちやいい眺めだったんだからさ！」

「そうなの？」

「ああ。みんな、スクールアイドルを見て、思い思いの応援をしてくれる。応援の仕方は千差万別だけどさ……。みんな……。共通して笑ってたんだ。このライブを本気で楽しんでることが伝わってきたんだよ」

自分が見た景色を思い出しながら慎は当時抱いた感情を吐露する。慎の眼に映ってたお客さんは、笑顔でこちらにペンライトやうちわを振ってくれたようで胸が熱くなったようだ。そんな彼の話を聞いて、俺も胸が熱くなる感覚を覚えた。

「それは……。すごく楽しそうだね」

「ああ、だからさ。お前ももしその気があれば——」

慎が何かを伝えようとした矢先に楽屋の扉がノックされる音が聞こえてた。

「……………？ はい、どうぞ？？」

突然の来訪者に驚きつつも無下にするわけにはいかず、楽屋内に入るように促す。

「どうも、虹ヶ咲学園の皆さん」

「……………賀射 刃さん……………」

そこには今回のライブの優勝者である Drawing Story がおり、総出でこちらまで訪ねてきていた。

「せっかく楽しんでいたところに水を差してしまって申し訳ない。激しい勝負を繰り広げた好敵手に挨拶をしなくてはと思ってるね」

「……好敵手？」

刃さんから思わぬ発言が飛んできてついオウム返しをしてしまう。刃さんはそんな俺に頷きながら慎へと顔を向ける。

「……母数が少ない男性スクールアイドルのみに参加権が与えられている大会、トップ・オブ・ザ・メンズ・スクールアイドル。日の目を浴びる機会が少ないからこそ、この大会に全力を注ぐスクールアイドルは少なくない」

「俺たちも同様。ただライブや配信をやるだけじゃなく、こうしてシノギを削って実力を示したかった」

刃さんに続いて月未さんも自身の胸中を語る。スクールアイドルの甲子園と呼ばれるラブライブは女性のスクールアイドルが上位に上がることが多い。若者に好かれているコンテンツではあるがこの根幹を担っていたのが女性スクールアイドルだったこともあり、男性スクールアイドルへの風当たりも自然と強くなる。だからこそ決勝大会への出場はおろか、地区大会を突破することすらも中々に骨が折れるのだ。

「ここならば俺たちを縛るものは何もない。世界が俺たちに土俵を合わせてくれたんだ。そのチャンスを無駄にしたくない。その一心だった」

「でもそれは他のスクールアイドルの方たちも同じ。スクールアイドルに憧れたからこそ、スクールアイドルとして皆さんにその雄姿を見てもらいたいから全力を尽くしていた」

照哉さんは胸の前でぐつと拳を作って厳格な表情をしながら、大和さんは温和な雰囲気醸しながら両手を胸に当てながら、その想いを語る。

「そんな周囲のレベルが一段と高まって、殺伐としていた状況下で君は準優勝を掴み取った。これは本当にすごい功績だよ」

「……あんたのことを認めるつもりはなかったが、パフォーマンスを見てはつとさせられた。……生半可な覚悟で刃さんに啖呵を切ったわけじゃねえってな」

他のスクールアイドルも力をつけ、戦々恐々とした中で成績を収めた慎に京雅さんと愛羅さんは素直に褒める様子を見せる。この二人もここまではつきりと相手の実力を認めるということは、それほどに今回の大会は厳しい戦いであったことに加え慎のポテンシャルの高さに驚きを隠せなかったのだろう。

「俺たちが今回優勝できたこと、それはこの大会に出場するまでに沢山の実績を積んできて、応援してくれるファンを増やしてきたからだ。……それが無ければ、俺たちは君に負けていたと思う」

刃さんの事実と同好会メンバー全員は啞然としていた。こうして実力を有している人から慎に賛辞を述べてもらえていることが衝撃だった。俺たちの表情を見渡して刃さんは口元を緩める。

「……信じられないとも言いたげだけど、これは本心から思っていることだよ。俺たちは鈴川君を……慎君のことを好敵手として、ライバルとしてその実力を認めている」

「……………」

「スクールアイドルとしての初ステージ、お疲れ様。そして、そんな中での準優勝……本当におめでとう」

そう言って、刃さんはそっと慎へ握手を求めるように手を差し出す。今の刃さんにあるのは自分たちが優勝を掴み取ったことのひけらかしなどではなく、激闘を制した少年に対しての純粋な賛辞。先ほどもまでの Drawing Story の皆さんが語っていたことも合わせて、その言葉には胸が温かくなる感覚がある。

「……ここにきてまで嫌味を言ってくるのかと思つて身構えてたけど、それも無駄だったみたいだな」

「……正々堂々と勝負した相手に対してそのような非道は——」

「分かっています。あんたのその人柄を見ればそんなことをする人間じゃないことはすぐに理解できます」

慎の斜に構えた物言いに刃さんが横やりを入れようとしたが、慎自

身も刃さんと触れたことで彼が卑しい人間ではないことを理解していた。

「俺もTMSに参加して、改めてスクールアイドルの世界は広いつてことを知れました。男のスクールアイドルでもあんたたちみたいにとんでもない力を持つてるグループがいるってことも分かって、本当にこの世界は面白いなって嬉しくなりました」

「慎……」

「俺が準優勝を掴めたのは俺だけの力じゃない。同好会のみんなが総力を結して俺に協力してくれたからだ。そして、事前にあんたたちのライブを見れたことで俺の中で覚悟も決まっていたんだ」

慎はゆっくりと刃さんの前へ一歩進み、彼から差し出されている手の前に立つ。

「ありがとうございます。俺がこうして笑顔でいられるのもDrawing Storyがこの世界の厳しさを教えてくれたからです」

そう言つて、慎は刃さんの握手に応える。自分の行動に返事をしてくれて刃さんも心なしか嬉しそうだった。

「慎君……!」

「優勝、おめでとうございます。ですが……次は絶対に負けないですからね?」

「ああ、こちらも後れを取るつもりはないよ? 次にまた相まみえることを楽しみにしてるよ」

刃さんは慎の不敵な笑みに対抗するように猟奇的な笑みを浮かべる。そして、すぐにそれを解きこちらへ振り向く。

「それと……君もね?」

「えっ……?」

なにか期待を込めるような視線を向けながら、意味深な発言をぶつけてくる刃さん。果たして俺に何を期待しているのだろうか。

「さて、せっかくの時間を無駄にさせるわけにもいかない。俺はここら辺で引き上げるかな」

俺たちの事を鑑みたのか刃さんは踵を返して楽屋を後にする。だが、他のメンバーらは帰ろうとせずに突っ立ったままだ。何故刃さん

の後に続かないのか問おうとした時、月未さん達は一斉に何かを手にした。

「……あの、虹ヶ咲学園の皆さん!!」

「最後に一つ……サインを下さい!!!」

月未さんと照哉さんは頭を下げながら真っ白なサインボードを持って、こちらへサインを求めてきた。そういえば、朝に遭遇した時サインは後で貰おうなんて言っていたな。

「あつはは……順番に、ですからね?」

突然のファンモードに困惑しながらもせつ菜さんは許可を下し、メンバー全員でファンサービスに興じるのだった。

TMSから次の日、俺はとある場所へ向かうべく歩いていた。

本来であれば朝一から学校で練習があるのだが、ライブ直後というものあつて練習開始が遅めに設定されている。その余裕を見て、俺は寄り道をしてから行こうと決めていたのだ。

寄る場所は決まっている。俺が友達の秘密を知った場所であり、親友と決意を固めた場所。そして言わずもがな、そこには慎が既に到着していた。

「おはよう、慎」

「よっ、おはよう、輝弥」

俺の登場に慎は驚く様子を見せない。俺たちはここで合流する約束など一切しておらず、たまたま鉢合わせただけなのだ。

「随分と冷静だね?」

「こうして待つてればお前が来る気がしたんだよ」

「奇遇だね。俺も慎がいるんじゃないかと思って、ここに来たから」

「結局、俺たち考えることは一緒じゃねえか」

「まあ、友達だしね?」

他愛ないやり取りをし、真結ちゃんの墓前で二人で笑い合う。こうして二人だけの時間を取れたのもあの時以来だろうか。

「……無事にライブは終了したね」

「……一時はどうなるかと思っただけどなあ〜」

俺の言葉に慎はため息を吐きながら苦笑を浮かべる。確かに苦難な道を歩いていたが、それでも確かな足跡を残して俺たちは歩き切ることが出来たのだ。

「でも、やり切ったよね。俺たち」

「ああ、お前のおかげでな」

「それはお互い様」

真結ちゃんの前で話していると柔らかな風が吹いてきた。優しく髪をなでる風は少し暖かさを帯びていた。

「……真結ちゃん、見てくれてたかな」

「あいつは笑って見てくれてたさ。これが……自分の見たがってたスクールアイドルのライブだってな」

実際に真結ちゃんと話をしてるわけではないのに、どこか真実味を帯びてるような発言に俺は思わず吹き出す。

「よくわかってるね」

「俺を誰だと思っただよ？」

俺の冗談に慎は鼻で笑いながら答える。そして、すぐに真結ちゃんの墓へと視線を戻す。

「……あいつのためにスクールアイドルを頑張ろうなんて考えてたけど、それが逆に足枷になるなんて思いもしなかったけどな」

「それだけ、慎も真剣に真結ちゃんの事を想ってたって証拠だよ」

「それは愛先輩の受け売りか？」

「……そうかも」

今日は一段と口が回る日かもしれない。今の慎にはどんな冗談を言っても笑って返してくれるような、そんな安心感を覚えている。

「……俺が真結のことを想っても、スクールアイドルをやる以上はひた隠しにしないとイケないよな。ステージを見に来てくれる人はあくまでも俺を見に来てくれるだけであって、鈴川真結のことは誰

も知らない」

「悲しいけど、それが現実だね」

「いや、それでいいのさ。ここにいない者に縋って活動なんてしてたら、いつか本当に自分の身を壊す。それを気づかせてくれたのは……お前とかすみだ」

かすみは誰よりも慎のことを応援していた。普段の練習やスクールアイドルの考え方で衝突することはあれども、それは熱意があるが故の事だ。

彼女は言いづらいような状況に陥った中でも、その先の展開を想定してはつきりと物申してくれる。それは他人の動向に優しい人が多いこの同好会の中では非常に珍しく頼もしい存在だ。

「しつかりかすみにもお礼を言わないとね」

「正面から言ってもあいつが図に乗るだけだからな。まあ、何か差し入れでも持っていきさ。……それと輝弥にも礼を言わなくちやいけないいな」

「慎……」

「お前という存在が俺をここまで成長させてくれた。真結のことも含めて本当に頭が上がらない。俺と一緒に歩いてくれて……本当にありがとうがとうな」

照れ隠しをするようにそっぽを向きながら感謝を述べる慎。こんな時でも恥ずかしさから目を合わせられない慎が可愛く思えてくる。

「慎はいつも俺のことを支えてくれた。だから返された恩はしつかりと返した、それだけのことだよ」

「確かにそうだけど……」

俺はさも当然のように語った恩返し、慎も納得はしつつも釈然としない様子。ならば俺としても一つ吹っ掛けておきたいことがある。

「それに……まだこれで終わりじゃないよ。今回は準優勝で終わってしまったけど、TMSで見つかった課題を改善して次は絶対にDrawing Storyに勝とう」

慎を優勝に導くという夢が果たせなかった今、次の目標は決まっている。土を舐める結果になった相手、Drawing Storyを

負かして頂点を取る。これがマネージャーとしての俺の次なる目標だ。

「……そうだな。今回はあの人らに負けたが、それでも糧になるものはあった。次の大会のためにもっと修行しねえとな。……期待してるぜ？」

「当たり前だよ、俺は君の親友であり、相棒だよ？」

俺の意志を確認するように拳を差し出す慎に俺も返事をするように拳を合わせる。男性スクールアイドルの世界は狭くともそのレベルは決して低いものではない。俺たちが走る道は険しい道のりだが慎と一緒にすれば何も怖くない。

「……さあ、時間も近いし、そろそろ行こうか」

「よしっ、やってやろうぜ！」

学校での練習時間が迫っているため、出発しようと声を掛ける。そして、ここを立ち去る前に改めて真結ちゃんへの祈りを捧げようと二人で手を合わせる。

(これから慎の事を……俺たちの事を応援してね、真結ちゃん) 心の中で俺はそう真結ちゃんへ念じる。暫し無言が続く墓地だったが、静かに『頑張れ』と彼女の声が聞こえたような気がした。

そして、俺たちは虹ヶ咲学園へと足を運ぶのだった。新しい目標、それを横並びで目指していける最高のパートナーと共に。

本編『自慢のお姉ちゃん』 生まれた衝動

TMSが終わって数日が経った。

慎が大会で準優勝を掴み取り、俺たち虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会はより練習に熱が入っていた。実績を得たからと言って天狗になるつもりもなく、大会で見つけた課題を達成するために全員で丸となって練習に取り組んでいた。

「よっしゃ、行くぞ輝弥……!」

「うん……臨むところだよ……!」

そんな折に俺は慎とレースを始めるように走り出す体勢を取っていた。俺たちの様子を見て、愛さんがどこから持ってきたかわからないレース用の赤い旗を俺たちの前で制止させている。

「行くぞ〜? よ〜い……………ドン!!」

愛さんのゴーサインと同時に俺と慎は同時に駆け出す。同時のタイミングでスタートを切ったが、俺が気持ち早く前に出ており、良いスタートを切り出せていた。

「輝弥さんが一歩前に出ています!」

「でも、慎くんの追い上げはここからよね?」

走り抜ける俺たちの横からせつ菜さんと果林さんの会話が流れてくる。勝負は最初が肝心と言うが、慎はその遅れを持ち前の脚力で優に取り返してくるのだ。

「かーくん負けないで〜!」

「慎のすけ、負けたら承知しないよ〜!!」

「かーくんも慎くんも頑張れ〜!」

歩夢さんからの応援に力が入る一方、かすみは相も変わらず慎に手厳しい。そんな二人の声をかき消すように侑さんの声がグラウンドへ響き渡る。

今、俺たちがやっているのは二人だけの真剣勝負。週に一回やって

いる本気の徒競走だ。慎に負けないように俺も体力をつけているのだが、一定の間隔を以って慎と勝負をすることにしている。こうすることで自分の力がどこまで付いているのかを推し量ることができないのだ。一方、慎の方も俺との勝負を行うことで自分が怠けていないかを再確認するという名目で勝負に乗ってくれている。

俺たちのこの勝負は、いつしかニジガク内での恒例行事となっており、今ではどつちに軍配が上がるのかを予想しながら観戦している始末だ。

「やるな輝弥……！　だが……まだまだこれからだ!!」

俺の背を追いながら慎は勝気な表情を浮かべる。ちらつと後ろを覗くが慎は体力に余裕があるようで少しずつペースを上げているのが分かった。

(このペースをキープできるのがベストだけど、それも時間の問題か……)

徐々に縮まる俺と慎の距離。この状況をどうやって切り抜けていこうか考えていた時、ゴールの少し前で応援していたしずくさんが目に留まる。

「輝弥く〜ん！　もうひと踏ん張りがんばれ〜！」

人間という生き物は不思議だ。応援の言葉を一つ掛けてもらえるだけでどこから湧き出てくるか分からない勇気や力を身に着けられるのだ。ましてや、その相手が好意を抱いている人であれば尚のこと。

しずくさんの前で不格好な姿を見せられない。本能でそう感じ取った時、俺の足は自然と力を増していた。

「っ!?　か、輝弥……!?!」

「お〜！　か〜くんがもう一度距離を離しはじめたよ〜！」

「輝弥くん、慎くん、どつちもがんばって。璃奈ちゃんボード『メラメラ』」

エマさんと璃奈の応援が耳を通り抜け、残りは最後の20メートルほどの直線に差し掛かる。俺の意地を見せてる一方で、慎も易々と俺に勝ちを譲らせる気はない。

「うおおおおお〜〜〜!!!」

「負けるものかあ〜〜!!!」

俺たち二人の激しい怒号にも近い声が鳴り響く中、ゴールテープが切られた。

「はあ、今日も慎に勝てなかつたか〜……」

徒競走を終え、俺は敗北者の罰として自動販売機でジュースを買いに行っていた。

勝負は俺の負けに終わった。ラストスパートで慎が俺の真横を通り抜け、体一つ分の差で敗北に喫したのだ。慎が追隨してきていることはわかっており油断するつもりはさらさらなかったが、彼との体力差は歴然であり重点的に鍛えなくてはいけないと改めて感じた。

「それでも今日は接戦だったよ？ 慎くんには勝てる日もだいぶ近づいてきてるんじゃないかな？」

「確かに近づいてきてはいるけど、慎も立ち止まってるばかりじゃないだろうし、もっと頑張らないと」

一緒に付いてきてくれたしずくさんからフォローを受ける。けれども俺が成長しているということは慎も同じことだ。俺だけが経験値を多くもらえるだとか、優遇されるわけでもなく慎も変わらない速度で成長を見せているのだ。彼に勝つためにはより練習を積む必要があった。

「アイドルをやるつもりじゃないのに、輝弥くんもストイックだね」

「……それは……」

しずくさんの言葉に俺はなんて返せばいいか迷ってしまう。TMSの時に刃さんから言われた「君のことも楽しみにしてる」という言葉。そして、慎のライブを見てから俺の中で考えが変わってきているように感じている。最初はスクールアイドルではなく自分の音楽を伝えたいとして作曲家的ポジションで立っていたが、今はそれだけで

は物足りなくなっている自分がいる。俺がやろうとしていたことが、慎が見ていた景色からも叶えられるのではないか、そう感じて始めているのだ。

だが、しずくさんはそんな俺の様子を気に留めることなく話を続ける。

「ふふっ、でもそれがすごく輝弥くんらしい。こうして一緒に練習に参加してくれるからこそ私たちも負けていられないって力が湧いてくるもん」

「俺がそこまでの力を持つているとは思えないけど……しずくさんがそう言うってくれるなら、きつとそうなんだろうね」

「そうなんだよ。だから次は慎くんに勝てるように一緒に頑張ろ？」

「しずくさん……。うん、頼りにしてるよ」

「うん！」

彼女の笑顔を見て、胸が温かくなる。慎に負けた悔しさも先ほどの葛藤もしずくさんの前でなら些事に思える。しずくさんは演劇部の経験もあり、呼吸に関しては人一倍長けている。走り方のコツでも彼女に聞いてみるのはアリだった。

それと同時に、同好会の中でも舞台に立つ機会が多いしずくさんに、あることを聞いてみたくなった。

「はい、しずくさん」

自動販売機で慎から要望されたスポーツドリンクと一緒にわざわざ付き合ってくれたしずくさんにお礼のお茶を渡す。

「ありがとう。それなら私も、はい」

「俺の分も？」

「何もしてないのに貰うだけっていうのは私には合わないから、ね？」
しずくさんは買ったばかりの水を持って、ウイंकしながら答える。俺の差し入れから躊躇なく返礼品を送ってくる様子を見るに俺

の行動が筒抜けであることがよくわかる。

「ははっ、しずくさんには叶わないや。じゃあ、ありがたくいただくね？」

「本来なら私の分まで買わなくていいんだからね？」

「……今後は気をつけるよ……」

してやったりな表情で言い放つしずくさんに俺は観念したようにため息をつく。今回は慎への奢りがメインであってしずくさんに何も渡す必要はない。ただ、何かしなければいけない衝動に駆られてしまったのだが、そこはメリハリをつけなければいけない。

「それにしても、慎くんのライブから時間は経ったけど、まだあの時の慎くんのライブが忘れられないよ」

「うん、俺もだよ」

しずくさんからの唐突な話題に俺もすぐに乗っかる。慎の初ライブがあまりに印象に残っており忘れろという方が無理な話だった。

「まだステージに立ったこともない慎くんが大会で準優勝を掴んじやったから、スクールアイドル歴としては私の方が長いはずなのになんだか先を越されちゃったな」

「しずくさんもまだライブはやれてないもんね」

璃奈、慎とスクールアイドルの経験がなかった二人が連続で同好会の知名度を上げるに相応しい。パフォーマンスをした。そういった結果もあり、二人に負けじと他のメンバーも意欲がどんどん増しているのだ。

「まだしずくさんのライブを見れてないから、どんなライブになるのか今から楽しみだよ」

「その時は全力で楽しませてあげるから期待しててね？」

手に持った飲み物を飲みながら、二人で笑い合う。そして、二人きりだからこそ俺はあることをしずくさんに聞こうとした。

「……ねえ、しずくさん」

「なに、輝弥くん？」

「……ステージから見える景色ってどんな風なのかな？」

「えっ？」

俺からの質問にしくさんは一瞬困惑の表情を見せる。いきなりアイドル側の視点について聞かれたものだから戸惑うのは当然のことだ。

「急にごめんね。この前の慎のライブ。あの時の慎は凄く輝いてた。あの大会に参加してたアイドルの中で一番眩しく立ってみせるって思いが伝わってきて、すごくかっこよかった」

俺は慎のライブを見ていた当時のことを振り返る。慎の歌声や表情、一挙手一投足が洗練されていて、そこには紛れもないアイドルの慎が立っていたのだ。

「俺は自分の音楽を伝える手段は楽曲からしかできないと思ってた。聴いてくれた人を虜にできるような曲を作れるように、そんなことを思ってたんだ」

「輝弥くん……」

歩きながらしくさんは俺の顔を覗き込む。心配そうに見つめるしくさんを尻目に俺は言葉を続ける。

「でも、ステージに立って歌を伝えるっていう手段も一つのやり方なんじゃないかって思えてきたんだ。あの時の……時に惚げに、時に激しく、時に笑顔で曲を彩っていく慎の姿がすごく印象に残った」

俺がぽつぽつと語る横でしくさんはひたすら無言を貫いて俺の言葉に耳を傾ける。

「そして、そんな慎の姿を……陰からではなく隣で見たくなくなっちゃった……」

「……輝弥くん、それってもしかして——」

「大変だよ大変だよ〜!! しず子かぐ男大変だよ〜!」

俺が密かに抱いていた想いについてしくさんが言及しようとした矢先、正面からかすみ大きな声を上げて緊急事態を知らせにきた。

「かすみ? そんなに慌ててどうしたの?」

「どうしたも何もないよ! ついにかすみん達の元にも来ちゃったんだよー!」

「来ちゃったって何が?」

かすみの言うことに俺としくさんが二人揃って疑問を抱いていると察しが悪いと感じたのかかすみはぶんぷんと怒る様子を見せる。「もく、しず子たちそんな悠長に構えていられないんだよ！ ついにかすみん達にも……道場破りがやってきたんだよ！」

「何が道場破りだ、ばかすかす」

かすみの発言に呆れるようにため息を吐きながら慎が横槍を入れる。横槍と同時に頭を軽くチョップされたかすみは痛つ、と声を上げる。

「ちよつと何すんのさ慎のすけ！ 別に意味は間違つてないでしょ！？」

「慎のすけ言うんじゃねえ！ それより、あの人の妹さんのことをそうやって呼ぶんじゃねえよ？」

「妹？」

TMSを終えても未だ犬猿の仲な二人のやり取りを聞きながら、慎の言葉に疑問を持つ。そんな俺としくさんの為にかすみ達と一緒に付いてきた璃奈が解説を入れてくれる。

「うん。実は彼方さんの妹さんがこの学校にやってきたの」

「彼方さんの……」

彼方さんの妹については一度だけ本人から話を聞いたことがある。

確か近江このえ 遥はるかといい俺たちと同じ一年生のはずだ。

「どうして急にここへ来たの？」

「俺らも詳しくは聞いてねえから分からねえ。とにかく折角の客人つてことだからお前らを連れて帰つてこいつて侑さんから頼まれたんだ」

なぜ遥さんが虹ヶ咲へ来たのかは分からない。かすみの言う通り本当に道場破りとしてここへ現れたのか、単なる交流として来たのかは本人に聞かないと分からないことだ。

「そうか。なら早く部室へ戻らないとね」

「そうだよ。かすみん達の所へ来た理由について徹底的に吐かせない……」

「お前はなんでそんなに殺伐とした発想しか出てこないんだよ」

俺の言葉に満足したかすみは悪どい笑みを浮かべながら踵を返す。慎は彼女の発言に悪態を吐きながら後ろを付いていく。二人の後ろを追いかける璃奈へ続くように俺も歩き始めようとするが、しずくさんはその場から動かずにいた。

「しずくさん?」

「……輝弥くん、さっきの話は……?」

彼女が言おうとしていることが何かを予想することはそう難しくなかった。

「その話はまた今度にしよう? 今は彼方さんの妹さんがなんでここに来たのかを確認しないと」

「……うん」

俺がこの話題に関して口を開かないと判断したしずくさんは釈然としない様子を見せながら俺の横を歩き始める。

突然の遥さんの来訪に期待を膨らませているはずだったものの俺たち二人の間にはただただ沈黙が流れるのみだった。

外伝

「特別編」中須かすみ生誕祭

「かぐ男！ 今日のかすみんに付き合って!!」

かすみは授業が終わってすぐにうちの教室にやってきてそんなことを言ってきた。

「なんだ？ 藪から棒に」

「今日のかすみんの誕生日なんだよ！ かすみの彼氏ならそれくらいは分かってるでしょ！ そんな日に何もしないなんて男として恥ずかしいと思わないの!?!」

「別に忘れてるわけじゃないし、朝もちゃんとおめでとうって言ったじゃないか」

「かすみんがその程度で喜ぶと思うの!?!」

かすみは自分の誕生日だというのに大して祝福されてないように感じてご立腹のようだ。

もちろん、彼氏として何も準備をしていないほど俺はかすみほどバカではない。

……なぜかかすみが途轍もない目力で俺を睨んでくる。

独白で煽ってるのがバレたか。

するとかすみの目が潤んできた。

しまった、弄りすぎたか。

っていうかなんで心が読めるんだよ。

「……かすみんの直感を舐めない方がいいよ……」

落ち込みながら答えてくる。

わざわざ答えなくていいよ。

「はあ、わかったよ。今日は同好会の練習も休みだし、お出かけしようか」

「ほんと!? さっすがかぐ男♪ わかってるう〜♪」

かすみの頭を撫でながらお出かけに賛成するとかすみは一気に笑顔になった。

相変わらずかすみの感情豊かさは筋金入りである。

まあ、俺はそんな自分の気持ち素直に表現できるかすみに惹かれて告白したんだけど。

「……なら早くデートに行つてこい。教室前での惚気はそれくらいにしろよ」

二人の世界に入つていたところに慎が会話に入ってくる。

確かにここはうちの教室の前、しかもホームルームが終了したばかりなのだからクラスメイトが全員残っているのだ。

二人のイチヤイチャを見せつけられて、呆れたり、愛想笑いをしたり、目を背いたり人それぞれのリアクションを取っていた。

だが、かすみは俺との時間を邪魔されたからなのか頬を膨らましなから慎に文句をつけていた。

「もお、なら慎のすけは先に帰ればいいじゃん！ あつ、もしかしてかすみ達の幸せっぷりが羨ましいのかなあ〜？」

「慎のすけって言うんじゃねえよ、かすかす！ 第一、帰ろうにも二人がそこにいるから邪魔で通れねえんだよ！」

「むう〜！ かすかす言うな!! ならもう一方の扉から出ればいいじゃん！」

「はいはい、かすみも慎もどうぞ」

二人がいつもの言い合いを始めたので双方を宥める。

しかし、二人の勢いは留まることを知らず、なんなら俺を鋭く睨みつけてきた。

「かぐ男もかすみんの彼氏なんだから言つてやつてよ！ そんな風を利かせられないから彼女ができないんだって!!」

俺はかすみを宥めていたが、とあるフレーズに眉をぴくつとした。そんな俺の様子に気付かず慎も言い返していく。

「はあ?! 別に彼女がいようがいまいが関係無いだろ！ そんな風の人に對してのデリカシーが無いから輝弥もお前の相手をするのはさぞ大変だなあ!!」

慎もいつも通りにかすみに對して返しているのだろうが、俺はその返す言葉が気になり、次第に怒りが募っていく。

「べ、別にそんなことないし！ かぐ男は慎のすけと違ってかすみんに対してそんな事言わないしかすみんがもし言つちやつてもかぐ男は優しく指摘してくれるんだから!!」

「結局はデリカシーのない発言をしてるんじゃないかよ!! あと、慎のすけ言うな！ 輝弥は人一倍優しい奴だからな、輝弥の優しさに甘えずに自分で直していけよ！」

二人の口喧嘩が終わりそうにないので俺の怒りが頂点に達した。

「……………うるさいっ!!」

突然、大きな声で言ったものだからかすみと慎は黙ってしまった。

「いつまで二人で喧嘩してるんだよ。別に今日に限ったことじゃないけど、いつも二人を宥める側の身にもなれよ」

かすみと慎は、眉間にしわを寄せながら怒る俺を見て小動物の如く縮こまってしまふ。

そう、この二人の喧嘩は今日に留まるものではない。

まずどちらかがそれぞれの蔑称で煽り、そこから言い合いに発展する。

いつもはしずくと璃奈もいて三人で宥めていたが、今日は宥める側は俺だけ、しかも喧嘩が収まりそうになかったので俺も思わずムキになってしまった。

「別に言い合いをするのは止めはしない。それぞれの言い分があるだろうからね。ただな、なんで言うてはいけないことまで言うてさらに煽るんだよ。それこそ人に対して気も利かないしデリカシーが無いわ」

俺は人のコンプレックスについては特に気にする方で、それをネタに弄る人は毛嫌いする。

だからかすみと慎の発言の中にあつた言葉、それが俺の怒りの引き金になったのだ。

「はあ、もう帰るか。かすみ、行くよ」

「えっ、あっ、うん…………」

俺は大声を出しださず目立ってしまったため、人の目から逃げるように教室を去る。かすみも同意しながらも後ろから付いてくる。

俺たちは学校を出てセントラル広場に來ていた。

ここまで來る道中、二人の間に何も会話はなかった。

いや、かすみは俺の方を何度か見てきたがまだ怒ってると思ったのか声を掛けようとしなかったため、会話ができなかったという方が正しい。

「かすみ、ここに座ってな」

「う、うん……」

広場の中にあるベンチにかすみを座らせ、とある場所へと足を運んだ。

(かすみ視点)

かぐ男が目的も言わずどこかへ行ってしまったから、かすみは心臓がバクバク言っている。

慎のすけと喧嘩をするのはいつもの事だったが、今日はかぐ男がものすごい剣幕で怒っていたから、何か言われるかもしれないと不安に駆られていた。

かぐ男がそこまで怒る理由は知ってる。

彼も小さいときに自分が抱えていたコンプレックスを弄られていじめられていたと教えてくれたからだ。

かぐ男がかすみん達に対して優しく接してくれるのは自分のような人を見たくないからだと言ってた。

そんな暖かい心を持った彼に触れて、かすみんはかぐ男のことを次第に好きになっていったけど、今日はそんな彼の心を踏みにじってしまった。

「いやだ……いやだよお……」

私は輝弥が遠くに行ってしまうのではないかと思い、自然と涙が溢れてきた。

正直輝弥が告白してくれてすごく嬉しかった。

私が好きになった彼が私を選んでくれた、それだけで私の心は満たされていたのだ。

ただ、今日の喧嘩の内容が頭をよぎり、輝弥が私の元から離れていく不安を覚える。

そんな不安が自分に嫌という程突き刺さってくる。

自己防衛するように自分の体を覆うが気持ちが晴れることはなかった。

「輝弥……離れたくないよ……!」

「何言ってるんだ?」

輝弥の声が聞こえ、ふと顔を上げるとコッペパンを両手でそれぞれ持ちながら輝弥が私の前に立っていた。

(輝弥視点)

広場に来るまで少し張り詰めた空気が漂っていたので気を紛らわすためにかすみの好きなコッペパンと一緒に食べようと思い、買ってきたが戻ってきたときにかすみは顔を伏せていた。

最初はさっきのことを気にしているのかと思っただけだが、近くまで来たときにふと聞こえた言葉が俺の予想を覆した。

「輝弥……離れたくないよ……!」

かすみは俺から別れ話でも切り出されると思っていたのか涙を流しながら自分の気持ちを吐露していた。

それが分かって、俺はむしろ安心した。

「何言ってるんだ?」

「えっ……?」

かすみはふと聞こえた俺の言葉に顔を上げ、涙を拭うことなく俺をただ見つめていた。

「誰もかすみの元からは離れないよ。別にかすみだけが悪いわけじゃないし」

「で、でもっ……! 私は……輝弥のことを知ってるのに……知った上であんな事言っ……輝弥の気持ちを踏みにじったって言ってもおかしくないもん……」

かすみはまた俯いてしまったが俺はかすみの前に跪いて微笑みかけた。

「言ってしまったものは仕方ないけど、今のかすみは俺の事もそのまま考えてくれた上で反省してるんだもん。嫌うなんて滅相もないよ」俺は自分の鞆をかすみの横に置き、その上に買ったコツペパンを置く。

そして、かすみの頬を伝う涙を自分の指で拭う。

「ごめんね、さつきは俺もムキになりすぎた……」

さつきの喧嘩については俺ももう少し頭を冷やした上で仲裁に入ればよかったのだが、そこまで自分の感情を制御できていなかったの
で、反省しなくてはいけない。

「か……輝弥が謝ることないもん！ 私が言い過ぎたんだから……」

かすみの言葉に反論しても水掛け論になつてしまうのは目に見えたため、俺はかすみの手を握り言い聞かせるように話す。

「ありがとう。俺は、いつも俺のことを気に掛けてくれるかすみが好きだよ。かすみは俺が落ち込んできるときも近くでその明るい笑顔で勇気を与えてくれる。俺はかすみがいたから今もこうして頑張れる」

かすみは俺に顔を向け、俺の言葉を一語一句噛み締めるように聞き入っていた。

「もちろんかすみが悪いことをしていたら俺は怒るよ。自分の好きな人が誤った道に進んでほしくないし……」

俺は言葉が浮かんでこなくなり、話す内容が詰まってきた。

「と、とにかく、俺のかすみを想う気持ちはこんなものじゃ消えないよつて事。言いたいのはそれだけ」

かすみはまた目に涙を浮かべ俺に抱き着いてくる。

「輝弥ああ……!! ごめんなさい……ごめんなさい……!」

俺はやれやれと思いつながらかすみの頭を撫でた。

「はあ……かすみ、もう泣くのはやめよ？ アイドルはどうあるべきなの？」

俺がかすみに活を入れると、かすみはすぐ俺の元を離れ自分で涙を拭った。

「えへへ……そうだね。スクールアイドルは……常に笑っているべき

なのです!!」

その時のかすみの笑顔はすごくまぶしいものだった。

「特別編」 エマ・ヴェルゲ生誕祭

「「エマさん、誕生日おめでとー!!」」

「みんな、ありがとう！ すごく嬉しいよ♪」

今日はエマさんの誕生日。

部室では誕生日をお祝いするために様々な準備がなされていた。

歩夢さんと彼方さんが誕生日パーティーのためにケーキやマカロンなどスイーツを沢山作ってくれた。

せつ菜さんも率先して手伝おうとしていたが璃奈に必死に抵抗されてた。

他のメンバーはジュースやお菓子を用意したり、ドアの前や壁に輪飾りを用意したりと部室の飾りつけを行っていた。

おかげで部室内がすごく華やかになって素敵な誕生日パーティーを開催できた。

ちなみに俺はというとエマさんのお迎えに上がっていた。

俺も手伝おうとしたが、果林さんから

「彼氏としてしっかりとエスコートしてこなきゃだめよ?」

と半ば強制的に迎えに行かされた。

まあ、そんなことを言われずとも迎えには行つてただけ。

エマさんを目隠ししながら部室に入れ、目を開けさせた瞬間に全員でクラッカーを放った時のエマさんのきよとんとした顔は忘れられない。

時が止まったように感じたがそれも一瞬の事で、すぐに気を取り戻し、

「インクレディブル〜!!」

と拍手しながら感動していた。

こうやっていつも純粹かつ無邪気に笑うエマさんが俺は好きだ。

この人は姉さんとは違った温かさを持ち合わせており恋愛感情など抱いていなかったのだが、ある日に突然エマさんから告白された時は本当に驚いた。

いつも俺の事をかーくんと呼んでくれてお互いに不安や悩みを相

話し合って、そんな日々がエマさんにとってはすごく楽しくて嬉しかったそうだ。

最初は俺の事を弟みたいに見ていたそうだが、どんな時でも話を聞いてくれる俺を弟ではなく一人の男の子として頼ってしまっている顔と顔を赤くしながら言ってくれた時は俺も恥ずかしくてその場から逃げ出したくなるくらいだった。

今では仲睦まじい様子を全面に出しているの、周りの人間はその甘さっぷりに悶絶していた。

果林さんもそのやり取りにはいつも呆れたような態度を見せているが、当の本人としてはエマさんに想い人ができ、且つ幸せそうに過ごす姿を見て安心していた。

いつもの如く机を円形に囲みパーティーは始まった。

彼方さんと歩夢さんが腕によりを掛けて作ったスイーツにみんなメロメロだった。

侑さんはあまりの美味しさに彼方さんにお嫁に来てほしいと言ったくらいだ。

そのあと歩夢さんから冷たい目でお咎めされていたが。

「はい、エマさん。あーん」

「あゝむ♪ うゝゝん、ポーノだよ♪」

俺とエマさんは隣同士で座って、目の前のスイーツを手に取り食べさせあいつこをしていた。

俺はフォークでケーキを掬い、エマさんの大きな口の中に放り込む。

エマさんは満足気にスイーツを咀嚼し顔を左右に揺らしながら感想を述べる。

「はい、かーくん。次は私からだよ？ あーん♪」

「あーむ。……美味しい」

エマさんの手からマカロンが運ばれ、そのまま口の中へ吸い込まれる。

マカロンの食感が中々に癖になるのでこれは病みつきになる。

「エマさんと輝弥君にそう言ってもらえて光栄だよ〜♪」

「二人に喜んでもらいたくて頑張ってたんだ♪」

彼方さんと歩夢さんは美味しいことを褒めてもらえて嬉しそうだった。

ただ一つだけ疑問があるとすれば。

「なんで俺にもなんですか?」

今日はエマさんの誕生日だからエマさんが喜んでくれればそれでいいと思っていたのだが。

「ええ、かぐ男分からないの? そんなんじやエマ先輩が逃げていつちやうよ?」

かすみが随分と偉そうな態度で俺に圧を掛けてくる。

少しムカついたから両頬を引っ張ることにする。

「……うるさい」

「うるさいひやいよ……」

「ああ! かーくんだめだよ! かすみちゃんの可愛いほっぺが赤くなっちゃう!」

かすみで遊んでいるとエマさんに待ったをかけられた。

エマさんのお願いとなれば仕方ないので俺は手を放す。

「そんな生意気な態度じゃ、輝弥にやられるのも仕方ないな」

「うるさいな慎のすけ! どうせ慎のすけもわからなかったんでしょ

! 慎のすけに女心が分かるはずないんだから!」

「慎のすけ言うんじやねえよかすかす! 別に知らずとも損はないん

だからいいだろ!」

「ほらほら、かすみさんどうぞ」

「慎くんもよしよし」

慎とかすみはいつもの如く喧嘩を始めていく。

そして流れるようにしずくと璃奈も二人を宥める。

「もうお二人とも、せっかくの誕生日パーティーなんですから、今日は喧嘩は無しですよ?」

「ごめんなさ〜い」

「すみませんでした」

せつ菜さんに軽く怒られ落ち込む二人。

本当にこの二人は動きが綺麗にマッチングしているので見ていて飽きない。

「まあまあせつ菜ちゃん。そこまでにしておこ？ 誕生日パーティを台無しにしちゃうのはせつ菜ちゃんもいやでしょ？」

「……エマさんがそう言うのであればここまでにしておきます」

「それよりかぐやん、さっきの事だけど、あたしらはエマっちとかぐやんの笑顔が好きだからエマっちだけじゃなくかぐやんにも喜んでもらいたかったの！」

「うん、二人のやり取りを見てると安心する。璃奈ちゃんボード」ぼわわ〜ん」

愛さんがさっきの歩夢さんの発言に補足を入れてくれる。

璃奈もそれに合わせフオローを被せてくる。

「べ、別に、俺はそういうつもりじゃ……！」

俺は恥ずかしくなり思わず反論したがその言葉をエマさんは聞き逃さなかった。

「えっ……？ かーくん私とのお話楽しくない……？」

「へっ!? いやいやそんなことは一言も……！」

エマさんは仕方なくお話してくれているんだと錯覚し上目遣いで目を潤ませてくる。

俺は唐突な誤解に驚きを隠せない。

「……これは素直に想いを吐いた方がいいんじゃない？」

「……さいですか……」

果林さんは耳元で俺に呟く。

エマさん以外のみんなもわくわくしながら俺の言葉を心待ちにしている様子だ。

すぐにも逃げ出しそうと試みたがエマさんがそうはさせない。

「かーくん!!!」

普段のエマさんからは想像できない速さで俺をハグという名の確保をした。

「かーくん……」

今にも泣きそうなくらいの声と表情でかましてくるエマさん。

もう俺には逃げ道はないようだ。というか用意すらされていなかった。

「ええつと……エマさんと話すのは……好きです……。大事な話でも他愛無い話でもしつかりと聞いてくれて……。エマさんがいてくれたからこそ……。俺はここで頑張つてやれてます……。……。いつもありがとう……。そして……。誕生日おめでとunggございます……」

俺はあまりの恥ずかしさに完熟したリンゴのように顔が真っ赤になつていく。

それに呼応するかのようにエマさんの顔も真っ赤になつていく。

「……え、えっへへ……。そ、そういつてもらえて、嬉しいよ……。…」

エマさんは照れながらもハグをやめない。

俺はこのままの体勢が耐えられず早く終わってほしいなど切に願う。

そんな俺たちを見てそこにいる全員が思ったこと。

(あつま……。…)

こんな誕生日パーティーも……。あり？

「特別編」 上原歩夢生誕祭

学校の校庭に咲き誇る桜、それは学生にとっては始まりと終わりのいずれかを連想させるものだと思う。

今の俺にとっては後者にあたる。

今日は俺の大切な人にとって学校行事の中で最も重要な式が執り行われるのだ。

正直今までの人生の中で一番この日を迎えたくなかったと自負できる自信がある。

そう思えるほどの素敵な出会いを俺はこの学校ですることが出来たのだ。

この人に出会えたことが俺の人生の起点だった。

俺の人生に大輪の花を咲かせてくれたのだ。

「あれっ……まだ来てないのかな……?」

行事が始まるまで時間があるので部室に集合しようと約束したのだが、どうやら俺の方が早かったようだ。

多分、あの人は侑さんと一緒に来ているのだろう。

今日が最後の学校生活となるのだから途中までは幼馴染と一緒にいたいと思うのがあの人の素敵なところだ。

それを考えるたびにふとあの人との馴れ初めを思い出す。

あの人と初めて出会った時、正直何を目指そうとしているのかわからなかった。

幼馴染と一緒にスクールアイドルをやろうとする、それは部活動を開始するにはいいきっかけではあるけど、長続きするかと言われたらそれは必ずしもイエスとは言えないだろう。

友達とどんな時にも一緒に居たいという事はそれが壊れた時の反動は大きいということ。

一方がどんどん上達すれば周囲の人から注目を浴び、更に成長していく。

その一方、友達と一緒に部活で、という動機の場合は成長することに意味を見出せず自分の存在が霞んで見えてしまうというのが現実なのだ。

この人も最初はそれと同じだと思っていた。

侑さんと一緒に部活で青春を謳歌したいという軽い気持ちから同好会に来たのではと少し不信感を抱いていた。

でも、この人と同じ時間を過ごすことでそれは根底から覆るのだった。

この人の自己紹介PVを見たときに俺はただ見惚れていた。

スクールアイドルについて何も知らないけれど、それでも自分のできることを一生懸命に、カメラ越しのあなたと共に探したいというこの人にしか出来ない動画になっていたのだ。

その純粹且つ真つ直ぐでひたむきな笑顔に俺は一目惚れしたのだ。

あの人のどんなことにも真面目に取り組む姿に惚れ、それを目で追いかけてしまう事も度々あった。

あの人の笑顔を思い浮かべ作曲が捗らない時もあった。

それでもあの人の事を想いながら過ごす日々は儂くも充実していた。

だが、あの人を想う度に頭にちらつくのが侑さんの姿。

「歩夢さん、こんな感じでどうかな？」

歩夢さんの為に新曲を作ることとなり叩き台となった曲を歩夢さんに聞かせていたある時、ピアノに向き合う俺と歩夢さんの二人だけの時間が流れていた。

「うん！ すごくいいよ輝弥くん！ こんな曲が作れるなんて輝弥くんって凄いな！」

歩夢さんはこうやってありきたりな事でも凄く褒めてくれる。

そんな歩夢さんは珠緒姉さんとは違った温かな雰囲気を出してて、一緒にいて心が落ち着くのだ。

「そ、そんなことないです……。歩夢さんの事を考えたらこういったフレーズが思い浮かんだままです」

「それでも私にとつては凄いことだよ。私には作曲なんて出来ないし、ピアノも出来て歌も上手い輝弥くんが羨ましいよー」

「……………」

俺が謙虚な対応をしても、歩夢さんはお構いなしにどんどん褒めてくる。

言ってくれるのは嬉しいんだけど、そんな風に言葉を掛けられたことが少ないので俺としては恥ずかしくなり何とも言えない気持ちになる。

「輝弥くん、どうしたの？ 顔が赤いよ？」

「べ、別に何でもないです……………」

歩夢さんは突然黙った俺を見て顔を近づけながら首を傾げる。

その仕草でさえも俺にとつては効果は抜群だから勘弁してほしい。

「もう、変な輝弥くん」

一体誰のせいであんなったのだか。

「あつ、歩夢。ここにいたんだ」

歩夢さんとの時間を楽しんでいた時、音楽室へ侑さんが入ってきた。

言葉を聞く限り、歩夢さんを探していたようだ。

侑さんの姿を見て、歩夢さんはより元氣そうになる。

「あつ、侑ちゃん！ どうしたの？」

「特にどうってことじゃないけど、新曲、順調かなって」

どうやら侑さんは歩夢さんの新曲を早く聞きたくて仕方なかったようだ。

「うん、輝弥くんのおかげでいい曲が出来上がる気がするよ」

「さすが、かーくんだね。歩夢がどんどんときめいちやうよ」

「もう侑ちゃんやめてよ」

俺の能力を褒めつつ侑さんは歩夢さんをからかう。

歩夢さんは侑さんの手に拳を可愛くポンポンと突き出しながらいやいや言っているがなんだか嬉しそうにしている。

歩夢さんはこういった人だ。

幼馴染である侑さんの事をすごく大事にしている。

また侑さんも歩夢さんの事を大切に想っている。

歩夢さんの原動力は侑さんであり、侑さんの行動力は歩夢さんが起因している。

そんな以心伝心な二人だからこそあの間に俺が入る隙間はない。

あの人を好きになってしまったことが俺にとっては天使からのプレゼントであり、悪魔からのプレゼントでもあった。

「あつ、輝弥くんお待たせ！ ごめんね。待ったかな？」

物思いに更けていると歩夢さんが部室へ入ってきた。

今日はいつものお団子ではなくおさげの三つ編みでまとめていて普段とは違う大人な印象を与えるものに仕上がっていた。

「歩夢さん、全然待ってないですよ。それより……その髪型、素敵ですね」

「そ、そうかな？ ふふつ、輝弥くんにそう言ってもらえるなら頑張った甲斐があつたよ」

歩夢さんは照れながらも嬉しそうに微笑む。

この人の笑顔を見るたびに俺はやっぱりこの人が好きなんだと自覚できる。

「それでどうしたの？ いきなり部室に集まろうって？」

歩夢さんは部室に呼んだ理由を聞く。

まあ歩夢さんとしては気にならないはずがないだろう。

侑さんや他のメンバーも呼ばずに俺との二人きりなのだから。

「……最後に……歩夢さんと話がしたくて……」

「そっか……。私でよければ時間まで良いよ?」

俺は途端に緊張が走り頭の引き出しから言葉を上手く取り出せなくなっていた。

そんな俺を見ても歩夢さんは気にせず話に乗ってくれる。

「……今日で……歩夢さん達とお別れになるんですね……」

「そうだね。果林さん達が卒業して寂しい思いをしてたはずなのに今度は気付けば私たちが卒業するんだもんね」

去年の今頃、果林さん彼方さんエマさんが卒業してみんなで寂しいと言いながら泣き合ったのが良い思い出だが、それからこの一年があつという間に経ち次に歩夢さん達が卒業するのだ。

辛いときや退屈な時は時間が長く感じるのに楽しいときに限って短く感じる。

光陰矢の如し、俺は歩夢さんへの淡い想いを秘めたまま今日までを過ごしていた。

今この時間が俺に残された最後の時間だ。

「……俺、歩夢さん達に出会えてよかったです。スクールアイドル同好会に入って本当に良かったなって心から思えました」

「ふふっ、それを言うなら私も輝弥くん達に会えてよかったよ。自分一人で出来ることは限られてるけど、みんなで力を合わせればどんなことでも叶えることが出来るんだなって強く思えたもん」

そう言いながら、二人で同好会での思い出を振り返る。

初めて同好会で出逢った時の事、スクールアイドル活動の方針を決めた時の事、スクールアイドルフェスティバルの事、スクールアイドル同好会で単独ライブをやった時の事。

何よりも輝いていた時間が俺たちの胸の中に深く刻まれているのだ。

「そんな楽しかった日々の中でも、歩夢さんの事が俺の中で強く印象に残ってます」

「えっ?」

唐突な告白に歩夢さんは思わずきよとんとする。

「スクールアイドルの事を何も知らなかった貴女が自分に何が出来るのかを一生懸命見つける姿、他のメンバーは才能で壁を乗り越えるのに対して歩夢さんは努力でそれを超えてみせる。そんな貴女が俺にとって途轍もない勇氣や力をくれました」

道端で咲いているような小さな花だった彼女が少しずつ成長して、今では幸せや勇氣をくれる頼もしい人になっっている。

歩夢さん自身は気付かないかもしれないが、傍から見ればそれは凄いいことなのだ。

「えへへ、そう言ってもらえると頑張った甲斐があつたよ♪」
「歩夢さん」

俺は徐に歩夢さんへ近づき、歩夢さんの右手を両手で包む。

その仕草に思わず歩夢さんは顔を赤らめる。

「か、輝弥くん?」

「これからもそんな風に純粹でまっすぐに道を走り続けてください。貴女のその凜とした姿はより沢山の人を幸せにすることが出来ます」
歩夢さんの目を見つめながら心の底からの言葉を歩夢さんにぶつける。

「輝弥くん……うん! ありがとう! 輝弥くんの言葉、しっかりと胸に刻むね!」

歩夢さんは俺の言葉を真摯に受け止めてくれる。

「……今日は突然呼び出してすみません、最後にこれを渡したくて……」

俺はそう言い、ポケットから一つの髪飾りを出した。

薄青色の花が装飾されたシュシュだ。

「えっ! かわいい! これって何のお花なの?」

「勿忘草《わすれなぐさ》って言うんです。歩夢さんはピンク以外にもこういった優しい青色の髪飾りとかも似合うと思いますよ……」

「へえ、そんなお花もあるんだね! 早速つけてもいい?」

「どうぞ、付けてください」

俺の許可を貰い歩夢さんは元々していたゴムヘアを外し早速シュシュを付けてくれた。

ピンクが似合う歩夢さんだが、赤髪と制服の紺色と素敵なコントラストとなつてよく似合っていた。

「どうかな?」

「すごく似合ってますよ」

「ありがとう。今日は素敵な卒業式になりそうな予感がするよ」

「そろそろ時間です。三年生は最後の登校日ですからクラスの皆さんの所に行ってください」

ずっとここにいたいと願っていたが、それは叶わないこと。

卒業式の開始まで時間はあるがそれでも最後の思い出を作ろうと三年生は気合が入っているはずだ。

その時間をこのために奪いたくはない。

「うん、今日は改めてありがとうね! 輝弥くん」

「いえ、改めて……卒業おめでとうございます。歩夢先輩」

俺の祝いの言葉を聞き、歩夢さんは部室を去る。

部室の扉が閉まる音が響かなくなり俺は窓から外を眺める。

外は曇りようなないほどに青空が広がり、その一点ではこの日を盛大に祝すように眩しく太陽が輝いていた。

そう、俺はこれでいいんだ。

この人の隣には俺は立てない。

この人の目には俺は映らない。

この人の耳には俺の言葉は届かない。

人を想う気持ちは人一倍強い歩夢さんだが、自分に向けられた想いには気付かない鈍感な人。

だからこそ俺はこういう形で密かに想いを伝える。

歩夢さんは次への一步を進むというのに俺はその一步を出すことが出来ない。

俺はまだ涙にさようならは出来ないようだ。

「特別編」桜坂しずく生誕祭

4月上旬のとある日、俺は登校して校庭に咲いている桜を見つめていた。

この桜たちも今日は気合が入っているのかいつもよりも大きく花を開かせており華やかさが一層増していた。

俺としてはこの時期にここで見る桜は二回目だが、一回目とは立場が大きく変わっている。

一年前は新入生として不安な気持ちを抱き学園の門を叩いたが今日は上級生として新入生に向けた準備を行うのだ。

新入生にはこの学園で自分の夢を見つけてほしい。

夢への一步をここで踏み出すのだからこの学園へのファーストインプレッションは大切にしなければいけないので無意識のうちに身が引き締まる。

だが、その準備まで少し時間があるので俺はとある人と待ち合わせをしていた。

俺にとってはこの学園で初めて出来た友達であり、初めて出来た想い人。

スクールアイドル同好会廃部問題がきっかけで関わることとなった彼女。

その後、同好会に入部する形で一緒になり自分は支える立場ではあるが切磋琢磨しあい、お互いを知る事でその人間性に触れ、次第に惹かれていった。

その後、部活動の事で悩んでいる彼女と音楽の進み方について悩んでいる俺でいざこざがあり、一時期疎遠になることもあったが周囲の支えもあり復縁するまでに至った。

あの時は同好会メンバーにも気を使わせてしまつて慎たち同級生組から珍しいくらいに剣幕で怒られたのでだいぶ心労を与えてしまったなど深く反省している。

でも彼らがいなければこうしてしずくと交際を始めることはな

かったので、本当に慎たちには頭が上がらない。

今日はその人にとっての記念日だからこそ最初に言葉を掛けてあげたかったのだ。

彼女への想いに気持ち昂りつつもそれを抑えるために桜を見つめていると遠くからコンクリートを叩くローファアの音が俺の耳に入ってきた。

「お待たせ、輝弥くん」

桜から目を離し振り返るとそこには普段と同じ姿でしずくが立っていた。

満開の桜の木から舞い散る花びらが、しずくの可愛らしい微笑みとお淑やかな佇まいをより一層際立たせていた。

さすが、苗字に桜が付いているだけの事はある。

「おはよう、しずく」

俺は真っ先に伝えたいことがあるが今はぐっとこらえて、朝の挨拶から入る。

「おはよう、輝弥くん」

しずくもそんな俺の調子に合わせて返事をしてくれる。

喋らずとも互いの意思を汲み取れるのは俺たちの波長が絶妙にあっている証拠だろう。

「ここにある桜の木もいつの間にかこんなに立派に花を咲かせてたんだね」

「先月までは咲きはしても満開ではなかったからね。改めて見るとだいぶ違うね」

しずくが桜の満開に感動を覚えていると俺もしずくに倣うように桜へと目を向ける。

三月は期末テストの勉強や部活動であまり校庭の桜に目を向けることが無かったのでいつの間にか満開の桜が顔を覗かせていたことに驚きを隠せなかった。

「新入生の輝かしい学生生活の前祝かな？」

「本祝いは当日ってこと？」

「そういうこと」

「それじゃあ、結局は前祝を新入生は誰も拝めないじゃん」

「私たちがそれを伝えればいいんだよ」

「せっかくなら見てもらいたいけどね……」

しずくとこうして他愛無い会話をしているといつも通りの毎日がまた始まるんだなと内心わくわくしている自分がいる。

昨日までは春休みもあり、部活動が無い日は学校に来ることが無かったため桜の咲くタイミングなど知る由もなかった。

勿論、春休みはしずくと一緒にいることが多かったが、それでも家でゆったりくつろぐことが多く、時折舞台を見に外へ出る程度だった。

「でも、最初にここで一緒に桜を見れたのがしずくでよかったよ。素敵な誕生日になりそうな予感がするし」

「ふふっ、そうだね」

俺は徐に小さくともしなやかなしずくの手を握り、そっと両手で包み込む。

しずくはその行動に驚きの声を上げず、ただただ俺の目を見つめるのみだった。

「改めて誕生日おめでとう、しずく。これからが素敵な一年になりますように」

「うん、ありがとうね、輝弥くん。この一年も輝弥くんと一緒に歩いていきたいな」

俺たちはこの桜の木の下でこれからのしずくの道が、これからの俺たちの道が今よりももっと輝かしいものになりますようにと心の底から願うのだった。

今の俺たちを遠目に見た人たちは永遠の愛を誓いあう二人に見えるかもしれない。

そう自惚れてしまうくらいに俺の心は満たされていた。

しずくと一緒に桜を見た後、新入生に向けたイベントの為に部室へ向かっていた。

部室の扉を開けると既に俺達以外の七人は練習着に着替え準備万端だった。

「もお〜遅いよかぐ男にせず子!! 一体どこで何してたのさ!」

かすみは俺たちを見るや顔を丸く膨らませて、早速ぐっ立腹だった。

「大方輝弥がしずくに愛の告白をしてたと愛さんは予想するよ? 愛だけに!」

「べ、別にそんなんじゃないですから!!」

愛さんのダジャレを入れた予想がまさかの当たりを射抜いていたため俺は咄嗟にごまかすがそれとは相反するように顔の温度が上昇するのだった。

「輝弥の嘘の下手さは折り紙付きだなく。璃奈の方がもう少し上手くごまかせるんじゃないか?」

「その自信は……ある」

慎はいつもの如く茶々を入れてくるが、璃奈は慎からの問いに表情を変えることなく淡々と答える。

正直、表情で璃奈に勝てるメンバーは居ないと思うがな。

ただこうやって言うとな璃奈が普段から嘘つきであるという印象を与えてしまうのでそれだけは断じて否定するけど。

「皆さん、輝弥さんをからかうのはそこまでにして今週末に迫ってるイベントに向けて準備を進めますよ!」

「つとその前にしずくちゃんとかーくんにつ提案があるんだけど……」

せつ菜さんは手を叩き周囲の気を自分に向けさせるが、それを侑さんが割り込んでくる。

「えっ? 俺にもですか?」

俺の問いに侑さんはウインクで返事をする。

何やら嫌な予感がするのは気のせいだといいが。

「ええー!?!? 俺がステージにー!?!」

唐突な宣告に俺は動揺が隠せなかった。

「うん。次のイベント、しずくちゃんがメインで出るでしょ? それ

にここで披露する曲もいつもはしずくちゃん一人でのパフォーマンスだったけど、今回は折角だしアレンジを加えたバージョンって事でやれないかなって話してたんだ」

侑さんの返答に対して納得する自分がいるけれどもどこか納得してない自分がある。

「にしてもどうして俺が？ それなら歩夢さんとかせつ菜さんが良いんじゃないあ……？」

「それも考えたけど、やっぱりしずくちゃんの動きを一番分かって尚且つそれを十二分に活かせる人物って言われたらかーくんしか浮かばなくてね」

「私も侑ちゃんからこの話を聞いた時は真っ先に輝弥くんが適任だなって思ったよ？」

「私事です。お付き合いしている点もありますが、それ無しでもお二人の息の合ったコンビネーションには私たちは叶いません」

侑さんは手で後頭部に搔く動作をしながら答えるが、それに被せるように歩夢さんとせつ菜さんもフォローを入れてくる。

「ちなみにお前ら二人以外はこの話を聞いて、既に納得してるぜ」

「うん、しずくちゃんの相手は輝弥くん以外じゃ務まらないから」

「愛さんも二人の間を割って入るのは流石に無理だから今回は輝弥に任せるよ！」

「かすみもそういう事ならって思って声を出そうとしたけど、やっぱりしずくの前じゃかく男には勝てないから今回は仕方なく譲るところにする！」

慎たちも頷きながら侑さんの案に賛成している。

かすみも仕方なくとは言ってるけど、諦めたような笑みを残しながら言ってるのがよくわかる。

「し、しずくはどうなのさ？ 一番は本人がどうしたいかだけ……！」

俺はそう言いながら彼女に目を向けると視線を下に落としており返答に困っているようだった。

と思ったのも束の間、すぐに決心がついたように口を開いた。

「私は……輝弥くんがやってくれるなら一緒にやってみたいな。こんなこと……今まで無かったことだし。新しい挑戦として……一緒にどうかな……?」

しずくは胸の前で握り拳を作り、俺に訴えてくる。

俺の意思を気にしてからか、いつものしずくらしからぬ少し弱気な口回しだが、彼女がこう言うからには俺も女々しくはしてられない。

「はあ……そうやって言われたらやらないわけにはいかないでしょ?

ただ、練習はさせてよ?」

「ふふっ、大丈夫。私がエスコートするから♪」

「その立場は本来俺ただけどな……」

しずくは俺の賛同の声に思わず強気な口調に戻る。

まあ、そうやってしてる方がしずくらしくて好きなんだけどね。

こうしてスペシャルライブに向けた俺たちの猛特訓が幕を開けるのだった。

「輝弥さん、少し早いです! ちゃんとしずくさんの動きを見て合わせて下さい!」

「は、はい! すみません!」

練習が始まってからは苦難の連続だった。

披露する曲はスローテンポであるが為に一つ一つの動作がしずくと中々かみ合わない。

また、ここまでゆつたりとした動作というのは生涯を通して数回くらいしかやったことがない分、その動きに慣れなければいけないと課題は山積みだった。

「一回休憩にしよっか? だいぶ時間も経ってるし」

歩夢さんが小休止を入れる。

俺はそこまで疲労が押し寄せてくるわけではなかったが普段使わない筋肉を使ってる感じがして、違った疲労感に襲われていた。

「輝弥くん、大丈夫? だいぶ無理してるように見えたけど……」

建物の壁にもたれながら座り込む俺に璃奈が声を掛けてくれる。

「俺は平気。だけど、こういったダンスはやったことないから余計に気苦労もあるというかね……」

「もお、かぐ男に譲ったんだからしつかりやってよね？」

「かすみさん、そこまで？ あんまり言わないであげて？」

かすみ茶々を入れてくるがそれをしずくが止めに入る。

それを聞き、一旦引くかすみだったが何か思うことがあるのかしずくの方を見つめていた。

そして、会話に入ろうとしないが慎も同じようにしずくの方を見つめていた。

「輝弥くん、あんまり無理しないでね？ 私も頑張って合わせていくから」

「うん、ありがとう。頑張るよ」

その後も成長があまり見られず、本番に向けての課題だけが嵩張っていくばかりの一日となった。

その日の練習が終わり、俺はひとりダイバーシティのベンチで腰掛けていた。

「はあ……これじゃあ本番までには到底……」

本番まで時間がないことに焦りを覚えつつ対抗策も浮かんでこないで踏んだり蹴ったりな状態だった。

（今日はあいつの誕生日も祝えて、良い一日に出来ると思ったのに……。俺のせいで台無しにしちやっとな……）

しずくの誕生日という事であいつにとって最高の一日に出来ればと思っていたが、そう人生は上手くはいかないものみだ。

「輝弥くん？」

自分に対して悲観的になっているとしずくの声が聞こえてきた。

目の前には優しい目で微笑みながら見つめるしずくの姿があった。

「しずく……」

「ちよつと……一緒に出掛けよう」

しずくはそう言うのと徐に俺の手を握りベンチから立たせ引っ張っていく。

「えっ、ちよつとどこへさ……!?」

「行つてからのお楽しみ♪」

しずくはウインクしながら返事をして、俺を連れ出すのだった。

しずくに連れられてきた場所はダイバーシティから少し歩いたところにある大観覧車だった。

大観覧車へ乗車し、しばらくの間二人だけの世界に入るのであった。

「ここなら私たちだけで話せるね」

「しずく……。その……ごめんね……。今日の練習、全然調子を合わせられなくて……」

俺は今日の出来の悪かった練習について謝るとしずくは笑顔から一切表情を変えずに俺に身体を向ける。

「それは輝弥くんだけじゃないよ？ 今日の練習は私も駄目だったから」

「えっ……?」

俺はしずくの言っていることが理解できなかった。

現に今日の練習は俺がせつ菜さんから指摘されるばかりだったのに、どうしてそう言っているのか分からず思考が固まっていた。

「私もね、動きが今までよりも縮こまってて輝弥くんの動作が私に合っていないように見えただけだよ」

「しずくが悪かったなんてそんなこと……!」

「あるよ? だって現に今日の練習終わりにかすみさんと慎くんに怒られたもん。輝弥くんのあれは普段の私だったら受け止められてたつて」

「ほ、本当なの……?」

「うん。かすみさんは、せつ菜さんはしずくの事を全然見てない! っつて言つてたから。私もかすみさんに言われるまでは全然気づかなかったんだけどね……あはは……」

しずくはかすみに言われたことをかすみの真似をしながら復唱した。

だが、俺の事をちゃんと見れていなかった非を感じてからか、しずくは乾いた笑いをする。

その声は観覧車内で静かに響いた。

「なら、しずくは自分がどうしてそうなったか分かったの？」

「うん。それはね、私も輝弥くんと同じ気持ちだったから」

「同じ……気持ち……？」

「うん、この曲のダンスは今まで私一人で演じていたけど今回輝弥くんと共演っていうのもあって、私も緊張してたんだ。輝弥くんは無理させないようになって無意識な意識が働いて気づいたら普段よりも小さな演技になってた」

「しずくも……そうだったんだ……」

「私たち、やっぱり似た者同士なんだね」

しずくはそう言い、俺に潤った微笑みを向けてくる。

それを見て、俺も思わず笑みがこぼれる。

「ははっ、そうだね。俺達って人一倍他人の目を気にするから、それが足枷になってたんだな」

「うん。でもこうして私たちの悪かったところが見つかったんだから絶対大丈夫。ありのままの私たちを一緒に見せよ？」

しずくは鞆を座席に置いたまま席を立ち、俺の前に立って手を差し出す。

その仕草は本番のステージ衣装を身に纏って見えるほどに美しく煌びやかだった。

「大好きな貴方と最高の舞台を作りたい」

本番でこんな演出は用意していないがこういった余興もありだなと内心思いながら俺も彼女に合わせる。

俺もその場で跪きしずくの手の上に自分の手を乗せ、それを反対に返す。

その姿は絵画で描かれるような一国の王子様とお姫様のようだった。

「なら、エスコートは任せて下さいよ？ お姫様」

「はい♪ 今宵は二人で踊り明かしましょう？」

「貴女の為なら……どこまでも……」

そうして、本番で披露する予定のダンスを即興で始めるのだった。

昼間にあつたような歯噛みの悪さは解消されお互いの距離感を完全に理解している二人はまさに以心伝心であり非の打ちどころのない完成度を誇っていた。

その後開催された新生歓迎会でのライブではこのアレンジが絶大に評価され、二人の絆をより強固なものにするのであった。

「特別編」 宮下愛生誕祭

「ふうー……今日の作曲はこんな感じかな……」

次のライブに向けて俺は音楽室で一人肅々と作曲を行っていた。ちなみに他のみんなは筋トレ組と歌練組で別れて練習を行っている。

今頃彼方さんとかすみが筋トレで果林と慎に絞られている事だろう。

二人共平均よりは上なのだが同好会内で見ると少し柔軟性に弱い所があるからその改善がメインになる。

一方、歌練組はしずくさんがリーダーとして先導してくれているだろうから心配はいらない。

むしろあつちは璃奈やせつ菜さんという練習に対して殊勝な態度で向き合ってくれているメンバーがいるのでしずくはだいたい張り切っていた。

俺と侑さんはみんなのサポートとしてそれぞれの練習を見ていたがライブの新曲を作るという事もあり俺は一層体に力が入っていた。そして、見ているだけではいられないと侑さんにみんなの練習を押し付けてしまい自分は音楽室へ立て籠ってしまっただ。

みんなが歌う楽曲についておおまかなイメージは完成していたが、俺とはある人物のコンセプトに頭を悩ませていた。

「宮下愛さん……。この人の持ち前の明るさをどう表現できるのかな……」

情報処理科二年、宮下 愛さん。

せつ菜さんが復活を遂げたあの日、璃奈と一緒にライブを見ていた彼女が心を滾らせてスクールアイドル同好会の門を叩いた時は驚いた。

以前に部活見学をした時、慎と一緒に見ていく先で何回この人の姿を見たのかも分からない。

それほどにこの人は運動部の助っ人として重宝されていた。

そして、凄く明るい性格で誰にでも分け隔てなく接するので生徒会

長と同じくらいに生徒からの支持も厚い。

正直、俺みたいな陰で生きていた人間とは雲泥の差だった。

「やつほー！ かぐやん！今日はこっちにいたんだね？」

自分と愛さんの格差を憂えていた時、大きな声で音楽室の門を叩く者がいた。

その明るい声色と大きな声量からその正体を考えるのに時間を掛からなかった。

「愛さん、お疲れ様です。今日は筋トレ組でしたよね？」

「そうなんだけど、ゆうゆは歌練組を見てくれてるのに対してあたしらにはかぐやんがいないのが気になっちゃってね。だからカナちゃんとかすみんはカリンとシンシンに任せてきちゃった！」

愛さんはあははと笑いながら語りかけてくる。

あの二人は熱意があり過ぎるせいで一時のせつ菜さんよりもスパルタな所がある。

まあ、慎たちもそれは自覚してるから練習時間が増えた時には休憩時間は多めにしたりと飴と鞭をしっかりと使いこなしているのは流石といった所だろう。

ちなみにかぐやんとシンシンは愛さんが俺達に付けたあだ名である。

俺のやつは良いのだが、慎のあだ名についてはこれを聞きたびに動物園のとある人気者が頭に浮かんでしまうのはここだけの話。

「ああ……すみません。次のライブが近づいてきたのもあって落ち着いていられなくて……」

「別に謝る必要はないよ。作曲はかぐやんだけの専売特許なんだからさ。それに愛さん達全員のソロ曲を一人で作ってるんだからその時点で愛さん達はかぐやんに感謝してもしきれないよ！」

そう、これは俺が直談判したことなのだがメンバー達のソロ曲については自分の手で作りたいとお願いした。

だが、全てを俺に投げるわけではなく作詞や振付については自分たちで考えると申し入れてくれたので、そこに関しては任せることにした。

「それで？ 今はどんな感じなのさ？」

「ひとまず璃奈の分までは終わりましたよ。次は愛さんの曲にかかろうと思っただところでした」

「おっ！ ならタイミングばっちりだったってことだね！ 折角なら愛さんもご相伴に預らせてよ！」

愛さんは言葉に合わせて指を鳴らした。

そして、食い気味になりながらピアノの椅子に腰を掛ける。

だが、ただ座るだけに留まらないのがこの人の溢れ出んばかりの人当たりの良さが発揮される瞬間だ。

「……愛さん、 近くないですか？」

この人は俺との距離を数ミリしか空けずに隣へ腰かけに来たのだ。俺としては二人の身体が当たったりしたら、なんてことを考えてしまい頭が軽くパニックになっているが、愛さんは変わらず笑顔のままだ。

なんの躊躇もなく座る愛さんに俺はただ戸惑うのみだった。

「だつてかぐやんとこうして喋る機会がなかったからさ。それにかがやんって愛さんが近づこうとしても少しだけ距離を空けようとするの、愛さんは見てるんだぞ？ だから折角の二人きりだし思い切っても良いかなって！」

「うう……距離を空けようとしたのは面目ないです……」

愛さんからの文句に対して、俺は弁解の余地すらないので申し訳なさしか出てこなかった。

愛さんの持ち前の明るさが時に眩しすぎる時があるのだ。

今までこうして関わってきた人間にまともと言える人がいなかったことが俺の逃げ腰を助長させていた。

だからこそ愛さんを初めて見た時も苦手意識が働いてしまい、避けるような態度をとっていたのだ。

「そういうえば、愛さんの曲を作るって言ってたけど譜面はまだ白紙だね？」

愛さんはピアノの譜面台に置いてある譜面に顔を覗かせる。

愛さんの言う通り譜面は真っ白だ。

だが彼女の言った言葉に一つだけ指摘するとしたら。

口を開こうとした時、愛さんが言葉を被せてきた。

「……いや、消した後？　もしかしてあんまり作曲進んでない感じ？」
愛さんは心配そうにこちらを見つめる。

「……そうなんです。愛さんが以前に披露した歌も参考にしつつ新曲を作ろうと思っていましたんですけど、これといったインスピレーションが何にも浮かばなくて……」

以前に披露したというのは同好会の方向性を決めるきっかけとなつた公園でのゲリラライブの事だ。

あの時は自分なりに愛さんのイメージソングを当てて、そこに後追いで愛さんが詞を作ったものを披露したのだが、今回は二番煎じにならないように独自性を入れていく必要がある。

だが、今の俺の頭にはどう頑張つても前回と似たようなフレーズが浮かんでしまい、どれも愛さんの新しい可能性を引き出すには至らなかつたのだ。

「そつか……確かに同じようなメロディとかだと聞いている人からしたら飽きが来たりするもんね」

「はい。なので今は手詰まり状態なんです……」

俺は段々と自信が無くなつていき声色が弱くなつていく。

それを見かねた愛さんがピアノ椅子から立ち上がりとある提案をした。

「あつ、じゃあさ！　今度の土曜日、空いてる？」

「えっ？　まあ、空いてますよ？」

突然の愛さんからの質問に一瞬気が抜けてしまったが、冷静に答えしていく。

「なら、一緒に遊びに行こう——！！」

俺の答えに満足した愛さんは大きく拳を天井に突き上げながらそう宣言するのだった。

「……えっ？」

俺は状況が理解できず呆然としていた。

「だから、息抜きも込めて一緒に遊ぶんだよ！　ライブまでまだ時間

はあるし、そんなに急ぐような状況でもないからさー！」

「でも曲を作らないとこれからのダンス練習とかも進まないんですよ?」

「今、こうして気が滅入ってる状況だと曲も何もないんじゃない? だからリフレッシュの意味も含めて思いつきりはしゃいで遊ぼうよ!」

俺の必死の反論も虚しく愛さんに一蹴されてしまう。

「じゃあ、また時間と場所は追って連絡するよ! それじゃあ愛さんはカナちゃん達の所へ戻るね!」

愛さんは俺の返事を待たずに音楽室からいなくなってしまった。

音楽室は嵐が過ぎ去った後のように静寂が訪れていた。

「はあ、俺も今日はあつちに合流するか……」

先ほどの愛さんの言葉が効いた俺は作曲の事をひとまず頭から切り離すために荷物をまとめて筋トレ組に合流することにした。

その準備に取り掛かったとき、俺の脳裏に一つ疑問が浮かび上がった。

(……そういえば今週の土曜日って……)

この誘いが意図的かはたまた偶然かは神のみぞ知るだが、何も準備しないわけにはいかないなと気持ちを引き締めるのだった。

愛さんと遊びに行く当日、俺は愛さんから連絡を受けた場所で彼女が到着するのを待っていた。

愛さんと遊ぶのはこれが初めてなので正直緊張で胃が痛くなってくる。

ただ胃痛の原因がそれだけに留まらなかったのだ。

「やつほーかぐやん! 待たせちやったかな?」

俺が胃痛と戦っているのと遠くから聞き馴染みのある明るい声が聞こえてきた。

「おはようございます、愛さん。僕はそんなに待っていないので大丈夫ですよ」

「そっか! 愛さんも約束の時間よりも早めに到着する派なんだけ

ど、かぐやんも中々に早いんだね！」

お互い、時間は守る方だったようで予定より15分早く集合してしまっただ。

「僕も時間に遅れるのだけはしないように心掛けているので」

「うんうん、良いことだよ！　じゃあ時間も惜しいし早速出発しようか！」

愛さんはそう言い出発の準備をする。

俺が胃痛と戦う要因となった要素、それは今回のお出かけは二人きりという事だ。

音楽室での約束の後に璃奈や慎も誘う提案をしたが、愛さんに拒否されてしまったのだ。

俺としては他のメンバーもいれば少しは気持ちも楽になるかと思っただが、愛さんたつての希望なのでそこにとやかく言うつもりは無い。

だが、俺は生まれてこの方、姉さん以外の異性とお出かけなど片手で数える程度なので余計に緊張していたのだ。

愛さんの性分や人となりについてはまだ完全に分かっているとは言えないので、その中で二人きりのお出かけという高すぎるハードルを用意されてしまった。

「……カグヤ、ちよつと緊張してる？」

俺の中で様々な感情がせめぎ合いをしている中、愛さんが声を掛けてくる。

微笑んではいるもののいつもの明るい口調ではない。

「……気づきましたか？」

「そりゃね。なんかいつもと違ってだいぶ素っ気なく感じたからさ。それにあたしら二人だけのお出かけだしそれが拍車をかけたのになって思ってる」

愛さんは特に考え込む素振りもなく俺が不安視していたことを言い当てる。

璃奈が彼女を慕うのもこうして気持ちを汲み取ってくれるからだろう。

「正直、愛さんの事をまだ分かってない中でこのお誘いだっただけそれが余計に僕の中で枷になって……」

愛さんに心の内を言い当てられた以上、方便を並べても仕方ないので本心を吐露する。

すると愛さんは歩みを止め、こちらに顔を向ける。

「カグヤはあたしのお出かけ……楽しみじゃなかった？」

「いや、そんなことは断じてないです！むしろこうして誘ってくれることも嬉しかったです！ただそれでもこういう経験はしたことなかったので緊張してしまったというか……」

俺は他にどう弁解しようか悩んでいると愛さんは突然大きく笑い声を上げた。

「あつはは！そう言ってくれるなら誘ってよかったよ！カグヤがなんか困ってたみたいだから愛さんも力になってあげたいなって思ってた……そしたら勝手に体が動いちゃってさ……！正直無理させてないかなって不安だったんだよ」

「ふふつ、愛さんでもそう思う事があるんですね」

「ええ〜？そりゃ愛さんだって人間だもん、他人の表情とかは何っちゃやうよ？もしかしてかぐやんの目には愛さんはそう映ってたのか〜？このこの〜！」

愛さんは俺の発言を「人間味を感じられてなかった」と捉え、お仕置きと言わんばかりに俺の頬を両手で潰そうとする。

「うう〜ひゅみまひえんでひた〜」

押し潰す力は強くないが段々恥ずかしさが増して、思わず謝罪の言葉が出てくる。

愛さんは満足したように両手を離して頬を解放してくれる。

「でも今のかぐやんの言葉を聞いて分かったことがあるんだ。あたしらって今まであんまり交流もなかったでしょ？だからカグヤが曲を作ろうにもあたしの変わらないイメージが定着しているから似たようなメロディが出来てたんだよ」

「た、確かにそうかもしれないですね……。知らず知らずの内に元々のイメージに固執していたってことですね」

愛さんから解放され頬を軽くさすりながら愛さんの言葉に相槌を打つ。

「だから、今日は目一杯遊んであたしの良い所、沢山見つけていってよ！」

愛さんはそう言い切ると俺に向かって手を差し伸べる。

それは暗闇の中を彷徨う旅人に溢れ出んばかりの熱い輝きで道を照らす太陽のようだ。

「分かりました！ 絶対に見つけてみせますよ！」

俺の返事は愛さんに負けないくらい熱い想いが込められていた。

その後、二人で一緒にクレープを買って食べさせ合ったり、最近の流行りファッションを愛さんに教えてもらいながら服を試着してみたりと非常に充実した時間を過ごすことが出来た。

「……………どうでしょうか……………」

俺は緊張の面持ちで愛さんに姿を見せる。

「……………うん！ ばっちりだよ！ やっぱりカグヤは素材が良いからこういうファッションもイケるね！」

とあるお店で見つけた服を愛さんが「カグヤなら絶対に似合う!!」と有無を言わさない程に断言したので、俺はその熱に押され試着してみたのだが俺の普段とは違う姿を見て愛さんは嬉しそうに笑う。

「自分でも不思議な気持ちですけど……………なんか悪くない感じがします」

「あつはは、そうやって自分に自信を持つことがモテる男への必須条件だよ！」

「……………別に僕はモテようとしてるわけではないんですけどね……………」

そう苦言を呈す俺だが、愛さんに褒められて満更でもない気持ちになった。

「あつ、これかすみんなに似合いそうじゃない!？」

「そうですね。あとこれは慎に似合うんじゃないですか?」

「うんうん絶対イケるよ！ これは是非とも二人にプレゼントだね」

！」

服屋から立ち去ったのち、アクセサリー屋を物色していた。

普段ならば寄ることはないのだが、今度のライブに使える物があるかもしれないという愛さんからの提案により立ち寄ることにした。

その結果、同好会メンバーに似合うアクセサリーが沢山見つかりお土産に買っていくことにしたのだ。

「いやあ、こうして考えるとうちの同好会って中々高スペックだよねえ。アクセサリー探しがここまで捗るとは思わなかったよ！」

「確かにそれには同意します。だからこそよりその子を魅力的に見せなければと気合が入りますもんね」

愛さんと同好会メンバーの凄さについて喋っていると俺はとある宝石が埋め込まれたペンダントが目に入った。

「……愛さん、これらは僕がまとめて買っておくので先に外に出てていいですよっ！」

「えっ？ 別に一緒についていくけど？」

「ここまでだいたい歩いてきたんですから、少し休んでてください」

俺は愛さんにそう言い残すと店の奥へと消える。

そして、目当てのペンダントを買おうと手に取る。

(これは……良いプレゼントになるな)

そう今日という日に絶好のプレゼントだと心の中で確信した。

「いやあ、もうこんな時間か〜楽しすぎて朝まで居座る所だったよ〜！」

楽しい時間はそう長くは続かないもので気付けば日が暮れかけていた。

愛さんはまだまだ遊べると言わんばかりに全身を伸ばす。

「本当ですね。幸せな時間でした」

「じゃあ、そろそろ帰ろっか」

「っとその前に一つだけ良いですか？」

俺は帰ろうとする愛さん呼び止める。

「ん？ なになに〜？」

突然呼び止めた俺を愛さんは不思議に思い、こちらへと顔を向ける。

そして俺は徐に今日のお出かけで買った小さな箱を愛さんへと差し出す。

「……今日、誕生日ですよね?」

「あつ……」

愛さんは突然はつとするように顔を横に向ける。

「お出かけの日を今日に選んだのが狙ってやったことか偶然だったかは聞きません。ですけど、今日のお出かけで愛さんに似合う素敵なものに出会えたので僕からの些細なプレゼントです」

「……覚えてたんだ」

「勿論、仲間であり大切なお友達ですから」

愛さんは恥ずかしがりながらも俺からのプレゼントを受け取る。

「……中、見てもいいかな?」

愛さんの問いに俺は微笑みながら頷く。

愛さんが緊張気味に開けた箱の中にはオレンジ色のオパールが埋め込まれたペンダントが入っていた。

「わあつ……綺麗……」

「先ほどのアクセサリーショップで見つけたんです。愛さんって他のメンバーに対してのプレゼントは買うのに自分には関しては何も提案してなかったですからね。だから僕が愛さんに似合うものをプレゼントします」

愛さんは嬉し涙をこぼしそうになるがすぐにそれを引っ込めて笑って見せた。

「ああもうやだなあ〜! そんなサプライズ用意するなんてずるいぞお〜!」

「お出かけの日を今日に選んだ本人が言う事ですか?」

愛さんの苦し紛れの文句に俺は正論で返す。

この人は自分の誕生日であることを承知の上で設定したのだ。

なら、それに応えるのが男だろう。

「正直、こんな素敵なものを貰えるとは思わなかったからすごく嬉し

いよ……！　ありがとう……！」

「どういたしましたです。それと、誕生日はまだまだ終わりませんよ？」

「へっ？」

愛さんはまだこれ以上のものがあるのかと素っ頓狂な声を上げた。

「同好会のみんなに愛さんの家に集まるよう声を掛けたんです。ここからはメンバー全員による誕生日パーティーの始まりです」

「ええええ………マジっ……!?!」

愛さんは先ほどよりも大きなリアクションで驚きの声を上げる。

愛さんの誕生日が休日という事もあり、みんなで愛さんの家にお邪魔して一緒にお祝いできないかと提案したのだ。

それに関してメンバー全員賛成で同意、また宮下家の方には璃奈が掛け合ってくれて合意をもらっている。

「そうなんだ………どんだけ用意してくれたのさ……!」

「みんな、愛さんの真つすぐな応援に沢山の力を貰っているんです。その恩返しですよ」

「もう……愛さん泣きそうだよ……」

そう言う愛さんの眼には光るものがあつた。

「さあ、パーティーはまだ終わりませんから一緒に行きましょう?」

俺は手を差し出しながら答える。

愛さんはもう一度涙を拭きとり、その手を取る。

「オツケー!　……ここまでしてもらつたのに主役が泣いてたら駄目だね

!　ならここからは愛さん家まで競争だあ——!」

愛さんは言い切る前に駆け出してしまった。

「ええ!?　ちよつと、いきなりは反則ですよ——!!」

「愛さんは今日の主役だからいいの——!」

愛さんからの無茶な言いがかりに俺は困り顔を見せる。

だが、これも愛さんらしくて良い所なんだと俺は自然と笑みを溢しながら宮下家へ走り出すのだった。

「特別編」朝香果林生誕祭

とある日のこと。

今までと同じ何の変哲もない一日が終盤に向かおうとしていた時、ある人からお呼び出しがかかったのだった。

呼び出しがかかったのも彼女がこちらに来ようとするはずと言っているほど迷子連絡が届くのでこちらから出向くようにしたのだ。

「こんにちは、お疲れ様です」

ライフデザイン学科の教室に向かうと呼び出し人は自分の机でモデル雑誌であろう本を読んでいた。

「あらっ、お疲れさま輝弥くん。急に呼び出してごめんなさいね？」

「気にしないで下さい、果林さん。それで何かあったんですか？」

果林さんは俺の声を聞き、読んでいた雑誌を閉じてこちらに向き直る。

ただ椅子に座ってこちらを振り向いただけなのにモデルさながらの気品を感じて、少し緊張感が増してしまうのはここだけの話。

「侑から少し聞いたんだけど……貴方、私の曲で苦戦してるんだって？」

「……別に苦戦してるわけでは……」

「ならこっちをちゃんと見ながら言いなさいよ？」

侑さんと同好会メンバーの楽曲イメージについて話していた時に果林さんの曲についての話題になったのだ。

果林さんはどこまでもチャレンジング且つ挑戦的な姿勢が特徴なのでそれを表現したくて邁進しているのだが、これが中々上手くいかない。

どう頑張っても果林さんの勢いに曲がついていかないのだ。

折角果林さんが頑張っても曲が弱ければ相対的に果林さんの評価も落ちてしまう。

それだけは防がなくてはいけないので侑さんにアドバイスを貰っていたのだ。

この件は本人には余計な心配を掛けたくない関係もあり、本人には黙っておくつもりだったのだが侑さんはつい話してしまったようだ。まあ彼女に口止めをしていたわけではないから侑さんを責めるのはやめておく。

聞かれたくなかった人に問われ、苦し紛れの回答がお茶を濁そうとするがあっさり嘘がバレる。

やはり俺は嘘を付くという事が点で弱いらしい。

「貴方って分かりやすいから嘘かどうかなんてすぐに分かるわよ？」
「……さいですか……」

果林さんはからかうように目を細めながら指摘してくる。

正直果林さんも大概だとは思うのだが果たして思い違いだろうか。

「……何か失礼な事考えてない？」

「いえ、そんなことは滅相ごいけません、はい」

果林さんが目を細めながら刺すような視線をぶつけてくる。

俺は心拍数が上がりながらも平静を装いながら返事をする。

そんな俺を不審に思いながらも果林さんは軽いため息を吐いて話題を変える。

「はあっ……もういいわよ。それより私が呼んだのも楽曲作りについてよ」

果林さんは自席から立ち上がり俺の前に立つ。

そして、お互いの距離が近くなり果林さんから見下ろされる状態になった時、果林さんは徐に俺の顎に手を当て、クイッと傾けてくる。

「えっ、か、果林さん……？」

唐突にやられた仕草により思わず顔が熱くなり胸が高鳴っていく。

そして、果林さんは自分の口に人差し指を当てウインクする。

その仕草は大人の女性を彷彿とさせる妖艶さが滲み出ており、耐性がついていない男子生徒なら即墮ちてしまうのではないだろうか。

その後、人差し指をこちらに近づけてきたので思わず目を閉じてしまったが、その瞬間口元に指が当たる感触があった。

「ふふっ、何赤くなってるの？ やっぱり輝弥君って可愛いわね」

目を開けたらそこには明らかに俺の反応を楽しんで微笑む果林さ

んの姿があった。

「……こんな時までからかうのはやめて下さい」

「貴方が良い反応をするのがいけないのよ？　しずくちゃんに似て真面目なんだからつい楽しんじゃうわ」

「……そこでしずくさんを出さなくてもいいんですよ」

「あらっ？　私と一緒にいるのに他の女の子の話題を出すって？」

「そういうわけじゃないです。ただ……自分に自信が無いように見られますよって……それだけです」

「……えっ？　べ、別にそういうつもりじゃないけど」

「ふふっ、顔に出ていますよ」

先ほどまで俺をからかって楽しんでいた果林さんだが、状況が一転しこちらの反撃の番となった途端、果林さんも目を反らす。

それは全く俺と同じような仕草だったので、思わず笑みがこぼれてしまった。

やはりこの人も俺と同じように攻められると弱いタイプだ。

「……なんだか最近可愛げが無くなってきたわね」

「さあ、誰のせいでしょうかね？」

先ほどまで俺の事を可愛いと言っていたのに俺に対しての評価がフオークボールの如く急速変化を起こしている。

「私に対して随分と生意気な口を利くようになったじゃない」

「果林さんだから言えるっていう所もあるかもしれませんが。エマさんや彼方さんにはこんなやり取り出来ませんからね」

「私には敬意というものが無いのかしら？」

「そういう事じゃないですよ。こんなやり取りが出来る果林さんだからこそ僕も安心できるっていう事です」

エマさんや彼方さん達は優しい人物なのでこういった冗談も真剣に受け止められてしまい、内心傷つかれるのではないかと心配になってしまう。

一方、果林さんはなんだかんだ笑って受け止めてくれそうので、こういった冗談をぶつけたくなってしまふ。

またからかった時の反応が良いことも俺の中ではポイントが高い。

勿論、先輩である彼女に対しての尊敬もあるし決して彼女の事をバカにしているつもりではないのでそこだけはしっかりと受け取ってほしい。

「……そういう事にしておくれ。話が脱線してしまったけど、来週少し付き合ってくれない?」

果林さんは不完全燃焼になりつつも当初の目的についての話に切り替える。

「付き合うと言いますと?」

「来週、期末テストじゃない? それが終わった後にモデルの仕事が入ったのよ。折角なら一緒についてこない?」

「こんな期間でもお仕事が入るんですか……」

テストは学生の本职工作である勉強の集大成と言っても過言ではないので別の事に現を抜かすことは極力避けたいはず。

それでもそのスケジュールで入れられたお仕事に嫌な顔一つせず承諾した果林さんは凄い人だと改めて自覚した。

「まあ次回の雑誌に掲載される内容だからそれは仕方ないわね。これでもある程度の融通は利かせてくれるのよ?」

「そうなんですか。それで、どうして僕にそんな事を?」

「楽曲作りについて悩んでいるんだったら、学校外での私の一面を見るのも良いんじゃないかって思ってたね。ほら私達って二人で何かをするってことがあまり無いじゃない?」

確かに果林さんと遊びにいくといったことをしたことがないため、普段の果林さんについて何も知らない。

であれば、新しい果林さんの姿を見つければ自ずと違ったコンセプトの曲が出来上がるのではないかと果林さんは提案してくれたのだ。

「なるほど……。良いと思います! 果林さんが良いのでしたら是非一緒に行かせてください!」

「良いも何も私から誘っているんだもの、貴方が良いと言ってくれないと話が始まらないわよ?」

俺自身、モデルのお仕事と言っても果林さんがどういった事をしていいのか知らなかったのでもいい機会だと思う。

果林さんも俺の返事に満足したようでこうしてお互いの予定が埋まったのだった。

「僕はオツケーです。ではお仕事に支障をきたさないように全力で臨めるように明日からのテストに向けて勉強しないといけませんね!」
「そうね! ……つて、え? いや、別にそこまでしなくても……」

「何を言ってるんですか! これでテストが駄目で補習によりお仕事に行けませんってなる方が果林さんのイメージにも関わります」

テストが翌日に迫っていることもあり赤点を出すという事を何としても避けたいので果林さんに発破を掛けるように言うが、果林さんは俺との熱の差に少し引き気味だった。

「今日は部室でテスト前の勉強会を開くとせつ菜さんが言っていたのでそちらに参加しましょう! 善は急げです!」

「ええー!? そ、そんなあ……エマアア……!!」

苦悶な表情を浮かべる果林さんをよそに彼女の手を取り、部室へと向かうのだった。

前を突っ走る俺の後ろで果林さんが助けを求めながら連行されていく様が周囲の人の目に映っていたそう。

時が流れモデル仕事見学の日。

俺は果林さんについていくために虹学寮の前に立っていた。

ここには果林さんの他にエマさんや慎も住んでいる。

お仕事に付いていくのだから折角なので一緒に向かわないかと果林さんからお誘いを受けたのだ。

初めての果林さんとお出かけという事もあり少しばかり緊張している。

決して遊びに行くわけではないのだが、それでも二人きりで、というのは初めてなものだから、普段の果林さんの姿に想像を膨らませていた。

そして、今日はただのお仕事が入った日というわけではない。

今日を一緒に過ごす人にとって大切な……。

「輝弥君、お待たせ」

思考を遮るように果林さんが寮門の前に姿を見せた。

夏らしく袖が短くフリルの付いたシャツに膝上丈のスカートで果林さんのスタイルの良さを全面に出していた。

「そ、そんなに待っていいないので大丈夫ですよ」

「あらっ？ 普段の私を見る機会がないからもしかして緊張してる？」

初めて見る果林さんの私服姿をドギマギしてしまうが果林さんに見抜かれてしまい彼女お得意の弄りが始まる。

「べ、別にそういうわけじゃないです……」

「いつもの目逸らしが発動してるわよ。相変わらず可愛いわね」

「むうー……」

「あらっ、拗ねちゃったわ。そんなに機嫌を損ねないで？」

「そう言いながら頬をムニムニするのやめて下さい」

果林さんからの弄りに機嫌を損ねていると果林さんはそれを面白がるように俺の両頬を指でツンツンと突っついてくる。

これをまだ知り合って間もない人からされれば少し苛々が募ってくるが果林さんなので怒るのは良しとしよう。

「ふふっ、これ以上輝弥君をからかったら折角のデートが台無しになっちゃうわね」

「で、デート!? そ、そんな大それたものじゃ……!」

これはデートとは違うものだと思い、あえてその言葉を考えないようにならしていたが果林さんは気に留める様子もなく平然と言いのける。

「ぷっ、そこまでムキにならなくてもいいじゃない？ 軽い冗談よ」

「もう、冗談が過ぎますよ……全く……」

「つとそろそろ出発しないと時間に遅れちゃうわ。行きましょ」

俺の弄りに満足したのか果林さんは腕時計で時間を確認し、出発するように促す。

「切り替えが早くないですか……? でも、実際撮影の時間まで迫っているので行きましょうか」

俺は果林さんの変わりように戸惑いを覚えつつ撮影場所へ向かう

事とした。

撮影スタジオへ着いた後、すぐに果林さんの撮影が始まった。中には撮影用のカメラマンとスタイリスト、そしてヘアメイクさんとモデルの人を全力で輝かせるための準備が万全に整っていた。

果林さんは用意された衣装に着替え、カメラマンやディレクターの指示の元でポージングを切り替えながら撮影が行われていた。

仕事に臨む果林さんの姿は今までスクールアイドル同好会で見せている姿と同じように仕事に対して全力で向き合っていて凄くかっこよかった。

シャッターが切られた後、自分で写真を見て満足がいかなかったところについては改善点を提示した上で再度撮影をしたいと直談判しているので大人顔負けの真剣さだった。

そして、そんな果林さんを他所に仕事場に果林さんと一緒に入った俺についての噂が絶えなかった。

「おっ、彼氏か？」

「あの子、朝香さんの彼氏さんかしら？　かわいらしいわね」

「朝香もついに色気づいたか？」

周りの大人達も一匹狼な印象を果林さんに抱いていた関係もあり、俺との関係性について議論が白熱していたようだ。

それよりも俺に対してかわいいと言った人がいたことが俺の中でダメージがある。

男として生まれた以上はカッコいい側の評価を貰いたいものだが、かわいいと言われると男の魅力が無い様に思えてしまう。

「ふう、やっと終わったわ〜」

撮影開始から一時間ほど経過しただろうか。

気分が落ち込み気味になっていると、ポージングで凝ったであろう肩をほぐしながら私服姿の果林さんが更衣室から出てきた。

「果林さん、お疲れ様です。これ、僭越ながら差し入れです」

「ふふっ、ありがと。いただくわ」

俺は果林さんが撮影中、特にやることがなかったので差し入れ用に

飲み物を買ってきていた。

果林さんは俺から飲み物を貰うとすぐに蓋を開けて、汗として抜けた水分を取り入れるように口の中へと運ぶ。

冷たい飲み物のお陰で火照った身体が落ち着いていくようで、果林さんは二口分飲むとすぐに蓋を閉じる。

飲んでいる時も汗が首筋を走っていたため少し色っぽさが込められているのと同時に、その飲みっぷりの良さに見ているこちらも気持ち良かった。

「どうだった？ 私の仕事は？」

「凄く良いものを見させてもらいました！ 被写体として役割をこなすだけでなくスタッフさん達にも自分の意見をぶつける姿は凄くかっこよかったです！」

俺からの真つすぐな称賛の言葉に果林さんは少し顔を赤くし照れていた。

「そ、そうかしら？ モデルと言っても私自身、完璧な姿を読者には見てもらいたいからね。私が抱いた違和感とかは余すことなくぶつけるようにしているの。ほら、自分の中で燻ぶらせて後から悔やむなんてことしたくないでしょ？」

「なるほど、後悔を残さないように疑問に感じたことは確認するんですね」

「そうよ。それが結果的に流れを変えなかったとしても、その人たちの中に新しい可能性を見出させることが出来るんだから、相手が大人だからって遠慮せずに言うようにしているのが私のスタイルなの」

果林さんの仕事に対するポリシーを知る事が出来て、より果林さんが同好会の中でも頼もしい存在に見えてきた。

「では、同好会の中でもやってるどんな事でも躊躇わずに発言するというスタイルは果林さんの流儀という事ですね」

「そうね、一歩下がった視点で毒づいているようであまり良い印象はないでしょうけど……」

「そんな事ないです！ むしろ誰よりも客観的に見て下さっているの、むしろ果林さんのお陰で視野が広がっているんです！」

自虐的になっている果林さんを落ち込ませまいとそれを払拭するように果林さんのお陰で救われていることを挙げていく。

同好会のメンバーはみんな優しい。

だが、優しいがあまり相手の意見を尊重しようと自分の意見を抑え込もうとする。

それにより否定的な考えが出てきても相手を不安にさせてしまうと感じてしまうのだ。

そんな中で全く異なるタイプである果林さんは、同好会に新しい風を送り込んでくれた。

そこには果林さんなりの情熱があり、自分の信念に従って活動しているのみなのだ。

「ふふっ、そう言ってくれて嬉しいわ。なら私の新しいイメージについて掴むことは出来たのかしら？」

「……そうですね。正直、現時点では上手く言葉を纏めることが出来ませんが……でも良いインスピレーションが浮かんでくるような気がします！」

「素直なことね。でも、良いイメージを与えられたのならば連れてきた甲斐があったわ♪」

俺の自信が無い発言について正直な気持ちを吐露しながらも成果が得られたことを喜ばしく思う果林さんだった。

「ねえ、今からもう空き時間だし、このまま遊びに行かない？」

「……えっ、このままですか!？」

「当然よ？ だって朝は学校でテスト、昼は仕事で疲れたんだもの。一緒にリフレッシュしていきましょ♪」

仕事帰りに遊びに行く体力まである果林さんに驚きの声を上げていると果林さんは何を言っている？ と言わんばかりに笑みを投げてる。

「……それに。仕事で見た私以外の姿も貴方に見てほしいわ♪それも新しい私のイメージにつながるでしょ？」

果林さんの執念のお誘いに、俺はついに折れてしまう。

「はあ……分かりました。今日は果林さんのお誕生日ですし、楽曲作

りは置いておいて楽しませようか」

「あらっ、覚えててくれたのね？」

「勿論です。お誕生日に仕事を入れるなんて流石にどうかとは思いましたけど……でも僕らだけの時間を作ることが出来たって考えれば有りですね」

「ふふっ、そういう事♪ じゃあ今日は私の行きたいところにとことん付いて来てもらおうわよ？」

「分かりました。改めてお誕生日おめでとうございます。僕に新しい果林さんの姿を見せて下さい」

「ありがと♪ 後悔させないからしつかり付いてきなさい！」

言いそびれていたお祝いの言葉を果林さんは何のお咎めもなく受け止めてくれる。

そして、果林さんに手を引かれながら二人きりのデートが始まるのだった。

果林さんに連れられて動物園、スイーツ巡り、ゲームセンターでの勝負と半日で遊ぶには十分過ぎる時間を過ごすことが出来た。

充実した時間のお陰で果林さんとの距離が縮まり更に親密になったことを実感することが出来たのだった。

「特別編」優木せつ菜生誕祭

「うーん、何にしようかなあ……」

授業が終わり、音楽室へ向かった俺はとある日に向けて密かに準備を始めようとしていた。

それは俺が同好会に入るきっかけを与えてくれた人に対するものだ。

退屈だった日々を変えてくれた彼女に恩返しをしたく、やる気に満ち溢れていた。

だが、やる気にあるのは良い事でも、いい発想が浮かんでこないのは世の常だ。

気持ちが空回りして逆に失敗しないようにと少し慎重になってしまふ。

「でも……やることは一つしかないか」

色々と俺なりに彼女に対するプレゼントなりを考えたが、俺自身彼女のどんな顔を見たいかを想像したらやりたい事は明白だった。

俺が一番見たい顔、それは無邪気に笑う姿だ。

ありきたりに思える事だが、実はそのありきたりが非常に重要なのだ。

俺はどんなに挫けそうになっても、辛く泣きそうになっても、その人の笑顔を見るだけで全てが上手くいくのではないかと自信が漲る。

どんな時でも彼女の笑顔を思い出すだけでそれは勇気となり力になる。

あつ、今さりげなくダジャレになっていた。

愛さんと侑さんに聞かせたらさぞ面白がるだろう。

「……まっ、こんな台詞、笑う場面で言う内容じゃないけど」

心の中で思いついた洒落に悪態をつくと思いを本題へと切り替える。

そもそも何故音楽室にいるのかという事になるだろうが、ここならば誰かが来ても作曲中という事で部活を偽装出来るのだ。

無論、こんなサボり方は今回が最初で最後のつもりだ。

「あの人ならアニメ関係で通ずるし、カラオケとかもありかな……」
彼女の趣味と連想させながら遊びに行く候補場所を思い浮かべ、メモに書いていく。

そんな時、思いがけない訪問者がやってくる。

「失礼します。輝弥さん、いらつしやいますか？」

「へっ？ あっ……せつ菜さん!？」

今一番独り言を聞かれたくない人が目の前に現れたので思わず声が上ずってしまう。

「そんなに驚かれてどうしたんですか？」

「いや、別に何でもありません！ それよりもどうされたんですか？」

俺の計画をせつ菜さんに悟られまいと話題を無理矢理変える。

「はい、次のライブで披露する新曲の状況を確認したいなと思いましたが」

「うーん、せつ菜さんが話してたみんなの大好きを応援する曲ですけど今のところこれっていうイメージが降りてないんですよね」

とは言うものの実は7割ほどは完成している。

今回の事を念入りに検討できるようにと事前に曲作りは始めていた。

それに新曲についてはせつ菜さんが歌いたい内容ややりたい事を事細かく示してくれたのでその甲斐もあって非常に作曲は捗っていたのだ。

だが、そんな裏事情を知らないせつ菜さんは自分に責任を感じていた。

「そうですか……？ それは……すみません、私の要求が細かくて輝弥さんには負担を掛けてしまっていますね……」

「そんな事ないですよ。むしろ作曲の流れは今ままで掴めているのにそれをモノに出来ていない僕自身の地力の無さもありますから気にしないで下さい」

「いえっ、輝弥さんはそんなに自分を卑下しないで下さい。貴方は今の時点でも私達の事を支えてくれるキーパーソンなんですから。そ

んなに自分の事を下に見られたら貴方を信じてる私たちが惨めに思えてしまいます」

自分の実力の無さを認めた上で発言をしたがせつ菜さんからお咎めを貰ってしまった。

この人は信頼が厚い人には遺憾なく尊敬の念を抱くので卑下しているのを聞いたなら、自分のことも否定されていると聞こえてしまう人なのだろう。

「ありがとうございます。ですが、自惚れて失敗するよりかは良いと思いませんか？」

「それは時と場合によります！ 輝弥さんは自分の事を過小評価しがちなのでそれで自信を無くされないように私もしつかりと頼りにしているところを見せないと！」

せつ菜さんからそんな告白紛いな事を言われ胸が熱くなるのを感じた。

「ふふっ、ならその期待に応えないといけないですね」

「はい！ あっ、それと輝弥さん、部活とは関係ない事ですが少し良いですか？」

「ほう？ いいですよ、どうかしましたか？」

次のライブに向けてお互いの信頼を確かめ合ったのち、せつ菜さんは思い出したかのように話題を変える。

「今度の日曜日、少しお付き合い頂けませんか……？」

「今度の……日曜……日……？」

せつ菜さんからお誘いの日に運命を感じずにはいられなかった。

「……もしかして……何か予定がおありでしたか……？」

「あぁっいえっ！ そういうわけじゃないんです！ それよりも今度の日曜日という……」

「……自分で言うのもあれなんです、私の誕生日なんです」

せつ菜さんは気恥ずかしそうにする。

まあ自分から誕生日なんて言うと、自分の誕生日を祝せと言っている感じであまり気乗りしないのは同感だ。

「そうですね、もしかして何か欲しいものでも？」

「いえっ、そこまで烏澁がましい真似を出来ません！ その……お出掛けに行きたいなと思ひまして……」

「うーん、どこか行きたい所とかは決まってるんですか？」

「はい。この時期ですし海に行きたいなと思ひまして」

「おおー、海ですか。良いですね。でもそれなら他のメンバーも一緒の方が良くないですか？」

そう口にした時、せつ菜さんは目を反らしてしまふ。

どうしたんだろう。自分の水着姿を見られるのが恥ずかしいのだろうか。

「海なんですけど……泳ぎに行くわけではないんです……」

「ほう？。では何をしに？」

せつ菜さんの意図が読めず、つい圧力をかけるように問い詰めてしまつていた。

だが、せつ菜さんも腹を括つたように正面から俺の顔を見据える。

「あの……聖地巡礼に……！」

一瞬せつ菜さんの言う事に理解が追いつかず瞬きの回数が増えてしまつていたが、瞬きをする毎に状況を整理していく。

「聖地巡礼……ですか？」

「はい、実は静岡県のとあるスクールアイドルグループが活動した場所に巡礼に行きたいんです。もちろんただ巡礼をするだけではなく夏ですので自然の空気を味わうのも良いですし！」

聖地巡礼に関して特筆した知識を持っているわけではないが、アニメの元ネタになった場所に赴いてそのキャラ達が過ごした時間を体感しに行くことだというのは分かる。

そもそも、そういった活動はしたことがないので聖地巡礼というものに興味が湧いた。

「なるほど……ならそれも有りか……」

「輝弥さん？」

先ほどまで考えていたプレゼントプランとは違い非常に良い案だと思ひ、乗つかることにした。

「分かりました。凄く楽しそうですし僕でよければご一緒させて下さ

「い
「ふふっ、ありがとうございます！ 輝弥さんならそう言ってくれると信じてました！ では予定についてはまたご連絡させて下さい！」
俺の返事に満足したせつ菜さんは曇りっ気のない笑顔に向けてくる。

やはりこの笑顔はいつ見ても元気になれる。

「はい、またお願いしますね」

そう言う中で俺はとある決意を固めようとしていた。

それから当日。

向こうへは一緒に行きたいというせつ菜さんの要望で駅に集合することにした。

俺はいつもの如く15分前には到着してせつ菜さんが着くのを待っていた。

(果たして、言うタイミングが見つかるかな……)

お出かけの約束をしてから今日までの間、何も調べずにいた俺ではない。

俺がやろうとしていたことを成そうとそれらしい場所を探していた。

おあつらえ向きの場所は見つけたので、あとはそれを切り出せる勇氣があるかどうかだった。

「輝弥さんーん！ おはようございますー！」

そんなことを考えていると俺の思考を遮るように明るい声で挨拶をしてくるせつ菜さんの姿があった。

「おはようございます、せつ菜さん。朝から元気ですね」

「えへへっ、これが私の性分なので！」

こんなことを言っているが今日が楽しみで眠れなかったと言われたらどうしよう。

「ふふっ、そうですね。それとお誕生日おめでとうございます。今日はせつ菜さんにとつて素敵な一日になるようにしますので」
「ありがとうございます。こちらこそ輝弥さんを退屈させないようにプランを考えていますので一緒に楽しみましょう！」

こうして、俺達の誕生日お出かけが幕を開けるのだった。

お出かけという事で十分な張り切り具合を見せた早々、電車内で途中からせつ菜さんの頭が小舟を漕いでいた。

「せつ菜さん？ 大丈夫ですか？」

「あっ……すみません、実は今日の事を考えたら昨日はあまり寝付けなくて……あまり寝れてないんです……えへっ……」

まさかせつ菜さんと会った早々に脳裏に過つたことが的中してしまふとは。

どうやら俺の中にも予知能力を芽生え始めてしまったようだ。

「そ、そうなんですか……？ なら無理されず寝ていいですよ？」

「近くなったら僕が起こしますから」

「い、いえっ、お気になさらず……！ このくらいならどうってこと……！」

「それで日中に倒れられたらこちらが困ります。僕に対しては無理をするなって言うのに自分が無理をしようとしなくて下さい」

幸い電車内は指で数えるほどしか人がいないため、そこまで視線を気にする必要もない。

「ううー、ですが……」

「巡礼中に頭が空っぽになって折角の旅が楽しめなくなりますよ？ そんなのせつ菜さんだって嫌じゃないですか？ 無理はなさらないでゆっくりお休みください」

「か、輝弥さんがそう言うなら失礼します……」

そう言うときつ菜さんは俺に身を預けるようにもたれ掛かり、暫しの仮眠に着くのだった。

ここまで遠足を楽しみにしていた子供のようなリアクションをされると学校内での印象と違い過ぎてどちらが本当の彼女か分からなくなってしまう。

だが、それが彼女の魅力なのだろう。

電車に乗ってから数時間後、俺達は目的の場所へと着いた。

「いやあー、着きましたねー！」

沼津に!!」

そう、俺達は静岡県沼津に来ていた。

ここには一躍時の人ならぬ時のグループとなった人たちがいるのだという。

せつ菜さんはかの地に降り立った喜びからテンションが最大限に高まっていた。

「そ、そうですよね……」

「おや？ 輝弥さん、どうしたんですか？ 行きでもうお疲れになつたんですか？」

疲労感に苛まれているときつ菜さんが首を傾げている。

(一体……誰のせいでこうなってるのか……)

そう、俺がこうなっているのは他でもない彼女のせいなのだ。

せつ菜さんが眠りについたのはあれから数十秒後だった。

すぐに寝息が聞こえてきたので余程寝れなかったことが伺えたがせつ菜さんが安らかに寝ているのを他所に俺は内心緊張が高まっていた。

異性とここまで近い距離にいることなど姉さん以外に無かったと言っても過言ではない俺の隣で、学園内でも人気の高いスクールアイドルが身を委ねて寝ているのだ。

周囲に人が少ないのは良いもののそれでも乗り合わせてる人とふと目が合うと途端に恥ずかしさが増してくる。

別にこちらを妬んで見ているわけではないのだがそれでも気になるものは気になる。

片や可愛らしい寝顔、片や刺されるような視線と逃げ場がなく板挟み状態だったのだ。

ドギマギしていると電車が少し揺れ、身を委ねていたせつ菜さんが反対側へ倒れこもうとしていた。

「あつ……」

思わず左手を伸ばし、左肩を優しく抱えるように押さえた。

咄嗟に手を出したおかげでせつ菜さんは倒れずに済んだものの心拍数はさらに高まる一方だった。

(押さえれたはいいものなんでこんな抱きしめる形になっちゃったんだよおおお……)

せつ菜さんは変わらず寝息を立てているので起こさなかっただけ良しとしよう。

刺激しないように優しく先ほどと同じように自分の左肩にもたれ掛けさせる。

(本当に……この人はいつも俺の心をかき乱すな……)

ほっと一息吐いたものの、この一連の流れのせいで全く落ち着かなくなってしまうたのだった。

だが、目の前で楽しそうにはしゃいでいる彼女を見ると疲れていた俺の心も次第に和らいでいった。

今日は折角のせつ菜さんとお出かけ。

お互いに悔いの残らないものにしたかったので先ほどまでの暗かった自分とはここでお別れをしよう。

「それよりも夏真っ盛りなのもあって暑いですね……」

今日は曇り気が全くない日本晴れ。

お出かけをするには絶好の日だが体が灼けるような暑さが逆にお出かけをする気力を削いでくる。

「これが夏というものです。ボヤいていても仕方ありませんよ！ むしろ雨にならなかつたことを感謝しましょう！」

だが、目の前の少女はそんな太陽に負けない熱気で俺を奮い立たせる。

「そうですね。こういう時に見る海は非常に良いものですし、今だからこそ出来る事を楽しみましょう」

沼津駅から出ている運行バスに乗り向かった先はとある和洋菓子店だった。

「ここも聖地なんですか？」

「はい、そのスクールアイドルはここでよく練習終わりに茶菓子を頂いていたそうなんです」

店内に入ってみると席数は少ないが木造のテーブル席が風情を感じる素敵なお店だった。

「なるほど、素敵なお店ですね」

ショーケースに並んだ和菓子、洋菓子を見て早速腹の虫が鳴っていた。

「あははっ、お腹も空いているようですし一休みしましょう♪」

「はむっ。……うーん、美味しいです！ みかんの酸味がタルトやクリームと程よく絡み合って……絶品です！」

各々食べたいものを注文してテーブル席で待つこと数分。

せつ菜さんはみかんタルトを注文して早速頬張っていた。

「はむっ。……うん、こちらも美味しいです。プリンが優しい食感とクリームの甘さで口の中が幸せになっていく感覚がします……」

俺は半熟プリンを注文したが、こちらも透明の容器から覗けるプリンが綺麗な乳白色をしていて食欲をそそられていた。

また少しカップを揺らすだけでプリンがぶるぶると震えるのでそれもまたプリンとしての完成度の高さが伺えるものだった。

すると、せつ菜さんは物欲しそうにプリンを見つめていた。

「輝弥さんのプリンも美味しそうですね……」

「一口食べます?」

「えっ、よ、よろしいんですか!?!」

「そんなリアクションされて食べさせないほど、僕も鬼じゃありませんよ」

どうやら食べさせてもらえるとと思ってなかったようで驚きがいぶ大きかった。

「はい、どうぞ」

せつ菜さんへプリンとスプーンを差し出して食べるように促す。

「そ、それでは頂きます……! はむっ」

俺からスプーンを受け取り、これでもかと言わんばかりにプリンへクリームをよそおい、口の中へ放り込む。

口に入れた数秒後、すぐに笑顔がはじけた。

「うう〜ん、美味しいです!! プリンのこの柔らかな食感が口いっぱいに広がって……クリームも合わさりこちらも最高に美味しいです!」

「お気に召したようでよかったです」

自分で作ったわけではないが、思わずシェフ側の気持ちに立って返事をしてしまう。

「あっ、私だけが食べさせてもらっているのは駄目ですよね! 私のタルトも一口どうぞ!」

そう言うときつ菜さんは自分のフォークにそこそこの大きさはあ

るみかんとタルトを刺して、俺に食べさせようとする。

「はい、あーん」

まさか食べさせようとするとは思わなかったが、せつ菜さんの好意を無下にはしたくないので素直に受け取る。

「あつ、あーむ……」

少し顔が熱くなりつつもみかんタルトの味を噛み締める。

「うん、美味しいです……」

「そうですよね！ どちらも私達だけで食べるのが勿体ないです！」

俺からの味の感想に満足したせつ菜さんは太陽のような笑顔を向けてくる。

室内にいるのに日に照らされているような暑さが襲ってくるようだった。

（この人は本当に無自覚でやるんだから……）

先ほどの行為といい、天然たらしの素質を持つてるせつ菜さんにただただ苦笑いしか出なかったのだった。

松月でお腹を満たしたのち、俺たちはとある旅館の前に来ていた。

「せつ菜さん、ここは？」

「ここはスクールアイドルグループのリーダーが住んでるお家なんです」

「へっ……？ 旅館が……家!?!」

旅館が家とは随分と裕福そうな印象を受ける。

「そうですね。ですが、その人はそこら辺にいる普通の高校生と同じだったんですよ」

せつ菜さんはそう言うリーダーさんの事を話し始めた。

「彼女は、自分は何も取り柄が無い、つまらない人間だとして今まで心の底から充実した生活というものを送れてなかったそうなんです。幼馴染は運動神経抜群でよく大会で受賞していると近々で見えていたんだとか」

「それは……心までは満たされなかった……という事ですか」

「はい、そんな中でスクールアイドルに出会って、普通の高校生が自分たちの力で輝こうとする姿に心を打たれたそうなんです。そして、彼女もまたスクールアイドルを始めました」

「その高校はどこにあるんですか？」

「あちらにありました」

せつ菜さんはそう言うと、旅館の右側を指差した。

「ですが……その学校は……もう残っていません」

「えっ……？」

衝撃の事実思わず目が点になってしまった。

「その学校は生徒数が伸び悩んでいた関係もあり、次の一年生が規定の人数まで募集が無ければ廃校にするということだったんです」

せつ菜さんは振り返り、近くにある砂浜へ歩き出し波打ち際の目前で足を止めた。

「ですが、彼女たちは廃校という壁にぶつかってもその学校が存在していた証を残そうと奮闘したんです。そして、ライブで優勝を果たし、その悲願を叶えた」

「優勝した母校は知名度を上げつつも惜しまれつつ廃校となった……。だから伝説になっているんですね」

「はい、ここにきて彼女たちが刻んだ時を感じたかったです。そうしたら今後の同好会の活動にもまた新しい風を吹かせられると思います」

「なるほど……。凄く……素敵なことだと思います」

俺はただただ彼女たちの偉業に感嘆の声しか出なかった。

「今日は付いて来て下さってありがとうございます。おかげで良い時間を経験出来ました」

「もう目的の場所は回った感じですか？」

「はい、あとは個人的に気になっていた箇所を巡るのでも良いかと思っただけですが……」

その言葉を聞いて、動くなら今しかないと俺は意を決した。

「なら、行きたい場所があるんです。良ければ付いて来てもらっても

いいですか？」

「はい、良いですよ。時間はまだまだありますから！」

せつ菜さんから了承を貰うと早速目的の場所へと足を運ぶのだった。

着いた先はロープウェイ乗り場だった。

「これからロープウェイに乗るんですか？」

「はい、ここら一帯を一望できるスポットがあると聞いて行ってみたかったんですよ」

「わあ……それは楽しみですね！」

期待に胸を膨らませつつロープウェイに乗り込むせつ菜さん。

そして、刻一刻と俺にとっての戦いの時間が迫ってくる事も感じながらロープウェイに乗り込んでいく。

「わあ——!! 凄く綺麗ですね!!」

ロープウェイを登り切ったのちに見えてきたのは目線いっぱい広がる山と海の壮大な景色だった。

「こんな所もあつたなんて……輝弥さんも今回のお出かけを随分楽しみにしてたんですね」

「まあ……そうですね。それよりも少し先に行けるみたいなので進みましょうか」

そう促すとせつ菜さんと一緒に歩きだしていった。

山道を超え、木の板で作られた橋を越えると辿り着いた先には展望台があつた。

そこからの景色は乗り場で見えたものとはまた違うもので先ほどまでいた和洋菓子店や旅館、それから近くにある島々も一望できるところだった。

「こちらもいい景色ですね！」

せつ菜さんは一通り見渡すとあるスポットが目に入った。

「あれは何でしょう？ 行ってみましょう！」

「ああ、せつ菜さん……！ 先に行っちゃおうか……！」

見られたくないスポットを先に見られたため、少し焦りが出てきたが今更どうこう言っても仕方ないと思い、せつ菜さんに着いていく。

あるスポットに到着したら、せつ菜さんは先に一本の木柱を凝視していた。

「これは……！」

「ここは恋人の聖地と呼ばれているんです。その象徴として挙げられるのがその”幸せの鐘”です」

木柱に吊るされている鐘を見ながら、解説をしていく。

「恋人の聖地……ですか？」

「はい、その鐘を二人で鳴らすと幸せになれるんだとして有名なんですよ」

俺の言葉を聞き、せつ菜さんは鐘の先に伸びている紐に触れる。

「この鐘を……二人で……！」

鐘を見据えた先にせつ菜さんが何を思っているのかは読めなかったが言うなら今しかないと思い、腹を括る。

「せつ菜さん」

俺はせつ菜さんを呼び、こちらへ振り向かせる。

そんな俺の声に触っていた紐を放し、こちらへ身体を向けてくるせつ菜さん。

「輝弥さん？」

「僕は……虹ヶ咲学園に来るまで、何の取り柄もないつまらない男でした。思い出したくもない日々の中、趣味である音楽と姉さんの存在だけが僕に生きる価値を与えていました」

「……………」

せつ菜さんは一言も発することなくこちらの言葉に耳を傾けてくれる。

「そんな中でこの学園に入学して、荒んでいた俺の心とある少女が救ってくださいました。その人は自分の大好きをありのままに体現

して、俺の大好きもその人は肯定して後押ししてくれたんです」

言いたい言葉が止まらなくなり少しずつ饒舌になっていく。

「彼女のお陰で今の俺がいます。そこから俺が抱いたもの。それは俺の心を救ってくれたその人の事をもっと知りたい……誰よりも近い所に立ちたい。そんな欲望でした」

少しずつ顔の温度が上がりつつも決して逸らないように気持ちを落ち着ける。

そして、優しくせつ菜さんの右手を握る。

「優木せつ菜さん。俺は貴女の事が誰よりも好きです。せつ菜さんが溢した悩みも全部受け止めて誰よりも貴女を幸せにしたいと思っています。もし……貴女がこれから先を俺と一緒に歩いて下さるといふのなら……この鐘と一緒に鳴らしてくれませんか？」

せつ菜さんに対しての告白をして、俺は決して目を反らさずせつ菜さんの事を見つめていた。

ここで視線を外せば彼女への想いが嘘になってしまうように捉えられてしまうからだ。

彼女からの返事がどうであろうとそれは真摯に受け止める。

ただただ、彼女の一言を待っていた。

せつ菜さんは視線を下に落とし答えに悩んでいるようだった。

それは良い意味とも悪い意味とも取れる動きなので俺は内心落ち着けずにいた。

「あ、あの……」

口を開いて、せつ菜さんが顔を上げた時には彼女も顔が赤く染まっていた。

「か、輝弥さんからそう言ってもらえて、す、すごく嬉しいです。輝弥さんも……私と……同じ気持ちを持って良かったなど……心からそう思いました……」

その発言に一瞬理解が追い付かなかったが、状況を飲み込んでいきその後によく言葉を想像するのはそう難い事ではなかった。

「私も同じように貴方に救われました。自分の大好きに殺されていた私を輝弥さんは優しく受け止めてくれた。それが私にとって一番の

幸せです」

せつ菜さんは握られた右手に乗せるように左手を被せる。

「巴輝弥さん。私も貴方が大好きです。これからの人生を私と一緒に歩いて下さい」

せつ菜さんの返事を聞いて思わずにやけてしまう自分がいた。

「ほ、本当ですか……？ ゆ、夢ではないんですよね……？」

やばい。今の俺、最高に気持ち悪い顔をしている自信がある。

そんな俺を見て、せつ菜さんも少し悪い顔をしていた。

「夢ではないですよ。試しにほっぺをつねってみましょうか？」

「いったたた……！ そう言いながらつねらないで下さい……！」

頬の痛みを実感したことでまやかしくはなく現実を起こったことだと改めて自覚することが出来た。

「でも、本当に良かった……せつ菜さん。本当にありがとうございます」

「こちらこそ素敵な誕生日をありがとうございます♪」

お互いの想いに感謝を述べた後、二人で静かに幸せの鐘の紐を握る。

「僕たちの未来に……」

「素敵な景色があらんことを」

アニメに出てきそうな台詞を二人で述べた後、大きく鐘の音を鳴らす。

大きな鐘の音で近くにいた鳥たちも驚きのせいか飛び出してしまったが、今の俺達には新たな門出を祝して演出しているかのように見えた。

「ふふっ。鳴らしてしまいましたね」

「はい、やっちゃいましたね」

鐘の音が無くなりあたりに静寂が訪れる。

その空気に思わず笑いが込み上げてしまう二人。

「さあ、下に降りて駅の方へ戻りましょう。まだお出かけは続きますからね！」

「望むところです。どこまでもついていきますよー！」

「ふふっ。ありがとうございます。輝弥くん」

突然の呼び名の変化に驚きが隠せなかった。

「だけど、こんなせつ菜さんも有りだなと思うと笑みが浮かんできた。」

「こちらこそです。せつ菜さん」

そう言いながらロープウェイ乗り場に向かおうと歩き出す。

手を繋ぎながら山を下っていく二人の姿はどこまでも太陽のよう
に眩しく、彼らの進む道が明るいものであることを暗示しているよう
だった。

「特別編」 天王寺璃奈生誕祭

「璃奈ー？ いるかー？」

とある日、俺は授業が終わったと同時に本日、部室で開催されるイベントの主役である璃奈を迎えに上がっていた。

「あつ、輝弥くん。どうしたの？」

璃奈はどうして俺が来たのかまだ状況が分かっていない様子だ。

それもそうだろう。

彼女にとって今日はいつもと変わらないありふれた一日だからだ。

「こっちもホームルームが早く終わったからさ、折角だし璃奈と一緒に部室行きたいなって思ってる」

「そっか。慎くんは一緒じゃないの？」

璃奈はいつもなら俺と一緒にいるはずの慎の姿が見えなかったため周囲を見渡しながら質問した。

「あいつは、先に行ってるから早く姫様を迎えに行ってこいって茶化してきたよ」

俺は苦笑交じりにそう答える。

だが、慎はただ茶々を入れたかつたわけではなく、先に行つて部室での準備を進めてもらってるからそう言っているだけだ。

璃奈はそんな慎の発言に少し不貞腐れている様子。

「別に私、姫様って呼ばれるほど綺麗じゃない……」

璃奈は姫様と呼ばれたことが不服なようだ。

茶化されるとは言えども、自分はそんな大層な人間ではないとして卑下してしまっているようだ。

「慎はただ俺達をからかいたかつただけだよ。それに璃奈は姫様って呼べるくらいに……可愛いと思うけど……」

慎の発言を気に留めないようにフオローするが、その後の言葉のチョイスを誤って墓穴を掘ってしまった。

こういった言葉は小っ恥ずかしいからあまり人前では言わないようにしていたのだが、璃奈のクラスメイト達がいる中でつい口走ってしまった。

「そ、そっか……」

璃奈も顔を背けているが、少し顔が赤い。

周囲は恥ずかしがっている俺達を微笑ましい目で眺めている。なんだかこのまま部室へ行かずに帰りたい気分だった。

「こ、ここで時間を潰してもあれだし、もう行こっか」

「う、うん。璃奈ちゃんボード、おー」

帰りたいたいとは思ったが流石に有言実行したら総スカンをくらってしまうため、気持ちを切り替えて部室へ向かおうとする。

璃奈も恥ずかしさを誤魔化す為か、以前に発案した璃奈ちゃんボードを用いて空気を変え、この場を後にしたのだった。

璃奈のクラスから移動して、周囲に人が見えなくなってきた関係もあり俺達は手を繋ぎながら部室へ向かっていた。

「全く、あとで慎はお置ききだな?」

「もちろん」

俺が口に出さなければよかった話なのだが、先ほどのやり取りは慎のせいにする事で二人の中で決意が固まっていた。

「そういえば、璃奈は明日は何か予定でもある?」

俺は唐突に話題を切り替え、明日の都合について口にする。

璃奈は顔を軽く上にあげて考える素振りを見せる。

「いや、特に決まってるない。両親は変わらずお仕事でいないから一人かな」

璃奈は少し寂しそうにそう答える。

だが、俺としては好都合だった。

「そっか、ならよかった」

「え?」

予定が空いていることに安堵した俺だが、璃奈は少し驚いていた。

「明日、一緒に出掛けない? 明日は璃奈の誕生日で璃奈にとっての大切な日だから一緒に居たいなって思ってる」

今日、これからみんなとやるのも誕生日パーティーだったのだが、本命は明日なのだ。

何故今日やるのかと言っても、全員が都合を付けやすいことに加え、付き合っている俺達で当日はゆっくり楽しんでほしいというメンバーなりの配慮だろう。

「……うん、行きたい。何しに行くのか決まってるの？」

「うん、二人でゲームセンターやカラオケに遊びに行きたい」

今まで二人きりでやっていた事としてどちらかの家に遊びに行き、ゲームをしたりアニメと一緒に鑑賞したりピアノを聴かせたりとまったりとした時間を過ごすことが多かったが、今回は思い切っ外で遊びたくなった。

璃奈は元気がある頷きを見せて、すぐに了承の意を示した。

「楽しそう。私も凄く楽しみ」

「璃奈がそう言うってくれてよかった。なら明日は迎えに行くね？」

「うん。待ってるね」

大方予定通りではあるが、約束を交わして安心したと同時に部室へと到着した。

「じゃあ、まずは今日のパーティーを思い切り楽しもうか」

「うん……」

二人が部室へ入った時には盛大にクラッカーが鳴り響き、同好会メンバー全員による祝福の言葉が一斉に璃奈へ掛けられるのだった。

部室へ到着するのが予定より遅かったことでメンバー総出で揶揄われた事。

そして、慎のせいで一瞬居心地が悪くなったとして璃奈と一緒に仕返しをしたのはまた別の話である。

「やとと、お呼びしますか」

部室での誕生日パーティー前日祭から翌日。

俺は璃奈の家に来ていた。

家と言っても戸建てやアパートというわけではなく、セキュリティが完備されているマンションだ。

相変わらず璃奈の家はうちとは規模が違い過ぎてため息が出る。だが、それで時間を潰すわけにもいかないの、璃奈の家のインターホンを鳴らす。

「輝弥くん、ちよつと待ってて。すぐに行くから」

機械越しに聞こえてくる璃奈の声。

楽しみにしていたのか軽く声が上がっているようにも感じる。

「いいよ。そんなに急がなくていいから」

俺が話しかけた後にインターホンが切られる音がした。

急がなくていいと言ったが、相手からしたら待たせているという事実だけで余計に慌ててしまうので結局この言葉は水泡に帰すだろう。

インターホンが切られてから数分経っただろうか。

璃奈が家の中から少し慌てた様子で出てくる。

「おはよう、輝弥くん。待たせちゃってごめん」

「おはよう、璃奈。だから俺はそんなに慌てなくていいって言ったのに」

璃奈の様子を見て俺はつい口元が緩んでしまう。

「だって折角のお出かけだしここまで来てもらってるのにずっと待っててもらうのは嫌だったから……」

璃奈は自分の誕生日だからと自分だけが樂をしてしまうのを不服に思っているようだ。

「誕生日くらいはそこまで意地張らなくていいよ。っていうか、こういう日でもしっかりされちゃうと俺のメンツが保てなくなっちゃうから……」

真面目な璃奈だからこそこういう姿も彼女らしくて好きなのだが、今日は祝いの日に加えて一応彼氏であるからこそしっかりと璃奈の事をエスコートしていきたい。

それで俺の出番が無くなってしまったらそれこそ自分に自信を無くしてしまう。

「そんな事よりも……璃奈、誕生日おめでとう。今日は素敵な一日に

しようね」

「……うん！　ありがとう。私も今日は輝弥くんといっぱい楽しい思い出を作りたい」

お出かけに行く前に璃奈への祝辞を述べ、改めて目的の場所へと出発するのだった。

「今日はゲームセンターで何かやるの？」

「これをもってやつはあまり決めてないんだけど、俺クレーンゲームをあまりやったことが無かったからそれをやりたいなって思ってた」

ゲームセンターに到着し、何をして遊ぶのか璃奈が聞いてきた。

俺はアニメ関係のグッズがプライズとしてゲームセンターに置いてあるという話を聞きつけ、是非璃奈と一緒にやってみたいと思ったのだ。

「なるほど。なら私に任せて。クレーンゲームは大の得意。輝弥くんとお揃いをゲットしたい。璃奈ちゃんボード、むん」

璃奈がいつものボードを交えた決意表明を行い、やる気に満ち溢れていた。

クレーンゲーム一帯を見渡してフィギュア関係やお菓子のプライズを眺める中、俺達はとある景品に視線が行った。

「あっ、これってあのアニメのキャラクターだよね!？」

「うん。しかも寝そべっているタイプのぬいぐるみは珍しい……!」

そこには床に寝そべる形でぬいぐるみが置かれていた。

推しのぬいぐるみが目意識されていたので、俺は釘付けになっていた。

「凄く可愛い……。このファントムのぬいぐるみ、欲しいな……」

「このクレーンゲーム、二つのアームで手前に落とすタイプだから、コツを掴めばあまり苦戦することはない」

璃奈は筐体の設定を確認して、取りやすいかどうかを判断する。

このタイプは璃奈にとってはおすすめの筐体のようだ。

「なら俺でも取れるかな？」

「大丈夫。私も協力するから一緒に取ろっ？」

璃奈の心強い言葉もあり、推しを迎えるべく二人の戦いが始まった。

ゲームを始める前にどこから狙えばいいか璃奈がレクチャーしてくれる。

「まず最初は奥にある足を片側のアームで狙って」

「顔を掴んでアームから落ちた勢いで前に持つてくるのは駄目なの？」

「それも狙えなくはないけど、お店の設定によってはそれを出来にくいくらいにアームの強さが変えられてることがあるの」

璃奈がその店のスタッフなのかと思わせるくらいに饒舌に攻略法を教えてくれる。

こういうゲームは初めてやるから、いきなりドツボにハマるのは避けたいのでこういったアドバイスは非常に助かる。

「今回のような寝そべっているタイプのぬいぐるみって重心が顔の方にあるの。だから下半身の方を狙っていけば身体を横を向いて次に狙いを定めるのも容易になるの」

璃奈は手でジュエスチャーも交えながら、どうしてそこを狙うのかを理論的に教えてくれる。

「なるほど……。重心が無い所を狙えばぬいぐるみの方向も変えやすいつて事だね。でも、そこからはどうするの？」

「それはまた後で説明するね。今はまずこのぬいぐるみを横向きに変えよう」

璃奈の指示の元、いよいよアームを動かす。

アームが右へ動くボタンを押して、それに連動してアームもゆっくり動いていく。

「……ストップ！」

璃奈の掛け声とほぼ同時と言えるタイミングで俺もボタンから手

を離す。

「うん。狙いは良い。次は奥行きだけど、ここは腰辺りを狙うようにして。腰の方が足を狙うよりも大きく身体の向きを変えられるから」
「分かった」

璃奈の指示に合わせ、奥にアームを動かしていく。

そして、腰辺りに狙いが行ったと思いボタンを離す。

「これでどうだ……?」

「狙いは良い。かなり動くと思う」

どういった挙動になるのか掴めぬままアームがぬいぐるみの元へと降りていく。

そして、狙い通りアームが腰を掴みぬいぐるみは引き寄せられるように身体の向きを変える。

アームが上に戻った時には更にぬいぐるみの向きが変わり、通常の置き位置から四十五度以上は横に向いていた。

「完璧。輝弥くん、初めてにしては凄く上手」

「ほんど? 璃奈のアドバイスのお陰もあるけど、これをもう一回やればいいのか?」

「うん。ぬいぐるみが真横を向くまで下半身の方を狙っていけばいいよ」

それから璃奈の的確な指示の元、クレインゲームに熱中していた。

「だいぶ良いところまで持ってこれたか……?」

「うん。初めてでここまで行けるのは凄い。やっぱり輝弥くんはセンスがある」

少ないクレジット数でぬいぐるみを璃奈が狙っていた真横へと向けられていた。

璃奈もうんうんと頷きながら俺のポテンシャルの高さを評価してくれる。

「それでも、何とか璃奈の指示についていくので必死なんだけどね

……」

「いや、輝弥くんは良いところまで持っていく最中でも決して油断はしてない。こういうのは一瞬の油断が命取りになるから、私の指示無しでアームを目的の位置まで持って行けることは誇っていいこと」俺は自分の成果と感じられず謙遜してしまうが、璃奈はそんな事ないと首を強く横に振り俺に自信を持たせてくれる。

今までは璃奈に対してはこちらが後押しすることが多かったが、ついに璃奈に背中を押される日が来るとは思いもしなかった。

「なら、素直に受け取るね。ありがと」

「うん。だけど、まだやることは残ってる。最後の大詰めだから頑張ろう」

俺の感謝の言葉に璃奈が一瞬笑ったように見えたが、すぐに筐体へ向き直り作戦を練っていた。

そう、まだ俺達は目的のぬいぐるみを取る途中なのだ。

ここで慢心したら全てが水の泡なのでより一層気を引き締める。

「ここからはどうやって狙っていけばいいの？」

「身体は、今右側に向いているから左手と左足を狙っていけば手前に転がるように動いてくれるはずだから、きつと行ける」

璃奈は再度手でジェスチャーしながら教えてくれる。

確かに寝返りを打つように回転させれば取るのはそう難くないように見える。

「あとは、そこを上手く狙えるかどうか……」

「うん。そこは輝弥くんの度胸との戦い。むん」

俺は深呼吸をして兜の緒を締め直す。

璃奈も熱くなっているのだろうか、ボード無しで感情を表現していた。

表情に変化はないが、少し眉間に力が入っているように感じる。

中々見れない貴重な体験が出来たので、その分だけこの一手に集中する。

意を決して進行ボタンを押す。

アームは今までと変わらない速度で動いているが、緊張からか今回

ばかりは早く動いているように見える。

アームがぬいぐるみの中心に来た辺りでボタンを離す。

「よし、ここまでは順調……」

「……………」

俺は気を落ち着けるために呟いているが、ついに璃奈は言葉すら発することなくただ筐体を見つめるのみだった。

覚悟を決めて奥へ進むボタンを押す。

だが、それと同時に俺はとある秘策を実践していた。

「……………ん……………ん……………ん……………ん……………ん……………」

俺は一定の間隔を刻みながらボタンを離すタイミングを計っていた。

そして、自分の中でタイミングが決まり、それに合わせボタンを離す。

「……………どうだ!?!」

アームが開き、ぬいぐるみの元へと降りていく。

横移動に関しては問題はなくぬいぐるみの中心に来ていた。

ここから大事なのは奥行きなのだ。

アームがぬいぐるみまで到着し掴もうとする。

アームは当初狙っていた通り左手と左足を掴んでいた。

そして、ぬいぐるみを掴んだ状態でアームが上昇する。

ぬいぐるみは理想通りである寝返りを打つ動作をしながら手前に転がり、そのまま出口へと転がり落ちていった。

「……………行けた……………!!」

筐体から祝福のメロデーと機械音が流れるが、無事にぬいぐるみをお迎えできたことに浮かれてその音声は右から左へと受け流されていった。

「うん……………! 輝弥くん、凄い……………!」

「取れたよおお……………! 璃奈、これって夢じゃないよね?」

「抓ってみようか?」

「そ、そう言いながら抓るのか……………!」

璃奈に現実であることを証明してもらうために頬を抓ってもらっ

だが、痛みを感じるので紛れもない事実だと認識したのは容易い事だった。

「マジか……お、推しが目の前で寝そべってる……」

「輝弥くん、嬉しさを言葉がおかしくなってる」

アニメで見ていた推しがぬいぐるみではあるけれども、こうして手元にいるのは不思議に思いつつも嬉しさが込み上げてくるものだ。

「それくらい良かったってことだよ。璃奈、本当にありがとう。これも璃奈のお陰だよ」

「んーん。これも輝弥くんの実力。最後は自分の力で掴み取ったんだから」

璃奈は大きい音を立てずに小さな拍手で祝福してくれる。

「だけど、これじゃあ俺がお祝いしてもらってるみたいで立場が逆だね」

「いや、私もこれお迎えする。フロントム君と仲が良いダイス君を狙ってお揃いにしたい」

璃奈は俺を迎えたキャラクターとのコンビで人気が高い子を狙い、お金を投入する。

璃奈がクレーンゲームに没頭している中で俺はとあることに気付いた。

(……そう言えば、璃奈とのお揃いって……これが初めて……?)

今までは璃奈と趣味が一致していたことが多かったけど、ファッシュンなり小物関係なりでペアにしたことがなかった。

璃奈もそれを密かに気にしており、今まで以上に気合が入っているのかもしれない。

そう考えると璃奈に対して今まで彼氏として何もしてあげられなかったと自責の念に駆られた。

「お待たせ。この筐体、凄くやりやすかった。今までで最高記録。ブイ」

俺は心の中で悔やんでいると璃奈が顔を覗かせてきた。

その手元には目当てだったぬいぐるみが優しく抱えられていた。

「璃奈、俺達って今までお揃いしたことなかったよね……?」

「……うん」

俺の質問に璃奈は迷うことなく答える。

その素振りに璃奈も気にしていたんだと思い知らされてしまう。

「……ごめんね。今まで璃奈に対して何も彼氏らしいことをしてあげられてなかった。璃奈と一緒に居れるだけで満足してて璃奈の気持ちをちやんと考えてあげられてなかった」

俺はぬいぐるみを握る力が強くなっていくのを実感しつつ、謝罪の言葉を述べる。

落ち込んでいる俺を見て、璃奈は手に持っているぬいぐるみを俺の額に軽くぶつけてきた。

「えい」

「ん……。やっぱり怒ってるよね……?」

「うん。怒ってる」

俺の言葉に一切の躊躇いもなく即答した璃奈に俺は萎縮してしまふ。

表情が無いからこそ、余計に圧力を感じてしまい胸が痛くなってくる。

「……そうだよね……」

「……輝弥くんじゃなくて、自分に怒ってるの」

「え?」

璃奈から意外な回答が返ってきてつい聞き返してしまう。

璃奈の方もぬいぐるみを握っている手が震えていた。

「こういった事は彼氏だからって理由だけで輝弥くんが抱える問題じゃない。そういった事は私も提案しないといけなかった。なのに、私も輝弥くんと一緒に居る時間がただただ幸せでずっとそれに甘えてた」

言葉を紡いでいく度に顔が下がっていく璃奈だったが、璃奈の中で一つ決心がついたのか吹っ切れた表情でこちらを見つめた。

「今までお揃いにしたことが無かったのも、輝弥くんなら気付いてくれるだろうって思って言わなかっただけ。こういった事はしっかりと言葉にしないと輝弥くんには私の気持ちは伝わらないし、輝弥くん

も余計に不安が募っちゃう」

璃奈は俺の手を握り自分の想いを伝えてくる。

「私は表情を出すのが苦手だからこそ、しっかりと言葉で伝えなくちゃいけないかった。だからこれは私も責任があるから輝弥くんはそんなに自分を責めないであげて？」

璃奈からの優しい言葉に冷え切っていた胸が温かくなる。

自分がすっかりしないといけないと気張っていたのが少し馬鹿らしく思えてくる。

彼氏だからこそリードしなくてはいけないと考えているのは俺のエゴだったようだ。

その認識を改めた時には璃奈を無意識に抱きしめていた。

「……ん。輝弥くん？」

「……ありがとう。やっぱり俺、璃奈がいないとダメかもしれない。自分の価値観でモノを語り過ぎちゃってるから……」

「苦手な所は他の誰かが補ってあげればいい。輝弥くんが苦手としていることは私が助ける。だから、輝弥くんは私の駄目な所を助けてほしいな」

璃奈はそう言いながら、抱き締め返してくれる。

小さい身体ながらも優しい温もりを感じるそれに、俺は安心感を抱いた。

「うん。こんな俺だけど、これからもよろしくね？」

「こちらこそ、こんな私だけどこれからもよろしく」

二人でぬいぐるみ同士を握手させるように手を合わせる。

「よし、ならこのまま遊んでいこつ！ まだまだ遊びは終わらないからなー！」

「うん！ 全力で付いていくから」

俺の煽りに璃奈は手を胸の前でぐつと構えながら答える。

そして、彼女の手を引きながらゲームセンターの中を巡り、二人だけのデートを楽しむのだった。

「特別編」 近江彼方生誕祭

とある日の放課後、音楽室で作曲をしていると俺のスマホに一件の通知が入ってきた。

「ん？ チャットの通知？」

普段はプライバシーの観点から通知画面ではチャットの内容などが見えないようにしていたので、内容を確認するためにパスワードを解除する。

内容を確認すると思わぬ人物からの連絡だった。

「遙さん……う？ どうして俺のIDを知ってるんだ？」

それは同好会メンバーである彼方さんの妹、近江 遙さんだった。遙さんに対して連絡先を教えたことも含め、あまり喋ったこともないので何故彼女から連絡が来たのか俺には理解が出来なかった。

『突然のぐ連絡をすみません。桜坂さんから輝弥さんの連絡先を教えてくださいました。ご相談させていただきたい事がありますので、もしよろしければお電話させていただいてもよろしいですか？』

どうやらしずくさんと連絡を取って俺の連絡先を聞いたようだ。

だが、遙さんから直々に連絡が来るというのはまた珍しいことだ。彼女たつてのお願いなので力になりたいとは思いますが、如何せん遙さんとの関わりが少ない俺にとって願いを叶えられるか不安になっていた。

『お疲れ様です。今からでもよろしければお電話していただいて大丈夫ですよ』

とりあえず話を聞いてから判断しようと思ひ、承諾する旨を返信する。

すると、すぐに既読がついて遙さんから感謝の言葉が送られてきた。

『ありがとうございます。それでは今から掛けさせてもらいます』

返信が来てから数秒後、画面に遙さんから電話がかかってきたことを知らせる通知が届く。

俺はすぐに快諾し、会話できるようにスマホを耳に当てる。

「はい、輝弥です」

「もしもし……？　突然ご連絡してしまいすみません……。いきなりで驚かれましたよね……？」

挨拶をすると遙さんの声が聞こえてきた。

突拍子もなく連絡を入れてきたことを心苦しく思ったのか随分と声が頼りない様子だった。

「いえいえ、大丈夫ですよ。遙さんからの相談なんて珍しいですね？　どうかしたんですか？」

「その件なんですが……お電話で話すのも長くなってしまうと思うので、もし輝弥さんさえよろしければ直接お会いできないかなと思ったんですが、大丈夫ですか……？」

遙さんが直接会ってまで相談したい事というのが俺には分からず、少し反応に困っていた。

「それは彼方さんとかには出来ない事なんですか？」

「あつ、お姉ちゃんは駄目です！」

「えっ？」

突然、彼方さんの事を否定したのでつい驚いてしまう。

そんな俺の声を聞いてからか、遙さんは慌てた声を出す。

「あつ、すみません……！　今回の件は他でもないお姉ちゃんの事なんですよ」

「そういうことですか。よかった……かなり否定的になったから疎遠になってるのかと思っちゃいました」

「そ、そういうわけじゃないんです！　混乱させてすみません……」
いつまでもあわあわとした声を上げる遙さんに俺は笑みがこぼれる。

「まあ、話を聞くのだけでも大丈夫だと思うので分かりました。これから練習を切り上げるので、後で落ち合いますしようか」

「い、いいんですか？　ありがとうございます！」

力になれるかどうかは分からないが、遙さんたつての相談となれば門前払いするわけにはいかないと俺が承諾する。

そんな俺の反応に遙さんは嬉しそうに声を上げる。

「では、近くの喫茶店をお願いします。そこで詳細はお話します」
「はい、わかりました。それではまた後で」

そう言つて遥さんからの電話を切ると、俺は軽いため息を吐く。
「はあつ、果たして俺でどうにか出来るものなのか……」

遥さんの期待に応えられるか不安になりながらもこのままじつと
しているわけにはいかないと、すぐに音楽室を後にする。

せつ菜さんに家の事情で帰宅する旨を連絡し、学校を抜けると遥さん
から連絡を貰つた喫茶店へと足を運ぶ。

虹ヶ咲学園からは少し離れたところへ行くので他のメンバーと
ばったり遭遇するといったハプニングを避けるように選んだのは
きつと遥さんなりの配慮なのだろう。

喫茶店に入り、遥さんがいる場所を見つけると店員に先客がいる事
を知らせ、彼女の元へと駆け寄る。

近づく俺に気付いた遥さんは席を立ちあがりながら一礼する。

「お疲れさまです。輝弥さん、改めていきなりお呼び立てしてすみま
せん」

「お疲れ様です。いえいえ、随分と珍しい方から連絡が来たな、と思つ
てちよつとびっくりしただけです」

「……そうですか……。えつ、という事は驚かれてたつて事ですよね
？」

「あつ……。……はい、そういうことです……」

彼女に気を遣わせないようにと思つて考えた冗談が全くフオロ―
になつていなくてつい自己嫌悪に陥る。

しよげる俺を見て安心したのか遥さんは緊張で高くなつていた声
色が少し低くなり笑顔になる。

「ふふつ、お姉ちゃんから聞いてたことが本当みたいで少し安心しま
した」

「えっ、どんな内容を教えてるんですか？」

彼方さんは俺を弟のように可愛がってくれているのだが、からかってくる頻度も高いのでその延長線で遙さんに情報が回っているかもしれないと俺は質問しながらドギマギしていた。

「普段は凄くしつかりしてるんだけど、ふとした時に見せるおっちょこちよいが可愛いんだ、って言ってました」

「あの人はなんてことを教えてるんですか……」

案の定、彼方さんは俺の不甲斐ない所を見てからかっていたようだ。

遙さんの前ではしつかりとしてる印象を見せたかったが、時すでに遅しのようなだ。

落ち込む俺に対して遙さんはフオローを入れる。

「でも、私は良いと思いますよ？ 輝弥さんって年上なんじゃないかって思うくらいに真面目なので改めて同い年なんだなって事を認識できて私は親近感が湧きました！」

「うーん、褒められてるのか分からないけど、少なくとも貶してるつもりは無いって事は伝わりました……」

遙さんからの言葉に棘は感じないので、素直に俺に対して抱いた感情をぶつけてくれてるんだという事は伝わってきたのでそれで良しにしようと思は俺は開き直る。

一旦落ち着きを取り戻すとそれぞれ飲み物を注文し、事の発端へと話題を振る。

「……そういえば要件ってなんでしたか？」

「はい、実はお姉ちゃん誕生日がそろそろ近いんです」

「確かにもう二週間後に迫ってますもんね？」

そう、俺も分かっただけのことだが、実は彼方さんの誕生日が近づいているのだ。

彼方さんの事だからきつと遙さんとのひとときを第一優先とする

だろうと思いい、ささやかにプレゼントを送ることが出来ればよいかと密かに考えていた。

「はい。でも、誕生日の時でもお姉ちゃんは自分で普段より豪華なご飯を作るんです。誕生日が土日ならお母さんがやるんですけど、今回は平日ですのお仕事も忙しいから私とお姉ちゃんの二人だけのご飯になるんです」

「なるほど……」

姉さんと二人きりの食事というのは俺自身は日常茶飯事なのであまり気にならなかつたが、遙さんは折角の彼方さんの誕生日が二人だけになるというのが寂しいのだろうか。

「いつもはお姉ちゃんが料理を作っているので私が代わりにやろうと思ってるんですけど、私ってあまり料理が得意じゃないのでお姉ちゃんがやらせてくれないんです」

遙さんの悩みを聞いて、コーヒーを飲んでいた俺はカップを置き一つの仮説を立てた。

「……つまりは彼方さんの為に何かご飯を作ってあげたいって事ですか?」

「そうなんです。正直こんなことを輝弥さんに相談しても姉弟だから違う事もあると思って、きつと輝弥さんを困らせてしまいうんじやないかと思っただけです」

遙さんは姉妹と姉弟では誕生日での生活スタイルは異なるからという事で俺への相談を渋っていたようだ。

それに加えて異性でもあるため、中々相談するための一歩を踏み出せずにいたのかもしれない。

「それで先ほどの相談を桜坂さんに話したんです。そうしたら、私よりも輝弥さんの方が良いよ、と話してくださって連絡先を教えてくださいましたんです」

「しずくさんが……それで……」

遙さんの連絡がしずくさんを経由したものだど知り、俺は少し安堵する。

それに加えて彼女が俺へ話を振るといふ事は俺ならば解決に導い

てくれるという確証を持っているということ。

ならば尚更、遙さんの想いを無下にはできないなど腹を括った。

「分かりました。僕で宜しければ力になりますよ」

「えっ、良いんですか？」

「しずくさんも同じように姉を持つてる身として僕に白羽の矢を立たせたと思うので、是非協力させて下さい。……と言っても僕も料理は大してできない身なんですけどね……」

遙さんを安心させようと頼もしい発言をするが、それでも料理は出来ない点は否定できないのでその点を強調して自虐気味に笑う。

「そ、そんな事ないです！ 助けていただけただけでもありがたいので、本当に嬉しいです！」

自虐する俺を見て再びフォローする遙さんだが、つい声が大きくなって周囲からの視線を集めてしまったので、つい隠れるように身体を縮こませ、紅茶を飲んで気分を落ち着けた。

「……すみません。私としたことがはしたない……」

「気にしないで下さい。誰でも嬉しいときは声が出ちゃうものなので」

「あははっ……ありがとうございます」

俺の励ましの言葉に安心したのか、姿勢を戻して遙さんは話題を切り替える。

「早速なんですけど、輝弥さんはいつもお姉さんの誕生日の時はどういった事をしてるんですか？」

「どういった事を……と言っても結局はあまり変わらないですね……。先ほども言った通り僕は料理が出来ないので姉がそういった事を全部一人でやるんです。強いて言えば、お祝いのケーキを買ってきて二人で食べるくらいですかね」

「そうですね……輝弥さんも同じような境遇なんですね……」

お互いに料理が得意ではないという所から料理によるお祝いは難しいと判断して、話が難航してしまう。

「アクセサリーとかでも良いでしょうけど、僕はそういったセンスは持ち合わせていないですし……」

「そういったものはお姉ちゃんも喜んでつけてくれるとは思いませんけど、折角なら思い出に残る誕生日にしてあげたいなと思ひまして……」

二人で更に案を考えるが、特に刺さるものが見つからずだんまりとした空気が続く。

お互いに飲み物を口にするが、飲むペースが速かったのか中身が底まで見えかけていた。

そんな中で俺はとあることを思い出した。

「あつ」

「どうかしたんですか？」

俺の突然の思いつきに遥さんも手を組みながら神妙にこちらを見つめる。

「実は、僕の姉も誕生日が近いんですよ」

「そうなんですか!？」

「はい、と言っても今日から二日後の話なんですけどね」

そう、奇妙な事に姉さんの誕生日も近づいているのだ。

姉さんの誕生日の際もケーキを買ってお祝いするつもりだったのだ。

「そうだったんですね……なんだか不思議な巡り合わせですね」

「ですね。あつ、でしたらこんなことはどうですか？」

俺は姉さんの誕生日も近づいていることから頭に浮かんだ提案を遥さんに話す。

その内容に遥さんも笑顔になる。

「それ、凄く名案だと思います！　今までにはない新しい誕生日プレゼントに出来そうな気がします！」

「本当ですか！　なら早速姉さんたちに連絡して準備していきましよう！」

そこから俺と遥さんは通常とは趣向が異なる誕生日パーティの準備を進めるのだった。

遙さんと打ち合わせをしてから一週間が経った。

今日は彼方さんの誕生日の一週間前だ。

普段であれば特にイベントもない日だが、俺は近江家に来ていた。近江家の所在は遙さんから教えてもらっているため、特に迷う事もなく到着することが出来た。

俺は初めての彼方さんの家への来訪という事で緊張が走っていた。

「ふう……よしっ」

家の前で突っ立っているわけにもいかないため、軽く息を吐いて意を決する。

インターホンを一回押し、家の中にチャイムが鳴り響いているのが外に居ながらも聞き取れた。

ホーンを鳴らして数秒後、聞き覚えのある声が機械越しに聞こえてきた。

「はいはい？」

「すみません、巴です」

「おお、かーくん待ってたよ。今開けるね？」

インターホンからは彼方さんの声が聞こえてきた。

俺が来たことを確認した彼方さんはホーンを切断する。

それからすぐに目の前の扉から鍵の開く音がした。

「こんにちは、かーくん。今日はよろしくね」

「こんにちは、彼方さん。こちらこそ今日はよろしくお願いしますね」

家着のようなゆったりとした服を着こなす彼方さんは学校で見る姿よりも大人っぽくてより体が自然と強張ってしまう。

「どうしたの？もしかして緊張してる？」

「そんなこと……と言いたいところですがそんな所です」

俺の様子が普段と違う事を感じ取った彼方さんは少しからかいの意を含めて目を細める。

凶星だった俺は特に捻くれるつもりもなく素直に心情を吐露した。

「ふうん、なんだか随分と素直だねえ？でも、そんなかーくんも好きだから彼方ちゃんは良しとします」

「それはどうもです」

「……と流石にこんな所で喋ってるのも酷だよね。ひとまず上がって上がって」

外は冷風が吹いており、彼方さんも一陣の風でつい身震いしていたので手招きして部屋に上がるように促す。

リビングに到着したら、彼方さんは俺が椅子に座れるように少し下げてくれた。

「外、寒かったでしょ？　今温かいお茶を入れるからちよつと待っててね」

「そんな、そこまでしなくてもいいですよ？」

「むう、かーくんはお客様なんだから何も用意しないのは非常識なんだよ？　だから気にしないの」

自分なんかの為に、と気を遣わせないように言うが彼方さんはそんな俺の姿にぶんぶんと怒る。

だが、本気のそれとは違うのですぐに笑顔を見せて台所へ向かい急須で緑茶を作り始めた。

「すみません、ありがとうございます」

「もう、謝らなくてもいいんだよ？」

すぐに謝ってしまう自分に彼方さんは呆れるように笑う。

そして、二人分のお茶を用意した後、彼方さんも向かいの椅子に座る。

「今日はごめんね。遙ちゃんは練習があるって事でいないんだ」

「そうですか、それは残念ですね」

彼方さんは申し訳なさそうに言い、俺もしようがないですと気にしていない様子を見せる。

（まあ、いないのは知ってるんだけどね）

そう、遙さんはこちらの事情で席を外しているのだ。

とあることをやってもらうために遙さんにはお願いしているのだから、彼方さんの家を訪ねた際に遙さんが不在となっているのは想定の内だ。

「して、今日はお姉さんの誕生日後夜祭を実施したいってことなんだ

よね？」

「はい、先週に姉が誕生日を迎えたんですが、例年と同じように姉さんが料理を作ってケーキを僕が買って、と二人で変わらない誕生日を過ごしたんです」

「確かに、いつもお姉さんにお世話になっているって事だし、何か作ってあげたいって思うよね」

「そうです。だけど、僕は料理の腕がないので逆に姉さんが心配してしまうんです。だから彼方さんのお力も借りて姉さんに料理を食べさせてあげたいんです」

俺の話を聞いて、彼方さんはうんうんと頷く。

「確かに彼方ちゃんも遙ちゃんがそう言い出したら心配で過保護になっちゃう気がするなく……。でもかーくんがそこまで言うなら彼方ちゃんも一肌脱ぎますよ」

彼方さんは自信満々に胸を張る。

そんな頼もしい姿に俺は嬉しさが込み上げる。

「ありがとうございます。今日はここでご飯を作らせていただきます、それをうちまで持っていくという手筈でお願いします。姉さんは今日の練習は休みだと既に確認してるのでそこは大丈夫です」

「うむっ、なら早速始めていこっか」

お茶を飲んで一息ついた所で彼方さんとの料理教室が始まった。

「ところでかーくんが作りたいものはハンバーグでよかったですよね？」

エプロンを身に纏い必要な材料を用意しながら、彼方さんは今回作るメニューについて確認をする。

俺は姉さんへ食べさせたいものとしてハンバーグを提案していた。

「はい。料理は愛情を込めながら作るというのは聞いたことがありますので、その気持ちを形で表現できるものと言えばハンバーグかなと思います」

「うんうん。料理は基本的に作ってあげたい人の事を想って作るけ

ど、ハンバーグなら頑張って作ったんだなって事が分かるから是非お勧めだよ」

彼方さんはハンバーグに使用する材料と道具を揃えると、準備万端と言うように軽く手を叩いた。

「それじゃあ、早速始めていこう〜！」

「まずは玉ねぎをみじん切りしてね。玉ねぎは切ってる最中に成分で目が痛くなるから無理をしないようにね」

彼方さんの指示の元、用意された玉ねぎをみじん切りしていく。

材料を切る際には猫の手を使う事というのは知っているので、猫の手を作って行程を進めていく。

「作業が終わったら、玉ねぎを焦げないように炒めてね」

「分かりました。玉ねぎはこんな感じですかね？」

ひとしきり切り終えた玉ねぎを見せ彼方さんは満足気に頷く。

「うんうん、かーくんは上手だね〜。じゃあそれをフライパンに入れちゃおう〜」

フライパンに玉ねぎを入れてやさしく炒めていく。

中火で炒めているのもあり玉ねぎが飴色に変化するのに時間を要さなかった。

「うむっ、良き色まで変わってきたね。じゃあ、一度お皿に移して粗熱を取ってね」

「粗熱を取る？」

聞き慣れない単語に俺は火を消しながら質問する。

「ああ、っめんね。かーくんは分からなかったよね。粗熱を取るって言うのは手で触れるくらいにまで熱を冷ますことだよ。飴色になった玉ねぎをひき肉と混ぜてタネにするから、この行程は必要になるんだ〜」

「そういうことですか。勉強になります」

「まあ冷ますと言っても特別やることがあるわけじゃないからひき肉

の準備をしていこつか」

彼方さんはそう言うのとゆつたりとしたペースでひき肉をパックから取り出す。

料理に長けている彼方さんは普段は見れないてきぱきとした行動で指示を出してくれるので、そのギャップに脱帽していた。

準備を進めている中で俺は彼方さんのここまで料理が出来るようになったルーツが気になった。

「彼方さんってどうしてこんなに料理がお上手なんですか？ それに今日は両親はいないんですか？」

「親はお仕事で毎日遅くまでいないんだ。虹ヶ咲学園と東雲学園で学費が馬鹿にならないって事もあって働き詰めになってるんだよ」
「えっ、そうだったんですか？」

虹ヶ咲の学費は親が払ってくれていたので特にその額については言及したことが無かったが、彼方さんがこうして苦勞を語るという事は実際にその問題があるんだろう。

「そうなの。だけど、学業が成績上位に入っていれば特待生として学費を一部免除してくれるんだよね。親がそうして頑張ってくれた分も彼方ちゃんも努力しないとって事で家の事や学業を一生懸命頑張ってるんだ」

「彼方さんが学校内で寝ちやう理由は以前に遙さんから聞きました。が、家族の事を考えられてるんですね……」

俺は以前に近江姉妹のいざこざがあった時の事を思い出し、普段は家で勉強漬けだったりバイトをしてお金を稼いでいると彼方さん自身を削って家の為に頑張っていることを思い出した。

「そうそう。それに親が平日はいない分、自分たちで家事もやれないと生活が出来なくなっちゃうからね。休日に親に料理を教えるもらって気が付けば、一人でここまでやれるようになったということなのです」

「なんだか、改めて聞くと遙さんが心配する気持ちがかかりますね」
「えっ、そうなの？」

彼方さんは心外と思ったようで、俺の発言に目を丸くしていた。

「親がない分、自分たちで何とかしないと思って思うのは僕ら姉弟も同じなので苦労は分かります。だけど、それを姉さんたちが一人でこなしているというのは、生活させてもらっている身としてはやはり落ち着かないですよね」

「うーん、やっぱり下の子はそう思っちゃうものなんだね。あの時は遥ちゃんの気持ちをしっかりと分かってあげられてなかったから今はやれることを分担しているけど、お姉ちゃんとしては心配しちゃうからな」

弟側としての意見を述べ彼方さんはそれに対して肯定の意を示すが、普段から自分で苦労を受け持つ性格だったからかまだすんなりと受け入れることが出来ないようだ。

「ですが、彼方さんが自分の好きで家の事をやっているとこの事は教えてもらっていますし、それがあつたから僕も姉さんが同じようにやっているのだと気付かされたので、以前よりは心労は無くなってます。だからこそ、姉さんたちに普段はこうしてお任せしてしまっているのもあつて、何か別の形で恩返しをしたいなって思うんですよ」

「そっか……。かーくんの所も同じように苦悩はあつたんだね。でもこうして自分たちの為に陰で動こうとしてくれるのはお姉ちゃんとしては感無量だよ。絶対にお姉さんを喜ばせてあげようね♪」

「はい……」

姉さんへの感謝の想いを彼方さんに聞いてもらった所で彼方さんはふと天井を仰いだ。

「にしても、かーくんみたいな弟をいてお姉さんが羨ましいな」

「それでも、遥さんも彼方さん想いで凄く素敵じゃないですか？」

「そうだけど、遥ちゃんに加えてかーくんも弟だったら彼方ちゃん嬉しくて涙が止まらなくなりそうだな」

遥さんの事を自慢の妹の妹と思っただけでも隣の芝生は青く見えるように同じ生活スタイルとは言っても普段は見えない一面が見えてくると途端に羨ましく見えてくるものだ。

彼方さんの弟発言に俺はそうであった場合の生活を想像した。

「もし彼方さんの弟なら遥さんと一緒に反発していたかもしれないで

すね」

「ええ〜!? そ、それは余計に辛くなるからそれだけはやめてね!」

「……やめてねって、僕は彼方さんの弟じゃないですから……」

俺の発言をオーバーに捉えた彼方さんは冷や汗を滲ませながら訴えかけてくる。

実際にそうなることはないんじゃないかと思いつつながら、俺は苦笑するしかなかった。

その後、彼方さんとのハンバーグ作りを終えて、俺は彼方さんと一緒に帰宅していた。

肩には大きな鞆を引つ提げ、その中に今回作ったハンバーグを収納している容器が入っている。

「はあ……彼方さん、本当にありがとうございました。一時はどうなる事かと思いましたが……」

「まあまあ、ハプニングも料理には付き物だから大丈夫だよ。それにこういうミスがある方がかーくんが主体で作ったって事が伝わってより美味しさが伝わると思うもの♪」

製作中に俺の油断が招いたミスもあってハンバーグの見栄えが悪くなってしまうトラブルもあったが、彼方さんはそれも味だ、として笑ってフォローしてくれる。

「それにしても彼方ちゃんも付いて来てよかったの? 二人のパーティの邪魔にならない?」

「いえっ! むしろ一緒に作って下さったんですから、そのお礼も兼ねて一緒に食べたいと思ったので! それにきつと姉も喜んで迎え入れてくれると思うので」

「それなら安心だね。だけど、こうして二人でお姉さんの元を訪ねるなんてなんだか結婚報告をするみたいだね?」

「な、何を言い出すかと思つたら、どんな冗談ですか……?」

いつもの彼方さんが戻り、この光景に対して茶々を入れるが俺は平静を装いながらジト目で彼方さんを見つめる。

だが、こういう弄りになると少しでも顔が紅潮するのを彼方さんは知っているのです、すぐにこちらを見つめ頬をつんつんと突いてくる。

「おやあ? かーくん顔が赤いぞ? もしかしてドキドキしてしまつたかな?」

「分かつているなら聞かないで下さい……それと頬を突かないで下さい」

「ははっ、やっぱりかーくんはかわいいね! ……はっ、これは遙ちゃんとかーくんがくっつけば彼方ちゃん万々歳では!」

「変な事を言わないで下さいよ! 僕は別にそういう関係はないですから……」

彼方さんの発想がどんどんエスカレートして收拾がつかなくなつてきた。

「でも、二人なら性格もばっちり合うと思うけどな?」

「大好きな遙さんが自分の事を見なくなつても良いんですか?」

「えっ……そ、それは勘弁だよ! や、やっぱりかーくんに遙ちゃんは渡せない!」

「……全く調子が良いですね」

遙さんへの愛情で二転三転する彼方さんの反応を見て、俺は思わず笑いが出てきてしまった。

そんなやり取りをしている内に自宅へと到着した。

「かーくん家はアパートなんだね?」

彼方さんの質問に頷いて肯定を示す。

「はい、二人暮らしならば丁度良いという事で姉さんが選んだんです」

「うう。彼方ちゃん、なんだか緊張してきたよお」

他愛無い話で時間を潰していたが、彼方さんは武者震いを抑えるように両手で身体を包む。

「別に僕の姉ですから、そこまで緊張することはないんじゃないんですか?」

「そうだけどさく、いざこうして喋るとなるとねえ……」

「ふふつ、僕も一緒ですから大丈夫ですよ」

彼方さんの気を紛らわせようと俺は笑顔を見せる。

そして、ずっと立っただけでも仕方ないと部屋の鍵を開ける。

「ただいま〜」

「おかえりー」

家に入りながら挨拶をするとりビングにいますであろう姉さんから返事が返ってきた。

そして、彼方さんの方を振り向く刹那、足元を一瞥した。

そこには普通ならば当たり前のことだが姉さんの靴しか置いてなかった。

「ほらっ、彼方さん。行きましようよ」

「ふう〜、こうなったら是非も言ってもらえないねえ……。じゃあ、お邪魔します」

彼方さんも観念したかのように苦笑いを見せ、家へ上がる。

俺も靴を脱いでフローリングに上がり、彼方さんを先導する。

リビングに顔を出すと姉さんがこたつの中に入り暖を取っていた。

「ただいま、姉さん」

「おかえり、輝弥」

俺達がいとも通りのやり取りをしていると彼方さんはドアの陰からひよこつと顔を出すように覗いてきている。

「えへへ、どうもお邪魔します〜」

「あらっ……っ？」

彼方さんの姿を見て、姉さんは怪訝な表情を見せた。

だが、部活の先輩と言っても客人であることに変わりはないのですぐにその表情を消して笑顔を見せる。

「う〜ん？ どうかしたのかな？」

「……いいえ、なんでもありません。近江彼方さんですよ？ 輝弥か

ら話しかねがね伺っています。今日はゆっくりして下さいね」

「むむつ、凄く礼儀正しい……。やはりお姉さんある所にか〜くんありなんだね……！」

「何を変な事を言ってるんですか？」

顎に手を当てながらジト目で考察する彼方さんに俺は呆れる声を出した。

「輝弥、彼方さんへは私がお茶を用意しておくから貴方は手洗いうがいをしてきなさい」

「うん、ごめんね。ありがとう」

姉さんに一言お礼を述べて彼方さんを任せ、俺は席を外した。

洗面所でうがいをしていると姉さんが声を掛けてきた。

「どういうことなの？」

姉さんは怒っているわけではないが少し表情が硬かった。

そんな姉さんの表情に臆する様子は見せずに俺は普段と変わらないトーンで返事をする。

「何が？」

「何がって……貴方こそ何を言ってるのかしら？ 今日はこちらで何をしてるのか分かってるわよね？」

「そんなの俺も分かってるよ。だからこそここに連れてきたんだよ」

「……それは一体……」

姉さんが更に問い詰めようとした時に扉が開く音がした。

「おっ、帰ってきた」

「流石にそれは……！」

姉さんはここに彼方さんがいる事をバレるのはまずいと思い、玄関へと駆け出す。

そんな後ろ姿を見て上手く行つてると喜ぶ半面、姉さんに嘘を付いていることに背徳感を味わっていた。

「……ごめんね、姉さん……」

そんな事を呟きながら俺は後を追った。

姉さんに付いていくように歩いていくと玄関先には遙さんが立っていた。

「ただいま戻りました！」

「おかえり、遥さん」

「輝弥さん、戻ってたんですねー！」

遥さんは俺の姿を見て安心したように笑顔を見せる。

姉さんは俺達が焦りを見せない様子にただ茫然としていた。

「貴方達、どういうことなの？ それに遥ちゃん、その荷物は……？」

姉さんは遥さんが持つているものを指差して余計に混乱した様子を見せる。

無理もない、遥さんが持っているのは洋菓子を入れるためのケースだからだ。

「姉さん、後で解説するから今は部屋に上げてあげよ？」

「……はあっ……そうね、ここで喋っていても仕方ないし、既に待たせてるお客さんにも失礼だわ」

姉さんは深くため息を吐くと、気持ちをリセットしたかのように遥さんに笑顔を向ける。

「遥ちゃん、上がって頂戴。温かいお茶を用意するから」

「はい、ありがとうございます……！」

遥さんのお礼を聞くと姉さんはリビングへと歩き出した。

「……大丈夫でしょうか……？」

「大丈夫ですよ。……多分……」

心配そうに見つめてくる遥さんを安心させようとするが、俺も内心冷や冷やしていた。

リビングへ戻ると彼方さんは机に顎を乗せながらこたつでぬくぬくしていた。

「やあくーくん、遅かったねー？ 宅急便か何かだったかい？」

「それが……」

俺が少し溜めると遥さんが背後からひよこつと顔を出してきた。

「えへへ、お姉ちゃん♪」

「……えっ？」

遥さんの姿を見て彼方さんは固まっていた。

それもそのはずだ。

遙さんは部活で帰ってくるのが遅いと連絡を貰っていたからだ。

「な、なんで遙ちゃんがいるの?!?!?」

「それはこちらも同じ台詞です。輝弥、貴方何か知ってる顔よね？それに……」

言葉を切り、姉さんは遙さんを一瞥した。

彼方さんはそんな姉さんと遙さんを交互に見返して状況を整理しようとしていた。

「とりあえず言えることは……。姉さん、彼方さん。騙してごめんね？」

「えっ、かーくんどういふことなの?」

彼方さんの催促に一つずつ解説する。

「まず、今日はそれぞれにこういう話をしてたはず。姉さんには彼方さんの誕生日の……、そして、彼方さんには姉さんの誕生日の……としてね?」

「うんうん」

「でも、今日やりたかったのはそれだけじゃなかったんだ」

姉さんは怪訝な表情を緩め、真顔でこちらを見つめている。

彼方さんも状況が分かってきたようで静かにこちらの話に耳を傾けていた。

「今回やりたかったのは……二人の姉さんの誕生日を二人の弟、妹がお祝いすること」

「……まさか、さつき持ってた荷物って……」

俺の目的を聞いて、姉さんは納得がいったような表情が見せる。

「偶然な事に姉さんと彼方さんの誕生日がちょうど二週間空いてるんだ。だから、今まで姉さん達に沢山世話になっていた分、俺達もそれぞれ姉さんに恩返しをしたかった」

「はい、輝弥さんと話してたんです。お姉ちゃんたちは誕生日でも変わらず自分たちでご飯を作って、私たちの事を喜ばせようとしてくれてたって事を。でも、やっぱり私達もせっかくの誕生日だから私達もお姉ちゃんたちを喜ばせてあげたかったの!」

俺の言葉に追従するように遙さんも自分の想いを吐露する。

姉さんたちは何も言わずに聞いている。

「だから、俺達も何か料理を作って姉さんを喜ばせたいって思ったんだ。でも、料理は姉さんたちはあまりやらせてくれないから、だから同じ境遇である遙さんと話してそれぞれのお姉さんから教えてもらおうって話にしたんだ」

「これはお姉ちゃんたちを騙しちやっただのはごめんなさい。でも、私たちはお姉ちゃんたちが大好きだから、喜んでもらいたかったから……！」

「輝弥」

遙さんの訴えを遮るように姉さんは俺の前に立った。

彼方さんも同じように遙さんの前に立った。

「遙ちゃん」

その瞬間、二人はいっせいにそれぞれの弟たちを抱きしめた。

「もう……変なことしないでよ……」

「そうだよ……彼方ちゃん、嬉しくて泣きそうだよ……」

彼方さんは震える声を抑えようとしていた。

姉さんも声が震えないようにしていたが、抱きしめる力が強くなっていた。

「こんな事されて喜ばない姉がいる？」

「……いないよね」

姉さんの問いに俺は笑って答えを返す。

「かーくんもずるいことをするよね……。今回は一杯食わされちゃったね」

「えへへ、お姉ちゃん。今日、珠緒さんに教えてもらってシチューを作ったの！ だから一緒に食べよう？」

「おおー♪ いいねー！ かーくんもお姉さんにハンバーグを作ってきてあげてるから、合わせて食べようよー！」

姉さんは俺から離れると彼方さんの言葉を俺に確認してきた。

「本当に？」

「うん、それなら姉さんに……気持ち伝わることになって……」

俺は改めて姉さんへの想いを言おうとしたが無性に恥ずかしく

なっつてつい目を反らしてしまう。

そんな俺を見て、姉さんは笑顔になりながら俺の頬をつまんで自分に目を合わせさせるように顔を向けさせる。

「ふふっ、こっちを見ながら言いなさいよ?」

「かーくん、お姉さんの事を考えるがあまりハンバーグが焦げちゃったもんね?」

「そ、それは言わないで下さいよ!」

姉さんにバレたくなかったことを彼方さんにカミングアウトされ、俺はつい声を上げてしまう。

「別にそんなのいくらでも食べるわよ。輝弥が作ってくれたものなんだもの」

「ね? 彼方ちゃんの言ったとおりでしょ?」

「……おっしやる通りでした」

「ふふっ。輝弥さん、いつもにも増してかわいいですね!」

「は、遥さんもそんな事を言わないで——!!」

そして、流れるように俺の揶揄いが始まり、巴家の中は笑い声で包まれた。

そのあと、俺と遥さんが丹精込めて作ったハンバーグとシチューを二人の姉さんたちは噛み締めて味わっていた。

そして、遥さんは予約していたケーキを取りに行くために一時的に家を出ていたため、最後はそれを四人で仲良く分け合いながら少し変わった誕生日パーティーを過ごしたのだった。

ケーキの上のチョコプレートプレートにはこう書かれていた。

『私たちのお姉ちゃん、誕生日おめでとう!! 二人の弟妹より』